616-951
1200501536398
616
951
複写

27. 6. 23

27. 6. 23

日

日本文學大辭典

第二卷

文學博士
藤村作編

新潮社版

顧問

早稲田大學名譽教授 文學博士 坪内逍遙

東京帝國大學名譽教授 文學博士 上田萬年

頁	段	行	誤	正
四〇	一	五	「東洋學藝雜誌」	八代抄 明暦四年成
七〇	一	三	古今聞書一卷	八代抄
七〇	一	三	「圓雅から	明暦四年成
七〇	一	三	「明暦四年成	古今聞書一卷
七〇	一	三	八代抄	「東洋學藝雜誌」
七〇	一	六	慶長二年	第七所收
七〇	一	七	大日本史資料	慶長二年
七二	一	一	第七所收	大日本史資料
七二	一	一	慶長二年	慶長二年

第二卷增補訂正表追加

頁	段行	誤	正
四四	一ノ二五	「東洋學藝雜誌」	「東洋學會雜誌」
七〇	一ノ一二	八代抄	八代集抄
七〇	一ノ三一	明暦四年成	明暦四年刊
七〇	一ノ三三	古今聞書一卷（圓雅から	古今聞書一卷（正和三年行乘が定爲より傳授し嘉暦二年及び三年更に爲世より傳授したものにて圓雅から
七〇	二ノ七	慶長二年	弘長三年
七〇	三ノ六	大日本史資料第七所收	大日本史史料第六所收
七一	一ノ一	堯惠	（削除）
七一	四ノ三四	堯惠	（削除）
七二	一ノ二一	堯惠	（削除）
七二	一ノ二二	堯惠…古今血脈抄（古今祕抄）	兩度聞書に堯惠の「古今抄延五記」の説を參酌したものにて、奥に延德四年十月二十六日堯惠が藤原憲輔に傳へる旨を記してゐるのも「古今抄延五記」のそれを移したものである。
七二	一ノ二四	延德四年十月二十六日堯惠の奥書があるが、内容は同日同人が藤原憲輔に傳へた「古今抄延五記」（二十一册、刊）とは異なる。	
七九	二ノ二四	ヤ行のエ	ヤ行のエ
一三七	二ノ一七	**古事記燈**（こじきあかし）修文館	**古事記燈**（こじきともしび）至文堂
一四三	三ノ四	挿繪説明（藤懸戸田）	（藤懸戸田四十田）
一六五	挿繪説明	（題詞參照）	（削除）
一八八	一ノ一四	【刊行】月郊脚本集	【刊行】明治三十九年十月單行。月郊脚本集長篇小説全集第六卷考へられる隋唐時代の
二六六	四ノ一二	長篇全集第六卷考へられる。隋唐時代の	「文學評論」「柵草紙」「海藏韻略」「文學の分類」類の普通の「芭蕉翁七部餘錄」袋行都京月九年七和明屋百八）附番本繪居芝（文祭歌七お
二九三	三ノ四	「文學評論」柵草紙」	「文學評論」しがらみ草紙」
三六四	一ノ二五	「海藏韻略」	「海藏略韻」
三七二	一ノ八	「文學の分類」	「文學」
三九九	四ノ二三	類は普通の	類の普通の
四〇三	一ノ一一	「芭蕉翁七部餘錄」	「芭蕉翁七部餘錄」
四〇五	一ノ一一	袋行都京月九年七和明屋百八）附番本繪居芝（文祭歌七お	「言語」「語構成」を見よ
四一八	四ノ二五	別刷挿繪（ロ）説明下段左	「春窓綺話」
四四〇			「俊頼髓腦」
四九五	一ノ二〇	「言語」を見よ。	天明元年正月九日
五〇八	三ノ二八	「春窓綺話」	（西尾）
五二六	一ノ二八	「俊頼髓腦」	（人情本）錦廼袿（天保六年）○花廼志滿臺
五四五	二ノ二四	天明元年四月九日	
五四五	二ノ二七	（松尾）	
五六三	二ノ三三	（人情本）花廼志滿臺	
六〇三	別刷挿繪（ロ）説明三段右	錄目籍書盆增	「文學」錄目籍書增新
六〇四	二ノ一	「文學の分類」	「文學」
六〇五	四ノ一	山城	大和
六五〇	二ノ一八	「リップ・バン・ウンクル」	「リップ・バン・ウィンクル」
六八五			
七四三	二（寫眞訂正）	薄田泣菫	
七六七	二ノ三二	【諸本】音曲叢書第二卷・新燕石十種第四卷所收。他に單行本もある。	【諸本】活版本には飜刻せられてゐない。「音曲類纂補遺」は、音曲叢書第二卷・新燕石十種第四卷所收。
七九二	四ノ八	○裏模 樣菊伊 達染（文政二年六月、河原崎座。伊達の書替へ小さん金五郎）	○裏模 樣菊伊 達染（創除）
八〇八	四ノ六	御臺	女帝
八〇九	一ノ一二	「大織冠」	「大職冠」
八二三	四ノ二四	序文	跋文
八五九	四ノ一五	紫屋軒	紫屋軒（附番本繪）
八六七	挿繪説明	（藤懸戸田）	
八七三	四ノ二七	して、	して
八八五	二ノ二七	直接曲本	直接本曲
九〇四	四ノ一八	（歌舞伎研究附錄）	（雜誌歌舞伎附錄）
九一三	三ノ二二	相模掾正本。延寶八年	相模掾正本、延寶八年
九一四	三ノ三四	（近代日本文學大系）○日本小説年表（歌舞伎研究附錄）	○日本小説年表 近代日本文學大系）（雜誌歌舞伎附錄）
九一四	三ノ一〇	亡父の仇	亡夫の仇
九三〇	三ノ一三	石堂縫之助は。	石堂縫之助は、
九三一	二ノ九	「後法院記」	「後法興院記」
一〇九三	二ノ二三	**對馬音**（つしまおん）	**對馬音**（つしまおん）
一〇九七	四ノ三四	時代物	淨瑠璃物
一一〇七	三ノ一五	**積戀雪の關の扉**「吼噦」	**積戀雪關扉**（しれくわい）「吼噦」
一一一	四ノ一六	**殿下茶屋衆**	**殿下茶屋聚**
一一一	三ノ三一		

616-95

第二卷增補訂正表追加

頁	段・行	誤	正
二〇	二ノ五	説教	説經（諸艶大鑑參照）
三九	四ノ二五	（別項）	「芭蕉七部集」
四四	二ノ五	芭蕉「七部集」	「古今榮雅抄」
六七	三ノ一三	「榮雅抄」	説經集
八五	四ノ二五	説教集	（假名遣參照）。
八七	三ノ二〇	（假名文字遣參照）。	明治三十七年
九一	二ノ二八	明治二十七年	（文學の内容參照）
一〇五	一ノ二七	（各別項）	養子二世湖十が
一四九	三ノ二二	元文頃ノ次ニ增補	（削除）
一四九	三ノ二六	長子深川氏、湖十二世を繼ぎ	（其角七回忌追善）一册
一四九	三ノ二六	（其角七回忌追善）	○（二世湖十著作）續花摘
一四九	三ノ三四	○續花摘	○つのもじ（其角三十三回追善）（元文四年刊）
一四九	四ノ一	（享保二十年刊）ノ次ニ增補	「卯花二世合駕籠」
一五三	三ノ四	「卯花二世今駕籠」	「略（かきかへて）三五大切」
一七〇	一ノ二三	「略（かきかへて）三五大切」	後鳥羽院御抄・遠島御抄
一八七	三ノ二八	後鳥羽院御抄	「闇夜一燈」（歌舞伎參照）
一九三	一ノ二七	「闇夜一夜」（各別項）	「馬鹿集」は實は京都の池田長弐の著で明暦二年に刊行されてゐる。（削除）
一九四	三ノ三	兩書とも傳存しないやうである。	
二二二	四ノ三四		
二四三	二ノ二二	〔浮世草子〕西行法師畺染櫻（鯰文流作）。	
四四九	二ノ一		
四七一	二ノ三		
四七一	二ノ二		
四七一	二ノ二		
四七一	三ノ四		
四七一	三ノ六		
四七一	三ノ八		
四八四	三ノ二二		
四八四	四ノ一九		
四八四	四ノ二〇		
五〇二	四ノ七	寛文二年「鬼城女山人」	寛政二年「鬼城女山人」
五〇四	四ノ一九	江馬脩	江馬修
五〇四	四ノ三〇	「姫小松子の日の遊」	「平家女護島」（削除）
五〇七	二ノ一〇	「音律」	（葛の松原參照）
五二六	一ノ三	（以上各別項）	
五三七	三ノ二三		
八九九			
九〇四			
九一二			
八九一			
八九三			

616-95 1.

挿畫目次

合　卷（一）……三
合　卷（二）……三
好色一代男……六
古今和歌集古寫本（一）……六
古今和歌集古寫本（二）……六
書籍目錄（二）……六〇四
書　道（一）……六〇六
書　道（二）……六〇六
書　道（三）……六〇六
書　道（四）……六〇六
新古今和歌集古寫本（一）……六四四
新古今和歌集古寫本（二）……六四四
神代文字（一）……六四四

616-95

第二卷增補訂正表追加

頁	段・行	誤	正
二〇	二ノ五	說教	說經（諸艶大鑑參照）
三九	四ノ二五	（別項）	「芭蕉七部集」
四四	二ノ五	芭蕉「七部集」	「古今榮雅抄」
六七	三ノ一三	「榮雅抄」	說經集
八五	四ノ二五	說教集	（假名遣參照）。
八七	三ノ二〇	（假名文字遣參照）。	明治三十七年（文學の內容參照）
九一	二ノ二八	明治二十七年（各別項）	養子二世湖十が（削除）
一〇五	一ノ二七	元文頃ノ次ニ增補	（其角七回忌追善）一册
一四九	三ノ二二	長子深川氏、湖十二世を繼ぎ	○（二世湖十著作）續花摘
一四九	三ノ二六	（其角七回忌追善）	○つのもじ（其角三十三回追善）（元文四年刊）
一四九	三ノ三四	○續花摘	「卯花（かきつばた）二世合駕籠」
一四九	四ノ一	（享保二十年刊）ノ次ニ增補	「略（りやく）三五大切」
一五三	三ノ四	「卯花二世今駕籠」	後鳥羽院御抄・遠島御抄
一七〇	一ノ二三	「略（りやく）三五大切」	「闇夜一燈」（歌舞伎參照）
一八七	三ノ二八	後鳥羽院御抄	「馬鹿集」は實は京都の池田長弐の著で明暦二年に刊行されてゐる。（削除）
一九三	一ノ一七	「闇夜一夜」（各別項）	
一九四	三ノ三	兩書とも傳存しないやうである。	
二二二	四ノ三四		
二四三	二ノ二二	（浮世草子）西行法師墨染櫻（錦文流作）。	
二四三	二ノ二三	○軍法富士見西行ノ前ニ增補	西行法師墨染櫻（享保二年豐竹座、錦文流作）
二五三	一ノ二九	椎本則武	椎本舊德（削除）
二五三	一ノ三一	舊德翁	元文三年（一三九八）正月二日歿。享年八十三
二五三	一ノ三二	元文二年（一三九七）正月二日歿。享年八十二	定信（北山參照）
二八三	一ノ三〇	貞信（別項）	寶永六年刊
二八六	二ノ一五	寶永五年刊	樂座（削除）
三〇七	四ノ二四	申樂座	
三一〇	四ノ九	申樂	
三一三	三ノ一四	黃鶴[illegible]	
三一六	三ノ一三	「山[illegible]」	「西行法師家集」
三一六	三ノ一五	「西行法師歌集」	お香は
三一九	一ノ六	お蝶は	重錦」
三二八	一ノ一二	重櫻」	「文學」
三四八	四ノ六	「文學の分類」	その頭文字を取って「於母影」のSSSの署名の如きそれである。
三七二	一ノ一三	略して	米樓川
三七二	一ノ一四	これは鷗外の別號でもあつた。	地動說
三八二	三ノ二八	谷口樓川	慶長七年
三八七	一ノ二九	他動說	七十九
三八九	三ノ二一	慶長十二年	森山孝盛
三八九	三ノ二三	七十四	太虛集
四〇三	四ノ四	森山某	石川縣石川郡美川町
四四七	二ノ四	太虛集	金澤第一中學校
四四九	二ノ一七	加賀國手取川の河口美方町	「滿誓沙彌」
四四九	二ノ二〇	金澤中學校	百々子・語雪堂・高佛庵
四七一	二ノ三	「滿誓」	芭蕉門
四七一	二ノ二二	【生歿】ノ前ニ增補	文通した（草庵集）。
四七一	二ノ二三	之道門	○あさくのみ（元祿十二年刊）
四七一	三ノ四	文通した逸話がある。	○誹諧繡鏡（正德三年刊）
四七一	三ノ六	○荒小田ノ前ニ增補	花見に行きとあり、「諸公畫讃」（享保十九年刊）の秋色の像の讃として見える。（削除）
四七一	三ノ八	十四年刊）ノ次ニ增補	
四八四	三ノ二一	花見に見き	
四八四	四ノ一九	とある。	
四八四	四ノ二〇	其角一周忌集一册（寶永五年刊）	寬政二年
五〇二	四ノ七	寬文二年	「鬼城女山人」
五〇四	四ノ一九	「鬼城女山人」	江馬修
五〇四	四ノ三〇	江馬修	「平家女護島」（削除）
五〇七	二ノ一〇	「姬小松子の日の遊」	（葛の松原參照）
五二六	一ノ三	「音律」	
五三七	三ノ二三	（以上各別項）	
五三八	四ノ一〇	破帚六册。	破帚五册（延享六年刊）
五七四	一ノ二九	「漢和篇」	「和漢篇」
五七四	四ノ一〇	元祿十五年	元祿十四年
五八一	四ノ八	遠藤曰人（えとうわらひと）	遠藤曰人（えとうわらひと）
五九一	一ノ一〇	基家	基通
五九三	一ノ一三	狂歌子里同風	狂歌千里同風
五九四	三ノ一六	天應と改元）	元應と改元）
六〇七	二ノ三二	養子內前	養子信尋
六一五	二ノ七	保乙二	の乙二
六一六	三ノ二一	江馬脩	江馬修
六二五	一ノ一六	「文字」	「新字說」
六三二	一ノ二四	「死靈解脫物語」	「死靈解脫物語」
六三二	一ノ五	同二十五年	明治二十五年
六五六	一ノ一一	「藤が谷式」	「藤が谷式目」
六五九	一ノ三二	吳服	吳羽
六六二	四ノ二七	佐野萬菊のお房	佐野川萬菊の
六八四	三ノ二三	「明治新體詩歌」	「明治新體詩」
七〇六	三ノ一九	「馬追お松」（編）	「鳥追お松」
七一一	二ノ九	燕庵	燕庵二世
七一一	二ノ一〇	天保中歿	天保七年歿。餘歲。
七一四	三ノ九	寶永九年	安永九年
七一九	四ノ一二	「太功記」	「繪本太功記」
七二〇	一ノ二八	借宿□主人	借宿闕主人
七四〇	一ノ二一	亮公	亮公
七四八	二ノ二五	颱風淳起時	狂颱淳起時
七四八	三ノ二四	一大煽風	一大旋風
七五五	一ノ三〇	志田野坡	志太野坡
七七〇	四ノ一八	本多種竹	本田種竹
七七四	一ノ二〇	柏井固	柏井園
七八〇	三ノ六	初編同十一年	初編天保十年
八〇二	二ノ二二	「韻」	「韻學」
八一九	三ノ二六	谷川樓川	米樓川
八三三	二ノ二六	三代河竹新七	二代河竹新七
八三六	一ノ三三	馬跡」	馬蹄」
八四六	四ノ一一	田村松意	田代松意
八四七	二ノ三二	「漢字」	「字音」
八五三	一ノ二三	「菊地大友姻袖鑑」	「姻袖鑑」
八六二	一ノ二一	「松の落葉」	「落葉集」
八八六	二ノ二四	「淺間」	「淺間嶽」
八八八	四ノ二八	**園女**（その）	**園女**（そのぢょ）
八九二	三ノ二八	通稱は正字	名は正字
八九二	四ノ一四	惟定	惟足
八九三	一ノ一九	がある。ノ次ニ增補	「蕉門名家句集」（酒堤）に句集
八九九	二ノ九	【申來】	【由來】
九〇四	四ノ二一	大虛集	太虛集
九一二	二ノ六	本期的	本格的

95 1

挿畫目次

書籍目錄（二）……六〇四
書道（一）……六〇六

頁	段・行	誤	正
一	二ノ二三	○軍法富士見西行ノ前ニ増補	西行法師墨染櫻（享保二年豐竹座、錦文流作）
一	一ノ二九	椎本則武	椎本舊德（削除）
一	一ノ三一	舊德翁	元文三年（一三九八）正月二日歿。享年八十三
一	一ノ三二	元文二年（一三九七）正月二日歿。享年八十二	定信（北山參照）
一	一ノ三〇	貞信（別項）	寶永六年刊
八	二ノ一五	寶永五年刊	樂座（削除）
七	四ノ二四	申樂座	
二	三ノ一四	「宮城[illegible]」	
八	三ノ一三	「山[illegible]」	
八	三ノ一五	「西行法師歌集」	「西行法師家集」
九	一ノ六	お蝶は	お香は
八	一ノ一二	重櫻」	重錦」
八	四ノ六	「文學の分類」	「文學」
二	一ノ一三	略して	その頭文字を取って
二	一ノ一四	これは鷗外の別號でもあつた。	「於母影」のSSSの署名の如きそれである。
一	三ノ二八	谷口樓川	米樓川
七	一ノ二九	他動說	地動說
九	三ノ二一	慶長十二年	慶長七年
九	三ノ二三	七十四	七十九
三	四ノ四	森山某	森山孝盛
七	二ノ四	太虛集	太虛集
九	二ノ一七	加賀國手取川の河口美方町	石川縣石川郡美川町
九	二ノ二〇	金澤中學校	金澤第一中學校
一	二ノ三	「滿誓」	「滿誓沙彌」
一	二ノ二二	【生歿】ノ前ニ増補	百々子・語雪堂・高佛庵芭蕉門
一	二ノ二二	之道門	交通した（草庵集）。
一	三ノ四	交通した逸話がある。	○あさくのみ（元祿十二年刊）
一	三ノ六	○荒小田ノ前ニ増補	○誹諧繡鏡（正德三年刊）
一	三ノ八	十四年刊）ノ次ニ増補	花見に行き
四	三ノ二一	花見に見き	とあり、「諸公畫讃」（享保十九年刊）の秋色の像の讃として見える。
四	四ノ一九	とある。	（削除）
四	四ノ二〇	其角一周忌集一册（寶永五年刊）	寬政二年
一	四ノ七	寬文二年	「鬼城女山入」
四	四ノ一九	「鬼城女山人」	江馬脩
四	四ノ三〇	江馬脩	「平家女護島」
七	二ノ一〇	「姫小松子の日の遊」	（削除）
八	一ノ三	「音律」	（葛の松原參照）
七	三ノ二三	（以上各別項）	

頁	段・行	誤	正
五三八	四ノ一〇	破帝六册。	破帝五册（延寶五年刊）
五七四	一ノ二九	「漢和篇」	「和漢篇」
五七四	四ノ一〇	元祿十五年	元祿十四年
五八一	四ノ八	遠藤曰人（ろつじん）	遠藤曰人（わつじん）
五九一	一ノ一〇	基家	基通
五九三	一ノ一三	狂歌子里同風	狂歌千里同風
五九四	三ノ一六	天應と改元）	元應と改元）
六〇七	二ノ三二	養子內前	養子信尋
六一五	二ノ七	保乙二	の乙二
六一六	三ノ二一	江馬脩	江馬修
六二五	一ノ一六	「文字」	「新字說」
六三二	一ノ二四	「死靈解脫物語」	「死靈解脫物語聞書」
六三二	二ノ五	明治二十五年	明治二十五年
六五六	一ノ一一	「藤が谷式」	「藤が谷式目」
六五九	一ノ三二	吳服	吳羽
六六二	四ノ二七	佐野萬菊のお房	佐野川萬菊のお房）
六八四	三ノ二三	「明治新體詩歌」	「明治新體詩歌集」
七〇六	三ノ一九	「馬追お松」（樂）	「鳥追お松」（別項）
七一一	二ノ九	燕庵	燕庵二世
七一一	二ノ一〇	天保中歿	天保七年歿、享年七十餘歲。
七一四	三ノ九	寶永九年	安永九年
七一九	四ノ一二	「太功記」	「繪本太功記」
七二〇	一ノ二八	借宿□主人	借宿關主人
七四〇	一ノ二一	亮公	亮公
七四八	二ノ二五	飈風淳起時	狂飈淳起時代
七四八	三ノ二四	一大煽風	一大旋風
七五五	一ノ三〇	志田野坡	志太野坡
七七〇	四ノ一八	本多種竹	本田種竹
七七四	一ノ二〇	柏井固	柏井園
七八〇	三ノ六	初編同十一年	初編天保十一年
八〇二	二ノ二二	「韻」	「韻學」
八一九	三ノ二六	谷川樓川	米樓川
八三三	二ノ二六	三代河竹新七	二代河竹新七
八三六	一ノ三三	馬跡」	馬蹄」
八四六	四ノ一一	田村松意	田代松意
八四七	二ノ三二	「漢字」	「字音」
八五三	一ノ二三	「菊地大友姻袖鑑」	「姻袖鑑」
八六二	一ノ二一	「松の落葉」	「落葉集」
八八六	二ノ二四	「淺間」	「淺間嶽」
八八八	四ノ二八	園女（その）	園女（そのじょ）
八九二	三ノ二八	通稱は正字	名は正字
八九二	四ノ一四	惟定	惟足
八九三	一ノ一九	がある。ノ次ニ増補	「舊門名家句集」（安井小洒編）に句集がある。
八九九	二ノ九	【申來】	【由來】
九〇四	四ノ二一	大虛集	太虛集
九一二	二ノ六	本期的	本格的

頁	段・行	誤	正
九一九	三ノ三〇	六如・慈周	六如慈周
九二〇	二ノ一	二十三年十月	二十三年一月
九三八	三ノ三三	「後普光院殿	「後普光園院殿
九五四	二ノ五	「野口寧齋」	「寧齋」
九九一	一ノ五	玉の緒	玉緒
九九三	四ノ二八	「花上野譽の石碑」	「幼稚子敵討」
一〇〇〇	三ノ二七	（一八四三）	（一五〇三）
一〇〇七	四ノ三四	文化七・八年	文政七・八年
一〇一一	一ノ二七	・百川	（削除）
一〇一一	一ノ二八	勃窣翁ノ次ニ増補	【居士號】百川朝水
一〇一一	二ノ一	呂國と號し	芭蕉から呂國の號を與へられ、
一〇一一	二ノ二	と云つた。ノ次ニ増補	其角死後直後淡々と改め、
一〇一一	二ノ二一	百川・勃窣翁	百川朝水・勃窣翁
一〇一一	三ノ一〇	【著作】ノ次ニ増補	ねなしかづら（元祿十六年刊）
一〇一一	三ノ一〇	（元祿十六年刊）	（寶永元年刊）
一〇一一	三ノ一三	雜談集）一册	雜談集）三册
一〇一一	三ノ一六	其角三十三回一册	三十三回三册
一〇一一	三ノ一七	いづの海	はづの海
一〇一一	三ノ二一	○鹿島紀行	（削除）
一〇一一	三ノ二二	神苗	神の苗
一〇一一	三ノ二三	春秋闌	春秋闌（享保十一年刊）
一〇二〇	一ノ九	近松德叟（ちかまつとくそう）	近松德三（ちかまつとくざう）
一〇二〇	一ノ一〇	德三	德叟
一〇二〇	三ノ一六	天明三年	天明六年
一〇三一	一ノ二八	同年「歸省」（別項）の一篇を發表して名聲を得た。	（削除）
一〇三一	二ノ六	歸省（別項）	（削除）
一〇五〇	二ノ一四	特にいろは索引まで附屬してゐて便利に出來てゐる）	本書は古來澄月の著と傳へられてゐるが誤である）
一〇八二	二ノ一一	「帶引胡蝶昏」	「帶曳小蝶昏」
一〇八五	三ノ九	神來	神徠
一〇八九	四ノ七	近藤茂子	進藤茂子
一一二二	一ノ二六	劃立した	確立した
一一二二	三ノ一三	「夫婦物の謠曲」	「纖嫌物の謠曲」
一一三七	四ノ二	肩蝦夷押使」	肩蝦夷押領」
一一五二	二ノ三一	連歌答問	連歌問答

616-95 1

挿畫目次

合　卷（一）……一三
合　卷（二）……一三
好色一代男……二六
古今和歌集古寫本（一）……六六
古今和歌集古寫本（二）……六六
滑稽本（一）……一七九
滑稽本（二）……一七八
西鶴（肖像及び墓）……二三四
西鶴（筆蹟）……二三四
挿繪（奈良繪本・丹緑本）……二七八
挿繪……二七八
西本願寺本三十六人家集……三二八
芝居番附（一）……四四〇
芝居番附（二）……四四〇
寫經（一）……四五八
寫經（二）……四五八
洒落本（一）……四七二
洒落本（二）……四七二
淨瑠璃正本……四七二
常用漢字表……五七六
書籍目錄（一）……六〇四
書籍目錄（二）……六〇四
書道（一）……六〇六
書道（二）……六〇六
書道（三）……六〇六
書道（四）……六〇六
新古今和歌集古寫本（一）……六四四
新古今和歌集古寫本（二）……六四四
神代文字（一）……六八六
神代文字（二）……六八六
新聞（一）……七〇四
新聞（二）……七〇四
前句附及雜俳……八四〇
川柳（暦摺萬句合・柳樽初篇・繪本柳樽）……八四〇
藏書印……八五六
裝飾經（一）（平家納經）……八五八
裝飾經（二）……八五八
曾我物語（一）……八七〇
曾我物語（二）……八七〇
太平記（一）……九二六
太平記（二）……九二六
近松門左衛門（肖像及び筆蹟）……一〇二二
貞德（肖像及び筆蹟）……一一二八
田樂（一）……一一四〇
田樂（二）……一一四〇

一五三　三ノ四　「卯花二世今駕籠」
一七〇　一ノ二三　「略（かるがて）三五大切」
一八七　三ノ二八　後鳥羽院御抄
一九三　一ノ一七　「闇夜一夜」
一九四　三ノ三　（各別項）
二二二　四ノ三四　兩書とも傳存しないやうである。
二四三　二ノ二二　〔浮世草子〕西行法師墨染櫻（錦文流作）。
四八四　三ノ二二　回遊善（元文四年刊）
四八四　四ノ一九　「卯花二世合駕籠」
四八四　四ノ二〇　「略（かるがはしと）三五大切」
五〇二　四ノ七　後鳥羽院御抄・遠島御抄
五〇四　四ノ一九　寛文二年「鬼城女山入」
五〇四　四ノ三〇　江馬脩
五〇七　二ノ一〇　「姫小松子の日の遊」
五二六　一ノ三　「音律」
五三七　三ノ二三　（以上各別項）
八九九　寛政二年「鬼城女山入」
八九一　江馬脩
八九三　「平家女護島」
九〇四　（創除）
九一二　（葛の松原參照）

「闇夜一燈」（歌舞伎參照）

「馬鹿集」は實は京都の池田長弐の著で明暦二年に刊行されてゐる。（創除）

日本文學大辭典

第二卷

吉村忠夫

第二卷

頁	段行	誤	正
一一九	柱	ここんか	ごこん
二〇七	一ノ一四	紫陽	紫陽花
二〇七	二ノ四	月に	日に
二〇七	二ノ五	三月	四月
二九八	三ノ六	内大臣百百	内大臣百首
三五三	三ノ六	名人長二	名人長次
三五八	三ノ一六	集」「甘井の金蘭集」	集」、甘井の「金蘭集」
四九四	一ノ一	徐景	景徐
六九四	三ノ三	閲歴未詳	二代若狭太夫の改名

へ歸つた。北の方も尼となつて、夫の菩提を弔うた。謡曲「生田敦盛」（敦盛物の謡曲參照）と

る語を集める方法や、意味の類似した諸語（類義語）及びこれと相對する意味を有つ諸語（對

各種の學術にはそれ〴〵術語があり、各地の方言には、それ〴〵特有の俚語又は方語があ

日本文學大辭典　第一卷

こ

小敦盛（こあつもり）　御伽草子（二十三部の一）一卷【別名】敦盛の子と云ふところから「子敦盛」と題したのもある。【成立】室町期か。【諸本】古板本は御伽草子本。明治以後は、御伽草子後篇（今泉嵒山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系等所收。【内容】孝行談。釋教物。賀茂の神德も說かれてゐる。平敦盛の須磨戰死の報を聞いた北の方は、源氏の搜索を懼れて、產み落した若君を刀を添へて捨てたが、賀茂參詣の歸り途なる法然上人に拾はれ養育されるうち、同じ上人の許で佛門に入つた熊谷入道は、己が討つた敦盛に生寫しのこの孤兒を訝り憐れんでゐると、稚兒は常に父母を戀ひ慕ひ、病み臥すまでに至つた。上人說法の時、この子の憐れな身の上を談るのを聞いて、聽衆の中から悚へきれず名告り出たのは彼の北の方で、涙の中に母子の再會が遂げられた。若君は父にも逢ひたいと賀茂明神に詣でて祈ると、滿願の日、「津國生田を尋ねよ」との託宣があつた。急ぎ一の谷に下つて、雷雨の夜、小堂で敦盛と名告る父の靈に對面し、夢醒めて枕にしてゐた骨を携へて都へ歸つた。北の方も尼となつて、夫の菩提を弔うた。謠曲「生田敦盛」（敦盛物の謠曲參照）と同材。父子對面の場は特に能がかりである。なほ捨てられた敦盛の遺孤が法然に拾はれたといふ言ひ傳へは、「雍州府志」（卷八）にも載せてある。【影響】正保二年及び享保二十一年刊、古淨瑠璃「こあつもり」、寛政七年刊、黃表紙「子敦盛」等。說經節にも蓮生物語の段が ある。【附記】薩摩琵琶古曲の「小敦盛」は、幸若舞曲から出たもので、この草子と直接の關係はない。（敦盛參照）　〔島津〕

語彙（ごい）　言語學・國語學【解說】或る種の單語の總體をいふ。一國語又は一言語に用ひる單語の總體をも云ひ（英語の語彙、鹿兒島方言の語彙、近松の語彙など）、或る種類に屬する單語の總體をもいふ（動物に關する語彙、天文に關する語彙など）。かやうにして、一の語彙の中に各種の語彙を含むことが可能である（國語の語彙中に、天文に關する語彙、植物に關する語彙その他がある類）。【分類】一國語又は一言語の語彙は、（一）單語の意味によつて分類する事が出來る。天文・地理・動物・植物その他に部類するのであつて、辭書の類にはこの種の分類を用ひたものが多いが、併しこの方法で、語彙の全範圍を盡すべき分類法はまだ確立しない。又なるべく廣い意味を有する語の下に、これに從屬する狹い意味を有する語を集める方法や、意味の類似した諸語（類義語）及びこれと相對する意味を有つ諸語（對義語）を一團とする方法もあるが、これ等の方法では、なほ更、語彙全部を盡す事は困難である。（二）單語の音によつて分類する方法。これは、各々の單語をこれを構成する音の單位（單音又は音節）に分解して、まづ最初に位する音單位の異同によつて分類し、更に第二第三の音單位に及べば、あらゆる單語を細かに分類する事が出來る。或は遂に最後に存する音單位からはじめて、次第に上の音單位に及ぶ方法も可能である。（三）文字に書いた形によつて分類する方法。單語を書きあらはした文字を、一つ〳〵に分解し、又は一つ〳〵の文字の構成要素（漢字ならば偏傍など）に分解して、その最初の文字又は文字の構成要素の異同によつて分類し、次に第二第三に及べば、あらゆる單語を分類する事が出來る。【特殊の語彙】或る特殊の社會、又は或る特別の場合にのみ用ひられる特殊の語彙は、どの國でも、どの時代でもかなりある。我が國語に於ける著しいものを擧げれば、宗敎に關するものには、佛敎語、伊勢の齋宮や賀茂の齋院の忌詞（いみことば）、特殊の階級や社會に屬するものとしては、女房詞・武者言葉・軍隊語・書生言葉・廓言葉・職人言葉などあり、江戸の通人の間に行はれた通言（つうげん）などは一層特殊なものである。各種の學術にはそれ〴〵術語があり、各地の方言には、それ〴〵特有の俚語又は方語がある（方言參照）。隱語は他の社會又は仲間のものにわからないのを目的とするもので、その社會又は仲間の違ひによつて、それ〴〵差異がある。（辭書參照）

【參考】方言及隱語　目黑和三郎（國文論纂）○異名隱語の研究を述べて特に齋宮忌詞を論ず　安藤正次（國學院雜誌一九ノ七・八）○隱語の話　前田太郎（外來語の研究）○日本隱語集　稻山小長男○隱語輯覽（改題「隱語辭典」）高田愛次郎・高芝麓○くさむすび田安宗武（玉函叢說）○鎌倉時代の武士詞　春日政治（歷史地理大正一〇ノ六）○アリンス國辭彙宮武外骨　〔橋本〕

戀川好町（こひかはすきまち）　「鹿都部眞顏（しかつべまがほ）」を見よ。

戀川春町（こひかはるまち）　黃表紙作者・浮世繪師・狂歌師【本名】倉橋格、通稱壽平【別號】壽山人。狂歌號は酒上不埒（さけのうへのふらち）【生歿】延享元年に生れ、寛政元年（一七八九）七月七日に歿す。享年四十六。【法名】寂靜院廓譽湛水【墓所】四谷新宿淨覺寺【閱歷】駿河小島藩主松平丹後守家臣、江戸小石川春日町に住したので戀川春町と號した。畫を鳥山石燕に學ぶ。安永四年（三十二歲）の「金々先生榮花夢」以來、時に筆を休めた年もあるが、とにかく寛政元年「鸚鵡返文武二道」に至るまで、二十餘部の黃表紙の作がある。その中、最も活躍したのは

安永五年・七年、天明三年・四年であつた。寛政十年には「須臾之間方」の遺稿出版もある。「文武二道」は寛政の治を諷刺し、甚だ世評高く驚くべき賣行であつたので、その筋の糺彈を受けたが間もなく歿した。當時自殺説も傳へられた。墓碑に刻せられた辭世に、「生涯苦樂四十六年、即今脫却浩然歸天」とある。

【著作】〔黃表紙〕○金々先生榮花夢二卷（別項×安永四年）○高慢齋行脚日記三卷（別項）（同五年）○其返報怪談二卷（同五年）○三升增鱗祖三卷（別項）（同六年）○三幅對紫曾我三卷（別項）（同六年）○辭闘戰新根二卷（同六年）○無益委記三卷（別項）（同八年）○甚三紅絹由來三卷（同八年）○悅贔蝦夷押領三卷（別項）（天明八年）○鸚鵡返文武二道三卷（別項）（寛政元年）等。

【業績】〔黃表紙作者として〕安永四年「金々先生榮花夢」を出し、翌年「高慢齋行脚日記」を出して、當世風俗の穿ちをなしたことに於て從來の草雙紙の作風を一變し、黃表紙の創始者の位置を占め得たのである。作の内容からいへば、その巧妙さは敵手、喜三二（別項）の右に出で難からうが、常に何等かの新し味を趣向の上に立ててゐることを注意すべきである。「金々先生榮花夢」の如く當世風俗を題材としたものは言ふ迄もなく、その他、自傳風の「其返報怪談」や、未來記ものの「無益委記」の如きが、後の作に影響を與へたことが少くない。〔浮世繪師として〕春町の黃表紙の特質は、晩年の一書及び遺稿に他の畫家の挿繪がある外は、すべて自畫作に係ることである。その畫風の大まかな線の太いのに應じて、作柄ののんびりとしたことが、甚だよい調和を保つて獨特の趣を見せてゐる。春町は又、他の作者の黃表紙のために挿繪を描いてゐる。安永六年の如きは、自畫作はただ一種であるが、他のためには八種も描いてゐる。尤も春町が他の作者のために描いた挿繪の殆どすべては朋誠堂喜三二の作であつた。從つて二者の間に影響し合ふものが少くない。そして喜三二の方が、より多く春町を踏襲してゐるが、春町の「鸚鵡返文武二道」の如きは、喜三二の「文武二道萬石通」の摸倣であつた。作者自らもその後篇格のものと斷つてゐるほどである。〔狂歌師として〕彼は酒上不埒と稱し、安永頃から狂歌師と交り、「狂歌師細見」（別項）にも、戀川畫としてその社中に小川町住・澤邊帆足・節原中貫・酒呑親文・馬屋廐輔以下數名を擧げてゐる。天明四年六月十五日には、不埒自ら會主となつて、兩國に「狂歌名よごしの會」を催したが、來會するもの蜀山人以下四十餘名で、頗る盛會であつたと云ふ。また手柄岡持（喜三二）とは殊に親交あり、同人の媒介にて妻を娶つた時、「婚禮も作者の世話で出來ぬるは是れ草本のゑにしなるらん」と詠じたが、この妻兩親の意にかなはず、子ある中を離別し、後妻を迎へよと人の勸めた時「おもひ子は煮えこぼるともまゝ母の手鍋にかけずたきもりたてん」と口吟して、終に後妻を娶らなかつたと云ふ。

戀川春町（國貞畫）

【門流】門人に行町（通稱小川市太郎）あり、後に春町の號を襲ぎて二代目春町と稱し、畫を喜多川哥麿に學んだ。又他に二代目春町（通稱戀川清十郎）を號する者があつた。なほ黃表紙の門下に戀川好町がゐたが、後に狂歌師として聞えた鹿都部眞顏（別項）である。〔野崎・山口〕

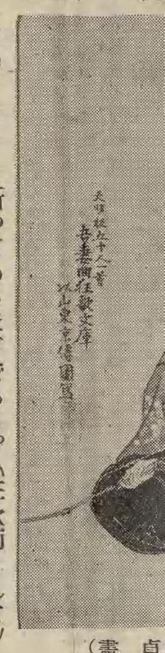
語意考（ごいかう）

語學書　一卷　【著者】賀茂眞淵【名稱】本書は「語意」といふ名稱で、草稿のまゝ傳はつてゐたのを、後に整理して「語意考」と名づけて、刊行したやうである。【刊行】寛政元年夏。本居宣長の序、眞淵の明和六年二月の自序（跋の如く、卷末に附した本もある）がある。【諸本】賀茂眞淵全集卷二・補賀茂眞淵全集卷四所收。【内容】伏見稲荷山の神官荷田東麻呂（春滿）の家にある古傳に依つて、東麻呂が古言を説いたのを眞淵は聽講したが、これを基にして日本の古語を説いたものである。初めに、日本は五十音で凡て事足つてゐるが、支那は頗る多くの字を用ひる。その點、日本より劣つてゐる。印度は五十ばかりの字を用ひてゐるが、これを組合せると頗る多くなる。日本は僅かに清音五十、濁音二十で如何なる言葉をも表はし得る。この五十音は天地自然の音である。印度から習つたものだと云ふ人があるが、頗る烏滸なことである。日本には神代から言葉があり、その言葉は五十音に外ならぬ。そして神代以來の言葉の音は五十音に當てると、横に五つの區別がある。「一つはことはじむるこゑ（初）、二つはことうごかぬこゑ（體）、三つはこと動くこゑ（用）、四つはことおふするこゑ（令）、五つはことたすくるこゑ（助）」この五つの區別を理解すると、國語を明かにすることが出來ると云ひ、次に支那は音を主とし日本は言を主とする。故に國語を解くのに、漢字音の上聲・去聲等に留意する必要はないと云ひ、次に日本の國内では畿内の音が正しい。尤も音は重要視するにも及ばないけれど、やはり正しい方がいゝ。古書でも京都で出來たものは音が正しいから研究しなければならぬと云ひ、次に、或る人が日本は言葉の國であるから、言葉のみで文字の無かつた時代を尊ぶのは一面道理であるが、然し外國から文字が傳はらなかつたら、古の事を後世に傳へる事が出來なかつたであらうと云つたのに對して、文字の無い時代には心は素直で、言葉も少いから、文字が無くても何等不便を感じない。然るに文字が傳はつてから、心は不正になり言葉は多くなつた。外國と交つて、實に大きな損をしたと述べてゐる。次に五十音圖を書いて、その五段に初體用令助の別ある事を書き、次に通言・通韻・延言・約言・略言・清濁・相通等の事を記してゐる。【價値・影響】本書、初めの方の五十音の尊敬、五十音圖は外國の影響を受けたものでないと云ふ説等は、後の國學者に、頗る大きな影響を與へたもので、平田篤胤（別項）の如きは身命を賭してこの説を主張したのであつた。本書が國語學史上から見て最も注意すべき點は、活用を五十音圖に依つて説いたことである。尤もこの説は五十音圖の各行に亙つて、初體用令助と五段に同一に活用すると考へたので、頗る幼稚なものである。且つ、本書の刊行より二十七年前に、谷川士清（別項）は「日本書紀通證」三十五卷（寶曆十二年刊）の附錄の中に、五十音圖に依つて活用を説明してをり、その説は眞淵よりも進んでゐる。然しその後の國語學界は、本居宣長の一派が獨占したために、眞淵のこの考は本居派の活用研究の源泉になつたのである。次に延言・約言・略言の説は、爾後大に行はれたが、ために牽强附會の説を生じたことも少くない。要するに、本書は眞淵の書であるが故

管愛慾に悶えてゐるうち、一日、百枝子と舟を浮べて沖に出て風雨に會ひ、命からゞゝずぶ濡れになつて歸つて來て、死んだもののやうな彼女を宿の隣室に寢かした。そして寢息を窺ひながら彼女の傍に進み寄つたので、彼女は跳ね起きて、逃げるやうに宿を出て行つた。單に戀を戀してゐたに過ぎない百枝子は現實に直面して脆くもその夢を破られ、彼から離れて了つたのである。彼は悶々の情を抱目の「爲若道行」と「勸進帳」とが「大竹集」（別項）に收められてゐる所から、延寶年中の作かと思はれる。【諸本】宇治加賀掾正本、八行四十八丁本。近松門左衞門全集第一卷・近松全集第一卷等に所收。【題材】「源平盛衰記」の袈裟御前身代りの話に、説經節の「かるかや」（別項）を配した。

【梗概】〔初段〕近衞院の御代、遠藤武者盛遠は攝津渡邊橋の橋供養に奉行を仰せつかつた中の法然上人の弟子となる。衣川が來合はせて元服の願を申出でたに對し、法然は九品淨土の有難さを説いて、爲若の出家を遂げさす。【構想】初段と二段目とは「盛衰記」の原文に忠實であるに過ぎぬ。脚色のすぐれたのは三段目鳥羽戀塚の場面である。愁歎場としても效果をあげ、機巧（からくり）應用の成功は躍如たるものがある。四段は「かるかや」や「小あつもり」の脚色を活用した所と思はれるが、「爲若道行」

年「高慢齋行脚日記」を出して、當世風俗の穿ちをなしたことに於て從來の草雙紙の作風を一變し、黄表紙の創始者の位置を占め得たのである。作の内容からいへば、その巧妙さは敵手、喜三二(別項)の右に出で難からうが、常に何等かの新し味を趣向の上に立ててゐることを注意すべきである。「金々先生榮花夢」の如く當世風俗を題材としたものは言ふ迄もなく、その他、自傳風の「其返報怪談」や、未來記ものの「無益委記」の如きが、後の作に影響を與へたことが少くない。〔浮世繪師として〕春町の黄表紙の特質は、晩年の一書及び遺稿に他の畫家の挿繪がある外は、すべて自畫作に係ることである。その畫風の大まかな線の



貞　畫）

と斷つてゐるほどである。〔狂歌師として〕彼は酒上不埒と稱し、安永頃から狂歌師と交り、「狂歌師細見」(別項)にも、戀川畫としてその社中に小川町住・澤邊帆足・節原中貫・酒呑親文・馬屋廐輔以下數名を擧げてゐる。天明四年六月十五日には、不埒自ら會主となつて、兩國に「狂歌名よごしの會」を催したが、來會するもの蜀山人以下四十餘名で、頗る盛會であつたと云ふ。また手柄岡持(喜三二)とは殊に親交あり、同人の媒介にて妻を娶つた時、「婚禮も作者の世話で出來ぬるは是れ草本のゑにし

川士清(別項)は「日本書紀通證」三十五卷(寶暦十二年刊)の附錄の中に、五十音圖に依つて活用を説明してをり、その説は眞淵よりも進んでゐる。然しその後の國語學界は、本居宣長の一派が獨占したために、眞淵のこの考は本居派の活用研究の源泉になつたのである。次に延言・約言・略言の説は、爾後大に行はれたが、ために牽强附會の説を生じたことも少くない。要するに、本書は眞淵の書であるが故に、大に世に行はれ、學界を裨益した點も少くないが、説の不完全な點から學界を毒したことも亦少くない。

【附記】「五十音辨誤」一卷(寫、村田春海著、寛政五年三月成る)は、「語意考」の誤を訂したもので、「五十音になづむまじき事」「五十音は神代よりありしものならぬ事」「をおえゑの所屬の辨」などと章を分けて書いてゐる。又平田篤胤の「古史本辭經」(別項)は、「語意考」の説を繼承したもので誤謬が多い。なほ「語意考」の一部分についての説は諸書に散見する。〔龜田〕

戀ざめ（こひざめ）　小説　【作者】小栗風葉　【發表】明治四十年十一月、日本新聞　【刊行】四十一年四月、新潮社。風俗壞亂のため發賣を禁止されたが、後、大正四年九月、「代表的名作選集」第十五編(同社)に收め再刊した。現代日本文學全集(小栗風葉集)所收。

【梗概】房州那古に靜養せる吉田といふ文士肌の男が、友人志村の妹百枝子に、英文聖書及び沙翁の講義をしてゐるうちに次第に親しくなり、或る日、海岸へ出て、唯二人で落日を前にしてしんみり語つた時、二人は戀に落ちた。ところが吉田は當時三十四歳、事情あつて妻子を田舍にやつてゐる身でもあり、中年の分別は、思ひ切つて戀に進ましめず、只管愛慾に悶えてゐるうち、一日、百枝子と舟を浮べて沖に出て風雨に會ひ、命からゞゝずぶ濡れになつて歸つて來て、死んだもののやうな彼女を宿の隣室に寢かした。そして寢息を窺ひながら彼女の傍に進み寄つたので、彼女は跳ね起きて、逃げるやうに宿を出て行つた。單に戀を戀してゐたに過ぎない百枝子は現實に直面して脆くもその夢を破られ、彼から離れて了つたのである。彼は悶々の情を抱いて東京へ歸ると、千葉にゐる知人大村の手紙に接した。それは、自分は百枝子との結婚をすゝめられてゐるが、彼女の人物・操行はどうかといふのである。そこで彼は彼女の人物を讃め、品行殊に堅固だとわざと言つてやつた。やがて百枝子が、夫になつた人から、その手紙を見せられる時の樣を想像して、彼は傷つけられた自尊心が始めて滿足されたやうな氣がした。

【批評】房州那古のロオカル・カラアを精細に油繪の如く寫し出し、且つ吉田と百枝子が、海岸で初めて戀に落ちて陶醉するところなど巧みに情景を浮き彫りにしてゐるが、百枝子が吉田から離れてゆく所に少し描き足らぬ憾みが無いでもない。當時中年の悲哀とか、中年の戀とかいふことは、自然派文士の間に言ひ囃されてゐたので、慧敏な彼は、早くもそれを捉へて題材にしたのである。彼の作中、傑出したものではないが、當時文壇の一傾向を窺はせるものがある。〔高須〕

戀塚物語（こひづかものがたり）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衞門と推定されてゐる。【名稱】三段目に現はれる鳥羽戀塚に據つた。「大竹集」には「戀塚物語」とあるが、「鳥羽戀塚物語」ともいはるべきである。【成立】四段目の「爲若道行」と「勸進帳」とが「大竹集」(別項)に收められてゐる所から、延寶年中の作かと思はれる。【諸本】宇治加賀掾正本、八行四十八丁本。近松門左衞門全集第一卷・近松全集第一卷等に所收。【題材】「源平盛衰記」の袈裟御前身代りの話に、説經節の「かるかや」(別項)を配した。

【梗概】〔初段〕近衞院の御代、遠藤武者盛遠は攝津渡邊橋の橋供養に奉行を仰せつかつたが、計らずも從妹の袈裟御前を見染め、既に源渡に嫁して一子爲若を儲けてゐるにも拘らず、袈裟の母衣川に迫つて、わが妻にと强要した。〔二段〕袈裟の合圖に渡館へ忍んだ盛遠は、渡の身代りと知らず、袈裟の首を落したが、松明でそれと知り處刑をうけんと名乘り出た上、渡の出家を善知識として佛門に入る。〔三段〕十年後、十二歳の爲若は衣川の保護の下に嵯峨野往生院で勉學に暇ない。ふと衣川から、父は奈良に僧となり、母は鳥羽に籠ると聞かされて密に鳥羽を尋ねる。日も暮れ雨に降られたが、とある庵室に辿り着くと、庵主は母の袈裟であつた。嬉しさに母の傍で眠る中に、母は仇を討たうとする爲若の心を戒めて古塚に隱れた。爲若は目が覺めると、庵は消えて古塚のみあつた。〔四段〕爲若は更に父を尋ねて奈良にさ迷ふ。渡はその頃重源法師と改めて東大寺に屬し、伽藍修復の勸進中で、偶々爲若に遇へたが、戒を守つて名乘らず、渡は早やこの世にないと告げる。悲歎にくれた爲若は終に意を決して、敵文覺の弟子となつて、一日彼の假眠中を斬らうとしたが、文覺には不動の加護が働いて何うしても討てぬ。始めて佛力を信じて出家の意を固めた。〔五段〕爲若は文覺に連れられて、折から黑谷に説法中の法然上人の弟子となる。衣川が來合はせて元服の願を申出でたに對し、法然は九品淨土の有難さを説いて、爲若の出家を遂げさす。

【構想】初段と二段目とは「盛衰記」の原文に忠實であるに過ぎぬ。脚色のすぐれたのは三段目鳥羽戀塚の場面である。秋歎場としても效果をあげ、機巧(からくり)應用の成功は躍如たるものがある。四段は「かるかや」や「小あつもり」の脚色を活用した所と思はれるが、「爲若道行」や「勸進帳」の節事を入れて、筋以外の效果を擧げた場面である。「勸進帳」は文覺の勸進帳から案じたのであらう。延寶中の加賀掾の語り物としては、成功の部に屬すると思ふ。【影響】貞享二年竹本座の「一心五戒魂」(別項)は本曲の改作である。「攝州渡邊橋供養」(作者、豐丈助　安田蛙文・淺田一鳥。寛延元年十一月豐竹座興行)は、本曲を主に謠曲「熊野」を交ぜた作である。歌舞伎への影響は殊に太きく、文覺の狂言が一類を成してゐる。古くは元祿十四年正月、江戸山村座に「傾城三鱗形(みつうろこがた)」が好評を博し、やゝ下つて、天明二年、笠縫專助作「伊勢平氏榮花暦」(中村仲藏の奴仲平實は三浦荒次郎の所作が「仲藏仲平」として好評であつた。)や、天明四年、初代櫻田治助作の「大商蛭小島」(別項)等があり、鶴屋南北にも「貞操花鳥羽戀塚」(鶴屋南北參照)があつたが、現存する作は所作事の外は明治以後のものである。三代河竹新七作「橋供養梵字文覺」は、「攝州渡邊橋供養」に據り、依田學海・川尻寶岑作「那智瀧祈誓文覺」は「源平盛衰記」に據つた活歴物で、九代團十郎の文覺荒行は、「文覺勸進帳」として新歌舞伎十八番に入つた。その他、默阿彌作「今文覺勸命刺繡(のぼりぬい)」といふ講釋種の作等もある。延享三年版、清滿畫の黑本「戀塚物語」(後に青本に再

版）も淨瑠璃歌舞伎の流行から生れたものと思はれる。原據たる話柄が劇的要素を蓄へてゐる所から、その影響も至極廣い譯である。

【參考】近松全集第一卷解說藤井乙男○歌舞伎細見　飯塚友一郎　〔守隨〕

古泉千樫（こいづみ ちかし）　歌人

【別號】椎南莊主人・樫老人・蓑岡老人【生歿】明治十九年九月二十六日、千葉縣安房郡吉尾村細野に生れ、昭和二年八月十一日東京青山にて病歿す。享年四十二【閱歷】明治四十一年四月、鄕里の小學敎員の職を辭して五月上京、十一月より帝國水難救濟會に勤務し、大正十五年一月病のために辭職した。大正十三年八月始めて喀血し、昭和二年一月から全く臥床するに至つた。彼は少年にして既に和歌を好み、十四歲「心の花」（別項）に投書し、又海上胤平・小出粲（各別項）の作を愛讀した。明治三十五年に「心の花」・日本新聞等に歌を投じ、この頃から根岸派の歌に心を傾けるに至つた。

古泉千樫

四十一年以後は、全く伊藤左千夫（別項）の門人となり、同四十二年「アララギ」（別項）が東京に移つてから、左千夫を輔佐して編輯發行に努め、「アララギ」歌風の勃興に與つて力があつた。晩年同誌と疎くなり、大正十三年四月雜誌「日光」（別項）が發刊せらるるやその同人となつた。【著作】〔歌集〕川のほとり（別項）○屋上の土（昭和三年、改造社）その他、歌論集「隨緣抄」（昭和五年、改造社）があり、なほ「屋上の土」以後の歌稿あれど未刊。

【批評】上京當時は、その考に自然主義的な觀相をも交へて、根岸派の中でも新鮮な道を歩まうとしてゐた。そして穩健平淡で無理のない歌風のうちに、日々の生活から來る眞劍さを宿して居り、特に晩年病中吟の如きは寂寥の情、切々として迫るものがある。彼は餘りに自重し過ぎ、標準を高くし過ぎたため、生前公にした歌集は、「川のほとり」一卷あるのみであつた。彼は又、考證學的、文獻學的方面にも興味を有ち、それ等に確實な力量を示した。歌論集「隨緣抄」にそのおもかげを留めてゐる。彼には島木赤彥（別項）ほど多くの門人がなかつたが、晩年に熱心な門人を得た。青垣會同人が卽ちそれである。〔齋藤（茂）〕

小泉八雲（こいづみ やくも）　文學者

【本名】ラフカディオ・ヘルン Lafcadio Hearn【生歿】西曆一八五〇（嘉永三年）六月二十七日ギリシヤ、アイオニア列島中、サンタ・マウラ島に生れ、明治三十七年九月二十六日東京市外西大久保二六五の自邸にて病歿。享年五十五【墓所】東京雜司ケ谷墓地【家系】父はチヤールス・ブッシュ・ヘルン、當時英國軍隊附としてギリシヤに駐在した愛蘭出身の軍醫、母はギリシヤ人、ローザ・テッシマ。【閱歷】父の任期終ると共に、二歲の時母と愛蘭に歸つた。六歲の頃父母は故あつて離婚した。それから富有な大叔母（父の叔母）の許に養はれ、英國と佛國とで敎育を受けた。英國の學校生活中、運動遊戲の際、友人の過失のために一眼の明を失した。二十歲の頃、大叔母破產のため獨立せんとして渡米した。初めにニュー・ヨーク、次にシンシナーティに赴き、新聞記者となつた。八年の後ニュー・オルリアンズに移つて、そこの大新聞タイムス・デモクラットの文學部主筆となり、こゝで飜譯創作等を公にして文名次第に高くなつた。滯在約十年の後、ハーパー書肆に勸められて西印度に赴き、二年滯在した。その後、再び同書肆に勸められて、明治二十三年（一八八九）四月、暫く滯在のつもりで日本に來た。時に三十九歲。同年九月出雲松江の中學校に敎師となつて赴任し、その年の暮、松江の人小泉節子と結婚した。同二十四年十一月、熊本第五高等學校に轉任、二十七年十一月神戸に赴き、神戸クロニクルの記者となつた。歸化して日本臣民となり、小泉八雲と名乘つたのはこの時代であつた。二十九年九月、招かれて東京帝國大學文學部の講師となつて東京に移住した。三十六年三月辭職、翌年四月から早稻田大學の講師となつた。その年九月二十六日の夕方、突然狹心症で逝去した。同月三十日、牛込富久町瘤寺に於て佛式で葬儀が行はれた。大正四年、大正天皇卽位式の時、從四位を贈られた。

小泉八雲

【著作】彼は、母がギリシヤ人であつた關係からギリシヤの事物、つゞいて東洋の事物に同情をもつてゐた。更に彼の性質として文學的方面の珍奇を求めてやまなかつた。當時未だ英米の讀書界に知られてゐなかつたゴウティエ、ピエル・ロチ、モウパッサン、アナトール・フランス等を、タイムス・デモクラットの紙上で紹介飜譯した。ゴウティエの飜譯「クレオパトラの一夜」、その外フローベルの飜譯「聖アントニーの誘惑」はその頃のものである。また創作的飜譯とも云ふべき「異文學遺聞」（Stray Leaves from Strange Literature）及び「支那怪談」（Some Chinese Ghosts）、それから小說「チタ」（Chita）もこの頃のものである。「佛領西印度の二年間」（Two Years in the French West Indies）及び西印度の黑人の女を主人公とした小說「ユーマ」（Youma）は西印度二年間滯在中の作である。日本に渡るまでニュー・ヨークに滯在中、アナトール・フランスの「シルヴェストル・ボンナードの罪」を飜譯出版した。併し彼を最も有名にしたのは、日本に關する諸作である。それは「知られぬ日本の面影」（Glimpses of Unfamiliar Japan）、「東の國から」（Out of the East）、「心」（Kokoro）、「佛土の落穗」（Gleanings in Buddha Fields）、「異國情趣と回顧」（Exotics and Retrospectives）、「靈の日本」（In Ghostly Japan）、「影」（Shadowings）、「日本雜事」（A Japanese Miscellany）、「日本お伽噺」（Japanese Fairy Tales）、「骨董」（Kotto）、「怪談」（Kwaidan）、「神國日本」（Japan）、「天の河緣起」（The Romance of the Milky Way）の十三種である。これ等の諸作には印象記・旅行記・事實談もあり、研究考證もあり、論文・隨筆もあり、小說・物語もある。初期のものは、印象記・旅行記の如き客觀的のものが多いが、次第に主觀的・瞑想的のものが多くなると共に、題材を日本に取つた隨筆や物語が多くなつてゐる。これ等の物語は殆ど全部怪談であるが、これは題材を外國に取つた英文學の至寶と云はれてゐる。全然日本には關係のない隨筆や論文もある。殊に進化論や佛敎、蟲の研究に關するものはさうである。彼はもと進化論の歸依者であると共に佛敎の研究者であつた。その輪廻の說と進化論とを結合して彼自身の哲學をつくり、そこから出發して蟲を愛したのであつた。【批評】彼は洞察と同情に富んだ文人であつた上、英文學に於ては有數の名文家であつた。その魅力のある文章は非常に多くの日本びいきを作つたと云はれる。その上、敎師としても非凡であつた。彼の帝國大學に於ける講義筆記もその後出版された。書簡集も幾種か出版された。その以前彼が米國新聞に書いたものも出版された。傳記も多く出てゐる。そのすべては「小泉八雲全集」（十二卷）に所寄人となり、勅任の待遇を賜はつた。人と爲り恬淡、洒落且つ多趣味多藝で、繪畫・彫刻・小細工の妙を得、圍碁は三段を打つた。

【著作】桐花初篇三卷（明治二十六年刊）○同續篇二卷（同三十一年刊）○同後篇二卷（同三十五年刊）○同拾遺二卷（同四十一年刊）○小出粲翁家集三卷（同四十二年刊）○幾久能志太幡○飛驒の山ふみ等。なほ現代短歌全集第二卷に抄出さる。【作風】自由輕快な歌ひぶりで、多少の新味を含み、當時の宮內省歌人の中で優れた約四分の一を占めてゐるのであつて、春夏秋冬を合せた自然の歌と共に中心となる題材をなすものである。而して質から言つても純情の豐かなものが多い。純粹抒情的題材の中で、死・別離の感情と戀愛感情とは、一方は離れるのを悲しむ情であり、一方は逢はうとする情である點に於て相違はあるが、その純粹熱烈なる點に共通するものがある。戀歌にも男性と女性とによつて相違があり、感情としても逢はうとする思慕の情を表現したのと、逢つもてはやされたのは二代であらう）の名稱を假用したのである。名劍雲龍丸の、拔いて人を斬れば大雨到ると云ふ說話は、草薙劍說話、「平家物語」劍の卷、支那の雷煥劍說話等の系統を引いたもので、讀本及び合卷本に多く出てゐる。本篇に近いものでは、「南總里見八犬傳」（別項）の村雨丸及び「異本楮生譚」（文化五年）の白龍丸がある。

【梗概】鎌倉馬場町に、福住屋傳介といふ富豪があつた。妻お妙との間に色絹といふ女兒を

伊藤左千夫（別項）の門人となり、同四十二年「アララギ」

泉　千樫

（別項）が東京に移つてから、左千夫を輔佐して編輯發行に努め、「アララギ」歌風の勃興に與つて力があつた。晩年同誌と疎くなり、大正十三年四月雜誌「日光」（別項）が發刊せらるるやその同人となつた。【著作】〔歌集〕川のほとり（別項）○屋上の土（昭和三年、改造社）その他、歌論集「隨緣抄」（昭和五年、改造社）があり、なほ「屋上の土」以後の歌稿あれど未刊。

輪廻の説と進化論とを結合して彼自身の哲學をつくり、そこから出發して蟲を愛したのであつた。【批評】彼は洞察と同情に富んだ文人であつた上、英文學に於ては有數の名文家であつた。その魅力のある文章は非常に多くの日本びいきを作つたと云はれる。その上、教師としても非凡であつた。彼の帝國大學に於ける講義筆記もその後出版された。書簡集も幾種か出版された。その以前彼が米國新聞に書いたものも出版された。傳記も多く出てゐる。そのすべては「小泉八雲全集」十八卷（第一書房出版）に收められてゐる。

【參考】年譜（小泉八雲全集）○小泉八雲研究　田部隆次（日本文學講座）　〔田部〕

小出粲（こいでつばら）　歌人　【幼名】新四郎　【號】梔園　【生歿】天保二年八月、江戸八丁堀石見藩邸に生れ、明治四十一年四月十五日東京に歿す。享年七十六。【法名】光明院蓮乘日照居士　【墓所】東京谷中善性寺　【閲歴】父は石見濱田藩の家臣で、松田三郎兵衞といひ、彼はその四男である。幼時、荒木寛畝に就いて畫を學んだが、中途で止めて藩學官諭社に入つた。學問よりも武術を好み、槍は寶藏院流の皆傳を受けた。歌道に志したのは、十六七歳の頃で、後、鳥原藩の瀨戸久敬について學んだ。二十歳の時、小出家の養子となり、大小姓から近習に拔かれ、後藩主に從つて濱田に赴いたが、間もなく長州と戰爭が起り、彼は幼君を守つて京都に上り、次いで江戸に下つて藩邸の家令となつた。明治八年、太政官十三等出仕を命ぜられ、同十年宮內省文學御用掛となり、十七年京都に轉勤、二十年東京に歸り、二十四年吉野京都行幸に供奉、ついで御歌所主事となつたが、晩年辭して御歌所寄人となり、勅任の待遇を賜はつた。人と爲り恬淡、洒落且つ多趣味多藝で、繪畫・彫刻・小細工の妙を得、圍碁は三段を打つた。

【著作】梔花初篇三卷（明治二十六年刊）○同續篇二卷（同三十一年刊）○同後篇二卷（同三十五年刊）○同拾遺二卷（同四十一年刊）○小出粲翁家集三卷（同四十二年刊）○幾久能志太幡○飛驒の山ふみ等。なほ現代短歌全集第二卷に抄出さる。【作風】自由輕快な歌ひぶりで、多少の新味を含み、當時の宮內省歌人の中で優れた詠み手であつた。

こゝちよきゑひのおもてを吹くときは西も東もただ春の風
うなゐ子も門の柳の影ふみて月になるまで遊ぶ春かな　〔相原〕

小絲佐七（こいとさしち）「絲櫻本町育」を見よ。

戀女房染分手綱（こひにようぼうそめわけたづな）「丹波與作待夜小室節」を見よ。

戀歌（こひうた）　和歌　【名稱】こひうた、又こひか　【性質】廣狹の二義がある。廣い意義では戀愛を扱つた歌をさすのであるが、狹い意味では「古今集」以下の勅撰集、その他私撰集・私家集に於ける戀愛の歌を集めた卷、もしくはその部分を指す。狹い意味の戀歌は、「萬葉集」の相聞歌（別項）と共通する性質を有するが、相聞歌は唱和の意味があり、內容的にも戀愛のみならず、親子・兄弟・夫婦の愛の歌をも含んでゐる意味で範圍が廣いのである。歌の分類としての戀歌は「古今集」では二十卷の中五卷、「後撰集」では二十卷の中六卷、「拾遺集」では二十卷の中五卷、「後拾遺集」では二十卷の中四卷、「金葉集」「詞花集」では十卷の中二卷、「千載集」では二十卷の中五卷、「新古今集」では二十卷の中五卷といふやうに、全體の約四分の一を占めてゐるのであつて、春夏秋冬を合せた自然の歌と共に中心となる題材をなすものである。而して質から言つても純情の豐かなものが多い。純粹抒情的題材の中で、死・別離の感情と戀愛感情とは、一方は離れるのを悲しむ情であり、一方は逢はうとする情である點に於て相違はあるが、その純粹熱烈なる點に共通するものがある。戀歌にも男性と女性とによつて相違があり、感情としても逢はうとする思慕の情を表現したのと、逢つた後の歡喜、もしくは寂寥を表現したのとによつて相違がある。又戀歌にも、精神的なものと、性欲的な官能的なものとの相違がある。原始時代の戀愛歌には精神的な愛と性慾的な愛とが一致してゐる場合が多い。和歌史中、戀愛歌人として注意すべきものは、柿本人麿・大伴家持等を初め、「萬葉集」の女歌人、平安時代の在原業平・和泉式部の如きがあり、その他各時代に多いが、純粹戀愛歌人はむしろ女流歌人に多い。（相聞參照）

戀重荷（こひのおもに）「戀慕物の謠曲」を見よ。

戀の花染（こひのはなぞめ）　人情本　三編九册　【作者】松亭金水　【畫工】初編貞齋泉晁。第二編歌川國直。第三編貞齋泉晁。【名稱】內題には「澄世新形戀の花曾女」とある。【刊行】初編天保三年、第二編同四年、第三編同五年。【諸本】人情本刊行會本所收　【題材】第三編自序にもいふ如く、お俊傳兵衞の情話を主材とし、猿廻し與次郎を點出してゐるなど、全く脚本「近頃河原の達引」（別項）に據つたもので、すべて江戸の世界に當ててあり、重寶八橋の鍔を雲龍丸の名劍としてある。又惡侍の白藤源作は「相撲取りには白藤源太」と俗曲に唄はれた力士白藤源太（初代元祿年中、二代安永年中。もてはやされたのは二代であらう）の名稱を假用したのである。名劍雲龍丸の、拔いて人を斬れば大雨到ると云ふ說話は、草薙劍說話、「平家物語」劍の卷、支那の雷煥劍說話等の系統を引いたもので、讀本及び合卷本に多く出てゐる。本篇に近いものでは、「南總里見八犬傳」（別項）の村雨丸及び「異本楮生譚」（文化五年）の白龍丸がある。

【梗概】鎌倉馬場町に、福住屋傳介といふ富豪があつた。妻お妙との間に色絹といふ女兒を儲けたが、その六歲の時傳介は歿したので、傳介の親友であつた石上某の孤兒傳兵衞の十歲になつたのを養子とし、行末は色絹に配せる積りでお妙は後家を守つてゐた。かくて色絹は十六歲となつたが、疱瘡のため容貌醜くなり、心ねぢけ妬み深かつたので、二十歲になつた傳兵衞はこれを厭ひ、いつかお妙の姪で、この家のかゝり人であるお俊に心を寄せた。或る正月の一日、傳兵衞は風の氣で寢てゐるお俊を見舞ひ、心のうちをほのめかしたけれど、許婚あるを知つてゐるお俊はこれを拒んだ。併し、色絹は早くも兩人の間に戀が成立してゐると思ひ、何かにつけ兩人に當つた。春狂言の評判がよいのでお妙母子とお俊は芝居見物に出かけた。棧敷の隣にゐた武士は白藤源作と云ふ浪人、お妙の知りあひである。やがて一緒に芝居茶屋に赴き酒宴を始めたが、開幕となり、娘等はもとの棧敷に歸つたが、後に殘つたお妙・源作は契を結ぶに至つた。色絹はこれを推し、抑へがたい情念は自分を嫌ふ傳兵衞を恨み、お俊につらかつたので、お俊は居たたまらず、家出をしてしまつた。○色絹は母に迫つて傳兵衞と婚禮の式を擧げたが、彼は打解けない。お妙は段々大膽

になり、源作を我が家に泊らせ、その縁で弟の民彌も出入するやうになつた。日夜酒宴を催すうち、二十四五歳の色白く賤しからぬ民彌の風俗に色絹は心惹かれて情を通ずるに至つた。〇傳兵衞は五月の或る日、友人の花遊と花水橋畔の粂川と云ふ料理屋に行くと、招いた唄女が意外にもお俊であつた。お俊は投身しようとした所を、俠客で藝者屋の主人である三ますや三八に助けられた。それで唄女となつたのである。或る時不意にお俊を訪れた伯母のお妙は傳兵衞と譯ある如く罵り、お俊を強ひて手切の誓文を書かせた。そしてこれを證據に傳兵衞を責めた。仲裁に入つたのは白藤源作で、以後色絹と仲睦しく暮すことを誓はせた。併し色絹は民彌と云ふ男があるので今度は却つて打解けず、或る時、民彌に手紙でこの事を相談すると、いつそ砒霜で傳兵衞を毒殺せよと云ふ返事が來た。その手紙が測らず傳兵衞の手に入つたので、事露見と悟つた色絹は民彌と諜し合はせ、盜み出した二十兩を懐中して駈落した。〇傳兵衞は長谷觀音參詣の歸途、お女郎金三郎と云ふ無頼漢に喧嘩を吹つかけられ、小脇差で相手の腹を刺して逃げ出す間もなく、俄に大雨が襲つて來たので軒下に佇んでゐると、それが三八の家であり、中でお俊に忠告する姉藝者お鶴の話聲が聞えたので、堪らずに這入つた。そして今までの事情を互に語り合ひ、二人は深く契るに至つた。或る日、白藤源作がお妙の許にゐると、寸八・門太の二人が訪れ、この家の傳兵衞に金三郎が殺された事を告げ、掛合を始めた。傳兵衞の所持する脇差は源作の所有であつた雲龍丸と云ふ寶劍で、五十兩の抵當に傳兵衞へ預けた品、それを取返すべく改めて二人に相談した。結局二人は、傳兵衞を殺し寶劍を奪ひ返せば報酬五十兩やると云ふ源作の證文を受取つて歸つた。〇傳兵衞は過つて人を殺した罪を怖れ、三ます屋三八の紹介で籃架の猿廻し與次郎の許へお俊と共に身を隱した。間もなく猿廻し與次郎實は星月家の家臣天野與次右衞門で、お俊の實兄であり、寸八は同じく戸倉寸左衞門、門太は金松門太夫である事が分つた。彼等は盜まれた家の重寶雲龍丸を探すために、姿を變してゐたのである。その盜賊は白藤兄弟なることが露見して捕はれ、傳兵衞の殺した金三郎は惡黨なる事がわかつてお咎めなく、傳兵衞はお俊と夫婦となり、お妙・色絹は尼となつて草庵に暮し、與次郎は唄女お鶴を妻に迎へてそれ〴〵繁昌したと云ふ。

【構想】全體が讀本或は合卷本に似て、筋を尊び、情調を描く迄に至つてゐない。人情本としては初期の面影を存してゐるものである。お俊が容易く傳兵衞の戀を受け容れぬ所に理智があつて、やゝ個性が認められる。【史的地位】「沈魚傳」(一名「鮪魚傳」)と共に松亭金水の人情本の處女作で、彼の三十八歳の時の作である。彼は天保二年に「二十四孝稚教訓」といふ合卷本の處女作を發表し、續いて翌三年に前述の二部と共に「時話今櫻駒」を發表した。彼は人情本作家として僅に文壇的地位を占め得た者であるから、本篇は彼の文壇に乘出した最初の出世作として、注目すべきものである。【影響】三亭春馬の「春秋二季種」(別項)もお俊傳兵衞を題材にしてあり、勿論「近頃河原の達引」に據つたらしいが、お俊が飽くまで理智的で、情に溺れぬ描寫は、本書に據つたものではないかと考へられる。〔山崎〕

戀紅染（こひのべにぞめ）　草雙紙、黑本　二册十二圖　【作者】和祥　【畫工】鳥居清滿　【名稱】京橋中橋の角書がある。京橋のおまん、中橋のおまんの戀爭ひに、童謠おまんが紅を搦ませた命名である。【刊行】寶曆十二年。後、安永三年に「京橋中橋於滿紅」と改題、青本に改裝して再摺刊行。

【梗概】〔上册〕江戸中橋の水茶屋龜屋のおまんと京橋の香具店京屋のおまんは共に石町の紅屋幸介と深い仲で互に嫉妬から悶着を起してゐたが、俠客釣鐘彌左衞門の計らひで、雙六の勝負に勝つた中橋おまんと幸介とを祝言させる。かねて中橋おまんに横戀慕の惡漢地車のたゞ七が祝言の席に暴れ込んで釣鐘に打擲される。〔下册〕たゞ七京橋おまんを嗾かして中橋おまんを殺させようとする。京橋、鬼女の姿して忍び入つたが、釣鐘に刺される。その首夜な〳〵京橋中橋の間から、紅粉で染めたやうな紅き雲に乘つて石町の方に飛びめぐる。よつて京橋中橋おまんが紅の童謠大に流行する。淺草の上人が祈禱すると、紅雲忽ち紫雲と變じ、おまんの姿が地藏菩薩の姿となつて示現する。

【解說】この作は、京橋二丁目笹紅粉問屋太郎治郎の廣告本である。紅粉を供物にして願かけする中橋お滿稻荷に因み、また古くから夕燒をあまが紅といふ事を混へて、おまんが紅と謠ふ童謠を藉りて趣向立をしたものである。いはば歌舞伎によく見る二人おまんの趣向である。後の改題は特にその義を重く示すためである。〔山口〕

戀八卦柱曆（こひはつけはしらごよみ）「大經師昔曆」を見よ。

戀飛脚大和往來（こひびきやくやまとわうらい）「冥途飛脚」を見よ。

戀姬書八丈（こひのしはちぢやう）　淨瑠璃　五段　お家物　【作者】松貫四・吉田角丸　【初演】安永四年九月二十五日江戸外記座　【諸本】世話淨瑠璃大全下卷所收　【題材】江戸新材木町なる材木商白子屋庄三郎の娘おくまが持參金つきの聟を嫌つて手代忠七と通じ、下女を敎唆して聟を殺さうと謀つたが成らず、遂に表沙汰となつておくま・忠七は獄門、父・母・下女等もそれ〴〵刑せられた(江戸眞砂六十帖廣本卷六)。事件は享保十二年十二月、大岡忠相の裁斷の下に落着した。時におくまは二十三歳であつた。引廻しの際は白無垢に黃八丈の小袖を重ね、襟に水晶の珠數をかけ法華經普門品を忽誦しつゝ馬上に縛されて行つた。爾來江戸の婦女子の間に黃八丈が忌み嫌はれたといふ(近世江都著聞集卷三・四)。この一件を萩原家のお家騷動に點じ、事件後四十八年を經て初めて脚色上演されたものである。

【梗概】〔初段〕(廓)　萩原家の當主藏人の舍弟千草之助は、吉原中扇屋の十六夜を請出すため奸臣秋月一角に唆かされてお家の寶勝閧の茶入を入質せんとするが、忠臣尾花才三郎に諫止される。一角は惡人を語らひ茶入と才三郎持參の手附金百兩を詐取する。〔二段〕(夢の場)「道行夢路の二ツ雁」死を決した千草之助と、その跡を追うて來た十六夜との振事。(屋敷)才三郎の父尾花六郎右衞門は、十六夜を現責めにして千草之助の行方を問うてゐる。十六夜に戀着せる一角は欺いて女を預り歸る。才三郎と腰元お駒は戀仲であるが、父六郎右衞門は考へる所あつて、不義露見すと詐り女を親元に下げた上、後室名月院の暇なるを利用し、六郎右衞門はその面前で伜才三郎を茶入の盜賊として折檻し、若殿の身代りとして汚名を甘受せよと諭す。樓に隱れてこの有樣を見下す千草之助の姿が水責めの手補に映るので、後室は六右衞門の苦衷を知り、忽ち盲ひたりと詐つて才三郎を見遁し、茶入詮議に立たせる。〔三段〕(祭り)一角は十六夜を追うて出て心に從はせようとし、己れの惡事を喋べる。才三郎は十六夜を逃がし一角に茶入を懇望するが却つて辱しめられるので、遂にこれを殺し自殺しようとする。父六郎右衞門來つて身代りに割腹する。〔四段〕(城木郎右衞門の義理恩愛の葛藤をからませて頗る煩雜である。後者の脚色はやゝ注意すべきで、既に人口に膾炙せる史實・實說に於ける女主人公の敗德行爲を淨瑠璃の定型に脚色し、而もそれを合理化せんがため、先づお駒の父庄兵衞を尾花家に恩義あるその舊臣とし、且つ庄兵衞夫妻の關係を手代上りと家つき娘といふ義理ある仲として、娘に對する兩親の態度を正當化してゐる。例へば庄兵衞の物語の條では、上述の立場からの政略結婚への辯護、

全下卷解說水谷不倒〇史實より觀た歌舞伎芝居　三田村鳶魚　〔近藤〕

向阿（かうあ）　學僧　【別名】諱は證賢、後に是心。號は淨華房。向阿は、念佛行者となつて自ら稱したもの、正しくは向阿彌陀佛。【生歿】文永三年に生れ、建武三年(一九九六)六月二日寂す。享年七十一　【閱歷】俗姓・鄕貫を詳かにしない。弘安二年、十四歲で園城寺に入つて得度し、天台の敎觀を學修し、正應元年二十三歲で發心し、如意寺の大門の柱に、嘆し、法悅を記述してゐる。三部自ら關聯があり、何れも近江淨嚴坊法印隆堯が、應永二十六年六月京都にて版行し、大に行はれた。註釋書としては、關通の「本願抄可理語」、的門の「西要鈔辨釋」、湛澄の「三部假名鈔諺註」等があり、又賀茂眞淵の「三部假名鈔言釋」は、言辭を註釋したものである。〔鷲尾〕

弘庵（こうあん）　漢文章家　【姓名】藤森大雅。字は淳風。通稱は恭助。【號】晚年、天山と改む。【生歿】寬政十一年三月十一日に生れ、文

喧嘩を吹つかけられ、小脇差で相手の腹を刺して逃げ出す間もなく、俄に大雨が襲つて來たので軒下に佇んでゐると、それが三八の家であり、中でお俊に忠告する姑藝者お鶴の話聲が聞えたので、堪らずに這入つた。そして今までの事情を互に語り合ひ、二人は深く契るに至つた。或る日、白藤源作がお妙の許にゐると、寸八・門太の二人が訪れ、この家の傳兵衞に金三郎が殺された事を告げ、掛合を始めた。傳兵衞の所持する脇差は源作の所有であつた雲龍丸と云ふ寶劍で、五十兩の抵當に傳兵衞へ預けた品、それを取返すべく改めて

人情本の處女作で、彼の三十八歳の時の作である。彼は天保二年に「二十四孝稚教訓」といふ合卷本の處女作を發表し、續いて翌三年に前述の二部と共に「時話今樓駒」を發表した。彼は人情本作家として僅に文壇的地位を占め得た者であるから、本篇は彼の文壇に乘出した最初の出世作として、注目すべきものである。【影響】三亭春馬の「春秋二季種」(別項)もお俊傳兵衞を題材にしてあり、勿論「近頃河原の達引」に據つたらしいが、お俊が飽くまで理智的で、情に溺れぬ描寫は、本書に據つたものではないかと考へられる。〔山崎〕

として汚名を甘受せよと諭す。樓に隱れてこの有樣を見下す千草之助の姿が水責めの手補に映るので、後室は六右衞門の苦衷を知り、忽ち盲ひたりと詐つて才三郎を見遁し、茶入詮議に立たせる。〔三段〕(祭り)一角は十六夜を追うて出て心に從はせようとし、已れの惡事を喋べる。才三郎は十六夜を逃がし一角に茶入を懇望するが却つて辱しめられるので、遂にこれを殺し自殺しようとする。父六郎右衞門來つて身代りに割腹する。〔四段〕(城木屋店先)腰元お駒の實家城木屋では、家運挽回のため今宵持參金附の聟を迎へる事となつてゐるが、娘は髮結ひに身を落した才三郎との逢瀨を續けてゐる。盲ひた父庄兵衞は才三郎に髮を結はせながら、お駒と二人にそれとなく意見する。又母親は娘に灸をすゑさせながら暗に家出をすゝめる。才三郎は聟喜藏が茶入の盜人なるを察し、お駒に探索を命ずる。お駒に横戀慕の番頭丈八のをかしみが色々ある。(奥座敷)お駒は喜藏を種々探るうち、床下に隱れた才三郎が發見され喜藏のために手籠に逢ふので、お駒は遂にこれを刺す。丈八が訴へに走るので才三郎は跡を追ふ。役人が來てお駒は捕へられる。〔五段〕(決斷所門前)下女を連れて差入れに來た母親は、お駒の死罪決定を察知して嘆く。番頭丈八が喜藏から預つた茶入を所持するのを知つて才三郎が追ふ。(鈴ケ森)刑場に着いたお駒は群集の前に罪を懺悔した後、まさに刑せられようとする所へ、千草之助と才三郎が丈八を引立て、お駒の赦免狀を持參するので、急轉直下目出度く解決する。

【構想】屋敷の段と城木屋の段とが全曲の山であるが、前者では後室の瞽や佯盲を用ひ、六

郎右衞門の義理恩愛の葛藤をからませて頗る煩雜である。後者の脚色はやゝ注意すべきで、既に人口に膾炙せる史實・實説に於ける女主人公の敗德行爲を淨瑠璃の定型に脚色し、而もそれを合理化せんがため、先づお駒の父庄兵衞を尾花家に恩義あるその舊臣とし、且つ庄兵衞夫妻の關係を手代上りと家つき娘といふ義理ある仲として、娘に對する兩親の態度を正當化してゐる。例へば庄兵衞の物語の條では、上述の立場からの政略結婚への辯護、娘の意志の尊重に對する消極的方便としての離婚手段の教唆があり、母親の述懷の條にも、娘に對して執拗に家出を暗示してゐる。封建社會の固定した道德に對するかゝる反抗が淨瑠璃に現れてゐる點は注意すべきである。事件後約半世紀を經過してゐるが、江戸の民衆にとつては所謂大岡裁きその他の巷説を通じて今なほ耳新しいこの事件に對し、曲中番頭丈八をして盛んに當セリフを以て事實を暗示せしめつゝ、一種の社會批評を試みてゐる點に、凡作ではあるが本曲の特異性が存在する。【影響】城木屋の段は最も歡迎せられ「そりや聞えませぬ才三さん」以下のお駒の口説きは、當時人口に膾炙し、周知の如く「闇の夜にお駒とお駒行き當り」などと言ふ川柳さへ現れた。本曲の後日物として同じ作者の「昔八丈後幕色揚瀨川染」(安永五年二月、江戸外記座)がある。歌舞伎へは同じく安永五年三月初めて移された(「戀娘昔八丈」江戸中村座)。その後、書替・綯交ぜ狂言の數は極めて多數に上り、所作淨瑠璃にも多く作られたが、今日なほ生命を有するものに默阿彌の「梅雨小袖昔八丈」(明治六年六月、中村座初演)がある。

【參考】傳奇作書續編上の卷　○世話淨瑠璃大

全下卷解説水谷不倒　○史實より觀たる歌舞伎芝居　三田村鳶魚

向阿(かうあ)　學僧　【別名】諱は證賢、後に是心。號は淨華房。向阿は、念佛行者となつて自ら稱したもの、正しくは向阿彌陀佛。【生歿】文永三年に生れ、建武三年(一九九六)六月二日寂す。享年七十一　【閲歷】俗姓・鄕貫を詳かにしない。弘安二年、十四歲で園城寺に入つて得度し、天台の教觀を學修し、正應元年二十三歲で發心し、如意寺の大門の柱に、「おもひたつ衣のいろはうすくともかへらじものよ墨染の袖」の一首をとゞめ、密かに園城寺の大衆の籍を脫し、山城の鞍馬山に入つて多聞天に祈願し、尋いで西山に入つて法然上人の念佛の法義を受け傳へた。當時法然上人の念佛の法義は、門流分出して、正邪を辨じない狀態であつた。乃ち向阿は、眞如堂に參籠して祈願し、念佛の正意を究明せんとして靈驗を感じ、後、嵯峨の清涼寺に參籠して祈願し、靈驗を感じて大に發悟し、「三部假名抄」(別項)を撰した。京都に出でて、先づ花開院を、後に淨華院を開き、念佛の道場とした(「眞如堂緣起」「三井續燈記」等による)。外に世に流布されてある異説もあるが、信ずるに足りない。

【著作】「歸命本願鈔」三卷、「西要鈔」二卷、「父子相迎」二卷あり、併稱して「三部假名抄」と云ひ、文章の優妙を以て知られてゐる。「歸命本願鈔」は、京都の眞如堂に參籠のことより起り、靈驗を感じて法然上人の一流の法義を聽受したことを記述し、「西要鈔」は、嵯峨の清涼寺に參籠のことから、老若男女の問答より益々淨土往生の要諦を明辨したことを記述し、「父子相迎」は、阿彌陀佛の慈父の教護を讃

嘆し、法悅を記述してゐる。三部自ら關聯があり、何れも近江淨嚴坊法印隆堯が、應永二十六年六月京都にて版行し、大に行はれた。註釋書としては、關通の「本願抄可理語」、的門の「西要鈔辨釋」、湛澄の「三部假名鈔諺註」等があり、又賀茂眞淵の「三部假名鈔言釋」は、言辭を註釋したものである。〔鷲尾〕

弘庵(こうあん)　漢文章家　【姓名】藤森大雅。字は淳風。通稱は恭助。【號】晩年、天山と改む。【生歿】寛政十一年三月十一日に生れ、文久二年(一八五二)十月八日歿す。享年六十四。【閲歷】長野豐山に從つて學び、詩文を善くした。土浦侯土屋氏延いて賓師となし、委ねるに學政を以てした。弘化の初め辭して家を江戸に移し、塾を開いて教授した。嘉永六年米艦來つて互市を乞うた時、憤激して「海防備論」二卷を著はし、又「芻言」六卷を水戸侯德川齊昭に獻じた。安政戊午の難に坐し、獄に下されたが、赦されて、田園に遁れて世を去つた。その文は法度に嚴であつて流暢淵雅、その詩は尤も五言古詩に長じてゐる。【著作】前記のほか、如不及齋文抄三卷、春雨樓詩抄九卷。〔佐久〕

校異本萬葉集(かういほんまんえふしふ)　和歌　二十册　【校訂者】橘經亮・藤原以文　【刊行】文化二年　【解説】釋惠岳の著はした「旁註本萬葉集」の傍註を削り、その上欄に諸本との校異を加へて刊行したものである。旁註本の版木を利用したため、往々旁註の削り殘りの存せるものがある。而してその旁註本は、「寶永版本萬葉集」に多少の修正を加へて、本文としたものであるから、寶永六年の出雲寺和泉掾の奥付も、旁註本を通して、本書にも存してゐる。旁註本の旁註は、僻説多く取る所少いの

人情本の處女作で、彼の三十八歲の時の作である。彼は天保二年に「二十四孝稚教訓」といふ合卷本の處女作を發表し、續いて翌三年に前述の二部と共に「時話今樓駒」を發表した。彼は人情本作家として僅に文壇的地位を占め得た者であるから、本篇は彼の文壇に乘出した最初の出世作として、注目すべきものである。【影響】三亭春馬の「春秋二季種」(別項)もお俊傳兵衞を題材にしてあり、勿論「近頃河原の達引」に據つたらしいが、お俊が飽くまで理智的で、情に溺れぬ描寫は、本書に據つたものではないかと考へられる。〔山崎〕

なつて示現する。

【解説】この作は、京橋二丁目笹紅粉問屋太郎治郎の廣告本である。紅粉を供物にして願かけする中橋お滿稻荷に因み、また古くから夕燒をあまが紅といふ事を混へて、おまんが紅と謠ふ童謠を藉りて趣向立をしたものである。いはば歌舞伎によく見る二人おまんの趣向である。後の改題は特にその義を重く示すためである。〔山口〕

戀八卦柱曆(こひはつけはしらごよみ)　「大經師昔曆」を見よ。

戀飛脚大和往來(こひびきやくやまとわらいい)　「冥途飛脚」を見よ。

の茶入を入質せんとするが、忠臣尾花才三郎に諫止される。一角は惡人を語らひ茶入と才三郎持參の手附金百兩を詐取する。〔二段〕(夢の場)「道行夢路の二ツ雁」死を決した千草之助と、その跡を追うて來た十六夜との振事。(屋敷)才三郎の父尾花六郎右衞門は、十六夜を現責めにして千草之助の行方を問うてゐる。十六夜に戀着せる一角は欺いて女を預り歸る。才三郎と腰元お駒は戀仲であるが、父六郎右衞門は考へる所あつて、不義露見すと詐り女を親元に下げた上、後室名月院の瞽なるを利用し、六郎右衞門はその面前で伴才三郎を茶入の盜賊として折檻し、若殿の身代り

で、かくは改訂を加へて出版したものと思はれる。元暦校本その他の諸本を以て校異を上層に記したと云ふ橘經亮の奥書、及びその校合は、業を卒へなかつたので、その志を繼いで自ら校したと云ふ藤原以文の文化二年の奥書がある。故に經亮が校合したのは卷十五までで、卷十六以下は校本の數が少いから、以文の校訂であらうと「萬葉集書目提要」に述べてゐる。校合に用ひた本は、元暦校本・大須本・異本・活本・古寫本・官本・幽齋本・中院本・二條院御本・狩谷本等から、「拾穗抄」又は「夫木集」「古今六帖」等に及び、「代匠記」等からの孫引と思はれる諸本もあるが、とにかく、本書がかく多數の本で校合を加へてゐることは注意すべきである。〔佐佐木〕

皇胤紹運錄　「本朝皇胤紹運錄」を見よ。

耕雨　俳人【姓名】幼名を榮三郎と云ひ、宗家に入婿して服部治左衞門と稱したが、明治十九年隱居し、耕雨を以て實名とした。【生歿】嘉永四年、下總海上郡嚶鳴村に生れ、大正六年二月十四日歿す。享年六十七。【閲歴】實父泰山、養父柏園、姉の舅美靜、何れも俳諧を能くしたので、幼時からその感化を受けた。明治二十四年指頭庵四世を繼ぎ、二十九年「俳諧評論」を創刊した。四十四年鄕里千葉縣に歸り、指頭庵を息子畊石（別項）に讓つて、四世香樹園を稱した。舊派宗匠中の有名な論客で、春秋庵幹雄はその論敵であつた。【著作】俳諧探海燈○俳諧樞機活法○芭蕉翁選吟私見○俳諧叙栞評註○奥の細道評釋等。〔伊藤〕

項羽　「唐事物の謠曲」を見よ。

項羽と劉邦　戲曲　七幕十七場【作者】長與善郎【發表】大正四年秋より翌年四月まで、雜誌「白樺」に連載。【刊行】大正五年四月、新潮社。その後、再三改訂して現代戲曲全集第九及び日本戲曲全集現代篇第四十四卷に所收。【梗概】〔序幕〕は、後の韓信の妻、殷桃娘の父會稽の太守が項羽に殺される處から筆を起し、續いて項羽と虞姫の結婚、咸陽攻擊出發前夜の項羽と、叔父項梁との內部的軋轢を叙し、〔二幕〕は、桃娘の項羽に對する復仇心を利用する劉邦の妻呂妃の陰謀を說き、その暗示をうけた桃娘が、遂に項梁の寢室に於て、處女を犧牲にして刺客の役を果す件。〔三幕〕は、筆を移して鴻門の會の描寫となる。その裏で、韓信と桃娘の再會、愛を結ぶ場面を挿話風に取入れてゐる。〔四幕〕以降は、凋落につぐに凋落の項羽の失墜の運命を描き、その間、虞姫の苦衷、新興の劉邦・蕭何・樊噲・韓信・張良等の團結する力。劉邦の自己批判。項羽が范增の密計を入れて劉邦の妻子を人質にとる件。續いて韓信の陣に於ける樊噲戰死の悲報等の多角的の場景を織り交へ、〔五幕〕には、呂妃と虞姫と桃娘の三女性の中に入り交る凄絕なる權勢と嫉妬と復仇の鬪爭の場面を展開し、遂に虞姫は呂妃のために鞭打たれ、一房に幽閉されるが、李左車によつて、辛くもそこを脫出し、再び項羽の前に罪を謝しながら自刄する有名な四面楚歌の聲の場面に移る。而して大詰は烏江のほとり、さしも荒れ狂ひつづけた項羽も、遂に張良と曹參のために江東一縷の望も消えてこの河岸に絕命する。劉邦は、漢王萬歲の喊聲の中で、項羽を虞姫の遺骸と共に鄭重に葬ることを命じて、わが友わが恩人である項羽の靈に接吻し、君の首を打つたこの禍の劍を最後の戰場に葬らうと云つて、劍を烏江へ投ずるところで、この一大雄篇の幕は閉ぢられる。【解說】項羽と劉邦の盛衰・鬪爭の大運命を主題とし、材料そのものが既に戲曲のために出來てゐるやうな興味深い劇詩である。必ずしも史實に卽し切つてはゐないで、作者の自由な取扱ひがこの物語を一層潑剌と興味深くさせてゐるが、要するにこの豐富な材料によつて出來る限り、作者自身を活かす機會をつかみ、渾然たる藝術境を釀し出したところは、上乘の史劇と云ふべきであらう。作者の代表的の作で、改版ごとに訂正補修數回に及び、多くの創作時日を要した大作である。作者は「自分は或る處では一行の臺詞に二ケ月以上を費し、或る箇所は二十遍以上も書き直した」と云つてゐる。又新潮社本は、河野通勢氏の挿畫によつて、一層內容を多彩深刻ならしめた。作者自らも「此の本の畫は勿論挿繪でない。獨立した立派な畫集である。二人の文と畫の合著・合唱である。自分は此の記念の合著を名譽に思つてゐる。」と、その序の中に書いてゐる。新史劇と稱するもので、支那の歷史に材料をとるものは多いが、概ね粗雜杜撰であるに比して、これは精緻なる用意の下に、一字一句練磨の餘に成り、完成せる藝術となつたのである。もう一つの特徵は、かゝる史劇にはよく作者の寓意が露骨すぎ、或は現代の意識への結びつけが、過激に走るものであるのに、これはその點を微妙な一線で巧みに救つてゐて、單なる報道的歷史劇に終らず、內部に理想主義の香をこめたところにも、作者の敏感な創作意識を窺ふことは出來る。新しくして銳く、緻密にして雄大なる古典として稱すべきであらう。〔舟橋〕

耕雲　「長親」を見よ。

耕雲口傳　歌論書　一卷【著者】耕雲（花山院藤原長親）【成立】明かではないが、「應永十あまり五の年やよひの末つかた云々」とあつて、この時尋ねてきた僧侶に語つたことになつてゐるから、この頃に成つたものであらう。【諸本】古語深祕抄及び續群書類從第四六五に所收【組織・內容】耕雲が僧に向つて歌に就いて語つたことを記したとある。初めに耕雲の生涯を述べて、嘗て「新葉集」（別項）の撰定を任ぜられた事もあつたが、世の亂れに雲水漂泊の身となつて果さなかつたと云ひ、また和歌は、日本の陀羅尼であるといふ古人の言を引いて、宗敎的な立場を說いてゐる。なほ細論として、歌を詠ずる時心を本とすべき事、詞をみがくべき事、本歌取樣之事、當座の歌よむ時可心得事、兼日出題の時可見事、初學の人古歌の體におきて意得分べき事を說いてゐる。卽ち心を主としてはゐるが、同時に、詞をもゆるがせにすべきではないことを主張するのである。さうして幽玄の境地を中心とするのであつて、その點を思索的に說いてゐるのである。【價値】耕雲は「源氏物語」研究にも一見識を示して居り、博識であつたらしいが、同時に內省的・沈潛的な所があつた。系統としては南朝方であるから二條家の流れを汲んでゐるが、所謂平淡味の立場よりも複雜な境地を求めてゐたらしい。その意味に於て正徹（別項）等に近い所があるやうである。かくの如き耕雲の獨創的見解の見られる唯一の書として、歌論史上注意すべきものである上に、相當に組織的であり、且つ文學的表現をなしてゐる所に、多くの歌論書の中でも、傑出したものと言ひ得る。〔久松〕

耕雲千首　歌集【作者】花山院長親【名稱】別名「詠千首」、或は「詠千首和歌」と云ふ。圖書寮本や內閣文庫本一本には、內題に「詠千首和歌」とあるのみであるが、內閣文庫本別本は、外題に、「詠千首一名耕雲千首」と記されてゐる。彰考館本の「長親千首」といふのも同一書である。【成立】佐佐木信綱氏藏本（寫本四卷）の奥書により知られる通り、天授二年、內裏千首和歌の催あり、長親も詠進の勅命「立春朝　霞さへきのふをよそと立そめておくる朝に春ぞきにける」である。【備考】本書の奥書は、宗良親王千首の跋と等しく、長慶天皇御在位說決定にあたり、有力の資料となつたものである。〔齋藤（淸）〕

廣益書籍目錄大全　「書籍目錄」を見よ。

甲驛新話　洒落本　一册【作者】風鈴山人（大田蜀山の別號）【畫工】勝川春金七は三澤を見立てた。金七は綱木を評して「成程、綱木とやらは、わつち共が齒には合ひやせん。」と云ふと、谷粹は「あゝいふ奴を買ひこなすと面白れえもんだよ。」などといふ。やがて二人とも床に入る。金七は三澤に好かれ、面白可笑しく話す。隣座敷では折江の馴染客孫右衞門といふ村一番の金持、地頭樣の御用で江戸に來た者、村芝居で勘平をした時、隣村の庄屋の娘に惚れられた事など語る。結局折江に着物二枚、小遣二兩の無心を聽いてやる。二階座敷では谷粹、相方の綱木の待遇最も信ずべく、それによつて生年を逆算すれば、永祿元年となる。【法名】了寂院光悅日豫居士【墓所】京都府愛宕郡鷹峰光悅寺【家系】父光二は片岡家の出、本阿彌光心の養子となり、その長女妙秀を娶つたが、後、光心に實子光刹が生れるに及んで別家した。光悅は四人兄弟の長男として京都に生れた。光悅又子なきため、同じく片岡家より光瑳を迎へて嗣子とした。孫に光甫がある。【閲歴】父の歿後、その跡をついで、加賀侯前田家の食祿二百石を頂したが、後元和元年、德川家康に

の中でも、傑出したものと言ひ得る。〔久松〕

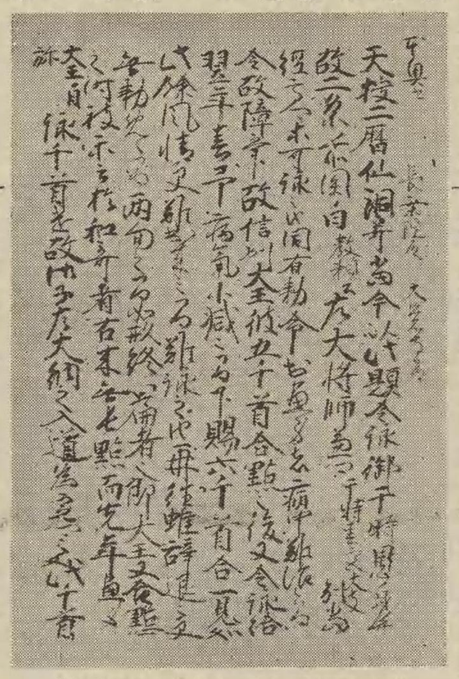
耕雲千首　かううんせんしゆ　歌集　【作者】花山院長親【名稱】別名「詠千首」、或は「詠千首和歌」と云ふ。圖書寮本や内閣文庫本一本には、内題に「詠千首和歌」とあるのみであるが、内閣文庫本別本は、外題に、「詠千首一名耕雲千首」と記されてゐる。彰考館本の「長親千首」といふのも同一書である。【成立】佐佐木信綱氏藏本（寫本四卷）の奥書により知られる通り、天授二年、内裏千首和歌の催あり、長親も詠進の勅命を受けたが、折しも病褥にあつたので、一應辭退した。然るに翌年小康を得、更に詠進の事を尊良親王よりお勸めがあつたので、曾て二條爲定の許に遣はした千首の舊稿を新しく校正して奉つたのが、即ちこの耕雲千首で、平瀨本の奥書「四十年前所詠」と云ふ事實とほぼ合致してゐる。【諸本】佐佐木信綱氏藏本、元中六年正月、十三ケ年前を追憶しての奥書及び應永二十二年九月二十九日の追記がある。平瀨三七雄氏藏本（寫本四卷）奥書に、「僻案愚點二百七首此千首者愚僧四十年前所詠也點者信州大王御點也此内長點卅六首也應永廿五年春依台命、書寫之者也　畊雲山人明魏」とある。圖書寮本（寫本一卷）文明四年園城寺村玉泉坊の書寫なることの奥書あり。内閣文庫本（寫本二本あれど、何れも二卷二冊）近世の寫であるが、何れもその據所を明かにしてゐない。なほ續群書類從本（三七八の中）がある。【組織・内容】春二百首、夏百首、秋二百首、冬百首、戀二百首、雜二百首。卷頭歌は、

「立春朝　霞さへきのふをよそと立そめておくる朝に春ぞきにける」である。

【備考】本書の奥書は、宗良親王千首の跋と等しく、長慶天皇御在位説決定にあたり、有力の資料となつたものである。〔齋藤（清）〕

廣益書籍目錄大全　くわうえきしよじやくもくろくたいぜん　「書籍目錄」を見よ。

甲驛新話　かふえきしんわ　洒落本　一册　【作者】風鈴山人（大田蜀山の別號）【畫工】勝川春



耕雲千首奥書（佐佐木信綱氏藏）

章【名稱】甲驛は甲州街道の宿場、即ち新宿の意、全體は支那の書名を摸したのである。後編を「粹町甲閨」（別項）と云ふ。【刊行】安永四年【題材】農夫新田の孫右衞門が、村の幅利きたる事を自慢する點が篇中の山である。上總屋が新築された事、和泉屋に大見世と小見世とある事、大宗寺の庭の大きい事など、皆寫實らしく新宿通の作者の得意とするところであらう。

【梗概】大木戸の塵は水賣の雫にしめり、天龍寺の鐘は蜩の聲に響く夕暮、御家人らしき谷粹と町人の息子金七の二人、坂見屋といふ茶屋に這入る。金七は新宿は始めてである。相談の結果、紀の國屋に定まり、谷粹は綱木、金七は三澤を見立てた。金七は綱木を評して「成程、綱木とやらは、わつち共が齒には合ひやせん。」と云ふと、谷粹は「あゝいふ奴を買ひこなすと面白れえもんだよ。」などといふ。やがて二人とも床に入る。金七は三澤に好かれ、面白可笑しく話す。隣座敷では折江の馴染客孫右衞門といふ村一番の金持、地頭樣の御用で江戸に來た者、村芝居で勘平をした時、隣村の庄屋の娘に惚れられた事など語る。結局折江に着物二枚、小遣二兩の無心を聽いてやる。二階座敷では谷粹、相方の綱木の待遇が惡いと怒り出し、綱木も負けては居ず、次第に大聲になるのを聞きつけ、金七・三澤なだめに來る。折柄茶屋の男五郎八迎ひに來る。

【構想】氣障な半可通が振られ、おとなしい息子が厚遇されると云ふ典型的な洒落本であるが、その中に馬士の漫談と、百姓客孫右衞門の無邪氣な自慢話とが點綴せられ、多少鄕土的特色を發揮してゐる。但しこの人物も同じ作者の「世説新語茶」（別項）中の國侍、「變通輕井茶話」（別項）中の百姓彌五左衞門と同じ型である。【價値】山の手に住む同じ狂歌師仲間は、新宿に興味をもつたと見え、この地を題材とした作品が多い。例へば、朱樂菅江の「賣花新驛」（別項）、平秩東作の「驛舍三友」（別項）等があるが、本書は新宿を題材とせる最初の書であらう。

光悅　くわえつ　美術工藝家　【姓名】〔山崎〕本阿彌光悅。幼名、次郎三郎【號】自德齋・德友齋・太虛庵【生歿】生年未詳。寛永十四年（一二九七）二月三日歿。享年に就いては、七十歳（古畫備考）、八十歳（續近世畸人傳）、八十一歳（本阿彌系圖）、八十二歳（賑ひ草）等あるが、光悅寺過去帳、本阿彌行狀記等よりして、八十歳説最も信ずべく、それによつて生年を逆算すれば、永祿元年となる。【法名】了寂院光悅日豫居士【墓所】京都府愛宕郡鷹峰光悅寺【家系】父光二は片岡家の出、本阿彌光心の養子となり、その長女妙秀を娶つたが、後、光心に實子光刹が生れるに及んで別家した。光悅は四人兄弟の長男として京都に生れた。光悅又子なきため、同じく片岡家より光瑳を迎へて嗣子とした。孫に光甫がある。【閲歷】父の歿後、その跡をついで、加賀侯前田家の食祿二百石を領したが、後元和元年、德川家康に京都二條城に召されて洛北鷹峰の地を與へられた。光悅は獨力その荒蕪の地を開き、邸宅を營んで一門眷族及び配下の諸工人と共に移り住み、所謂光悅町が出現した。光悅は又鷹峰に鑛坑五ケ所を鑿つたりしたが、晩年太虛庵を建てて閑居し、庵側に佛堂を建て、本法寺より日達法師を請じて開祖とした。光悅歿して後、その遺跡を太虛山光悅寺と稱し、一族の菩提寺と定めた。

【人物・業績】光悅はその家道豐かで、性質恬淡、自ら奉ずる事薄く、甚だ獨創的で識見も高かつた。又頗る風流の人であつたが、匠氣なく、その人物極めて高雅であつた。交友に當時の貴顯紳商多く、家康・前田利家・同利常・同利長に殊遇された外、近衞信尹・同信尋・烏丸光廣・小堀政一・林羅山・寂照院日乾・心性院日遠・古田織部匠・織田有樂齋・千宗旦・佐野紹益・松花堂昭乘・樂道入・角倉素庵・茶屋四郎次郎等と交り、殊に京都所司代板倉勝重・同重宗と親交あり、鷹峰を家康より與へられたのも勝重の斡旋によるものらしく、勝重歿するに及んで、光悅は庵の側に塔を建てて弔つた程である。光悅は家業たる刀劍の鑑定・磨礪・淨

【閲歷】實父泰山、養父柏園、姉の舅美靜、何れも俳諧を能くしたので、幼時からその感化を受けた。明治二十四年指頭庵四世を繼ぎ、二十九年「俳諧評論」を創刊した。四十四年鄕里千葉縣に歸り、指頭庵を息子畊石（別項）に讓つて、四世香樹園を稱した。舊派宗匠中の有名な論客で、春秋庵幹雄はその論敵であつた。【著作】俳諧探海燈　○俳諧樞機活法　○芭蕉翁選吟私見　○俳諧寂栞評註　○奥の細道評釋等。〔伊藤〕

項羽　かう　「唐事物の諧曲」を見よ。

項羽と劉邦　かううとりうはう　戲曲　七幕十七

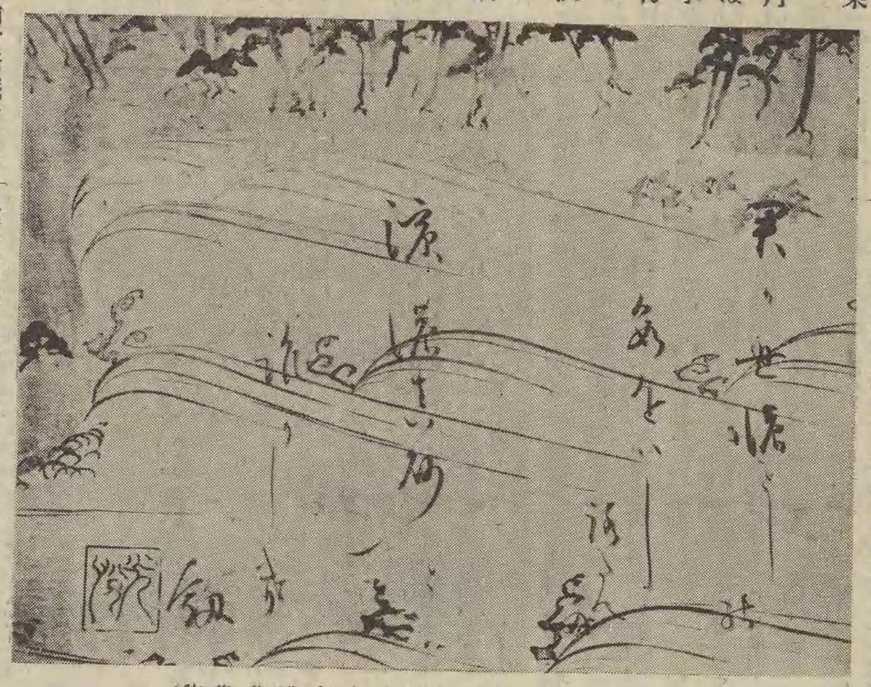
呂妃と虞姫と桃娘の三女性の中に入り交る凄絶なる權勢と嫉妬と復仇の鬪爭の場面を展開し、遂に虞姫は呂妃のために鞭打たれ、一房に幽閉されるが、李左車によつて、辛くもそこを脱出し、再び項羽の前に罪を謝しながら自刄する有名な四面楚歌の聲の場面に移る。而して大詰は烏江のほとり、さしも荒れ狂ひつづけた項羽も、遂に張良と曹參のために江東一縷の望も消えてこの河岸に絶命する。劉邦は、漢王萬歳の喊聲の中で、項羽を虞姫の遺骸と共に鄭重に葬ることを命じて、わが友わが恩人である項羽の靈に接吻し、君の首をしてゐる。新史劇と稱するもので、支那の歴史に材料をとるものは多いが、概ね粗雜杜撰であるに比して、これは精緻なる用意の下に、一字一句練磨の餘に成り、完成せる藝術となつたのである。もう一つの特徵は、かゝる史劇にはよく作者の寓意が露骨すぎ、或は現代の意識への結びつけが、過激に走るものであるのに、これはその點を微妙な一線で巧みに救つてゐて、單なる報道的歴史劇に終らず、内部に理想主義の香をこめたところにも、作者の敏感な創作意識を窺ふことは出來る。新しくして鋭く、緻密にして雄大なる古典としての境地を中心とするのであつて、その點を思索的に説いてゐるのである。【價値】耕雲は「源氏物語」研究にも一見識を示して居り、博識であつたらしいが、同時に内省的・沈潛的な所があつた。系統としては南朝方であるから二條家の流れを汲んでゐるが、所謂平淡味の立場よりも複雜な境地を求めてゐたらしい。その意味に於て正徹（別項）等に近い所があるやうである。かくの如き耕雲の獨創的見解の見られる唯一の書として、歌論史上注意すべきものである上に、相當に組織的であり、且つ文學的表現をなしてゐる所に、多くの歌論書

拭の三事に長じてゐたのは勿論であるが、その中でも、至難とされてゐる淨拭に巧みであり、その他美術工藝に優れた才能を持つてゐた。書は青蓮院宮尊朝法親王に入木道の傳授を受けたと云はれるが、空海・道風の風を慕つて一流を創め、光悅流と稱せられる。當時、三藐院近衞信尹・松花堂昭乘と並んで三筆と稱せられた。書道の弟子には、烏丸光廣・角倉素庵・小島宗眞等最も著はれてゐる。畫は海北友松に學び、後、土佐風を交へて獨特の境地を開いたが、非凡なる意匠家と云ふべく、弟子に俵屋宗達、孫の空中齋光甫等があり、尾形光琳・尾形乾山・酒井抱一等も光悅の風を學んだ。また光悅はかやうな能畫能書の素養を以て漆筆をふるひ、巧に鉛・錫・靑貝を配して、蒔繪に一新生面を開いた。殊に從來下繪に支那繪のみ用ひたのが、光悅より大和繪をも下繪とするに至り、光甫・光琳・乾山等の名手をその門流に出した。そのほか、彫刻・製陶にも優れ、又茶人としても一家を成してゐた。又光悅は角倉素庵（別項）と相謀つて國文學書を印行したが、光悅は自筆を版下とし、意匠を凝らして美麗な裝幀を加へたので、世に光悅本と稱せられる（刊本參照）。光悅本は我が國刊本史上極めて重要なもので、後世に及ぼした影響少くないが、光悅はその他美術工藝史上に於ても偉大な足跡を印した。

【參考】光悅 光悅會編 ○本阿彌光悅 橫井時冬（「皇典講究所講演」一四一、又「雲窓襍藏」所收）○嵯峨本考 和田維四郎（岩淵）

光悅本（くわうえつぼん）「刊本」を見よ。

光悅流（くわうえつりう） 書道 【解說】本阿彌光



光悅筆蹟（新古今和歌集卷物）

或は平安三筆と稱せられた。その雄勁流麗なる筆致は見事なる下繪と共に、所謂書畫一致の好例として、今に最も珍重せらるゝところである。名高いものでは牧田環氏所藏の「新古今集」の卷物などがある。光悅の門人中特筆すべきは角倉素庵（素庵參照）である。素庵は父了意に繼いで海外貿易を營み、その富を利用して所謂嵯峨本或は角倉本の出版をやつて有名であるが、書に於ても、師風に基づき角倉流・與一流または嵯峨樣などと稱せらるゝ一流を出して行はれ、殊に謠曲本には光悅の書と謂はれるもので、素庵の筆に成れるものがあるとのことである。（光悅・書道參照） 〔伊木〕

光海（くわうかい） 神道家 【姓名】跡部良顯。通稱は宮內、光海はその號である。【生歿】萬治二年生れ、享保十四年（一三八九）正月十七日歿す。享年七十一。【閱歷】幕府幾下の家に生れ、七歲の時、父から「大學」を與へられ「この書を熟讀するにあらずんば人と爲る能はず」と敎へられて、爾來これを讀まない日はなかつたといふ。長じて澁川春海の門に入り、神道を學び、後、佐藤直方・淺見安正と交り、儒學を研究し、遂に垂加神道（別項）を唱へ、その友伴部安崇等と共に、山崎闇齋の晚年の志を紹述したのである。【著作】神學發明二卷○三種神器集說一卷○中臣祓淸浮草一卷○玉鉾道艸一卷○三種神器傳抄一卷○神代講談書五卷○國號傳一卷○正神邪神論一卷○安座傳一卷○土金祕訣傳一卷○神學承傳記一卷○神道生死之說一卷○霜夜學談一卷等【學風】光海の學風は、闇齋の說を紹述せるものであるが、しかし亦彼が一家の見も少くない。彼は「神道者以ニ天地一爲ニ書籍一以ニ日月一爲ニ證明一」とあるの言を解し、その神道に關する根本的意見を示してゐる。曰く、「天照大神五穀魚類を以て、人の食とし、蠶を以て糸を取り衣服とし、牛馬を以て農業の助とし、人力を養ひ給ひ、天神祖神を祭り給ひ、三種の神器を以て天地の理を統べ括りて、百王不易の御璽となし玉ひ、天下を治め四民の敎を垂玉ふ。」と。かくて彼はこの道を行ふは、禮樂を調和するに在りとした。當時儒のみならず神道に於ても理に偏し情に疎であつたのは、一般の通弊であつた。光海、よくこの通弊を看破し、盛んに神學の必要を說いたのは一見識である。ただ科學的知識の幼稚であつたために、その說やゝもすれば、附會に陷つたのは亦已むを得ないところである。 〔田中（義）〕

號外（ごがい） 小說 【作者】國木田獨步 【發表】明治三十九年八月「新古文林」 【刊行】明治四十年五月「濤聲」所載。國木田獨步全集第二卷・現代日本文學全集第十五編所收。【梗概】明治三十九年、日露戰爭が終つてしまつた後のこと、銀座何丁目かの狹い路地である正宗ホールに集まる定連は「加と男」と呼ばるる男爵加藤、彫刻家中倉、滿谷と呼ぶ人物などである。そこでその加藤男爵の胸像を刻むとしたら何と題すべきかが問題となつて論じ合つた。男爵自身がかれこれと考へた末に「號外」とすべきだといふ事になる。實際、當代の人々、特に我が「加と男」に至つては新聞の號外を持つてそのホールへ來り、定連を前にして讀むのが得意でもあり、また熱意をこめた仕事でもあつた。「敵艦見ゆとの警報に接し」などの名文句は、全く彼の諳誦し得るものであつた。併し今はさういつた號外も全く出なくなつて、その鈴の音は聞かれなくなつた。銀座の市街までがつかりしてゐるやうで

紙の中にも時に俳優の似顏風に描いたのはあるが、合卷のやうに眞面目に似せようとしたのは殆ど無かつた。その似顏の畫風は前述の京傳作「於六櫛木曾仇討」に始まると山東京山の「蜘蛛の絲卷」（別項）に見えるが、これはまだ黃表紙風の貼外題にそれらしい風情を見せてゐるに過ぎない。事實は翌文化五年の京傳の作「岩井櫛粂野仇討」（別項）であらう。中の人物は粂野三郎・幸四郎に當てて描いてある。畫工は「於六櫛」を描ける初代豐國であつた。合卷の作者は柳亭種彥を第一の代表者とし、山東京傳・同京山・曲亭馬琴・十返舍一九・代亭

本が、契沖の弟子今井似閑の手澤本で、本書の原形に最も近いものであるらしい。他の本は、この上賀茂本と殆ど一致した內容であるが、水戶彰考館所藏本は「古萬葉集」と題して、內容も「厚顏抄」に無い說を含んでゐるし、その體裁も、本文を假名書きにしてゐる等、本書と異つてゐるが、その內容の大體は矢張り同一で、本書に少しく補說した寧ろ本書の異本と見るべきものである。又契沖全集に收められ刊行されてゐる。

【組織・內容】上中下三卷のうち上中二卷には「書記」の歌謠を、下卷には「書記」の歌

に誤りもあるが、比較的正確、語々の意味を解くだけでなく、語法や音韻の方にまで論及してゐる事、何れも契沖を俟つて始めて成就し得る特色と云ふべきである。

【參考】日本歌撰上古之卷 佐佐木信綱 ○契沖傳 久松潛一（契沖全集九） 〔森本〕

後期印象派（こうきいんしやうは） 藝術論 〔英〕 Post-Impressionism 【解說】近代佛蘭西に於て、印象派乃至新印象派（印象主義參照）の後を繼いで、それ等の色彩・表現の影響を受けながらも、その作畫の態度に於て全く反對な態

る。俗には、「花山院」或は「弘徽殿女御（こきでんにようご）」とも呼ばれたらしいとの說もある。【興行】正德二年五月五日初日、竹本座 【題材】寬文十三年版「花山院ささきあらそひ」（別項）の改作である。外題の鵜羽產家が「うはなりうち」とも讀める所に作者の得意も窺はれる。【諸本】七行九十丁本、十一行三十二丁本。近松戲曲集（國民文庫）中卷・近松門左衞門全集第六・近松全集第九卷等所收。

【梗概】〔初段〕（鴨川堤）花山院の御代、弘徽殿・藤壺の兩女御が等しく御懷姙により、弘徽

紙の中にも時に俳優の似顔風に描いたのはあるが、合卷のやうに眞面目に似せようとしたのは殆ど無かつた。その似顔の畫風は前述の京傳作「於六櫛木會仇討」に始まると山東京山の「蜘蛛の絲卷」（別項）に見えるが、これはまだ黄表紙風の貼外題にそれらしい風情を見せてゐるに過ぎない。事實は翌文化五年の京傳の作「岩井櫛粂野仇討」（別項）であらう。中の人物は粂野三郎・幸四郎に當てて描いてある。畫工は「於六櫛」を描ける初代豐國であつた。合卷の作者は柳亭種彦を第一の代表者とし、山東京傳・同京山・曲亭馬琴・十返舍一九・式亭三馬その他甚だ多い。（草雙紙參照）　〔山口〕

厚顔抄（こうがんせう）　註釋書　三卷【著者】契沖【成立】元祿四年八月成る。【由來】「萬葉代匠記」と同じく、水戸光圀の命によつて編纂されたもので、「古事記」「日本紀」の歌謠の註釋書である。水戸家では、これを基として「古事記」「日本紀」時代の歌謠の研究書を作る計畫であつたらしい。この書の成つた頃は、契沖の學問的活動の最も潑剌としてゐた時代で、その二年前に「代匠記」が出來てゐる。本書が「萬葉集」の例證によつて、正當且つ詳細な解釋に到達してゐる點の多いのは、彼の萬葉學完成の後に作られた書であるためもあらう。【諸本】傳本が多い。久松潛一氏の契沖傳（契沖全集第九卷）に擧げられたものは、上賀茂神社文庫本・圓珠庵藏本・水戸彰考館所藏一本・帝國圖書館藏二本・帝大圖書館一本・東大國語研究室一本・竹柏園藏一本・安藤正次氏藏本の九本であるが、野村八良氏の所藏本は、「大に分ちて上中下の三卷とし、各卷細分して兩卷とす」とあつて、少し異つた本かと思はれる。これ等のうち、第一の上賀茂神社所藏本が、契沖の弟子今井似閑の手澤本で、本書の原形に最も近いものであるらしい。他の本は、この上賀茂本と殆ど一致した內容であるが、水戸彰考館所藏本は「古萬葉集」と題して、內容も「厚顔抄」に無い說を含んでゐるし、その體裁も、本文を假名書きにしてゐる等、本書と異つてゐるが、その內容の大體は矢張り同一で、本書に少しく補說した寧ろ本書の異本と見るべきものである。又契沖全集に收められ刊行されてゐる。

【組織・內容】上中下三卷のうち上中二卷には「書紀」の歌謠を、下卷には「古事記」の歌を解釋してある。上卷の初めに、「日本書紀和歌略註上　凡百二十七首」、中卷の初めに「日本紀和歌略註下」、下卷の初めに「古事記和歌略註　凡百七首五十一首出日本紀已注今所注五十六首」とあるのによつて、上中卷で書紀の歌百二十七首を、下卷で「古事記」の歌五十六首（百七首中から書紀と重複してゐる五十一首を除いた殘り）を解釋してゐる事が分る。解釋の內容は、初めに多く從來の說を擧げ、次にそれを批評してから自說を述べると云ふ風で、この傾向は、上中二卷の「書紀」の註釋の方に多く現れてゐる（「書紀」の歌謠は、彼以前にも註釋家があり、「古事記」では殆どそれが無く、初めから自說を出さねばならなかつたからである）。從來の學說中では、「書紀」の解釋の例證は和漢古今に及んでゐるが、就中「萬葉集」を縱橫に引用してゐるのは著しい特色である。【價値】本書は、この方面を開拓した最初の書として重大な歷史的意義を持つと共に、註釋としても劃期的な價値がある。殊に例證を集めて歸納的に解釋を下す學者的態度、その例證の豐富な點等は本書の長所であり、下した結論は最初の研究書であるだけに誤りもあるが、比較的正確、語々の意味を解くだけでなく、語法や音韻の方にまで論及してゐる事、何れも契沖を俟つて始めて成就し得る特色と云ふべきである。

【參考】日本歌撰上古之卷（佐佐木信綱）○契沖傳（久松潛一（契沖全集九））　〔森本〕

後期印象派（こうきいんしやうは）　藝術論　〔英〕Post-Impressionism【解說】近代佛蘭西に於て、印象派乃至新印象派（印象主義參照）の後を繼いで、それ等の色彩・表現の影響を受けながらも、その作畫の態度に於て全く反對な態度を示した繪畫樣式の名稱。同じく印象派の後に出で、これを改訂した新印象派と區別するために、後期といふ語を當時の評家が與へたもの。印象派・新印象派と反對の態度とは、前二者が光を主とする自然の客觀的描寫を目的とするに反して、後期印象派は色彩・線・構圖・筆觸等の繪畫的要素による畫面の構成に其礎をおく主觀的表現を目的とする態度である。この意味からこの派は又後に獨逸を中心として發生した表現主義（Expressionism）（別項）と同一の名稱によつて一時呼ばれたこともある。又それが主觀的表現のために、自然形象を歪めて描いた結果、官學派から一時野獸派（Fauvism）などと嘲笑的名稱を與へられたこともある。又それが畫面の構成的統一を强めるために、自然形象を單純化して統一した結果、綜合派（Synthesisism）と稱されたこともある。この派の代表作家は、セザンヌ、ゴーガン、ゴッホ等である。　〔渡邊〕

弘徽殿鵜羽產家（こうきでんうのはのうぶや）　淨瑠璃五段　時代物【作者】近松門左衛門【名稱】五段目の末に、弘徽殿女御の車を鵜羽產家に擬へて皇子が御誕生になる所から命じたのである。俗には、「花山院」或は「弘徽殿嫉妬打」（うはなりうち）とも呼ばれたらしいとの說もある。【興行】正德二年五月五日初日、竹本座【題材】寬文十三年版「花山院きさきあらそひ」（別項）の改作である。外題の鵜羽產家が「うはなりうち」とも讀める所に作者の得意も窺はれる。【諸本】七行九十丁本、十一行三十二丁本。近松戲曲集（國民文庫）中卷・近松門左衛門全集第六・近松全集第九卷等所收。

【梗概】〔初段〕（鴨川堤）花山院の御代、弘徽殿・藤壺の兩女御が等しく御懷姙により、弘徽殿方には蘆屋道滿、藤壺方には安倍晴明が川を隔てゝ互に皇子御誕生の祈り合ひとなる。（都大路）加茂御祓の日、双方の女房等の車諍となつた。腹に一物ある弘徽殿女御の伯父左大將早岑は藤壺女御の參內を止め、治部卿の許に預ける事とした。（治部卿邸）その夜、曲者忍び入つて警固の武士小餘綾新左衛門の太刀を以て藤壺女御と治部卿とを殺害して消えた。新左衛門は責を以て首を刎ねられた。（弘徽殿）軒端の松にかゝる藤蔦が大蛇と化して女御を惱ます。藤壺の怨靈がなす業である。〔二段〕（左大將館）早岑は藤壺を殺させたのであつたが、更に帝暗殺の陰謀を企てる。藤壺女御と乳姉妹の淸瀧を戀して主家を逐はれた衞士の又五郎義長を、このために唆かした。（白河お茶屋）早岑の味方を裝ひ忍び込んで、帝の弘徽殿女御への御忍びを待ちうけた又五郎は、計らず淸瀧に逢へて、敵に追はれ給うた帝をお救ひ申した。〔三段〕（賴光館）四天王は世の怪しい風說から、俄かに立身した羽倉伊賀の介を探索に出かける。（伊賀の介館）水仕の竹が本妻に直されて祝言の日、國許に置いた吾が子に訪ねられて、竹は薄命

たのが、光悅より大和繪をも下繪とするに至り、光甫・光琳・乾山等の名手をその門流に出した。そのほか、彫刻・製陶にも優れ、又茶人としても一家を成してゐた。又光悅は角倉素庵（別項）と相謀つて國文學書を印行したが、光悅は自筆を版下とし、意匠を凝らして美麗な裝幀を加へたので、世に光悅本と稱せられる（刊本參照）。光悅本は我が國刊本史上極めて重要なもので、後世に及ぼした影響少くないが、光悅はその他美術工藝史上に於ても偉大な足跡を

（物

悅の書流。光悅は初め素眼（南北朝頃の書僧、素眼流を出す）を習ひ、次いで弘法大師の大師流の蘊奧を極め、青蓮院宮から入木道の傳授をも受けたが、後、道風の「古今集」即ち世に謂ふ本阿彌切に依つて假字書を習得し、遂に光悅流の一流風を創めて、近衞信尹（三藐院）・松花堂昭乘（近衞流・瀧本流參照）と共に、寬永三筆

交り、儒學を研究し、遂に垂加神道（別項）を唱へ、その友伴部安崇等と共に、山崎闇齋の晚年の志を紹述したのである。【著作】神學發明二卷○三種神器集說一卷○中臣祓淸浮草一卷○玉鉾道艸一卷○三種神器傳抄一卷○神代講談書五卷○國號傳一卷○正神邪神論一卷○安座傳一卷○土金祕訣傳一卷○神學承傳記一卷○神道生死之說一卷○霜夜學談一卷等

【學風】光海の學風は、闇齋の說を紹述せるものであるが、しかし亦彼が一家の見も少くない。彼は「神道者以二天地一爲二書籍一以二日月一爲二證明一」とあるの言を解し、その神道に關する男爵加藤周一氏の研究、滿谷と呼ぶ人物などである。そこでその加藤男爵の胸像を刻むとしたら何と題すべきかが問題となつて論じ合つた。男爵自身がかれこれと考へた末に「號外」とすべきだといふ事になる。實際、當代の人々、特に我が「加と男」に至つては新聞の號外を持つてそのホールへ來り、定連を前にして讀むのが得意でもあり、また熱意をこめた仕事でもあつた。「敵艦見ゆとの警報に接し」などの名文句は、全く彼の諳誦し得るものであつた。併し今はさういつた號外も全く出なくなつて、その鈴の音は聞かれなくなつた。銀座の市街までがつかりしてゐるやうで

に歎くのであつたが、この母子こそ新左衞門の妻子であつた。これを知つた伊賀の介は自ら名乘つて老母孝養のために惡に與した事を明かした。忍び寄つた四天王のために彼は記錄所に引かれる。（記錄所）伊賀の介の館は闕所になり、新左衞門はこの館に生きてゐた事が分る。〔四段〕（弘徽殿）女御は御懷姙後三十餘月に渉つて御出産なきに、罪の深きを覺られて、突然御殿から姿を消された。（花山院みち行）帝は御歎きの餘り、御出家の御志で花山寺に入り給うた。（男山八幡）安倍晴明は占ひ案じて、又五郎・清瀧夫婦に護られ給ふ女御の無事を知つた。左大將の命で道滿が女御を奪ひに押し寄せたが、晴明の祈で新左衞門の姿が前後に現れて敵を散らす。〔五段〕（眞葛ケ原）神器を奉じて內裏に籠つた左大將の勢が、帝と女御の還幸の途を要したが、三尺餘りの蟷螂がこれに向つて帝を護り了せ、やがてその形が消えて藤壺の姿を現じた。弘徽殿をのみ怨んだ藤壺が、事の眞相を知つて迷ひが覺めたのである。すると忽ち女御は御產氣づかれ、御車を鵜羽の產家に擬へてめでたく皇子御誕生となつた。（內裏）伊賀の介は賴光・四天王に力を添へて策を構へ、終に左大將を討ち取り、帝は御還幸遊ばされる。

【解說】大體の筋は「花山院后諍」の改作といふに留まるが、脚色の點を比較すると、流石に作者晩年の作だけに、戲曲的成功が認られる。即ち時代物、殊に騷動物としての波瀾と、その巧妙な配置が案ぜられてゐるのである。更に又人物の描寫を單なる脚色の一要素とのみしないで、複雜な人間的心理をも捕へ得た事は注意を要する。伊賀の介の如き、古曲の改作といふ狹範圍の脚色に於て、いかに豐富な內容を持たしめたことか。弘徽殿の軒端の藤が大蛇になつて迫る趣向は、近松が青年時代に都萬太夫座の歌舞伎作者として名を揚げた最初の脚色であると傳へて、歷史的意義の重い部分であるが、現在までに發見されてゐる「后諍」系統の曲以外に類作がなかつたならば、本作のこの場面は正しく歌舞伎の脚色を採り入れたものと見られる。四段目の「花山院道行」は原作と全く同一であるが、これ等は單に詞章の上からのみ古曲の再用と見て、作者の脚色態度を評價すべきでなく、寧ろ淨瑠璃作者としての彼の創作的苦心が奈邊にあつたかを知るべき材料である。（花山院后諍參照）

【參考】弘徽殿鵜羽產家解說　藤井乙男（近松全集第九）

高級感覺（かうきふかんかく）　藝術論〔獨〕Höhere Empfindung〔英〕Higher Senses【解說】視覺と聽覺の二つをいふ。高等感覺とも云ふ。他の感官に比べて、知覺の範圍が廣く且つ感覺の分化が細かく、而も秩序を失はない。つまり吾々はこの二つの何れに於ても外界の刺戟の極く僅かな細い點まで感じ分け、而も秩序的に覺ることが出來る。これ等のことから、その美的意義も重要に考へられて來る。（美的感覺・低級感覺參照）　〔村田〕

高級神話（かうきふしんわ）　神話〔獨〕Höhere Mythologie【性質】民間說話の形を採つて、素朴な民衆の間に生きてゐる、未だ十分に發達しない初期の狀態にある低級神話に對し、さうした幼稚な神話を母胎とし素材として十分に發達した狀態にある神話群を高級神話と云ふのである。【沿革】獨逸のダブリュー・シュワルツ（W. Schwartz）が十九世紀の後半に初めて唱ふるところである。シュワルツはその著「神話の發生」（Ursprung der Mythologie）に於て、神話を發生的に觀じて、その中に二つの發展的階層を認め、文化民族が有してゐる成文神話は、神話の原始的な形相ではなくて發展の後期に屬する高級神話であるとなし、而して高級神話の中に存する諸々の神格及び精靈の原始的な姿は、これを民間に生き續くる非成文的な神話、即ち低級神話のうちに求め得るといふ學說を立てた。ついで獨逸に勃興した宗教學的神話學派に屬する諸學者がこの學說を繼いで、更にこれを敷衍し精細化した。即ちウィルヘルム・マンハルト（Wilhelm Mannhardt, 1831—1880）は、「古代森林田野宗儀」（Antike Wald-und-Feldkulte, 1877）を著して、（イ）廣く民族の想像力を支配したのは、森林・田野・樹木の精靈に對する信仰である。（ロ）近代の民間風習と民間說話とには多くの異分子の混入を見出すが、これを剔抉すると、大體に於て古い時代の森林・田野・樹木の精靈の信仰及び風習の後系である。（ハ）文化の進展と共に、司祭・詩人の手を通して社會の上流に高級神話が生れるが、そは這般の精靈信仰から脫化したものに外ならぬ。（ニ）故に成文神話即ち高級神話の研究解釋は、這般の民間的信仰及び說話にその基礎を置かなくてはならぬと主唱し、更にマンハルトの後にエラルド・フーゴー・マイエル（Eland Hugo Meyer）が現れて、精靈信仰を分つて低級精靈信仰と高級精靈信仰となし、この二者をそれぞれ低級神話と高級神話との發生に關係づけた。彼に從へば低級精靈信仰に更に二つの階層が存した。第一は靈魂精靈の信仰であり、第二は自然精靈の信仰である。而してこれ等の二つが產出した叙述的物語が低級神話である。次に高級精靈信仰は、その發生の意識的人爲的な點に於て、低級精靈信仰の無意識的自然的なのと對蹠的關係に立つてゐる。これは民衆一般の共通觀念から自ら生れ出たものではなくて、上層階層、殊に司祭・詩人が、低級信仰に多くの精神的並びに倫理的要素を加へて作り出したものである。而して司祭による這般の作爲に基いて生れた物語が祭祀神話であり、詩人による這般の作爲に基いて生れた物語が英雄神話であり、兩者を併せてこれを高級神話となすと說いた。シュワルツ、マイエルの高級神話の學說は、神話を動的に見る眼を開いた點で神話學に大きな貢獻をなしたが、同時に高級神話を目して、總ての部分に於て低級神話からの有機的發達となす謬見を斯學に持ち込んだ缺點が存してゐる。

【參考】Schwartz, W. : *Der heutige Glauben und das alte Heidentum.* ‖ Paul, H. : *Grundriss der Germanischen Philologie, Bd. III.*　〔松村〕

貢擧（こうきよ）【解說】大寶令によつて規定された式部省の官吏登用試驗をいふ。大學（別項）からの受驗者を擧人と稱し、諸國の國學（別項）からの者を貢人といつた。支那の科擧に當る。諸貢人は國司が先づ試みて後に、朝集使に從へられて太政官に至り、擧人と共に式部省の試驗に應ずる。この試驗に及第した者は奏して省に止められる。貢擧にはその主なるものに、秀才科・明經科・進士科・明法科の四科がある。〔秀才科〕方略の策、二條を試驗する。方略の策とは、「都氏文集」卷五に見える「明二氏族一」や「辨二地震一」の如き類で、全篇殆ど支那の故事などを揭げたものである。これに駢儷の語を用ひて對へるので、甚だむづかしいものとせられてゐた。されば選叙令にも示す如く、秀才は博學高才で、群籍に亙る者も取るのである。その及第者を、上々、上中、上下、中上の四等とし、上々を正八位、上中を正八位下に叙した。叙位は四科中最も高い。これは特に文章を重んずる事を示すものである。〔明經科〕「周易」「左傳」「禮記」「毛詩」各四條、他の經は各三條、「孝經」「論語」は合せて三條、何れも經文とその註を問題とする。これも及第者を、上々、上中、上下、中上の四とする。上々を正八位下、上中を從八位上文といふ）。この文章生を進士又は文人（ぶんじん）とも言つた。文章生の中、更に詩賦の試驗によつて二名を選拔し、文章得業生（ぶんしやうとくごうしやう）とする。これを秀才といひ、時服・食料が給せられる。秀才は又茂才とも言つた（朝野群載卷十三）。又、文章生に補して後、幾年かの後に學問料の試驗もある。學問料（燈燭料とも）は學問に精勵せしめるために給與されるものである。或は又、諸國の掾（じやう）や目（さくわん）に遙任することもあつた。遙任とは任地に赴かず、京都に在つて國庫からの配給を受けるをいふ。而して秀才の試驗は最もあらうが、その實を得たものではない。又曾子の輯錄とする說の謬りであることは、本文に一個所を除くの外は、悉く曾子と稱してゐるのを見れば、辯ぜずして自ら明かである。惟ふに「孝經」に表はれてゐる思想は、孔子の思想よりも一層廣大であり、寧ろ曾子の云ふ所に近い。ただ曾子の所說が斷片的であるのに比して、「孝經」に記す所は首尾一貫して、條理整然たるものがあり、且つ又往々圭角があり、語弊があるのを覺える。恐らく「孝經」は、「隋書」に已に云つてゐる。唐代に入つて、玄宗の開元七年三月、群儒に詔して、今古文の二注の眞僞を質定せしめたが、劉知幾は古文を主として、十二驗を擧げて所謂鄭注を駁し、司馬貞は今文を主として、古文閨門章の言句の鄙しき等の事を擧げて所謂孔注を駁し、聚訟遂に決せず、同十年六月に至つて、玄宗自ら今文を主として「孝經」に注し、元行沖に命じて疏を作らしめて、天下及び國子學に頒ち、次いで天寶二年五月、重ねてこれを注して、

しいものとせられてゐた。されば選叙令にも示す如く、秀才は博學高才で、群籍に亙る者も取るのである。その及第者を、上々、上中、上下、中上の四等とし、上々を正八位、上中を正八位下に叙した。叙位は四科中最も高い。これは特に文章を重んずる事を示すものである。〔明經科〕「周易」「左傳」「禮記」「毛詩」各四條、他の經は各三條、「孝經」「論語」は合せて三條、何れも經文とその註を問題とする。これも及第者を、上々、上中、上下、中上の四とする。上々を正八位下、上中を從八位上に叙した。〔進士科〕時務の策、二條を試驗する。時務とは國を治める要務即ち民俗敎化といふやうなことを指すのである。又「文選」及び「爾雅」に貼紙して文を覆ひ、これを讀ませる。及第者を甲・乙となし、甲を從八位下、乙を大初位上に叙した。〔明法科〕律令十條を試驗する。律七條、令三條である。及第者は甲・乙として、甲を大初位上、乙を大初位下に叙した。〔書・算科〕以上四科の外に、算科・書科がある。書は唐風と異り、筆蹟の巧秀を旨とした。叙法は明法科と同樣である。以上の試驗制度は、何れも唐制に據つたものであるが、それはより簡明にされてゐる。

【沿革】後世、文章博士が紀傳道を司るやうになると共に(四部の博士參照)、貢擧の制も亦變遷を見た。即ち、式部省より大學寮の手に移り、その官人及び博士によつて、「史記」「漢書」中、五條に就いて試驗を行ひ、及第者を擬文章生又は擬生(ぎさう)とし、すべて二十人である。更に擬生を春秋の釋奠(大學參照)の頃に、宣旨により、式部の大少輔の出題で詩賦の試驗をし、及第者を採り奏聞して文章生に補した。(この時の試驗を省試といひ、その詩賦を吏部の文といふ)。この文章生を進士又は文人(もんじん)とも言つた。文章生の中、更に詩賦の試驗によつて二名を選拔し、文章得業生(もんじやうとくごうしやう)とする。これを秀才といひ、時服・食料が給せられる。秀才は又茂才とも言つた(朗野群載卷十三)。又、文章生に補して後、幾年かの後に學問料の試驗もある。學問料(燈燭料とも)は學問に精勵せしめるために給與されるものである。或は又、諸國の掾(じやう)や目(さくわん)に遙任することもあつた。遙任とは任地に赴かず、京都に在つて國庫からの配給を受けるをいふ。而して秀才の試驗は最も困難なものとせられ、文武帝の慶雲年中から仁明帝の承和頃まで約二百年間に僅かに六十五名の秀才を出してゐるに過ぎない(類聚符宣抄卷九)。(大學・國學參照)　〔山岸〕

【參考】令義解(考課令・學令・祿令・選叙令)○令集解(學令・考課令)○類聚符宣抄卷九○類聚三代格卷五○延喜式(式部式)○宇津保物語(俊蔭・吹上)○續日本紀○文藝類纂卷五

孝經(かうきやう)　經書　一卷　【著者】古來異說が頗る多い。(一)孔子の製作とするもの(史記・白虎通・劉歆・何休・鄭玄・王肅・劉炫・邢昺等)。(二)曾子の作とするもの(孔安國序)。(三)孔子と曾子の孝道に關する問答を弟子の筆記したものとするもの(司馬光・胡寅・晁公武等)。(四)子思の作とするもの(馬椅)。(五)後世僞撰の書とするもの(胡宏・汪應辰等)。凡そ以上の五說が存する。しかし今戰國の時、子夏の敎を承けた魏の文侯に「孝經傳」の著があり(漢藝邑明堂論引)、「呂氏春秋」(察微篇及び孝覽篇)に「孝經」諸侯章の語を引き、次いで又漢の文帝の時、博士を置いたのを見れば、先秦の書であることは疑を容れない。又孔子の自撰とするものは、「孝經」を尊信するの餘に出たものであらうが、その實を得たものではない。又曾子の輯錄とする說の謬りであることは、本文に一個所を除くの外は、悉く曾子と稱してゐるのを見れば、辯ぜずして自ら明かである。惟ふに「孝經」に表はれてゐる思想は、孔子の思想よりも一層廣大であり、寧ろ曾子の云ふ所に近い。ただ曾子の所說が斷片的であるのに比して、「孝經」に記す所は首尾一貫して、條理整然たるものがあり、且つ又往々圭角があり、語弊があるのを覺える。恐らく「孝經」は、曾子の門流が曾子の孝論を組織的に記述したものであらう。【成立】戰國時代初期【傳來】秦火の後、河間の顏芝の藏本をその子貞が河間の獻王に獻じた。これが今文「孝經」であり、長孫氏・博士江翁・后倉・翼奉・安昌侯張禹等がこれに傳し、各々一家を成したと云ふ(漢書藝文志。これ等の注は、皆佚して傳はらぬ。司馬貞は、これを十八章に分定したのは劉向であると云ふ。晉以來唐に至るまでの間、世に行はれた今文「孝經」には、題して鄭玄注と云ふ。その說は荀昶・范曄等に出たものであるが、鄭志及びその目錄の中に「孝經」注を載せず、又他經の鄭注と異るものがあるので、これを疑ふ學者が少くない。「孝經正義」には、劉知幾の反對說十二條を列擧してゐる。又「漢書」藝文志に、別に孝經古孔氏一篇二十二章を載せてゐるが、これは武帝の時、他の諸經と共に魯の孔子の舊宅の壁中から出たもので、今文と異るもの凡そ四百餘字あつたと云ふ(看讀新論)。梁に至つて今文と竝んで學官に立てられたが、梁末の亂に亡佚した。後隋に至つて祕書監王劭が偶々京師に采訪したものを河間の劉炫に送り、「孔安國傳」と稱するものが再び世に現れたが、その僞託であることは、「隋書」に已に云つてゐる。唐代に入つて、玄宗の開元七年三月、群儒に詔して、今古文の二注の眞僞を質定せしめたが、劉知幾は古文を主として、十二驗を擧げて所謂鄭注を駁し、司馬貞は今文を主として、古文閨門章の言句の鄙しき等の事を擧げて所謂孔注を駁し、聚訟遂に決せず、同十年六月に至つて、玄宗自ら今文を主として「孝經」に注し、元行沖に命じて疏を作らしめて、天下及び國子學に頒ち、次いで天寶二年五月、重ねてこれを注して、また天下に頒ち、同三年には詔して天下の家毎に一本を藏せしめ、四年九月御注を石に刻した。これを「石臺孝經」と云ふ。爾來御注のみ行はれて、孔・鄭の二注は共に亡んだ。宋の眞宗の時、邢昺等が勅を奉じて、天寶の御注「孝經」に據つて正義を作つた。これが今の十三經注疏本である。

【我が國に於ける傳來】傳來の年月は明確にし難いが、晩くも聖德太子の頃には渡來してゐたらしい。その後は「令義解」にも見えてゐる。孝謙天皇の天平寶字元年、天下に詔して家毎に「孝經」一本を藏し、精勤誦習せしめられた。これは總て唐の文化を摸倣する奈良朝に於て、玄宗の事を學ばせられたのであらうが、天寶三年との間に僅に十三年の距りがあるのみであるのを見ても、當時の我が國が、如何に唐代文化の吸收に急であつたかを察知し得る。降つて淳和天皇の天長十年、初めて皇太子の讀書始に「孝經」を採用せられ、以後この例に倣つて、宮中に於ける讀書始、湯殿始等の諸儀に用ひられ、次いで鎌倉時代には、將軍の讀書始に又これを用ひ、江戸時代に及んでは上下を通じて漢籍誦習はこれを以て始とするに至つた。わが國に於ては、初め孔・鄭の

めでたく皇子御誕生となつた。(內裏)伊賀の介は賴光・四天王に力を添へて策を構へ、終に左大將を討ち取り、帝は御還幸遊ばされる。【解說】大體の筋は「花山院后諍」の改作といふに留まるが、脚色の點を比較すると、流石に作者晩年の作だけに、戲曲的成功が認られる。即ち時代物、殊に騷動物としての波瀾と、その巧妙な配置が案ぜられてゐるのである。更に又人物の描寫を單なる脚色の一要素とのみしないで、複雜な人間的心理をも捕へ得た事は注意を要する。伊賀の介の如き、古曲の改作といふ狹範圍の脚色に於て、いかに豐富

感覺・低級感覺參照)　〔村田〕

高級神話(かうきふしんわ)　神話　〔獨〕Höhere Mythologie【性質】民間說話の形を採つて、素朴な民衆の間に生きてゐる、未だ十分に發達しない初期の狀態にある低級神話に對し、さうした幼稚な神話を母胎とし素材として十分に發達した狀態にある神話群を高級神話と云ふのである。【沿革】獨逸のダブリュー・シュワルツ(W. Schwartz)が十九世紀の後半に初めて唱ふるところである。シュワルツはその

載の極く僅かな細い點まで感じ分け、而も秩序的に覺ることが出來る。これ等のことから、その美的意義も重要に考へられて來る。(美的

の上流に高級神話が生れるが、そは這般の精靈信仰から脫化したものに外ならぬ。(二)故に成文神話即ち高級神話の研究解釋は、這般の民間的信仰及び說話にその基礎を置かなくてはならぬと主唱し、更にマンハルトの後にエラルド・フーゴー・マイエル(Elard Hugo Meyer)が現れて、精靈信仰を分つて低級精靈信仰と高級精靈信仰となし、この二者をそれぞれ低級神話と高級神話との發生に關係づけた。彼に從へば低級精靈信仰に更に二つの階層が存した。第一は靈魂精靈の信仰であり、第二は自然精靈の信仰である。而してこれ等の二つが產出した叙述的物語が低級神話であらうが、その實を得たものではない。又曾子の輯錄とする說の謬りであることは、本文に一個所を除くの外は、悉く曾子と稱してゐるのを見れば、辯ぜずして自ら明かである。惟ふに「孝經」に表はれてゐる思想は、孔子の思想よりも一層廣大であり、寧ろ曾子の云ふ所に近い。ただ曾子の所說が斷片的であるのに比して、「孝經」に記す所は首尾一貫して、條理整然たるものがあり、且つ又往々圭角があり、語弊があるのを覺える。恐らく「孝經」は、曾子の門流が曾子の孝論を組織的に記述したものであらう。【成立】戰國時代初期【傳來】秦火の後、河間の顏芝の藏本をその子貞が河間の獻王に獻じた。これが今文「孝經」であり、長孫氏・博士江翁・后倉・翼奉・安昌侯張禹等がこれに傳し、各々一家を成したと云ふ(漢書藝文志。これ等の注は、皆佚して傳はらぬ。司馬貞は、これを十八章に分定したのは劉向であると云ふ。晉以來唐に至るまでの間、世に行はれた今文「孝經」には、題して鄭玄注と云ふ。その說は荀昶・范曄等に出たものであるが、鄭志及びその目錄の中に「孝經」注を載せず、又他經の鄭注と異るものがあるので、これを疑ふ學者が少くない。「孝經正義」には、劉知幾の反對說十二條を列擧してゐる。又「漢書」藝文志に、別に孝經古孔氏一篇二十二章を載せてゐるが、これは武帝の時、他の諸經と共に魯の孔子の舊宅の壁中から出たもので、今文と異るもの凡そ四百餘字あつたと云ふ(看讀新論)。梁に至つて今文と竝んで學官に立てられたが、梁末の亂に亡佚した。後隋に至つて祕書監王劭が偶々京師に采訪したものを河間の劉炫に送り、「孔安國傳」と稱するものが再び世に現れたが、その僞託であることは、

貢擧(きよ)【解說】大寶令によつて規定された式部省の官吏登用試驗をいふ。大學(別項)からの受驗者を擧人と稱し、諸國の國學(別項)からの者を貢人といつた。支那の科擧に當る。諸貢人は國司が先づ試みて後に、朝集使に從へられて太政官に至り、擧人と共に式部省の試驗に應ずる。この試驗に及第した者は奏して省に止められる。貢擧にはその主なるものに、秀才科・明經科・進士科・明法科の四科がある。〔秀才科〕方略の策、二條を試驗する。方略の策とは、「都氏文集」卷五に見える「明二氏族」や「辨二地震」の如き類で、全篇殆ど支那の故事などを揭げたものである。これに駢儷の語を用ひて對へるので、甚だむづか

二本が竝び行はれ、淸和天皇の貞觀二年、孔・鄭の二注を廢して玄宗の御注を用ひた。しかし他の二注は亡佚せず、圓融天皇の永觀年中、僧奝然が鄭注を齎して入宋し、太宗に獻じて祕府に藏められたが、復び亡んだと云ふ。わが國に於ても、鄭注はその後永く世に出なかつたが、寶曆の初、良野華陰が奝然の遺本を南都に得て校刊したので、再び世に出で、寛政年中岡田挺之がまた「群書治要」中から抄出して公にし、支那に傳はつて鮑廷博の「知不足齋叢書」に採錄せられた。孔傳も亦、永く故家に藏せられて居つたが、享保十七年太宰春臺が足利學校の藏本を底本とし、諸本を參酌して刊刻し、これ亦「知不足齋叢書」中に收められてゐる。又玄宗の御注前後二種の中、開元本は早く支那に亡んだが、わが所謂逍遙院本は、殆ど開元本の面影を傳へたものと稱せられ、「孝經」古注の中、三種まで支那に亡んで、却つてわが國に傳へられたものである。

【諸本】最も普通に行はれてゐるのは、「孝經注疏」九卷(唐玄宗注、宋邢昺疏)で、十三經注疏に收められてあるものの外に、わが國の覆刻本も二種ある。又開元御注に近いと云はれる逍遙院本(御物)には、屋代弘賢本、古逸叢書覆屋代本・三條家本等があり、所謂鄭注「孝經」には、河村益根本・岡田挺之本・知不足齋叢書本・日本覆知不足齋叢書本・鄭注三種合刻本等があり、以上三種は今文である。又所謂孔安國傳の古文「孝經」には、古典保存會の影印した古寫本・太宰春臺本・知不足齋叢書本・日本覆知不足齋叢書本、その他が行はれてゐる。今文と古文との主要なる差異は、古文にだけ二十餘字の閨門章が加へられてある外は、大體章數の分合及び序次の相違で、卽ち今文の庶人章を古文は庶人・孝平の二章に分ち、今文の聖治章を古文は聖治、父母生績、孝優劣の三章に分け、通じて今文は十八章、古文は二十二章であり、又章の次第に於て、今文は廣至德、廣揚名、諫諍、應感、事君とし、古文は廣至德、應感、廣揚名、閨門、諫諍、事君としてゐる。その他は僅かに一二字句の異動があるに過ぎない。その他朱子が古文に基いて、これを經一章、傳十四章に分ち、舊文二百二十三字を删り、「孝經刊誤」(後人或は未定稿であるとも云ふ)と名づけ、又これに倣つて今文を基とした元の吳澄の「孝經定本」等もあるが、弘く流布されて居らぬ。

【內容】聖治章に「父子の道は天性なり」と云ふ。古來孝を說くものは、殆ど凡て報恩を中心としてこれを說き、これを人の性情の自然に基いて止むべからざるものとしたのは、經典中、唯この文があるのみで、「孝經」の中に於て最も注目すべき點である。而して孝の終始を論じては、「身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり。身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯すは孝の終りなり。孝は親に事ふるに始まり、君に事ふるに中し、身を立つるに終る」(開宗明義章)と云ふ。その親に事へる道に就いては、「孝子の親に事ふるや、居には其の敬を致し、養には其の樂を致し、病には其の憂を致し、喪には其の哀を致し、祭には其の嚴を致し、五者備はりて、然る後能く親に事ふ」(紀孝行章)と云ひ、條理整然として說き盡して遺憾が無い。而して愛敬は勿論その內に包括せられてゐる(天子章・聖治章)。又「孝經」には博愛を說く、「先王……之に先だつに博愛を以てして、民其の親を遺るゝもの莫し」(三才章)。併し儒敎の博愛は、その實現の過程に於ては、近親から疎遠に推し及ぼすべきものであるから、從つて「孝經」に云ふ所の博愛も亦無差別の愛ではない。「其の親を愛せずして他人を愛する者は之を德に悖ると謂ひ、其の親を敬せずして他人を敬する者は之を禮に悖ると謂ふ」(聖治章)。而して「孝經」には天子・諸侯・卿大夫・士・庶人等、社會的階級の相違に從つて孝を分說することは、曾子の所說よりも一層詳密を加へてゐる。愛敬を親に事へるに盡し、德敎が百姓に加はり、四海に刑(のつと)るを以て天子の孝とし(天子章)、上に居つて驕らず、節度を謹しんで能く其の社稷を保ち、其の民人を和らげるのを諸侯の孝とし(諸侯章)、先王の道に從つて言行に過無く、能く其の祿位を保ち、宗廟を守るのを卿大夫の孝とし(卿大夫章)、君に仕へて忠、長に仕へて順、能く其の祿を保つて、其の祭祀を守るのを士の孝とし、天の時に因り、地の利に就き、身を謹しみ用を節して父母を養ふのを庶人の孝とする(庶人章)。玆に注意すべきは、天子以下皆その祖先の祭祀を重んずることで、支那民族は鬼卽ち靈魂の不滅を信じ、父祖と子孫とは一氣感應するので、祖先の靈はただその子孫の祀のみを享けて、非類を享けず、若し子孫が斷絕すれば、祀らざるの鬼となるので、これを不孝の大なるものとするからである。又「夫れ孝は德の本なり、敎の由つて生ずる所なり」(開宗明義章)、「天地の性、人を貴しと爲す、人の行は、孝より大なるは莫し」(聖治章)、「五刑の屬三千、罪不孝より大なるは莫し」(五刑章)と云ふが如く、孝を以て一切道德の基礎とする孝本主義の道德が主張せられるのは、全く家族主義を以て基調とする支那民族の思想が然らしめたものである。而して「父に事ふるに資りて以て母に事へて愛同じく、父に事ふるに資りて以て君に事へて敬同じ。故に母には其の愛を取り、君には其の敬を取る、之を兼ぬるものは父なり。故に孝を以て君に事ふれば則ち忠に、弟を以て長に事ふれば則ち順なり」(士章)、「君子の親に事ふるや孝、故に忠君に移すべく、兄に事ふるや弟、故に順長に移すべく、家に居るや理、故に治官に移すべし」(廣揚名章)の如く忠孝一致を說くのは、民主的傾向の强盛な支那民族の中に於て、天下統治の必要上、君主の尊敬を增大するために、家族主義を加味して、王者、卽ち民の父母とする思想を鼓吹した結果であるが、同じく忠孝一致を稱しながら、支那に於ては孝を以て忠、愛を兼ねる根本槪念として、忠を第二義的、派生的道德とするのは、特に注意すべき點である。而して「夫れ孝は天の經なり、地の義なり、民の孝なり、天地の經にして、民是れ之に則る」(三才章)と云つたのは、孝を以て三才を一貫する理法として、これに形而上學的意義を附與したものと云ふべきである。

【註釋書】孝經鄭氏注一卷(前出)○同淸嚴可均輯(自著四錄堂類集本)○孝經鄭氏解輯一卷臧庸輯(知不足齋叢書本)○孝經注疏九卷或は三卷唐玄宗注、宋邢昺疏(十三經注疏本、日本覆北監本、覆元刊本)○開元御注孝經唐玄宗(前出)○古文孝經一卷(舊題孔安國傳)(前出)○孝經刊誤一卷宋朱熹○孝經定本一卷元吳澄○孝經大義一卷董鼎○孝經問一卷淸毛奇齡○孝經集注述疏一卷蒲朝亮○孝經外傳一卷山崎嘉右衞門(闇齋)○孝經識一卷荻生雙松(徂徠)○孝經彙註一卷大鹽中八郎(中齋)○孝經證註一卷朝川鼎(善庵)○古文孝經私記一卷同○孝經發揮一卷津坂孝綽○古文孝經國字解三卷勝田祐義(漢文叢書本)○孝經疏證幷解題考異八卷鈴木柔嘉 〔宇野・本多〕

孝經樓詩話 かうきやうろうしわ 二卷 【著者】山本北山(信有) 【名稱】孝經樓は山本北山の別號 【解說】詩に關する熟語典故一百條を國文で記錄したもので、「唐詩選」の僞選たることを論じ、「聯珠詩格」の編者を詳かにし、「滄浪詩話」の謬妄を駁するなど、卓見が少なくない。 〔佐久〕

孝經樓漫筆 かうきやうろうまんぴつ 隨筆 四卷 【著者】閑田子・閑田廬 【生歿】享保十八年、近江國八幡村に生れ、文化三年(二四六六)七月二十五日歿す。享年七十四 【墓所】京都華頂山 【閱歷】生家は扇屋といふ富豪である。八歲の時母を喪つた。彼は夙くから歌を詠み、長じて有賀長伯に學び、長伯の死後、武者小路實岳に儒敎の上に立つてゐる人のやうに思はれる。戀の題詠をみだらなりと戒めたり、勸孝の辭を書いたり、「門田の早苗」を著はして、歌を敎誨の助けにしようとしたり、折衷論を成したりしてゐるなど、皆その感を深くさせてゐる。小男で、聲が大きく、よく談つたと傳へられる。 【著書】國文世々の跡(別項)○謂辭要解○譯文童喩○萬葉類葉代匠記句解續編○近世畸人傳(別項)○續近世畸人傳○勝地吐懷編○かぐつちのあらび○閑田耕筆(別項)○閑田次筆(別項)○閑田文藁集」と「新古今集」との中間にある「古今集」に據るべきことを說いてゐる。なほ「閑田耕筆」の中にも、歌論は隨處に見られる。彼は又文章を能くし、寧ろこの方面に本領を有つてゐるかのやうに思はれる。國史にも精しく、その蘊奧を傾けた「國文世々の跡」は、日本文學史の嚆矢であると言はれてゐる。 〔羅田〕

蒿蹊 かうけい 歌人 【姓名】伴資芳 【別號】閑田子・閑田廬 【生歿】享保十八年、近江國八幡村に生れ、文化三年(二四六六)七月二十五日歿す。享年七十四 【墓所】京都華頂山 【閱歷】生家は扇屋といふ富豪である。八歲の時母を喪つた。彼は夙くから歌を詠み、長じて有賀長伯に學び、長伯の死後、武者小路實岳に態度に徹してゐる。「我が顏を雨後の地面に近づけてほしいままにはこべを愛す」「遠足の小學生徒有頂天に大手ふり〳〵往來とほる」等に獨自の技巧を窺ひ得る。 〔土岐〕

工藝美 こうげいび 〔英〕Beauty of mechanical art. 〔獨〕Die Schönheit d. Kunstgewerbes. 【解說】一般美術の中、實生活の必要

孝經私記 一卷 同〇孝經發揮 一卷 岸坂孝綽〇古文孝經國字解 三卷 勝田祐義（漢文叢書本）〇孝經疏證并解題考異 八卷 鈴木棄嘉 〔宇野・本多〕

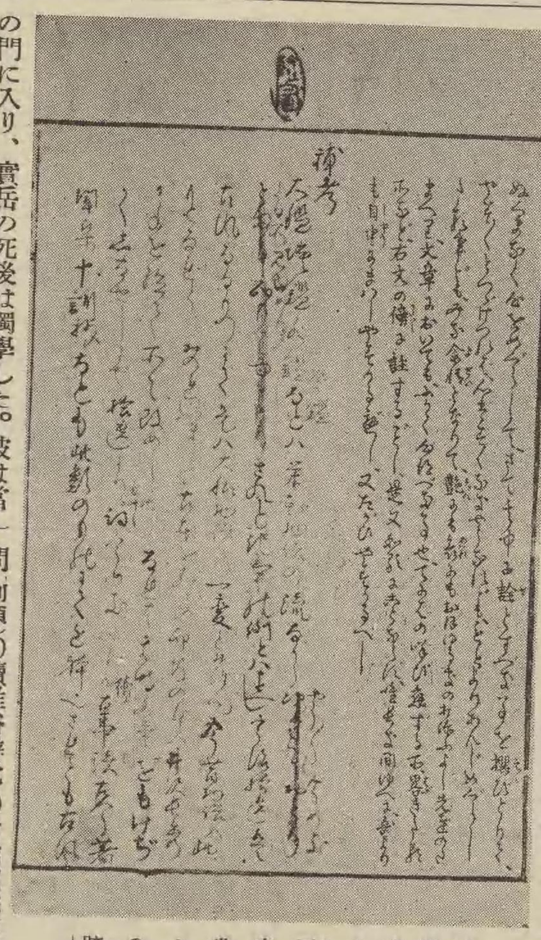
孝經樓詩話 二卷 【著者】山本北山（信有）【名稱】孝經樓は山本北山の別號【解說】詩に關する熟語典故一百條を國文で記錄したもので、「唐詩選」の僞選たることを論じ、「聯珠詩格」の編者を詳かにし、「滄浪詩話」の謬妄を駁するなど、卓見が少なくない。 〔佐久〕

孝經樓漫筆 隨筆 四卷 【著者】山本信有【挿畫】山本孝（著者の孫）【成立】嘉永三年、山本信錫の序がある。【解說】博覽なる著者が、本朝公武の制度、習慣、言語、節序、地理、歷史、和歌、遊戲、裝束、飲食、調度、書籍等に係る雜考を集めたもの。二編嗣刻の豫告はあるが、實行に至らなかつた。 〔和田〕

孝經樓漫錄 隨筆 四卷一册 【著者】山本信有【成立】寛政八年、佐藤坦（一齋）の序がある。【解說】漢文で書いた隨筆である。佐藤一齋の序に「其書錯綜萬彙、商確古今、攷鎔纖悉、援據精核、折前哲未決之疑、覈後進久襲之謬、洵誌林之奧祕、說部之淵藪、而談藝家所當架置一部者矣」と激稱してある。門人中野正興等校。 〔和田〕

紅玉 歌集 【著者】木下利玄【刊行】大正八年五月、玄文社【解說】大正三年に出版した第一歌集「銀」以後、同六年十二月までの作品から、五百十六首を選出したもので、病弱の愛兒を失つた悲嘆のうちに、健康をそこなつた妻を携へて長い旅行を試みた間の作品が大部分を占めてゐる。自然・事象に對して純眞に融合し、素朴な表現を求めんとする態度に徹してゐる。「我が顏を雨後の地面に近づけてほしいままにはこべを愛す」「遠足の小學生徒有頂天に大手ふり〳〵往來とほる」等に獨自の技巧を窺ひ得る。 〔土岐〕

蒿蹊 歌人 【姓名】伴資芳【別號】閑田子・閑田廬【生歿】享保十八年、近江國八幡村に生れ、文化三年（一八〇六）七月二十五日歿す。享年七十四【墓所】京都華頂山【閥歷】生家は扇屋といふ富豪である。八歲の時母を喪つた。彼は夙くから歌を詠み、長じて有賀長伯に學び、長伯の死後、武者小路實岳の門に入り、實岳の死後は獨學した。彼は當時三十歲餘りであつた。晩年には荷田春滿に私淑した。門下には、金谷興詩・比田尙監、養子の資規等があつた。妙法院一品親王は、蒿蹊を愛し、頻りに召して歌文を作らしめた。また聖護院の宮が、彼の閑田廬に駕を枉げさせられ、歌會を催されたことは聞えてゐる。又林泉院六如上人・小澤蘆庵とは、深い交りがあり、加藤千蔭とも書面上の交りがあつた。【人物】淡泊で、常識的な性格を有つて居り、儒教の上に立つてゐる人のやうに思はれる。戀の題詠をみだらなりと戒めたり、勸孝の辭を書いたり、「門田の早苗」を著はして、歌を敎誨の助けにしようとしたり、折衷論を成したりしてゐるなど、皆その感を深くさせてゐる。小男で、聲が大きく、よく談つたと傳へられる。【著書】國文世々の跡（別項）〇詞辭要解〇譯文童喩〇萬葉類葉代匠記句解〇萬葉類葉代匠記句解續編〇近世畸人傳（別項）〇續近世畸人傳〇勝地吐懷編〇かぐつちのあらび〇閑田耕筆（別項）〇閑田次筆（別項）〇閑田文草〇閑田詠草〇閑田百首〇門田早苗〇大和物語抄補翼〇國歌私言〇國歌八論評〇國歌或問（別項）〇讀雅俗辨說〇增補題辭要解〇勸孝辭〇津島祭の記〇佐波加刀神社事跡考〇庭の訓抄。



蒿蹊書入「國文世々の跡」

【業績】蒿蹊は國學に精通してゐると共に、漢學・佛敎をも究めてゐた。歌人としては、蘆庵・澄月・慈延（各別項）等と共に、平安四天王の一人に數へられてゐた。一方、歌學者として一家言を有し、天明三年、五十一歲の時には、歌論「國歌或問」を著はしてゐる。大體に於て、「國歌八論評」を補ひ改めたもので、「萬葉集」と「新古今集」との中間にある「古今集」に據るべきことを說いてゐる。なほ「閑田耕筆」の中にも、歌論は隨處に見られる。彼は又文章を能くし、寧ろこの方面に本領を有つてゐるかのやうに思はれる。國史にも精しく、その蘊奧を傾けた「國文世々の跡」は、日本文學史の嚆矢であると言はれてゐる。 〔羅田〕

工藝美 〔英〕Beauty of mechanical art. 〔獨〕Die Schönheit d. Kunstgewerbes. 【解說】一般美術の中、實生活の必要から來る形式と藝術的觀念とが結合してゐるものがある。これを工藝美術と呼ぶ。工藝美術の製作は、本來吾々の生活の必要から發するもの故、その種類は多いが、製作の材料の上から大別して（一）陶磁器製作（Keramik）（二）金工製作（Toreutik）、（三）織物製作（Textilkunst）、（四）漆工製作等である。なほ各種材料の取扱方、卽ち加工技術の進歩と趣味の變遷とによつて種々の材料を混用した形式のものも生ずるが、生活の功利的性質に規定されることの多い藝術的建築（Tektonik）は、重要な一種類と考へられる。かくして工藝の美は、材料（素材）そのものの持つ性質、加工技術の過程及び實用的形式を通じて現はれる美である。カントはこの種の美を附庸美（Anhängende Schönheit）と稱し、純粹の趣味判斷による美卽ち自由美と區別してゐる。

【參考】工藝の道 柳宗悅 ‖ Falke : *Aes. d. Kunstgewerbes.* ‖ Bucher : *Geschichte d. technischen Künste.* 〔村田〕

江家次第 有職 十九册 【著者】大江匡房【成立・由來】著者が後二條關白師道の命を奉じて撰したもので、初めから一書を爲したのでなく、公事の期に臨んで、漸次逍遙院本（御物）には、屋代弘賢本、古逸叢書覆屋代本・三條家本等があり、所謂鄭注「孝經」には、河村益根本・岡田挺之本・知不足齋叢書本・日本覆知不足齋叢書本・鄭注三種合刻本等があり、以上三種は今文である。又所謂孔安國傳の古文「孝經」には、古典保存會の影印した古寫本・太宰春臺本・知不足齋叢書本・日本覆知不足齋叢書本、その他が行はれてゐる。今文と古文との主要なる差異は、古文にだけ二十餘字の閨門章が加へられてある外は、大體章數の分合及び序次の相違で、卽ち今文の庶

これを撰んだのを、後人が集めたものと云はれてゐる。【卷數】原本は二十一卷あつたが、その第十六・二十一の兩卷は、夙くから世に傳はらないので、第十七卷の數章を拔いて十六卷としたものもあつた。然るに林鵞が校訂して舊章に復し十九卷としたことが、その承應二年の跋に見えてゐる。【諸本】增訂故實叢書中に所收。【解說】平安時代末期に於ける朝廷の恒例、臨時の儀式・禮法を詳記したもので、左の如き內容がある。

卷一から卷十一までは年中恒例の行事、卷十二は神事、卷十三は佛事、卷十四・五は踐祚、卷十六は行幸、卷十七は御元服・御書始・立后・立太子・東宮御着袴・同御元服・同御燈事・同御書始・當代親王宣旨、卷十八は勅書・詔書覆奏・改元・陣ノ申文・陣覽內文・同次位記請印・陣定・軒廊御卜・外記政・官結政・廳覽內文・結政請印、卷十九は弓場殿・殿上賭弓・臨時競馬・御覽陸奧交易御馬・院鎭魂祭・御幸・御賀・一院雜事、卷二十は關白四方拜・賀茂詣・勸學院歩・太政官賀執柄等儀・任太政大臣・任大臣・新任大臣饗・大將饗・一ノ人ノ子ノ元服・同書始・諸家ノ子ノ元服・執聲・帥若大貳赴任・路頭禮節、卷廿一は御齋會・御國忌・御錫紵・諒闇御幸・同政始・院宮等崩奏遺令儀・皇后崩・女御贈位・復任・流人等の諸項。

【價値】「古事談」に、「知足院殿仰云、(略)江次第は後二條殿の御料に作りたる文也。末代之公事不レ可レ過レ其歟。但僻事ども少々相交歟」とある如く、平安時代末期の朝儀・典禮はこの書に盡くと言つてもよい位である。「僻事云々」といふのは、朝儀・典禮が時代の推移に伴つて節略變化されて、自然に初期のそれと異なるものがあるのを指したに過ぎまい。

【參考】江次第鈔一條兼良(續々群書類從)○江次第考○江家次第祕鈔尾崎積興(增訂故實叢書所收)　〔石村〕

好古(かうこ)　漢學者【姓名】姓は貝原。字は敏夫。通稱市之進【號】恥軒【生歿】寛文四年生、元祿十三年(一三六〇)五月歿す。享年三十七【閱歷】黑田藩の儒官。寛齋を祖父とし、益軒(別項)を叔父とし、一族皆優れた漢學者である。年少すでに學を好んで、大に囑目されたが、壯年にして歿した。死に臨んで、「短長有レ數詎須レ傷、有レ死有レ生天地常、三十七年無二一事一、忠君報國未二嘗忘一」と詠じた。【著書】好古は編纂の才に長じたので、これに關はる著書が多い。○諺(ことわざ)草七卷(正德六年刊。諺及び諺に類する語を、最初の音に依つて五十音順にし、出典を記し解釋を附したもの。但し佛教關係の語は、解釋不十分なものが多い。益軒全集卷三所收)○和爾雅八卷(別項)○日本歲事記七卷(益軒全集卷一所收)○大和事始別名「和事始」六卷(益軒全集卷一所收)○中華事始別名「漢事始」六卷(「大和事始」と併せて「和漢事始」とも云ふ。益軒全集卷一所收)○八幡宮本紀六卷及附錄一卷(益軒全集卷五所收)　〔龜田〕

口語(こうご)　國語學【異稱】「はなしことば」「俗語」【解說】ものを書く時に用ひる言語である文語(別項)に對して、談話に用ひる言語をいふ。現代の口語に基づく文語である所謂口語文(別項)は、その語彙・語法等、現代の口語と一致する點が多い所から、これを口語として取扱ふものが少くないが、これは文字に伴ふものであるから、文語に屬すべきものである。しかし、かやうに口語に口語文をも含ませるものがある所から、談話に用ひる言語といふ意味の口語を「くちことば」「口頭語」など名づけて曖昧を避けるものもある。かやうな意味の口語は、音聲と意味との二つの要素から成り立つてゐるもので、話し聞く言語であり、純粹に口と耳とにのみよる言語である。【種類】原始的な國語に於ては、口語は大體一種であつたであらうが、日本民族の住む地域が擴まり、社會が複雜になるに從つて、各地の方言(別項)や種々の職業・階級・年齡・性別などによる種々の言語の相違を生じた。その中最も著しいのは方言の相違であつて、それが甚しくなつては、各地共通の語としての標準語(別項)が必要となり、その發生流布を見るにいたつた。さうして文語も亦口語に基づいて發生したものである。なほ、口誦の傳說・神話等の言語は、文字によらず、口から耳への言語である點に於て口語に屬するが、その他の性質に於ては口語よりも寧ろ文語に近いもので、文語的口語ともいふべきである。我が國では、かやうなものは多くは絕えたが、平曲や謠曲・淨瑠璃、その他の如き語物や謠物の類は、この種に屬する。【變遷】口語は時と共に變化する。方言が生じた根本の原因もこゝに在り、文語の變遷も亦多くは口語の變化の結果である。實に口語の沿革は、國語史の基幹をなすものである。然るに、口語の變遷の研究は誠に容易でない。過去の口語の狀態を研究する根本資料たるべき過去の文獻にあらはれた言語は、既に多少文語の性質を有するもので、實際の口語と幾分の差異があつたかも知れない故、その中から實際の口語の事實と認むべきものを鑑別し、選擇しなければならないのであつて、この點に多大の困難がある。(口語の沿革の大要は、別項「國語」中の「國語の沿革」を、その研究資料については別項「國語學」を見よ。)

【研究史】我が國で國語の研究は、かなり古い時代から起つたが、それは殆どすべて文語についてであつて、日常口にする口語は俗なものとして、これに注意するものがなかつた。尤も江戸時代に京の俚言を集めた安原貞室の「かたこと」(別項)や「物類稱呼」(別項)、その他の方言書など、口語研究と目すべきものも多少はあらはれたが、これ等は、むしろ異端ともいふべきで、語學研究の本筋とは見られなかつた。明治以後、口語を文語に用ひようとする言文一致の運動が起り、又西洋の言語學が講ぜられて、口語研究が學問上重要である事が說かれたため、口語が識者の注意を惹くやうになつたが、日淸戰爭後、支那人への日本語敎授が盛んになるに從つて、口語、殊に標準語の研究が漸く起り、文典も作られるやうになつた。その後小學校の敎科書に口語文が多くなり、一般社會にも、日露戰爭以後、口語文が文語として次第に廣く用ひられると共に、標準語の研究が次第に委しくなつて行く傾向があらはれた。又方言については、明治時代に小學校に於ける言語匡正の目的で方言集の類があらはれたが、近年鄕土研究・民俗研究の流行と共に盛んになつて行き、殊に最近に於て著しい(方言參照)。しかしながら、現代口語の學術的研究は、現今では僅かに緖についただけで、成果は今後に俟たなければならない。

【參考】「國語」「言語學」「標準語」「方言」の參考を見よ。　〔橋本〕

口語歌(こうごか)　短歌【解說】明治文化展開の途上に起つた言文一致の提唱は、當然詩歌用語の上にも及んで、明治二十一年頃、既に林甕臣は「萬葉集や何かの古い歌の中に、その世の俗語方言のまゝに口から出まかせのやうなのに却つて感心させられるのが多い」といふ理由で、和歌における言文一致を主張し、「竹の林梅の園にも鶯のなかぬ時にはなかぬなりけり」といふ作例と、「梅ニ來テミ、藪ニマヨヘト、鶯ノナカナイ時ハ、サテナカヌワイ」の作例とを並べ、舊派の海上胤平も「火鉢だき北窓しめて居たりしはきのふであつたに鶯がなく」などの作例を示し、この前後に萩野由之・三上參次・小柴樓主人・芳賀矢一等の口語歌論、現代語歌論もあらはれた。正岡子規にも數首の口語的なものがあり、特に初期口語歌集としては明治三十九年に出版された三年四月發行「國民之友」所載「つぼすみれ」にこれを實行してゐる。二十四年刊「青年唱歌集」(別項)の中にも「蒙古襲來」「春の曙」等に於て習作を示してゐる。又、岩野泡鳴は明治二十七年の「女學雜誌」に連載して、同年末に單行上梓した悲劇「魂迷月中刄」に於て、最初十音調の口語詩體を試みたが、後には全く散文に書き改めてしまつた。薄田泣菫がその詩集「白玉姫」(明治三十八年)に於て試みた習作は、主として地方語を用ひて新作の俗謠の新味を表はさうとしたもので、それは同年刊の「白玉姫」の「地方語」に關する考證は、その論理は大分怪しかつたが、口語體に贊意を示した。四十一年五月の相馬御風の「痩犬」、三木露風の「暗い扉」、同七月の岩野泡鳴の「緣日」等は口語詩習作の標本であつた。その間、口語詩の存在性を强度に明かにした一文は、抱月の「口語詩問題」(四十一年十一月「讀賣」)であつた。それには創作家に對する一點つ無理解があつて、正格律詩の未來性に冷淡でありすぎる缺陷があつたが、口語詩勃興文獻としての重要性ある唯一の指導であり解釋であつた。柳虹・露風等の習作は、史的に見

好古小錄(かうこしやうろく)　隨筆　三卷【著者】藤貞幹。好古はその通稱、國學者を以て聞え、最も考證學に精しかつた。【刊行】寛政七年【解說】古代の品物に關する考證的隨筆で、上卷に金石・書畫の二部を收め、その金石部では、大寶元年敕書所用內印及大學寮印以下驛鈴・錢幣・塔銘・碑銘・墓誌銘・瓦當等二十二件を記し、書畫部では大寶元年敕書以下魚養・空海・逸勢・敏行・道風・佐理・行成の筆書、上宮太子畫像、賢聖障子粉本、繪卷類一百三件を記し、下卷は雜考部で、

奏還令儀・皇后崩・女御贈位・復任・流人等の諸項。

【價値】「古事談」に、「知足院殿仰云、（略）江次第は後二條殿の御料に作りたる文也。末代之公事不レ可レ過レ其歟。但僻事ども少々相交歟」とある如く、平安時代末期の朝儀・典禮はこの書に盡くと言つてもよい位である。「僻事云々」といふのは、朝儀・典禮が時代の推移に伴つて節略變化されて、自然に初期のそれと異なるものがあるのを指したに過ぎまい。

【參考】江次第鈔一條兼良（續々群書類從）○江次第考○江家次第祕鈔尾崎積興（增訂故實叢書所收）　〔石村〕

ふ理由で、和歌における言文一致を主張し、「竹の林梅の園にも鶯のなかぬ時にはなかぬなりけり」といふ作例と、「梅ニ來テミ、藪ニマヨヘト、鶯ノナカナイ時ハ、サテナカヌワイ」の作例とを並べ、舊派の海上胤平も「火鉢だき北窓しめて居たりしはきのふであつたに鶯がなく」などの作例を示し、この前後に萩野由之・三上參次・小柴樓主人・芳賀矢一等の口語歌論、現代語歌論もあらはれた。正岡子規にも數首の口語的なものがあり、特に初期口語歌集としては明治三十九年に出版された青山霞村の「池塘集」を、纏まつた一卷とすべく、しかもその作品は、在來の五七五七七の形態に口語をあてはめた程度に過ぎない。明治末期において、石川啄木の作品は大膽に口語的發想を試みたが、大正年代に入つて西出朝風・鳴海うらぶる・西村陽吉・高草木暮風・矢代東村等が口語歌を發表し、大正十五年四月に至つて、新短歌協會が結成された。更に短歌の形態と口語との關係は、謂はゆるプロレタリア短歌において一進展を示したが、その一方、短歌における新しい形態を探究するものが起つて、短歌の口語的發想において新しい律動を捉へようとしつゝあり、短歌と口語との有機的な交渉は、こゝに至つて新しい解決を遂げんとしつゝある。

【參考】口語歌集・新興短歌集（現代短歌全集二十一卷）　〔土岐〕

口語詩（こうごし）　詩歌　【名義】明治大正新詩史に於ける日常口語を詩語とする詩篇の一體である。【沿革】長詩に於ける言文一致即ち口語詩の要求は、早くから民謠・童謠の類の間に現はれてゐた。山田美妙・矢崎嵯峨廼舍・薄田泣菫等の習作がこれである。美妙は二十三年四月發行「國民之友」所載「つぼすみれ」にこれを實行してゐる。二十四年刊「青年唱歌集」（別項）の中にも「蒙古襲來」「春の曙」等に於て習作を示してゐる。又、岩野泡鳴は明治二十七年の「女學雜誌」に連載して、同年末に單行上梓した悲劇「魂迷月中刄」に於て、最初十音調の口語詩體を試みたが、後には全く散文に書き改めてしまつた。薄田泣菫がその詩集「白玉姫」（明治三十八年）に於て試みた習作は、主として地方語を用ひて新作の俗謠の新味を表はさうとしたもので、それは同年刊の「二十五絃」にも行はれてゐる。三十九年片山孤村が「續神經質の文學」に於て、輓近獨墺の詩派を紹介した中で、リヒャルト・デエメルの詩集「されど戀こそ」中の一篇「死せる響」を純粹な口語に譯してゐる。又「電信體」の見本として、アルノオ・ホルツの短唱を口語譯してゐる。この紹介は、櫻井天壇のそれと共に詩壇への少なからぬ寄與であつた。明治四十年島村抱月は、雜誌「詩歌」の「現代の詩」といふ一文に於て、その自然主義藝術論の立脚地から新詩歌の現實性を論じ、口語使用に觸れ、次いで四十一年三月、相馬御風は、「早稲田文學」の社論「詩界の根本的革新」に於て、抱月の主論を整理し主張化して、用語改革の第一聲を放つた。これに反對したものは「帝國文學」の折竹蓼峰その他である。櫻井天壇はその年の「早稲田文學」に、「獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義」を論じて、リリエンクロオンやモムベルトを純粹口語譯をしてゐる。これ等の刺戟に應じて、四十年九月雜誌「詩人」に川路柳虹が掲げた「塵塚」四章は、正しく口語體詩の先驅であつた。「帝國文學」は、これをあほだら經と酷評し、「讀賣」紙上で服部嘉香は、その論理は大分怪しかつたが、口語體に賛意を示した。四十一年五月の相馬御風の「痩犬」、三木露風の「暗い扉」、同七月の岩野泡鳴の「緣日」等は口語詩習作の標本であつた。その間、口語詩の存在性を強度に明かにした一文は、抱月の「口語詩問題」（四十一年十一月「讀賣」）であつた。それには創作家に對する一點つ無理解があつて、正格律詩の未來性に冷淡でありすぎる缺陷があつたが、口語詩勃興文獻としての重要性ある唯一の指導であり解釋であつた。柳虹・露風等の習作は、史的に見る時は、正しく現行口語詩體の先驅であつたが、ただ試作といふに止まり、その藝術價値は殆ど空に近かつた。これ等に比べると、森鷗外が「沙羅の木」（大正四年）に收めた譯詩中の口語體は、主として「明星」後期時代に於て試みたものであるが、口語使用の本質價が自ら詩價の卓越を示し、文語のぎごちない惡感化もなければ、俗語のわざとらしい惡影響もない。無名詩人クラブントの譯詩「神のへど」その他がその證である。明治二十年代に、近代雅文小說の新形式を「舞姫」（別項）に於て示した彼は、その卓れた和漢洋の教養から來る當然の文語的臭癖を振り棄てて、思ひ切つて自由な口語體を創成した。口語詩發達史上、鷗外の業績は確固不拔であると云はねばならぬ。總じて、卓れた詩情の所有者が、卓れた口語詩の使用者であつたので、口語は詩語として、確實に詩壇にその使用權を公認せられたことになつたのである。

【參考】輓近獨逸文學の研究片山孤村○散文詩形の創始者岩野泡鳴（泡鳴全集一八）○抱月全集○明治大正詩史卷下日夏耿之介　〔日夏〕

江湖詩社（かうこししや）「寛齋」を見よ。

研究は誠に容易でない。過去の口語の狀態を研究する根本資料たるべき過去の文獻にあらはれた言語は、既に多少文語の性質を有するもので、實際の口語と幾分の差異があつたかも知れない故、その中から實際の口語の事實と認むべきものを鑑別し、選擇しなければならないのであつて、この點に多大の困難がある。（口語の沿革の大要は、別項「國語」中の「國語の沿革」を、その研究資料については別項「國語學」を見よ。）

【研究史】我が國で國語の研究は、かなり古い時代から起つたが、それは殆どすべて文語に近に於て著しい（方言參照）。しかしながら、現代口語の學術的研究は、現今では僅かに緒についただけで、成果は今後に俟たなければならない。

【參考】「國語」「言語學」「標準語」「方言」の參考を見よ。　〔橋本〕

口語歌（こうごか）　短歌　【解說】明治文化展開の途上に起つた言文一致の提唱は、當然詩歌用語の上にも及んで、明治二十一年頃、既に林甕臣は「萬葉集や何かの古い歌の中に、その世の俗語方言のまゝに口から出まかせのやうなのに却つて感心させられるのが多い」といふ理由で、和歌における言文一致を主張し、「竹の林梅の園にも鶯のなかぬ時にはなかぬなりけり」といふ作例と、「梅ニ來テミ、藪ニマヨヘト、鶯ノナカナイ時ハ、サテナカヌワイ」の作例とを並べ、舊派の海上胤平も「火鉢だき北窓しめて居たりしはきのふであつたに鶯がなく」などの作例を示し、この前後に萩野由之・三上參次・小柴樓主人・芳賀矢一等の口語歌論、現代語歌論もあらはれた。正岡子規にも數首の口語的なものがあり、特に初期口語歌集としては明治三十九年に出版された青山霞村の「池塘集」を、纏まつた一卷とすべく、しかもその作品は、在來の五七五七七の形態に口語をあてはめた程度に過ぎない。明治末期において、石川啄木の作品は大膽に口語的發想を試みたが、大正年代に入つて西出朝風・鳴海うらぶる・西村陽吉・高草木暮風・矢代東村等が口語歌を發表し、大正十五年四月に至つて、新短歌協會が結成された。更に短歌の形態と口語との關係は、謂はゆるプロレタリア短歌において一進展を示したが、その一方、短歌における新しい形態を探究するものが起つて、短歌の口語的發想において新しい律動を捉へようとしつゝあり、短歌と口語との有機的な交渉は、こゝに至つて新しい解決を遂げんとしつゝある。

【參考】口語歌集・新興短歌集（現代短歌全集二十一卷）　〔土岐〕

口語詩（こうごし）　詩歌　【名義】明治大正新詩史に於ける日常口語を詩語とする詩篇の一體である。【沿革】長詩に於ける言文一致即ち口語詩の要求は、早くから民謠・童謠の類の間に現はれてゐた。山田美妙・矢崎嵯峨廼舍・薄田泣菫等の習作がこれである。美妙は二十三年四月發行「國民之友」所載「つぼすみれ」にこれを實行してゐる。二十四年刊「青年唱歌集」（別項）の中にも「蒙古襲來」「春の曙」等に於て習作を示してゐる。又、岩野泡鳴は明治二十七年の「女學雜誌」に連載して、同年末に單行上梓した悲劇「魂迷月中刄」に於て、最初十音調の口語詩體を試みたが、後には全く散文に書き改めてしまつた。薄田泣菫がその詩集「白玉姫」（明治三十八年）に於て試みた習作は、主として地方語を用ひて新作の俗謠の新味を表はさうとしたもので、それは同年刊の「二十五絃」にも行はれてゐる。三十九年片山孤村が「續神經質の文學」に於て、輓近獨墺の詩派を紹介した中で、リヒャルト・デエメルの詩集「されど戀こそ」中の一篇「死せる響」を純粹な口語に譯してゐる。又「電信體」の見本として、アルノオ・ホルツの短唱を口語譯してゐる。この紹介は、櫻井天壇のそれと共に詩壇への少なからぬ寄與であつた。明治四十年島村抱月は、雜誌「詩歌」の「現代の詩」といふ一文に於て、その自然主義藝術論の立脚地から新詩歌の現實性を論じ、口語使用に觸れ、次いで四十一年三月、相馬御風は、「早稲田文學」の社論「詩界の根本的革新」に於て、抱月の主論を整理し主張化して、用語改革の第一聲を放つた。これに反對したものは「帝國文學」の折竹蓼峰その他である。櫻井天壇はその年の「早稲田文學」に、「獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義」を論じて、リリエンクロオンやモムベルトを純粹口語譯をしてゐる。これ等の刺戟に應じて、四十年九月雜誌「詩人」に川路柳虹が掲げた「塵塚」四章は、正しく口語體詩の先驅であつた。「帝國文學」は、これをあほだら經と酷評し、「讀賣」紙上で服部嘉香は、その論理は大分怪しかつたが、口語體に賛意を示した。四十一年五月の相馬御風の「痩犬」、三木露風の「暗い扉」、同七月の岩野泡鳴の「緣日」等は口語詩習作の標本であつた。その間、口語詩の存在性を強度に明かにした一文は、抱月の「口語詩問題」（四十一年十一月「讀賣」）であつた。それには創作家に對する一點つ無理解があつて、正格律詩の未來性に冷淡でありすぎる缺陷があつたが、口語詩勃興文獻としての重要性ある唯一の指導であり解釋であつた。柳虹・露風等の習作は、史的に見る時は、正しく現行口語詩體の先驅であつたが、ただ試作といふに止まり、その藝術價値は殆ど空に近かつた。これ等に比べると、森鷗外が「沙羅の木」（大正四年）に收めた譯詩中の口語體は、主として「明星」後期時代に於て試みたものであるが、口語使用の本質價が自ら詩價の卓越を示し、文語のぎごちない惡感化もなければ、俗語のわざとらしい惡影響もない。無名詩人クラブントの譯詩「神のへど」その他がその證である。明治二十年代に、近代雅文小說の新形式を「舞姫」（別項）に於て示した彼は、その卓れた和漢洋の教養から來る當然の文語的臭癖を振り棄てて、思ひ切つて自由な口語體を創成した。口語詩發達史上、鷗外の業績は確固不拔であると云はねばならぬ。總じて、卓れた詩情の所有者が、卓れた口語詩の使用者であつたので、口語は詩語として、確實に詩壇にその使用權を公認せられたことになつたのである。

【參考】輓近獨逸文學の研究片山孤村○散文詩形の創始者岩野泡鳴（泡鳴全集一八）○抱月全集○明治大正詩史卷下日夏耿之介　〔日夏〕

江湖詩社（かうこししや）「寛齋」を見よ。

好古小錄（かうこせうろく）　隨筆　三卷　【著者】藤貞幹。好古はその通稱、國學者を以て聞え、最も考證學に精しかつた。【刊行】寛政七年【解說】古代の品物に關する考證的隨筆で、上卷に金石・書畫の二部を收め、その金石部では、大寶元年敕書所用印及大學寮印以下驛鈴・錢幣・塔銘・碑銘・墓誌銘・瓦當等二十二件を記し、書畫部では大寶元年敕書以下魚養・空海・逸勢・敏行・道風・佐理・行成の筆書、上宮太子畫像、賢聖障子粉本、繪卷類一百三件を記し、下卷は雜考部で、招提寺講堂以下古典籍・文房具等五十七件を錄してゐる。附錄一卷には、古枡・烙印・銅斗・古硯・古墨・籤・書囊・造紙形・竹帙・書筒・書車・驛傳古函・燧囊・古繡等の圖がある。寛政六年橘經亮の序がある。本書はその續編とも見るべき「好古日錄」（別項）と共に、江戸時代に於て考古家無二の參考書として重寶がられた。蓋し隨筆中特色あるものの一であらう。　〔和田〕

好古日錄（かうこにちろく）　隨筆　二卷　【著者】藤貞幹【刊行】寛政九年【解說】寛政七年刊行の「好古小錄」（別項）の姉妹書と見るべき隨筆で、和漢の古物即ち印璽・錢貨・書籍・銘文・曆本・文書・文字・尺度・衣裳・紙類・錦帛、その他雜多の器具・調度等について簡潔な考證を施したもの。通編百十九目。多く圖を加へてある。「好古小錄」と合せ見るべきもの。寛政八年藤原資同の序がある。　〔和田〕

口語文（こうごぶん）　國語學　【名稱】もと言文一致といつた【解說】現代に行はるゝ文語（別項）の一種で、現代の口語に基づくもの、即ち口語體の文語である。口語文は、現代口語に基づくものであるが、その基づく所の口語は大體一定してゐる。即ち主として標準語に基

づくものである。口語文が廣く各地の人々に理解せられるためには、廣く知られ、且つ正しい言語と認められてゐる標準語に據るのが適當であり便利であるからである。しかし、又口語文が各地の人々に讀まれる所から、これに用ひた語や言ひ方が各地に弘まつて標準語になることもある。かやうに口語文は標準語（別項）とは密接な關係があるものである。又、口語文は口語（標準語）に基づくもので、その語彙や語法は大體これと一致する故、これを一緒にして取扱ふのを便利とする場合が多いが、しかし全然同一ではなく、かなり違つた點もある。これを混同するのは不當である。

【種類】小說・戲曲・論文・書簡などによつて、それ〴〵文體の相違があるが、言語の上から觀れば、或る特定の對手に向つて話しかける態度の、對話體のもの（或る人はこれを敬體と名づける。「であります」「思ひます」の如き句調のもの）と、さうでない非對話體のもの（「である」「思ふ」の如き句調のもの。或る人はこれを常體と名づける）との相違が著しい。即ち兩者の間には敬語の用法に違ひがある。

【沿革】〔明治以前〕中古の物語・日記・草子などの假名文は、その當時の口語に基づく文語である點で、今の口語文と性質を同じうするが、これに對立する他の種の文語と口語との差異が、今の文章語と口語との差異に比して、極めて少い點に於て、今日の口語文とは大にその趣を異にする。近古以後、文語と口語との差異が次第に甚しくなつて行つた時代に於ては、ものを書くには文語を用ひるのが常であつて、ただ例外的に文中の對話の部分とか、講義筆記の類に、當時の口語のまゝか、又はこれに近い言語を用ひたものがあるに過ぎない（「平家物語」などの對話の部、及び室町時代の佛典・漢籍の講義錄たる所謂抄物の類など）。江戸時代に於ても同樣であつて、淨瑠璃や洒落本・滑稽本などの對話の部、「古今集遠鏡」（本居宣長著）の如き講義の文、說敎の書や神道・心學の講釋の書などには、口語のまゝに書いたものが少くない。しかしこれらは、談話の寫生又は筆記といふやうな特殊なものとして考へられてゐたので、正式の文とは認められなかつた。〔明治以後〕今日の口語文は、明治以後に起つたものである。さうして自然に生じ發達したものではなく、寧ろ當時の社會改革問題の一面としての國語問題の中に起つた言文一致論から生れ、文學者が自己の作品にこれを試みたところから發達し普及したものである。

〔以上橋本〕

【言文一致論】言（口語）と文（文語）と二途に分れてゐるのを不便とし、文語を口語に一致せしめて、何人にも理解し易からしめようとする論は、明治維新の啓蒙運動の一翼といふべきものであるが、かやうな思想は、既に慶應二年に、前島來輔（密）が將軍に上つた建白書に見えてゐる。「言語は時代に就いて變轉するは中外皆然るかと奉存候。但口舌にすれば談話となり、筆書にすれば文章となり、口談筆記の兩般の趣を異にせざる樣には仕度事に奉存候」とある。明治初期の改革論者福澤諭吉は、自作の諸論文を下婢に讀み聞かせて、その了解することが出來るまで訂正を加へたと云ふが、まだ口語のまゝに書くまでには至らなかつた。しかし同時代の論策家加藤弘之は夙にこれを試みてゐる（明治三年刊「眞政大意」など）。しかし、あまり時代が早過ぎたため、一般に流布するに至らなかつた。明治十五年矢田部良吉は「羅馬字ヲ以テ國語ヲ綴ルノ說」（東洋學藝雜誌）の中に東京語を以て文章を綴るがよいと說き、十六年には「かなのくわい」が起り、その會員に言文一致を唱へる人があり、三宅米吉は各地の方言を調べて口語文を定める必要を說き、島野淸一郎は東京の中流語で日用文を書くがよいと說き、物集高見は文章は話のやうに書くがよいと說いた。翌十七年に組織せられた羅馬字會の會員にも、チャムバレン（B. H. Chamberlain）の如きは、ローマ字文の難解を除くため、文章を言文一致にせねばならぬと說いた。〔講談・落語の速記出版〕かやうに學者の間に言文一致が稱へられて、遂に文學者がその作品にこれを實行するに至るのであるが、それには一方、速記術の傳來の結果、講談・落語が速記せられて出版せられるやうになつた事が一つの要因をなしたと考へられる。その最初は若林玵藏の筆記した三遊亭圓朝の「牡丹燈籠」であるが（明治十七年、稗史出版會社刊）、圓朝の話のまゝが讀めるといふので非常な評判になつた。これは全部口演のまゝの筆記で、會話も地の文も言文一致に統一せられてゐる。これは言文二途にわかれた以來の文學には殆ど例を見ない事で、言文一致（口語文）創成の歷史には、一の飛躍的な里程標を築いたものといつてよいであらう。一體、圓朝の落語は言文一致と密接な關係があるのであつて、言文一致創始者の一人なる二葉亭四迷は、坪內逍遙から「あの圓朝の落語通り書いて見たらどうか」と言はれたのに暗示を得て、創作にかゝつた事を告白してゐる程であるから、その速記の公刊は、多くの影響を與へたものであらうと思はれる。〔小說壇の言文一致の先驅者〕小說に、まづ言文一致を試みたのは、二葉亭四迷と山田美妙で、ついで尾崎紅葉がある。この三人は言文一致の發達に大なる功績を遺した。別に矢崎嵯峨の屋も亦若干の貢獻をしてゐる。發表の順序からすれば、二葉亭の「浮雲」（別項）（明治二十年七月第一卷發行）が最初に來る。別に二葉亭は飜譯にも言文一致を應用し、その「あひゞき」（別項）の如きは、短篇ながら世評高く、單に言文一致の文體としても後來の作家に異常な影響を與へた。彼の文章は、「俺はしたのだ」のやうに「だ」留めにした故を以て、「だ調」と呼ばれた。尤も今日から仔細に點檢すれば必ずしもさうとのみ云へないが、二葉亭と殆ど時を同じうして、山田美妙の「武藏野」（別項）が明治二十年十一月の讀賣新聞に掲げられ、淸新味に讀書界を驚かしたが、それよりも遙かに世評高く、或る意味で彼の作家としての名聲の頂點を劃した「蝴蝶」（別項）（明治二十二年「國民之友」夏期附錄）も亦言文一致であつた。美妙の文は敬語入りで「です」と云ふ言葉で留めてあるので、後世の批評家は、これを「です調」と呼ぶ。然るに玆に「どうもだ調はぶツきら棒だし、ありません調は丁寧過ぎるし」と兩者に不滿の意を洩らして新工夫を凝らしたのは尾崎紅葉である。彼はそのかはりに、「である」を用ひた。それで「である調」と言はれる。かやうにして凡て言文一致として可能なる範圍の試みはなされた。紅葉の慘澹たる文章上の苦勞は言ふまでもないが、二葉亭も自作の廣告に「惡く申せば圓朝子の猿眞似ですが、賞めて申せば此の小說などが日本新文章の嚆矢に相成りませうか」と云つて、暗に言文一致の將來の文體を征服すべきを確信してをり、美妙も亦早く「言文一致論概略」（明治二十一年學海指針）などで、その宣揚には少からず努める所があつた。

【敎育界と言文一致】文部省編輯局から明治二十年に尋常小學讀本七卷が刊行されたが、その第一卷最初は口語文で、他にもかなり多くの口語文を載せた。明治三十年代に入ると敎育界でも言文一致を要望するものが多くなり、三十三年三月には帝國敎育會の內に言文一致會が設けられて、屢々演說會を開いて言文一致を鼓吹し、「言文一致論集」を發行し、翌年二月には國語調査會を設けて、言文一致の實行を國家事業とする事の請願書を貴衆兩院

れた著述も出たが、文章語體のものに比すれば、誠に寥々たるものであつた。然るに日露戰爭後、自然主義の文學が勃興してから、小說は口語文を用ひるのが常となり、ついで新聞雜誌その他にも次第に多く口語文を用ひるやうになつた。併し、口語文は冗長軟弱で、敵を折伏し、大衆を承認せしめる論文や、精緻で簡潔を尙ぶ學術書には不適當であると考へられ、新聞などにも社說は永く文章語體の孤壘を守つたが、陸羯南・朝比奈知泉・池邊三山など相ついで論壇を去り、福本日南の「元祿快擧錄」（別項）、德富蘇峯の「近世日本國民史」調査委員會（但し同會委員大槻文彥が起草し、上田萬年・芳賀矢一・藤岡勝二・大矢透・保科孝一の諸氏が整理したものである）。【刊行】大正五年十二月。

【內容】本書は、明治末年頃の敎養ある東京人の口語を標準とし、これに方言の中、廣く用ひられてゐるものを斟酌して、標準語の語法を叙述したものである。なほ本書の草稿は「音」の部、「語」の部、「文」の部から成立してゐたが、本書はその中の「語」の部だけを刊行したものである。先づ品詞を、名詞・代名詞等十個に分ち、次に各種の助詞の用法を說いてゐる。（十）感動詞は「感情をあらわす聲」「人を

と云ふ一項がある。（七）副詞は「動詞を修飾する場合」「形容詞を修飾する場合」「副詞を修飾する場合」「句・文を修飾するもの」「名詞・數詞などを修飾すること」の五項に分け、（八）接續詞は「接續詞の例」「略した形」と分けてゐる。（九）助詞は、先づその附く語に依つて、(1)「體言用言又わ他の助詞に附くもの」、(2)「用言だけにつくもの」、(3)「體言又わ他の助詞に附くもの」、(4)「用言又わ他の助詞に附くもの」の四種に分ち、次に各種の助詞の用法を說いてゐる。（十）感動詞は「感情をあらわす聲」「人を

十一年學海指針）などで、その宣揚には少からず努める所があつた。

【教育界と言文一致】文部省編輯局から明治二十年に尋常小學讀本七卷が刊行されたが、その第一卷最初は口語文で、他にもかなり多くの口語文を載せた。明治三十年代に入ると教育界でも言文一致を要望するものが多くなり、三十三年三月には帝國教育會の内に言文一致會が設けられて、屢々演說會を開いて言文一致を鼓吹し、「言文一致論集」を發行し、翌年二月には國語調査會を設けて、言文一致の實行を國家事業とする事の請願書を貴衆兩院に提出して採納された。三十四年の全國聯合教育會に於ては、「小學校の教科書の文章は言文一致の方針による事」を可決した。又國語國字問題に關する調査を行ふために設けられた臨時國語調査委員會では、三十五年七月、文章は言文一致體を採用する事とし、これに關する調査を爲すことを決定した。三十七年新撰の國定讀本には多く口語文を採用し、中等教育の國語讀本に於ても、四十年頃から口語文を採ることが多くなつた。〔口語文の流布〕口語文は文學者、ことに小說家の手で初めて作られ、その後も小說に用ひられて、次第に發達したとは云ふものの、日露戰爭前までは、まだ小說界を風靡するにいたらず、紅葉以下硯友社一派の者も、地の文には舊來の文章語を用ひる事があつたのである「金色夜叉」なども地の文は口語文ではない）。又明治三十年代には、口語文典や言文一致の文範などが發行され、文學書以外にも、「氷川清話」（別項）（三十一年刊）、「福翁自傳」（三十二年刊）をはじめ、「國語學小史」「植物生態美觀」「進化論講話」「國民性十論」などの如く口語體で書かれた著述も出たが、文章語體のものに比すれば、誠に寥々たるものであつた。然るに日露戰爭後、自然主義の文學が勃興してから、小說は口語文を用ひるのが常となり、ついで新聞雜誌その他にも次第に多く口語文を用ひるやうになつた。併し、口語文は冗長軟弱で、敵を折伏し、大衆を承認せしめる論文や、精緻で簡潔を尙ぶ學術書には不適當であると考へられ、新聞などにも社說は永く文章語體の孤壘を守つたが、陸羯南・朝比奈知泉・池邊三山など相ついで論壇を去り、福本日南の「元祿快擧錄」（別項）、德富蘇峯の「近世日本國民史」（別項）の如き雄篇も口語文で書かれ、一般學術書も、口語文を用ひるものが益々多くなり、詩や歌にも口語を用ひるものが出來、國語の教科書にも口語文を收むること愈々多く、今日の如き口語文の盛行を見るに至つた。（文語・標準語・口語・口語詩・口語歌參照）〔以上木村・日下部〕

【參考】國語國字改良論說年表　國語調査委員會○國語學精義保科孝一○現代の國語日下部重太郎○現代國語精說同上○言文一致文例山田美妙○口語文用例集文部省

江湖文學（かうこぶんがく）　雜誌【刊行】明治二十五年十一月、哲學書院より創刊、七號で廢刊した。【編輯者】小柳柳々・田岡嶺雲・藤田劍峰・笹川臨風・白河鯉洋等。臨風以外は帝大漢文科出身であるが、當時の臨風は漢文學に興味を抱いてゐたため參加したのであらう。【解說】「東亞說林」の後身で、文學評論を主としたが、漢文趣味の人々によつて成つただけに、雄健豪快、當るべからざるの意氣があつた。寄稿家は藤井紫影・大町桂月・武島羽衣等、概して赤門派の人々が多かつた。〔齋藤（昌）〕

口語法（こうごはふ）　語學書　一冊【著者】國語調査委員會（但し同會委員大槻文彥が起草し、上田萬年・芳賀矢一・藤岡勝二・大矢透・保科孝一の諸氏が整理したものである）。【刊行】大正五年十二月。

【內容】本書は、明治末年頃の教養ある東京人の口語を標準とし、これに方言の中、廣く用ひられてゐるものを斟酌して、標準語の語法を叙述したものである。なほ本書の草稿は「音」の部、「語」の部、「文」の部から成立してゐたが、本書はその中の「語」の部だけを刊行したものである。先づ品詞を、名詞・代名詞等十個に分ち、更に數項に分けて詳說してゐる。即ち（一）名詞は、「固有名詞」と「普通名詞」に分け、「複數の形」と「敬讓の形」を說き、（二）代名詞は「人代名詞」と「指示代名詞」に分ち、（三）數詞は「國語の數詞」「漢語の數詞」「物事の數のとなえ方」「分數・割合・步合を示す言い方」「倍數を示す言い方」「物事の次第をいう言い方」「いくつ・いくら・いく・なん」「大凡の數の言い方」「數詞に『お』を冠らせること」の九項に分ち、（四）動詞は「自動詞」「他動詞」「活用の種類」「活用の形」「活用形の用法」「動詞の時」「命令の言い方」「敬讓の言い方」と分けて說き、（五）形容詞は「第一種形容詞」（青い、寒い等）、「第二種形容詞」（美しい、苦しい等）、「活用の形」「活用形の用法」「なが末にある形容詞」「形容詞の敬讓の言い方」の六項に分つて說き、（六）助動詞は先づその職分によつて三類九種に分つ。第一類（1受身、2可能、3使役、4希望、5推量、6打消、7過去）、第二類（8敬讓）、第三類（9指定）と。この類に從つて、「動詞に附く附き方」「活用の種類」「活用の形」「活用形の用法」等と項を分つて說いてゐる。なほ第三類には「敬讓の意味の加わつたものゝ用い方」と云ふ一項がある。（七）副詞は「動詞を修飾する場合」「形容詞を修飾する場合」「副詞を修飾する場合」「句・文を修飾するもの」「名詞・數詞などを修飾すること」の五項に分け、（八）接續詞は「接續詞の例」「略した形」と分けてゐる。（九）助詞は、先づその附く語に依つて、（1）「體言用言又わ他の助詞に附くもの」、（2）「用言だけにつくもの」、（3）「體言又わ他の助詞に附くもの」、（4）「用言又わ他の助詞に附くもの」の四種に分ち、次に各種の助詞の用法を說いてゐる。（十）感動詞は「感情をあらわす聲」「人を呼ぶときに發する聲」「人に答えるときに發する聲」「打消して答えるときに發する聲」の四項に分けて說いてゐる。次に詞の組立と標して、接頭語及び接尾語について說いてゐる等、全體を通じて豐富に例が擧げてある。【備考】本書には別に「口語法別記」がある。別記は上記の說を考證し解說したものである。〔龜田〕

口語法調査報告書（こうごはふてうさはうこくしよ）　語學書　二冊【著者】國語調査委員會（但し本書の整理は、調査事務囑託龜田次郎・神田城太郎・榊原叔雄諸氏が擔當した）。【刊行】明治三十九年十二月。

【內容】國語調査會は、標準語制定の參考に資するため、明治三十六年九月、調査事項三十八條を印刷にして各府縣へ送つて、その調査を依賴した。府縣は師範學校・教育會等で、その各項につきてその府縣の方言を調査して、國語調査委員會に報告した。その報告を調査項目の順に列擧したのが本書である。その項目は三十八條あつて、諸方言に於て差異ありと思はれる語法上の主要なる諸點はほぼ盡くしてゐる。なほ本書の初めに、「口語法分布圖」に關する注意及び分布目錄」、卷末に「口語法調

査報告附記」が添へてある。本書は極めて大規模に方言の調査を行つたもので、學界に貢獻したこと大なるものがある。とは云へ、報告が頗る多數の人によつて爲されてゐるために、精粗一樣でないこと、報告者中には言語學上の知識が不十分な人も少くなく、從つてその報告は必ずしも信用しがたいのがあることは、その缺點である。即ち本書は今日に於ては、方言研究の最上の資料ではあるが、而も十分なものとは言ひ難いものである。【附記】口語法分布圖は、本書の報告を整理して地圖に表はしたものである。〔龜田〕

口語法分布圖（こうごはふぶんぷづ）　語學書　圖版三十七枚　【著者】國語調査委員會（但し同會補助委員岡田正美・保科孝一・新村出の諸氏、調査事務囑託龜田次郎が擔當した）。【刊行】明治四十年二月。

【內容】本圖は「口語法調査報告書」（別項）の附圖である。明治三十六年九月、國語調査委員會は三十八項の調査項目を擧げて、全國各府縣に調査を依頼した。府縣は約半年の後調査を終へて報告した。その報告を整理して方言の分布を地圖に書き表はしたのが本圖である。本圖はもと九十枚から成るものであるが、更に小異を捨てて大同につき、整理して五種三十七枚にしたのが次の如くである。〔A未來の云ひ方〕。(1)書かう、書くべい、書かず等の分布圖（以下「等の分布圖」の五字を略す）。(2)受けよう、受けう、受けべい、受けず。(3)來う、來よう、來べー、來うず。(4)爲よう、爲う、爲べー。爲ず。〔B打消の云ひ方〕。(5)ぬ、ない。(6)來ぬ、來ない。(7)爲ぬ、爲ない。(8)なんだ、なかつた。(9)いで、ないで。(10)せねば、しなければ。(11)來まい、來まい、來まい。(12)爲まい、爲まい、爲まい。〔C命令の云ひ方〕。(13)見よ、見い、見ろ。(14)受けよ、受けい、受けろ。(15)來よ、來い。(16)爲よ、爲い、爲ろ。(17)れよ、られよ、れろ、られろ。〔D條件の云ひ方〕。(18)條件ノ云ヒ方。〔E指定の云ひ方〕。(19)だ、ぢや、や。(20)です、どす、だす。〔F活用の形〕。(21)出した、出いた（佐行四段活用ノ語ノ連用形）。(22)拂つた、拂うた（波行四段活用ノ語ノ連用形）。(23)飲んだ、遊んだ、飲うだ、遊うだ（麻行四段活用ノ語ノ連用形）。(24)なされたなさつた、なすつた。(25)なされます、なさります、なさいます。(26)讀ませた、讀ました。(27)寒くなる、宜しくない、寒うなる、宜しうない。(28)上二段活用。(29)下二段活用。(30)れる、るる（受身・勢相ノ助動詞ノ終止形・連體形）。(31)させる、さする、さす（使役ノ助動詞ノ終止形・連體形）。(32)奈行變格活用。(33)(34)(35)漢語ヲ動詞ニスル仕方（三種）。(36)せられる、しられる、される（名詞又ハ漢語ヲ受身ノ動詞・勢相ノ動詞ニシタルモノ）。(37)ける、せる、てる、へる、める、れる、ねる（四段活用及ビ奈行變格活用ノ動詞ノ受身又ハ勢相ノ形ヲ約メタルモノ）以上。なほ「口語法調査報告書」の中に本圖製作の方針、及び本圖の概觀を記してゐる。「概觀」に曰く、(イ)口語の分布は大體に於て、越中・飛驒・美濃・三河の東境を界として東西二つに分れる。(ロ)桑名・唐津・延岡等西方の區域にありながら、東部の口語を用ひて、周圍の語から孤立し、謂はゆる「言語の島」をなしてゐる。(ハ)普通に考へて古形に近いと思はれる語、雅馴に聞える語は概して西部に在る。然し東部にも稀に古形の語が存する。(ニ)古形の語の多いのは九州が第一で、四國及び中國の西部がこれに次いでゐる等のことを記してゐる。本圖は「口語法調査報告書」を基礎にして作つたものであるが、この報告書は別項に記した如く、調査方法にかなりの不備があるから、本圖も亦確定的のものと見ることは出來ない。しかし方言分布の大綱はほぼ知り得るから、國語の地理的研究に裨益すること甚大なものがある。なほ詳細な點に於ては、現在本圖の右に出づるものはない。

【參考】口語法調査報告書　○音韻分布圖　○音韻調査報告書〔龜田〕

口語法別記（こうごはふべつき）　語學書　一冊　【著者】大槻文彥　【刊行】大正六年四月　【解說】國語調査委員會編纂の「口語法」（別項）に對する別記であつて、口語法に擧げた各項について、現代諸方言に於ける狀態及び歷史的開展を多くの實例を擧げて述べ、口語法に擧げたものを標準的のものと認めた理由を說明したもので、資料の選擇や取扱法等に多少の缺點はあるけれども、口語法全般にわたり地理的及び歷史的に觀察した最初のものであつて、國語の方言語法、歷史的文法の基礎を置いたものとも觀るべく、學問上の價値は多大である。〔橋本〕

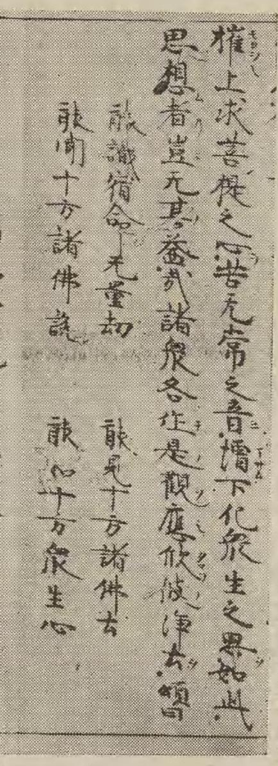
好古餘錄（かうこよろく）　「文敎溫故批考」を見よ。

黃山谷集（くわうざんこくしふ）　詩文集　九十七卷　【本稱】山谷先生全書　【著者】宋の黃庭堅。山谷と號す。今の江西省分寧の人。【內容】明の徐岱等の刻本に據れば、內集三十卷は、賦楚詞共一卷、古詩七卷、律詩三卷、六言詩一卷、銘一卷、贊一卷、頌一卷、序一卷、記二卷、書一卷、表・奏・狀・雜著共一卷、文一卷、墓誌銘二卷、碑銘・碣共一卷、題跋六卷。に分たれ、卷首には嘉靖五年徐岱・同六年周季鳳の刻序、卷末には洪炎の序がある。外集十四卷は、卷一—賦・古詩、卷二—五—古詩、卷六・七—律詩、卷八—哀詞・墓誌銘、卷九—雜文、卷十—書・雜文、卷十一—楚詞・古詩、卷十二—古詩、卷十三・十四—律詩。別集二十卷は、卷一—古詩・律詩・六言詩・挽詩、卷二—銘・贊・頌、卷三—序、卷四—記・律賦・箋注、卷五—書・表・奏・狀・啓・婚書、卷六—雜著、卷七—疏・祭文、卷八—行狀、卷九—墓誌銘・墓表、卷十—十二—題跋、卷十三—二十—書簡。に分ち、卷末に黃營の跋がある。詞一卷は首に目錄があり、別に體を分たず、篇名だけを列擧してゐる。簡尺二卷は首に目錄無く、簡牘のみを集め、年譜三十卷は首に黃營の序があり、末に周季鳳の山谷先生別傳と、查仲道の跋がある。【傳來】本書の我が國に傳來した時代は詳かでないが、足利時代の中葉以後、五山の僧徒の間に於て、「東坡集」に次いで行はれ、これを抄錄・評註する者も多く、釋萬里の「帳中香」の如きは最も著名なものである。【批評】黃庭堅は東坡に從遊して、その庇護の下に、名聲を發したものの中で、最も年長（東坡より少きこと九歲）であり、且つ最も傑出してゐたので、東坡に配して蘇黃と云ふ。彼の詩はもと杜甫を學び、變じて深刻となしたもので、拗峭以て自ら高しとし、務めて出俗の語を爲すことを以てその生命とした。故にその詩は奇異人目を驚かすものはあつても、從容の趣は無く、その自ら以て、奇と爲すものも、寧ろその僻に失して、生硬の憾みがある。併し、その天賦の詩才と、雄渾の筆力とは自ら一門戶を闢いた所以で、宋の呂居仁は嘗て江西詩派圖を作り、庭堅・師道以下二十五人を列して詩法を傳へたものとし、而して庭堅を以てその宗とした。

【註釋書】山谷內集詩注宋任淵〇外集注史容〇別集注史季溫　〔宇野・本多〕

翺之（かうし）「惠鳳」（ゑほう）を見よ。

講式（かうしき）　佛敎　【名義】講とは信仰を一にした同志相結んで、精進修行する佛會の謂であつて、講式は、即ちその式作法を云ふ。【性質】講會は他の大法會儀と異つて、純眞に信仰に生きんとした人達の鑽仰の心から成るもので、同志相結び、宗敎的法悅に與らんと



賢講式、十一面觀音講式、文殊講式、地藏講式、愛染講式、不動講式、毘沙門天講式、大黑天講式、歡喜天講式、荒神講式、辨財天講式、乙護法講式、北辰講式、白山權現講式、八幡宮講式。熊野權現

【組織】今日に於て存するもののみでも、數百を以て數へられるが、大體に於て組織に變化はない。式として最も整つたものと云はれてゐる往生講式に依れば、初め道場莊嚴—法用に始まり、次は表白神分、勸請と次第し、式文第一段朗唱、次は歌讃、禮拜、佛號念誦、次は第二段式文より又歌讃、禮拜、佛號念誦と次第式とはやゝ異なつてゐる。然し又、講式と見られ得るものである。その他、惠心僧都作と云ふものに、「涅槃講式」「慈慧大師講式」などあるが、眞僞不明である。なほ僧都の作としては「十樂講作法」なるものがあつたらしい。次いで有名なのは、永觀律師の「往生講式」で「阿彌陀講式」とも云ひ、承曆三年六月十日の製作で、式法整齊、式の根本と稱せられてゐる。次いで注意すべきは、叡山眞源の「順次往生講式」で、段々の歌讃に催馬樂曲を附した聲歌を有するもの、眞言家では當時往生完了した

人を列して詩法を傳へたものとし、而して庭堅を以てその宗とした。

【註釋書】山谷內集詩注宋任淵○外集注史容○別集注史季溫　〔宇野・本多〕

翺之（かうし）「惠鳳」を見よ。

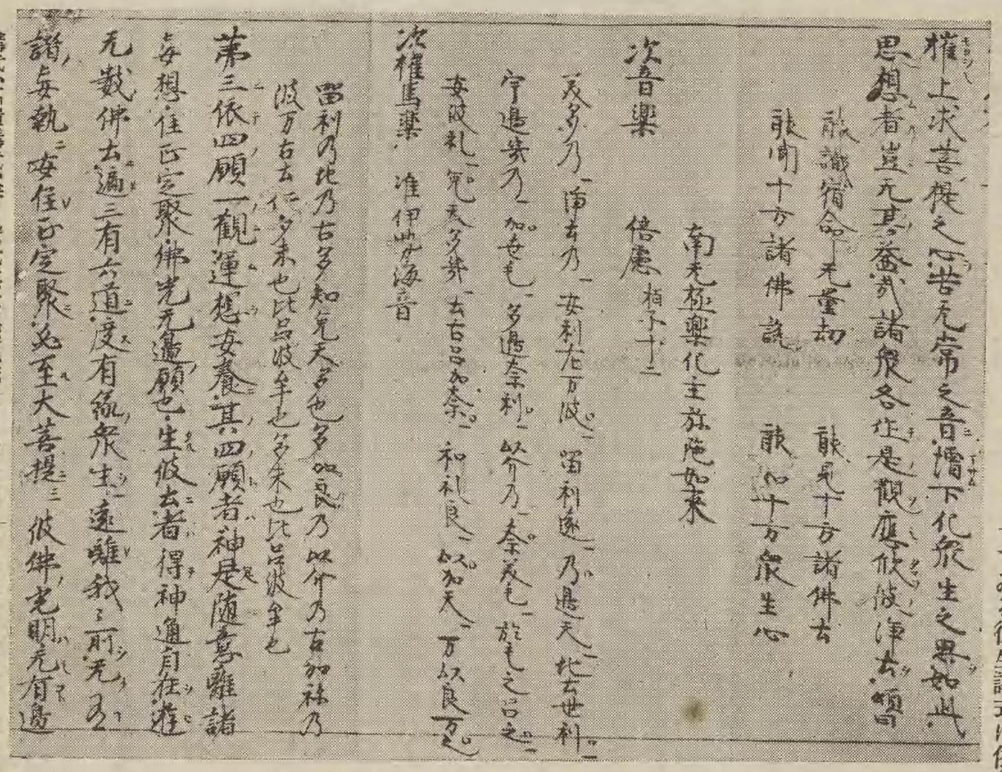
講式（かうしき）　佛教　【名義】講とは信仰を一にした同志相結んで、精進修行する佛會の謂であつて、講式は、即ちその式作法を云ふ。

【性質】講會は他の大法會儀と異つて、純眞に信仰に生きんとした人達の鑽仰の心から成るもので、同志相結び、宗教的法悅に與らんと精進する一つの修行法であつた。これは、平安朝中期頃の淨土思想の發達につれて生じた自覺的な宗教思想が形成した儀式である。その式作法は、他の法會の法則と異つて、文學的な形態で法會の樣式を表現したもので、單なる式次第書と云ふものではない。即ち講式文、歌讃が主要素となつてゐる。而して式文には曲節があつて朗唱されるものである。式文の文體は多く漢文體であるが、柿本講式とか和字往生講式とかの國文體のものもある。

【諸本】日本歌謠集成第四卷・傳教大師全集・弘法大師全集・興教大師全集・惠心僧都全集・聖德太子講式集（大屋德城編）等がある。

【種類】（一）佛・菩薩・神明、（二）教祖碩德、（三）宗義經典、（四）音藝歌舞を讃嘆する四種の講に分類される。例へば（一）には觀音講とか藥師講とか山王講とか、（二）には聖德太子講とか、慈慧大師講とかがあり、（三）には往生講・迎講の如きもの、（四）には音樂講とか今樣講とかがある。これ等の講には各々讃嘆の式文があるわけで、例として名目のみを少しく擧げてみると、次の如きものがある。

釋迦講式、阿彌陀講式、藥師講式、觀音講式、普賢講式、十一面觀音講式、文殊講式、地藏講式、愛染講式、不動講式、毘沙門天講式、大黑天講式、歡喜天講式、荒神講式、辯財天講式、乙護法講式、北辰講式、白山權現講式、八幡宮講式、熊野權現講式、高貴講式、春日講式、歌山權現講式、天滿天神講式、山王講式、神祇講式、丹生講式、熱田講式、舍利講式、涅槃講式、誕生講式、佛生會式、弘法大師講式、慈慧大師講式、尊師講式、報恩講式、聖德太子講式、六道講式、往生講式、法華講式、發心講式、誓願講式、管絃講式、朗詠講式、音樂講式、妙音天講式、延年講式、柿本講式等。



權上求菩提之心若元常之音擔下化衆生之界如其
思想者豈元真蓋哉諸衆各住是觀應依彼淨土願
敬識宿命無量劫　願見十方諸佛去
願聞十方諸佛說　願心十方衆生心
南无極樂化主說法如來
次音樂　信慶 相下十二
及多乃一南无乃一安利佗婆伽一留利逸一乃過夫一北去世利一
宇過安乃一如毛一多過奉利一竹乃一奉毛一於毛之口之一
安波礼一宛天多弁一古古加奈一和礼良一如天一万以良乃
次權馬樂　准伊世海音
留利乃比乃古多知元天多也多如良乃以竹乃古加礼乃
波万古古一多未也比品波年也多未也比品波年也
第三依四顧一觀運慈安養其四顧者神是隨喜離諸
妄想住正定聚佛光元遍顧也生彼去者得神通自在遊
元數佛去適三有六道度有孤衆生遠離我一所元乃
諸妄執一安住正定聚必至大菩提一彼佛光明元有邊

【組織】今日に於て存するもののみでも、數百を以て數へられるが、大體に於て組織に變化はない。式として最も整つたものと云はれてゐる往生講式に依れば、初め道場莊嚴―法用に始まり、勸請と次第し、式文第一段朗唱、次は歌讃、禮拜、佛號念誦、次は第二段式文より又歌讃、禮拜、佛號念誦と次第して第七段の式文終り、最後講會の趣旨を述べる表白あり、歌讃の廻向を以て終了する。大體に於てこれが通則であるが、段を分つに就いては、三段のもの、五段のもの、七段のもの種々である。歌讃には、漢語伽陀を用ふるのであるが、催馬樂曲應用の聲歌を用ひたもの、和讃、和歌、朗詠詩句を用ひたもの等がある。

順次往生講式

【沿革】傳教大師・弘法大師の製作と傳へるのは後世假託のものである。寛和二年始修の「迎講」は、「六道講式」或は「二十五三昧式」と云ふもので表現され、惠心僧都の作と傳へられてゐる。六道の苦を說いたものが、最も有名である。なほ惠心僧都に「普賢講作法」一卷の作があるが、通途の式とはやゝ異なつてゐる。然し又、講式と見られ得るものである。その他、惠心僧都作と云ふものに、「涅槃講式」「慈慧大師講式」などあるが、眞僞不明である。なほ僧都の作としては「十樂講作法」なるものがあつたらしい。次いで有名なのは、永觀律師の「往生講式」で「阿彌陀講式」とも云ひ、承曆三年六月十日の製作で、式法整齊、式の根本と稱せられてゐる。次いで注意すべきは、叡山眞源の「順次往生講式」で、段々の歌讃に催馬樂曲を附した聲歌を有するもの、眞言家では當時延命院元杲の「舍利講式」等が傳へられてゐるが、とにかく講會講式の起りは、平安朝中期頃と見てよい。鎌倉期に至つては、製作甚だ盛んに行はれ、眞言家には、守覺法親王・勝賢覺鑁等に作があり、當時有名なものには、栂尾明惠上人の「涅槃講式」「遺跡講式」「舍利講式」「羅漢講式」の四式があり、何れも眞言家で用ひられ、講式中稀に見る個性的なものである。平安朝末頃から音藝に關する講會が多く行はれてゐる。各種の「管絃講」「音樂講」があり、又「今樣講」「朗詠講」などがあつて、「管絃講」「音樂講」は、樂器又は音樂の佛神を讃嘆し、「今樣講」「朗詠講」には、今樣・朗詠が讃嘆されてゐる。【附記】講式の曲節は俗曲に近く、完全な聲明ではない。それだけ世俗の音曲と交涉が深かつたらしく、平曲は殊に講式、就中天台の「六道講式」の曲節に酷似すると云はれてゐる。

【參考】聲明本展觀目錄中川善敎編○密敎學報大山公淳（眞言宗講式に關したもの）○啓明會第十九回講演集　高野辰之　〔大山・筑土〕

孔子家語（こうしけご）　子書儒家類（史書傳系類）十卷（又は八卷）【著者】王肅の僞作【成

立】三國時代（魏）【由來】本書に王肅注・何孟春補注の二本があり、「王注本」に後序一篇があつて、孔安國が家語の來由を述べた序、孔子から安國に至るまでの世系、安國の孫孔衍の家語に關する上書等を錄してゐる。何本は孔衍の上書を卷首に置き、安國の序を王肅が安國に代つて作つたものとしてその次に載せてゐる。所謂孔安國の序に、「孔子家語は、皆當時の公卿士大夫、及び七十二弟子の諮訪し交々相對せる所の言語なり。既にして諸弟子各々自ら其の問へる所を記し、論語・孝經と竝ぶ。時に弟子其の正實にして事に切なる者を取り、別出して論語と爲し、その餘は都て之を集錄し、名づけて孔子家語と云ふ」とあり、「漢書」藝文志は、「六藝論語」の部に、「孔子家語」二十七卷を著錄してゐる。顏師古の注には、「今有る所の家語に非ず」と云ふ。今有る所の家語とは卽ち王肅から傳はつて今日に至る者で、卽ち「孔子家語」は古くその書はあつたが夙く亡んで、王肅以後又今の家語が存するのである。王肅の自序には本書をその門人であり、孔子二十二世の孫である孔猛に得たと稱して、孔氏の舊書とし、而して謂はゆる安國の序には詳かに本書の來由を述べ、荀子が秦に入つた時、孔子の語及び諸國の事、七十二弟子の言凡そ百餘篇を昭王に與へ、始皇の時書を焚いたが、「孔子家語」は諸子の列に在つたので厄を免れたと云ひ、本書を百餘篇中に在つたものとする。漢に入つて景帝の末年、弘く遺言を募つた時、もと呂氏の家に在つた家語を得たが、頗る錯雜して居つたので、これを掌書に付して、曲禮衆篇と簡を亂し、合せて祕府に藏した。安國が朝廷に仕へるに及んで、また副本を募り、事類を以て撰次して四十四篇と爲したと云ふ。而して謂はゆる孔衍の上書には、戴聖が「禮記」を編纂するに際して、曲禮が足らなかつたので、家語の雜亂したもの、及び子思・孟子・荀子等の書を取つてこれを補ひ、劉向が書を校する時、「家語」の文が多く「禮記」の中に在るので、「家語」の本文を削つたと云ふ。これは本書の先人の書である事を證明しようとして、却つてその七十子撰集時代の舊い面目を失つてゐる事を暗示するものである。且つ又本書の本文は殆ど凡て「左傳」「國語」「孟子」「荀子」「呂氏春秋」「韓詩外傳」「新序」「說苑」「二戴記」等に見えるもので、七十子時代の書に於てかゝる事は甚だ疑ふべきものがある。假に「左傳」以下の書が本書の文を取つたとしても、安國の序に、この書はもと流傳が甚だ少く、祕府に藏せられたと云ふのと合はない。故に宋の王柏に至つて、本書を以て王肅の僞作と斷定したのは、動かすべからざる鐵案である。

【內容】その篇目は（通行本に從ふ）、

（第一卷）相魯、始誅、王言解、大婚解、儒行解、問禮、五儀解。（第二卷）致思、三恕、好生。（第三卷）觀周、弟子行、賢君、辯政。（第四卷）六本、辯物、哀公問政。（第五卷）顏回、子路初見、在厄、入官、困誓、五帝德。（第六卷）五帝、執轡、本命解、論禮。（第七卷）觀節射、郊問、五刑解、刑政、禮運。（第八卷）冠頌解、廟制解、辯樂解、問玉、屈節解。（第九卷）七十二弟子解、本姓解、終紀解、正論解。（第十卷）曲禮子貢問、曲禮子夏問、曲禮公西赤問（八卷の何孟春本は篇目及び序次を異にす）。

その內容は主として孔子の言語・行事と、及び門人の對論の語であつて、「孔子家語」とは、孔氏一家中の語の意である。王肅が鄭玄の學に對して異を立てた事は明かな事實であるが（本書自序・三國志本傳・孔穎達等の五經正義中に引く王肅の說）、その最も著しいのは、祭天・五帝・廟制・三年喪の期限の諸項に關してである。前三者は互ひに關係があるが、鄭玄は昊天上帝と五帝とを合せて六とする謂はゆる六天記で、その祭祀に關しては、冬至の日に地上の圜丘に昊天上帝を祭り、五時に五帝を郊に祭り、夏正の月感生帝を南郊に祭り、また感生帝を郊に禘すとする。これに對して王肅は天は一で、五帝とは五行の神で、昊天上帝と共に六とすべきものではなく、又郊と圜丘とは一で、名は異なるも實は一である。而して禘は宗廟の祭であつて、郊に於てするのではないとし、感生說は全然これを排した。又廟制に就いては、鄭玄は禮記祭法の祖宗を說いて、正者が明堂に於て五天神五人帝を祀り、その祖をこれに配するとし、王肅は、祖宗は王者がその祖の功德ある者を永久に祭るために建てる二つの廟であるとする。又三年喪の期限に就いては、鄭玄は二十七ヶ月で、王肅は二十五ヶ月で終るとする。凡そこれ等の說は、單に經典の解釋のみに止まらず、實際に於ける國家の制度に關係する所が少くないので、王肅は自說を證明する資料として、本書の僞撰を敢てしたものであらう。禮の解釋としては、鄭玄よりも寧ろ王肅の說の方が勝つて居るやうであるが、兩家の學說は永く論爭を續けた後に至つて、祭天に關しては王說が勝を制し、喪紀に關しては鄭說が勢を得て今日に及んでゐる。本書の參考すべき價値は、又この點に存する。

【註釋書】家語王肅注十卷魏王肅○標題句解孔子家語六卷元王廣謀○家語何孟春注八卷明何孟春○家語疏證六卷清孫志祖○增注孔子家語十卷太宰純○補注孔子家語十卷岡白駒○標箋孔子家語十卷太宰純增注・千葉玄之標箋（宇野・本多）

孔子縞子時藍染（こうしじまときにあるそめ）　草雙紙

黃表紙　三册　十五丁十六圖【作者】山東京傳【畫工】政演（京傳）【名稱】孔子の敎が時勢に適合して、盛んに行はれ始めた意を織物にかけた名。【刊行】寬政元年大和田出店版【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙二十五種（日本名著全集）・黃表紙傑作集（蘇武利三郎編）・黃表紙集（近代日本文學大系）【題材】寬政の改革、就中朱子學奬勵に得てゐる。

【梗概】聖代の時が至り、人々は聖賢の敎を守り、物貴ひ非人は橋の上で漢籍を講じ、金持は卑しめられ、博奕勝負事は嫌はれ、兩國や山下には巾着切られ、大音寺前には追剝がれが出沒し、札錢を貫つて客は芝居に入り、入込の風呂に這入る者がない。世人は君子の德を得た故、地はその德に感じて萍かぬ野山にまで五穀實り、年貢の倍額徵收を百姓から鱗長左衞門へ嘆願する。天も亦その德に感じて空から黃金を降らせ、米と金とが山川家屋を埋めたが、世界の人々はそれを搔き分けて辛き命を助かる。

【構想】現實的政治家、田沼意次の積極政策に慣れた江戸市民には、樂翁公の施政は餘りに消極的で且つ保守的であつた。改革の潮流中に喘いでゐる民衆の苦惱を見、天明七年五月の米騷動による施米や、米價引下げの功勞者伊奈半左衞門を拉し來り、更に天明三年七月七日の淺間山の大噴火の被害を取り入れてゐる。これ等の事實を全く逆に見て、儒學奬勵の提灯持の神妙さを裝うて諷刺の針を覆うてゐる。繪も亦妙である。【史的地位】寬政の改革から題材を得た黃表紙は、天明七年に「世之中承知重忠」（和歌林泉作）、同八年に「文武二道萬石通」（別項）「仁田四郎富士人穴見物」（京傳作）があり、寬政元年には本書と「鸚鵡返文武二道」「天下一面鏡梅鉢」（各別項）、同二年には「藍返行義霞」と「玉磨靑砥錢」（別項）「新吉原聖賢書圖」（二世喜三二）、「染直大名縞」（信普作）、「磨光世中魂」「地獄かみのたゝうはり一面照子淨頗梨」（京傳作）等甚だ多い。本書の骨組は未來記型で、「夫從以來記」に、朱子學奬勵の事實を取り入れ、「寬刪日記」（さるなのにかから泉流）。【梗概】都の柑子買が、例年の如く丹波へ柑子を買ひに行く。いつもの柑子作りの許へ立寄り、正月も段々近づいたので柑子を受取りに來たが、俵へつめて置いてくれたかと尋ねると、まだその儘との事に、もつと奥へ行つて參るから、歸る時までに俵へ入れて置いてくれと賴んで行く。柑子作りは、實は値がよかつたので註文の品は又賣してしまつ口を解けと言ふので、恐ろしうて何と解かれようぞとて逃げようとするが、やつと解くと、取つて嚙まうと言ふので逃げてしまふ。【附記】和泉流だけに殘つてゐる。もと加州家の狂言である。

後室色縮緬（こうしついろちりめん）　浮世草子　五册

【作者】西澤一風【別稱】色縮緬百人後家。【刊行】奥に、「享保三戊戌年正月吉日洛東三郎に會ふ二人の女が、互の身の上を知つて見ると、二人は既に故人となつた同一の男と契ては趣向を凝らしたものである。別名に「百人後家」とあるが、實際は百人はおろか、その十分一に過ぎない。收めた寡婦好色說話の全體を通じて、着想・構想・意匠等に一貫したものは見出せない。ただ興味を本として適意に集め綴つたものと見える。第二話の坂田藤十

序には詳かに本書の來由を述べ、荀子が秦に入つた時、孔子の語及び諸國の事、七十二弟子の言凡そ百餘篇を昭王に與へ、始皇の時書を焚いたが、「孔子家語」は諸子の列に在つたので厄を免れたと云ひ、本書を百餘篇中に在つたものとする。漢に入つて景帝の末年、弘く遺言を募つた時、もと呂氏の家に在つた家語を得たが、頗る錯雜して居つたので、これを掌書に付して、曲禮衆篇と簡を亂し、合せて祕府に藏した。安國が朝廷に仕へるに及んで、また副本を募り、事類を以て撰次して四本、辯物、哀公問政。（第五卷）顏回、子路初見、在厄、入官、困誓、五帝德。（第六卷）五帝、執轡、本命解、論禮。（第七卷）觀節射、郊問、五刑解、刑政、禮運。（第八卷）冠頌解、廟制解、辯樂解、問玉、屈節解。（第九卷）七十二弟子解、本姓解、終紀解、正論解。（第十卷）曲禮子貢問、曲禮子夏問、曲禮公西赤問（八卷の何孟春本は篇目及び序次を異にす）。

その內容は主として孔子の言語・行事と、及び門人の對論の語であつて、「孔子家語」とは、孔氏一家中の語の意である。王肅が鄭玄の學に對して異を立てた事は明かな事實であるが王肅は自說を證明する資料として、本書の僞撰を敢てしたものであらう。禮の解釋としては、鄭玄よりも寧ろ王肅の說の方が勝つて居るやうであるが、兩家の學說は永く論爭を續けた後に至つて、祭天に關しては王說が勝を制し、喪紀に關しては鄭說が勢を得て今日に及んでゐる。本書の參考すべき價値は、又この點に存する。

【註釋書】家語王肅注十卷魏王肅○標題句解孔子家語六卷元王廉謀○家語何孟春注八卷明何孟春○家語疏證六卷清孫志祖○增注孔子家語十

【構想】現實的政治家、田沼意次の積極政策に慣れた江戶市民には、樂翁公の施政は餘りに消極的で且つ保守的であつた。改革の潮流中に喘いでゐる民衆の苦惱を見、天明七年五月の米騷動による施米や、米價引下げの功勞者伊奈半左衞門を拉し來り、更に天明三年七月七日の淺間山の大噴火の被害を取り入れてゐる。これ等の事實を全く逆に見て、儒學奬勵の提灯持の神妙さを裝うて諷刺の針を覆うてゐる。繪も亦妙である。【史的地位】寬政の改革から題材を得た黃表紙は、天明七年に「世之中承知重忠」（和歌林泉作）、同八年に「文武二道萬石通」（別項）「七田四郎富士人穴見物」（京傳作）があり、寬政元年には本書と「鸚鵡返文武二道」「天下一面鏡梅鉢」（各別項）、同二年には「藍返行義霞」と「玉磨青砥錢」（別項）「新吉原聖賢書圖」（二世喜三二）、「染直大名縞」（信普作）、「磨光世中魂」「地獄一面照子淨頗梨」（京傳作）等甚だ多い。本書の骨組は未來記型で、「夫從以來記」に、朱子學奬勵の事實を取り入れ、「莫切自根金生木」（別項）の色彩を加へた趣向は鮮かである。「莫切自根金生木」には金の溜る理由を述べてゐないが、本書にはそれを寬政の改革の理想、特に儒教倫理の普及に見出してゐる。「新吉原聖賢書圖」と「金隆豐年貢」（享和二年版、白銀臺一丸作）は本書と「藍返行義霞」の中間を行く作品で、又本書の漢學的分子を遊里生活に附會したものには「邇道之路無語帖」（寬政二年版、萬別作）があり、三馬の「御贈親孝經」（享和二年版）もこの系統に屬する。【末書】後編は「孔子編藍返行義霞」（寬政二年版、山東京傳作）。後編三編は「磨光世中魂」（同二年版、竹塚翁東子作）。

孔子編于時藍染

【備考】〔藍返行義霞〕金を降らせ過ぎて人民が難義をするので天上へ運び返したところ、遊里はさびれ、遊贈場には化物が出る。天帝は諸星を嫖客に仕立てて、下界で遊ばせたので、遊里も榮え、萬民愁眉を開く。〔磨光世中魂〕下人まで子のたまはくで、殿樣が無學だと、臣下は身を退いて山に入る。岡本源二郎は心學の力で殿樣を仁にし、褒美の金で油屋をはじめる。〔小池〕

柑子俵（かうじだはら）　能狂言【格式】小習（和泉流）。【梗概】都の柑子買が、例年の如く丹波へ柑子を買ひに行く。いつもの柑子作りの許へ立寄り、正月も段々近づいたので柑子を受取りに來たが、俵へつめて置いてくれたかと尋ねると、まだその儘との事に、もつと奧へ行つて參るから、歸る時までに俵へ入れて置いてくれと賴んで行く。柑子作りは、實は値がよかつたので註文の品は又賣してしまつたが、他の柑子を才覺しようと思つてゐるうちに、意外に早く柑子買が來て困つたと言ひ、思案して子供を呼び出し、子として親の言ふ事は聞くであらうと念を押した上、言ひにくい事ながらと事情を物語り、其方（たち）を俵の中へ入れてやるから、途中で柑子が化けた體にもてなし逃げ歸れと命ずる。子供も承知するので用意する。そこへ柑子買は立戻つて、今年のやうな思ふまゝの暮は無い。買ひ集めた柑子は皆馬につけて上したから、今一俵は某が自分で背負つて歸らうと言ふ。そこで柑子俵と見せかけた俵を負はす。柑子買は重い重いと言ひながら出掛ける。途中で休まうとすると、後で、下すな下すなと聲がする。氣味惡がつて急がうとすると急ぐなと急ぐなと聲がする。怖がつて俵を下すと俵が轉り廻り、俵の口を解けと言ふので、恐ろしうて何と解かれようぞとて逃げようとするが、やつと解くと、取つて嚙まうと言ふので逃げてしまふ。【附記】和泉流だけに殘つてゐる。もと加州家の狂言である。〔淵田〕

後室色縮緬（こうしついろちりめん）　浮世草子　五册【作者】西澤一風【別稱】色縮緬百人後家。【刊行】奧に、「享保三戊戌年正月吉日洛東三條なわていせや左兵衞板」とある。【內容】一册二條、都合十條の讀切說話から成る。但し卷一の第一說話だけは、本書の序とすべきものである。京東山の邊に八十歲ばかりの老翁と、七十歲ばかりの老嫗夫婦が住んでゐる。嫗が川に洗濯してゐると、川上から一個の酒盃が流れて來た。拾ひ上げて見ると、高蒔繪に野郎の繪が描いてあつた。すると川上からこの盃を追うて來た二十歲ばかりの女があつたので、嫗は盃をこの女に返して、その由來を問ふと、女は答へていふ。主と賴むは西國方の歷々の息女で、今三十歲ばかりの寡婦である。今日の盃の御禮こゝにては述べ盡し難ければ、願はくは山莊に來給へとて、伴ひ行く。主出でて歡待し、老翁をも共に召して、世の寡婦の好色に關する樣々の話を語らせて慰まれた。その話が、この書中に收むるものであるとあつて、第二話から、この老翁の話として、寡婦好色談を綴つて、各章を讀切にしてある。【批評】この序の趣向は「好色三代男」（別項）に倣つたものであらう。酒盃のことも同案である。かゝる小說的な序を置くことは、一風の常套手段であつて、「御前義經記」「風流今平家」「御前二代曾我」（各別項）等にも見る所である。これが全篇の上に齎らす效果は大きいとは思はれないが、序そのものとしては趣向を凝らしたものである。別名に「百人後家」とあるが、實際は百人はおろか、その十分一に過ぎない。收めた寡婦好色說話の全體を通じて、着想・構想・意匠等に一貫したものは見出せない。ただ興味を本として適意に集め綴つたものと見える。第二話の坂田藤十郎に會ふ二人の女が、互の身の上を知つて見ると、二人は既に故人となつた同一の男と契つてゐたと知れて、二人共に剃髮する話。第四の貧故に夫婦別れをして女は妓となり、後、夫を持つと、先夫の幽靈が現はれ、又旅僧に先夫の溺死した事を聞かされて發心する話。第三の好色の末幾度か夫を變へた女が、零落して露命を辛うじて繫ぐに至つた話などの、好色生活に絡はる悲哀を終局とする話の多きところから、作者にさうした悲哀を語る意圖のあつたのではないかとも推されるが、併し虛心に本書を讀む者の印象は、それよりは寧ろ好色生活の歡びの方が强い。それで本書の性質はその方に在るといふべきである。〔藤村〕

孝子嫩物語（かうしふたばものがたり）　讀本　五卷【作者】高井蘭山【挿畫】抱亭北鶩・昇亭北壽・蹄齋北馬【名稱】角書に姉菅根弟孝太郎とあり、この二人の孝養を物語るに據る。【刊行】文化五年。東都西宮彌兵衞、大和屋文六、同伊助版。

【梗概】播磨國の守護赤松政則の家臣熊代喜藤太は、同家中の鐵砲物頭田邊治部左衞門の娘に執心し、妻に迎へんとして拒まれ、その同家中の明石衞守に嫁ぐを怨み、密かに彼等を陷れようとした。かくてその奸計に依つて田邊は切腹し、衞守は追放の身となり、妻子を伴つて筑紫針ケ崎の知人を賴るが、知人は程なく歿し、剩へ妻は病みて今は饑餓と鬪つ

て日を送つてゐた。一方熊代喜藤太はその好色が禍して逐電し、これも筑紫に來り、小天狗飛之助等の賊徒の仲間に入つて黒闇雲右衞門と改名し、遂に衞守を殺すに至る。病の床にある妻は夢に夫の非業の死を知り、その子菅根・孝太郎の孝養も空しく憤死するので、姉弟二人は困窮の餘り入水しようとするのを、計らずも菅て田邊家の僕であつた雲水道人に救はれ、且つ父の敵は喜藤太なるを知る。さて播磨赤松家に於ては喜藤太の舊惡が露顯したので、政則は喜藤太を捕へ、小天狗をも誘ひ寄せ、菅根・孝太郎を迎へて親の敵討をなさせた。かくて孝太郎は明石監物と稱し、物頭津守儀兵衞の娘を娶つて明石家を、菅根は六浦の次男主鈴を迎へて田邊家を繼いだ。

【構想】奸惡な熊代喜藤太が、戀のかなはぬ遺恨に同家中の者を罪に陷れ、非業の死を遂げさせ、殘つた二人の子供が親の仇を報じて家運を再興するといふ、極めて平凡な仇討物語で、單純な趣向と判り易い辭句を以て出來てゐる。孝行を勸むるを目的とするには、これを適當としたのであらう。露骨な教訓的辭句のないのも却つて效果があるとも言へるが、凡作たるを免れない。〔笹野〕

黄雀風（くわうじやくふう）　短篇小説集【著者】芥川龍之介【刊行】大正十三年七月新潮社【解説】大正十二年三月から十三年五月に至る間に發表した作品の大部分を收載した著者の第六創作集で、「湖南の扇」と共に後期の作風を代表する短篇集として知られてゐるが、殊に「黄雀風」にあつては、漸く後期の特色を著しくして新たな境地に進むと共に、將に大家の域に迫らんとしたその當時の面容が示されてゐる。集中の作の大部分は現代物であるが、わけても保吉物を主として私小説の體をとつたものが一際目立つてゐる。即ちいろ〳〵の斷片的な日常經驗をそれ〴〵小品風に記した「わん」「西洋人」「午休み」「恥」「勇ましい守衞」の五節から成る「保吉の手帳から」（大正十二年五月）を初めとして、小篇「お時儀」（大正十二年十月）「あばばばば」（大正十二年十二月）、「寒さ」（大正十三年四月）、「文章」（大正十三年四月）、「少年」（大正十三年四・五月）、「魚河岸」等は、皆主人公に保吉の名を藉りた一種の私小説であるし、又「子供の病氣」は、更に自傳的な私小説である。これ等は何れも作者の身邊雜事に取材したものであるが、別に「或戀愛小説」（大正十三年四月）や「文反古」（大正十三年五月）等は輕妙で風變りな短篇である。これ等の外に現代物としては、なほ「雛」（大正十二年三月）、「一塊の土」（大正十三年一月）、「不思議な島」（大正十三年一月）等があり、更に歴史物として、切支丹物の「おしの」（大正十二年四月）、「糸女覺え書」（大正十三年一月）や、朝鮮の怪奇な古傳説を語り、自國中心の歴史に警告した「金將軍」（大正十三年二月）等がある。

【備考】龍之介の後期の作風を知るには、なほ「黄雀風」に次いで出た短篇集「湖南の扇」（昭和二年四月刊）がある。これは大正十五年以降昭和二年に至る時代の作を集めたもので、「湖南の扇」「年末の一日」「カルメン」「春の夜」「點鬼簿」「悠々莊」「彼」「彼第二」「玄鶴山房」「蜃氣樓」等の小説が收められてゐる。すべて現代物で、前集の傾向を更に進め、枯淡・澄徹の趣があると共に、著者の最後の集として、平靜にして暗く、しかも不安焦燥な境地に到つた死の前の特色をも窺ふことが出來る。〔湯地〕

甲子夜話（かふしやわ）　隨筆　百卷四十七册【著者】松浦清。靜山と號し、肥前平戸城主。【名稱】起稿が文政四年十一月、甲子の夜であつたので、これを書名とした。【成立・由來】著者が六十二歳の時退隱して閑日を得た頃、その師事した林述齋の勸めに從つて直ちに起稿したものである。爾來七年間、拮据勵精して筆を措かず、一卷成るごとに述齋の校閲を受けることにし、つひに正編百卷を作り上げた。なほその後も稿をつづけて更に百卷を成し、つづいて第三回目の百卷に着手し、八十卷に至つて卒去した。【諸本】世間に傳はるところは初めの百卷であるが、寫傳やゝ久しかつた後、明治二十五年著者の曾孫詮氏によつて校刊された。又同三十三年大槻如電の校訂に係る印本が出で、同四十三年更に國書刊行會から第三次の刊本を出した。【解説】主として德川初期以來の諸侯・旗本等の逸話等の外に、當時傳はつた奇談・異聞の類を廣い範圍に渉つて記錄して居り、まゝ圖畫を挿んでゐる。古人の懿行・嘉言を後世に傳へようとする主旨に起つたので、中には市井の風俗談もあるが、怪力亂神の事や猥雜の談は殆ど無く、頗る上品なものばかりであつて、正史の缺を補ふに足る場合も少くない。全部の記述項數は千を超える。著者は諸侯の一でありながら下情によく通じ、又和歌風雅の道にも精しかつたことが本書によつて察せられる。正編刊本に松浦詮の序（明治二十五年）が添へられてゐる外に、佐藤坦（一齋）の「靜山松浦公傳」と松浦熙の序（文政五年）がある。續編と共に、幕府後半期の世態を考察するに有益の資料である。〔和田〕

篁洲（くわうしう）**甲州鰍澤報讐**（かしゆうかじかざはあだうち）　「榊巷談苑」を見よ。

讀本　二編二册【作者】十返舍一九【畫工】勝川春亭【名稱】見返しに「一名身延山御利生傳記」とある。文化十一年再板の時には、「繪本身延山利生記」の名を用ひてゐる。【刊行】文化四年。奥附に「文化丁卯春梓行、東武書舖　通油町、村田屋治郎兵衞　同平藏」とある。【諸本】文化四年刊行の中本二册のものと、同十一年に大阪前川源七郎が改題再板した半紙本五册のものとがある。

【梗概】安房國一ヶ坂に住む權化喜源太の家は、代々日蓮宗の信者であつたが、喜源太病歿後、その妻は一女お露を伯父萱村藤内に託し、剃髮して妙信と號した。お露長じて藤内の子悅次郎と契り、その胤をも宿したが、藤内富貴を願つてお露を退け、代官の娘おすみを娶らせた。併し悅次郎はこれを疎んずるので、おすみの母おりうは、お露とその子捨次郎を引取つた。然るに悅次郎はなほも人目を忍んでお露に會つてゐたが、豫てお露に想ひを懸けてゐたおりうの甥嘉平次の知るところとなり、嘉平次は悅次郎の如く裝つて忍び入り、却つておりうに發見され、お露は不義の汚名を着て、實母妙信の庵室へ預けられた。悅次郎はその不貞を怒つて、一子捨次郎を引取つた。嘉平次はなほもお露を欺いて連れ出さうとし、日蓮の木像身代りとなり、その靈驗遠近に響くに及んで、遂に悅次郎は疑念を晴らし、その庵室を訪れたのであつたが、嘉平次これを歸途に要して慘殺し、お露も亦悲歎の餘り自害し、やがて妙信も相果てた。その後、おすみは後夫を迎へて、漸く繼子捨次郎を疎み、十三歳の折これを出家させて信定と名乘らせた。剛毅で利發である信定は、一日、母の靈より父母の死の顚末を告げられるや、忽ち計略を廻らして寺の寶器を盜み、これを金に代へて、嘉平次を討たうと何處へか身を晦ました。

【構想】仇討話を説くに佛教の靈驗を以てする。卷頭芍藥亭喜三二の序に「勸善の鳴子繩仄兒童を驚さんとおもふなるべし」といふ。さうした構想の下に書かれてゐるので、趣向は單純である。事件が平凡なだけに破綻が少く、比較的なだらかに筋が運ばれてゐる。前編上下二編にて未完に終り、かの靈驗の一端を見るのみで、仇討話には至らなかつた。再版に改んで、内題には、中州鰍澤報讐の名は

好色伊勢物語（かうしよくいせものがたり）　浮世草子五册【作者】未詳【刊行】奥に「貞享三年で、男はこの烏帽子を被つて閨房の祕密を探り巡ることを第二章より第十章までに記し、第十一・二の二章に於て、この男が小野小町の靈に逢うて、その不具から救はれることを記してある。固よりいふに足らぬ猥雜なるものであるが、唯「好色四季咄」「魂膽色遊懷男」（各別項）以下、その系を引くこの種の書に通用となつてゐる隱身術を用ひた古い浮世草子として注意される。〔藤村〕

好色一代男（かうしよくいちだいをとこ）　浮世草子　八册【作者】井原西鶴。署名はないが、西鶴が俳諧の門人水田西吟の跋文中に「鶴翁のてんごう書き」とあるから、作者の西鶴たることに疑はない。【畫工】上方版（後出）は從來蒔繪師源三郎と傳へてゐたが、疑ふべきである。また西鶴といふ説がある。【刊行】數版あつて、出版書肆が變つてゐる。左に各版の奥附を擧げる。

一、天和二年歲旦中旬　大坂思案橋北詰　茨木

意を惹かれるものがある。〔藤村〕

や、忽ち計略を廻らして寺の寶器を盜み。これを金に代へて、嘉平次を討たうと何處へか身を晦ました。

【構想】仇討話を說くに佛敎の靈驗を以てする。卷頭芍藥亭喜三二の序に「勸善の鳴子繩仄兒童を驚さんとおもふなるべし」といふ。さうした構想の下に書かれてゐるので、趣向は單純である。事件が平凡なだけに破綻が少く、比較的なだらかに筋が運ばれてゐる。前編上下二編にて未完に終り、かの靈驗の一端を見るのみで、仇討話には至らなかつた。再板に及んで、內題には、甲州鰍澤報讐の名は存してゐるが、「繪本身延山利生記」の名を標記したのはこれがためであらう。〔笹野〕

講習餘筆（かうしふよひつ）　隨筆　四卷一册　寫

【著者】藤原明遠（盈進齋と號す、室鳩巢門）【成立】延享四年伊奈忠賢及び著者の序がある。

【解說】支那の經史を講習する人々のために、その一般知識を與へようと試みたもので、卷一に諸經一般に係ること三十二則、卷二に經史幷に學意に係ること三十四則、卷三に學意幷に雜話三十則、卷四に稱意及び字義等六十六則、全篇百六十二則を收めてゐる。〔和田〕

口上（こうじやう）　演劇　【名稱】口頭で觸れる意味【解說】元來は顏見世興行に於て、その初日に新役者を觀衆に紹介するを云ひ、更に口上役を略して口上と云つたので、元祿期は一の役柄となつてゐた。水島四郎兵衞は當時の名人である。後、役柄としての價値を失つて、單なる事務に墮した。現在の口上には大體二種ある。一は頭取が黑紋付に羽織姿で、芝居の用件を舞臺に述べる場合である。初日など打出し時間が來て、芝居の途中閉場の旨を通じる時は、昔風に「まづ今日はこれきり」の挨拶をする如き、二は、役者の改名披露などの場合で、種々の方法がある。簡單に狂言の途中で、舞臺の登場人物のまゝ、師匠筋の役者が述べる事がある。普通は、「口上幕」一幕をこのために使ふので、定式の上下（かみしも）を着、披露される役者の外、多くの親戚・知己・師匠・同門などが居並び、座頭から順に挨拶し、然る後、再び座頭が、「隅から隅までずーいと願ひ上げ奉ります」の如き約束通りの文句で幕にする。〔口上觸〕一種の口上と見られ、單に一の幕なり狂言なりの說明或は披露をする。例へば「忠臣藏」の「道行」で、頭取がそこに使ふ清元の「落人」の太夫三味線から役者までも披露をする類である。多く淺葱幕の前でやる。これを言ふと、チョンと木が入り道行が始まる。仕出しの町人、或は百姓などが、同じ淺葱幕の外で卷物などを拾ふ。中をあけて讀むと、それが口上觸であるといふ場合もある。「村井長庵」の「日本堤」、小夜衣千太郎の道行の時などこれを使ふ。「忠臣藏」に限つては、大序の前、幕外で口上人形を使ふ。〔飯塚〕

攷證今昔物語集（かうしようこんじやくものがたりしふ）　「今昔物語」を見よ。

好色赤烏帽子（かうしよくあかえばうし）　浮世草子五册【作者】桃林堂【名稱】題簽には新板と角書樣のものがあり、柱には「むらく」とある。種彥の「好色本目錄」にむらくと擧げたのは、柱のみを見て書名を知ることを得なかつた本書のことに相違ない。【刊行】筆者の據つた原本には、序にも奧附にも年月が見えない。但し「日本小說書目年表」には、元祿八年とある。【解說】本文十二章より成る。業平天神を祈つた不具の男が、神より赤色の烏帽子を授かる。この烏帽子は、隱身の奇驗あるもので、男はこの烏帽子を被つて閨房の祕密を探り巡ることを第二章より第十章までに記し、第十一・二の二章に於て、この男が小野小町の靈に逢うて、その不具から救はれることを記してある。固よりいふに足らぬ猥雜なるものであるが、唯「好色四季咄」「魂膽色遊懷男」（各別項）以下、その系を引くこの種の書に通用となつてゐる隱身術を用ひた古い浮世草子として注意される。〔藤村〕

好色伊勢物語（かうしよくいせものがたり）　浮世草子五册【作者】未詳【刊行】奧に「貞享三年寅仲春吉辰日、洛下錦小路通永田長兵衞、江戶神田新革屋町　西村半兵衞彫梓」とある。【諸本】生野の草子（改題本）及び石川巖編從吾所好本に收む。【解說】「伊勢物語」に擬して、その各段の歌物語を近世風の好色話に作り替へ、和歌を狂歌にもぢつたものである。なほ「伊勢物語」註釋書の形をも摸して、上欄を設けて、本文中の語句を註釋してある。その例を示せば、

西の格子　島原也
やよひの廿一日物日
大師のみゑいくうなり、老若東寺に袖をつらぬ、此日女郎みなあげやへ出るなり。これを物日といふ。惣て一とせの物日かぞふるにたらず。島原やまと曆、好色年中行事といふさうしにくはしくしるせり。
大なる振袖
三代男に三十二をふり袖のかぎりとかきたり。よこをきる
女郎の揚げられて客の來ざる間に、外の剛染の男をよびて假に枕をならぶる事也、橫の契といふことを略して、よこをきるといふとぞ。

かういふ類である。本文の文學的興味また價値よりも、後世にはこの註釋の方に却つて注意を惹かれるものがある。〔藤村〕

好色一代男（かうしよくいちだいをとこ）　浮世草子　八册【作者】井原西鶴。署名はないが、西鶴が俳諧の門人水田西吟の跋文中に「鶴翁のてんごう書き」とあるから、作者の西鶴たることに疑はない。【畫工】上方版（後出）は從來菱師源三郎と傳へてゐたが、疑ふべきである。また西鶴といふ說がある。【刊行】數版あつて、出版書肆が變つてゐる。左に各版の奧附を擧げる。

一、天和二壬戌年陽月中旬　大坂思案橋荒砥屋孫兵衞可心板
二、大坂安堂寺町五丁目心齋筋南橫町秋田屋市兵衞板行
三、大坂住大野木市兵衞板
四、貞享元甲子曆三月上旬　大和繪師菱川吉兵衞師宣　日本橋南貳町目川瀨石町川崎七兵衞板行
五、貞享四丁卯年九月中旬　日本橋靑物町大津屋四郎兵衞板　大和繪師菱川吉兵衞師宣筆
六、正月吉旦　日本橋南詰萬屋淸兵衞板行　大和繪師菱川吉兵衞師宣筆

右の內一・二・三を世に上方版といひ、四・五・六を江戶版といふ。上方版は總て美濃紙形の同一版式であるが、江戶版は半紙形の同一版式である。【諸本】右の外、愛鶴書院複製本、叢書閣本があり、西鶴全集（帝國文庫・古典全集）・新選繪入西鶴全集第二卷・西鶴名作集（有朋堂文庫・日本名著全集）等に收めてある。

【梗概】先づ世之介を主人公とした小說と見て、その梗概を述べる。世之介は某富豪と遊女との間に生れた者である。七歲を思春期の初めとする早熟兒の腰元に對する少年の戀に筆を起して、八・九・十歲と異常な性慾の成熟を見せてゐる（以上第一期）。十一歲から、伏見撞木町を振出しに、少靑年時の無分別な好

川龍之介【刊行】大正十三年七月新潮社【解說】大正十二年三月から十三年五月に至る間に發表した作品の大部分を收載した著者の第六創作集で、「湖南の扇」と共に後期の作風を代表する短篇集として知られてゐるが、殊に「黃雀風」にあつては、漸く後期の特色を著しくして新たな境地に進むと共に、將に大家の域に迫らんとしたその當時の面容が示されてゐる。集中の作の大部分は現代物であるが、昭和二年に至る時代の作を集めたもので、「湖南の扇」「年末の一日」「カルメン」「春の夜」「點鬼簿」「悠々莊」「彼」「彼第二」「玄鶴山房」「蜃氣樓」等の小說が收められてゐる。すべて現代物で、前集の傾向を更に進め、枯淡・澄徹の趣があると共に、著者の最後の集として、平靜にして暗く、しかも不安焦燥な境地に到つた死の前の特色をも窺ふことが出來る。〔湯地〕

甲子夜話（かふしやわ）　隨筆　百卷四十七册

ながら下情によく通じ、又和歌風雅の道にも精しかつたことが本書によつて察せられる。正編刊本に松浦詮の序（明治二十五年）が添へられてゐる外に、佐藤坦（一齋）の「靜山松浦公傳」と松浦熙の序（文政五年）がある。續編と共に、幕府後半期の世態を考察するに有益の資料である。〔和田〕

篁洲（くわうしう）「榊巷談苑」を見よ。

甲州鰍澤報讐（かふしゆうかじかざはあだうち）　讀本　二

取つた嘉平次はなほもお露を慕ひて迫れ出さうとし、日蓮の木像身代りとなり、その靈驗遠近に響くに及んで、遂に悅次郎は疑念を晴らし、その庵室を訪れたのであつたが、嘉平次これを歸途に要して慘殺し、お露も亦悲歎の餘り自害し、やがて妙信も相果てた。その後、おすみは後夫を迎へて、漸く繼子捨次郎を疎み、十三歲の折これを出家させて信定と名乘らせた。剛毅で利發である信定は、一日、母の靈より父母の死の顚末を告げられる

色生活に耽り、十九歳の時、親の勘當を受けるに至る（以上第二期）。これから諸國放浪の生活に入り、生きるがため、好色のために樣々の境遇を經驗し、樣々の女性に關係する（以上第三期）。三十四歳の時父が死んで、生家に呼び戻され、三十五歳の時、父の莫大な遺產を受け、一朝にして大盡粹人となり、これより諸國遊里の好色世界に遊んだが、六十歳に至つて、「明暮たはけを盡し、それから今まで二十七年になりぬ、まことに廣き世界の遊女町、殘らず詠めめぐりて……うつれば替つた事も何か此うへには有べし、今まで願へる種もなく、死だら鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても、有難き道には入難し。あさましき身の行末、是から何になりとも成べし」と、心友七人と共に、伊豆の國から、好色丸といふ船に乘つて、女護島さして出帆し、行方知れずになる（以上第四期）。

かく、世之介を主人公として小說的な筋を運ばせると共に、他の一面には好色に關する時代の習俗を廣く寫し出してゐる。卽ち世之介の生立から勘當に至るまでの間に、年長の腰元、從姉、隣の女房に對する性慾的の現象、念者、撞木町の遊女、兵庫の湯女、八坂の茶屋女、仁王堂の飛子、寡婦、人妻、木辻町の遊女、海道の出女等について記し、世之介放浪の時代に、江戸の香具賣、大阪の私娼、京の妾、鞆の髮長、小倉の魚賣女、下關稻荷町の遊女、大阪の蓮葉女、大原の雜魚寢、寺泊の遊女、酒田の勸進比丘尼、しやく、千瓢、縣巫女、水戸の御藏の籾挽、信州追分の遊女、爪商ひ、江戸の屋敷女中、京の十日限りの妾、島原の遊女、泉州の佐野、迦葉寺、迦陀の漁夫の妻などの好色に關する種々の事相を集めてゐる。世之介粹人の時代には、先づ名妓傳として、島原の吉野・三笠・藤波・初音・野秋・高橋（二人あり）・薫・吉崎、吉原の吉田・小紫・高雄、新町の夕霧・御舟・和州・吾妻などを寫し、無名の妓等に及んでゐる。遊里の記としては、右三都の遊里を初めとして、大津柴屋町、播州の室、堺の袋町、筑前の柳町、長崎の丸山等に及び、それから遊興の樣々をも寫してゐる。かくして、この部分に於て主なる遊里と遊女と遊興とを擧げて、粹なる好色世界の描寫をなしてゐる。

【構想】本書は形の上では、世之介といふ人物の七歳から六十歳に至る五十四年間の好色生活を、一年を一章に配して綴つたものであるが、小說として完き性質を持つものではない。けれども、又これを全く獨立した短章五十四を集めたものであるとも言ひ難い。不完全ながらも、構成上世之介を主人公として、「源氏物語」を摸したものと見られる。五十四章の章數も、「源氏物語」の五十四帖に倣つたものであらう。平安貴族の榮華生活の代表者であり、且つその理想の具體化でもある光源氏を摸して、江戸時代の享樂生活の代表であり、好色生活の理想の具體化でもある世之介を設けたものであらう。部分的にも「源氏物語」に材を得、又これに暗示を得たと思はれる個所も多い。かく一面に於ては、「源氏物語」に倣つてゐながら、世之介は全篇を一貫した主人公として、個性を有した人物とは成り得てゐない。さうして五十四の各章は獨立したもので、各地、各階級に於ける好色生活の種々相を寫したものとも見られ、作者の實際力を注いでゐるのは、寧ろこの一面である。

【史的地位】本書は西鶴が第一作品であり、浮世草子の濫觴であり、また好色本の開祖であり、その史的地位は頗る重大なものである。江戸時代初期に行はれた假名草子は、舊い物語の系統に屬するもので、その傳統の中に在つて、直接に人生を捉へて自由に表現し、生き生きとした描寫を成し得なかつたが、本書に於てはこれ等の傳統を離れ、因襲を棄てて現實の生命ある描寫をなすことを得た。これには、先蹤の遊女評判記、野郎評判記、花柳風俗關係書等の影響を受けてゐる所が多い。兎に角、本書によつて近世小說は大なる刺戟を受けて、新しい表現、新しい描寫の域に入るを得た。本書は實にわが小說史中の劃期的な作品である。【價値】本書の文學的價値は、主として各短章に於ける描寫の上に在る。殊に卷五以下に於ける名妓の個々の特殊な性格を簡勁な筆致を以て描寫した所に在る。これ等の女性の特徵の捉へ所は、それ〴〵に異なり、その描寫法も一樣でない。その頃の遊女評判記、其角の「吉原五十四君」（別項）「朱雀遠目鏡」「朱雀しのぶずり」の如きもの、又は西鶴自身の「俳諧女歌仙」（別項）などに揭げた遊女の品評を、本書の記述・描寫に對照して見ると、一々彼が實在の人物をモデルにして、その特徵を擧げて寫してゐることが知られる。かく實際の事實に忠實に據つたといふことが、これ等の人物の描寫に成功してゐる理由の一つに數へられるであらう。但しこれらの短章の中に在る一缺點として擧げられることは、世之介が實際上重要な人物でなかつたために、往々その出入、取扱に明瞭を缺き、何の益もなき人物になつてしまつてゐることである。これは「一代男」の全體の構想上から來た一缺點である。

【參考】浮世草子概說井原西鶴 山口剛（日本文學講座）○西鶴好色本研究 山口剛（日本文學講座）○好色一代男おぼえ書 阿部次郎（思想六六）○西鶴輪講好色一代男三田村鳶魚編○早稻田文學西鶴號（大正一一）○西鶴の一代男の成立山口剛（早稻田文學一九六）

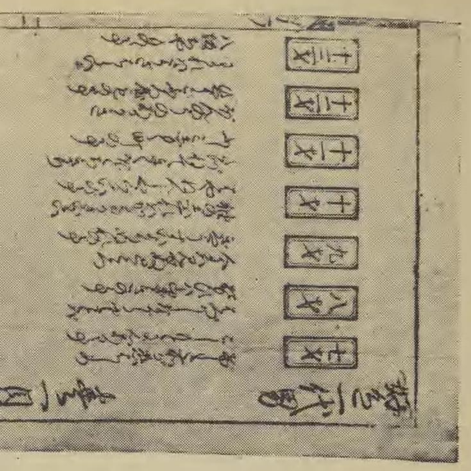
〔藤村〕

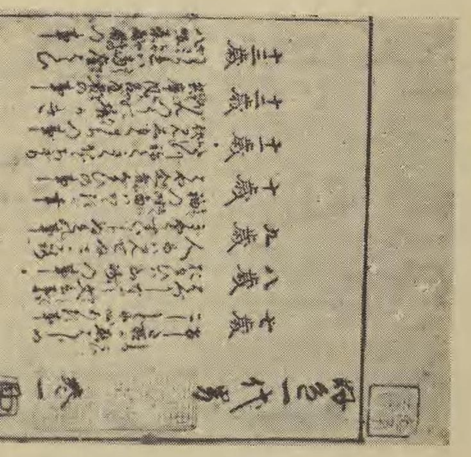
好色一代女（こうしよくいちだいをんな）

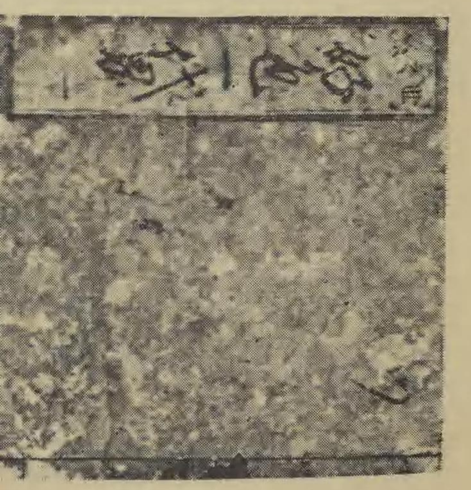
浮世草子 六册

【作者】井原西鶴。但し本書には署名はない。【畫工】吉田半兵衞【刊行】奥に「貞享三年 林鐘中浣日大坂眞齋橋筋吳服町角 書林 岡田三郎右衞門版」とある。【體裁】美濃判形、題簽には「繪入好色一代女」とあり、外に表紙の貼紙に色紙形のものがあり、各卷各章の意を句はした文句を記してある。【諸本】覆製本（昭和二年）がある、なほ西鶴全集・西鶴名作集類に所收。

【梗概】洛北嵯峨に、好色庵と額打つた家がある。主は老女である。或る時、當世男二人この庵を訪ねて、老女の經歷を問うたので、老女はその過去を物語つた。それが本書二十四章の物語であるといふ懺悔話の形を成してゐる。この一代女は、京の或る貧乏公卿の息女と生れ、天成の美貌を以て、夙く宮仕をしたが、殿中で一人の青年と戀をして露顯した。戀を不義とし、嚴しい法度とした武家時代の制裁を受けて、あはや主君の手討に逢ふべき所を、奥方の情で生命を助けられて、二人は追放された。これ彼女の十三歳の時であつた。それから家の貧を救ふために、藝人の仲間に入れられて、藝を賣つてゐる中に、某國守の寵妾に抱へられたが、國守の健康の衰へたために解雇された。十六歳の時、父が債務の犧牲となつて、島原に身を賣られた。これが彼女の遊女生活の第一歩である。一時は全盛の







元、從姉、隣の女房に對する性慾的の現象、令者、撞木町の遊女、兵庫の湯女、八坂の茶屋女、仁王堂の飛子、寢處、人妻、木辻町の遊女、海道の出女等について記し、世之介放浪の時代に、江戸の香具賣、大阪の私娼、京の美、鞠の髪長、小倉の魚賣女、下關稻荷町の遊女、大阪の蓮葉女、大原の雜魚寢、寺泊の遊女、酒田の勸進比丘尼、しやく、千鶴、縣巫女、水戸の御藏の粗挽、信州追分の遊女、爪商ひ、江戸の屋敷女中、京の十日限りの美、島原の遊女、泉州の佐野、迦葉寺、迦陀の漁夫の妻などの好色に關する種々の事相を集め

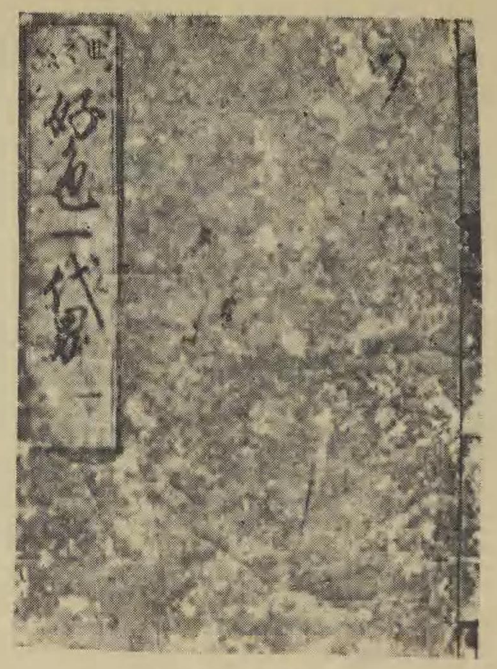
摸して、江戸時代の享樂生活の代表であり、好色生活の理想の具體化でもある世之介を設けたものであらう。部分的にも「源氏物語」に材を得、又これに暗示を得たと思はれる個所も多い。かく一面に於ては、「源氏物語」に倣つてゐながら、世之介は全篇を一貫した主人公として、個性を有した人物とは成り得てゐない。さうして五十四の各章は獨立したもので、各地、各階級に於ける好色生活の種々相を寫したものとも見られ、作者の實際力を注いでゐるのは、寧ろこの一面である。

【史的地位】本書は西鶴が第一作品であり、浮

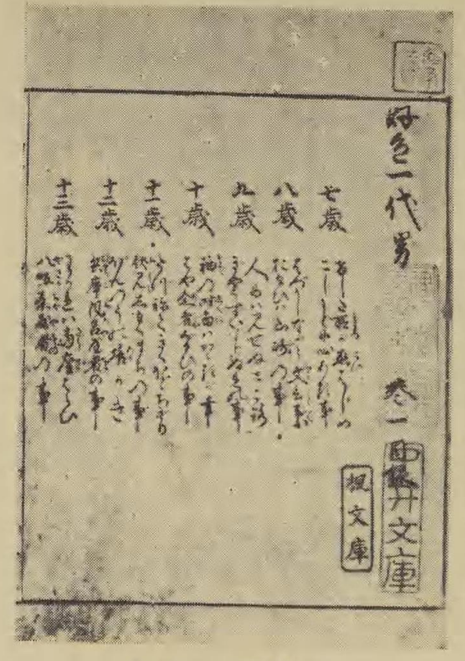
自身の一側譜「仙女」別名「色道大鑑」などに掲げた遊女の品評を、本書の記述・描寫に對照して見ると、一々彼が實在の人物をモデルにして、その特徴を擧げて寫してゐることが知られる。かく實際の事實に忠實に據つたといふことが、これ等の人物の描寫に成功してゐる理由の一つに數へられるであらう。但しこれらの短章の中に在る一缺點として擧げられることは、世之介が實際上重要な人物でなかつたために、往々その出入、取扱に明瞭を缺き、何の益もなき人物になつてしまつてゐることである。これは「一代男」の全體の構想上から來た一缺點である。

る。この一代女は、京の或る貧乏公卿の息女と生れ、天成の美貌を以て、夙く宮仕をしたが、殿中で一人の青年と戀をして露顯した。戀を不義とし、嚴しい法度とした武家時代の制裁を受けて、あはや主君の手討に逢ふべき所を、奥方の情で生命を助けられて、二人は追放された。これ彼女の十三歳の時であつた。それから家の貧を救ふために、藝人の仲間に入れられて、藝を賣つてゐる中に、若國守の寵愛に抱へられたが、國守の健康の衰へたために解雇された。十六歳の時、父が債務の犧牲となつて、島原に身を賣られた。これが彼女の遊女生活の第一歩である。一時は全盛の

好色一代男

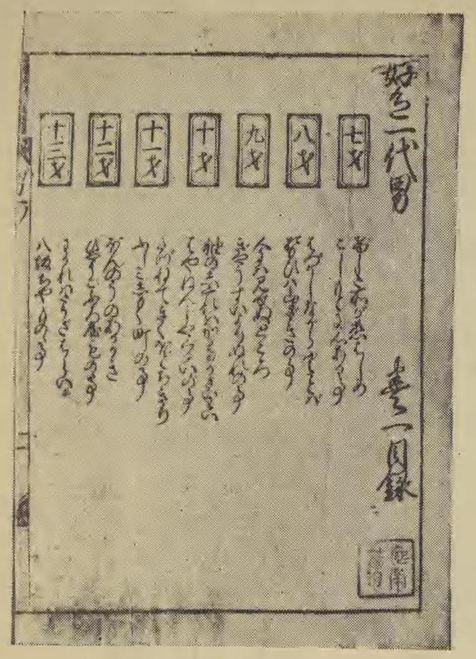


上方版　表紙



上方版　目次

江戸版　表紙

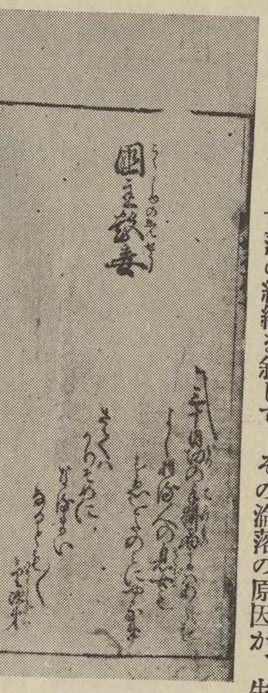


江戸版　目次

上方版　本文・挿繪

江戸版　本文・挿繪

太夫として並ぶものもなかつたが、門地・美貌の自負驕慢が、自然に勤めを粗略にさせたので、客は落ち全盛は漸く衰へて、天神に下され、そこで勤めてゐる中に、幸運に見舞はれようとしたが、それも取り逃した。太夫全盛の思出が、とかく彼女を自棄に導いて行かうとするのであつた。そればかりでなく、不幸惡疾に罹り、容顏大に衰へて圍女郎に下された。不運は失望を生み、失望は墮落を生み、年季が來て廓を出ても、もはや堅氣に身を固めることも



好

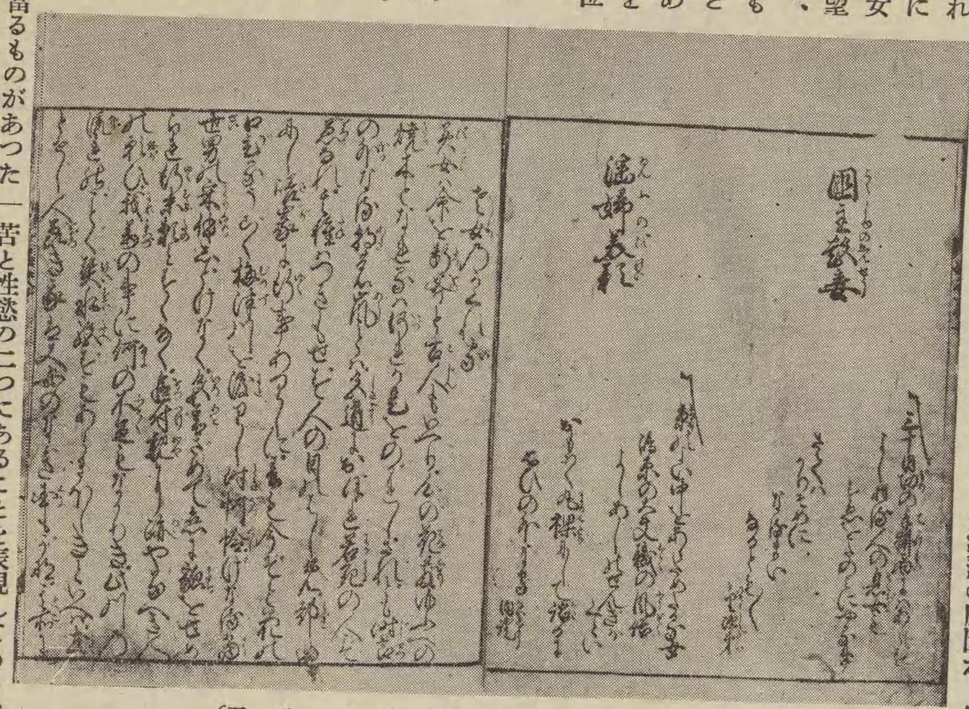
町家の腰元、表使、歌比丘尼、髮上、介添女、裁縫師、茶間女、仲居、茶屋女、通女、傳受女、女房、蓮葉女、居物、閨者、旅籠女、針賣、遣手、惣嫁等である。

【構想】一代女の長い一生涯の中に、女性の淪落の經緯を叙して、その淪落の原因が、生活してゐないので、一代女の一代をして不自然に陷らしめてゐるのは遺憾である。本作の構想はこれと共に、又一代女の經歷の中に、女性の好色的生活の種々相を描き出す所にもある。等しく好色的生活ではあるが、一代男のそれの如く、徹頭徹尾、積極的にその歡樂を追求するものではなく、消極的に賣色の位置に立たしめられた意味が、その一半を占めてゐる。これは一般に女性としての自然の立場であつて、古今常に見る事實である。この點に於て、西鶴の鋭い觀照は、人生の眞實を摑み得てゐると言はねばならぬ。

見を得たことを喜んだ。こゝに播州の知人より、敵が同地にゐることを報じて來たので、源之介は淺右衞門と共に急ぎ下り、敵が書寫の寺中にゐることを知るや、謀を設けてこれを誘ひ出して討つた。

【解說】筋はかく讐討であるが、純粹な讐討話に終始してゐるのではない。好色的說話の色の頗る濃いものである。卽ち源五左衞門と忍との間に衆道關係があり、又源之介と淺右衞門の間にもそれがある。なほ衆道の外に、源五左衞門とおとよといふ女との關係もある。

太夫として並ぶものもなかつたが、門地・美貌の自負驕慢が、自然に勤めを粗略にさせたので、客は落ち全盛は漸く衰へて、天神に下され、そこで勤めてゐる中に、幸運に見舞はれようとしたが、それも取り逃した。太夫全盛の思出が、とかく彼女を自棄に導いて行かうとするのであつた。それば かりでなく、不幸惡疾に罹り、容顏大に衰へて圍女郎に下された。不運は失望を生み、失望は墮落を生み、年季が來て廓を出ても、もはや堅氣に身を固めることは出來ず、生きて行くために、私娼の類の卑しい業をし、時としては人を欺く位の事もするやうになつた。一二度は家庭の女ともなつたが、空閨の淋しさに堪へかねて屢々不身持をして失敗した。かくて、次第に年はつもり、容貌は衰へる一方だつたが、賣色は止めず、處々を流れ歩いた末、大阪に舞ひ戻つて、路傍に人の袖引く夜發の哀れな身となつた。この時年は既に六十を超えてゐた。一日寺に詣でて五百羅漢像を見ると、一々昔逢うた男の顏に思ひ當るものがあつたので、終に無常を觀じて、菩提を願ふ身となつた。この時六十五歳であつた。いま彼女の一代に經た境遇を擧ぐれば、八人藝、國守の妾、太夫、天神、圍ひ、寺小姓、寺の密妾、町家の腰元、表使、歌比丘尼、髮上、介添女、裁縫師、茶間女、仲居、茶屋女、通女、傳受女、女房、蓮葉女、居物、闇者、旅籠女、針賣、遣手、物嫁等である。



好色一代女（目次・初頁）

【構想】一代女の長い一生涯の中に、女性の淪落の經緯を叙して、その淪落の原因が、生活苦と性慾の二つにあることを表現してゐるのは、古今變らぬ人生の眞實を摑んでゐるものである。併しその一代の變化が餘りに目まぐるしく、又その多變化の事實のみを示して、變化の由つて來た原因、周圍の事情を明かにしてゐないので、一代女の一代をして不自然に陷らしめてゐるのは遺憾である。本作の構想はこれと共に、又一代女の經歷の中に、女性の好色的生活の種々相を描き出す所にもある。等しく好色的生活ではあるが、一代男のそれの如く、徹頭徹尾、積極的にその歡樂を追求するものではなく、消極的に賣色の位置に立たしめられた意味が、その一半を占めてゐる。これは一般に女性としての自然の立場であつて、古今常に見る事實である。この點に於て、西鶴の鋭い觀照は、人生の眞實を摑み得てゐると言はねばならぬ。

【參考】輪講好色一代女三田村鳶魚編〇好色一代女合評（めざまし草、明治三〇）〔藤村〕

好色江戸紫（かうしよくえどむらさき）

【作者】石川流宣【畫工】古山師重【刊行】貞享三年。

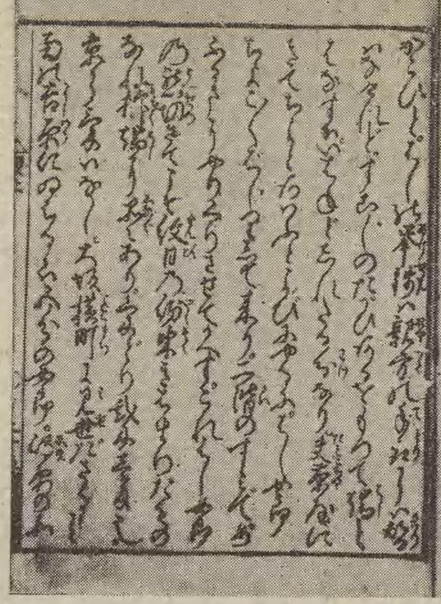
【梗概】望月源五左衞門正清は、親友星合七郎太夫の臨終に一子忍を託せられ、彼はこれと兄弟の約をなした。忍は小姓を勤めてゐたが、その仲間の織山志賀之介は忍に戀して、源五左衞門との仲を嫉み、主君に兩人を讒した。寃罪言ひ解きがたく、忍まづ自殺し、源五左衞門も亦跡を追うて自殺した。かくて源五左衞門の妻きいと一子源之介は流浪の身となり、志賀之介は立身して志賀右衞門と稱してゐたが、後難を恐れて、主君に暇を請うて播州に退いた。きいは源之介に、父の仇の志賀右衞門なることを告げ、又主君に證據を提供して、源之介成長の上敵討をなさしめたい希望を言上した。主君もその志を憐んで保護された。源之介は餘念なく武技を修練してゐるうち、神部淺右衞門に戀されて遂に兄弟の約を成すに至つた。母きいは源之介が良い後見を得たことを喜んだ。こゝに播州の知人より、敵が同地にゐることを報じて來たので、源之介は淺右衞門と共に急ぎ下り、敵が書寫の寺中にゐることを知るや、謀を設けてこれを誘ひ出して討つた。

【解說】筋はかく讐討であるが、純粹な讐討話に終始してゐるのではない。好色的說話の色の頗る濃いものである。即ち源五左衞門と忍との間に衆道關係があり、又源之介と淺右衞門の間にもそれがある。なほ衆道の外に、源五左衞門とおとよといふ女との關係もある。かくて武家物と好色物との兩性質の混じたものといへるが、なほ又假名草子と浮世草子とが一緒になつたものともいへる。〔藤村〕

好色貝合（かうしよくかひあはせ）

【作者・畫工】吉田半兵衞（浮世草子　小本二冊）であらう【刊行】奥に「貞享四年秋九月板行、畫林清兵衞、三右衞門開板」とある。謄寫版の覆製本（石川巖）がある。【解說】序は「洛下散人何之何氏」と匿名になつてゐるが、その中に「僕去年其品々を圖にあらはして好色訓蒙圖彙をつくる今又もれしを集て是とあはせて全部をなす、さてこそ好色貝合と號す云々」とある。即ち「好色訓蒙圖彙」と同作者の手に成り、その續編とも見做すべきものであることが知られる。內容は戀愛・好色に關する事項、人物等を分つて一頁に繪を入れ、一頁乃至五頁の文章を以てこれを叙說してある。叙說の文は純然たる抽象的の說明ではなく、具體的な叙述をも用ひてある。目次を擧ぐれば、見戀・寄文戀・寄小哥戀・別戀・浮女・濡後家・濡尼・浮藏主・大黑・太夫大臣・天神買・椿大盡・端買・北向大臣・粹大盡・野火・間夫（以上卷上）。旅籠屋女・蓮葉女・牙婆・仕懸比丘尼・大原神子・遣師・茶

屋家嘉・大原雑居寝・蚊田遣繰・弱未裸・臭開・好色亂體圖（十二圖（以上巻下）。要するに、



好色貝合

摸して、京四條川原を宿とする乞食僧の事を記し、第二章以下巻四の終の章までは、この僧の經來つた過去の好色の生活の諸相を叙寫し、第五巻は再び乞食僧の上に歸つて、好色に大金を費して今はただ遊女の文のみ手に殘ることを書き、無限の慾望に心を費す人間の愚を述べて結んである。好色本としての主文と見るべき第二章以下巻四の終までに記す所は、若松屋甚太郎といふ元富有なる家の息子十四歳より好色の道樂を始め、十七歳の時家を出で、京を振出しに、伊勢・吉野・大阪と流寓するうち、大阪にて或る女との間に儲けた子に甚太郎の名を讓り、自らは夏夕と稱して、堺・奈良・住吉・河内、武藏江戸の吉原・品川、それから北國などを漂泊し、種々なる女に關係し、諸國の好色生活を經驗して、終に乞食僧となつて、四條川原を家とするに至る一生が語られてある。かく夏夕といふ人物は設けてあるが、西鶴の「好色一代男」（別項）の世之介と同樣に、小說の一人物となり切つてはゐない。寧ろ作者はこの人物の上に取扱つた好色の種々相を主として書いてゐる。隨つて「一代男」と同樣に本作は完き小說とは言ひ難い。要するに「好色一代男」を摸倣して、遙かにそれに及ばざるものである。〔藤村〕

近世風俗史料、元祿文學研究資料として益するところが多い。

好色河念佛（かうしよくかはねんぶつ）　浮世草子　五册【作者】未詳【名稱】題簽には繪入の二字が首に置かれてある。名義は第一章に本作の主人公たる京都四條川原に住む貧僧のことを書いて、その終りに「是世にいふはだか念佛我なり」とある。これに出たものであらう。【刊行】元祿十四年【解說】巻一より巻四までは毎册五章、巻五は三章、都合二十三章より成る。第一章は「方丈記」の方丈の庵の條を

好色訓蒙圖彙（かうしよくきんもうづゐ）　浮世草子　三册【作者・畫工】自序に「洛下の野人作書無色軒三白居士」とあり、上巻の首に「繪師洛陽吉田半兵衞」とあるが、下巻「器財」部の扉に「圖書無色軒筆」とあるし、本書の後編と冠した「好色貝合」（別項）が半兵衞の自作自畫である點から見て、本書の無色軒も半兵衞の雅號か。【刊行】貞享三年（序）。

【解說】序の終に「…僕もさすが人の數とて其事彼こと思ひつらぬるまゝに色このめる品々を分ち天地人倫禽獸器財の品を圖にあらはして淺はか成注解をくはへて双紙となし好色訓蒙圖彙と號侍ことしかなり」とあるやうに、書名及び形式は中村惕齋の「訓蒙圖彙」の流を汲んだものであり、浮世草子としては變態的のもので、後の變態的洒落本と一味相通ずるものがある。

「天象」の部には「夜奪星」「七夕」、地儀の部には「比翼連理」「海老等契」「鹿」「鴛鴦」を圖して簡單な說明を附し、次の「人倫」の部は「殿」「奥樣」「媳子」「妾」（臥座直）「大臣」（大盡）「傾城太夫」「天神」（格子）「鹿戀」（栫）「半夜」「端」（化契）「北向」「湯娜」（風呂屋物・猿）「茶屋」「比丘尼」（丸女）「想嫁」（想與女・賣女・夜發）「人置口鼻」「出合」「濡者科者」「好女」「鳴女」「大姪」「虚精」「大腎」「腎虚」「若衆」（美少年）「丫髻」「野郎」「客氣」「山神」「後女打」「嫉妬」「千話」「密語」「夜奪」「新○」「入痣」「心中」「密夫」「合姪」「抔」を圖にし、大體これに相應した說明風の戲文を附してある。更に「人支」の部では「上○」「下○」「實長」「妻」「角」「羅尻」「小女實」「玉○」「毛○」「無毛○」その他○○及び顏面頭髮等を圖し、次に「衆道意氣智界」として「上豚」「下豚」を圖して、これに說明を加へてゐる。次の「器財」の部には、鏡臺・櫛臺等、遊女の用具、化粧品、頭巾・編笠羽織等の遊客の用具をはじめ、○具强精劑（食物）などを圖說する。次に「女道濡界」として上下諸階級、諸職業の○○を十八種圖してゐる。本書は遊戲的滑稽的氣分をもつ「エンサイクロペディア、エロチカ」ともいふべきものである。あたかも好色本の多く上梓せられた頃に世に出たものであるから、當時の浮世草子や淨瑠璃等に見える遊里等の好色風俗を考察するには、多大の便を與へるもの

好色河念佛

ので、これを引用した書も尠くない。〔增田〕

好色罌粟鹿子（かうしよくけしかのこ）「難波鉦」を見よ。

笑話を好色本風に敷衍したものともいへるし、又逆に好色本風の說話に笑話の性質を加へたものともいへる。〔藤村〕

好色五人女（かうしよくごにんをんな）　浮世草子　五册【作者】西鶴（無署名なれど、古來疑ふ者なし）【別名】當世女容氣（改題本）【刊行】奥付に「貞享

の世話で、同地但馬屋九右衞門方の手代に住み込んだ。心を入れ替へて忠實に勤めたので、但馬屋一家の信用も厚かつた。九右衞門が妹お夏といふ今年十六の娘、思を清十郎に寄せ、屢々文を通はしたので、清十郎もその心に從ひ、相愛の仲となつた。但馬屋の女達の春の花見の時、清十郎は密かに太神樂の獅子舞を語らつて置いて、人々の見物に夢中になつてゐる間にお夏と密會を遂げた。これより戀は募つて、二人は遂に出奔し、飾磨から乘合船に乘つて上方さして出帆したが、不幸にして乘合の飛脚屋が、狀箱を陸に忘れたので、船を海岸に還したため、皇三浦はし愈々深くなり、遂に主人の許しを得て夫婦となり、夫婦仲極めて圓滿で、二人の子まで儲けたが、或る日、おせんが近所の麴屋長左衞門方に法事の手傳に行つて、納戸で菓子を盛つてゐる所に、長左衞門が來て、棚の鉢を取落して、おせんが結ひ立ての髮を亂した。これを麴屋の女房が邪推して、一日中あてこすり言ふのを迷惑がつて聞いてゐる中、「おもへば〳〵憎き心中、とてもぬれたる袂なれば、此上は是非に及ばず、あの長左衞門殿に情をかけ、あんな女に鼻あかせん」といふ氣になり、それが又遂に戀となつて機會を窺ひ、正

近世風俗史料、元祿文學研究資料として益するところが多い。

好色河念佛（かうしよくかはねんぶつ）　浮世草子　五册　〔藤村〕

【作者】未詳　【名稱】題簽には繪入の二字が首に置かれてある。名義は第一章に本作の主人公たる京都四條川原に住む貧僧のことを書いて、その終りに「是世にいふはだか念佛我なり」とある。これに出たものであらう。

【刊行】元祿十四年　【解説】卷一より卷四までは毎册五章、卷五は三章、都合二十三章より成る。第一章は「方丈記」の方丈の庵の條を

好色訓蒙圖彙（東京帝大圖書館藏）

笑話を好色本風に敷衍したものともいへるし、又逆に好色本風の説話に笑話の性質を加へたものともいへる。〔藤村〕

好色五人女（かうしよくごにんをんな）　浮世草子　五册　【作者】西鶴（無署名なれど、古來疑ふ者なし）【別名】當世女容氣（たうせいをんなかたぎ）（改題本）

【刊行】奥附に「貞享三丙寅歳仲春上旬日　攝州書肆　北御堂前　森田庄太郎板」、又右の外に「武州書林青物町清兵衞店」と合せ刻してあるのは再板であらう。改題本の奥附には、「浪華書肆　順慶町一丁目　抱玉軒田原平兵衞梓」とある。【諸本】愛鶴書院複製本あり、又西鶴全集・西鶴名作集等所收。

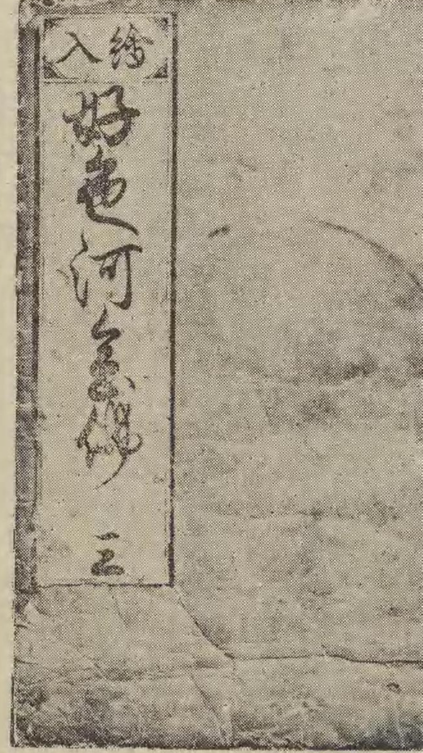
【梗概】〔卷一〕（麥姫路清十郎物語）播州室に和泉屋清左衞門といふ富有な造酒家がある。その息子清十郎は美貌に生れて、十四歳から遊蕩に耽り、皆川といふ妓と深く契つた。父怒つて十九歳の時勘當した。二人は一旦情死しようとしたが、人々に支へられて果さなかつた。その後皆川は自殺し、清十郎は死に後れて、姫路の知人を頼つて行つた。この知人の世話で、同地但馬屋九右衞門方の手代に住み込んだ。心を入れ替へて忠實に勤めたので、但馬屋一家の信用も厚かつた。九右衞門が妹お夏といふ今年十六の娘、思を清十郎に寄せ、屢々文を通はしたので、清十郎もその心に從ひ、相愛の仲となつた。但馬屋の女達の春の花見の時、清十郎は密かに太神樂の獅子舞を語らつて置いて、人々の見物に夢中になつてゐる間にお夏と密會を遂げた。これより戀は募つて、二人は遂に出奔し、飾磨から乘合船に乘つて上方さして出帆したが、不幸にして乘合の飛脚屋が、狀箱を陸に忘れたので、船を再び岸に還したため、追手に捕はれて、姫路に引戻され、別々に監禁された。ところが、この際に但馬屋に七百兩の金が紛失したので、疑は清十郎の上にかゝり、その申開きも立たず、二十五歳を以て刑場の露と消えた。お夏は我が身を棄てて清十郎の無事を祈つてゐると、里の子等が、「清十郎殺さばお夏も殺せ生きて思をさしよよりも」と歌ふを聞いて、清十郎の死を感知して亂心し、日夜家を狂ひ出ては清十郎の墓を弔ひ、百ケ日に當る日に自殺しようとしたのを、人々に諫止されて、思ひ止まつて尼となつた。

〔卷二〕（情を入れし樽屋物語）大阪の或る富家に奉公して信用の厚かつたおせんといふ女があつた。こゝに又天滿邊に樽屋があつた。おせんに思を懸けて、こさんといふ老女を頼んで、うまく仕掛けて、遂におせんが心を動かし、伊勢の拔參に同伴して、途中に契る約束をした。八月十日の朝出發に當つて、豫ておせんに思を懸けてゐた手代久七が同行する事となつて、折角の拔參も無駄にならうとしたが、歸途京都で契を結んでから、その戀は愈々深くなり、遂に主人の許しを得て夫婦となり、夫婦仲極めて圓滿で、二人の子まで儲けたが、或る日、おせんが近所の麹屋長左衞門方に法事の手傳に行つて、納戸で菓子を盛つてゐる所に、長左衞門が來て、棚の鉢を取落して、おせんが結ひ立ての髪を亂した。これを麹屋の女房が邪推して、一日中あてこすり言ふのを迷惑がつて聞いてゐる中、「おもへば〳〵憎き心中、とてもぬれたる袂なれば、此上は是非に及ばず、あの長左衞門殿に情をかけ、あんな女に鼻あかせん」といふ氣になり、それが又遂に戀となつて機會を窺ひ、正月寶引の夜密會した所を、樽屋に見つけられ、おせんは自殺し、長左衞門は一旦逃げたが、やがて捕はれて刑に死んだ。

〔卷三〕（中段に見る暦屋物語）大經師某の妻おさん、美人で良い主婦でもあつた。大經師が旅の留守中、實家から茂右衞門といふ手代をよこして置いた。頗る實直の男であつたが、腰元のりんがこの男に戀をした。おさんは戯れ心に、りんが艶書の代筆をしたところ、茂右衞門から色よい返事をしたので、この上の慰みに彼を嘲弄して笑はうと、おさんはりんの寢所に入つて茂右衞門の忍んで來るのを待つ内に眠つてしまつた。その間に茂右衞門はりんと思つて忍び寄り、袖の移り香しをらしい思をして去つた。眠覺めておさんは驚き、事の祕密は保たるべくもないと、「此上は身をすて命かぎりに名を立て、茂右衞門と死手の旅路」をしようと決心して、大膽にも契を續けた。その後、おさんは茂右衞門等を伴れて石山寺の開帳參りをして琵琶湖に二人情死を遂げたと見せて、同伴者をまいて丹波に駈落し、茂右衞門の伯母を頼つたが、そこにも居りかねて、種々なる女に關係し、諸國の好色生活を經驗して、終に乞食僧となつて、四條川原を家とするに至る一生が語られてある。かく夏夕といふ人物は設けてあるが、西鶴の「好色一代男」（別項）の世之介と同樣に、小説の一人物となり切つてはゐない。寧ろ作者はこの人物の上に取扱つた好色の種々相を主として書いてゐる。隨つて「一代男」と同樣に本作は完き小説とは言ひ難い。要するに「好色一代男」を摸倣して、遙かにそれに及ばざるものである。〔藤村〕

河内・武藏・江戸の吉原・品川、それから北國などを漂泊し、

附録は「殿」「奥樣」「嫁子」「妾」（臥座直）「大臣」（大盡）「傾城太夫」「天神」（格子）「鹿戀」（桧）「半夜」「端」（化契）「北向」「湯姉」（風呂屋物・猿）「茶屋」「比丘尼」（丸女）「想嫁」（想與女・賣女・夜發）「人置口鼻」「出合」「濡者科者」「好女」「鳴女」「大姪」「虚精」「大腎」「腎虚」「若衆」（美少年）「了髻」「野郎」「客



ので、これを引用した書も尠くない。〔增田〕

好色罌粟鹿子（かうしよくけしかのこ）「難波鉦（どら）」を見よ。

ねる事情があつて逃げ、或る夜、丹後の切戸の文殊堂に通夜すると、文殊菩薩の夢枕の誡があつたが、それも聽き流しにして同棲を續けてゐた。京床しくなつて茂右衞門一人狀勢を探りに行くと、頗る危險な樣子なので、顚へ上つて逃げ歸つた。その後、丹後から京に出る栗賣の口から、二人が隱れてゐることが知れて、その科免れ難く、捕はれて粟田口刑場の露と消えた。

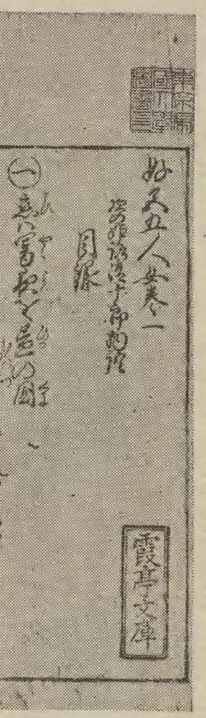
〔卷四〕（戀草からげし八百屋物語）江戸本郷に八百屋八兵衞といふがあつた。或る年の暮の大火に類燒したので、一家駒込の吉祥寺に立退いた。お七といふ十六になる娘があつたが、或る夕暮に、寺の小姓小野川吉三郎が手に刺を立てて困つてゐるのを拔いてやつたのが緣となつて、二人は人知れず文を通はせる仲となつた。その後、家の建築が出來て八百屋一家は新宅に歸つたが、二人は下女の手を經てなほ文通してゐた。或る大雪の日、吉三郎は農家の若者に身をやつして八百屋に行つて、降りこめられて店の端に一夜を明かした。この夜、親類に出產があつて八百屋夫婦が出かけた留守に、二人は戀を溫める機會を得た。

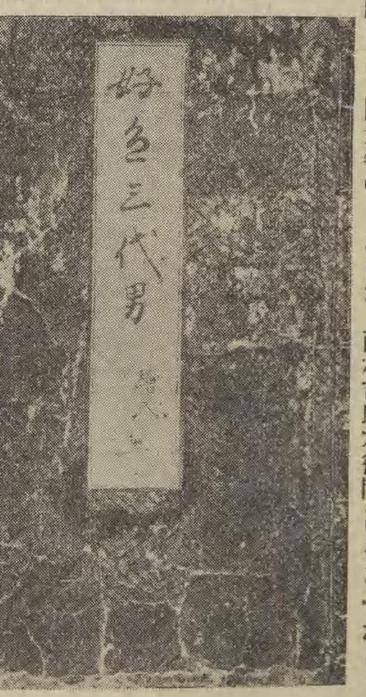
好色五人女題簽

これより、お七は女心のはかなさに、又火事があつて吉祥寺に立ち退くことになれば、吉三郎に逢ふことも出來ようと、我が家に放火した。この事露顯して十七歳の春、鈴ヶ森に火刑に處せられた。吉三郎は事過ぎてこれを知り、驚いて自殺しようとしたが、人々に止められて出家した。

〔卷五〕（戀の山源五兵衞物語）鹿兒島に源五兵衞といふ男があつた。衆道に恥つて女色に心を寄せなかつたが、親しんだ若衆二人まで死んだので、無常を觀じて出家姿となつた。こゝに琉球屋の娘おまんといふ美人が、源五兵衞入道に戀して、屢々文を送つたが返事だになかつた。そこでおまんは、若衆姿に男裝して、その庵を訪ひ、若道を以て誘ふと、源五兵衞入道もとう〳〵靡かされた。その上で女子たることを明かして契をこめ、京で覺えた狂言を眞似て世を送つてゐた。おまんの兩親は娘の行方を探し出し、それ程に思ひ合つた仲ならばと、二人を許して、富有な身代を讓つた。その額は源五兵衞一代には何としても使ひ果しがたい程であつた。

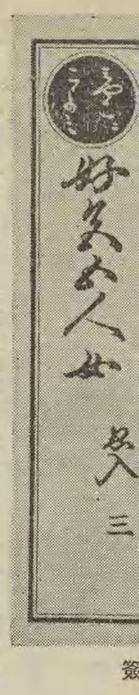
【題材】（卷一）お夏清十郎の件は、寛文元年の事實である（傳奇作書後集所載、中興世話見年代記）、「五人女」にその頃上方で狂言に作り、地方までも廣まつたとあるのは、恐らくは事實であらう。本書中に見えるやうな小唄も流行したと傳へてゐる。享保三年版「亂脛三本鑓」（西澤一風作）の卷四に、「しかしそれもいはれぬ、ふきれうでも片上のおなつを見よ、あれこそ日本に名を流せし、播州姫路但馬屋お夏がなれのはて、手代清十郎とせゝくりあひ云々」とあつて、お夏が老齡となつて、茶店の主と零落した有樣を書いてあるのは、小說の一節ではあるが、これも恐らく事實に據つたのであらう。さすれば、西鶴の筆によつて、美化された所も少くないと思はれる。（卷二）樽屋おせんの物語は、貞享二年正月二十二日大阪の出來事に材を得てゐるに相違ないが、同事件を傳へたものは未だ知られない。「樽屋おせん歌祭文」とは大分事件が違つてゐるが、何れが原事實に近いか知り難い。（卷三）おさん茂右衞門の話は、所傳を知らない。「大きやうじおさん歌さいもん」には、手代茂兵衞に言ひ寄られて大經師の妻おさん不義をなし出奔した。この事世に廣まつて、東にゐた夫以春に知れたので、以春は上洛して行方を尋ねて探し出し、京中引廻しの上、姦夫姦婦は死刑に處せられたとある。とにかく當時の事實に據つたものに相違ない。（卷四）八百屋お七が放火の罪で火刑に處せられたのは天和二年であるから、本書は中一年を置いて、原事實に據つて作られたものであらう。原事實は、「天和笑委集」「江都著聞集」に傳へられてゐる。「天和笑委集」に據ると、森川宿に八百屋市左衞門といふ富有な者があつた。その娘お七、年は十六、頗る美人であつたが、十二月二十八日、家類燒の災に罹つたので、一家は正仙院といふ寺に一時立退いてゐた。この寺に生田庄之介といふ十七になる美少年がゐた。庄之介何時となくお七を戀ひ、八百屋の下女を賴んで文を送り契をかはした。かくて日數經て翌年正月二十五日八百屋一家は新宅に歸ることになり、二人も惜しい袂を分つ事となつた。お七は家に歸つてからも文を通はし、又稀に訪ひ來る庄之介に逢うてゐたが、遂に思嵩じて病となつた。この戀、親に打明けても許されまい、さらば言はずに置いた方がよからうと思ひ煩うた末、再び家が火災にかゝらば、又彼の寺に避難して、庄之介に逢ふ機會もあらうと、自分の家に放火することを考へて、風の强い日を待つてゐた。或る夜、忍んで隣家の垣に火を附け、やがて燃え上ると、人々に見つけられて容易く消し止められたが、逃げ後れてお七は疑をかけられ、遂に奉行所に引かれた。放火の事は自白したが、災の人々の上にかゝるを恐れてその原因は云はなかつた。かくて三月十八日遂に火刑に處せらるゝ事となり、さしも美しかつたお七も煙と消えた。父母や兄などの歎きは一通りでなかつた。わけて庄之介はその跡を追はうとしたが、思ひ直して高野山に上り、高僧を賴んで出家を遂げたといふのである。「江都著聞集」に據ると、本鄕追分に八百屋太郎兵衞といふ者があつた。天和元年お七が十四の年に、丸山本妙寺より出火して、その家も類燒した。一家は暫し小石川の圓乘寺に身を寄せてゐた。この寺に山田左兵衞といふ小姓がゐて、二人の間に戀が成立した。日數經て八百屋一家は新宅に歸つた。別れて慕るは戀の習ひで、二人が惱んでゐると、こゝに吉祥寺門前に吉三郎といふ無賴漢がゐて、お七を騙して艷書の取次をしては、金品を貪り取つてゐたが、とうとうお七に放火を勸めた。戀に迷うたお七は淺はかにも煽動に乘つて放火の罪を犯して捕へられ、法に因つて火刑に處せられようとした。奉行は、お七の心事を憐れんで年齡を隱させて、十五歳未滿として減刑しようとしたが、火事場稼ぎで捕へられた吉三郎の申立てで、お七は十六歳であるとの確證動かし難くなつて、助命叶はず死刑に處せられたといふのである。二說の間には可なりの相違がある。その何れが眞なるか、更に後の研究に待つべきであるが、何れにしても西鶴の「五人女」の話は、諸所事實から離れてゐると思はれる。（卷五）おまん源五兵衞の話も、寛文三年の事實と傳へられ、小唄などに歌はれてゐる。【影響】實永元年の「おまん源五兵衞薩摩歌」（別項）同三年の「戀八卦柱曆」（別項）、同六年の「五十年忌歌念佛」（別項）は、何れも近松門左衞門の作であるが、「戀八卦柱曆」は本書の曆屋物語、「五十年忌歌念佛」は淸十郎物語、「薩摩歌」は源五兵衞物語と同材であつて、近松がこれ等を參照したであらうとは推察されるが、著しい影響は見





態度に考へ合せて見るべきものである。なほこれを彼の他の作品に比べると、特殊の地位を占むるものである。（一）他の作品は、斷片的な小話を並べて、これを外面的に人物を以て連ねた特殊な形式を有してゐるが、本篇は少くとも、普通の短篇小說の形を有してゐる冊【作者】無署名、從來西鶴と考へられてゐたが、西村市郎右衞門（嘯松子）であらうと

の大火に類燒したので、一家駒込の吉祥寺に立退いた。お七といふ十六になる娘があつたが、或る夕暮に、寺の小姓小野川吉三郎が手に刺を立てて困つてゐるのを拔いてやつたのが緣となつて、二人は人知れず文を通はせる仲となつた。その後、家の建築が出來て八百屋一家は新宅に歸つたが、二人は下女の手を經てなほ文通してゐた。或る大雪の日、吉三郎は農家の若者に身をやつして八百屋に行つて、降りこめられて店の端に一夜を明かした。この夜、親類に出產があつて八百屋夫婦が出かけた留守に、二人は戀を溫める機會を得た。

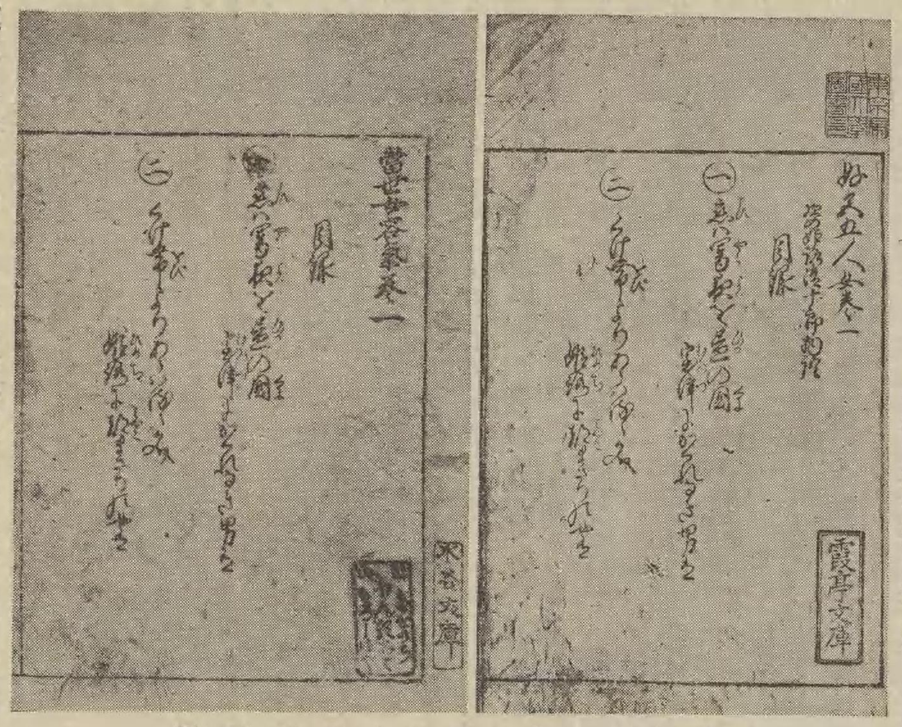


とを明かして契をこめ、京で覺えた狂言を眞似て世を送つてゐた。おまんの兩親は娘の行方を探し出し、それ程に思ひ合つた仲ならばと、二人を許して、富有な身代を讓つた。その額は源五兵衞一代には何としても使ひ果しがたい程であつた。

【題材】（卷一）お夏清十郎の件は、寬文元年の事實である（傳奇作書後集所載、中興世話見年代記）。「五人女」にその頃上方で狂言に作り、地方までも廣まつたとあるのは、恐らくは事實であらう。本書中に見えるやうな小唄も流行したと傳へてゐる。享保三年版「亂脛三本鎚」（西澤一風作）の卷四に、「しかしそれもいはれぬ、ふきれうでも片上のおなつを見よ、あれこ

火事場稼ぎで捕へられた吉三郎の申立てで、お七は十六歲であるとの確證動かし難くなつて、助命叶はず死刑に處せられたといふのである。二說の間には可なりの相違がある。その何れが眞なるか、更に後の研究に待つべきであるが、何れにしても西鶴の「五人女」の話は、諸所事實から離れてゐると思はれる。（卷五）おまん源五兵衞の話も、寬文三年の事實と傳へられ、小唄などに歌はれてゐるのみで、詳しいことを傳へたものがない。

【構想】卷五の物語の外は、すべて事件の最後が悲慘になつてゐるから、これを悲劇として見るならば、多くは構想を誤つて居り、そのために悲劇としての效果が甚だ少ないと云はねばならない。例へば卷一には、無用な第一章があつたり、櫻狩の密會に一章を費したりしてゐるが如き、卷二には、戀の成立に全卷の大部分を與へて、肝腎な悲劇に直接關係を有する部分を短くしてゐるなどそれである。併し、西鶴が特殊な一視角から觀て、人生を描いてゐるもので、必ずしも悲劇として事件を取扱つたものでないと見れば、各卷意義もあり、興味もあると云はねばならない。ともかくも、特殊な構想として、これを彼の特殊な觀照の態度に考へ合せて見るべきものである。なほこれを彼の他の作品に比べると、特殊の地位を占むるものである。（一）他の作品は、斷片的な小話を並べて、これを外面的に人物を以て連ねた特殊な形式を有してゐるが、本篇は少くとも、普通の短篇小說の形を有してゐることを明かして、それを取扱つてゐるが、この作は、人生の全相を取扱つてゐること。又他の好色物は好色生活を主題としてゐるが、本篇は戀愛生活を主題としてゐること、これ等の諸點に於て、彼の作品中特に注意に値するのである。【影響】寶永元年の「おまん源五兵衞薩摩歌」（別項）同三年の「戀八卦柱曆」（別項）、同六年の「五十年忌歌念佛」（別項）は、何れも近松門左衞門の作であるが、「戀八卦柱曆」は本書の曆屋物語、「五十年忌歌念佛」は淸十郎物語、「薩摩歌」は源五兵衞物語と同材であつて、近松がこれ等を參照したであらうとは推察されるが、著しい影響は見えてゐない。紀海音の「八百屋お七」（別項）も、本書の八百屋物語と同材である。又、歌祭文の「大きやうじおさん歌さいもん」の文句中には、「五人女の一のふで」と見え、「八百屋お七歌さいもん」の中にも、「五人女の三のふで」と見えるから、これ等の歌祭文にも關係のあることは知られるが、さしたる影響はないやうである。



好色五人女・當世女容氣（目次）

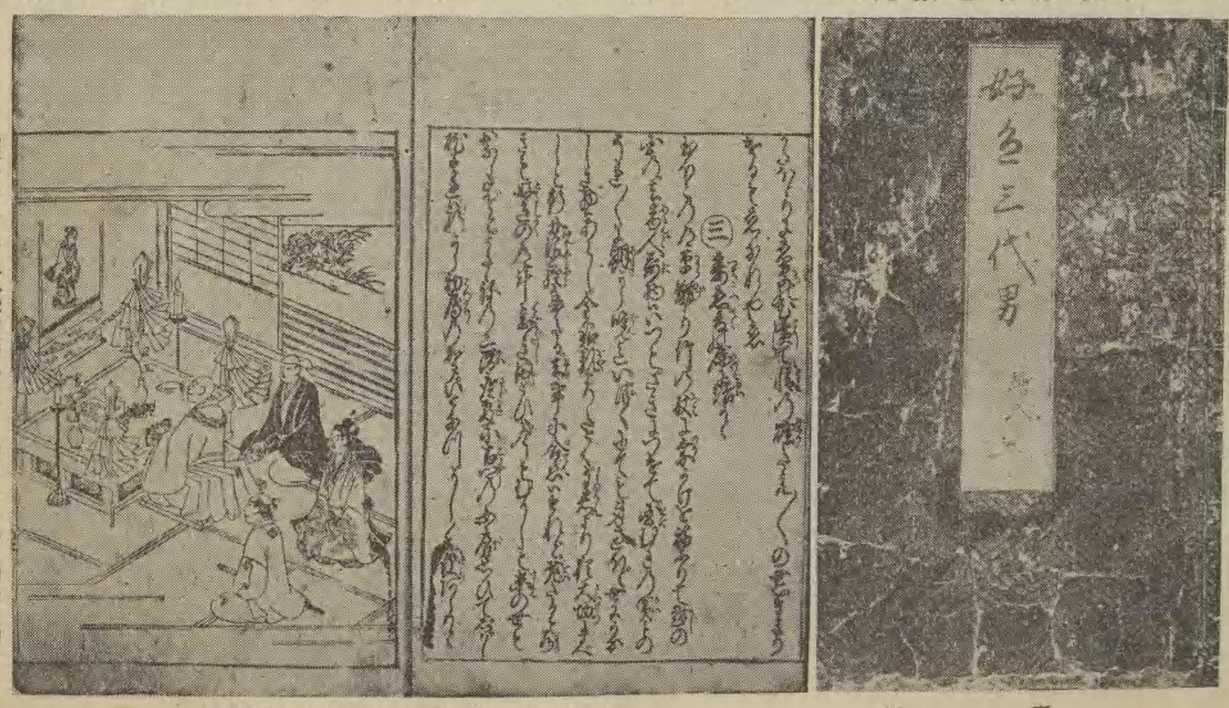
【參考】西鶴好色物全釋岡邨美二二〇西鶴五人女評釋玲木敏也（國文學講座）〇西鶴輪講好色五人女三田村鳶魚編〇西鶴好色五人女詳解尾形美宣〇西鶴の五人女を評す（早稻田文學、明治三九）〇好色五人女評釋藤井乙男

好色三代男（かうしよくさんだいをとこ）

浮世草子　五

【藤村】

【作者】無署名、從來西鶴と考へられてゐたが、西村市郎右衞門（蹴松子）であらうといふ說が唱へ出されてゐる。【畫工】吉田半兵衞かといふ。【體裁】美濃判形、題簽には



表紙

好色三代男（小田久太郎氏藏）

輪の中に諸國と記して、「好色三代男」の上に置いてある。【刊行】奥に「貞享三曆孟陽上澣日、書林壽詞堂　皇都三條通西村市郎右衞門同八幡町通坂上勝兵衞刊行」とある。【諸本】西鶴全集（帝國文庫）・西鶴好色本（平民書房）所收。

【梗概】夢助といふ者、十三歳の時から戀に身を入れて、三十歳頃までに遊び盡くした。一日神詣での歸るさ、夕陽西に傾く頃、小川の畔に出た。川の水が芬々として忍冬酒のやうな香をなしてゐる。掬んで見ると、その味無類である。醉心地に渡らうとすると、川上から一大酒杯が流れて來た。この杯に打乘つて川を渡ると、山の麓に一の庵がある。入つて見れば、本尊は高島田に樓かいどつた女姿である。こゝに一人の僧が出でて夢助に、汝色に耽ること數年、昔、一代男・二代男の戲れた女は皆遊女であつた。今汝三代男といはるゝからは、遊女の外の眞の戀を知らなければならないと云つた。夢助は僧の誘ふまゝに一室に入つて、東西南の障子を開けば、諸國の好色が目前に現はれた。これを懷紙に記したのが、本書五卷三十二條の戀愛說話である。

【構想】三十二條の說話は、みな戀愛好色に關するものばかりである。さうしてそれ等はただ漫然と選ばれ、漫然と排列されたものである。この作は、西鶴の何れの好色本に比べても纏まりのない作である。西鶴の名望を慕ふものが、西鶴の好色本の外面を摸倣したものであらうと云はれるのも無理ならぬことである。

〔藤村〕

好色四季咄（かうしよくしきばなし）　浮世草子　四册

【作者】未詳【角書】繪合【刊行】刊年未詳、但し畫風及び體裁から見れば、貞享末年か元祿初年の刊本なることはほぼ推定される。元祿五年の「廣益書籍目錄」には「四季ばなし」四册とある。【解說】「四季咄」といふは言ふ迄もなく、各卷を四季に配し、一卷春の部「正月二日學文はじめ。二月初午あめほうびき。三月三日住吉鹽干まつり」。二卷夏の部「卯月八日花つみの寺參。五月端午御祝儀のちまき。六月祇園會すゞみの太郎くわしや」。三卷秋の部「七月盂蘭盆おどりずきの女。八月十五夜ひろ澤の月。九月十三夜まめぬす人」。四卷冬の部「十月廿日ゑびす祭せいもんはらい共いふ。十一月朔日かみ置の氏神もふで。十二月十三日御かれいのすゝはき」。となつてゐるためである。別にまた「題名目錄」といふ見出しで、矢張り春夏秋冬に配した「第一小學」「第二大學」「第三白浪」「第四工伯」「第五書林」「第六女侠」「第七松陰」「第八曲水」「第九正夢」「第十鉞疵」「第十一假橋」「第十二手燭」十二ケ月を表示してある。本書は好色、性慾生活の歡樂を主とした好色本である。從來元祿六年刊「浮世榮花一代男」（別項）、そ他の「好色勘忍記」「浮世花鳥風月」などは、本書の改題本とされてゐたが誤りである。

〔石川（巖）〕

好色諸國心中女（かうしよくしよこくしんぢうをんな）　「諸國心中女」を見よ。

好色盛衰記（かうしよくせいすゐき）　浮世草子　五册

【作者】未詳、無署名【刊行】奥に、「貞享伍辰年（元祿元年）書林、武州日本橋南一丁目平野清三郎、攝州大坂折屋町江戸屋莊右衞門板」とある。【諸本】西鶴榮花咄（改題本）元祿十四年、山口屋權兵衞板。新選繪入西鶴全集（大正一一）驕樂篇第一卷に所收。【解說】構想・筆致共に西鶴に倣うたものである。各卷五章讀切りの說話で、總て二十五章。遊女買ひのことを綴つてある。各章の見出しには、何々大臣とあつて、大盡客列傳の形をなしてゐる。時めく全盛大盡もあれば、遊びに富を失つた大盡の身の果てもある。賤しい身分に不慮の大金を儲けて、遊女遊びに興ずるものもあれば、二年の遊興費に宛てた金を一夜に費ひ盡くした男もある。人も樣々、遊びも樣々、場所も所々と變つて、端物的好色本としては興味の多いものである。筆致に豐富と洗練とがあつて、作は平凡でない。西鶴の作に擬せられてゐるのも一理あると思はれる。

〔藤村〕

好色俗むらさき（かうしよくぞくむらさき）　浮世草子　五册

【作者】書俳軒流宣（石川流宣）【刊行】元祿十一年、江戸長谷川町近江屋九兵衞板【梗概】望月主計といふ者、妓吉野に馴染みて子を儲けた。吉野はその後、身請されて行方知れずになつた。主計は、これを尋ぬるうちに、江戸吉原に於て數人の武士と喧嘩して、その中の二人を討ち、二人を逃がした。逃げた二人の武士公田新九郎・牡鹿金平は友人二人を誘うて來て、遂に主計を日本堤に討つた。この時、四人の武士の中三人は死んで、梅田三右衞門のみ殘つた。主計が暗討に逢つた報知が奥州にゐた兄の許に達したので、兄は江戸に上つて、吉野の生んだ主計の子に父の讐を討たせようとして、その子の行方を探してゐた。兄は又、妓清花に親しんでゐたが、偶々この女が死に、その墓に詣でると、そこに一人の美少年を見た。これが吉野の生んだ子であつたのに驚喜して、彼を助けて敵を討たせた。

【解說】說話を全體の上から見れば、敵討話であるが、妓吉野・清花などに關する條に好色的性質もある。描寫は粗笨である。金平淨瑠璃の影響もあると思はれる。繪も亦、それに類する。

〔藤村〕

西鶴榮花咄（好色盛衰記改題）

好色染下地（かうしよくそめしたぢ）　浮世草子　五册

【作者】未詳、序に松の月と署名があるが、誰か明かでない。【刊行】元祿四年。

【梗概】京に金兵衞といふ豪商があつて、一子金四郎は優男である。出入の又七といふ者、江戸に下つて、吉原全盛の遊女花紫に、金四郎のことを話すと、花紫は見ぬ戀に憧れて、遙々金四郎に艷書を送つた。この文を見て金四郎は花紫の情に感じ、假病をなし、養生と稱して江戸の支店に下り、花紫に馴染む。然るに花紫は他に言ひ交した男があつて、その約を無にしかねて身請けされる。廓を出づるは生靈に苦しめられる。偶々僧があつてお兼を誡める。この僧は金四郎の守本尊の觀音菩薩である。お兼は呪詛の罪によつて鉢かづきとなつたので、罪障消滅のために廻國する途中、伊勢でお松等に出會ふといふ一挿話がある。鉢かづきの話の影響、觀音の誡めなどに假名草子の古風が見えてゐる。なほ、貞享元年板の「花の名殘」（別項）に比すると、見ぬ戀の條も、佛の化身の人を誡める條も、場所を江戸と京に置いた點も似てゐる。直接にそれを摸したのでなく、共に假名草子の古風を存するために、かゝる類似の構想を示すに至つをしたが、夫婦は聖地を汚した罪で醜態をさらし、關まで送られた。眞葛は身を恥ぢて舌食ひ切つて自殺し、源は江戸の店に助作といふ者を賴つて下り、順路江戸に着いたが、その夜の夢に眞葛の俤が現はれて、源の浮氣心を怨んだので、源も深く感じて、再び上方に歸り、京の東山の庵に眞故坊と名のつて出家の身となつた。かゝる筋の中に、源の諸所に於ける好色的遊びを書き、併せて大阪から江戸までの道中を道中記風に書、した違つた性質の相混じたところに、本書の特質が存すると共に、當時の好色本流行を語つてゐる。

〔藤村〕

好色旅枕（かうしよくたびまくら）　浮世草子　一册

【作者】未詳【畫工】古山太郎兵衞師重【體裁】枕形、縱二寸七分、横六寸一分、旅行の携帶に便宜なやうに、かゝる形にした旨序に

に入つて、東西南の障子を開けば、諸國の好色が目前に現はれた。これを懐紙に記したのが、本書五卷三十二條の戀愛説話である。

【構想】三十二條の説話は、みな戀愛好色に關するものばかりである。さうしてそれ等はただ漫然と選ばれ、漫然と排列されたものである。この作は、西鶴の何れの好色本に比べても纒まりのない作である。西鶴の名望を慕ふものが、西鶴の好色本の外面を摸倣したものであらうと云はれるのも無理ならぬことである。〔藤村〕

好色四季咄（かうしよくしきばなし）　浮世草子　四册

【作者】未詳【角書】繪合【刊行】刊年未詳、但し畫風及び體裁から見れば、貞享末年か元祿に入つて、東西南の障子を開けば、諸國の好色が目前に現はれた。これを懐紙に記したのが、本書五卷三十二條の戀愛説話である。

【構想】三十二條の説話は、みな戀愛好色に關するものばかりである。さうしてそれ等はただ漫然と選ばれ、漫然と排列されたものである。この作は、西鶴の何れの好色本に比べても纒まりのない作である。西鶴の名望を慕ふものが、西鶴の好色本の外面を摸倣したものであらうと云はれるのも無理ならぬことである。〔藤村〕

好色四季咄（かうしよくしきばなし）　浮世草子　四册

【作者】未詳【角書】繪合【刊行】刊年未詳、但し畫風及び體裁から見れば、貞享末年か元祿

した好色本である。從來元祿六年刊「浮世榮花一代男」（別項）、その他の「好色勘忍記」「浮世花鳥風月」などは、本書の改題本とされてゐたが誤りである。〔石川（巖）〕

好色諸國心中女（かうしよくしよこくしんぢうをんな）　「諸國心中女」を見よ。

好色盛衰記（かうしよくせいすゐき）　浮世草子　五册

【作者】未詳、無署名【刊行】奥に、「貞享伍辰年（元祿元年）書林、武州日本橋南一丁目平野清三郎、攝州大坂折屋町江戸屋莊右衞門板」とある。【諸本】西鶴榮花咄（改題本）元祿十四年、山口屋權兵衞板。新選繪入西鶴全集（大正一二）驕樂篇第一卷に所收。【解説】構想・筆致共に西鶴に倣うたものである。各卷五章讀切りの説話で、總て二十五章。遊女買ひのこ

【作者】書俳軒流宣（石川流宣）【刊行】元祿十一年、江戸長谷川町近江屋九兵衞板

【梗概】望月主計といふ者、妓吉野に馴染みて子を儲けた。吉野はその後、身請されて行方知れずになつた。主計は、これを尋ぬるうちに、江戸吉原に於て數人の武士と喧嘩して、その中の二人を討ち、二人を逃がした。逃げた二人の武士公田新九郎・牡鹿金平は友人二人を誘うて來て、遂に主計を日本堤に討つた。この時、四人の武士の中三人は死んで、梅田三右衞門のみ殘つた。主計が暗討に逢つた報知が奥州にゐた兄の許に達したので、兄は江戸に上つて、吉野の生んだ主計の

ゐたが、偶々この女が死に、その墓に詣でると、そこに一人の美少年を見た。これが吉野の生んだ子であつたのに驚喜して、彼を助けて敵を討たせた。

【解説】説話を全體の上から見れば、敵討話であるが、妓吉野・清花などに關する條に好色的性質もある。描寫は粗笨である。金平淨瑠璃の影響もあると思はれる。繪も亦、それに類する。〔藤村〕

好色染下地（かうしよくそめしたぢ）　浮世草子　五册

【作者】未詳、序に松の月と署名があるが、誰か明かでない。【刊行】元祿四年。

【梗概】京に金兵衞といふ豪商があつて、一子金四郎は優男である。出入の又七といふ者、江戸に下つて、吉原全盛の遊女花紫に、金四郎のことを話すと、花紫は見ぬ戀に憧れて、遙々金四郎に艷書を送つた。この文を見て金四郎は花紫の情に感じ、假病をなし、養生と稱して江戸の支店に下り、花紫に馴染む。然るに花紫は他に言ひ交した男があつて、その約を無にしかねて身請けされる。廓を出づる時に、自分によく似たお松といふ女を、自分の代りに金四郎に薦める。お松は金四郎のゐる支店の向ひ家の娘である。ところが兩家は豫て仲が惡く、この戀は容易く許されさうもないので、金四郎は文を以てお松を誘ひ出して品川で契る。突然京にゐる祖母大病の報を得て、金四郎は歸る。父はこれを機として身代を金四郎に讓る。一方、お松に緣談が起つたが、お松は金四郎との戀があるので、これに應ぜず、却つて懐姙の事を打明けたので、父は怒つて監禁する。お松は逃亡して、乳母と共に金四郎を慕うて東海道を上り、鈴鹿の山中で知らずに盜賊の家に宿つて產の紐を解く。金四郎はお松出奔と聞いて、その身を案じ、又七を伴うて伊勢の神宮に詣で、無事を祈る。その途中、家來が鈴鹿の山中でお松の難を救うたので、お松は金四郎が伊勢に來てゐることを知り、逢ふべき便宜にその嬰兒を棄子にして、札を附けて置く。これに由つて金四郎・お松は再會し、めでたく夫婦となる。

【構想】金四郎が家の召仕お兼は、金四郎に戀の叶はぬを恨んでこれを呪ひ、ために金四郎は生靈に苦しめられる。偶々僧があつてお兼を誡める。この僧は金四郎の守本尊の觀音菩薩である。お兼は呪詛の罪によつて鉢かづきとなつたので、罪障消滅のために廻國する途中、伊勢でお松等に出會ふといふ一挿話がある。鉢かづきの話の影響、觀音の誡めなどに假名草子の古風が見えてゐる。なほ、貞享元年板の「花の名殘」（別項）に比すると、見ぬ戀の條も、佛の化身の人を誡める條も、場所を江戸と京に置いた點も似てゐる。直接にそれを摸したのでなく、共に假名草子の古風を存するために、かゝる類似の構想を示すに至つたのであらう。金四郎が遊里の遊びを寫した所などは新しい好色本風である。かくて本書の構想には、假名草子の古風と、好色本の新風との相混じたものを見る。〔藤村〕

好色旅日記（かうしよくたびにつき）　浮世草子　五册

【作者】未詳【刊行】奥に「貞享四丁卯九月十一日、吉野屋次郎兵衞」とある。【諸本】西鶴全集（昭和版帝國文庫）所收。

【梗概】大阪丹波屋の七といふ男、友人と舟遊びに出掛けて難破し、橋柱に取りついてゐると、その夜、そこに一美人現はれて水中に小箱を棄てた。拾うて翌朝見ると、賀州の源といふ者の若女房で、夫が遊女眞葛に溺れて、自分を顧みぬのを怨んで、水神に二人を取殺し給へと祈つたものであつた。七はこれを携へて、この女の親に告げて引取らせた。さて源は、餘りに放蕩が過ぎるので親道安に勘當されたが、江戸の新店を人手に渡して三十貫目を得、眞葛を身請けし、上鹽町に庵を借りて、同棲を樂しんでゐた。伊勢參宮をしたいといふ眞葛が願ひに、俄に思ひ立つて出發した。先づ京に出で、それから伊勢の宮めぐりをしたが、夫婦は聖地を汚した罪で醜態をさらし、關まで送られた。眞葛は身を恥ぢて舌食ひ切つて自殺し、源は江戸の店に助作といふ者を賴つて下り、順路江戸に着いたが、その夜の夢に眞葛の俤が現はれて、源の浮氣心を怨んだので、源も深く感じて、再び上方に歸り、京の東山の庵に眞故坊と名のつて出家の身となつた。かゝる筋の中に、源の諸所に於ける好色的の遊びを書き、併せて大阪から江戸までの道中を道中記風に書いてある。例へば、

○大阪よりひらかたへ五里（此間五十丁一里也、乘かけ百七十文、から尻百十三文、人そく八十三文）むかしながらの橋柱とうたひし跡ばかり有、ひだりに江口の君のすませ所、おなじながれのむかしおもひ出られてかなし。

ひらかたの入口に好色のむかしおとこ七夕ゞめに宿からんとよみしあまの川、まれなる御けんをしてはかり空にも戀のおもひ川、いたはしく

かういふ類である。

【構想】賀州の源といふ人物を設けて、諸國の好色を書いた意匠は、「一代男」の性質を承けた好色本の亞流である。而して又道中記風なる一面は、「一目玉鉾」（別項）などの畫のないもので、これは實用的な書と見られる。かう

好色旅日記（東京帝大圖書館藏）

した違つた性質の相混じたところに、本書の特質が存すると共に、當時の好色本流行を語つてゐる。〔藤村〕

好色旅枕（かうしよくたびまくら）　浮世草子　一册

【作者】未詳【畫工】古山太郎兵衞師重【體裁】枕形、縱二寸七分、横六寸一分、旅行の携帶に便宜なやうに、かゝる形にした旨序に見えてゐる。【刊行】奥に、「元祿八年亥三月中旬、長谷川町利兵衞」とあり、序にも「武江錦城丁踊鶯軒」とも見えてゐるから、江戸板と知られる。【解説】「好色床談義」（別項）の首に、本書と「好色重寶記」と「好色床談義」を併せて好色三部書といふと書いてある。これ等の書は、好色習俗に關する知識を主としたの

で、文學と稱すべきものではない。又知識を主とする中に、空想もあり、態度にも遊戯的なものが混つてゐるので、低級好奇の一文學と見られぬでもない。「むかし男の曰く」として、業平の言に假託し、又「男曰」として「一代男」の言にも假託して述べてある。〔藤村〕

好色傳受（かうしよくでんじゅ）　脚本　三幕八場

お家物　【作者】小島彦十郎　【名稱】脚色中に、淺野數馬が傾城にやつして口說の仕樣を敎へる場面がある。そこから取つた名稱と思はれるが、更に當時、遊女用の書簡文を集めた同名の書が出たので、それに據つたかとも思はれる。【刊行】元祿六年八月、京、菊屋七郎兵衞版。書師は吉田半兵衞か。【諸本】狂言本（三卷三册）の傳存する外、歌舞伎脚本集（日本名著全集第八卷）所收。【興行】元祿六年、京、早雲長太夫芝居、哥仙重良兵衞座。

【役割】今川式部（竹島幸左衞門）、大ち段之丞（藤川武左衞門）、同弟林之助（村上竹之丞）、橘大藏（柴崎龍左衞門）、淺野數馬（櫻山林之助）、松浦傳七（藤田藤右衞門）、今川郡右衞門（柴崎林左衞門）、藥鑵屋又兵衞（南北三ぶ）、みさきの前（玉川半太夫）、夕顏（袖崎いろは）、撫子（岩井勝彌）等。

【梗概】〔序幕〕（桂川堤）橘家の姫みさきの前は、許嫁の近江國主淺野數馬にあへる事を豫想し、腰元をつれて川の堤に休んでゐる。それと氣付かぬ數馬は、漁に來てその上藺を見染め、盃事などあつてから、姫と分り、一つ駕籠で屋敷に案内される。（橘家廣間）大殿の歿後、跡目評定の席で、書置が讀み上げられた。それによつて、大殿の弟大藏が世を繼ぎ、みさきの前を娶る事となつた。その書置が贋物とは思はれたが、誰も言ひ解く者はない。（段之丞屋敷）腰元の撫子が、重臣段之丞の弟林之助を訪ねて來て、色文の返事を迫つてゐると、不意に段之丞が現はれて兩人の不義を戒めた。ところが今度は兄の方へ、戀仲の腰元夕顏が訪ねて來たため、兄も笑つてしまふ。併し、夕顏は段之丞が惡人大藏に味方する態度を怨み、命を捨てようとする。段之丞は、實は敵方を謀る手段なのだと始めて本心を明かし、來合はした松浦傳七も今まで惡方と思はれてゐたのが、實は味方だつたと分る。〔二幕〕（橘家奥の間）大藏の發起で國の祝とあつて、「龍田」のお能と、狂言「文藏」が催される。その役は家老今川式部と松浦傳七とで、果てて後、褒美の酒を運んだ腰元若葉と傳七との間に口說が起きる。式部が冷やかしてゐたが、上の口上と稱して豫て契つてゐた新之丞が式部の傍へ來たため、此方の關係も暴かれてしまふ。傳七の案で、姫の心を大藏に向けるやう、丁度都から下つて來た傾城を館に呼び寄せる事になる。案内されて來た傾城は、大藏のために姫との口說の仕樣を敎へる。式部が現はれ相手になるうち、その傾城こそ、姫の許嫁數馬の變した姿と分り互に驚いたが、姫もそれと察して喜ぶ。やがて大藏はその女こそ曲者と、人々を呼ばはるうち式部の計らひで、姫と數馬は密かに落ちる。（藥鑵屋又兵衞住居）舞まひの浪人が、門を去らず酒を求めた擧句、醉つて「和田酒盛」を舞つてから藥鑵打ちの手傳ひをしてゐる。其處へこの家の中に姫が隱まはれてゐる事を嗅ぎつけて追手が寄せる。浪人は自分こそ姫を連れ戻して賞に預からうと、追手と渡り合つてゐるうちに、忍び寄つた若侍のために、姫は奪ひ去られる。（土手）若侍が落ち延びて來た所へ、浪人や追手が來て、こゝで切り結び、追手は散りうせたが、若侍と浪人は互に深手を負ふ。こゝへ計らずも傳七が來合はせ、浪人は今川郡右衞門とて式部の弟と知れ、若侍は數馬の家來浪之介であつたので、共に味方と分り、一同この場を引擧げる。〔三幕〕（長屋の表）段之丞・夕顏は酒店を開き、林之助・撫子は餅店を開いて、互に隣同士で痴話喧嘩など見せてゐる。偶々商ひ事から撫子と夕顏との口舌が始まつた暇に、通りかゝりの饅頭賣が餅を盜んで喰つたところが、咽につかへて大騒ぎとなる。饅頭賣は又兵衞で、今日の祭禮を見物に大藏が來る筈だから敵討の好機だと言ふ。（祭禮見物の棧敷）祭禮で小原木踊や南京操、小町踊などが始まる。式部・數馬その他現はれて、棧敷にゐた大藏に贋遺言を問ひ詰めて組伏せる、そしてめでたく神輿は舁き上げられる。

【脚色】初めを武家でゆき、中頃から町人の世界にした功は大きい。當時としては廓以外に町家をこの程度まで描寫した作は珍らしく、寫實描寫の成功といへよう。名題にもよるが全體として柔かみ豐かな點は他の作者のものに見られず、濡れ場は近松等と違つて、徑路の自然さに優れた脚色を見せてゐる。數馬が女にやつして入り込み、式部に發見されながら、言外に意中を明かす邊りは上乘の舞臺面であつたらう。最後の敵討に祭禮を持ち込んだ巧妙さは十分認められるが、立役者が能に堪能なためか、本行を各處に持出し過ぎるのが目につくのは遺憾である。【價値】狂言本の形式について、本作は重大な意義がある。狂言本（別項）の一般形式、寧ろ原則ともされる所は、小說的半面を持つ事であり、殆ど異例なき事實であるのに、本作は全くその通例の形式を破り、後世の臺本又は繪入根本と同樣で、臺詞以外はト書の形を備へ、枠に入れて詞と區別してある。當時既にこの種の形式が發表されてゐる事は、いかに作者の態度の進歩してゐたかを物語るものである。而も同一作者の後の作にかゝる形式の見えぬのは、矢張り當時の社會としては、この形式を受け容れなかつたのであらうか。〔守隨〕

好色床談義（かうしよくとこだんぎ）　浮世草子　六册

【作者】未詳　【刊行】元祿二年　【解說】好色に關する各種事項の說明を主とし、これに空想、想像の色彩を賦して、多少文學化したものである。その目次の大體は、卷一に御臺所・奥樣・後家・密夫を擧げ、卷二に幼女・中女・腰元・仲居・お物師・乳母・下女・舞子を擧げ、卷三に女商人・鹿子結ひ・妾・作物浪人女・有馬湯女・風呂屋湯女の各種から、諸國浦々の好色を擧げ、卷四に旅籠屋女・問屋蒲葉女・小歌比丘尼・神樂神子・茶屋女・物嫁等を擧げ、卷五に太夫・天神・圍・半夜・假契（はぐり）を擧げて、好色的生活の種々相を述べ、卷六に祕藥、その他の事を記してある。〔藤村〕

好色二代男（かうしよくにだいおとこ）　「諸艶大鑑（しよえんたいかがみ）」を見よ。

好色敗毒散（かうしよくはいどくさん）　浮世草子　五册

【作者】序の末の署名に「夜食時分」とあるが未詳。【別名】風流敗毒散　【刊行】元祿十六年　【諸本】江戸時代文藝資料第二卷所收。

【梗概】〔卷一〕第一（一、長崎船）長崎の出來分限角左衞門が伊勢參宮の歸途、大阪で豪遊の末、太夫を身請しようとした。所が、その太夫は幼い時手離した實の娘であつた。（二、愛染堂）初に「傾國の遊びの十德一損」の說明がある。長惣といふ男、病氣全快を愛染明王に謝すると、明王は女房の不心得と敵娼の誠心を敎へ告げる。（三、反魂香）死んだ遊女を慕ふ男に幇間の才覺で、「ゐづつやの大床に堆朱の卓子を据ゑ其上に白銀の天目に茶漬を熱うして供へ」ると、亡靈があらはれた。〔卷二〕（一、秋の露）川新といふ男の妻は、夫の敵娼の生靈に殺され、その死靈に敵娼も殺されたが、或る夜川新の夢に、兩女和合して「此一件を狂言に仕組ませよう」と語つたが、程なく京大阪にその看板が出た。（二、夢想のくすり）千太郎といふ男、夢に吉祥天女から緣切の妙藥を授けられ、これを賣つて儲けたが、島原の廓から懇願され、廢業すると共に毎月十貫目づつ貰ふ事になる。（三、貞操）一さを感じ、遊興を始め遂に分散にあふ。〔卷五〕（一、見はてぬ夢）京の主人から江戸の店を預けられた忠實な手代、ふとした事から遊里の味を覺え、帳尻を合せかねて自殺する。（二、奇妙不思議）遊女の種々の奇癖異病を列擧する。末に、離魂病の女郎の治療を賴まれた醫者が、「影のわづらひ殿を引舟に、幸の事なり」治療せぬ方がよからうと言つたと。（三、千秋樂）大工久五郎、得意先の使で揚屋に行き、印（しるし）といふ替名の女郎を見て戀に惱む。これを聞いた女房が印に會つて賴むと、印は遊興費として十五兩を與へた。久五郎は

たものである。「破邪顯正」を以て名づけた書は、中島隨流の「誹諧破邪顯正」（延寶七年刊）、如是庵西順の連歌の「破邪顯正」（元祿五年成）などもある。辯難攻擊批判の書が佛法・心學・假名草子・和歌・俳諧・能謠、さては野郎傾城の月旦にまで流行つたことは、京島原の遊女評判記「桃源集」の序にも種々出してゐる通りであるが、白眼居士はこの「桃源集」の名を、彼の著者中に引いてゐる。【刊行】貞享丁卯（四年）と自序にあり、卷尾に書林西澤森本板行と見える。【諸本】故小酒井不木博士家藏本の外、傳本又は別本等を見ない。【解說】〔上卷〕「しかにあり。せめて世の鑑（かがみ）とならぬ書なりとも。板（はん）を後世に傳へん物を彫（ほる）べきにと後悔。取かへされぬ金銀ぞかし」と罵つてゐる。それから（一）傾城往古よりあること、（二）好色の書今に限らざること、（三）戀路なくば浮世なきこと、（四）天地陰陽の道理自らなることの四項に就きて辯じ、自ら本書について、「根から惡性はやまずとも此書を見る緣によつて。それはさうなりとおもはじ。自然に小水ながれて石を穿（うが）つ道理ともなり。父母に孝行に謙（けん）り奢らぬ心ばへともならんかと書付侍り」と說いてゐる。〔中卷〕「若好色の書を破らば原

心を教へ告げる。（三、反魂香）死んだ遊女を慕ふ男に幇間の才覺で、「ゐづつやの大床に堆朱の卓子を据ゑ其上に白銀の天目に茶漬を熱うして供へ」ると、亡靈があらはれた。〔卷二〕（一、秋の露）川新といふ男の妻は、夫の敵娼の生靈に殺され、その死靈に敵娼も殺されたが、或る夜川新の夢に、兩女和合して「此一件を狂言に仕組ませよう」と語つたが、程なく京大阪にその看板が出た。（二、夢想のくすり）千太郎といふ男、夢に吉祥天女から緣切の妙藥を授けられ、これを賣つて儲けたが、島原の廓から懇願され、廢業すると共に毎月十貫目づつ貰ふ事になる。（三、腹帶）一文字屋の女郎の產んだ双兒は、胤が違ふので生れると共に取組合ひ、一人は殺され、一人は產湯に投身自殺する。〔卷三〕（一、蜆のおきな）蜆川で蜆を採る老翁、遊客に求められて昔の色里の模樣、色道の極意を語つた後、我こそ道祖師と名乘つて消え失せる。（二、あそび敵）大家の手代、子供の頃主人の供をして遊興した味を忘れかね、元服したての若旦那を遊里に唆かして暇を出される。（三、世をすて人）世捨人有無庵、深夜の難波新町で松の精、延紙の精、その他廓に用ふる物の精の集つてゐるのを見る。〔卷四〕（一、店おろし）大家の孫息子源次郎の遊興を手代が心配するが、祖父なる隱居は却つて平氣なので、源次郎もあまり打ちはれたる遊びに拍子拔けがして色里が厭になる。（二、枕鐘）某家の伜遊興費に詰つて父の寢所の傍の戸棚をあけようとするのを、父は盜人と思つて鐘で突き殺す。（三、銀なき宿）某家の債權者中、河六なる男のみが得心判をせぬのを、その敵娼を通じて承諾させたが、當人はこれで女郎のやさしさを感じ、遊興を始め遂に分散にあふ。〔卷五〕（一、見はてぬ夢）京の主人から江戸の店を預けられた忠實な手代、ふとした事から遊里の味を覺え、帳尻を合せかねて自殺する。（二、奇妙不思議）遊女の種々の奇癖異病を列擧する。末に、離魂病の女郎の治療を賴まれた醫者が、「影のわづらひ殿を引舟に、幸の事なり」治療せぬ方がよからうと言つたと。（三、千秋樂）大工久五郎、得意先の使で揚屋に行き、印といふ替名の女郎を見て戀に惱む。これを聞いた女房が印に會つて賴むと、印は遊興費として十五兩を與へた。久五郎はそれを懷中したまゝ行方不明となつたが、あしかけ三年目に歷々の町人頭となつて戻り、十五兩を資本として出世した旨を語つて女房を欣ばせ、又印を身請してその恩に酬いる。

【解說】諸所の遊里、遊客を描いてゐるが、各章とも一貫した說話の興味を本位とするよりは、漫談風に遊里遊興の通を穿たんとするのを目的としてゐるらしい。卷一の第二話、卷五の第二話などは、その傾向が最も著しい。ただ卷五の第三話のみは、相當說話的興味を持ち、人情味にも富んでゐる。全體として文章は流麗である。書名の奇拔なために實質以上に知られてゐる。

〔增田〕

好色破邪顯正（こうしよくはじやけんじやう）浮世草子半紙本三卷四册【作者】白眼居士【畫工】吉田半兵衞【名稱】各卷の內題には、いづれも「好色破邪顯正」とあるが、題簽には、總て「好色破邪顯」とあり、序文中にも本文中にも、書名を「破邪顯正」とし、或は「破邪顯」と兩樣に記してゐる。この書名は序文に言つてゐる如く、寬永十四年に成つた比叡山首楞嚴院空門子眞迢の目蓮宗を破した「破邪顯正記」に倣つたものである。「破邪顯正」を以て名づけた書は、中島隨流の「誹諧破邪顯正」（延寶七年刊）、如是庵西順の連歌の「破邪顯正」（元祿五年成）などもある。辯難攻擊批判の書が佛法・心學・假名草子・和歌・俳諧・能・謠、さては野郎傾城の月旦にまで流行つたことは、京島原の遊女評判記「桃源集」の序にも種々出してゐる通りであるが、白眼居士はこの「桃源集」の名を、彼の著者中に引いてゐる。【刊行】貞享丁卯（四年）と自序にあり、卷尾に書林西澤森本板行と見える。【諸本】故小酒井不木博士家藏本の外、傳本又は別本等を見ない。【解說】「上卷」「しかれば稀に書を讀んにも。神儒佛の掟を綴る文とならばねがつて見るべし。かならず己が誤をわきまへおのづからよきかたに心のうつる事も多かり。若また道なき放逸の書にむかふ時は。おのづから心を轉じて惡道にさそふ媒なる事炳焉」といつて、功利的立場から、世に善書惡書の別あるを述べ、好色本に及んで、「于繫唐紙行なる表紙の五八册。これなん當世好色の一道をひろ〳〵と書はやらして。諸人の目をよろこばし心をなぐさむる助なるよし。嗟鐵蟲を愛して後は漢宮を燒。狼屍を噉て舌を裂。他の一盃の酒を貪り樂んで我滿船の魚を失却がごとくならんかし」といふ。「行なる表紙」は西鶴の好色本などの行成表紙本のことであらう。五八册は、西鶴の一代男乃至五人女の類を主として指したものであらう。これ等の書の取扱つた好色の惡を述べて、次に「これみな彼惡書に指南かきつけて。世に發興すれば。よき事かとおもひて長じきたれば。可惜金銀を板行の資糧に費し。世界の浮氣男ひとはやり賣買すといへども。年數ならず其櫻木は。斧に碎かれて薪となる事目前にあり。せめて世の鑑とならぬ書なりとも。板を後世に傳へん物を彫べきにと後悔。取かへされぬ金銀ぞかし」と罵つてゐる。それから（一）傾城往古よりあること、（二）好色の書今に限らざること、（三）戀路なくば浮世なきこと、（四）天地陰陽の道理自らなることの四項に就きて辯じ、自ら本書について、「根から惡性はやまずとも此書を見る緣によつて。それはさうなりとおもはゞ。自然に小水ながれて石を穿つ道理ともなり。父母に孝行に謙り奢らぬ心ばへともならんかと書付侍り」と說いてゐる。〔中卷〕「若好色の書を破らば源氏いせ物かたりをも破るべきの不審」に答ふるところより始まる。曰く、「源氏物語」「伊勢物語」は、好色の事をしるしても、何時の時何の誰とあからさまに擧げることは無い。「今の惡書のやうに。そんじよそこらの三間めのなに屋の誰が物として何としてとかく事はせざる事なり。たとへまたそれらも例の寓言なり實の名にあらず實の所にあらずといふとも。およそ其あたりに假名實名家名何右衞門といふに似たるがありとも心よからじ」といひ、又、「其上そこにかくし遊女あり。こゝに賣若衆のしのぶあり直段いかほどとまで書るこそ本意ならね」とも云つてゐる。本書が主として西鶴の好色本に對する非難であるといふことに就いては、藤村作博士が詳しく說いてゐる（好色破邪顯正、國語と國文學八ノ四）。さて、白眼居士は佛法上の見地から、「源氏」「伊勢」が敎理上の深義を寓せるをいひ、「源氏・伊勢に多くの鈔ありて、いかにも意味深げに說きなせる上は、今の好色本にも鈔つくらば佛法の助となるべし」との問に對して、「惡性本は惡性本にして。さらに佛法の書にも。ま

藥鑵屋又兵衞（南北三ぶ）、みさきの前（玉川半太夫）、夕顏（袖崎いろは）、撫子（岩井勝彌）等。

【梗概】〔序幕〕（桂川堤）橘家の姫みさきの前は、許嫁の近江國主淺野數馬にあへる事を豫想し、腰元をつれて川の堤に休んでゐる。それと氣付かぬ數馬は、漁に來てその上萬を見染め、盃事などあつてから、姫と分り、一つ駕籠で屋敷に案內される。（橘家廣間）大殿の歿後、跡目評定の席で、書置が讀み上げられた。それによつて、大殿の弟大藏が世を繼ぎ、みさきの前を娶る事となつた。その書置が贋物とは思はれたが、誰も言ひ解く者はない。（段之丞屋敷）腰元の撫子が、重臣段之丞へる。式部が現はれ相手になるうち、その傾城こそ、姫の許嫁數馬の寢した姿と分り互に驚いたが、姫もそれと察して喜ぶ。やがて大藏はその女こそ曲者と、人々を呼ばはるうち式部の計らひで、姫と數馬は密かに落ちる。（藥鑵屋又兵衞住居）舞まひの浪人が、門を去らず酒を求めた擧句、醉つて「和田酒盛」を舞つてから藥鑵打ちの手傳ひをしてゐる。其處へこの家の中に姫が隱まはれてゐる事を嗅ぎつけて追手が寄せる。浪人は自分こそ姫を連れ戻して賞に預からうと、追手と渡り合つてゐるうちに、忍び寄つた若侍のために、姫は奪ひ去られる。（土手）若侍が落ち延びて來た所へ、浪人や追手が來て、こゝで切り結び、

寫實描寫の成功といへよう。名題にもよるが全體として柔かみ豐かな點は他の作者のものに見られず、濡れ場は近松等と違つて、徑路の自然さに優れた脚色を見せてゐる。數馬が女にやつして入り込み、式部に發見されながら、言外に意中を明かす邊りは上乘の舞臺面であつたらう。最後の敵討に祭禮を持ち込んだ巧妙さは十分認められるが、立役者が能に堪能なためか、本行を各處に持出し過ぎるのが目につくのは遺憾である。【價値】狂言本の形式について、本作は重大な意義がある。狂言本（別項）の一般形式、寧ろ原則ともされる所は、小說的半面を持つ事であり、殆ど異例なき事實であるのに、本作は全くその通例

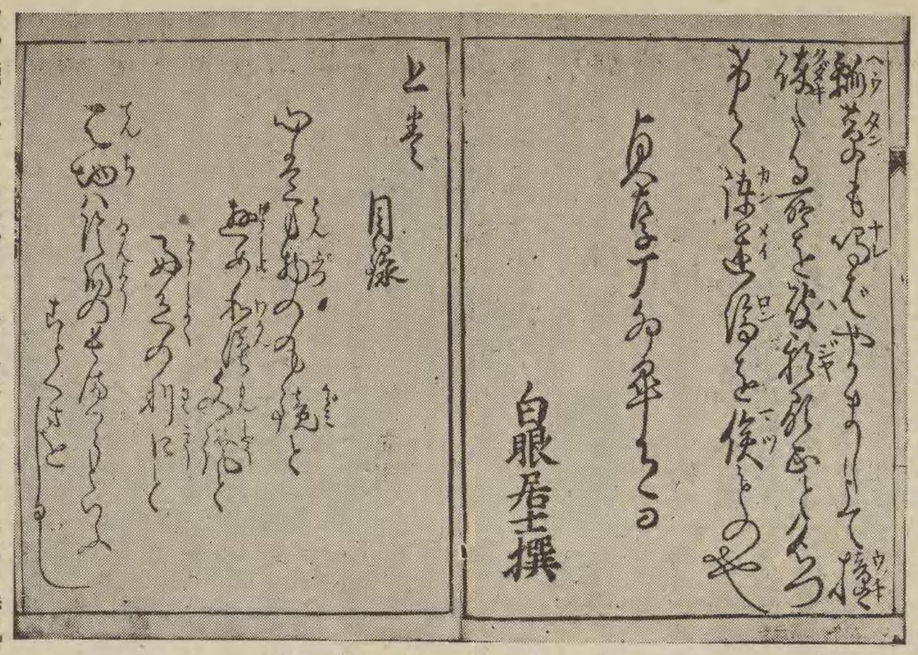
夫・天神・廓・半夜・假契を擧げて、好色的生活の種々相を述べ、卷六に祕藥、その他の事を記してある。

〔藤村〕

好色二代男（こうしよくにだいおとこ）「諸艶大鑑」（しよえんおほかがみ）を見よ。

好色敗毒散（こうしよくはいどくさん）浮世草子 五册【作者】序の末の署名に、「夜食時分」とあるが未詳。【別名】風流敗毒散【刊行】元祿十六年【諸本】江戸時代文藝資料第二卷所收。【梗概】〔卷一〕第一（一、長崎船）長崎の出來分限角左衞門が伊勢參宮の歸途、大阪で豪遊の末、太夫を身請しようとした。所が、その太夫は幼い時手離した實の娘であつた。（二、愛染宮）初に「傾國の遊びの十德一損」の說明がある。長物といふ男、病氣全快を愛染明王に謝すると、明王は女房の不心得と敵娼の誠

た儒のことはざにはなをあらず。それに注をつけたればとて仙術にてもよき書にはなるまじきぞ。源氏いせ物かたりつれ〴〵などは。注抄なきはじめよりこれをもてあそぶに。神變のところあるをもつて世擧て未書を加へたり」といふ。〔下巻〕「ねがひあれどもかなへ



白眼居士撰

もよろづにつけて上をおそれ。今はめにたつ事なし。ことさら京石垣町に漸おごりありしを成敗ありてより。いよ〳〵諸方につゝしめり。しかるを……。彼悪書には當流の染出し模様。さもしげに價の高下をかへり見るは卑氣男。帶はなに〳〵の仕出し。人の見ぬ所を結構に金銀いとはぬがいたり穿さくといふものぞと。奢を手がらに書るはうとまし」といひ、つひに、「此道たへず。止がたきはまた人のつねなり。誠るは善なり。進るは悪なり。其すゝむるとは。ゑもいゑぬ悪性かきあらはす好色の書なり。其悪を責るは菩薩の慈悲なり。悪をば邪といふ。邪を破て正義をあらはして破邪顯と名づけてかいやりすつる物なりけり呵羅〳〵〳〵邪喝」に至つて全巻終る。書中のいはゆる破邪は、文藝上の立場からでなく、功利的の立場から論ぜられてゐる。しかし、「世も戀もある上の書物」と氣を通しての立論は、「ものゝあはれ」を「伊勢」「源氏」になつかしみ、脈を兼好に引いたかいなでの態度ではあるものの、これによりて、一面西鶴に好色本の筆を執らしめた時風と、その影響とを察知し得べきのみならず、一面からは、前にしては天和二年の「好色袖鑑」、後にしては元禄十五年の「筆かくし」などと共に、また當時文學評論の視點と角度とが、かたくなる舊來の戀愛觀と異なるものあるを見出さねばならないであらう。

【作者小傳】種彦の「好色本目錄」に、「此白眼居士は東山の僧なり、西鶴が門人團水が別號を白眼居士といひ、殊に同時代の人なれば、思ひ誤りつる事なり。「正月揃」といふ書も、此僧白眼居士の作なるを、後に團水作と入木して彫あらためし本あり、是書房のさかしらなり」と見えてゐる。白眼居士は未詳であるが、「廣益書籍目錄」（元禄五年）天台宗の部に「通佛二身論」（一冊）、法語の部に「諸宗寶鑑」（五冊）が白眼居士の名で出て居り、「正月揃」（六冊）は物語類の部に團水の名を以て載せられてゐる。しかし「正月揃」は、種彦のいふ如く、洛東白眼居士自序の貞享五年刊行本ありて、それには團水の名が見えない。「正月揃」と「好色破邪顯正」とは版下の書體は違ふけれども、同一の作者に依つて作られたものであらう。「正月揃」（巻六）の「色里の三朝」の條など、所説が彼此相同じきを看取する。又「好色破邪顯正」（中巻）に、「愚が諸宗鐵槌論にもあら〳〵しるせり」とあるによれば、「諸宗鐵槌論」といふ著書もあつたのであらう。要するに白眼居士は貞享の頃洛東に住み、内外和漢の典籍に通じ文筆にも長じてゐた人である。その頃難波に名ある俳諧師と親しくしたらしいが、それは談林の俳人岡西惟中であらうか。

【參考】好色破邪顯正　藤村作（國語と國文學八ノ四）

好色文傳授　浮世草子　五冊

【作者】由之軒政房と署名がある【刊行】元禄元年【諸本】再版は元禄十二年。三版は寶暦三年に「風流文之評判」と改題して出した。江戸時代文藝資料第四に收めてある。

【梗概】〔巻一〕京の三條寺町に住む橋本左七といふ男、近所に住む友人の妹を見染めて文を送り、遂に首尾を遂げる。〔巻二〕次いで左七は智恩院の古道にて、年の程三十三四の尼僧を見染め、その尼僧が黒谷の墓に詣でるに近づき、文を送つて思ひを遂げる。尼僧は多くの財産を左七に殘して死ぬ。〔巻三〕左七は、京より大阪に下る淀川船の中で、角力取鵰熊團右衛門に、衆道を挑まれて困却してゐる瀧川金彌といふ若衆を助けたのが緣となつて、金彌と契を結ぶ。この事顯はれて、金彌は主人の疑を受け里にかへされる。そこで左七は「男色の道一命重しとせず」、思へば危き事と女色に替へる。〔巻四〕かくて左七は新町の太夫荻野に通ひつめ、戀の達引や手管の程を互に文にいはせる。〔巻五〕左七は大阪の住ひを切り上げて、京の烏丸の中程に住所を求め、島原の柏木といふ太夫のもとに通ひ、遂にこれを請け出す。なほこの巻には、太夫一年の入費を記してある。

【解説】本書は「難波法師の書きのこせし好色因果の道を語り申さむ」と篇中にある如く、「一代男」に倣つたもので、文傳授といふ名はあつても、「錦木」や「うすもみぢ」（各別項）の如く全く艶書の手引草として書かれたものではなく、むしろ一篇の小説として見るべきものである。篇中贈答の艶書は、艶書の體を示すと共に説話の進行に役立つてゐる。手紙の文は擬古の體をなしてゐるが、地の文は、西鶴を摸して到らぬものである。〔小泉〕

好色本　浮世草子

【異稱】好色物とも。【解説】好色生活を取扱つた浮世草子（別項）の一種、これを大別すれば端物即ち斷章集と、續物即ち小説的なる筋を持つものと、説明的なものとがある。最後のものは純文學の範圍には屬しないものである。前二者には、その兩面が現れてゐる。さうして武士の場合は、そこに一種の意氣地が生じて、そのための血腥い決鬪や敵討を伴うたので、男色物は一面敵討物であつたり、意氣地や義理の物語であつたりする。好色生活の盛行した時代の人には、好色生活に通曉せんとする欲求があつた。この欲求に對して好色生活諸般の知識を與へんとした説明的な書が出た。これは非文學書であるが、古來これを好色本中に數へてゐる。「好色訓蒙圖彙」「好色貝合」「男色十寸鏡」（各別項）の如きこの類に屬する。

【作者】西鶴を初めとして西澤一風・江島屋其磧・八文字屋自笑（各別項）の如き作者の出た天和二年から元禄を中心として、寶永・正德年間にかけて盛行した。その後も跡を絶つてはゐないが、それは餘勢に過ぎないと見るべきである。こゝに時代生活との關係を見るに、德川幕府初期以來打續いた平和は、元禄の頃に至つて町人階級の勃興を促し、彼等の意氣を旺盛ならしめ、長く武人階級の威力下に屈してゐた彼等をして商工業の隆盛と富の充實とに隨ひ、その充ち滿ちた生命力を十分に伸ばして生きようとするに至らしめた。かくして彼等は致富の方面に潑剌たる精神を示して活動したと共に、又その富力を以て現實生活を享樂する方面に於ても豪華な生活振かゝる社會に入つて好色生活を享樂した所謂遊客なるものにも固より樣々の階級はあつたが、同じく好色本の世界に現るゝ高級なるものに就いて見ると、所謂大盡粹客で大富を有する上に、世故人情にも熟通し、各種の技藝等にも通達して、よく社交界の中心に立ち得べきものであつた。好色生活の興趣は、かゝる遊客・遊女を中心として、揚屋夫婦・幇間・引舟女郎・禿・遣手等の男女を加へ、時としては遊客附屬の學者・文人・藝人等をさへ入れて成立した遊びの中に湧くのであつた。併し遊びはすべて、しかく大勢の賑やかな豪華な中にあるのではなかつた。少數者の靜かな、し

に就いていふと、男性を中心としたものと、女性を中心としたものと、同性愛、同性々慾を取扱つたものとに分けられる。この最後のものを男色物といふ。【由來】世に好色本の起原を天和二年版の西鶴の「好色一代男」（別項）に置くが、なほその由來する所を尋ぬれば、これより以前に行はれた「遊女評判記」と「野郎評判記」と花街關係書とを擧げねばならない。「遊女評判記」は京都島原、大阪新町などの遊女を列擧して、その容色・技藝等について品評したもので、多少文藝的色彩を持つものである。延寶年間の「朱雀遠目鏡」の如きは、「一代男」の後半部に見える名妓を人物としたず。錢あれども用ひざるは全く貧者とおなじ何を樂とせんや」の問を掲げ、「衣食住の三ツ足るをたのしみとす」といひ、それに品々あれども、要するに「少欲知足といひて。少きを得て足としればつねにたのしみあり」と述べ、「今簡略の御代なるを心得て。其遊女町に

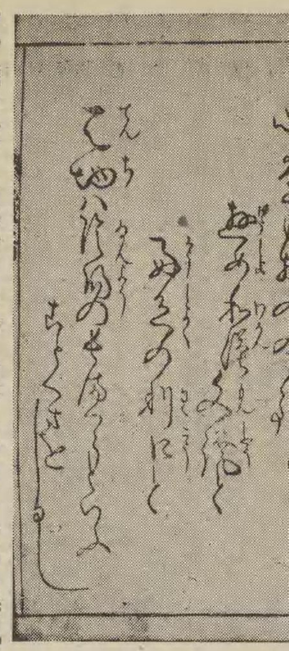
に就いていふと、男性を中心としたものと、女性を中心としたものと、同性愛、同性々慾を取扱つたものとに分けられる。この最後のものを男色物といふ。【由來】世に好色本の起原を天和二年版の西鶴の「好色一代男」（別項）に置くが、なほその由來する所を尋ぬれば、これより以前に行はれた「遊女評判記」と「野郎評判記」と花街關係書とを擧げねばならない。「遊女評判記」は京都島原、大阪新町などの遊女を列擧して、その容色・技藝等について品評したもので、多少文藝的色彩を持つものである。延寶年間の「朱雀遠目鏡」の如きは、「一代男」の後半部に見える名妓を人物とした章と甚だ接近した性質を持つてゐる。恐らく「一代男」もこれ等に負ふ所が少くないであらう。「野郎評判記」は野郎役者等の容色技藝の品評をなしたもので、同樣に文學化された記述に成る。西鶴の「男色大鑑」（別項）の後半に見えてゐる野郎等に關する章の如きは、これと淺からぬ關係を持つてゐるやうである。花街關係書中で通常假名草子中に數へられてゐる「浪花鉦」（別項）の如き、「たきつけ草」「もえくゐ」「けしずみ」（各別項）などの如き、遊里の風俗や遊女の手管等を記したものとの間にも相當の關係は考へられる。その他、談林俳諧との關係も看過し難い。延寶九年の西鶴が、「俳諧女歌仙」（別項）中には四人の遊女を擧げてあるが、その記述には好色本を髣髴させるものがある。宗因・西鶴等の連句中には、敷衍すればそのまゝ好色本の一章たるべきものが見出される。好色本の發生は、西鶴の獨創力に負ふ所が多いが、又これ等の先蹤に啓發されて出たものと見るべき節も少くないのである。

【時代生活との關係】好色本は、「好色一代男」の出た天和二年から元祿を中心として、寶永・正德年間にかけて盛行した。その後も跡を絶つてはゐないが、それは餘勢に過ぎないと見るべきである。こゝに時代生活との關係を見るに、德川幕府初期以來打續いた平和は、元祿の頃に至つて町人階級の勃興を促し、彼等の意氣を旺盛ならしめ、長く武人階級の威力下に屈してゐた彼等をして商工業の隆盛と富の充實とに隨ひ、その充ち滿ちた生命力を十分に伸ばして生きようとするに至らしめた。かくして彼等は致富の方面に潑剌たる精神を示して活動したと共に、又その富力を以て現實生活を享樂する方面に於ても豪華な生活振りを見せた。未だ敎養に於て低級の域にあつた彼等であつたから、その求めた享樂的生活は、官能の刺戟を追ふ所のものに過ぎなかつた。かくして元祿町人の寬濶伊達を競うた豪華な世相を展開した。淨瑠璃・歌舞伎の流行といひ、遊里花街の繁昌といふが如きは、かかる生活の著しい一面であつた。中村内藏助・淀屋辰五郎・茨木屋幸齋・紀伊國屋文左衞門・奈良屋茂左衞門などは、この時代生活の代表者であつた。官能的享樂生活の中心は好色生活であつた。好色生活とは、愛慾とその周圍に展開する所の社交・遊戯の生活であつた。かゝる生活は、一般社會、家庭に在つては、その秩序、平和を紊亂すべきものであるから、その存在を可能ならしむべき、遊里といふ特殊社會の發達を來さしめ、これをして單なる賣笑窟たる以外に、社交の情趣を滿足せしむべき社會たらしめた。さうして遊女をして賣笑婦たる外に、諸種の技藝等に堪能な社交婦人たらしめた。これは主として好色本の世界に現るゝ高級の遊女に就いていふのである。かゝる社會に入つて好色生活を享樂した所謂遊客なるものにも固より樣々の階級はあつたが、同じく好色本の世界に現るゝ高級なるものに就いて見ると、所謂大盡粹客で大富を有する上に、世故人情にも熟通し、各種の技藝等にも通達して、よく社交界の中心に立ち得べきものであつた。好色生活の興趣は、かゝる遊客・遊女を中心として、揚屋夫婦・幇間・引舟女郎・禿・遣手等の男女を加へ、時としては遊客附屬の學者・文人・藝人等をさへ入れて成立した遊びの中に湧くのであつた。併し遊びはすべて、しかく大勢の賑やかな豪華な中にあるのではなかつた。少數者の靜かな、しめやかな、優雅な、時としては奇拔な中にも成立するものであつた。畢竟樣々の場面に、樣々な人に由つて、樣々な現れをなすのであつた。そこには愛慾の展開することは勿論であるが、又それなくとも社交と遊戯のみでも存在は妨げられなかつた。かゝる好色生活は主として遊里・遊女を中心として存在し、好色本は主としてそれを取扱つてゐるから、自然好色本中に傾城物の名目も起つた。一般家庭に於ける好色的生活は、自然淫蕩、亂倫を意味するので、作者は自然これを避けてゐるが、この方面は、單に讀者の性的亢奮を目的とした特殊な好色本に多く取扱はれるやうになつてゐる。これ等は、性慾又は性慾的遊戯の露骨な描寫と、それに伴うた淫猥な繪畫とを以てしてゐる。當時の好色生活は、變態的な同性間の愛慾方面にまで展開して、歌舞伎の舞臺子・陰子・飛子などの存在を見るに至つた。かくして好色本の領域は、この方面にまで擴つて所謂男色物となつた。この男色は武士階級の惡弊の一でもあつたから、この種の好色本には、その兩面が現れてゐる。さうして武士の場合は、そこに一種の意氣地が生じて、そのための血腥い決鬪や敵討を伴うたので、男色物は一面敵討物であつたり、意氣地や義理の物語であつたりする。好色生活の盛行した時代の人には、好色生活に通曉せんとする欲求があつた。この欲求に對して好色生活諸般の知識を與へんとした說明的な書が出た。これは非文學書であるが、古來これを好色本中に數へてゐる。「好色訓蒙圖彙」「好色貝合」「男色十寸鏡」（各別項）の如きこの類に屬する。

【作者】西鶴を初めとして西澤一風・江島屋其磧・八文字屋自笑（各別項）の如き知名の作者の外に、烟月堂林鴻・由之軒政房・好色軒圓水・桃林堂蝶麿などの名が見えてゐる。〔藤村〕

好色萬金丹（かうしよくまんきんたん）　浮世草子　五册【作者】未詳【刊行】元祿七年【諸本】傾城太々神樂（寶永二年改題再版）は多少改竄されてゐる。浮世草子集（日本名著全集）所收。

【解說】五卷二十說話。各々獨立した一說話より成る。卷一の一、一步の數「糠買が三千貫の身代となつたも同じためしなり云々」は、立身大福帳（別項）卷三では「棒一本で立身の久三」の說話となつてゐる。卷一の二、通變のうらなひは「好色二代男」（別項）卷八の「流れは何の因果經」の趣向をそのまゝ踏襲したものである。のみならず篇中到る處に「二代男」の摸倣を見る。好色生活の中に町人生活を織り込んである處も、「一代男」よりは「二代男」に近いことを思はしめる。文章又西鶴を摸して遙かに至らざるもの。低調にして緊密性を缺き、各篇の結びの言葉の如き一篇を生かすべき筈のものが、却つて言葉の遊戯となつてしまつてゐるものが多い。全篇を貫いてゐる



ず。錢あれども用ひざるは全く貧者とおなじ何を樂とせんや」の問を掲げ、「衣食住の三ツ足るをたのしみとす」といひ、それに品々あれども、要するに「少欲知足といひて。少きを得て足とし（たる）ればつねにたのしみあり」と述べ、「今簡略の御代なるを心得て。其遊女町に論ぜられてゐる。しかし、一世も戀もある上の書物」と氣を通しての立論は、「ものゝあはれ」を「伊勢」「源氏」になつかしみ、脈を兼好に引いたかいなでの態度ではあるものの、これによりて、一面西鶴に好色本の筆を執らしめた時風と、その影響とを察知し得べきのみならず、一面からは、前にしては天和二年の「好色袖鑑」、後にしては元祿十五年の「筆かくし」などと共に、また當時文學評論の視點と角度とが、かたくなる舊來の戀愛觀と異なるものあるを見出さねばならないであらう。

正に白眼居士は貞享の頃洛東に住み、內外和漢の典籍に通じ文筆にも長じてゐた人である。その頃難波に名ある俳諧師と親しくしたらしいが、それは談林の俳人岡西惟中であらうか。

【參考】好色破邪顯正　藤村作（國語と國文學八ノ四）

好色文傳授（かうしよくぶみでんじゅ）　浮世草子　五册【作者】由之軒政房と署名がある【刊行】元祿元年【諸本】再版は元祿十二年。三版は寶曆三年に「風流文之評判」と改題して出した。江戸時代文藝資料第四に收めてある。

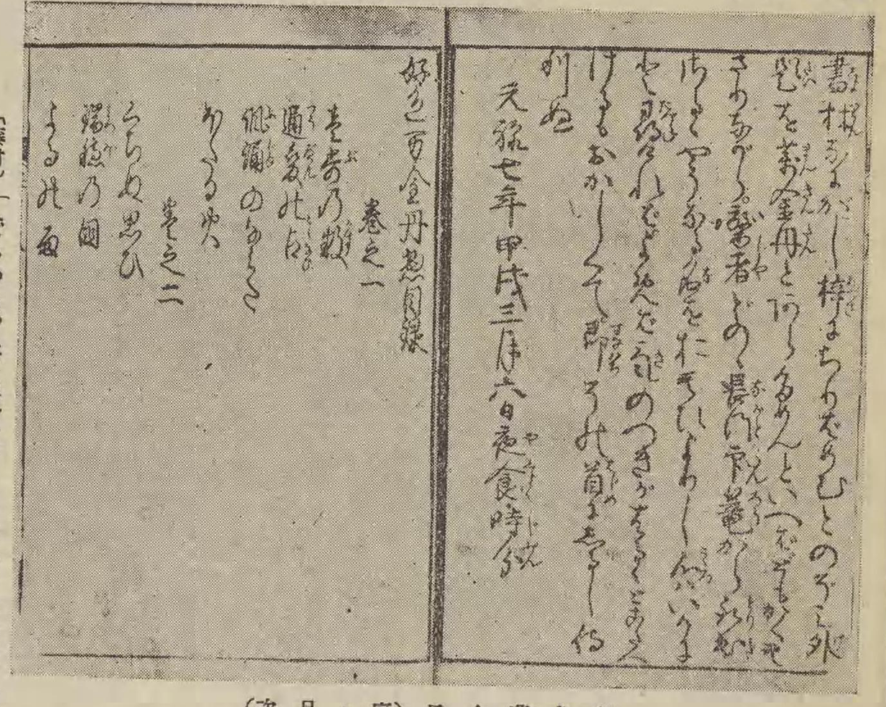
【梗概】〔卷一〕京の三條寺町に住む橋本左七といふ男、近所に住む友人の妹を見染めて文あつても、「錦木」や「うすもみぢ」（各別項）の如く全く艶書の手引草として書かれたものではなく、むしろ一篇の小說として見るべきものである。篇中贈答の艶書は、艶書の體を示すと共に說話の進行に役立つてゐる。手紙の文は擬古の體をなしてゐるが、地の文は、西鶴を摸して到らぬものである。〔小泉〕

好色本（かうしよくぼん）　浮世草子【異稱】好色物とも。【解說】好色生活を取扱つた浮世草子（別項）の一種、これを大別すれば端物卽ち斷章集と、續物卽ち小說的なる筋を持つものと、說明的なものとがある。最後のものは純文學の範圍には屬しないものである。前二者

ものは粋の穿ちである。遊里生活の情趣を基調とした華やかな裏に、さもしい物質慾を發見し、指摘してゐる。〔小泉〕

好色由來揃（かうしよくゆらいそろへ）「日本好色名所鑑」を見よ。

好色世之畫狐（かうしよくよのひるぎつね）　浮世草子　小本一册【作者】未詳【刊行】元祿四年【解説】名題に好色と冠してはあるが、必ずしも好色本といふべきものではない。世の惡を集めて、これを文と畫を以て説明したものである。輕薄者・比興者・血氣勇者・小氣者などの類から、口方便（くちかべん）・笹籠（ささかご）・惡銀遣・賣僧の類もあれば、また妄狂・妄揚・若衆上・淫亂・徒女などの、好色の名に相應したものも交つてゐる。



好色萬金丹（序・目次）

孝女白菊の歌（かうぢよしらぎくのうた）　長篇叙事詩【作者】落合直文【發表】明治二十一年「東洋學藝雜誌」。その後各種の雜誌に轉載される。【刊行】落合直文集（明治書院）所收。【内容】阿蘇の山里に、白菊と名乘る少女、母なく、遊獵に出て歸らない父、出奔して行方の分らない兄を待つて家を守つてゐたが、遂に父を尋ねて旅に出た。或る山寺に一夜の宿を乞ひ、翌る日、曉早く山路にかゝつたが、山賊のために捕へられ、宴に侍して琴を彈く。その音を聞き知つて彼女を救ひ出した一人の僧は、前に泊つた山寺の僧で、實は尋ぬる兄であつた。共に遁れゆくうち兄を見失ひ、或る一人の翁に救はれたが、結婚を强ひられて窮迫の餘り、河に身を投げんとするところを再び兄に救はれ、兄妹家に歸つて見ると、尋ぬる父も歸つてゐた。〔藤村〕

【解説】構想は井上巽軒（哲次郎）の漢詩を原作として、直文はこれを七五調約百四十節（四句一節の形）に歌つたのである。明治の詩が僅かに曙光を認めたばかりの時に、これだけ長い叙事詩を完成したのは大なる努力であつて、詩史的にも珍重される所以である。樣式は七五を連用した長詩形で、特に新鮮さは感じられないが、典雅流麗、些の澁滯もなく難解な點もない。併し長いだけにやゝ冗漫にして單調の嫌ひがあり、直文の作としては寧ろ「櫻井の訣別」の方が緊張してゐて、詩品も優れてゐる。〔河井〕

行人（かうじん）　小説【作者】夏目漱石【發表・刊行】大正元年十二月六日から朝日新聞に連載し、翌年四月七日まで病氣のため中斷し、病氣恢復後、同年九月十六日から十一月十五日まで續稿を連載して完結。同三年一月大倉書店刊行。漱石全集第五卷・同普及版第八卷所收。

【梗概】友達・兄・歸つてから・塵勞の四章に分けられてゐる。長野二郎は大阪で友達の三澤と落ち合つたが、三澤は病氣で入院し、退院すると東京へ歸り、二郎は母を伴つた兄夫妻と一緒になつて、和歌の浦へ行くことになつた。兄は妻の貞操を疑つてゐた。その嫌疑は二郎にかゝつてゐた。しかし二郎が否定すると、兄は二郎に妻の貞操を試みる役目を依頼した。二郎は嫂と二人で、先づ和歌の浦へ行き、偶然にも暴風雨のために交通機關が斷たれて、其處に一泊しなければならなくなつた。それが却つてまた兄の疑を增さしめた。東京に歸つてから後も、兄の心は弟に對する祕密の不安が去らなかつた。遂にそれが爆發して二郎は三澤に相談して家を出た。兄の精神狀態は益々惡くなつた。或る時は、嫂が二郎の下宿へ訪ねて來て訴へたことなどもあつた。とう〳〵兄は三澤の先輩なる日氏に伴はれて旅行に出ることとなつた。二人の旅行者は海岸や溫泉地を巡歷した後で、紅ケ谷の草庵に身を落ちつけた。さうして靜かな自然の風物が、兄の心を和やかにした。其處から二郎へ寄せた日氏の手紙で小説は終つてゐる。

【批評】この主人公も「それから」（別項）の代助の如く、過敏な神經と强烈な想像力の持主である。彼は考へては苦しむ人間である。苦しむために考へる人間である。その意味に於いて、幾分自叙傳的特質を持つた作品の中に數へることが出來る。〔野上〕

庚申講と昔話（かうしんかうとむかしばなし）【解説】カノエサルの日の夜は三尸と稱する身の内の神が、天に昇つて本人の罪咎を報告しようとするから、この一夜は睡らないがよいといふ俗信は支那が元である。それが我が國にも輸入せられ又實行せられた（拾芥抄）。近世では青面金剛神、俗に庚申樣といふ神の信仰と合體して、久しい間農村の團體生活を支配してゐた。庚申講は卽ちその結社集會の名であるが、それが偶然にも我が國の民間文學の發育と保存とに、大なる功績を立ててゐる。この講中の最も重要なる約束は、六十日目に一夜づつ當番の家に集まつて來て、飲食談話して夜明かしをすることがあつた。この晩寢た者は、盜人の子を產むといふ怖るべき制裁さへ信じられてゐた。佛敎も後にはこの習俗を管轄しようとしたけれども、未だその敎理を以て徹夜の必要までは説明する事が出來なかつた。これは多分、一年何回かの或る日を定めて、終夜の祭をする風が前から有つたのを、干支（えと）の知識が入つてから庚申の日に一定し、後には又これを猿の神や雞の神に附會したものであらう。土地によつてはこの庚申の代りに、申子その他の日を用ひるものもあつて、一般にこれを日待と謂つてゐる。日待は昇る日を待つといふ意味の語では無いが、宵と曉と兩度の供物をするために、一夜を徹した事は庚申も皆同じであつた。これを通夜ともい

ひ又伽ともいつて、所謂御伽噺（別項）といふものの必要、卽ち會衆を睡らせないやうに、長く且つ面白い澤山の昔話を、常に幾つも用意して置く必要があつたのである。最初は或は話を聽くことが、却つてこの集合神事の主要なる目的であつたかも知れぬ。その上に日待の晩になると思ひ出す話、又は庚申講の名を聞いて、聯想する昔話といふものが、特に幾種類か有つたやうに考へられる。例へば「八百比丘尼」（別項）といふ長命の美女が、人魚の肉を食うて不老不死を得たといふ話などは、丹後の乘原でも、越後の野積でも、會津の金川寺でも又紀州の丸栖村でも、共に庚申講の晩に、不思

構成主義を生じた根本思想について、アレクセイ・ガン（Aliekciey Gan）は次の如くいふ。「人間の社會は、それ自體によつて統一された人間の一組織の姿を示してゐる。この統一は何よりも先づ勞働組織であり、人間の勞働裝置である」「かゝる共產主義的文化の要求に應ずる事のできる新しき建築、新しき物質の建設の事業へ接近することを科學的に基礎づける事が建設、卽ち構成主義の領域に於ける理知的唯物的主義の第一の問題である」「第二の問題は、全社會的生產に於ける集團行動や、勞働の集團的過程の組織と固定へ接近する事を科學的に基礎づけることである」。又フラン

京に歿す。享年八十八【閱歷】宇津木久純の第四子で、十二歲の時、彥根藩老岡本氏の養子となり、初め詩を中島棕隱に學び、後、梁川星巖を師とし、天保七年中老となつて江戸に祇役し詩を菊池五山に、經を安積艮齋に學び、當時の名流と交を結んだ。嘉永五年家老職に陞る。藩主井伊直弼が兇刄に斃れた後、能く幼主を輔けて機宜を誤らなかつた。明治四年京都に卜居し、後、東京に徙り麴坊吟社（別項）を創立した。詩集六卷がある。【批評】その詩は杜少陵に私淑し、よくその神を得た。雄渾蒼古なるものは杜少陵に得、平明流麗なるものは白樂天に得たのである。〔佐久〕

感ずるところあつて、二十歲にして武士を捨てて蒔繪の業に携つた。三十九歲、ふとした動機から參前舍に入り、當時の舍主熊川東洲に認められて懇切なる指導を受け、その勸めによつて、鎌倉圓覺寺の東海和尙に參禪し、ついで東海寺の願翁和尙にも參じた。後、善智識を求めて各地を行脚すること十年、又鎌倉に來つて、願翁の下に印可を得た。時に慶應三年、高節三十九歲であつた。東洲は大に欣んで參前舍都講たらしめようとしたが、固辭して受けなかつたが、願翁の推薦により初めて許諾し、舍に移つたが、なほ敎導の職務は

ひ又伽ともいつて、所謂御伽噺（別項）といふものの必要、即ち會衆を睡らせないやうに、長く且つ面白い澤山の昔話を、常に幾つも用意して置く必要があつたのである。最初は或は話を聽くことが、却つてこの集合神事の主要なる目的であつたかも知れぬ。その上に日待の晩になると思ひ出す話、又は庚申講の名を聞いて、聯想する昔話といふものが、特に幾種類か有つたやうに考へられる。例へば「八百比丘尼」（別項）といふ長命の美女が、人魚の肉を食うて不老不死を得たといふ話などは、丹後の乘原でも、越後の野積でも、會津の金川寺でも又紀州の丸栖村でも、共に庚申講の晩に、不思議の神人から贈られた食物であつたと傳へてゐるのである。かういふ暗合は是非とも注意をしなければならぬ。庚申が特に、異人の食物を餉り來る晩で無いとしても、少くともこの昔話は、屢々庚申の夜のまどゐに於て、語られて居たことは想像し得られる。〔柳田（國）〕

構成主義（こうせいしゆぎ）　藝術論〔露〕Konstructivism【解說】近代美術上の一樣式の名稱。この名稱は現實生活を直ちに藝術的に構成するといふ意味に於て、至上主義の後を繼いでロシア勞農政府の下に現れた藝術運動の名稱である。構成主義は、ダダイズム（別項）が藝術を實生活化しようとすることに反して、實生活を藝術化しようとする。この運動は、主として繪畫上の運動に止まる。構成主義の繪畫上目的とするところは、實生活上特に功利的・物質的機關自身を一の藝術として扱ふにある。即ち構成主義は、未來主義の一部やダダイズムの如く、畫面に實生活上の器物を貼付けることによるのでなく、實生活上の機械その物を提示することを以て藝術とする。構成主義を生じた根本思想について、アレクセイ・ガン（Aliekciey Gan）は次の如くいふ。「人間の社會は、それ自體によつて統一された人間の一組織の姿を示してゐる。この統一は何よりも先づ勞働組織であり、人間の勞働裝置である」「かゝる共產主義的文化の要求に應ずる事のできる新しき建築、新しき物質の建設の事業へ接近することを科學的に基礎づける事が建設、即ち構成主義の領域に於ける理知的唯物的主義の第一の問題である」「第二の問題は、全社會的生產に於ける集團行動や、勞働の集團的過程の組織と固定へ接近する事を科學的に基礎づけることである」。又フランツ・ロー（Franz Roh）は、この主義の繪畫樣式について次の如くいふ。「構成主義者は、線・面・形體、何よりも材料を問題とし、而も繪畫・彫刻・建築の特殊作用以上に出でて、靜學・力學・光學によつて把握する。即ち蒸汽機關を人間の手の如く表現的なものとして、機械自身を精神の象徵として觀る。即ち機械的なるものの精神的意味を見出さうとする」と。

【參考】Gan, A.: *Konstructivism*. Moscow. 1922. ‖ Roh, F.: *Nach Expressionismus*. Leipzig. 1925.　〔渡邊〕

構成美（こうせいび）　藝術論〔英〕Beauty of Construction【解說】物質的形態の構成の上に美を認めようとすることは、構成主義（別項）の主張以前にも、すでに立體派（キユビズム）の考の中にもある。形式的技術的方面に藝術美の基礎を求める結果、構成美は數學又は力學にその法則を見出す。〔村田〕

黃石（くわうせき）　漢詩人【姓名】岡本宣廸。字は吉甫、通稱は半助【生歿】文化八年十一月二十一日に生れ、明治三十一年四月十二日東京に歿す。享年八十八【閱歷】宇津木久純の第四子で、十二歲の時、彥根藩老岡本氏の養子となり、初め詩を中島棕隱に學び、後、梁川星巖を師とし、天保七年中老となつて江戶に祇役し詩を菊池五山に、經を安積艮齋に學び、當時の名流と交を結んだ。嘉永五年家老職に陞る。藩主井伊直弼が兇刄に斃れた後、能く幼主を輔けて機宜を誤らなかつた。明治四年京都に卜居し、後、東京に徙り麴坊吟社（別項）を創立した。詩集六卷がある。【批評】その詩は杜少陵に私淑し、よくその神を得た。雄渾蒼古なるものは杜少陵に得、平明流麗なるものは白樂天に得たのである。〔佐久〕

畊石（かうせき）　俳人【姓名】服部治左衞門【出生】明治八年十一月十七日、千葉縣海上郡嚶鳴村琴田に、服部耕雨（別項）の長男として生る。【閱歷】血族に俳人多く、殊に父耕雨の感化を受けて、十五六歲頃から作句し、長じては秋聲會（別項）の影響を受けた。明治四十三年九月、牧野望東等と俳誌「高潮」を創刊し、現にその主幹である。大正二年から翌年まで新聞「日本」の選句を擔當した。本業は篆刻家で、日本書道作振會・日本美術協會に於けるその部の審査員である。【編著】「篆刻字林」「季題辭典」がある。なほ未刊のものに「俳句文法の研究」がある。〔伊藤〕

高節（かうせつ）　心學者【姓名】高橋高節。通稱源三郎【號】好雪【生歿】文政二年九月二日、江戶紺屋町に生れ、明治九年九月六日、京都に歿す。享年五十八【墓所】東京谷中天王寺墓地【閱歷】父は三郎左衞門といひ、蒔繪師であつたが、高節は幼にして父に別れ、九歲の時、牧野家の士丸山善之助の養子となり、十八歲にして儒臣の列に加へられたが、感ずるところあつて、二十歲にして武士を捨てて蒔繪の業に携つた。三十九歲、ふとした動機から參前舍に入り、當時の舍主熊川東洲に認められて懇切なる指導を受け、その勸めによつて、鎌倉圓覺寺の東海和尙に參禪し、ついで東海寺の願翁和尙にも參じた。後、善智識を求めて各地を行脚すること十年、又鎌倉に來つて、願翁の下に印可を得た。時に慶應三年、高節三十九歲であつた。東洲は大に欣んで參前舍都講たらしめようとしたが、固辭して受けなかつたが、願翁の推薦により初めて許諾し、舍に移つたが、なほ教導の職務は辭して、定日には自ら下足番に當つた。明治二年正月、再び東都を去つて美濃國虎溪山の蓬州和尙に參じ、第七日に至つて大悟した。歸京後は心學教導に從つて盡す所が多かつた。

【參考】石門心學の研究　白石正邦　〔白石・森〕

黃村（くわうそん）　漢詩人【姓名】向山榮五郎【生歿】文政九年江戶に生れ、明治三十年八月十二日歿す。享年七十二【閱歷】昌平黌に入つて甲科に及第し、養父の職を繼いで函館奉行支配組頭となり、常に開國主義を唱へた。慶應二年佛蘭西に使し、ナポレオン三世に謁して歸る。維新後德川慶喜に從つて靜岡に移り又沼津に住したが、後、東京に出で吟詠を以て樂となし、晚翠吟社（別項）を創立した。〔佐久〕

小歌（こうた）　歌謠【名稱】大歌に對する語で當世流行の巷謠・民謠類の雜曲を總稱する。【解說】大歌所（別項）で教習する大歌に對し、平安朝末には種々の雜藝・今樣（各別項）類が流行したが、これ等は總べて小歌であり、神樂・催馬樂（各別項）は大歌に屬する。小歌の名は、「琴歌譜」に「自餘小歌同二十一月節二」とあり、「江家次第」五節帳臺試の條に、「大歌小歌發

したものも交つてゐる。〔藤村〕

孝女白菊の歌（かうぢよしらぎくのうた）　長篇叙事詩【作者】落合直文【發表】明治二十一年「東洋學藝雜誌」。その後各種の雜誌に轉載される。【刊行】落合直文集（明治書院）所收。【內容】阿蘇の山里に、白菊と名乘る少女、母なく、遊獵に出て歸らない父、出奔して行方の分らない兄を待つて家を守つてゐたが、遂に父を尋ねて旅に出た。或る山寺に一夜の宿を乞ひ、翌る日、曉早く山路にかゝつたが、山賊のために捕へられ、宴に侍して琴を彈く。その音を聞き知つて彼女を救ひ出した一人の僧は、前に泊つた山寺の僧で、實は尋ぬる兄であつた。共に遁れゆくうち兄を見失ひ、或る一人の翁に救はれたが、結婚を强ひられて窮迫の餘り、河に身を投げんとするところを再び兄に救はれ、兄妹家に歸つて見ると、尋ぬる父も歸つてゐた。【解說】構想は井上巽軒（哲次郎）の漢詩を原作として、直文はこれを七五調約百四十節（四句一節の形）に歌つたのである。明治の詩が僅かに曙光を認めたばかりの時に、これだけ長い叙事詩を完成したのは大なる努力であつて、詩史的にも珍重される所以である。樣式は七五を連用した長詩形で、特に新鮮さは感じられないが、典雅流麗、些の澁滯もなく難れて、其處に一泊しなければならなくなつた。それが却つてまた兄の疑を增さしめた。東京に歸つてから後も、兄の心は弟に對する祕密の不安が去らなかつた。遂にそれが爆發して二郎は三澤に相談して家を出た。兄の精神狀態は益々惡くなつた。或る時は、嫂が二郎の下宿へ訪ねて來て訴へたことなどもあつた。とう〳〵兄は三澤の先輩なる耳氏に伴はれて旅行に出ることとなつた。二人の旅行者は海岸や溫泉地を巡歷した後で、紅ケ谷の草庵に身を落ちつけた。さうして靜かな自然の風物が、兄の心を和やかにした。其處から二郎へ寄せた耳氏の手紙で小說は終つてゐる。

に盜人の子を產むといふ怖るべき制裁さへ信じられてゐた。佛教も後にはこの習俗を管轄しようとしたけれども、未だその教理を以て徹夜の必要までは說明する事が出來なかつた。これは多分、一年何回かの或る日を定めて、終夜の祭をする風が前から有つたのを、干支（えと）の知識が入つてから庚申の日に一定し、後には又これを猿の神や雞の神に附會したものであらう。土地によつてはこの庚申の代りに、申子その他の日を用ひるものもあつて、一般にこれを日待と謂つてゐる。日待は昇る日を待つといふ意味の語では無いが、宵と曉と兩度の供物をするために、一夜を徹した事は庚申も皆同じであつた。これを通夜ともい

聲如レ常」、「雲閣抄」裏書に「大歌發三歌笛一小歌相和」と見える。而してこの小歌は、綾小路俊量の「五節間郢曲」の帳臺試の條に、「亂舞大歌了、阿音三反鬢多々良三反」とある如く、これ等の雜藝郢曲類を意味してゐる（郢曲參照）。小歌は室町時代に至つて最も盛んとなり、「閑吟集」（別項）「小歌集」の如き書が編纂せられ、又支那にも傳はつて支那人に筆錄せられた。明末に候繼國の著はせる「全浙兵制」の附錄の「日本風土記」（珍書同好會復製。また新村出博士の「倭寇時代の俗謠」に紹介せらる）に、十二首山歌と題して、萬葉假名風に字音で記され、浙江邊の音で讀ませてゐる。山歌とは民謠の意味である。

【近江節・大和節・加賀節】「閑吟集」の序文によると、近江田樂・近江猿樂より出た節を近江節と云ひ、大和田樂・大和猿樂より出た節を大和節と云ふ。即ち近江に住して、同地の社寺に屬した田樂座や猿樂座の謠の小節（こぶし）が世に流行して、近江節と云ふ小歌となり、大和節も亦同樣にして世に行はれた。加賀節は、加賀から出て貴紳武人の宅に出入してゐた遊女、加賀（かが）女（め）の歌ひ出した流行小歌と思はれる。これ等の節に關して「宗五大双紙」に、近江猿樂や田樂の事を記して、「惣じて故人の申され候しは、大和節をば奉公衆などの歌ひ候をば、切もがりのうちなどと申して、笑ひたるとて候。或さうか、又加賀節、近江田樂節に候しとて候、加賀節などは、今は聞たる人も稀に候べし」とあるので、これ等一類の小歌の行はれた事が知られる。加賀節に就いては、「書札雜々聞書」にも「公方へ白拍子は不レ參候、加賀女と申遊女參候、加賀節などとてはやり候」と記してゐる。この三歌は、武人の間に愛好せられた小歌であらう（貞丈雜記・和訓栞）。

【狂言小歌】狂言の間に挿入せられてゐる小歌で、また獨立して狂言師がこれを歌ひ、小歌に合せて舞ふ舞を小舞（別項）と云ふ。百首以上今日に傳はり、「閑吟集」に收めてゐる狂言小歌も少くなく、當時流行の小歌が狂言や謠曲の中に取り入れて狂言師の家に傳へられ、今日に殘されたものである。何れも同樣の曲節を以て歌はれるので、これを小歌節と云ふ。その曲節は、平曲の讀物の節と酷似してゐるから、恐らく同一起原のものと思はれる。（狂言小歌集には、山脇元清編「和泉流小舞謠」、野村萬齋編「狂言小舞全集」、高野辰之編「日本歌謠集成」卷五、藤田德太郎編「校註閑吟集」附錄等あり）。

【硯破・田歌】室町時代の小歌には、「しをり萩」（今樣參照）の小歌と並んで有名なものに「硯破（すゝりわり）」の歌があり、「唐糸草紙」（別項）にもこれを歌つた由出で、室町時代の「硯破」（別項）と云ふ播磨書寫山の性空上人の事蹟を記した物語に關係ある小歌と思はれる。その歌詞は舞の本の「和田酒盛」に二首見える。

よしやあしとて切り捨てられし呉竹も、もとに一節（よ）はあるものを
よしやあしとてつきすてられし庭草も、もと忍ぶとてあるものを

と云ふ戀の歌である。舞の本には、この外、「伏見常盤」に田歌五首と雜曲二首が見える。當代の小歌であらうが、民謠的興趣には乏しい。出雲の女の歌つた田歌は、

田植ゑよや田植ゑよ、早乙女（さおとめ）、五月の農を早むるは勸農の鳥郭公（ほとゝぎす）、山雀（やまがら）小雀（こがら）四十雀、この鳥だにもさ渡れば、五月の農は盛んなり。

と云ふ歌である。遠江の女の歌つた小歌「遠江の濱名の橋の下なるは、鯉か鮒か鮠（はえ）の子か…」と云ふ歌は、後世にも同調の歌が多く見える。

皇太后宮大夫俊成女（くわうたいこうのみやだいふしゅんぜいのむすめ）「越部禪尼」（藤田）を見よ。

廣澤流（くわうたくりう）「唐樣」を見よ。

幸田露伴（かうだろはん）小說家【本名】成行（しゅうき）、幼名鐵四郎【別號】蝸牛庵。一時、笹のつゆ・雷音洞主・脫天子などと戲號した。【家系】幸田家は代々學問技藝に秀でた人を出した。父成延（しゅうぶ）は幕臣であつた。文學の嗜みと文筆の才があり、母は獻子、父母ともに音樂に趣味があつた。兄郡司成忠は海軍大尉で有名な報效義會長、弟成幸は文學博士で史學の一權威、妹延子及び安藤幸子は共に女流音樂家である。

【閱歷】慶應三年七月二十六日、江戸神田俗稱新屋敷（山本町附近）に生れた。お茶水師範學校附屬小學校を經て、東京府立中學に進み、幾ばくもなく菊池松軒の漢學塾に轉じて、程朱學を學び、傍ら老莊を愛讀し、佛書に親しんだ。支那小說に興味を持つやうになつたのはこの頃からで、江戸時代の戲作・稗史類もほぼ涉獵した。明治十六年故あつて遞信省の電信修技學校の給費生となり翌年卒業した。同十七年北海道後志國余市驛に電信技手として赴任したが、二十年八月官を棄てて上京、父の怒に觸れた。この憂悶を遣る積りで試みに小說の筆を執り、二十二年一月、「露團々」（別項）を「都の花」に發表した。橫溢せる奇趣と異彩ある筆とが忽ち世評をあつめたが、九月傑作「風流佛」（別項）を出すに及んで、新興文壇に於ける地位が定まり、美妙・紅葉と共に、第一流の花形作家と目されるに至つた。この年冬、讀賣新聞の招聘によつて、紅葉と同時に入社。二十三年六月第一小說集「葉末集」（別項）刊行。同年十一月國會（新聞）に入社。こゝには二十八年末の廢刊までゐた。この間刊行の著作には、第二小說集「新葉末集」「いさなとり」（別項）（二十四年）、「尾花集」（二十五年）、「眞西遊記」「枕頭山水」（別項）（二十六年）、「有福詩人」（二十七年）、「風流微塵藏」の第一集「さゝ舟」（二十八年）等がある。二十九年には春陽堂と謀つて「新小說」を再刊し、江湖新進を勸奬する任に當つた外、「微塵藏」の續集「きくの濱松」「ひとり寢」「雲の袖」及び歷史小說「ひげ男」（別項）を續々刊行した。この時文壇の一方には、樋口一葉があつて注視の的となつてゐたので、この頃を露伴一葉時代と呼ぶ文學史家もある。爾後數年間は幾分の沈滯を示し、「新羽衣物語」（三十年）「小萩集」（三十二年）「讕言」「長語」（各三十四年）等を刊行せるのみ。寧ろ研學靜修の時代である。この沈滯は二十七年、瀕死の大患以後の心境から生れた結果であらう。三十五年六月「露伴叢書」刊行（四十二年分冊再刊）。三十六年九月、新たな興味をもつて大作「天（そら）うつ浪」（別項）を發表した（三十九年刊）。四十一年、京都帝國大學講師を囑託されて赴任、翌年辭して歸京。四十四年文學博士を授けられた。この年「露伴集」第一・二刊行。その他「潮待草」「不藏庵物語」（三十九年）、「はるさめ集」「蝸牛庵夜譚」（四十年）、「玉かつら」「小品十種」「頼朝」（四十一年）等は注意すべき著作である。大正年代に入つては、何時となく小說創作の筆を執る事が稀れに、自家の趣味に隱れて、史傳・隨筆・考證・修養等の文章を公にすることが多くなつた。「努力論」「修省論」「洗心錄」「洗心廣錄」「立志立功」「悅樂」「幽情記」「幽祕記」「頼朝」「爲朝」「蒲生氏鄕」「平將門」「龍姿蛇姿」等は、皆この種に屬するものである。昭和四・五年、露伴全集全十二卷が刊行された。

幸田露伴

【作風】彼の小說は、彼の理想、彼の詩、彼の哲學の世界であり、從つてその小說の構成因子は凡てこの理想と密接な連繫をもつ。小說中の人物は何れも彼の分身の如き感を與へるのはこのためである。彼は好んで剛健不屈、勁烈な意氣をもつ男性を描く。この男性が藝術家として表現されるとき（珠運、十兵衞のるが、これを驅使する想像力の强大さが、又明治文壇に比類の少いものであらう。その好例は、「五重塔」の暴風雨の一段だが、これに似た例は多々ある。背景の描寫には時代が時代だけに概念的抽象的で鮮明を缺くものが多いが、その曾遊の土地の風物をこれに當てた場合、清新な印象を與へる。又小說構成の基礎を成してゐる理想は、彼の人格の底に潛む信念である。彼は現實の人生は邪惡に滿たされてゐると見、同時に人生は因果の大法に支配されてゐると信じてゐるので、人生の淨化を善因善果の法則によらうとするのである。さうしてこの善因を播くのが、即ち藝術の役播く。その二は悟りである。これは消極的受動的に光明世界に至る道である。前者の著しい例は男性に多く、後者の眼立つた例は女性に多い。その三は因果の敎へである。人間世界が畢竟因果の大法を脫し得ないことを諷示して、善因善種を播かんことを敎へる。それも舊文學に見る如き、卑近なものではない。極めて幽玄な哲學的思想を根柢にもつて高所から說かれてゐる（風流微塵藏）。

【小說家としての業績】活動期は、ほぼ四期に分たれる。「第一期」（明治二十二年から二十九年頃迄）この期の代表作としては「露團々」（別項）「一刹那」「風流佛」（別項）「對髑髏」（別項）「羽衣物語」「三保物語」「二日物語」（別項）「椀久物語」「夜の雪」「太郎坊」等がこの期の代表作である。これは一種の低迷時代で、二十七年の大患以來、創作熱は減退し、文學界に於ける表現技術の變革に對する煩悶から、態度の立て直し等のために傑作の出なかつた時代である。「二日物語」「椀久物語」などが、描寫の妙によつて人口に膾炙したに止まる。「第四期」（三十六年以後）「天（そら）うつ浪」（別項）、「雁阪越」「土偶木偶」等の作がある。本來の露伴に立ち直つたかに見え、專念我が道を進まんとする颯爽たる意氣が見える。理想主義的態度を持して、特異な個人群の生活を描いて人生

賀女の歌ひ出した流行小歌と思はれる。これ等の節に關して「宗五大双紙」に、近江猿樂や田樂の事を記して、「惣じて故人の申され候しは、大和節をば奉公衆などの歌ひ候をば、切もがりのうちなどと申して、笑ひたるとて候。或さうか、又加賀節、近江田樂節に候しとて候、加賀節などは、今は聞たる人も稀に候べし」とあるので、これ等一類の小歌の行はれた事が知られる。加賀節に就いては、「書札雜々聞書」にも「公方へ白拍子は不レ參候、加賀女と申遊女參候、加賀節などととてはやり候」と記してゐる。この三歌は、武人の間に愛好せられた小歌であらう(貞丈雜記・和訓琴)。

よしやあしとて切り捨てられし呉竹も、もとに一節はあるものを

よしやあしとてつきすてられし庭草も、もと忍ぶとてあるものを

と云ふ戀の歌である。舞の本には、この外、「伏見常盤」に田歌五首と雜曲二首が見える。當代の小歌であらうが、民謠的興趣には乏しい。出雲の女の歌つた田歌は、

田植ゑよや田植ゑよ、早乙女、五月の農を早むるは勸農の鳥郭公、山雀小雀四十雀、この鳥だにもさ渡れば、五月の農は盛んなり。

と云ふ歌である。遠江の女の歌つた小歌「遠江の濱名の橋の下なるは、鯉か鮒か鮠の子か

した。明治十六年故あつて遞信省の電信修技學校の給費生となり翌年卒業した。同十七年北海道後志國余市驛に電信技手として赴任したが、二十年八月官を棄てて上京、父の怒に觸れた。この憂悶を遣る積りで試みに小説の筆を執り、二十二年一月、「露團々」(別項)を「都の花」に發表した。横溢せる奇趣と異彩ある筆とが忽ち世評をあつめたが、九月傑作「風流佛」(別項)を出すに及んで、新興文壇に於ける地位が定まり、美妙・紅葉と共に、第一流の花形作家と目されるに至つた。この年冬、讀賣新聞の招聘によつて、紅葉と同時に入社。二十三年六月第一小説集「葉末集」(別項)刊行。

長語」(各三十四年)等を刊行せるのみ。寧ろ研學靜修の時代である。この沈滯は二十七年、瀕死の大患以後の心境から生れた結果であらう。三十五年六月「露伴叢書」刊行(四十二年分冊再刊)。三十六年九月、新たな興味をもつて大作「天うつ浪」(別項)を發表した(三十九年刊)。四十一年、京都帝國大學講師を囑託されて赴任、翌年辭して歸京。四十四年文學博士を授けられた。この年「露伴集」第一・二刊行。その他「潮待草」「不藏庵物語」(三十九年)、「はるさめ集」「蝸牛庵夜譚」(四十年)、「玉かつら」「小品十種」「頼朝」(四十一年)等は注意すべき著作である。大正年代に入つては、何時となく小説創作の筆を執る事が稀れに、自家の趣味に隱

れて、史傳・隨筆・考證・修養等の文章を公にすることが多くなつた。「努力論」「修省論」「洗心錄」「洗心廣錄」「立志立功」「悅樂」「幽情記」「幽祕記」「頼朝」「爲朝」「蒲生氏鄕」「平將門」「龍姿蛇姿」等は、皆この種に屬するものである。昭和四・五年、露伴全集全十二卷が刊行された。

【作風】彼の小説は、彼の理想、彼の詩、彼の哲學の世界であり、從つてその小説の構成因子は凡てこの理想と密接な連繫をもつ。小説中の人物は何れも彼の分身の如き感を與へるのはこのためである。彼は好んで剛健不屈、勁烈な意氣をもつ男性を描く。この男性が藝術家として表現されるとき(珠運、十兵衞の如き)、彼の理想は殊に鮮かに燃え立つ。彼の描く女性は性の臭ひが少く、男性を淨化し精進せしめる契機となる。これ等の男性女性ともに往々機にふれて人生を頓悟し、豐富な人情哲理を語る。構想に至つては、彼は殊更苦心してゐないかに見え、茫漠たるもの、朦朧たるもの、單調なるものもあるが、天來の妙を批評家に唱へさせたものも二三にして已まない(風流佛・對髑髏・五重塔等)。殊に藝術家の技藝的熱意を中心としてゐるものに最も熱烈な天才の閃きを見る。構想の條件も必ずしも客觀的日常經驗的なものに依らず、幻怪的神祕的な分子をも何の躊躇なく用ひる(對髑髏・土偶木偶等)。その或るものに至つては、幽玄な象徵的脚色をさへ用ひてゐる(新浦島)。人物の性格に於て純惡人がない如く、脚色に於ても純悲劇的なものがなく、常に正しい意味に於て喜劇的光明的である。俳諧・支那小説等の暗示に依るところが見えるのは注意すべきであらう。露伴の文章の逸氣奔放なのは、夙に文學史家がその長技の一に數へてゐるものであ

るが、これを驅使する想像力の强大さが、又明治文壇に比類の少いものであらう。その好例は、「五重塔」の暴風雨の一段だが、これに似た例は多々ある。背景の描寫には時代が時代だけに概念的抽象的で鮮明を缺くものが多いが、その曾遊の土地の風物をこれに當てた場合、清新な印象を與へる。又小説構成の基礎を成してゐる理想は、彼の人格の底に潛む信念である。彼は現實の人生は邪惡に滿たされてゐると見、同時に人生は因果の大法に支配されてゐると信じてゐるので、人生の淨化を善因善果の法則によらうとするのである。さうしてこの善因を播くのが、卽ち藝術の役目なのである。凡そ人間の成し得るもののうちで、藝術の威力ほど偉大なものはない。藝術の力は廣大無邊である。或は大自然の力とも競爭し(五重塔)、或は眞實の奇蹟をも成就する(風流佛・一口劍)。この藝術によつて人生を淨化せんとする理想は、彼の小説には二樣に現はれる。第一は正面から露骨に教訓の意を示し、直接に矯正せんとする場合(眞美人・大珍話・混世魔風・七變化等)、第二は理想を發露した性格事件を描き示して、現實人生と對映せしめ、間接に諷戒の目的を達せんとする場合(一口劍・いさなとり・五重塔等)である。第一の場合には笑ひを武器とする。往々一脈の苦味や、叱罵を伴つた笑ひである場合もあり(混世魔風)、笑劇的諧笑である時もある(大珍話)。概して云つて極めて理智的な、喜劇的笑ひである。この笑ひによつて人間の愚行を反省させようとする。第二の場合には目的達成の武器として、凡そ三つほど擧げられる。その一は人間意力の讃美である。意力によつて人生の試練に堪へ、これに打ち勝つて邪惡を拂ひ善因を

播く。その二は悟りである。これは消極的受動的に光明世界に至る道である。前者の著しい例は男性に多く、後者の眼立つた例は女性に多い。その三は因果の教へである。人間世界が畢竟因果の大法を脫し得ないことを諷示して、善因善種を播かんことを教へる。それも舊文學に見る如き、卑近なものではない。極めて幽玄な哲學的思想を根柢にもつて高所から説かれてゐる(風流微塵藏)。

【小説家としての業績】活動期は、ほぼ四期に分たれる。〔第一期〕(明治二十二年から二十九年頃迄)この期の代表作としては「露團々」(別項)「一刹那」「風流佛」(別項)「對髑髏」(別項)「毒朱唇」「一口劍」(別項)「辻淨瑠璃」(別項)「寢耳鐵砲」「いさなとり」(別項)「五重塔」(別項)「血紅星」(別項)等が擧げられる。最も天才的な活動を示した時代で、自己の理想を高く標置して、卓越せる個人性格と特異なる出來事を描き、理想主義的特色を色濃く示した作品が多い。表現形式には西鶴の影響が相當に認められる。主觀的詩的瞑想的で、誇張もあり、特異を重んずる傾向があつた。彼の個人的特性の最も熱烈な表現を示した時代である。〔第二期〕(二十六年頃から二十九年頃まで)代表作としては「風流微塵藏」(別項)「新浦島」「自繩自縛」「ひげ男」(別項)が擧げられる。この期になると現實に對する觀察がやゝ進み、客觀的寫實が多くなつて表現形式も西鶴臭も殆ど脫してゐる。對象も平凡な人間群に採り、これによつて人間の運命を暗示しようとする。前期の誇張的傾向は殆ど無くなつたが、同時に意氣の烈しさも減じて、若々しい抒情的な作風が幾分蒼老幽玄なものとなつて來てゐる。〔第三期〕(三十年頃から三十五年頃まで)「新

羽衣物語」「三保物語」「二日物語」(別項)「椀久物語」「夜の雪」「太郎坊」等がこの期の代表作である。これは一種の低迷時代で、二十七年の大患以來、創作熱は減退し、文學界に於ける表現技術の變革に對する煩悶から、態度の立て直し等のために傑作の出なかつた時代である。「二日物語」「椀久物語」などが、描寫の妙によつて人口に膾炙したに止まる。〔第四期〕(三十六年以後)「天うつ浪」(別項)、「雁阪越」「土偶木偶」等の作がある。本來の露伴に立ち直つたかに見え、專念我が道を進まんとする颯爽たる意氣が見える。理想主義的態度を持して、特異な個人群の生活を描いて人生そのものの奥祕を探ると共に、一種の國民的大ロマンスを作り上げようとした(天うつ波)が、遂に小説の筆を絶つに至つた。

【小説以外に於ける業績】小説以外の文學的貢獻も、小説に於けるそれに劣らない。左にその大略を述べる。(一)隨筆・論文。隨筆家としての露伴は現今無比である。文學・技藝・市井雜事等、取材の範圍が極めて廣い上に、これを助けるに博大な學識と典雅な文字をもつてするから、讀む者をして興趣津々厭くことを忘れさせる。「讕言」「長語」「洗心錄」等をもつて代表させることを得よう。その論文に至つては、「一國の首都」の如き、驚くべき頭腦の精微を示すものがあり、「努力論」「修省論」「悅樂」の如き、人間修養の根本を論じ、所説高邁正大、而も深切を極めてゐる。(二)史傳文學。これには最も會心の文字が多い。彼は小説界に遠ざかると共に次第にこの方面に親しみ、この種の名篇を幾部か公にした(頼朝・平將門・蒲生氏鄕・運命・仙人の話・活死人等)。これ等は學者の枯淡乾燥な史論記傳に似ず、暖かみと

力に富んだ小説的筆致を以て英雄の心事、神仙の胸中を穿ち、人事の不可思議を説いたものであり、眞に彼の獨擅場と言ひ得る。(三)紀行。彼の足跡は殆ど全國に亙つてゐる。この旅行は彼の小説にも可なり關係をもつてゐる(風流佛・對髑髏・いさなとり)が、彼はその都度多く興味ある紀行を殘してゐる。殊に青年時代の紀行文は筆者の感情を直寫し、その心境の變化を赤裸々に記して、從來の客觀的紀行とは類を異にしてゐる。(四)戲曲。彼の小説は戲曲的分子に富むが、特に戲曲的形式をかりた小説が數篇ある(滿壽姬・有福詩人等)。晩年史劇「名和長年」、及び成吉斯汗を主人公とせる史劇數篇がある。これ等の戲曲もレーゼドラマ的作品だが力强い感銘を與へる。(五)新體詩。新體詩人としては、注目すべき業績はないが、彼は卓れた詩魂ある散文の巨匠であつた。この詩魂が、彼をして新詩の表現力を藉りて「心のあと」序詩、「出廬」(別項)を書かしめた。この試作は、漢詩口調に俳句・俗謠などの要素まで加へた新詩型を起さんとしたのであるが、遂に何等の貢獻をも詩界になす事が出來なかつた。彼亦それを悟つて再びこの習作の繼續は試みなかつた。但し新詩に對する興趣はなほ永續してゐたので、明治三十八年中「讀賣」紙上で彼が主唱して募集した四行詩は、翌年大鳥寶水が編して「さわらび」といふ一卷のアンソロヂイとなつて殘つたが、一種の新短詩型を創造しようとする企ても、一篇の佳作すら生むことなくして中絶せられて了つた。この短詩に關する彼の抱負を述べたる明治三十八年中に公にした「短詩」といふ一文(「短詩みをつくし」の箇條書きを添へて)は、後「蝸牛庵夜譚」(明治四十年刊)に收められた。

彼を紅葉に比べると、詩人的小説家である事は、誰も感じる事であつて、彼の詩才は鷗外と等しく、散文の各所に的皪としてかがやいてゐる(この項日夏)。(六)俳書評註。彼の近業ともいふべきものに、芭蕉「七部集」の抄があるが、その創作的評註は、極めて文學的價値に富み、尋常の古書註釋をもつて目すべきではない。

【史的地位】紅葉・露伴は明治文學の代表的巨匠として定論がある。事實この二家の如きは二家の存在そのものが既に日本文學に對する一大貢獻であつた。だが、明治時代の文學が日本文學の全潮流からいへば過渡的のものであり、從つてこの二人も共に過渡に立つ人であり、而もその教養上、遂に舊人的觀念を棄てる事が出來なかつた。これを舊文學の傳統よりいへば、紅葉は春水の如き人情寫實派に屬し、露伴は馬琴の如き勸懲理想派の變形したものである。批評家は紅葉の才の文學は學び易く、露伴の氣の文學は學び難いといひ、紅葉が硯友社一派及び幾多の門下をもつに對し、露伴には露伴一派といふものがなく、門下も數ふるに足らぬのを、そのためだと說く。これは首肯すべき評であらう。紅葉の所謂寫實は、その一派及び門下の成長と共に、自然主義以後の文壇に交渉をもつてゐるのに對し、露伴の理想は、初期の漱石の作品の或る物に幾分か反映してゐるのみ。遂に千里獨行の觀がある。だが、これ有るが故に露伴の文學史的存在を減ずるものではない。時代を警醒する詩的豫言書として、時代の文學に思想的深味を與ふるものとして、表現技術の古典的極致を示すものとして、日本思想の精粹を集結したものとして、純日本人の魂を最も鮮かに描き示したものとして、露伴の作品は、日本文學界に永遠不朽の一大記念塔を築くものであるといひ得る。有名な「日本文學史」の著者アストンは、露伴をもつて現代日本第一の作家としてゐる。〔柳田(泉)〕

講談(かうだん)【名稱】古くは講釋といつた。講談といふ言ひ方の廣く行はれるに至つたのは、明治の初年、東京府から斯界の業者に下附した鑑札にかく記されたのによるといふ。その業者を講釋師或は講談師、その業者のみの出演する寄席を講釋場或は釋場、まれに講談席ともいふ。【沿革】遠くその祖を戰國時代の辻談義、德川時代の太平記讀(別項)等に發す。軍談・敵討・お家騷動等の史實に傳說を加味し、巧妙なる話術によつて、卑俗に、おもしろ可笑しくこれを說くをいふ。赤松青龍軒以後、神田伯龍子・深井志道軒・馬場文耕を經て、初代桃林亭東玉に至り、全くその軍書讀みとしてのこちたき本來を失ふと同時に、飽くまで聽衆の嗜好に投ずるを目的とする藝人としての存在をはつきりもつ事になつた。彼と時代を同じくしたものに、金上齋典山・田邊南鶴・伊東燕晉たちがあつた。このうち燕晉は湯島天神の境內に住み、おのれの住居に聽衆を集め、羽織袴の謹嚴な拵へで「曾我物語」「川中島軍記」「源平盛衰記」等に限つて講演したが、さうした存在のあつたにもかゝはらず、一方に於ける劇場の發達、一方に於ける落語・音曲の興隆に伴つて、講談もおのづからなる勢ひをもつて、いよ〳〵世俗的に芝居化し浮瑠璃化するに至つた。即ち彼等は、從來の軍談及びそれに準じた記錄以外、勸善懲惡の小說等に向つてその材料を求めはじめた。そしてそれが今日に至つた。軍談とは今いふ所謂修羅場、記錄とは諸家騷動等の評定もの、それ以外に、即ち今いふ所謂端物(はもの)、新しいかたちの世話講談の發生を見るに至つたのである。それは德川の末期から明治の初期にわたつてである。この世話講談の大成者に二代目松林伯圓がある。一名どろぼう伯圓といはれて、さうした市井の無賴の徒の事蹟ばかりを好んで扱つた。そしてこの伯圓の全盛時代を頂點として漸次講談の勢力は下降して衰微し、現代では僅かに世話講談の存在によつてのみその命脈を保つてゐる。〔久保田〕

江談抄(がうだんせう) 說話文學【編者】「本朝書籍目錄」には江匡房としてあるが、「群書一覽」には誰人とも擧げてない。一體、匡房は話手ではあるが、同時に編者であるとは目し難いのである。この事を考證したのは黑川春村で、その「碩鼠漫筆」卷十一に說が出てゐる。それは藏人實兼の聞書であらうと云ふのであつて、春村はこの實兼の身分を「尊卑分脈」を引いて、三條內大臣能長の孫、中納言基長の嫡男、散位從五位實兼であらうとしてゐる。併しそれよりも季綱の子で、通憲(信西)の父に當ると云ふ說の方が勝つてゐると思はれる。【卷數】類從本は第一から第六までであるから六卷と認められる。「本朝書籍目錄」には六卷と擧げてゐるが、又別に三卷とあり、「群書一覽」にも寫本三卷と出てゐる。【名稱】江は江家のこと。即ち大江家の人の談話を書き留めた意。「本朝書籍目錄」や「群書一覽」には單に「江談」ともある。【成立】實兼が集錄した物として、何時頃出來たかと云ふに、「碩鼠漫筆」に、「嘉承二年三月三十日、中右記云、或人談云、江帥匡房此兩三年行步不二相叶一、仍不二出仕一、只每レ人來逢、記二錄世間雜事一之間、或多二

僻事一、或多二人上一、偏任二筆端一、記二世事一、尤不便歟、不レ見不レ知、暗以記レ之、狼藉無レ極云々、大儒所爲、世以不二甘心一歟」と云ふのは「江談」を指したやうで、この抄の出來たのは長治・嘉承の間であらう。嘉承二年は匡房の年齡が六十七に當るとしてある。長治・嘉承の交に成つたと云ふ說は首肯される。【諸本】群書類從雜部に收められてゐる。古版では慶長本があり、古寫では、高山寺本(古典保存會で複製)や醍醐三寶院本(同上)がある。

【解說】多くは何々の事といふ題を設け、「被レ命云」とか「被レ談云」とか冒頭を置いてら、全く秩序が無いと云ふのではない。本書はこれを文學的に觀察すると、第二・第三の雜事は勿論、第五の詩事の如きも、著しく傳說的である事で、雜事中の「吉備入唐間事」とか、「朱雀門鬼盜二取玄上一事」とか云ふ類、又詩事中の「氣霽風櫛二新柳髮一、氷消浪洗二舊苔鬚一」といふ都良香の句を、騎馬人が月夜に羅城門を過ぎて誦したら、樓上にアハレ〳〵といふ聲がした。自ら鬼神を感ぜしめたのであるといふ話、同じく良香の「三千世界眼前盡、十二時代の說話文學に資材を供給したのである。橘成季の「古今著聞集」(別項)の如きも、著作の動機をこれに發してゐることは、その自序に明白である。〔野村〕

膠着語(かうちやくご) 言語學【名稱】〔英〕an agglutinating language 〔獨〕eine agglutinierende Sprache 〔佛〕une langue agglutinante【解說】言語の形態的分類の一。或る單語の前後に、意義ありて而も獨立しない「語辭」を連結して、元の單語の意義を修飾し、又は文中、他の單語に對する文法的關係を示す方法を、膠着(Agglutination)と名づける。例へば日本語で「花」といふ單語の前に「お」を附け「お花」(敬稱)又は「花」と、後に

言談之次經談之間又此間之人后樣ニ中侍

てゐる。〔伊藤〕

皇帝(くわうてい)「唐事物の謠曲」を見よ。

香亭雅談(かうていがだん) 隨筆 二卷【著者】中根淑(香亭はその號、和漢の學に通じ、詩文書畫を能くした)【刊行】明治十九年【解說】漢文の隨筆で、詩文書畫家に係る逸話類や、自家の文墨に關する所見談等を錄し、上層に依田百川(學海)の評言を註してある。卷首に著者自畫の迷花書室圖があり、卷尾に明治十九年百川の跋がある。〔和田〕

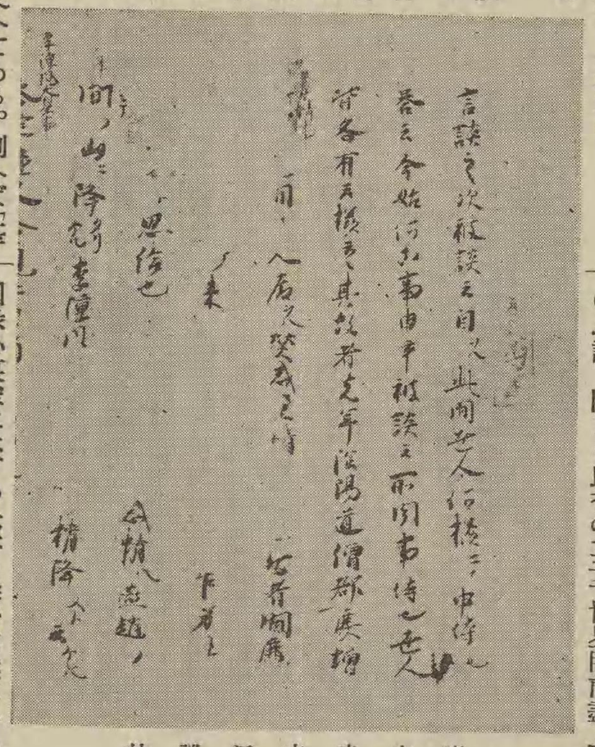
好適(かうてき)「美的好適」を見よ。

高天鶯(かうてんあう)「俳聖高天鶯」を見よ。

懶堂(かふだう) 儒者【姓名】松崎復。字は明

僻事、或多二人上、偏任二筆端一、記二世事一、尤不便歟、不レ見不レ知、暗以記レ之、狼藉無レ極云々、大儒所爲、世以不二甘心一歟」と云ふのは「江談」を指したやうで、この抄の出來たのは長治・嘉承の間であらう。嘉承二年は匡房の年齢が六十七に當るとしてある。長治・嘉承の交に成つたと云ふ説は首肯される。【諸本】群書類從雜部に收められてゐる。古版では慶長本があり、古寫では、高山寺本（古典保存會で複製）や醍醐三寶院本（同上）がある。

【解説】多くは何々の事といふ題を設け、「被レ命云」とか「被レ談云」とか冒頭を置いて筆錄し、又「予問曰」「答云」と問答式にして書き取つてある。中には「增賀聖、慈惠僧都慶賀前駈事」や、「河原院者左大臣融家事」のやうに、題だけで本文の註の缺けてゐる條々も少くない。文章は概して記錄體の漢文で認めてあるが、所々假名文を交へてゐる。例へば「甚以長久御ケルニコソアメレ」といふ風である。六卷の第一は「公事・摂關家事・佛神事」で、第二と第三とは雜事である。第四は標題が闕文となつてゐるが、第五が詩事と記してあるのと大體同樣と推測せられる。第六は長句事としてある。雜事の卷の如き、別に小分はしてないけれど、天皇の事が一所に列ねてあつたり、名器（樂器等）の事が一纏めに擧げてあつたりして、類似の事項は大抵相並んでゐるから、全く秩序が無いと云ふのではない。本書はこれを文學的に觀察すると、第二・第三の雜事は勿論、第五の詩事の如きも、著しく傳説的である事で、雜事中の「吉備入唐間事」とか、「朱雀門鬼盜二取玄上一事」とか云ふ類、又詩事中の「氣霽風櫛二新柳髮一、氷消浪洗二舊苔鬚一」といふ都良香の句を、騎馬人が月夜に羅城門を過ぎて誦したら、樓上にアハレ〳〵といふ聲がした。自ら鬼神を感ぜしめたのであるといふ話、同じく良香の「三千世界眼前盡、十二



高山寺本江談抄

因緣心裏空」は、下の七字を作者が案じかねたのを、竹生島の辨才天がお授けになつたのであると云ふやうな話が、故老の傳として出てゐるといふ次第である。隨つて佛神を憑み、尊勝陀羅尼の如きが大に尊まれ、また陰陽思想の浸潤が著しいといふ點で、本書は「今昔物語」（別項）と規模の大小は違ふが、同じやうな內容を包含してゐると言へるのである。

【影響】本書の諸條は後人の談柄となつたものが多い。ために「宇治拾遺物語」以下の近古時代の説話文學に資材を供給したのである。橘成季の「古今著聞集」（別項）の如きも、著作の動機をこれに發してゐることは、その自序に明白である。

〔野村〕

膠着語（かうちやくご）　言語學　【名稱】〔英〕an agglutinating language　〔獨〕eine agglutinierende Sprache　〔佛〕une langue agglutinante　【解説】言語の形態的分類の一。或る單語の前後に、意義ありて而も獨立しない「語辭」を連結して、元の單語の意義を修飾し、又は文中、他の單語に對する文法的關係を示す方法を、膠着（Agglutination）と名づける。例へば日本語で「花」といふ單語の前に「お」を附け「お花」（敬稱又は人名）とし、後に種々なる助詞を附け、「花の」「花は」「花だ」等とすること。又は英語に於て un-just-ly, care-less-ness の如き形を作ること。而して或る國語に於て、これを組織する單語が多く膠着の形態を有する時、その國語を膠着語といふ。トルコ語・日本語、その他ウラルアルタイ語族（別項）の諸國語は、膠着語であると稱せられる（英語は屈折語（別項）に入れる）。（孤立語・屈折語・輯合語・抱合語參照）

〔神保〕

河內山（かうちやま）「天衣紛上對初花」（てんいふんじやうたいしよくはな）を見よ。

校註國文叢書（かうちうこくぶんそうしよ）「國文叢書」を見よ。

高潮（たかうしほ）　雜誌　【創刊】明治四十三年九月　【成立】角田竹冷を中心とし、服部畊石・牧野望東等五人によつて創められたもので、當時の俳諧雜誌の平板舊套に慊らず、眞摯な研究的態度を持して進み、各作者の個性を尊重して、强ひて類型に墮することを避けるといふ趣旨であつた。又、用語の正確といふことを特色とした。現在は、服部畊石が經營してゐる。

皇帝（くわうてい）「唐事物の謠曲」を見よ。

〔伊藤〕

香亭雅談（かうていがだん）　隨筆　二卷　【著者】中根淑（香亭はその號、和漢の學に通じ、詩文書畫を能くした）【刊行】明治十九年　【解説】漢文の隨筆で、詩文書畫家に係る逸話類や、自家の文墨に關する所見談等を錄し、上層に依田百川（學海）の評言を註してある。卷首に著者自畫の迷花書室圖があり、卷尾に明治十九年百川の跋がある。

〔和田〕

好適（こうてき）「美的好適」を見よ。

高天鶯（かうてんあう）「俳諧高天鶯」を見よ。

慊堂（かふだう）　儒者　【姓名】松崎復。字は明復、通稱は退藏　【別號】益城・石經山房　【生歿】明和八年肥後益城郡本倉村に生れ、弘化元年（一八四四）四月二十一日歿す。享年七十四　【閲歷】幼時、父の命に依つて僧となつたが、後、儒學に志し、江戸に出奔して淺草稱念寺に投じた。而して主僧の援助を受けて昌平黌に入り、林述齋・佐藤一齋と共に研鑽の功を積み、學業大に進んだ。享和二年遠州掛川藩の教授となつて機務に參した。晚年職を辭して府西羽澤村の石經山房に隱居した。大正七年十一月正五位を贈らる。【學風】該贍博通、最も經義に深く、初め朱註を奉じたが、晚年思を漢唐の注疏に潛め、甚だ説文を好み、字畫を論ずること極めて詳かである。

【著作】接鮮紀事一卷○周禮札記二卷○四書札記二卷○慊堂日曆二十四卷○慊堂存稿二卷○慊堂遺文二卷○慊堂詩文集五卷○慊堂文集五卷。

〔佐久〕

幸堂得知（かうだうとくち）　劇評家　【姓名】鈴木氏。通稱利兵衞　【別號】劇神仙　【生歿】萬延元年江戸下谷車坂町に生れ、大正二年三月

二十二日、腦膜炎で根岸に歿す。享年七十一【閲歴】青年期に三井兩替店に入り、同店が今日の三井銀行となるや、昇進して各地で支店長を勤めた。年少から芝居を好んで、「歌舞伎新報」その他に劇評を書き、明治二十一年頃、東京朝日新聞へ入社した當時は、既に劇通として著はれ、一方、本來の江戸文學通としては所謂根岸派の錚々たるものであつた。戯文の著書では、明治二十七年、博文館出版の「幸堂滑稽談」があり、春陽堂から「大通世界」として黄表紙を飜刻した。この頃、東京日日新聞の劇評を書いてゐたが、江戸芝居を知る上では二人とない「通」であつた。「歌舞伎」九九號所載「昔觀た源治店」の回顧的劇談、又は歿年の三月、市村座に中村吉右衛門が、「佐倉宗吾」を初演の時、この芝居の創作者四代市川小團次の、宗吾の演技の一部を書き送つた書面（歌舞伎一五五轉載）等、「劇神仙」の名に背かないものである。大通として洒落た逸話や奇行も尠くない。死の前年十二月十二日、帝劇で見物中に輕い腦溢血で倒れたが、翌日全快した時、知友へ黒枠の紙に、葬式は當分見合はす由を書き送つた。根岸派の文人の中では最も穩健な人で、齋藤緑雨が得知の句「幾ら食ふものか捨てゝおけ雀の子」を、太つ腹な句だと褒めたといふ。又死を豫知して幸田露伴を驚かした話も傳はつてゐる。〔三宅〕

高等日本文法（かうとうにほんぶんぽふ）　語學書　一册【著者】三矢重松【刊行】明治四十一年十二月。大正十五年十一月、增補訂正して再刊。增訂版は著者の歿後、その手澤本によつたもので、卷末に「作歌と助辭」（曾て單行本として出版されたもの）及び「助動詞らむの意義」「らむについて又」「ごとしの論」「日本語の動作と狀態」「國語に特有な文の三體」の五論文を添へてゐる。【内容】總論に文法の性質・目的・種類を記し、次に文法は音韻文字篇・詞辭篇・文章篇の三部に分つべきものであるとし、この順に説いてゐる。即ち第一篇には假字・漢字の事を記し、第二篇は詞辭で、著者が最も力を注いだ部である。初めに語を分類して獨立詞（獨立にて意義あるもの）と、附屬辭（獨立にては意義なきもの）とに分ち、更にその下に、（名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞・動詞・形容詞・助動詞・てにをはの品詞を立て、次に名詞・代名詞・動詞等の各項について説明し、動詞の性相、助動詞・てにをは等の項は、説明頗る丁寧である。第三篇は文章について文の解剖、文の成分、成分の用法、文の種類等と項を分けて説いてゐる。【價値】本書は著者が緒言に云つてゐる如く、組織に於ても解釋に於ても、「廣日本文典」（別項）に負ふところ大なるものがある。勿論、大槻博士その他の舊説を改めた點も少くない。殊に諸成音・格・法・性相・敬語・助動詞・助辭・補足語・叙述句・省略・記錄對話等に關する新説は注意すべきものである。しかし接續詞及び副詞に體言のものと用言のものとあるとしてゐる點は穩當を缺くものである。なほ他にも部分的には首肯し難い點もあるが、大體に於てその所説は穩健である。而して説明が懇切丁寧であるのは、學習者を益するところ多大である。〔龜田〕

高踏派（かたふは）〔佛〕Des Parnassiens.【名義】原語はパルナッス山に住む人々の意。即ち上代希臘に於てはパルナッスの山に多くの美神が集まつてゐたので、その美の神々、言ひ換へれば詩人等の群といふ意味である。けれども特に十九世紀の中葉以後、佛蘭西に於て、リコント・ドゥ・リイルを首領とした一派の詩人を指す名稱になつてゐる。一八六六年・七一年・七六年に亙つて「現代のパルナッス」（Parnasse Contemporain）といふ詩集が三卷出來て、それにはリコント・ドゥ・リイルを初め、シュリ・プリュドム、ヴィリエ・ドゥ・リル・アダン、エレディア、フランソア・コッペ、レオン・ディエル、ジャン・ラオル、その他の人々の詩が集められてゐる。パルナシアンとはこゝから起つて來たのである。なほ日本で、これを高踏派と譯したのは上田敏である。【特徴】この派の特徴は、彼等以前のロマンティスズムの詩歌が情緒を自由に解放して繪畫的に展開してゐるのに對し、又後の象徴派があらゆる意識の深い解放を主として音樂的に表出してゐるのに對して、歴史を自然現象を、彫刻的に鏤刻的に立體的に刻み出すにある。又彼等は科學と藝術との結合を目的とし、從つてその歌ふ材料も表現も的確を期し、一點一畫も忽せにせず、音韻も豊かで、「黄金の釘」といはるゝ程に、その韻の響の高からんことを求めた。更にこの派の人々は、特に東洋の要素を多く取入れて、佛教の涅槃境を歌ひ、或は日本の大名・武士に至るまでも歌つてゐる。彼等は又俗惡なもの、卑近なものを斥けて、ひたすら美的印象にのみ訴へる事を眼ざした。その結果、超俗的貴族的と考へられもした。上田敏の譯語は、蓋しこの意味をも含めたものに相違ない。それ故、一般にパルナシアン又は高踏派といへば、氣取屋とか貴族趣味の人といふやうに轉用される。〔宮島〕

幸德秋水（かうとくしうすい）　評論家【本名】傳次郎【生歿】明治四年九月二十二日土佐國幡多郡中村に生れ、同四十四年一月二十四日歿す。享年四十一。【閲歴】十八歳にして同郷出身の先覺中江兆民に師事し、彼の民主主義的自由主義思想の感化に育つた。後、操觚者の群に入り、轉じて萬朝報の記者となり、同紙記者堺利彦等と交つた。明治三十年社會問題研究會を創立し、三十一年十月その内容を改革せる社會主義研究會に入會した。三十三年十二月社會主義協會の創立に加はり、三十四年五月同協會の同志と共に、社會民主黨を組織して即日解散せられた。同六月、萬朝報社長黒岩涙香を中心とした理想團の設立に參畫。同年十一月、兆民死去。三十六年日露開戰の氣運に反對して非戰論を唱へ、涙香が開戰論に轉換したのを機會に、堺と共に同社を退き、二人協力して平民社を起し、平民新聞を創刊した。同年「社會主義神髄」を刊行。三十七八年戰役中、平民社は堺・幸德及び石川三四郎・西川光次郎等四人の指導者の下に、終始一貫非戰論を唱へたが、三十八年一月當局の彈壓をうけて協會は解散し、平民新聞は五十三號限りで廢刊した。同年二月以降雜誌「直言」を主宰創刊したが、同九月發行停止を命ぜられ、平民社は解散した。後、米國に遊び、桑港大震災に際會し、三十九年歸朝した。四十年一月、日刊平民新聞の創刊に參畫したが、三ケ月で廢刊した。外遊以來、科學的社會主義から無政府××主義に轉向し、ピーター・クロポトキンの論著「麵麭の略取」等を飜譯刊行したが、發賣を禁止された。四十三年六月一日、彼の所謂「刑法七十三條に關する獄」が起り、獄中「基督抹殺論」を著はした。翌四十四年一月、同志十一人と共に刑を受けた。【參考】社會文學集（現代日本文學全集）〔武藤〕

皇都午睡（くわうとごすゐ）　隨筆　三卷【著者】西澤李叟（一鳳）【刊行】明治十六年【解説】嘉永頃榮えた大阪の狂言作者綺語堂李叟が、嘉永三年の秋、江戸に下つてゐた間の筆錄で、自身見聞の實事を集めたもの。元來初編三百條、第二編二百四十條も存したのであるが、この初・二編は或る年の火災に燒亡し、最終の第三編の三卷だけが救ひ出されたと云ふ。故に今見るべきは第三編のみである。幕末に於ける江戸市中の風俗を描寫すること頗る綿密で、殊に大阪人として京阪との比較觀察の點の意味で用ひられてゐる。一つは隅田川に擬した滑川を舞臺に利用した事と、一つは義理と義理との中に起る事件の見立からである。されば口繪四丁の中、一丁には滑川に泛べる舟二艘を描き、又、舟中と岸上に主要人物六人を描き、その人物には一々合印をつけておいて、後の口繪でそれを廓大して見せる心持で、一人一人を描いてゐるやうな趣向もあつた。【刊行】文政五年、西村永壽堂板【諸本】本文のみは邯鄲諸國物語（續帝國文庫）に附載されてゐる。

ふ小七、岸づたひに監視する。小七、舟の中の淨瑠璃に託して菊の井に怨みつらみをいふ。その果は沼藏と喧嘩にもならうとしたが、幇間蘭洲の仲裁で止める。（滑川の川添ひの料理屋の座敷）こゝでも沼藏は菊の井を口説いてゐる。（その隣りの茶屋）菊の井の抱主、小七の身の上を氣づかつて來た露右衛門を沼藏の家來と見誤り、菊の井身請の金を受取り、證文を渡して歸る。（もとの座敷）沼藏、沈の香爐を千葉家の若殿に獻上して、仕官を願ひ出づ。若殿實は菊の井の妹濱吉が假扮して連れ歸る。かくて、小七は秩父家に歸參し、菊の井と結婚し、靜波は尼となる。【構想】戀敵と思ひ違へて斬つたのが養父であり、その養父は、實父の敵であつたといふ意外な敵討を經とし、謀りおほせたと思つたのは、實は向ふがわざと謀られたのであり、こちらに敵意を見せてゐたと思つたのは、實は絶大な好意を寄せてゐたのであり、戀敵と思つたのは、こちらの戀を助けてゐた忠義な舊僕であつたといふ事件のもつれを緯として この一篇は成る。作者は作中の人物に誤解を

皇都午睡（くわうとごすゐ）　隨筆　三卷　【著者】西澤李叟（一鳳）【刊行】明治十六年【解説】嘉永頃榮えた大阪の狂言作者綺語堂李叟が、嘉永三年の秋、江戸に下つてゐた間の筆錄で、自身見聞の實事を集めたもの。元來初編三百條、第二編二百四十條も存したのであるが、この初・二編は或る年の火災に燒亡し、最終の第三編の三卷だけが救ひ出されたと云ふ。故に今見るべきは第三編のみである。幕末に於ける江戸市中の風俗を描寫すること頗る綿密で、殊に大阪人として京阪との比較觀察の點が面白い。婦人の勢力男子に勝れてゐる事、男子に任俠氣の多い事、上下層家庭の樣、衣裳・飲食の事、寺社の事、市中の地理、商店・旗亭・混堂・戲場・遊廓の記事、すべて二百三十條、江戸の特色あるもので作者の筆にかゝらぬはない。巷談街說の趣味ある條も交つてゐるが、江戸風俗史の參考資料として甚だ有益との稱がある。明治十六年、甫喜山景雄が柳亭種彥の家藏稿本を校して、我自刊我書屋から出版したのが現行の本である。同年甫喜山氏の序がある。〔和田〕

孝貞兩岸一覽（かうていりやうがんいちらん）　草雙紙　合卷　六册合二册　前編三册後編三册【角書】菊の井。小七。前編の內題には櫻屋小七藝子菊の井【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【名義】作意からいへば、義理を主眼としたものであり、義理の內容からいへば、忠と孝と貞との三つがある。しかし、兩岸一覽といふ名の好みからいへば、その中の二つに限定しなければならない、といつて一つを逸するのも惜しい。といふ思はくからこの二題を附けさせたのであらう。「兩岸一覽」とは、その頃頻りに用ひられてゐる名所繪の命名であるが、こゝには二樣の意味で用ひられてゐる。一つは隅田川に擬した滑川を舞臺に利用した事と、一つは義理と義理との中に起る事件の見立からである。されば口繪四丁の中、一丁には滑川に泛べる舟二艘を描き、又、舟中と岸上に主要人物六人を描き、その人物には一々合印をつけておいて、後の口繪でそれを廓大して見せる心持で、一人一人を描いてゐるやうな趣向もあつた。【刊行】文政五年、西村永壽堂板【諸本】本文のみは邯鄲諸國物語（續帝國文庫）に附載されてゐる。

【梗概】（前編）（攝津平野川の邊）秩父の家臣笹島嘉太夫、主家の重寶沈香爐を紛失して浪人してゐたが人手にかゝつて死ぬ。その妻靜波、狂氣して一子皆吉を抱へたまゝ平野川に投身しようとする。船頭梶六と嘉太夫の舊僕勘太郎、漸く取り鎭めて介抱する。――それより二十年を經過す――（鎌倉櫻屋の店先）主人露右衞門の甥に當る番頭他九郎、放蕩費の滯りを大勢から催促され、やつと宥めて歸す。主婦のおさま、太々講の集り金を持ち歸り、掛箱の抽出に入れる。他九郎それを盜み出して烟德利の中に隱し、藝者菊の井からこの家の若主人小七宛に來た手紙を抽出の中に入れて、罪を小七に嫁さうとする。小七は偶然その金を見つけて私する。ために穽に陷つて困つてゐるところへ、露右衞門歸宅して他九郎の放埒を責めて放逐する。おさまも亦小七の日頃の遊蕩を責めて勘當する。そこへ菊の井馳せつけて、小七が心がけてゐた香爐を大和の客が買ひとつた事を告げる。小七の失望。（後編）（滑川の邊）菊の井を揚詰めにして口說き立てる大和室住の家臣三角沼藏、菊の井を伴うて滑川に舟遊びをする。二人の仲を疑ふ小七、岸づたひに監視する。小七、舟の中の淨瑠璃に託して菊の井に怨みつらみをいふ。その果は沼藏と喧嘩にもならうとしたが、幇間蘭洲の仲裁で止める。（滑川の川添ひの料理屋の座敷）こゝでも沼藏は菊の井を口說いてゐる。（その隣りの茶屋）菊の井の抱主、小七の身の上を氣づかつて來た露右衞門を沼藏の家來と見誤り、菊の井身請の金を受取り、證文を渡して歸る。（もとの座敷）沼藏、沈の香爐を千葉家の若殿に獻上して、仕官を願ひ出づ。若殿實は菊の井の妹濱吉が假扮して香爐を奪つたのである。香爐は直に小七の手に渡る。菊の井は沼藏に身請されたと思ひ、小七に駈落を迫る。濱吉の僞若殿の伴廻りに雇はれて來た他九郎、騙と知つて小七を脅す。小七誤つて絞め殺し、菊の井と心中の覺悟をする。（滑川の岸邊）露右衞門が身請の證文を小七に渡さうと駕籠で追つて來たのを、小七は沼藏と思ひ違へて斬る。狼狽して切腹しようとするのを遮つて、露右衞門は始めて自分が今の小七、以前の皆吉の父嘉太夫の敵であること、靜波に對する橫戀慕から嘉太夫を殺した事を告げる。そこへ來合はせた今のおさま、前の靜波は皆吉ゆゑに、夫の敵と知らず再緣した事を悔み、露右衞門を峰打したなり、滑川へ投身する。それを舟で助けた沼藏が、自分はもとの勘太郎であること、皆吉の行方を追うて鎌倉に下り、今の小七が沈香爐の穿鑿に同情してわざと騙られるやうに計つたこと、菊の井を口說いたのは、その貞心を試したわけであることを告げる。小七は武士の心に還つて、露右衞門の首を斷ち、折から惡仲間を誘つて押し寄せた他九郎（後に蘇生した）を取り押へ、改心させて櫻屋の跡取りにすると連れ歸る。かくて、小七は秩父家に歸參し、菊の井と結婚し、靜波は尼となる。

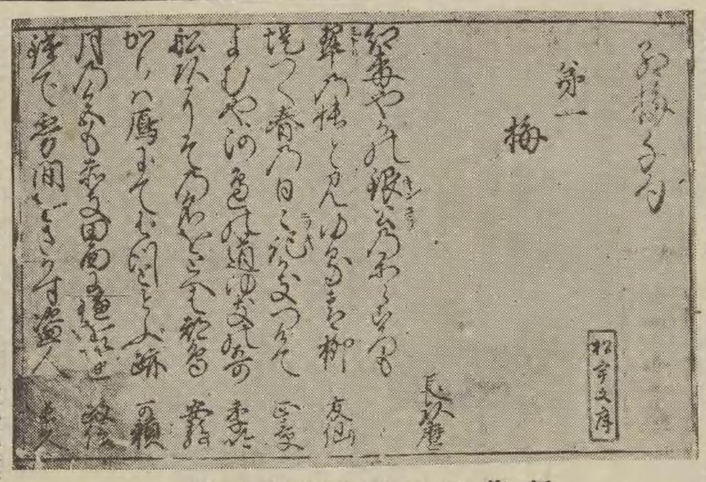
【構想】戀敵と思ひ違へて斬つたのが養父であり、その養父は、實父の敵であつたといふ意外な敵討を經とし、謀りおほせたと思つたのは、實は向ふがわざと謀られたのであり、こちらに敵意を見せてゐたと思つたのは、實は絕大な好意を寄せてゐたのであり、戀敵と思つたのは、こちらの戀を助けてゐた忠義な舊僕であつたといふ事件のもつれを緯としてこの一篇は成る。作者は作中の人物に誤解を繞つて彷徨させて、讀者には意外な事件の起伏に興を催させようとする。はじめに、發端として後の敵討の起點を書き、二十年を經過したとして書き出した事件には、何の關係もないものを書きつづけ、最後において起點にかへる筋立は、作者が前にいつた意圖に據るものである。作者が小七と菊の井の名を新內節から利用したのは、世間熟知のものを假りながら、それと異なる方向に筋を誘導することに於て作意を明かにしたのであらう。據りどころの新內は、枡酒屋小七、山科屋菊の井と角書のある「浮名初紋日」である。作者にその意のあつたことは、本文一丁の表に、新內正本の表紙めかした內題の意匠からも明かである。その中に「鶴賀直傳傚題名」といつてゐる。新內のそれは勿論心中物であるが、それを種彥は義理物に書き直したのである。尤もこの作と新內のそれとは、人物の名の交涉だけで內容には關係がない。內容の關係は、近松の淨瑠璃「心中二枚繪草紙」との間に見られる。小七は攝津長柄村の田地持介右衞門の養子市郎右衞門に當り、菊の井は、天滿屋の遊女おしまであり、他九郎は善九郎に當る。露右

衞門が改心して討たれる事件は、善九郎が改心して兄の行方を尋ねる事件と聯關を保つてゐる。全體の趣向としては、原作の中の卷を最初に廻し、上の卷を次に廻し、それの心中をこれの敵討に轉じたのである。〔山口〕

寄居歌談（がうなのうたがたり）　歌論書　五册【著者】近藤芳樹【成立】天保十三四年に成つた事は序や奥書によつて知られる。【諸本】元治元年版と明治十六年求版の本とがあるが、内容は同樣である。【解說】卷一の初めに天保十三年の自序があり、卷一・二の終りに奥書がある。本文は歌に關する種々の知識や見解を述べてある。例へば、てにをはの事、白川少將の事、顯昭と後京極殿、言ひやすきことを濫りに言はず、人の苦しむ所をたやすく言ふべし、左近の櫻右近の橘の考證、定家卿拾遺愚草の事といふやうな各種の事項に亙つてゐる。その間に、著者の豐富な學識と穩健な見解とを見ることが出來る。「古今集」序の「事わざ繁きものなれば」の句を解して、歌は人事人情の波瀾曲折の中に始めて生ずるものなりと說き、或は歌は喜怒哀樂の聲なりとし、今樣の起原を論じて、いろは歌に及んだ如き注意すべき見解である。【價値】著者は歌學者としては「古風三體考」の如き組織的で精緻な歌體の研究書もあるが、この「寄居歌談」はそれとは異なつて斷片的な隨筆的歌論書である。併しそれだけ多方面に亙つた見解を見得る上に、彼の著書として注意すべきのみならず、歌論史上にも逸することの出來ないものである。〔相原〕

廣日本文典（くわうにほんぶんてん）　語學書　一册【著者】大槻文彥【刊行】明治三十年一月【內容】本書は中古時代（桓武天皇から後三條天皇の御代まで）の散文の文法を記したもので、草稿は明治十五年に成り、同二十二年に刊行した「言海」（別項）の卷頭に收めた「語法指南」はその拔萃である。後、これを增訂したのが、卽ち本書である。先づ總論に、言語・文字・文章・文典・國語等に定義を下し、次に第一編文字篇に、假名・漢字及びその用法について說き、第二編單語篇に、八品詞卽ち（一）名詞（固有名詞・普通名詞・代名詞・數詞に分つ）。（二）動詞（自動詞・他動詞・語根・語尾を說き、活用を四段・上二段・下二段・上一段・下一段及び加・佐・奈・良四行の變格を記し、次に動詞の法を第一終止法、第二終止法・第三終止法・連體法・不定法・中止法・連用法・名詞法・命令法と七種に分けて說いてゐる）。（三）形容詞（忘幾活用と志々幾活用とに分け、その法を終止法・連體法・中止法・副詞法の四種に分つてゐる）。（四）助動詞（活用の種類は二十七種あるが、これを意味に依つて分けると、能相・所相・勢相・使役相・敬相、指定・打消・現在・過去・未來となるとし、その各々について說明してゐる）。（五）副詞。（六）接續詞。（七）豆爾乎波（第一類、名詞ニツクモノ、第二類、種々ノ語ニツクモノ、第三類、動詞・形容詞・助動詞ニツクモノと分けてゐる）。（八）感動詞（イ他語ノ上ニ用ヰルモノ、ロ他語ノ中間又ハ下ニ用ヰルモノ、ハ他語ノ下ニ用ヰルモノと分けてゐる）。以上が所謂八品詞である。これに次いで、熟語・疊語、接頭語・發語、接尾語を說いてゐる。第三編文章篇は、主語・述語、客語、修飾語・主部・客部・說明部、聯構文・挿入文、倒置法、言掛・秀句、結法、呼應、略語・略句、文脈語脈の解剖、文中の符號、闕字と章を分けて說いてゐる。【附記】「廣日本文典別記」（一册）は、「廣日本文典」の所說を註釋し考證したもので、共に不可分の關係にある。〔龜田〕

紅梅千句（こうばいせんく）　俳諧集　一册【編者】松永貞德【名義】貞德の卷頭吟「紅梅やかの銀公のからごろも」から付けたのであらう。【刊行】明曆元年五月【諸本】貞門俳諧集（俳書大系）所收【內容】本書は有馬友仙が發起で、貞德に一座の指導を乞うて、正章・季吟・安靜・可賴・政信・長久等と共に、百韻十卷（第一梅、第二蝶、第三花、第四郭公、第五盧橘、第六雁、第七月、第八菊、第九雪、第十歲暮）并に追加表八句を作つたものである。季吟の跋がある。【價値】貞德が老齡を顧みず、友仙・正章・季吟等のために、夜更くるまで懇に十度の會を指導したものが本書で、「御傘」（ごさん）「新增犬筑波」（各別項）と共に、貞門の三部書とされるほど貞門の模範的作品とされてゐる。立圃・重賴（しげより）さへもかく親しき指導を受けた事がなかつたと言ふことである。【影響】寶曆三年、貞門系統の貞屋等が「後紅梅千句」を興行し出版してゐる。〔萩原〕



紅梅千句（伊藤松宇氏藏）

考槃堂漫錄（かうはんだうまんろく）　隨筆　六卷　寫【著者】井上立元（金峨、又は考槃翁と號した）。【成立】天明二年の自序がある。【解說】漢文隨筆で、讀書・學問から得た鴻儒の感想・見聞を記したもの。卷一に日本之學凡三大變矣以下、卷二に謝肇淛云魚不見水、人不見氣以下、卷三に兩漢李唐有天下尤久以下、卷四に余師視蘭臺先生而先生不處先生以下、卷五に孔子之於七十子皆呼其名以下、各數十項を收めてゐる。我が國儒學諸家の評論に亙る項も少くない。街談巷說や奇事異聞も交つてゐる。自序によると、もと漫錄と題して經義を論じたものが二卷あつたが、罹災して亡せた。その後、本書を作つたと云ふ。〔和田〕

口碑（こうひ）　【意義】今でも、口碑といふ語を傳說（別項）と同じ意味に、狹く使つてゐる人も少くないが、口碑は言語記念物、卽ち人の言葉にのこる前代生活の痕跡の全部であると廣く解するのが穩かである。【解說】個々の民族が有する民間傳承（Traditions Populaires）は、當然これを三部に分けることが出來る。その一は、眼に映ずるもの、卽ち一語をも解し得ない異種人が遺つて來ても、直ぐに寫眞を取り手帖に記載することの出來るもので、その二は、共に住み永く一つの環境に成長した者でなければ、觸れても感ぜず、疑うても問を掛けられない心意の働き、外國の觀察者は勿論のこと、同胞國民でも立場が異なると、屢々把捉を困難とする感情である。この二つのものの中間に在つて、耳から入つて來て、自然に我々に知らせる部分、卽ち熟心なる言語學習者ならば、外人でも殆どその全部を學び取ることの出來る口頭傳承といふものが、分量においては恐らく最も大きく、また久しい以前から一括して考察せられてゐる。それに口碑といふ總名は、似つかはしくまた格別の故障がない。音樂は三部の何れに入れるか、又は心意の傳承を觀測するにも、やはり言語を手段とするのはどうするか、或は三類複合し、また關聯する場合は如何などの句の長短、叙述の詳略も、幾分かは兩者分界の標準とすることが出來る。今日我々の民譚と呼んでゐるものには、實は双方を混同して居るやうである。その次に來るのは（五）唱へごと、詞章は固定して受け繼がれ、また平常と異なる音聲を用ひることにはなつてゐるが、音樂の拘束はまるで受けてゐない。唱へごとの目的は、もとは幾通りもあつて、それによつて種々の表示法があつたやうだが、今では成人の間には殆どその必要がなくなり、殘つてゐるのは號令位なものである。これに反し使用せらるゝもの、動植物などの人の親しみ視るものには、かういふ原因から名の改まる例が多い。他の一方は謂はゆる固有名詞、人が新たに他には無い名稱を設け備ふべき必要のある場合は、これこそ最初から永く保存するのが目的である故に、最も口碑といふ名に似つかはしかつたのである。或は今日の謂はゆる方言の全部が、すべて前代生活の痕跡だといふ事も出來るか知らぬが、その中には、單なる誤謬轉訛に出でたものも交つてゐるかいかに坑夫の生活を生活したかではなく、彼はいかに坑夫の生活を見たかである。この作品の成立は、元來一人の未知の青年が飛び込んで來て、小說に書いてくれと云つて自分の經驗談をした。それを素材として作者獨自の心理研究と想像によつて綴り上げたものであつた。それ故に、同じころの作品ではありながら、構想の複雜な「虞美人草」（別項）などとは反對に、殆ど一本調子の叙述である。作者は全篇の結語として、「自分が坑夫に就いての

この二つのものの中間に在つて、耳から入つて來て、自然に我々に知らせる部分、即ち熟心なる言語學習者ならば、外人でも殆どその全部を學び取ることの出來る口頭傳承といふものが、分量においては恐らく最も大きく、また久しい以前から一括して考察せられてゐる。それに口碑といふ總名は、似つかはしくまた格別の故障がない。音樂は三部の何れに入れるか、又は心意の傳承を觀測するにも、やはり言語を手段とするのはどうするか、或は三類複合し、また關聯する場合は如何などの煩はしい問題は省略して、爰には唯その口碑はどれだけの種類があり、又どう順序を立てて置くのが便利かを述べて見る。先づ最初には、口碑の中心の如く認められてゐた(一)傳說がある。次には、屢々これと實質を同じくして、ただ幾分か樣式を固定してゐる(二)民譚(別項)、即ち民間說話、これが怪談奇談や笑ひ話、もしくは特に古形を存した童話などに小別し得ることも、爰には詳しく述べない。次には民譚よりも更に外形を重んじ、しかも內容は互に行き通うてゐる(三)語り物、もしくは、歌物語(物語參照)といふものが數へられる。神話(別項)がもし當初の純な形を保持してゐるならば、勿論別に一項を立てなければならぬのであるが、今ではその本旨が明かでない場合が多いから、單に外形によつてこの中に包容せしめるの外はない。次には(四)歌謠(別項)即ち音樂に伴うて、形を整へられた綾言葉が入つて來る。語り物の多くは、亦同じ樂器を使ひ、且つ往々にして歌謠をも中に挿んでゐるが、兩者の差別は舞と踊との差の如く、詞章と曲節との何れを主とするかによつて、かなり明かに立てることが出來る。文句の長短、叙述の詳略も、幾分かは兩者分界の標準とすることが出來る。今日我々の民譚と呼んでゐるものには、實は双方を混同して居るやうである。その次に來るのは(五)唱へごと、詞章は固定して受け繼がれ、また平常と異なる音聲を用ひることにはなつてゐるが、音樂の拘束はまるで受けてゐない。唱へごとの目的は、もとは幾通りもあつて、それによつて種々の表示法があつたやうだが、今では成人の間には殆どその必要がなくなり、殘つてゐるのは號令位なものである。これに反して小兒は遊戲のために、まだ種々の唱へごとを傳へて居り、それが多くは過去の成人の用ひたものの摸倣であるところに、萬集の意義は殊に多い。これを童詞と名づけて別の項を立て、もしくは歌謠の末に列ねようとする者もあるが、共に誤つてゐるやうである。(六)呪文即ちまじなひの言葉も、唱へごとの一種と言へぬこともないが、その多くは聽き手を狹く限り、相手以外の者に知らせることを欲せず、又は相手にすらも聽かせまいとすることが、他の唱へごととは異なつてゐる。(七)謎と(八)諺との二つは共に言語の有力なる效果を期する點が唱へごとに近く、その選擇と配合に多くの技巧を費したことも相似てゐるが、一方は出來るだけ意味を捉へにくく、他の一方はこれと反對に出來るだけ誰にも理解せらるゝを以て主眼としてゐた。最終になほ一つ、これは今までの口承文學(La Literature Orale)といふ中には算へられなかつたが、(九)他の種々の言語の利用法も、やはりこの口碑の列に加へて然るべきものである。これも二つに小別して、一方は言葉使ひ、後に熟語となり又流行語となつて、癖の如く盛んに使用せらるゝもの、動植物などの人の親しみ視るものには、かういふ原因から名の改まる例が多い。他の一方は謂はゆる固有名詞、人が新たに他には無い名稱を設け備ふべき必要のある場合は、これこそ最初から永く保存するのが目的である故に、最も口碑といふ名に似つかはしかつたのである。或は今日の謂はゆる方言の全部が、すべて前代生活の痕跡だといふ事も出來るか知らぬが、その中には、單なる誤謬轉訛に出でたものも交つてゐるから、言語技術の歷史に於ては、先づこれを第一次利用者の意圖に出でたものに限るのが至當であらう。

【參考】口承文藝大意　柳田國男（岩波日本文學）　〔柳田（國）〕

郷琵琶（がうびは）　小說　【作者】夏目漱石　【發表】明治四十一年一月一日から同年四月六日まで朝日新聞に連載。【刊行】「野分」と合せて「草合」と題し、春陽堂より刊行。漱石全集第三卷、同普及版第四卷所收。

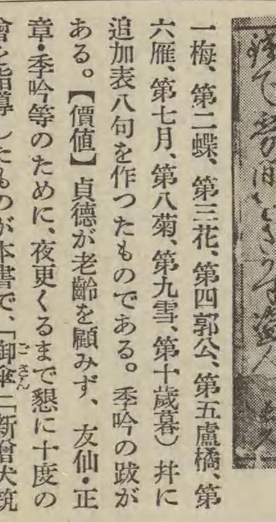
【內容】死ぬつもりで家出をした一青年が、ぼん引の手にかゝつて或る銅山へ連れ込まれ、五ヶ月間飯場の帳附をしてゐた。全篇の初めの三分の一は、赤毛布と小僧とが一緒にぼん引に連れられて來る途中の描寫。後は坑夫生活の觀察で、シキの中の光景、ジャンボーを病人に見せる光景、等、等。いづれも切迫した人生の斷面ばかりであるが、一貫した筋といふものは別にない。

【批評】描かれたものは、切迫した暗い場面であつても、作の與へる印象は、割合に明るくて安靜である。それは描くことよりも說明することに重きを置いてゐるからではあるまいか。主題となつてゐるところのものは、彼はいかに坑夫の生活を生活したかではなく、彼はいかに坑夫の生活を見たかである。この作品の成立は、元來一人の未知の青年が飛び込んで來て、小說に書いてくれと云つて自分の經驗談をした。それを素材として作者獨自の心理研究と想像によつて綴り上げたものであつた。それ故に、同じころの作品ではありながら、構想の複雜な「虞美人草」(別項)などとは反對に、殆ど一本調子の叙述である。作者は全篇の結語として、「自分が坑夫に就いての經驗は是丈である。さうしてみんな事實である。其證據には小說になつてゐないんでも分る。」と云つてゐる。これを逆にして云へば、相當に複雜に仕組まれた筋がなければ、小說になれぬといふことになる。即ち作者が小說らしくない小說として書いたものであることがわかる。　〔野上〕

廣文庫（くわうぶんこ）　百科事彙　二十册　【編者】物集高見　【校訂者】物集高量　【刊行】大正五年、內外書籍株式會社　【成立】さきに「群書索引」(別項)を世に送つた著者が、索引の書が圖書館又は藏書家のある地方に於てこそ極めて有效であるが、これ等に乏しい學究に取つて、或は遺憾の點のあるのに鑑みて編したのが一つの有力な原因である。【內容】「群書索引」に載せた和漢書、及び佛書一萬餘部十萬餘册の中から天文・地理・山川・草木・鳥獸・蟲魚・神佛・人物・儀式・武技・遊戲・家屋・庭園・器具・調度に關する五萬餘の項目を抽出、その項目の最も要領の得られる出典を一二種づつ擧げ五十音順に排列したもの。各卷各々目次があり、特殊なものは挿繪を以て說明を補つてゐる。【解說】本書が群書索引と共に、その內容の廣汎なると同樣に、各種の文化層に於て利

な部類の研究書もあるが、それとは異なつて斷片的な隨筆的歌論書である。併しそれだけ多方面に亙つた見解を見得る上に、彼の著書として注意すべきのみならず、歌論史上にも逸することの出來ないものである。　〔相原〕

廣日本文典（くわうにほんぶんてん）　語學書　一册　【著者】大槻文彥　【刊行】明治三十年一月　【內容】本書は中古時代(桓武天皇から後三條



一梅、第二蝶、第三花、第四郭公、第五盧橘、第六雁、第七月、第八菊、第九雪、第十歲暮）并に追加表八句を作つたものである。季吟の跋がある。【價値】貞德が老齡を顧みず、友仙・正章・季吟等のために、夜更くるまで懇に十度の會を指導したものが本書で、「御傘」(ささん)「新增犬筑波」(各別項)と共に、貞門の三部書とされるほ

用キルモノ、(八)他語ノ下ニ用キルモノと分けてゐる)。以上が所謂八品詞である。これに次いで、熟語・疊語、接頭語・發語、接尾語を說いてゐる。第三編文章篇は、主語・述語、客語、修飾語・主部・客部・說明部、聯構文・挿入文、倒置法、言掛・秀句、結法、呼應、略語・略句、文脈語脈の解剖、文中の符號、闕字と章を分けて說いてゐる。【附記】「廣日

來る。その一は、眼に映ずるもの、即ち一語をも解し得ない異種人が遣つて來ても、直ぐに寫眞を取り手帖に記載することの出來るもので、その二は、共に住み永く一つの環境に成長した者でなければ、觸れても感ぜず、疑うても問を掛けられない心意の働き、外國の觀察者は勿論のこと、同胞國民でも立場が異なると、屢々把捉を困難とする感情である。

用價値の大なることは勿論で、學者の時間と腦力と金錢との冗費を省くこと、蓋し類書を拔くもので、本書が昭和二年に五版を重ねた事實は、この有力な證明であらう。かゝる大著が、著者一人の個人的努力に依り、明治十九年起稿以來三十餘年を費して成つた點は、正に驚異に價すると同時に、一面望蜀の念を質的にも量的にも感ずる點がある。（群書索引參照）〔土井〕

弘文天皇（こうぶんてんわう）　漢詩人【御幼名】初めは伊賀皇子、後に大友皇子【御生歿】大化四年に御降誕、白鳳元年（一三三〇）七月二十三日崩御。寶算二十五。【御陵】長等山前陵（今の大津市別所町字南滋賀）【御閲歴】天智天皇の第一の皇子。御母は伊賀ノ采女、宅子の娘。二十四歳太政大臣に任ぜられ、皇太弟大海人皇子に代つて皇太子となられた。父帝崩御、續いて御即位、幾ばくもなく大海人皇子兵を擧ぐるや討つて敗れ、山前に崩御。在位八ケ月、明治三年七月弘文天皇と諡せられた。御人となり明悟で博學なる上に武道にも通じ給うた。眼光炯々として體軀も偉大におはしましたので、唐の使劉德高は「皇子の風骨尋常にあらず。世間の人に似ず」と稱し奉つた。後に、百濟の學士、沙宅紹明・答本春初・吉太尚・許率母・木素貴子等を師友として學ばれ、文藻は日々に進み、筆を下せば章と成り、言を發すれば理にかなひ、時の人々はその明達に驚嘆した。嘗て皇子の頃、次の如き夢を見給うた。中天洞開して、朱衣の老翁が日を捧げて天皇に授け奉つた。偶々人が腋下から來てその日を奪ひ去つた。覺めて後、驚いて藤原鎌足に語らせ給ふと、鎌足は嘆息して、「聖朝萬歳の後、恐らく巨猾の間を窺ふ者あらんの兆か。然れども天道に親疎なし。善に從ふ。願くは皇子自ら勤めて德を修めば、災異を憂ふるを要せざるべし。臣に女あり。願くば後宮に入れて箕帚を奉ぜしめん」と申出たので、これを聽許し給うた。【作品】その詩の「懷風藻」に載るもの二首、共に文字典麗、氣宇洪大である。我が國に於ける漢詩は、實に天皇を以て濫觴とする。（大津皇子參照）〔山岸〕

【參考】懷風藻○今昔物語第十一、三十話○本朝一人一詩○日本詩史○大日本史卷十

弘法大師（こうぼだいし）「空海」を見よ。

弘法大師行狀繪傳（こうぼだいしぎやうじやうゑでん）　繪卷【解說】弘法大師の行狀を圖した繪傳はその類本甚だ多いが、その中でも、京都教王護國寺（東寺）所藏の十二卷本と、高野地藏院所藏の六卷本とは最も顯著なものである。東寺本は、詞書は大覺寺深守法親王を初め南北朝頃の高僧貴紳十人の寄合書で、繪は土佐光信筆と傳へられてゐるが、それは誤りで、「名畫拾彙」に、東寺繪所行忠以下六人が、應安七年より康曆元年に至つて合作成就したとあるのが、由緒ある傳へと思はれる。その畫致から見ても、南北朝頃の製作と見て差支へあるまい。幕末に東寺十輪院一音が版本として流布した「弘法大師行狀記」は、即ちこの繪卷を摸刻したものである。高野地藏院の六卷本は、一般に「高野大師行狀圖繪」とも云はれ、詞書は近衞道嗣公筆、繪は土佐行光筆と傳へられるが、その中第一卷は天保年間燒失したため、狩野晴川院の摸寫を以て補つてある。その餘の五卷は、摸寫樣式から見て東寺本と年代上大差ありとも思はれず、やゝ上つても鎌倉の末期を出でない。この外、土佐光顯筆と傳ふる殘缺本や、大和大藏寺の十卷本なども世に知られてゐるが、これ等多くの繪傳は、鎌倉末葉以降諸宗の祖師繪傳作製の機運蔚興に伴ふ所産であつて、早くも鎌倉末葉を出でず、その多くは足利期に入つて弘通せられたものである。〔田中（一）〕

弘法大師行狀繪傳（敎王護國寺藏）

校本萬葉集（かうほんまんえふしふ）　和歌　五帙二十五冊【編者】佐佐木信綱・橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潛一【刊行】大正十三年。次いで昭和七年普及版刊行。

【內容】萬葉集二十卷の校本を本文とし、別に首卷二冊、諸本輯影二冊、附卷一冊を添ふ。普及版は全部を九冊に合綴し、第九冊には諸本輯影の外に增補を附す。首卷には、諸本解說、諸本系統の研究、註釋書の研究、研究史等の論文を收め、附卷には、古寫本及び古筆切の研究、及び索引を附載してゐる。校本は寛永版本を底本とし、平安朝時代の古寫本五種を初め、諸種の信憑すべき古寫本及び活字無訓本附訓本、「類聚古集」「古葉略類聚鈔」等を以て嚴密に文字・體裁・訓等の差異を校合したものである。その體裁は、寛永版本の本文を寫眞凸版として出し、次に〔本文〕として右の諸本と底本との文字の差異を註し、次に〔訓〕として右の諸本に見える訓を記し、次に〔諸說〕として、「仙覺抄」及び江戸時代の註釋書に見える文字の變改・脫漏等に關し、又新しく附した訓の參考となるものに就き諸說を揭げた。上欄には、訓の有無、書入、諸本の體裁等に關し、本文を補ふ必要のある諸點を註し、欄外には寛永本の丁附、歌の番號、校合した諸本の名を記した。【價値】十數年間の協力の結果に成つたもので、祕閣王府を初め、諸家の貴重書が網羅せられてゐるから、本書の使用は、同時に數十種の古寫本・註釋書を一覽すると同樣の價値がある。「萬葉集」の對校本として最も完全した書であり、古典の本文批評の方法及び成果に關し、我が國で最初の業績を示したものである。今後の「萬葉集」の研究は、本書を土臺とした上でなさるべきである。但し訂正すべき箇所も存し、又使用すべき新材料も今後發見せられることがあらうから、修補訂正を加ふべきものであらう。〔佐佐木〕

高慢齋行脚日記（かうまんさいあんぎやにつき）　草雙紙　黃表紙　三冊　十五丁二十圖（名作二十三部の一）【作者】鱗川春町【畫工】自畫【刊行】安永五年、板元鱗形屋。再版、寛政六年、板元蔦屋。【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙集（近代日本文學大系）に本文のみ收載。【梗概】〔上冊〕（1）諸藝に達した高慢齋の慢心に乘じて魔道に引き込まうとする天狗が、その書齋を窺つてゐる。（2）俳諧修行のため旅に出た高慢齋、天狗に襲はれたが經文を唱へて纒に難を遁れる。天狗共は更に高慢齋の高弟法外の皮肉に分け入る相談をする。（3）天狗に魅入られた法外、門人を集めて俳諧月頭金を借りる。〔下冊〕（14）門人の中、三人の番頭手代は使ひ込みのため、主家から放逐される。（15）座頭金を返さぬため、奉行所に訴へられた武士ども御叱りをうける。（16）武士ども所拂となる。（17）世間の評判惡しく山伏となつた法外、高慢齋に出會うて詫びる。（18）高慢齋、元の門人が駕籠舁となり、追剝となつてゐるのに會ひ意見して連れ歸る。（19）歸宅した高慢齋、四書五經の煎じ汁を法外等に飲ませる。天狗姿を現はして立ち去る。（20）最明寺殿、門人等を本心に復させた高慢齋の才智を賞して、鎌倉花の本の宗匠を仰せつける。二人の中一人を討取つて、都への土產にしようと、餅搗の日にその館に紛れ入つたが、鳥の海彌平左衞門に看破されたので、杵でその頭を打碎いて退去する。然るに相州小田原に彌平左衞門の弟千尋之助が弓師となつてゐたが、權五郎を兄の仇としてその左眼を射る、權五郎は取つて押へたが、千尋之助の妻の哀願によつて助け、戰場で再會を約する。千尋之助夫婦が茶筌賣となつて、奥州への道行。〔三段〕八幡太郎義家は、高名大福帳の旗を押立てて貞任・宗任の城を圍む。鳥の海千尋之助は出でて一戰に及び、直に權五郎に降り、ま人形辰松八郎兵衞とある。〔黑木〕

合目的性（がふもくてきせい）　藝術論〔獨〕Zweckmässigkeit【解說】特殊的な自然對象が一般的目的に一致する性質。もと、カントが悟性の先驗的原理として、合法性（Gesetzmässigkeit）を認め、理性の先驗的原理として究竟目的（Endzweck）を認めたことに對して、判斷力の先驗的原理として認めた性質である。カントによれば、「或る事物が目的によつてのみ可能となるその性質に一致する時、これをその形式の合目的性といふ」。然るに「判斷力とは、多樣の統一の根據を自身のうちにもつ

したので、唐の使劉德高は「皇子の風骨尋常にあらず。世間の人に似ず」と稱し奉つた。後に、百濟の學士、沙宅紹明・答本春初・吉太尙・許率母・木素貴子等を師友として學ばれ、文藻は日々に進み、筆を下せば章と成り、言を發すれば理にかなひ、時の人々はその明達に驚嘆した。嘗て皇子の頃、次の如き夢を見給うた。中天洞開して、朱衣の老翁が日を捧げて天皇に授け奉つた。偶々人が腋下から來てその日を奪ひ去つた。覺めて後、驚いて藤原鎌足に語らせ給ふと、鎌足は嘆息して、「聖朝萬歲の後、恐らく巨猾の間を窺ふ者あらんの

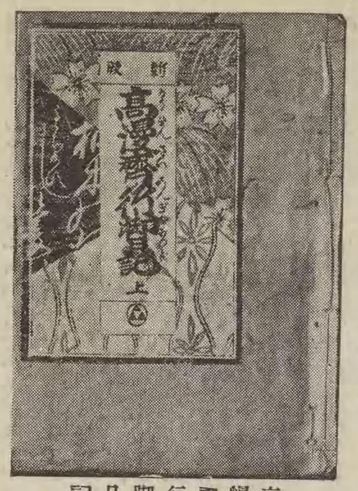
から見ても、南北朝頃の製作と見て差支へあるまい。幕末に東寺十輪院一音が版本として流布した「弘法大師行狀記」は、卽ちこの繪卷を摸刻したものである。高野地藏院の六卷本は、一般に「高野大師行狀圖繪」とも云はれ、詞書は近衞道嗣公筆、繪は土佐行光筆と傳へられるが、その中第一卷は天保年間燒失したため、狩野晴川院の摸寫を以て補つてある。その餘の五卷は、摸寫樣式から見て東寺本と年代上大差ありとも思はれず、やゝ上つても鎌倉の末期を出でない。この外、土佐光顯筆と傳ふる殘缺本や、大和大藏寺の十卷本など

ず、その多くは足利期に入つて弘通せられたものである。〔田中(一)〕

校本萬葉集（かうほんまんえふしふ）　和歌　五帙二十五冊【編者】佐佐木信綱・橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潛一【刊行】大正十三年。次いで昭和七年普及版刊行。

紙　黃表紙　三冊　十五丁二十圖（名作二十三部の一）【作者】戀川春町【畫工】自畫【刊行】安永五年、板元鱗形屋。再版、寛政六年、板元蔦屋。【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙集（近代日本文學大系）に本文のみ收載。

【梗概】〔上册〕（1）諸藝に達した高慢齋の慢心に乘じて魔道に引き込まうとする天狗が、その書齋を窺つてゐる。（2）俳諧修行のため旅に出た高慢齋、天狗に襲はれたが經文を唱へて難を遁れる。天狗共は更に高慢齋の高弟法外の皮肉に分け入る相談をする。（3）天狗に魅入られた法外、門人を集めて俳諧月並の定會を催してゐる、風儀甚だ惡い。（4）



高慢齋行脚日記

法外、門人等の風俗を當世風に仕立直す。（5）同じく高慢のために天狗に魅入られた茶の宗匠村田自休、頻りに門人から金をせしめてゐる。（6）自休、法外と協力して茶杓と書の贋物を作つてゐる。（7）二人、門人等に贋物を賣りつける。〔中册〕（8）自休・法外席料を目當ての生花會を催す。（9）同じ生花の會場、自休等の勸めに乘つた門人等、花よりも花器に贅を盡くす。（10）花に飽いた門人等蹴鞠に耽り、裝束に贅を盡くす。（11）門人等音曲に凝る。（12）門人等廓通ひに浮身を窶す。（13）門人のうち、武士と醫者は遊興の金に困じ、座

こうみよ　こうやひ

頭金を借りる。〔下册〕（14）門人の中、三人の番頭手代は使ひ込みのため、主家から放逐される。（15）座頭金を返さぬため、奉行所に訴へられた武士ども御叱りをうける。（16）武士ども所拂となる。（17）世間の評判惡しく山伏となつた法外、高慢齋に出會うて詫びる。（18）高慢齋、元の門人が駕籠舁となり、追剝となつてゐるのに會ひ意見して連れ歸る。（19）歸宅した高慢齋、四書五經の煎じ汁を法外等に飲ませる。天狗姿を現はして立ち去る。（20）最明寺殿、門人等を本心に復させた高慢齋の才智を賞して、鎌倉花の本の宗匠を仰せつける。

【構想】「高慢齋行脚日記」の名稱は、最明寺入道の廻國行脚に附會したものであるが、それは、時代を鎌倉時代に藉りるための手段に過ぎない。作意は素より當時の武士町人が益なき遊藝に耽り、又遊藝の師匠たちが貪慾飽くなき事を諷刺するにあつた。鎌倉時代の陰に當世を諷刺するのは、戲作、殊に黃表紙に於て最も多く見られるのであるが、この作は穿ちの細さと共に、趣向の早いものとして注意すべきである。〔山口〕

高名大福帳（かうみやうだいふくちやう）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】錦文流【刊行】現存の繪入細字本の挿畫の旗に「元祿十七年正月吉日」と刻す。刊年を示すものと見られよう。竹本筑後掾正本【題材】前九年の役を主材として、これに正月十九日の男山八幡宮の厄神參りの緣起を配してある。

【梗概】〔初段〕新羅三郎は安倍貞任の養子となつてゐたが、貞任・宗任が天下を狙ふ不逞を忌み、折柄父の勘氣を受けて流されて來た鎌倉權五郎景政の助力で、緣を切つて歸京する事となる。〔二段〕權五郎は更に貞任・宗任二人の中一人を討取つて、都への土產にしようと、餅搗の日にその館に紛れ入つたが、鳥の海彌平左衞門に看破されたので、杵でその頭を打碎いて退去する。然るに相州小田原に彌平左衞門の弟千尋之助が弓師となつてゐたが、權五郎を兄の仇としてその左眼を射る、權五郎は取つて押へたが、千尋之助の妻の哀願によつて助け、戰場で再會を約する。千尋之助夫婦が茶筌賣となつて、奧州への道行。〔三段〕八幡太郎義家は、高名大福帳の旗を押立てて貞任・宗任の城を圍む。鳥の海千尋之助は出でて一戰に及び、直に權五郎に降り、宗任は奮戰して權五郎に斬られ、貞任は激戰後、城內にて自害と見せて巧に手勢を引率して落ち行く。〔四段〕かくて貞任は義家の凱旋に先立ちて河內の國に到り、謀計を以て源氏の本城に忍び入り、火を放つて內外呼應して攻めたので、病中の賴義は部下と共に城を逃れる。〔五段〕男山の八幡大菩薩の神力で賴義は病氣平癒し、さしもの貞任も滅され、折から義家は凱旋する。時に正月十九日、これが男山厄神參りの日の起りとなるといふに終る。

【構想】荒唐無稽の脚色である上に、大團圓に於て八幡大菩薩の本地は、西方阿彌陀佛であると告げて奇瑞を示して神體を消すなど、すべて古淨瑠璃式の作柄で、その中へ鎌倉權五郎の金平式の荒事を盛つたもので、同年代の近松の作などと比較して遙かに劣つてゐる。

【附記】未覆刻の淨瑠璃本で、「外題年鑑」にも載つてゐない。現存の正本として大阪高麗橋一丁目正本屋九兵衞板の繪入細字本がある。その題簽脇の色紙方簽に、竹本筑後掾、ワキ竹本賴母、同喜內、上るり作者錦文流、手づま人形辰松八郎兵衞とある。

合目的性（がふもくてきせい）　藝術論〔獨〕Zweckmässigkeit【解說】特殊的な自然對象が一般的目的に一致する性質。もと、カントが悟性の先驗的原理として、合法性（Gesetzmässigkeit）を認め、理性の先驗的原理として究竟目的（Endzweck）を認めたことに對して、判斷力の先驗的原理として認めた性質である。カントによれば、「或る事物が目的によつてのみ可能となるその性質に一致する時、これをその形式の合目的性といふ」。然るに「判斷力とは、多樣の統一の根據を自身のうちにもつ超感官的先驗的原理の下に、自然の經驗的多樣性を統一する能力に外ならぬから、判斷力の原理の中に於ける自然の合目的性であるといふことができる」といはれる。（美的判斷力・美的自律性參照）〔黑木〕

高野版（かうやばん）「刊本」を見よ。

高野聖（かうやひじり）　小說【作者】泉鏡花【發表】明治三十三年二月「新小說」【刊行】同四十一年左久良書房。鏡花全集第四卷・現代日本文學全集（泉鏡花集）所收。

【梗概】北陸敦賀の旅宿で、高野の旅僧からむかしの行脚物語を聞く形式で書かれてゐる。僧は若かりし日、飛驒から信州へ越える深山の間道で、自分に惡口雜言を殘して行つた富山の藥賣が、路を誤つたのを救はうとして後を追つてゆく中に、自分自身が踏み迷ひ、蛇や山蛭に襲はれたりして散々に難澁し、漸く夕暮に一軒の山家に辿りつき宿を請ふと、白痴の男と共に住む美女が快く請じてくれる。汗を流さうとして月夜の谷川に行けば、女も來て媚態を示す。奇しき因緣の絡まる美女は神通自在、男を誘つては鳥獸に變化させてし

結果に成つたもので、祕閣玉府を初め諸家の貴重書が網羅せられてゐるから、本書の使用は、同時に數十種の古寫本・註釋書を一覽すると同樣の價値がある。「萬葉集」の對校本として最も完全した書であり、古典の本文批評の方法及び成果に關し、我が國で最初の業績を示したものである。今後の「萬葉集」の研究は、本書を土臺とした上でなさるべきである。但し訂正すべき箇所も存し、又使用すべき新材料も今後發見せられることがあらうから、修補訂正を加ふべきものであらう。〔佐佐木〕

高慢齋行脚日記（かうまんさいあんぎやにつき）　草雙

まふのである。藥賣は蘆毛の馬となり、女の下僕の老爺に引かれて町へ賣られてゆく。僧は女の誘惑を危く堪へて、明くる朝旅立つたものの、途中まで來ると忘れ兼ねて、いつそ引返さうかと思案に迷ふ。折柄、町から歸る老爺に出會ひ、一切の過去を物語られる。彼は慄然として迷ひが覺め、老爺の後姿を伏し拜み、杖を抱へて一散に里へ駈け下りた。

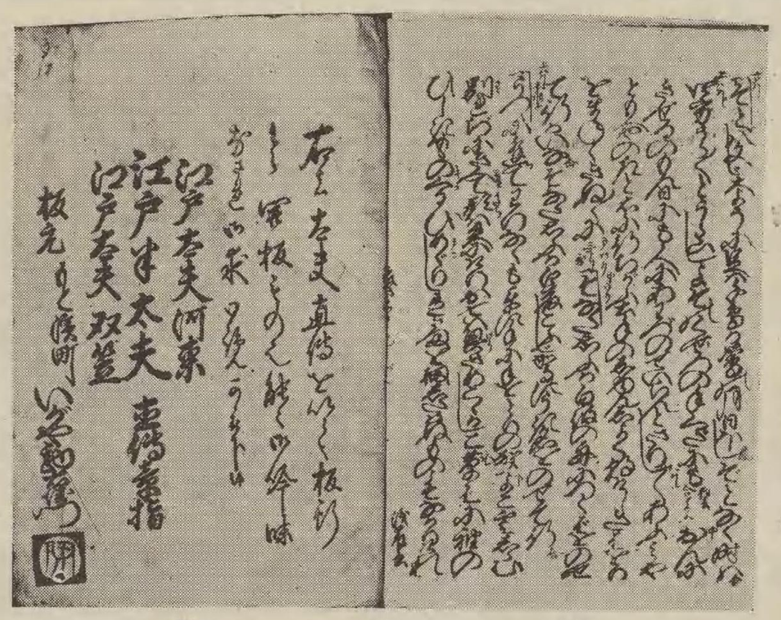
【解説】作者本來の浪漫趣味が、神祕主義的傾向を持つてゐたことは、比較的初期の作品「妙の宮」「蓑谷」「龍潭譚」にも見られる。「高野聖」は、作者の旺盛な活躍期に成つたこの方面の代表的な作品の一つである。超自然の神祕境に想を寄せ、自由奔放なる幻想の中に深刻なる唯美世界を現出した。就中、凄艶なる美女にグロテスクな不具者を配した不思議に陰慘な情景は、この作者の特徴の一つに數へられる殘酷美の惱ましい詩境を展開した。この神祕主義は、後年、當然象徴主義にまで進展すべきであつたが、それと融和しない作者の現實主義的趣味が反撥して、結局神祕境に行き切れず怪談的傾向に轉向してしまつた。

【附記】本作は、岩崎蕊花が脚色して、明治三十七年九月、東京本郷座で上演された。序幕「谷川」、二幕「孤屋」、三幕「同じく裏手」の三幕三場で、主な役割は、宗朝(藤澤淺二郎)、おつや(河合武雄)、癈人次太郎(佐藤歳三)、山かつ番作(高田實)等であつた。〔水上・平松〕

高野物狂（かうやものぐるひ）　「男物狂の謠曲」を見よ。

紅葉集（こうえふしふ）　河東節寄せ本　半紙本一册【刊行】刊年不詳【解説】詳しくは「にほ鳥紅葉集」といひ、河東節の稽古本七十二種を結集したもので、版式は六行、七行、八行、九行、十行とまちゞで、目錄は

ほうらい
四季のほうらい
まつのうち
式三獻神樂獅子
はん女扇八景
狂女あらしよたい
水上蝶のはつがひ
紋づくし
つぼさのかご蒲團
ふもんづくし
京みやけ扇子うり
やわらぎそが
天わう忍び
助六後日心中道行
黑小袖淺黃帷子道行△38
なるかみの道行
助成相撲物語
袖わか葉
草花づくし
牛の時參りかなわ
念力三つのかなわ△44
うてなのまへみち行
江口の道行
けんぶく五郎
かみすき曾我
けいせいうけ狀
吉原八景
小袖もやうのだん
そでかゞみ
ほうか僧の道行
ほうか僧かつこのだん
おんせんぞろへ
しらたまの道行
きよつら道行
袖とめ女かみゆひ
丹前里神樂
京わらんべ
公家
五人そがの道行
きぬた
そでとめそが
たもとのまへ道行
てうちんもんづくし
柱ごよみの道行
春の空
花がたみ(竹婦人)
ひとせがは
ゆきま(抱山宇述)
みつの旦
櫻づくし
道中すご六
かたみ曾我
せいしそが
はつねむこ
咲わけあいのやま
だての姫道行
かいづくし
大和之助道行
きやらんくさまくら
炙すへ岩ほの疊夜着
すみだ川舟の内上下
まつよひ
かぶろ万ざい
うかぶせ(竹婦人述)△71酒中花



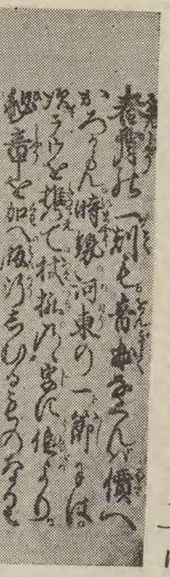
本書が「紅葉集」の名を以て合綴發行された年代は不明であるが、その内容に於て「幸葉集」と大差なきところより觀れば、この兩書は接近した時期のものであらう。△印をつけた十一種だけが「幸葉集」にない分である。文句にも稀に小異がある。たとへば卷首の「ほうらい」は鴉鳥、幸葉集、東花集等、諸本みな「龜は四靈の一つにて」とあるを、「龜は四靈のはじめにて」とし、「めでたしともなか〳〵何にたとへんかたもなし」を「めでたしとも中々あをがぬ物こそなかりけり」とする如きである。〔藤井〕（幸葉集參照）

幸葉集（かうえふしふ）　河東節寄せ本　半紙本一册【刊行】刊年不詳、湯島天神女坂下、小松屋傳七良板【解説】河東節の正本八十一種を表紙を除きて綴り合せたもので、新たに版を起したものではない。卷首に左の目錄一葉がある。

鴉鳥後撰幸葉集大全　目錄

ほうらい
四季のまひ(四季の性うらい)
式三ごんかぐらじゃ
同しのびのだん
ゆきま
ゑのしま
おび引男むすび
同　下
なゝ草
京わらんべ
水あけてふのはづかひ
まつよい
かぶろ万ざい
狂女草まくら(狂亂草枕)
すみだ川舟の内
同渡しもりの段
はうか僧
同かつこのだん
きぬた
くけおどり(公家)
けいせい謠狀
おんせんぞろへ
清見八けい
あふぎうり
袖とめそが
ありま筆
大和介道行
おせん道行
柱ごよみ道行
江口の道行
はうか僧道行
あふぎ八景
ともへ山ぶき道行
うてなの前道行
たもとの前道行
清つら道行
露の前道行
あけぼの道行
だて姫道行
狂女あらしよたい
ひなの出づかひ
小袖もやうの段
酒中花
水てうし
てうちんもんづくし
道中すご六
十良かみすき
五良けんぶく

板元小松屋の署名があり、奥付に「頃日世上にるい板多相みへ申候、河東直傳の正本は小松屋ならで外に無御座候、能々御吟味被成御求可被下候」と宣傳して居り、「紅葉集」の板元は同じく湯島女坂下の相模屋であつて、これには正本の末に河東の印はない。思ふに小松屋と相模屋とは近所にあつて互に競爭して正本



事物を列擧した隨筆で、歷史的及び地理的考説が多い。名勝・舊跡・城地・溫泉・神社・佛閣・産物、武田氏・織田氏・豐臣氏・德川氏以下諸侯・諸領主の判物類、名家來歷等一切を含む。乾卷二册に、甲斐國名馬井猿橋之事、谷村之城跡之事、郡内領之事以下三十五條、坤卷二册に、國母地藏胸裂明神之事、奈良田村孝謙天皇皇居舊跡、十善村新羅三郎義光舊跡以下六十五條を收めてゐる。〔和田〕

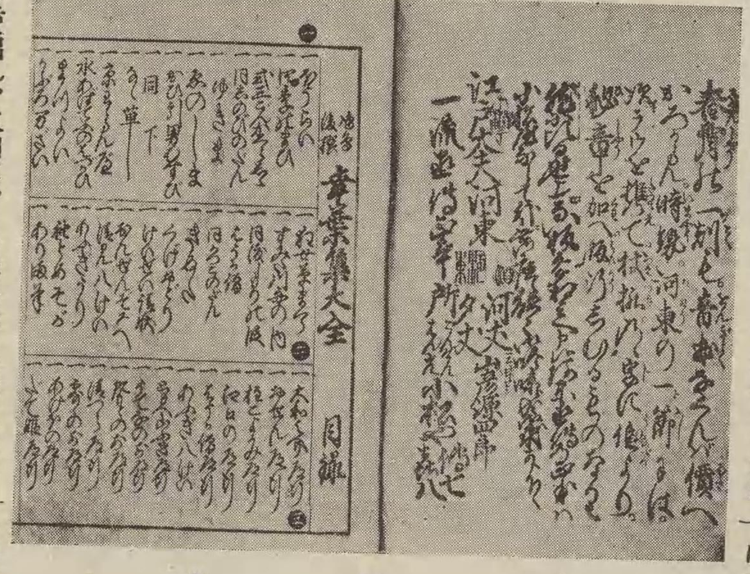
黃葉夕陽村舍詩（くわうえふせきやうそんしや）　詩集八卷　附錄二卷五册【作者】菅茶山【名稱】黃葉夕陽村舍はその者自身の不注意からと思はれる歌一首が脫したものや、詞句の相違などがある。更に帝國圖書館所藏の「土佐國群書類從」には、本書を上下二卷に分つて收めたが、誤脫が一層多くなつてゐる。近世文藝叢書第十一及び日本歌謠集成卷七には、この「土佐國群書類從本」によつて收載せられてゐる。【内容】土佐國の俚謠を集めたもので、初めに總論として歌謠の歷史を略述した後に、天保六年六月二十二日の日付が見える。本文は土佐國の諸郡に亙つて、祭禮歌・田植歌・盆踊歌・茶摘歌等を集錄した。編者自身の不注意からと思はれる歌一首が脫

はつねむこ　23　すまふもの語　40
しかたまつ　15　そでかゞみ　52
みつのあさ　18　竹馬のむち　○
櫻づくし　19　袖とめそが道行　○
かたみをくり（曾我）　21　とらかみゆひ　58
なるかみ道行　39　ゑざうしうり　○
まつの内　3　參會和そが少將道行　10
まつのゝち　○　しのだ道行　○
小もんづくし　33　花がたみ　69
やわらぎそが　35　もんづくしかごぶとん　8
介六後日道行　37　炙すへ岩ほのたゝみよぎ　29
かいづくし　26　ひとせ川　70
かなわ　43　さとかぐら　59
ひとへおび　14　あいの山　24
草づくし（草花づくし）　42　いなりまいり　○
かさゝぎのかし小そで　11　跡より段々出し申候　河東一流正本屋　ゆ島女坂　板元　小松屋
そでわかは　41
めいけんのまき　○

右の内、作者の署名あるものは、

ゆきま　抱山宇述　かぶろ万ざい竹婦人述
ゑのしま　作者竹婦人　ありま筆　作者竹婦人
なゝ草　東花坊述　花がたみ　竹婦人

板行年月を記せるは「式三獻神樂獅子忍びの段」の末に「享保七年壬寅孟春吉辰　板元小松屋兒松」とあるのみである。版式は六行、七行、八行、九行、十行、十一行と區々であるが、紙數は二枚を普通とし、稀に一枚又は三枚のものがある。合綴發行の年代は不明であるが多分享保の末か元文頃であらう。【解説】本書と「紅葉集」（別項）とは書名も同音であり、内容も順序こそちがへ、大部分同一である。（曲名の下の數字は「紅葉集」の番號で、○印は「紅葉集」の方になきもの）發行年代の前後は決定しにくいが、極めて接近した時期に出たと考へられる理由は、本書の版元は湯島女坂下小松屋であつて、各正本の末に、河東の印と板元小松屋の署名があり、奥付に「頃日世上にるい板多相みへ申候、河東直傳の正本は小松屋ならで外に無御座候、能々御吟味被成御求可被下候」と宣傳して居り、「紅葉集」の板元は同じく湯島女坂下の相模屋であつて、これには正本の末に河東の印はない。思ふに小松屋と相模屋とは近所にあつて互に競爭して正本を賣出し、又同じやうな寄せ本を發行したのでなからうか。竹婦人作の「うかぶせ」は本書になくして「紅葉集」の方に出てゐる。これは享保十五年の作であるから、この點からだけでいへば「紅葉集」の方が後出のやうに考へられるが、他に年代の不明なものもあるから、一概に決定しがたい。（紅葉集參照）　〔藤井〕



幸葉集

甲陽隨筆（かふやうずるひつ）　隨筆　二卷四册　寫

【著者】未詳　【解説】甲斐一國に係る百般の事物を列擧した隨筆で、歴史的及び地理的考説が多い。名勝・舊跡・城地・溫泉・神社・佛閣・産物、武田氏・織田氏・豐臣氏・德川氏以下諸侯・諸領主の判物類、名家來歴等一切を含む。乾卷二册に、甲斐國名馬并猿橋之事、谷村之城跡之事、郡内領之事以下三十五條、坤卷二册に、國母地藏胸裂明神之事、奈良田村孝謙天皇皇居舊跡、十善村新羅三郎義光舊跡以下六十五條を收めてゐる。　〔和田〕

黄葉夕陽村舍詩（くわうえふせきやうそんし）　詩集八卷　附錄二卷五册　【作者】菅茶山　【名稱】黄葉夕陽村舍はその塾名　【刊行】弘化四年　【解説】荻生徂徠や服部南郭が支那人の口眞似をして、空疎な白雲明月關山萬里などの文字を振舞はしてゐたのに對し、菅茶山は實際に即した活きた詩を作らうと志した。本書を讀む者は、茶山が如何にその詩に於て、名もなき凡山凡水を詠じ、目に睹るが如くに實寫してゐるかを知るであらう。賴山陽が努めて日本的詩を作らうと志したのも、茶山の風を學んだものであらう。　〔佐久〕

巷謡篇（かうえうへん）　俚謡集　一卷　【編者】鹿持雅澄　【成立】天保六年　【諸本】宮内省圖書寮に、「巷謡集」と題して、安藝郡土佐踊（一名山踊）四十八番だけを聞書した原稿がある。次いでこれ等の材料を整理して總論をも附し、一卷の書となして「巷謡篇」と名付けた自筆稿本も圖書寮に藏せられてをり、その奥には、天保十三年四月五日書き起して同十二日に淸書の成つた旨が記してある。この稿本をその材料なる「巷謡集」と參照すると、編者自身の不注意からと思はれる歌一首が脱したものや、詞句の相違などがある。更に帝國圖書館所藏の「土佐國群書類從」には、本書を上下二卷に分つて收めたが、誤脱が一層多くなつてゐる。近世文藝叢書第十一及び日本歌謡集成卷七には、この「土佐國群書類從本」によつて收載せられてゐる。【内容】土佐國の俚謡を集めたもので、初めに總論として歌謡の歴史を略述した後に、天保六年六月二十二日の日付が見える。本文は土佐國の諸郡に亙つて、祭禮歌・田植歌・盆踊歌・茶摘歌等を集錄した。編者自ら諸所に出張して書きとめた聞書や、南部嚴男・光神政直等の筆錄、その他の人々の報告等を參集して一篇となしたものである。採集の年月には、文政二年四月八日、天保三年秋などと見えてゐる。中に盆踊の彩色圖を一葉挿入してある。歌詞には古雅なものがあり、室町時代に遡ると思はれる歌や、その他德川初期の小歌として、他の諸書に散見する歌も見えてゐる。踊や囃子の風俗の註せられてゐるのも便利である。【價値】總論は、歌謡史としては甚だ簡單であるが、最も纒まつた小論文として、この種の研究の全然閑却せられてゐた當時、これだけのものを書いたのは讃嘆に價する。俚謡の集成に至つては、萬葉學者としての雅澄が、さすがに「萬葉集」の味をこの方面に移して、その先鞭をつけた點に於て、他の萬葉學者よりもすぐれた認識を持つてゐたことを思はせる。　〔藤田〕

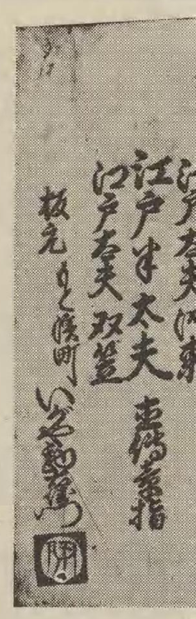
黄葉和歌集（くわうえふわかしふ）　歌集　十卷六册

【著者】烏丸光廣　【別名】烏丸光廣卿家集　【名稱】寛文版・元祿版に、題簽を「黄葉和歌集」とし、表紙には「烏丸光廣卿家集」となつたものが多い。黄葉の出典は、佛語の黄葉止涕

【附記】本作は、岩崎蕊花が脚色して、明治三十七年九月、東京本郷座で上演された。序幕「谷川」、二幕「孤屋」、三幕「同じく裏手」の三幕三場で、主な役割は、宗朝（藤澤淺二郎）、おつや（河合武雄）、癈人次太郎（佐藤蔵三）、山かつ番作（高田實）等であつた。　〔水上・平松〕

高野物狂（かうやものぐるひ）　「男物狂の謡曲」を見よ。

紅葉集（こうえふしふ）　河東節寄せ本　半紙本一册　【刊行】刊年不詳　【解説】詳しくは「にほ鳥紅葉集」といひ、河東節の稽古本七十二種を結集したもので、版式は六行、七行、八行、九行、十行とまち〳〵で、目錄は



ゆきま（抱山宇述）
みつの旦
櫻づくし
道中すご六
かたみ曾我
せいしそが
はつねむこ
除わけあいのやま　24
だての姫道行　17
かいづくし　18
大和之助道行　19
きやうらんくさまくら　20
炙すへ岩ほの疊夜着　21
すみだ川舟の内上下　△22
まつよひ　23
かぶろ万ざい　31
たもとのまへ道行　65
てうちんもんづくし　66
柱ごよみの道行　67
春の空　68
花がたみ（竹婦人）　△69
ひとせがは　70
うかぶせ（竹婦人述）△71　酒中花　72
水あけてふのはづかひ　7
まつよい　31
かぶろ万ざい　32
狂女草まくら（狂亂草枕）　28
すみだ川舟の内　30
同渡しもりの段　30
はうか僧　○
同かつこのだん　54
きぬた　63
くけおどり（公家）　61
けいせい謡狀　49
おんせんぞろへ　55
清見八けい　○
あふぎうり　34
清つら道行　57
露の前道行　○
あけぼの道行　○
だて姫道行　25
狂女あらしよたい　6
ひなの出づかひ　○
小袖もやうの段　51
酒中花　72
水てうし　○
てうちんもんづくし　66
道中すご六　20
十良かみすき　48
五良けんぶく　47
たもとの前道行　65

にあるかといふ。【刊行】元祿十二年(但し寛文九年の初版本、寛保三年の三版本もあり)。【諸本】内閣文庫・東京帝大圖書館等に藏す。【解説・作風】本集は光廣の死後、その孫資慶が整理し、跋を加へて刊行したものである。第一册は寛永十四年の院御着到百首、第二册は部立歌春・夏、第三册は部立歌秋・冬、第四册は部立歌戀・旅、第五册は部立歌祝・神祇・釋教、第六册は雜に分たれる。光廣は細川幽齋の學統を承けた直系者で、その古今傳授をも繼承した。大臣の家に生れ、德川の初期には權大納言まで累進した人なので、その歌も多分に堂上風はあるが、夙に禪學を修め、超世的精神を養つてゐたために一種淸高の趣を得て、調子の引きしまつたものが多い。本集を讀み味へば、容易にこの點を看取することが出來る。なほ本集に題詠の尠いのは當時として珍しいところではあるが、掛詞的技巧を弄せる歌は集中に少からず見える。左に本集の代表的と稱すべきものを擧げよう。

あけぼのの雲もたつなり旅衣すそのの水にかげをひたして

白たへの月の桂の種とりて卯の花垣は植ゑしとぞ見る

庭に吹く春かぜたゆめ靑柳の葉におく露の玉ゆらもみむ

〔齋藤(淸)〕

講餘雜談(かうよざつだん)　隨筆　一卷　寫【著者】中野兼惟(肥前國舊逗池藩士)【解説】文武兩道を講習する靑年者流の心得になるべき事どもを擧げ、多く古事を引いて諒解し易からしめてゐる。渡邊源藏慮外者切殺事より鈴木大學指物之事に至る六十五則の小話を收めてある。敍跋はない。〔和田〕

功利主義(こうりしゆぎ)〔英〕The Principle of Utility or Utilitarianism【語義】一般的には、或る種の有用(Utility)、又は快樂(Pleasure)を、個人又は社會に與へることを行爲の目的及び規準とする倫理觀である。この倫理觀が特殊化されると、自由放任主義の經濟論ともなれば、民本主義の政治論ともなる。この理論は十八・九世紀を通じて、英國のヒューム、ベンサム及びJ・S・ミルによつて體系化されたものである。ヒュームに於ては、有用又は快樂を單に個人に與へることを以て行爲の目的及び規準と考へられたが、ベンサムは最大多數者に最大幸福を與へることを、道德的善と見る謂はゆる最大多數の最大幸福の原理を發展させ、ミルに至ると、人類全體の幸福を道德的正義の目的及び規準とするに至つた。こゝには既に人道主義の色彩が窺へる。なほユーティリタリアニズムなる語は、ミルによつて作られたものである。

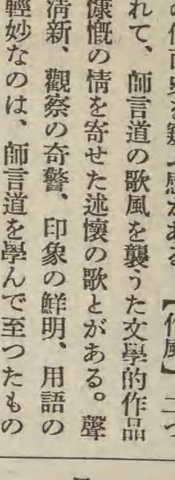
【功利主義の藝術觀】功利主義は藝術の領土へ移されると、功利のための藝術、又は人生のための藝術(Art for life's sake)といふ理論又は主張となる。功利主義の一般論では、有用と快樂とは同性質のものと考へられ、馬の足は走る役をするから美しく、眼はものを見るといふ役目を果すから美しいと解釋されてゐるが、藝術の世界では、有用と快樂乃至美とは甚だ仲が惡い。そこで何時でも藝術は有用のために存在せねばならぬとか、いや美のために存在すべきだといふ議論が絶えないのである。前者が卽ち功利のための藝術論、後者が藝術至上主義(別項)の論である。この功利主義の藝術觀を代表する者はトルストイである。彼はその著「藝術とは何ぞや」の中で、現代の目標・傾向となつてゐる最も普遍的な感情、卽ち四海同胞乃至は一視同仁といふキリスト教的感情を傳へる藝術こそ最も普遍的であり、それ故に最も勝れた藝術であると說いてゐる。この藝術によつて彼は人々を互に握手させ、人類を幸福に導かうと考へたのである。この點、明かに彼は功利主義の觀點に立つてゐる。彼を宗教的立場に居るものとすれば、マックス・ノルダウの如きは社會學的の立場に立つて、藝術に於ける功利主義を主張してゐる代表者である(彼の論文「藝術の社會的使命」に詳しい)。廣くいへば自然主義の主張にも、又は最近のプロレタリア文學の理論にも、この功利主義が働いてゐる。藝術の理論又は主張としては藝術のための藝術論が偏頗であると同樣に、これもまた決して完全無缺な說ではない。〔宮島〕

江吏部集(かうりはうしふ)　詩集　三卷【著者】大江匡衡【名稱】江は大江、吏部は式部省の唐名で著者が式部大輔であつたが故にかく名づけられた。「本朝書籍目錄」詩家の部には、「江匡衡集二卷」とある。同じものであらう。【成立】集中の詩を檢するに、寛弘七年八月十五夜、湯藥を事として近江にゐた時の作があるから、寛弘七八年の頃に成立したものか。而も同九年卽ち長和元年に卒したのであるから、その以前に自ら類聚したものと思ふ。【諸本】類從本は三卷上下二册、內閣文庫には寫本二部を藏し、一は慶長寫本(下卷缺)である。外に神宮文庫本(貞享元年寫三卷)、彰考館本(寫一卷)、東京帝大圖書館本(舊南葵文庫本、寫一卷)等がある。群書類從一三二所收【內容】部立は天・四時・地・居處(以上上卷)、神道・釋教・帝道・人倫・文・飲食・火(以上中卷)、木・草・鳥(以上下卷)の十四部に分ち、それ〴〵の中、更に細分してゐる。【批評】その詩を見るに平安初期の如き文辭宏富にして活氣ある作はなく、何れも强弩の末、俗氣が多い。匡衡の詩の內容は、主として累世儒業の偉功を述べ、自ら兩朝に侍讀として勞した事を自ら矜恃するの意が多い。その點で詩趣に缺ける憾が少くない。又詩の體を見るに駢驪の彫琢が多いが、生氣は無く、その詞概ね平坦で想亦俗である。集の中卷に、白樂天と江家の事を記して、

近日、蒙二綸命一、點二文集七十卷一、夫江家之爲二江家一、白樂天之恩也。故何者、延喜聖代、千古維時父子共爲二文集之侍讀一、天祿御宇齊光定基父子共爲二文集侍讀一、爰宣今、盛興二延喜天曆之故事一、匡衡獨爲二文集之侍讀一云云。

と見える。故にその詩に白氏の風を學んだ事も推察に難くない。江村北海は「日本詩史」卷一に匡衡の詩を評して、「多稱二宮闈一……其作類失二粗豪一、且不レ免二俗習一、……無二疵瑕一者無幾」と言つた。その末句はやゝ酷評であらう。江戸時代の詩人から見れば、或はその言の如くであらうが、林恕の「本朝一人一首」卷五に「雖レ勞而不二富饒一」とある評が寧ろ當つてゐる。〔山岸〕

向陵集(かうりようしふ)　歌集　一卷【作者】野村望東尼【成立】文久三年【諸本】望東尼歌文集(佐佐木信綱・大久保高明共編)・近代名家歌選(校註和歌叢書)・明治初期諸家集(校註國歌大系)所收。【解説】文久三年十一月の、師大隈言道の序文がある。但し慶應三年に六十二歲で歿した著者の、六十の賀の歌などがあるから、晩年に至るまで、增補を忘らなかつたのである。長歌も入つてゐて、凡そ年代順に作品を並べてある。天保三年著者二十七歲からの歌がある。集中には、僧月照・谷梅之助(高杉晉作の變名)・平野國臣、七卿落の人々の中の三條實美卿などに寄せた歌もあつて、明治維新の側面史を窺ふ感がある。【作風】二つに分れて、師言道の歌風を襲うた文學的作品と、慷慨の情を寄せた述懷の歌とがある。聲調の淸新、觀察の奇警、印象の鮮明、用語の自由輕妙なのは、師言道を學んで至つたものである。技巧を弄せずに、力强い表現の中に眞情の人に迫るものがあるのは、その人格の現はれであつて、江戸時代第一流の女歌人といふべきである。左に作例を擧げる。



こうろぎ草子(こうろぎさうし)　御伽草子　一卷【名稱】正しくは「こほろぎ草子」で、主人役の蟲の名を取つて附したもの。【成立】室町末期か。【諸本】新編御伽草子下卷・日本文

手法を出したのである。光琳派は無論大きな存在であるが、その由つて來る所は宗達であつて、又光悅の影響をも受けてゐる。〔藤懸〕

勾勒法(こうろくはふ)　繪畫【解説】東洋畫法上の術語で、色彩を主とせず、筆墨で形象をくくり出して畫く手法をいふ。「芥子園畫傳」三集に「花卉を畫く法、類たる四あり。一は則ち鉤勒着色法にして、その法、徐熙より工となる。花を畫く者、多く色を以て暈して成せども熙獨り墨を落して、その枝葉蘂萼を寫し、然して後に色を傳け、骨格、風神ならび勝る

きがへる朝臣信行卿、夜明けぬうちに會を閉ぢようと言ひ出して、ゐもりに歌で嘲られ、立腹して返歌して論じ合ふのを、こほろぎが調停して各自別れて藪の中に歸つた。〔島津〕

詮信(あきのぶ)は松倉城陷落の後、剃髮して比叡山の光林房に住し、詮信(せんしん)と呼んでゐた。幸若丸は詮信の許に賴つて學問に勵んだが、天性音律の道に長じてゐたので、或る時「八島の軍」といふ草紙に曲節を附して吟唱した。山の學侶たちが、それに耳を傾けたので、旦暮これを朗吟するに至つて、後小松院の叡聞に達し、參內を命ぜられて一曲を奏し、なほ勅を奉じてその類の曲數帖を集めた。これが幸若舞曲の起原である(幸若系圖)。卽ち排悶動作として起つたものが、固定の藝となるに至つたのである。【沿革】當時草紙と呼ぶは、繪卷物又は

からの歌がある。集中には、僧月照・谷梅之助（高杉晋作の變名）・平野國臣、七卿落の人々の中の三條實美卿などに寄せた歌もあつて、明治維新の側面史を窺ふ感がある。【作風】二つに分れて、師言道の歌風を襲うた文學的作品と、慷慨の情を寄せた述懷の歌とがある。聲調の清新、觀察の奇警、印象の鮮明、用語の自由輕妙なのは、師言道を學んで至つたものである。技巧を弄せずに、力强い表現の中に眞情の人に迫るものがあるのは、その人格の現はれであつて、江戸時代第一流の女歌人といふべきである。左に作例を擧げる。

言道大人を我が歌の師とたのみし時
初（うぶ）によみたりし年の始の歌
ただ一夜我が戀しひまに大野なる三笠の山は霞こめたり

谷梅といふ人世を憚りてありけるに
冬深き雪のうちなる梅の花埋れながらも香やはかくるる

【參考】野村望東尼　佐佐木信綱／歌學論叢／○もとのしづく　三宅龍子　○野村望東尼と其周圍　久保猪之吉／國語と國文學昭和五ノ四）〔佐佐木〕

光琳派（くわうりんは）　繪畫【解說】光琳は、緒方惟義から出て、山本素程の門に入り、後江戸に赴き、狩野安信に師事し、また俵屋宗達の畫風に私淑し、遂に一家をなし、享保元年（一三七六）四月、五十六歳を以て歿した。この畫風を追ふ一派を光琳派といひ、光琳の弟乾山を初め、渡邊始興・立林何帛・酒井抱一・鈴木其一・池田孤村等はこの派に屬する。水墨濃淡の草畫もあり、濃彩華麗の純畫もあるが、草畫は彼の特色ではなくして、裝飾趣味の畫によく光琳の風丰を偲ばしめるものがある。要するに光琳は工藝家であつて、光琳一流の手法を出したのである。光琳派は無論大きな存在であるが、その由つて來る所は宗達であつて、又光悅の影響をも受けてゐる。〔藤懸〕

尾形光琳
- 酒井抱一
- 俵屋宗理
- 渡邊始興
- 立林何帛
- 鈴木蠣潤
- 鈴木其一
- 酒井鷺浦
- 池田孤村
- 中野其明
- 酒井道一
- 山本光一

こうろぎ草子（こうろぎさうし）　御伽草子　一卷【名稱】正しくは「こほろぎ草子」で、主人役の蟲の名を取つて附したもの。【成立】室町末期か。【諸本】新編御伽草子下卷・日本文學大系第十九卷所收。【題材】異類物、歌物語。內容は擬人諸蟲の詠歌會で、同じ異類の歌合物、即ち「蟲十五番歌合」「鳥十五番歌合」「十二類繪詞」（以上別項）の前半等と類種のもので、特に「蟲十五番歌合」の原形が本書かと考へられる。

【梗概】秋の末、草庵に獨り月を眺めてゐると、叢に數多の蟲が集まつて物語するのが聞える。こほろぎが進み出て皆々に向ひ「我々蟲の身の上ほど淺間しく果敢ないものはない。樂しい春も一時で、夏去り秋過ぎ、やがては露の命と消える。今宵の月影に各々三十一文字を連ねて思を述べ、亡き跡の形見ともしよう」と言ふと、蟲共は感動して、形は貧相で、風流心も無く夕暮から夜中まで、ただ悲しく啼き通す聲のみ聞いてゐたが、あはれに優しいこほろぎ殿の志と泪を流し、蝦蟇（ひきがへる）が夜も更けぬうち疾く疾くと促すに、落葉の上に座を構へて、こほろぎ・はたおり・鈴蟲を初め、芋蟲・蟋・やすで・蟬に至るまで、各々一首づつ三十五首を詠み出でた。此處に、蟲の歌仙を學んで判者となつたやうこうし中納言在原のひきがへる朝臣信行卿、夜明けぬうちに會を閉ぢようと言ひ出して、ゐもりに歌で嘲られ、立腹して返歌して論じ合ふのを、こほろぎが調停して各自別れて藪の中に歸つた。〔島津〕

勾勒法（こうろくはふ）　繪畫【解說】東洋畫法上の術語で、色彩を主とせず、筆墨で形象をくくり出して畫く手法をいふ。「芥子園畫傳」三集に「花卉を畫く法、類たる四あり。一は則ち鉤勒着色法にして、その法、徐熙より工となる。花を畫く者、多く色を以て暈して成せども熙獨り墨を落して、その枝葉蘂蕚を寫し、然して後に色を傳け、骨格、風神ならび勝る者これなり」といつてゐる。〔藤懸〕

幸若舞（かうわかまひ）　舞曲【名義】桃井幸若丸直詮に起つたので、かう呼ぶ。【起原】源義家七世の後裔桃井直常は足利尊氏に屬して戰功の認められぬを憤り、向背の途を誤つて越中の松倉城に退居して病死した。その子直知の詮信（あきのぶ）は松倉城陷落の後、剃髮して比叡山の光林房に住し、詮信（そしん）と呼んでゐた。幸若丸は詮信の許に賴つて學問に勵んだが、天性音律の道に長じてゐたので、或る時「八島の軍」といふ草紙に曲節を附して吟唱した。山の學侶たちが、それに耳を傾けたので、旦暮これを朗吟するに至つて、後小松院の叡聞に達し、參內を命ぜられて一曲を奏し、なほ勅を奉じてその類の曲數帖を集めた。これが幸若舞曲の起原である（幸若系圖）。即ち排悶動作として起つたものが、固定の藝となるに至つたのである。【沿革】當時草紙と呼ぶは、繪卷物又はそれを册子としたもののことで、草紙吟唱は必ずしもこの人に始まつたのでなく、「保元」「平治」や「平家物語」等を語ることは既に鎌倉時代から行はれ、「太平記」を讀むことも永享の頃から行はれてゐたのである。幸若丸のは恐らく聲明（別項）の曲節を取入れた所に特徵があつたのであらう、今遺存するものより判ずればさう言ひ得られさうである。舞は後に附けたのであらうが、「嘉吉記」や「應仁記」に幸若舞とあるので、開祖幸若丸の時にもう附いてゐる。

桃井幸若丸　土佐光信筆（帝室博物館藏）

時に、城は北朝方に攻略せられ、直知は脫して應永十九年越前の丹生に近い所で六十五歲で歿した。その子が幸若丸で、時に年十歲であつた（幸若八郎九郎家系圖）。直常の弟直信の孫

白たへの月と快樂とは同性質の足は走る役をするから美しく、眼はものを見るといふ役目を果すから美しいと解釋されてゐるが、藝術の世界では、有用と快樂乃至美とは甚だ仲が惡い。そこで何時でも藝術は有用のために存在せねばならぬとか、いや美のために存在すべきだといふ議論が絕えないのである。前者が卽ち功利のための藝術論、後者が藝術至上主義（別項）の論である。この功利主義の藝術觀を代表する者はトルストイである。彼はその著「藝術とは何ぞや」の中で、現代の目標・傾向となつてゐる最も普遍的

見る
庭に吹く春かぜたゆめ靑柳の葉におく露の玉ゆらもみむ　〔齋藤（淸）〕

講餘雜談（かうよざつだん）　隨筆　一卷　寫【著者】中野兼惟（肥前國舊遲池藩士）【解說】文武兩道を講習する靑年者流の心得になるべき事どもを擧げ、多く古事を引いて諒解し易からしめてゐる。渡邊源藏慮外者切殺事より鈴木大學指物之事に至る六十五則の小話を收めてある。敍跋はない。〔和田〕

功利主義（こうりしゆぎ）〔英〕The Principle of Utilitarianism の足は走る役をするから美しく、眼はものを見るといふ役目を果すから美しいと解釋されてゐるが、藝術の世界では、有用と快樂乃至美とは甚だ仲が惡い。そこで何時でも藝術は有用のために存在せねばならぬとか、いや美のために存在すべきだといふ議論が絕えないのである。前者が卽ち功利のための藝術論、後者が藝術至上主義（別項）の論である。この功利主義の藝術觀を代表する者はトルストイである。彼はその著「藝術とは何ぞや」の中で、現代の目標・傾向となつてゐる最も普遍的

るから、寬弘七八年の頃に成立したものか。而も同九年卽ち長和元年に卒したのであるから、その以前に自ら類聚したものと思ふ。【諸本】類從本は三卷上下二册、內閣文庫には寫本二部を藏し、一は慶長寫本（下卷缺）である。外に神宮文庫本（貞享元年寫三卷）、彰考館本（寫一卷）、東京帝大圖書館本（舊南葵文庫本、寫一卷）等がある。群書類從一三二所收【內容】部立は天・四時・地・居處（以上上卷）、神道・釋敎・帝道・人倫・文・飮食・火（以上中卷）、木・草・鳥（以上下卷）の十四部に分れ、それ〴〵の中、更に細

向陵集（かうりしふ）　歌集　一卷【作者】野村望東尼【成立】文久三年【諸本】望東尼歌文集（佐佐木信綱・大久保高明共編）・近代名家歌選（校註和歌叢書）・明治初期諸家集（校註國歌大系）所收。【解說】文久三年十一月の、師大隈言道の序文がある。但し慶應三年に六十二歲で歿した著者の、六十の賀の歌などがあるから、晚年に至るまで、增補を忘らなかつたのである。長歌も入つてゐて、凡そ年代順に作品を並べてある。天保三年著者二十七歲〔山岸〕

たものといふべきである。記事の剛柔緩急等に應じて、これを多少動作卽ち振の上に示さうとした程度らしい。この舞に關する文獻は、「嘉吉記」に、

此事山名金吾本意ナキ事ニ思ハレ、石見太郎左衞門尉ガ所爲也トニクミ、或時三條殿ニテ幸若舞ノアリシニ、貴賤群集シ、ソノ歸ルサニ山名郎徒ヲ遣シ、辻切ノ樣ニ切ラセケル。

とあるを古しとする。この事といふは南朝方から神器の一なる神璽を盜み出して北朝方に差上げた事、長祿二年の所爲で、翌三年に殺されたのである。これに次ぐは「蔭涼軒日錄」の寬正六年八月の七・八・九三日の記事で、それに勘氣を蒙つてゐた幸若丸が、免されて將軍足利義政の嗣子義視に仕へ、細川勝元がこれを扶持すると記してある。その後、都を去つて越前に歸り、朝倉家の保護を受け、そこを定住地とした。幸若丸の歿時には二種の傳へがある。一は明德四年に生れて文明二年庚寅五月二日に七十八歳で歿するとなし、一は同十二年庚子五月二日に歿するとなすもので、共に「幸若系圖」の說く處、「大日本史料」は前說を取り、他は「越前人物志」を初め概ね後說を取り、後裔も亦さう傳へてゐる。系圖の細說によれば、後說の方が正しさうである。幸若丸の後は、長男の直繼と長女の婿の安義とが藝を傳へ、室町幕府の季世には、八郎九郎家・彌次郎家・小八郎家の三に分れ、江戸時代に入つては、相共に將軍の保護を受けた。直繼は八郎九郎家の祖、安義は彌次郎家の祖、小八郎家は八郎九郎家から分岐したもので、これ等の家名は繼承者の幼名をさう呼ぶ慣例であつたがために得た名である。享保の頃に至つて一時五家に分れ、安政・慶應の頃四家となつて明治維新に入り、秩祿を失ふと共に藝も滅びた。【舞曲の題材】普通「舞三十六番」と稱へたが、それに二種ある。卽ち貞享や元祿の「書籍目錄」に、「舞本並草紙類」と題して、

大織冠二(册數)滿仲二　信田二　百合若大臣二
夜討曾我二　十番切二　富樫二　笈捜二
高館二　敦盛二　景淸二　烏帽子折二
八島二　伏見常盤二　文覺二　鎌田二
築島二　新曲一　和田酒盛二　和泉が城二
元服曾我一　小袖曾我二　四國落一　常盤問答一
堀河夜討一　笛の卷一　伊吹一　硫黃が島一
馬揃一　未來記一　木曾願書一　那須與一一
濱出一　入鹿一　淸重一　腰越一

を合卅六番舞本也と擧げ、これに續けて、

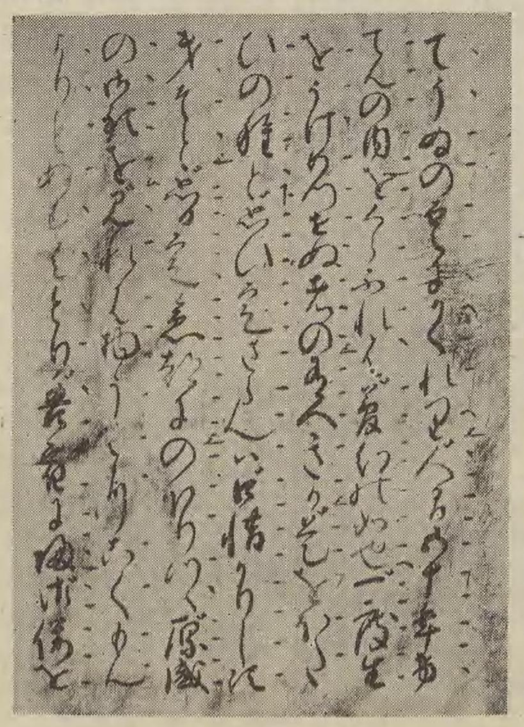
劍讃歎一　切兼曾我二　靜二　夢合一

の四がある。これ等には幸若一流のフシヅケをした寫本もあつて、明かに舞曲である。「群書一覽」の所載はやゝこれと異り、前記三十六番中から「鎌田」と「和泉が城」とを除いて、「劍讃歎」と「夢合」を加へてある。これ等通計四十番の外に、

日本記　張良　鞍馬出(東下り)

の三番があつて、皆確實に謠ひ且つ舞はれた。なほ他に「相模川」と題するのがあつて、種彥の「續足薪翁物語」に「舞のさうし幸若本共」とあり、且つフシヅケのある書もある(鳥津久基氏所說)といへばこれも加ふべきである。傍系大江の幸若(後に說く)では、「和泉が城」を勝負分といひ、「景淸」の下卷を「籠破」といひ、「常盤問答」を「鞍馬問答」、「伏見常盤」を「山中常盤」といひ、又別に「禪賀」を加へて舞四十二番と稱へてゐる。又正系越前幸若の音曲目錄には、前曲名の外に、「勸進帳」「蓬萊山」「九穴貝」の三つがあるが、「勸進帳」は「富樫」の一部、他の二は「濱出」の一部に附した稱呼である。なほ他に小曲祝言物が二三ある。【類別】曲の長短によりて長中短の三に分けることも行はれたが、題材上からは平治物・平曲物・判官物・曾我物・太平記物・特有物の六に分つべきである。平治物には「鎌田」「伊吹」「伏見常盤」「夢合」の四、外に便宜「馬揃」と「濱出」とを加へ、平曲物には「硫黃が島」「文覺」「木曾願書」「那須與一」「敦盛」の五、判官物には「笛の卷」「未來記」「鞍馬出」「烏帽子折」「腰越」「堀河夜討」「四國落」「靜」「富樫」「笈捜」「八島」「淸重」「和泉が城」「高館」の十四、曾我物には、「切兼曾我」「元服曾我」「和田酒盛」「小袖曾我」「夜討曾我」「劍讃歎」「十番斬」の七、太平記物には「新曲」、特有物には「入鹿」「大織冠」「百合若大臣」「張良」「信田」「滿仲」「日本記」「張良」等を配すべきものの如くである。題名より見れば、謠曲と共通のものが多いが、文も構造も別で、謠曲は幽玄をねらふ能の脚本であれば、自ら軟派に屬し、これは主として勇武を現はさうとするのであるから硬派に屬し、文體は散文、吟唱の曲節も語るといふに近く、舞技も極めて簡率である。

【物語類との關係】判官物には「義經記」(別項)とほぼ同文のものがあり、曾我物には「曾我物語」(別項)に酷似してゐるものがあつて、彼我の間に貸借關係のあるは明かだが、「義經記」「曾我物語」共に作成年代が不明なので、作の前後觀上よりして貸借を判ずるを得ない。この二物語に先立つて、「一谷合戰繪」「義經群高松」「高館合戰圖」「九郎判官義經奧州泰衡等被討伐繪」「平家繪」等の繪卷物が世に流布してゐた。これ等を基として巧に綴り合せたのが「義經記」であるかと思ふが、幸若舞曲の判官物は、この原繪卷の詞によつて構想したか、「義經記」を裁斷して作つたか明らめ難い。曾我物の方も同じく關係が不明である。特有物は古說話の繪卷物、又は册子となつて世に行はれてゐたものに手を加へて作成したのであらうか。「百合若大臣」「入鹿」「大織冠」「信田」「日本記」等は外に見られない想に成る。



越前幸若曲節集

【曲調】滅亡したので、正系の曲節は知られない。大江の幸若を聽けば、何れの曲も萬歲に近似してゐるのを感ずる。殊に掛合や同音の所に著しいが、兩者は姉妹藝でなく、萬歲の人たちが幸若舞曲、例へば「濱出」「夢合」「和田酒盛」「那須與一」等からめでたい文句に富む一節を借用し來つて、禁裏幕衞その他で舞に合せて謠つたのである(山科言繼卿記)。幸若舞曲の謠ひ方は七八分まで語り、他は謠ふといふ程度で、必ずしも萬歲の如くでなく、正系の越前に曲の名目として、

コトバ　イロ　イロ詞　フシ　カ、ルフシ　同音
同音ツメ　サシ　サシイロ　イル　フル　フルフ
シ　クドキ　サシクドキ　ロンギ　シホル　アタ
ル　クル　ツメ　上　中　下

等の二十數種あり、大江のにはこれ等の外に、

ヒロヒ　ユリ　モツ　ハル　キザミ　ウケ　カケ
クセ　イロガカリ

等十種程あつて、これを併行藝たる能樂(別項)の節の名目に合せては、コトバ・フシ・カ、ル・持物は扇、ワキとツレとは烏帽子が橫さびの折烏帽子が舊慣。

【舞の傳統・舞振】舞樂(別項)の手の內から面白いのを取つて作つたのが白拍子の舞(別項)はこの曲舞の態を保有して、益々語り且つ謠ふ方面に進んだものか、山科言繼は幸若門下の山本四郎左衞門一派の演藝を常に曲舞と記してゐる。正系越前は江戸の初世に舞を捨てて、貞享元年の書上に、

「古より舞候儀は無御座候」と一切の古記錄を否定して舞ひ得ない體面を繕つた。昌平日久しく、秩祿によつて生活の上に憂がなく、且つ田舍住居の身に何の刺戟も無かつ本の服裝に倣つて素襖烏帽子に小さ刀で、立舞を天覽に供した。これが大江幸若で素襖を着する起りである。善兵衞の門下、大澤次郎幸次は、天正十年筑後山下の城主蒲地鑑運に伴はれて筑後に下り、蒲地の家來田中直種がこれを傳習して子の直俊に傳へ、直俊は久留米の猪口直勝に、直勝は柳川の櫻井直邦に、直邦から重富直元に、直元から天明七年正月松尾增墺に傳へたのが、今福岡縣山門郡瀨高町字大江に遺存する幸若なのである。明治の末年以降古老は相次いで歿したが、幸にしてまだ「日本記」「安宅」「夜討曾我」「那須與一

寬

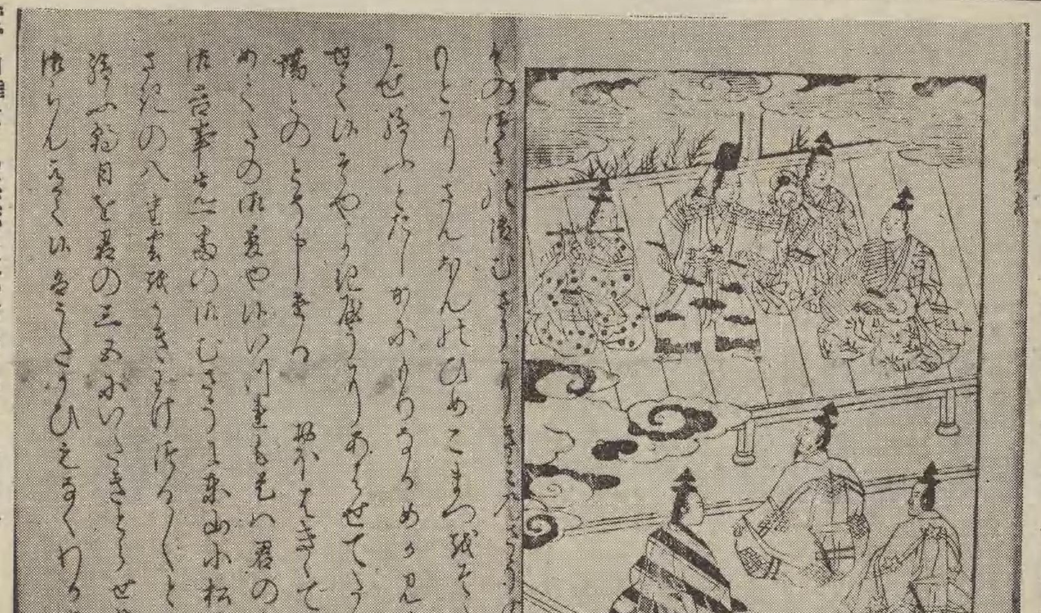
曲の謠ひ方は七八分まで語り、他は謠ふといふ程度で、必ずしも萬歳の如くでなく、正系の越前に曲の名目として、

コトバ　イロ　イロ詞　フシ　カ、ルフシ　同音
同音ツメ　サシ　サシイロ　イル　フル　フルフ
シ　クドキ　サシクドキ　ロンギ　シホル　アタ
ル　クル　ツメ　上　中　下

等の二十數種あり、大江のにはこれ等の外に、

ヒロヒ　ユリ　モツ　ハル　キザミ　ウケ　カケ
クセ　イロガカリ

等十種程あつて、これを併行藝たる能樂（別項）の節の名目に合せては、コトバ・フシ・カ、ル・同音・サシ・クドキ・ロンギ・クル・ヨミモノ・クセの十を共通とし、先行藝の平曲（別項）に合せては、コトバ・クドキ・ヒロヒ・ユリ・サシ・ヨミモノの六を共通名目とする。この上より判じても、幸若丸は朝夕叡山に於て耳にした聲明、即ち唄讃偈頌の曲調のみを奉ぜず、當代人の愛好した平曲や宴曲（別項）、特に曲舞（別項）の曲節を取入れて、一種の集大成の許に成功したのである。但し謠曲（別項）に比しては聲明味の勝つもので、比叡の山で生れた音藝として請取れさうなものである。【伴奏樂器】大江は小鼓一挺だけで、大鼓も笛も太鼓もない。但し寛永の刊本「夢合」に幸若舞と認むべき挿繪があつて、それには大鼓・小鼓・笛各一を描出してある。時にこれ等を用ひたこともあつたのであらうか。【服裝】幸若丸の肖像によつて判ずれば、折烏帽子直垂に小さ刀の常時のまゝで演じたものの如く、それが「七十一番職人盡」の繪に最もよく合する。越前のは三人で掛合に謠ひ且つ舞ひ、大江のもそれを繼承して、能の如く太夫・ワキ・ツレと呼ぶ。而して太夫は立烏帽子に素襖長袴小さ刀、持物は扇、ワキとツレとは烏帽子が横さびの折烏帽子が舊慣。



【舞の傳統・舞振】舞樂（別項）の手の内から面白いのを取つて作つたのが白拍子の舞（別項）で、曲舞はこの系統に立つが如くである。曲舞はいつしか神社の本緣又は古物語の類を、仕方話の如く、多少振にて示すに至り、遂には能に取入れられて大に融合した結果、もとの舞振が判然せぬやうになつたが、幸若舞曲はこの曲舞の態を保有して、益々語り且つ謠ふ方面に進んだものか、山科言繼は幸若門下の山本四郎左衞門一派の演藝を常に曲舞と記してゐる。正系越前は江戸の初世に舞を捨てて、貞享元年の書上に、

「古より舞候儀は無御座候」と一切の古記錄を否定して舞ひ得ない體面を繕つた。昌平日久しく、秩祿によつて生活の上に憂がなく、且つ田舍住居の身に何の刺戟も無かつた結果、歷史のある家の藝の肝要部を亡滅せしめたのである。大江は幸にして舞をも今に傳へてゐる。【大江幸若の傳統及び舞振】ここの系圖には幸若の傍系大頭（だいがしら）だとあるが、古來幸若とのみ呼んでゐる。その系圖には、初代幸若彌次郎の門人、下北面の武士山本四郎左衞門直義は、天性異相にして大頭大聲であつたがために、だいがしらと呼ばれたとある。元祿年中の書、「圓光大師行狀畫圖翼贊」に、延年舞伎を列擧してある中に、大頭とあるが、これは他の延年關係の書に出ない名目であれば、後に加へられたもので、幸若流のものをいふのでもあらうか。山本の門下に百足屋善兵衞といふ京の町人があり、後柏原院の御宇に參内して、山本の服裝に倣つて素襖烏帽子に小さ刀で、立舞を天覽に供した。これが大江幸若で素襖を着する起りである。善兵衞の門下、大澤次郎幸次は、天正十年筑後山下の城主蒲地鑑運（あきはる）に伴はれて筑後に下り、蒲地の家來田中直種がこれを傳習して子の直俊に傳へ、直俊は久留米の猪口直勝に、直勝は柳川の櫻井直邦に、直邦から重富直元に、直元から天明七年正月松尾增墺（ますおき）に傳へたのが、今福岡縣山門郡瀨高町字大江に遺存する幸若なのである。明治の末年以降古老は相次いで歿したが、幸にしてまだ「日本記」「安宅」「夜討曾我」「那須與一」「八島」「高館」「泉が城」の七曲が確實に傳はつてゐる。その舞は品位を維持し、體に隙を見せぬを第一義とし、敬禮に古型を崩すを許さない。即ち體をやゝ前方に屈めて左足よりすり足で出で、目を物に觸れぬが規定、技は極めて簡易、文の内容には緊密な關係を持たせず、時に兩手を左右に開いて長々と述べ、時に扇を開いて諸手を兩脇に着け、勢を附けようとしては足拍子を踏む。特に太夫が情の昂まりを現はさうとしては、ワキ・ツレの前を往返することもあり、太夫・ワキ・ツレの三人が揃つて舞臺を一周することもあるが、能の如く又は踊の如く、さす手引く手に變化を見せることが無くて、技巧味に乏しい。假面は附けず、役の持場は多少きまつてゐても、服裝を改めるでもなく、詞の受渡しだけはあるが、文章が元來叙事式の物語體に出來てゐるので、詰るところ舞であつて、劇ではなく、物語の内容を聽かせるのが主目的で、舞技は補助手段たるに止まる。【隆替】幸若舞曲は幸若丸の時に大成したもので、「新曲」だけが長男直繼（明應九年九月五日歿、享年四十六）の手に出來

たといふ。紹述に於てはこの人を推すべく、弘布には諸國を遍歴して演技に力めた彌次郎安義（永正九年二月十八日歿、享年五十九）を稱ふべく、技の卓拔に至つては小八郎吉信（文祿四年正月二十九日歿、享年未詳）を擧ぐべきである。世に名人小八郎と呼ばれたのはこの人で、家の技を以て織田信長に仕へて三百四十六石を領有した。その子白也は信長・秀吉・家康・秀忠に歴仕し、殊に秀忠に愛せられた。八郎九郎家では義門（慶長十九年八月十三日歿、享年五十八）がすぐれ、家康に仕へて越前の目付役を勤めた。彌次郎家では義成（慶長十一年六月十六日歿、享年七十）、誠直（慶長十四年九月十五日歿、享年四十六）の二人が長じてゐた。武技の尙ばれた時代、盛衰興亡の目まぐるしくて、弱者に同情する人、すなはち判官贔屓の室町時代の武人に喜ばれ、織豐時代にも盛んで、信長は殊に「敦盛」の「人間五十年、下天のうちをくらぶれば夢幻の如く也、一たび生を受け滅せぬものあるべきか」の一節を愛誦した。稲峽間に向ふ直前にもこれを吟じた。天正八年家康が高天神の城を圍んだ時、城將栗田刑部が今生の思出に幸若を一曲見たしといひ、家康は「高館」を舞はせたが如き、武人間に賞翫された話に富む。家康は特に八郎九郎義門を好んで、伏見城に於て槍を與へ、駿府城にては小脇差と黑印を與へ、貴前立物は旗本並にすることが許されてゐた。慶長・元和以降、明暦・寛文の頃にかけて、武士の振舞夜咄等の語り草が、戰場の功名談、當代の武道又は刀・脇差の物數奇、喧嘩口論の是非であつた時代には、その席に幸若を招いて舞はせたが、延寶以來、尙武の氣の弛むと共に次第に忘却された。正系の幸若三家は越前にあつて各々三百石前後の祿を食み、互に交替して江戸に出で、四月參府五月御暇といふが例で、音曲を將軍の聽きに入れるだけであつた。安政・慶應の頃は、年始の御禮に上るだけであつた。夙に舞を棄てた越前幸若は、音曲をも廢するやうになつたのである。大江は幸にして尙武主義の柳川藩領内にあつて、立花家の保護をうけて失墜することなく、舞も音曲も傳へ得た。【淨瑠璃との關係】寛永草創時代の淨瑠璃は、長篇の作に堪へる作者を得ず、幸若の「和田酒盛」「築島」「信田」等を殆どその儘これを語り、元祿時代に入つては想をこれに借りることが行はれて、井上播磨掾・宇治加賀掾・竹本筑後掾の語り物に合せては四五十篇も出た。試みに近松門左衞門の作についていへば、「出世景清」「鎌田兵衞名所盃」「源氏烏帽子折」「用明天皇職人鑑」「百合若大臣野守鏡」「大織冠」（各別項）等は皆それである。歌舞伎劇に使用されたこともあるが、淨瑠璃に比しては甚だ少い。【刊本】墨譜を加へたものは一切寫本、奈良繪本もあるが、それには墨譜を示してない。刊本は極めて稀に嵯峨本がある。行はれたのは寛永板で、明暦頃の版本は却つて尠い。【參考】半日閑話（卷四）大田覃○嬉遊笑覽（卷五上）喜多村信節○甲子夜話續篇（卷二十一、四四）松浦靜山○歌舞音曲考說高野辰之○舞の本上田萬年○新群書類從（舞曲）○日本歌謠集成（卷五）高野辰之○日本演劇の研究同上○幸若の研究同上（日本文學講座）○越前人物志（下卷）〔高野〕

大江幸若若舞（高野辰之氏藏）

呼應（こお）　文法　【解說】上に一定の語のある時、下にこれに應ずる語法を要する事。Concord の譯語。係結（別項）もその一種。【種類】人によつて擧ぐるもの一定しないが、時の呼應、條件の呼應、自他の呼應など云はれるものの如き、數へて寧ろ穩かでないものもある。普通に擧げられるものは、（一）否定の呼應。必ず述語に否定を豫想する修飾語がある。「決して恐るゝに足らず」「さらにかひなし」「絶えて返事せず」「よも過たじ」「いさ知らず」「をさをさ怠らず」「つゆ違はず」の如き、（二）假定の呼應。述語に假定の形を豫想する修飾語がある。「もし雨降らば行かず」「たとひ、過つとも何かあらむ」「よし世擧りて譏るとも恐れず」の如き、（三）疑問の呼應。疑問の意味の修飾語は、述語の連體形か、又助詞「か」「ぞ」を豫想する。反語もこの一種。「御心地いかが思さるゝ」「などいらへはし給ふ人はなきぞ」「たがぬぎかけし藤袴ぞも」「何ぞはからむ」「いづれの時か君を見るべき」「いかでか恐るべき」の如き、（四）禁止の呼應。述語に禁止の意味の語を豫想する修飾語がある。「ゆめ疑ふなかれ（べからず）」「決して怠るな」の如き、（五）願望の呼應。願望を意味する修飾語が、これに應ずる述語の形を決定することがある。「いかで見奉りてしがな」「願はくは花の下にてわれ死なむ」の如き。〔小林〕

小大君（こおほぎみ）　「小大君」（こだいのきみ）を見よ。

小落窪（こおちくぼ）　御伽草子　一卷　【作者】未詳。【名稱】「落窪物語」を摸して御伽草子に作りたるよりの名。一名落窪物語、又、落窪草子。【成立】室町末期【諸本】古板本は萬治二年鱗形屋版。明治以後の刊行としては新編御伽草子上卷に所收。【題材】繼子物、觀音靈驗談。「落窪物語」（別項）に摸したものであるが、面白の駒、典藥助の件、繼母に對する報復などの無い代りに、物狂や觀音の示現があり、全體として規模も小さく、彼の儒教的なるに比し、これは佛教色著しく、すべて近古時代化してゐる。【梗概】中昔、飛鳥が岡の澤野の中納言は、大臣の御娘である北の方との間に子の無いことが明暮の歎きの種であつた。或る時、北の方は乳母（めのと）の侍從の勸めにより六角堂の觀音に申子の祈誓を籠めると、滿願の夜のあくる頃に黃金の箱を賜はると夢みて、幾程も無く美しい姫を擧げ、侍き育ててゐるうち、姫君七歳の時、母上はふとした病で逝き、中納言には新しい北の方の腹に姫君二人若君一人生れたが、繼母は大姫君を疎んじ、辰巳の隅の板敷の一間に住ませ、人々は落窪の姫君と呼び慣はしてゐたが、その美しさ類ひなき聞え高く、關白殿下の御子の二位の中將殿から藏人の大夫の御使で御文が屆いた。妬さに堪へない繼母の讒言のうるささの心やりに、中納言は乳母を供に姫を六角堂へ參詣させると、留守中、二位の中將が重ねて遣した文使の復命（かへし）に、姫は人に盜まれたと繼母は虚言を傳へたので、悲歎の餘り中將は狂亂して行方知れずになつ

子をつれて　短篇小說集　一册　【作者】葛西善藏　【刊行】大正元年から同八年はじめまでの創作全部を輯めて、同年三月、新潮社より刊行、作者の最初の創作集である。【內容】「子をつれて」「惡魔」「贋物さげて」（後「贋物」と改題）「池の女」「泥沼」「雪をんな」「兄と弟」「呪はれた手」「姉」「奇病患者」「哀しき父」「遁走」の十二短篇が收められてゐる。卷頭の「子をつれて」はこの作者の出世作であつたが、其處には、恐らく作者自身であらうと思はれる貧しい小說家が、家主から店立てを食はされて、金策に鄕里へ出かけた細君も歸傾向の作品を擧げなければなるまい。さういふ傾向の作品には、その何れをとつて見ても、重苦しい人生の暗さと、その暗さに無殘に壓しつけられてゐる人間生活の種々相とが、作者の描法の精到さと、對象把握の的確さとを以て、飽く迄も端的簡潔に、而も陰翳多く描き出されてゐる。その上、飄逸な一種の風格と詩情とがそこはかとなく漂つてゐて、より多くの價値を見出させる。全體の作品をひつくるめて、人生の暗さに壓しつけられながら、作者が自分の第一義を、藝術主義と詩情の探求とを、弱いが、然し執拗に守り續けようと

【成立】卷首に天明二年人見奏（璣邑）、同年前津蘿隱（横井也有か）、同元年磯谷正卿、無年紀岡田挺之、同年松平秀雲（君山）の數序がある。なほ卷尾に、著者は「于時天明二年夏四月念五日、隨筆之初編草稿成る。猶餘齡あらばこの末二編嗣て記すべし」と云つてゐる。【解說】和漢雅俗の事がらについて古今の圖書を引いて考述し、又交友等から聞いたり自己の親睹したりした凡百の世事等を記したもので、眞箇の漫錄である。卷一に陽子虎と鳥居彈右衞門以下、卷二に延享甲子春來朝紅毛人の書以下、卷三に王昭君以下、卷四に諸蝶の重んず

い姫を擧げ、侍き育ててゐるうち、姫君七歳の時、母上はふとした病で逝き、中納言には新しい北の方の腹に姫君二人若君一人生れたが、繼母は大姫君を疎んじ、辰巳の隅の板敷の一間に住ませ、人々は落窪の姫君と呼び慣はしてゐたが、その美しさ類ひなき聞え高く、關白殿下の御子の二位の中將殿から藏人の大夫の御使で御文が屆いた。妬さに堪へない繼母の讒言のうるささの心やりに、中納言は乳母を供に姫を六角堂へ參詣させると、留守中、二位の中將が重ねて遣した文使の復命に、姫は人に盗まれたと繼母は虚言を傳へたので、悲歎の餘り中將は狂亂して行方知れずになつてしまつた。三七日の祈願を果してまどろんだ姫に觀音の御告があり、下向の途次初めて逢ふ人を夫にせよといふ。乳母にも同じ驗があつたので御利生嬉しく歸途につくと、最初に出逢つたのは、この頃御堂に住む物狂で、年は二十ばかりの人の容とも見えない淺間しさに二人は泣き沈んだが、觀音の示現は無かつたかと先方から聲を掛けられてせん方なく連れ歸り、觀音を頼んで契を結んだ。中納言は姫の許に男の住むといふのを繼母の中傷と斥けてゐた事が、姫から見參の申入れを受けて事實だつたに驚いたが、姫の不便さに承諾の返事をし、會つてみるとその痴者は、美しい二位の中將殿であつた。中納言は愕いて總てを殿下の御所に通じたので、御迎の人車雲霞をなし、やがて姫君も華々しく迎へ取られた。中將は關白を繼ぎ、澤野の中納言も大臣となつた。落窪の姫君は北政所と呼ばれ、若君の御出生あつて榮えられた。これ皆觀音の御利生と、御堂を造立し所領をつけられた。

【參考】近古小説解題　〔島津〕

子をつれて　短篇小説集　一册【作者】葛西善藏【刊行】大正元年から同八年はじめまでの創作全部を輯めて、同年三月、新潮社より刊行、作者の最初の創作集である。

【内容】「子をつれて」「惡魔」「贋物さげて」（後「贋物」と改題）「池の女」「泥沼」「雪をんな」「兄と弟」「呪はれた手」「姉」「奇病患者」「哀しき父」「遁走」の十二短篇が收められてゐる。卷頭の「子をつれて」はこの作者の出世作であつたが、其處には、恐らく作者自身であらうと思はれる貧しい小説家が、家主から店立てを食はされて、金策に鄕里へ出かけた細君も歸つて來なければ、調停を頼まうと思つた知合ひの警部も一向力を貸してくれないので、萬策盡きて、二人の子供をつれて街頭にさまよひ出ることが書かれてゐる。その他の諸篇、多くは貧と病弱と、行き詰つた世の中とに苦しめられてゐる人々の、明日のことも考へられない泥沼に陷つたやうな生活氣分を書いたものである。全體として明かに二つの系統の作品群に分けることが出來るもので、「雪をんな」や「池の女」などは、この作者としては寧ろ珍らしい幻想的な要素の多いロマンティックな傾向のものであるのに對して、他は概ね身邊雜記的な、從つて嚴密に寫實主義的な作品である。中でも、「姉」といふ一篇は、同じく嚴密な寫實主義の作品ではあるが、單なる身邊雜記小説乃至心境小説的なものでなく、極めて小説的な事件を孕んでゐる點で、特異さを有つてゐる。【批評】幻想的な作品にも無論相當の美しさがないことはない。殊に、「雪をんな」の如き、甘美で纖細な悲哀の感じが美しく漂つてゐるが、この作者の特徴と優れた力量とを見るべきものは、寫實主義的な傾向の作品を擧げなければなるまい。さういふ傾向の作品には、その何れをとつて見ても、重苦しい人生の暗さと、その暗さに無殘に壓しつけられてゐる人間生活の種々相とが、作者の描法の精到さと、對象把握の的確さとを以て、飽く迄も端的簡潔に、而も陰翳多く描き出されてゐる。その上、飄逸な一種の風格と詩情とがそこはかとなく漂つてゐて、より多くの價値を見出させる。全體の作品をひつくるめて、人生の暗さに壓しつけられながら、作者が自分の第一義を、藝術主義と詩情の探求とを、弱いが、然し執拗に守り續けようとしてゐる強さには驚かされる。寫實的傾向の作品には、作者自身の生活に卽したものが多いのだから、さういふ人の、さういふ精進の記録としても價値多く眺められる。ただ餘りに狹く自分自身の生活に卽したために、謂はゆる身邊雜記小説以上に出ないのは、それら寫實的傾向の諸作品に通じての弱みである。また、暗さを暗さとして諦觀するだけで、人生に對する希望とか、努力とかいふものの一切を失つてゐて、非常な物足りなさが感じられる。これも新現實主義時代の文學、乃至大正期有産者文學一般が、さうした方向に多く傾いてゐたのであつたことを思へば、却つてこの作者の微判味を見るべく、旁々作者がこの集所收の諸作によつて、特異な文壇的地位を與へられるやうになつたのも、亦當然のことであつたと思はれる。

【參考】果して奇病患者か加能作次郎（新潮大正八ノ四）　〔片岡〕

吳音（ごおん）「字音」を見よ。

護花關隨筆（どくわくわんずゐひつ）　隨筆　十卷　寫【著者】堀田方舊（護花關と號す、名古屋の藩士）【成立】卷首に天明二年人見秦（堺邑）、同年前津蘿隱（横井也有か）、同元年磯谷正卿、無年紀岡田挺之、同年松平秀雲（君山）の數序がある。なほ卷尾に、著者は「于時天明二年夏四月念五日、隨筆之初編草稿成る。猶餘齡あらばこの末二編嗣て記すべし」と云つてゐる。【解説】和漢雅俗の事がらについて古今の圖書を引いて考述し、又交友等から聞いたり自己の親賭したりした凡百の世事等を記したもので、眞箇の漫錄である。卷一に陽子虎と鳥居强右衞門以下、卷二に延享甲子春來朝紅毛人の書以下、卷三に王昭君以下、卷四に譜牒の重んずべき事以下、卷五に印文以下、卷六に菰野のしをり以下、卷七に社友の詩歌（全卷）、卷八に承前及俳諧、卷九に金雲翹傳中の婚書以下、卷十に程赤城より松平君山に贈れる書簡以下、各數十百項を收めてゐる。寫本には佳本が少ない。　〔和田〕

古學（こがく）「國學」を見よ。

古樂（こがく）「雅樂」を見よ。

語學自在（ごがくじざい）　語學書　二卷【著者】權田直助【成立・刊行】明治十八年十二月成る。後、井上頼圀・逸見仲三郎等寫本を校合し、「續史籍集覽」に收めて、同二十七年刊行。

【内容】本書は、文法を獨學せんとする者のために編んだもので、最初に文法研究史の概要を述べ、次に、體言・用言・助辭の大綱を説き、「詞の轉用」（活用）「詞と辭との辨別」「係り結び」「五十連音并六種の活の圖」「延語圖」「約語圖」「略語圖」「自他語格捷見圖」「てには用格捷見圖」「習語格法」を説き、下卷は專ら「語格」を説き、「古今集」の序詞、「竹取物語」「伊勢物語」「土佐日記」「平家物語」「論語」等から文を引いてその語格を註してゐる。【價値】めた。彌次郎家では義成（慶長十一年六月十六日歿、享年七十）、誠直（慶長十四年九月十五日歿、享年四十六）の二人が長じてゐた。武技の尙ばれた時代、盛衰興亡の目まぐるしくて、弱者に同情する人、すなはち判官贔屓の室町時代の武人に喜ばれ、織豐時代にも盛んで、信長は殊に「敦盛」の「人間五十年、下天のうちをくらぶれば夢幻の如く也、一たび生を受け滅せぬものあるべきか」の一節を愛誦した。桶峽間に向ふ直前にもこれを吟じた。天正八年家康尙武の氣の弛むと共に次第に忘却された。正系の幸若三家は越前にあつて各々三百石前後の祿を食み、互に交替して江戸に出で、四月參府五月御暇といふが例で、音曲を將軍の聽きに入れるだけであつた。安政・慶應の頃は、年始の御禮に上るだけであつた。夙に舞を棄てた越前幸若は、音曲をも廢するやうになつたのである。大江は幸にして尙武主義の柳川藩領内にあつて、立花家の保護をうけて失墜することなく、舞も音曲も傳へ得た。【淨瑠璃】Concord の譯語。係結（別項）もその一種。

【種類】人によつて擧ぐるもの一定しないが、時の呼應、條件の呼應、自他の呼應など云はれるものの如き、數へて寧ろ穩かでないものもある。普通に擧げられるものは、（一）否定の呼應。必ず述語に否定を豫想する修飾語がある。「決して恐るゝに足らず」「さらにかひなし」「絶えて返事せず」「よも過たじ」「いさ知らず」「をさをさ怠らず」「つゆ違はず」の如き、（二）假定の呼應。述語に假定の形を豫想するであるが、面白の駒、典藥助の件、繼母に對する報復などの無い代りに、物狂や觀音の示現があり、全體として規模も小さく、彼の儒教的なるに比し、これは佛教色著しく、すべて近古時代化してゐる。

【梗概】中昔、飛鳥が岡の澤野の中納言は、大臣の御娘である北の方との間に子の無いことが明暮の歎きの種であつた。或る時、北の方は乳母（めと）の侍從の勸めにより六角堂の觀音に申子の祈誓を籠めると、滿願の夜のあくる頃に黄金の箱を賜はると夢みて、幾程も無く美し

本書は、從來の諸說を精密に比較研究した結果に依るもので、特に卓見と稱する程のものはないが、穩健であり確實である。〔龜田〕

語學指南（どがくしなん）　語學書　四卷【著者】佐藤誠實【刊行】明治十二年七月。黑川眞頼の序（明治八年六月廿日）、著者の例言（同年同月）あり。明治八年六月以前脫稿、眞頼の一閲を得た。【內容】「詞八衢」「詞通路」「山口菜」（各別項）等の說を基本として、初學者のために、國文法の一般を說いたものである。著者は國語を、體言（名詞）・用言（動詞）・形狀言・助詞の四品種に分ち、用言を四種の正格（四段・一段・中二段・下二段）、三種變格（カ行・サ行・ナ行）、羅行四段一格（有リ・飽ケリ）の三種に分ち、形狀言を二種（ク活・シク活）及び羅行一格（善カリ）に分けてゐる。さて本文に入るに先立ち、五十音圖及び前記の活用圖（活用とこれに續く助詞――助辭及び助動詞――の圖）を揭げ、これだけは先づ諳誦すべしと云つてゐる。本文は語學研究の必要に次いで、體言を說き、用言に入つて、四種の正格、三種の變格、羅行四段の一格から將然・連用・終止・連體・已然の五段、用言の自他、命令言、雅言俗言の別を說き（以上卷一）、次に五十音の各行について、一行每に活用を說き（以上卷二・三）、次に形狀言の活用、助詞の概要、活用助詞（助動詞）圖を示し、延言・約言・轉音言・音便・涌音・複音・增言・省言を說き、次に俗語について說き、その活用圖（四段・上一段・下一段・三段（カ變）、二段（サ變）、クイノ活・シクシイノ活）を示してゐる。而して上記の各品詞を說くに當つては、「古事記」「日本紀」「萬葉」「古今」「源氏」等を初め、「和名抄」「類聚名義抄」「新撰字鏡」「色葉字類抄」乃至「沙石集」「寶物集」「三部假名抄」等の和書、及び「史記」「文選」「白氏文集」等の漢籍まで約百四十部の書から用語例を蒐集し、その用語を、（一）上世（光仁天皇以前）、（二）中世（桓武――安德）、（三）季世（後鳥羽――正親町）、（四）近世（後陽成以後）の四期に時代を分ち、中世以後用ひられないものは、「古言」と云つて、これを區別してゐる等、用意周到、頗る懇切なものである。而して最後に「語學試驗法」と標して、古歌古文を文法的に解剖する方法、及びその實例を示してゐる。【價値】江戸時代に於て、急速な進展をした國語研究は、明治維新に至つて一頓挫を來し、文明開化の謳歌と共に、國文典も亦、西洋文典摸倣のものが出づるに至つた（田中氏の小學日本文典、中根氏の日本文典等）。これ等洋式文典は、大體の秩序が整然としてゐる點で優れてゐたが、細部に於ては不備の點も少なくなかつたので、舊來の「玉の緒」「八衢」の流れを汲む反洋式文典が擡頭するに至つたのである。本書は、この反洋式文典の代表的なもので、その內容に於ては、助動詞と助辭を一括して「助詞」なる一品詞とした事、助詞の說明が、用言・形狀言に比して甚だ簡略である事、用言の活用に於て下一段活を逸した事、活用形に命令形を加へなかつた事等、不備の點も存するが、その記述は首尾一貫して頗る眞面目であり、殊に多數の古書から用語例を蒐集した點は、大に多とすべきものである。而して本書に於て特に注目すべきは、俗言（口語）の活用を說いた點である。口語を研究したものは、里見義の「雅俗文法便覽」（明治十年十月刊）が本書よりも少しく前に發表せられたのであるが、本書の稿本は明治八年以前に出來たものであるから、里見氏のそれと本書との前後は定め難い。而して說明は同氏のそれよりも整然としてゐる。この口語法を說いたこと、及び反洋式文典の代表といふ點に於て、我が文法史上特に注目すべきものである。

【參考】日本文法史　福井久藏　〔龜田〕

古學小傳（こがくせうでん）　國學書　三卷【著者】清宮秀堅【成立】安政四丁巳六月に成り、明治十年八月に增補された。【刊行】明治十九年九月（著者歿後七年）その遺族によつて刊行された。【內容】卷頭に福羽美靜題字、黑川眞頼・本居豐穎・小中村淸矩等の序、著者の題言・再記・孫立の追記等を揭げ、次に古學傳統圖（二百三十四名）、引用書目（二十九種）、及び目錄（卷一契沖以下十五名、卷二本居宣長以下二十五名、卷三松下見林以下二十五名）を置き、本文に於ては、先づ西山遺談に始まつて、目錄による諸家につき、それ〴〵小傳・生歿年月・葬所・著書・逸事等を叙し、更に碑銘その他論賛・序・跋の如きも、平生に關係あるものはこれを載せ、更に契沖・眞淵・宣長の三者については年譜を加へるなど精確を期してゐる。附錄として卷末に加へられた松下見林略傳は、「先哲叢談」續編よりの抄出であり、塙保己一年譜は稿本の筐底から檢出されたものの附載である。その他、正誤表幷に著者略傳が添へられてゐる。倭學者といへば、詠歌・風流の玩びに日を送る者であるかの如き傾向を排し、身を修め、制度・治亂に明かに、或は經世家として現代を率ゐ、或は著述家として後世を裨益する如く、社會的貢獻をその任としなくてはならぬといふ立場から、皇國の史傳闡明に功あつた人々を傳して、國學の將來を明かにしようとした述作である。【價値】傳するところ、廣く典據たる資料を諸書に求め、徵すべきものが無い場合には、その家について履歷・年譜の類を調べ、或は又、直接見聞するところによつて撰述したものであつて、「三哲小傳」（別項）を除いては、國學家の傳記集成としての最初の述作であると共に、人名辭書的編纂としても諸條件を具備した最初の試みである。今日から見れば、國學傳統の闡明を志しながら、なほ傳記の集成に止まり、また人名辭書としては、記述の繁簡が適切を缺き、資料に對する批判も十分でなく、諸書の引用も或るものは原文の儘であり、或るものは書き改めてゐる等の不統一を存し、組織上の不備は免れないが、當時としては、集成の範圍に於ても、又組織の精しさに於ても一頭地を拔いたもので、學者を裨益し、國學に關する諸研究に貢獻するところが少くなかつた。〔西尾〕

語學新書（どがくしんしよ）　語學書　二卷【著者】鶴峯戊申（しほのぶ）【諸本】刊本で、上下二冊本と、一冊本とある。本文は同版であるが、序跋の類に小異がある。二冊本は天保二年の自序と天保四年の小山田與淸の序と島田易淸の序とがあるのみであるが、一冊本は、その外に卷首目次の前に「語學新書凡例」（橘山地茂樹識）、卷末に「八科捷法目錄」（利光宗規識）、「語學新書のしりへにしるす」（橘山地茂樹識）の三つがある。二冊本が元で、「凡例」等を加へて合冊したものであらう。なほ表題を「詞の錦」と改め、本居宣長著鶴峯戊申校と記した後摺本がある。【內容】著者は、國語は九品九格に分れるとし、上卷には九品、卽ち九の品詞を說明し、下卷には九格を說明してゐる。序說に依れば、本書は元「詞の品定」と題し、九品に九卷、九格に九卷、附錄二卷、計二十卷あつたものであるが、拔萃して二卷にしたものである。その說くところ卓見も無いではないが、概して云へば、國語とは性質を異にする和蘭文典に直ちに則つたために、國語の性質に合はない點が多く、殊にその分類は雜で、矛盾多く、名稱も不當なものが多いのは惜しむべきである。かくして本書は所說の新奇なためと、錯雜して理解し難いためとによつて、世には餘り行はれなかつた。

【附記】「語學新書」よりも前、文政十三年に戊申は「語學究理九品九格總括圖式」と題する美濃紙二枚大の圖を刊行してゐる。「語學新書」は此の圖の說明と見るべきもので、「感動言」は感動詞を指してゐる。次に九格とは（1）實體言（キコトバ）、（2）虛體言（ツキコトバ）、（3）代名言（カヘコトバ）、（4）連體言（ツヅキコトバ）、（5）活用言（ハタラキコトバ）、（6）形容言（サマコトバ）、（7）接續言（ツヅケコトバ）、（8）指示言（サシコトバ）、（9）感動言（ナゲキコトバ）である。この九品の一々を更に數等乃至十數等に分けて說明してゐる。所謂「實體言」は今の名詞を指し、「虛體言」は形容詞、「代名言」は代名詞、「連體言」は動詞等の連體言を指してゐて、英文典等の分詞に當るもの、「活用言」は動詞、「形容言」は副詞、「接續言」は接續詞、「指示言」は、「上を」「下に」「の外に」等の類で、英文典等の前置詞に當るもの、「感動言」は感動詞を指してゐる。次に九格とは

に「下官集」の底本となつた東京帝國大學國語研究室所藏本は、大正の震災で亡びてしまつた。かく希覯書を版にした點と、定家・契沖等の假名遣に關する主な著者を一書に纏めて紹介した點に於て、國語學研究の上に與へた利益は大きく、現在もなほ便利なものであるが、原書の眞面目を正確に傳へるには、多少遺憾な點がある。〔岩淵〕

古學派（こがくは）「漢學」を見よ。

古學本教大意（こがくはんけうたいい）　國學書　一冊【著者】本居內遠【成立】嘉永七年九月

佛と古道との異同を比較し、儒・佛を批判して古道を闡明するは、已むを得ざるに出づるものであるとし、更に西洋の理學については、實用に當つて精妙であるが、その方法には汚穢を忌むわが神敎に反するものがある上に、利に趨つて信義・忠孝の念に乏しい國俗の中に發達した學問であるから、現在の如く醫藥・窮理・機巧等の應用方面だけが採り入れられてゐる間は大害を示さないが、その國俗が傳染するに至れば、國風は輕薄・實利に移つて政制の禍害を惹起すであらうから、豫め戒心す

と。さて九品とは(1)實體言、(2)虛體言、(3)代名言、(4)連體言、(5)活用言、(6)形容言、(7)接續言、(8)指示言、(9)感動言である。この九品の一々を更に數等乃至十數等に分けて説明してゐる。所謂「實體言」は今の名詞を指し、「虛體言」は形容詞、「代名言」は代名詞、「連體言」は動詞等の連體言を指してゐて、英文典等の分詞に當るもの、「活用言」は動詞、「形容言」は副詞、「接續言」は接續詞、「指示言」は、「上を」「下に」「の外に」等の類で、英文典等の前置詞に當るもの、「感動言」は感動詞を指してゐる。次に九格とは(1)能言格、(2)所生格、(3)所與格、(4)所役格、(5)所奪格、(6)呼召格、(7)現在格、(8)過去格、(9)未來格であつて、實例を以て示せば、「天神ぞ(能主)二神の(所主)神を(所役)天より(所奪)地に(所與)天降し給ひけるよ(呼格)」の如きである。現在・過去・未來の三格は、動詞と助動詞の接續による時の關係を指したものである。

【價値・影響】本書は和蘭文典の組織に則つた國文典の最初のものである。この點に本書の歴史的價値が存する。本書よりも先に出來た和蘭文典には、大槻磐水の「蘭學階梯」(天明八年)、大槻磐里の蘭學凡(文化十三年)、羽栗洋齋の「六格前篇」(同十一年刊)、馬場轂里の「訂正蘭語九品集」(同年刊)、藤林泰介の「和蘭語法解」(同十二年刊)等がある。著者も蘭學に通じてゐたから、これ等の書の影響を享けたこと疑を容れない。就中「和蘭語法解」はその組織頗る本書に似てゐるから、本書に直接大きな影響を與へたものと考へられる。さて和蘭文典に則つて出來た本書は、從來の國學者の手に成つた文法書とは著しく性質を異にしてゐる。その説くところ卓見も無いではないが、概して云へば、國語とは性質を異にする和蘭文典に直ちに則つたために、國語の性質に合はない點が多く、殊にその分類は蕪雜で、矛盾多く、名稱も不當なものが多いのは惜しむべきである。かくして本書は所説の新奇なためと、錯雜して理解し難いためとによつて、世には餘り行はれなかつた。

【附記】「語學新書」よりも前、文政十三年に戊申は「語學究理九品九格總括圖式」と題する美濃紙二枚大の圖を刊行してゐる。「語學新書」はこの圖の説明とも見るべきもので、この圖と「語學新書」との關係は、宣長の「紐鏡」と「詞の玉緒」(別項)に於けるが如くである。〔龜田〕

語學叢書 ごがくそうしよ　叢書　【編者】赤堀又次郎　【刊行】第一編、明治三十四年刊　【解説】主な國語研究書の覆刻を企てたが第一編だけで終つた。本書は主として假名遣を研究した書を集錄して居り、それ〴〵二三の異本を集めて校訂を加へ、且つ各書毎に解題を附してゐる。内容は次の如くである。○文字反(栂尾高山寺舊藏の古寫本を摸寫したもの。反音を論じたものである)○假名文字遣・定家卿假名遣少々・人丸祕鈔(假名文字遣は慶長中かと思はれる古刊本を底本とし、文明十年藤原親長書寫本を以て校訂し、文安五年平常緣の奥書のある本とも對校してゐる。「定家卿假名遣少々、人丸祕鈔」は、前記親長書寫本に附錄されてゐるものを底本としてゐる)○下官集(底本は舊新宮城本)○和字正濫鈔契沖(元禄八年版本と元文四年版本とを比校してゐる)○和字正濫要略契沖(三手文庫所藏の今井似閑書寫本に依つてゐる)。以上の中、「假名文字遣」「和字正濫鈔」は、この書によつて初めて活版となつたものであり、その他は初めて飜刻されたのである。特に「下官集」の底本となつた東京帝國大學國語研究室所藏本は、大正の震災で亡びてしまつた。かく希覯書を版にした點と、定家・契沖等の假名遣に關する主な著者を一書に纒めて紹介した點に於て、國語學研究の上に與へた利益は大きく、現在もなほ便利なものであるが、原書の眞面目を正確に傳へるには、多少遺憾な點がある。〔岩淵〕

古學派 こがくは　「漢學」を見よ。

古學本教大意 こがくはんけうたいい　國學書　一册　【著者】本居内遠　【成立】嘉永七年九月　紀伊藩主から國學の主意を下問されたのに答へた文を、更に著者の子豐穎が省略整理したもの。【諸本】本居内遠全集所收。【内容】先づ古學の大意根源は、天地開闢の初め、天津神から傳へられた大道であり、萬國に亙つて動きなき正道であり、後に渡來した儒・佛の教に對しては、「古事記」に本教と呼ばれ、「日本書紀」に神道と見え、「大寶律令」に立てられた四道の中では、紀傳道と名づけられたもので、歴代天皇の御政治はその具現であるとした。その學は「古學」と呼ばるべきもので、國學・和學といふ事は不當であるとしてゐる。次に古學の傳統と本旨とを叙し、儒學渡來以後、古道・古傳が明かでなかつたのに、後世の惑を啓いて古道を再び世に顯したのは、水戸光圀及びその修史事業に與つた學者、契沖・荷田東麻呂・賀茂眞淵・本居宣長であり、これを嗣いで大平・内遠に至るとし、又古學の本旨は君臣共に遠祖は神々であるから、神道・人道は二つではなく、系統を正し、信義を守り、威武を主とするのが、萬代不易の法制であり、寶祚の動かざること泰山の如きが神制の古道の尊く勝れた所以であるとなし、第三には儒・佛と古道との異同を比較し、儒・佛を批判して古道を闡明するは、已むを得ざるに出づるものであるとし、更に西洋の理學については、實用に當つて精妙であるが、その方法には汚穢を忌むわが神教に反するものがある上に、利に趨つて信義・忠孝の念に乏しい國俗の中に發達した學問であるから、現在の如く醫藥・窮理・機巧等の應用方面だけが採り入れられてゐる間は大害を示さないが、その國俗が傳染するに至れば、國風は輕薄・實利に移つて政制の禍害を惹起すであらうから、豫め戒心すべきであるとし、更に教法批判の要點として、それと社會的自然的環境との關係を考へ、相互の比較研究を行ひ、更に批判的立場に立つことの必要を數へた後、古學の對象としての古典及び參考書を掲げ、最後に古學の目的を概言して、わが國は萬國の祖宗たる神國で、天地開闢以來の實傳が存し、天産が備はり、國民の性情勝れ、他より侵し難き地勢を有するから、その尊き所以を明かにして、國を益々強大和順ならしめ、異教の迷塗に陷らざるが肝要であるとしてゐる。【價値】本書に於ては、國學の學的性質を考察するといふよりも、國學の教育方針を明かにすることが主要な目的であつて、そこに國學が社會との交渉を深くして來た事實を物語るものである。特に國學が排異の對象であつた儒・佛の外に、更に泰西の學術を加へてその利弊を批判し、大體に於て理解の正鵠を得てゐる如き、國學成立の當時に比して時代の推移が見られると共に、國學の進むべき、新方面を暗示するものがある。〔西尾〕

【參考】うひ山ぶみ　本居宣長○古學要　本居大平

古岳幽眞 こがくいうしん　「空谷傳聲集」を見よ。

古學要（こがくえう）　國學書　一册　【著者】本居大平　【成立・刊行】文化六年春稿。嘉永四年刊。文政十年三月十五日及び同年四月二十八日附の附錄二篇、嘉永四年十一月の本居豐穎の序及び天保十二年三月、高階三子が紀伊和歌山に於て翁の自筆本から寫した由の奥書がある。なほ内遠の加筆が一二存する。【諸本】增補本居宣長全集第十一卷所收。

【解說】先づ古學の要は、古書の言意を解明する事であると概言し、古書の文義が千有餘年の間に漢籍の理窟、佛書の教意に依つて混迷に陷り、古意が埋沒されてゐる。依つて古意と漢意・佛意とを辨別し、神と人、君と臣、皇國と異國、及び五穀と財貨との本末を正し、わが上古の精神を悟得して文義を解明すべきであるとした。第二には、かくして得たところを人に教へんためには、漢意・佛意に對する批判を要すとなし、儒道・佛道が我が國に行はれるやうになつたのは、その文辭が美はしく整つてゐること、及び珍しき事に移り易い人情の結果であるとして、その弊を箇條的に列擧し、(一)佛を崇め神を輕視し、(二)延いては天皇をも輕しめ奉る端となること、(三)佛教の死後觀は「物のかなしみ」を失はせて古道にそむくこと、(四)佛教は身命を輕視して、人道の大義を失ひ、神の御惠を忘れしめること、(五)漢土の政治に倣つて國々の古俗を失ふこと、(六)漢土の風に染み、君臣の分を亂ること等を數へ、第三には、併しながらかくの如き儒・佛の渡來も、もと〳〵神の御心によるものであるといふ立場から、補助的意義に於てその價値を認め、文字を例にしてその利用價値を考へようとし、儒者・佛者を職業として位置づけ、兩者共に本來神の御靈に依つて生れ、神のたまもの、天皇のたまものに依つて生存し得ることを思ひ、佛道をも儒道をも皇國のために學ぶべきであるとした。併し古學はこれ等と異り、和漢古今に亙る道の本意を究めるのだから、これを職業とすべきではないとしてゐる。附錄としては、「いろは」よりも五十音を用ふべき事をいうた條の外二三項をあげた後、家業の重んずべきこと、及び古學は「身の光」「心のにほひ」として、職業以外に持つべきものであるといふ趣意を述べたものと、「夷臣に答ふる詞」として、門人後藤夷臣が人の靈は死後黃泉國へは往かないで、幽冥に入るといつてゐる「泉國辨」を評して、さる新說は出すまじきものとした二篇を加へてゐる。【價値】中世まで古道は歌道として傳はつてゐたとし、然し、それについての說明を省略して、近世に起つた古學の主要精神を概說したものである。その根本思想に於ては、宣長の「直毘靈」「葛花」「玉匣」（各別項）等に示された所と同じであるが、古學を職業的になすことを非とし、もつと普遍的根本的な意義に定位してゐる所に、一面には時代に於ける古學の社會的發展が見られると共に、一面には又古學の根柢が、人間生活の深處に確立されようとして來た用意が認められる。〔西尾〕

【參考】うひ山ぶみ　本居宣長

小鍛冶（こかぢ）　「刀劍物の謠曲」を見よ。

小鍛冶（こかぢ）　所作事　本行物　【題材】三條小鍛冶宗近が伏見稻荷の神靈の合槌によつて名刀を鍛へたといふ故事は、謠曲「小鍛冶」に戲曲化され、これによつて古淨瑠璃に山本土佐掾の「三條小鍛冶」等があり、次いで歌舞伎にも脚色され、元祿十六年江戸中村座所演の「三條小鍛冶」がある。既に京阪では元祿期から本行風の所作事さへ行はれてゐる。

【沿革】長唄の所作事としては天明元年九月、江戸中村座「信田長者柱」第二番目「色見草四の染分」等が古く、即ち四代岩井半四郎が、三代岩井半四郎二十三回忌追善として演じた四季の所作事の中に、四代岩井半四郎の妻戀稻荷のみやうぶのしんと、五代市川團十郎の小鍛冶宗近とで三人相槌の所作を演じた。又古くより曾我對面に取入れられた系統では文化五年正月江戸市村座「月梅和曾我」第一番目五立目大詰「三津拍子相合槌」（長唄）などがその代表作で、三代坂東三津五郎の工藤と澤村源之助（後の四代宗十郎）の十郎と尾上榮三郎（後の三代菊五郎）の五郎との三人が、拍子舞等の事があつて後、小鍛冶の趣向になる。同じく長唄で文政四年十一月に正本が出た「小鍛冶」（作曲者初代杵屋勝五郎）は、當時振がなかつたが、その後につけられたもので、その他にもあるが、現行の主なるものは左の三種である。

【姿花後雛形】〔通稱〕小鍛冶〔初演〕天保三年九月九日初日、江戸市村座「信田館貢物船諷」第二番目大切（作詞）二代劇神仙（曲節）長唄（立唄）岡安喜代八（作曲）初代杵屋勝五郎（振附）松本五郎市〔傳來〕曲・振ともに傳存。但し振は中頃改訂されたものが殘存。澤村訥升五變化所作事の一。

【小鍛冶の能をお好に拍子も相の三人嘉多和誘謂色合槌】〔通稱〕今樣小鍛冶、又、小團次の小鍛冶〔初演〕嘉永五年八月二十八日初日、江戸中村座「御伽譚博多新織」第一番目大詰（作詞）三代瀨川如皐（曲節）長唄（立唄）二代吉住小三郎（作曲）五代杵屋三郎助（振附）花柳壽助、三藤間勘十郎〔傳來〕曲は傳存、振は廢滅。坂東竹三郎（後の五代彦三郎）、尾上梅幸（後の四代目五郎）、四代市川小團次所演。上下二卷に分れ、上が本曲で、下が道成寺（花紅葉連理鐘入）である。

【優曲三人小鍛冶】〔通稱〕新小鍛冶〔初演〕元治元年二月十五日初日、江戸森田座「甲子曾我大國柱」第二番目大切（作詞）三代瀨川如皐（曲節）長唄（立唄）五代芳村伊十郎（作曲）五代杵屋三郎助（振附）花柳壽輔〔傳來〕曲は傳存、振は廢滅。四代中村芝翫、二代澤村訥升、三代澤村田之助所演。曲は三者のうち最も長く、しかも洗練された巧な手が附いてゐる。〔秋葉〕

古歌集（こかしふ）　歌集　【編者】不詳　【名稱】「古歌集」と云つたのは、奈良時代から見て「古い歌」と思はれるものを集めてあるからだと思はれる。【内容】他の「萬葉集」中に、名の見える和歌集と同じく、本書の全内容は今日不明であるが、「萬葉」に現はれた部分は、長歌二首（卷二十）、旋頭歌六首（卷七・十一）、短歌の正確なもの十八首、その他に「古集」と記して「古歌集」と記さぬ短歌が卷九に二首、卷七に三十七首（或は五十九首）ある。これは恐らく正しい數かと思はれる。故に「古歌集」とは、當時の普通の歌體たる長歌・短歌・旋頭歌三つの歌體を含み、「萬葉」に見えただけでも、少くとも二十數首（多く見れば六十首前後）を含んだ一歌集だつたと推察される。「古歌集」と名づけられてゐる如く、殆ど全部古風で、且つ朴實な作品である。萬葉末期の花鳥風月趣味の作品は一つも見出せない。對自然の作品も、萬葉中期以後に見える純客觀的作風が一つもないのは、本書の古い證據として注目すべき特色である。而して「萬葉」に現はれた限りでは、自然を材料とした作より人事の作の方が多數である。【組織】本書が如何なる組織・體裁を有してゐたかは、明瞭でないが、「萬葉集」の卷七と卷九とに採られてゐる部分は、本書の體裁を示すものと思はれる。それは卷七の雜歌部の終りの方――古歌集の採られてゐるあたりから雜歌部の最後の部分まで――及び同卷譬喩部の最初の部分は、原本のまゝを切り取つて來たもので、編纂者が原本を改め作つた體裁でないことは、一見して明かである（國語と國文學四〇、拙稿萬葉集七考）。同時に卷九も殆ど全部に亙つて編纂の原本となつあつ丸・落穗庵・藤樹園・笹の屋・六史園・不斷庵等【生歿】生年未詳、文政十二年（一二四八八）十月十日歿す。【墓所】淺草新堀端西福寺【閱歷】江戸神田鍋町紙問屋の主人、はじめ狂歌を千穉庵に學びて、相應に名を知られ、後五側の判者となる。狂歌に遊ぶこと前後五十年、四方に遊歷すること四十五ケ國に及んだといふ。五十九歲、向島に閑居して不斷庵といつた。その洒落本界に進出したのは寛政末年から享和初年と思はれる。その以前には、例へば南陀伽紫蘭（鹿田俊滿）の「新の畫有多」を「北廓放意」話は、主として口碑傳說の中から選ばれたに過ぎなかつたのを、この作によつて、創作による童話が初めて出現した。著者にとつて童話の處女作であるばかりでなく、兒童文壇に初めて出現した創作童話として意義ある作品である。〔山内〕

五箇の津餘情男（ごかのつよぜいをとこ）　浮世草子　五册　【作者】都の花風と署名あれど不明　【刊行】元祿十五年板　【諸本】江戸時代文藝資料第二所收。

【梗概】〔卷一〕京の土手町の西筋大黑町・鉾田の子惣市は大阪屋の店女かもんに馴染み、身請けして世帶を持つたが、かもんは難產で死ぬ。それより怏々として樂しまぬので、友人達が父親に賴まれて一夜丸山に誘ふ。ふと若草と云ふ太夫を見染めて、金策のため拔買ひをしようとして番船に咎められ、水中の泡と消える。

【解說】本書は、京都・大阪・江戸・奈良・長崎五ケ所の遊里に關する好色本の一で、當時の遊里生活を微細に描寫してゐる。併し小說といふよりは、風俗案内記と云ふべき性質を帶び

教の死後觀は「物のかなしみ」を失はせて古道にそむくこと、(四)佛教は身命を輕視して、人道の大義を失ひ、神の御惠を忘れしめること、(五)漢土の政治に倣つて國々の古俗を失ふこと、(六)漢土の風に染み、君臣の分を亂ること等を數へ、第三には、併しながらかくの如き儒・佛の渡來も、もと〳〵神の御心によるものであるといふ立場から、補助的意義に於てその價値を認め、文字を例にしてその利用價値を考へようとし、儒者・佛者を職業として位置づけ、兩者共に本來神の御靈に依つては又古學の根柢が、人間生活の深處に確立されようとして來た用意が認められる。〔西尾〕

【參考】うひ山ぶみ　本居宣長

小鍛冶（こかぢ）「刀劍物の謠曲」を見よ。

小鍛冶（こかぢ）所作事　本行物　【題材】三條小鍛冶宗近が伏見稻荷の神靈の合槌によつて名刀を鍛へたといふ故事は、謠曲「小鍛冶」に戲曲化され、これによつて古淨瑠璃に山本土佐掾の「三條小鍛冶」等があり、次いで歌舞伎にも脚色され、元祿十六年江戸中村座所演の「三條小鍛冶」がある。既に京阪では元祿期長唄（立唄）岡安喜代八（作曲）初代杵屋勝五郎（振附）松本五郎市（傳來）曲・振ともに傳存。但し振は中頃改訂されたものが殘存。澤村訥升五變化所作事の一。

【小鍛冶の能をお好に拍子も相の三人嘉多和誘謂色合槌】〔通稱〕今樣小鍛冶、又、小團次の小鍛冶〔初演〕嘉永五年八月二十八日初日、江戸中村座「御伽譚博多新織」第一番目大詰（作詞）三代瀨川如皐（曲節）長唄（立唄）二代吉住小三郎（作曲）五代杵屋三郎助（振附）花柳壽助、藤間勘十郎（傳來）曲は傳存、振は廢滅。坂東竹三

方が多數である。【組織】本書が如何なる組織・體裁を有してゐたかは、明瞭でないが、「萬葉集」の卷七と卷九とに採られてゐる部分は、本書の體裁を示すものと思はれる。それは卷七の雜歌部の終りの方――古歌集の採られてゐるあたりから雜歌部の最後の部分まで――及び同卷譬喩部の最初の部分は、原本のまゝを切り取つて來たもので、編纂者が原本を改め作つた體裁でないことは、一見して明かである（國語と國文學四〇、拙稿萬葉集七考）。同時に卷九も殆ど全部に亙つて編纂の原本となつたものを、ただ切り取つて繼ぎ合せた編纂法で、編纂者が改め作つたものではない（國語と國文學五五、拙稿萬葉集卷九考）。この推論を信じて古歌集の編纂組織を案じて見ると、二部分に分れてゐたかと思はれる。第一は類聚式に編纂され、第二は製作の事情と作者を題詞（或は左註）に記してある編纂法で、この二つの編纂法が同時に行はれてゐたものと思はれる。

【價値】學問的には、「柿本人麿歌集」「笠金村歌集」（各別項）等の當時の著名歌人の和歌集の外に、かうした無名作者の作を集めた古い歌集の類も「萬葉集」の原本として取り用ひられた事を知り得て、他にもかゝる原本の存在を推察せしめる點で、「萬葉集」の編纂上に關する研究上貴重なものである。

【參考】上代國文學の研究　武田祐吉　〔森本〕

後柏原院御集（ごかしはばらゐんぎょしふ）「柏玉集」を見よ。

子方（こかた）「能樂」を見よ。

古賀侗庵先生筆記（こがとうあんせんせいひつき）「侗庵筆記」を見よ。

小金厚丸（こがねあつまる）　洒落本作者・狂歌師

【本名】武藏忠司、通稱は伊勢屋吉兵衞【別號】黃金厚丸・黃金厚麿・神田あつ丸・神田庵あつ丸・落穗庵・藤樹園・笹の屋・六史園・不斷庵等【生歿】生年未詳、文政十二年（一八二九）十月十日歿す。【墓所】淺草新堀端西福寺【閱歷】江戸神田鍋町紙問屋の主人、はじめ狂歌を千種庵に學びて、相應に名を知られ、後五側の判者となる。狂歌に遊ぶこと前後五十年、四方に遊歷すること四十五ケ國に及んだといふ。五十九歲、向島に閑居して不斷庵といつた。その洒落本界に進出したのは寬政末年か享和初年と思はれる。その以前には、例へば南陀伽紫蘭（鑵田俊滿）の「噺の書有多」を「北廓內所圖會」と改題し、自著として刊行するやうな不德行爲をなしたが、漸く自作を出すに至つた。洒落本「孔雀染勸記」「五藏眼」（別項）の作者である山旭亭眞婆行も、或は同人でないかと考へられる。【著書】青樓の世界闇明月（仕懸幕莫仇手本（別項）○仇手本後編通新戲（別項）○岡目八目佳妓窺○東都氣娼鄙廓膽競等。〔山口〕

黃金丸（こがねまる）　童話　【作者】漣山人巖谷小波）【刊行】明治二十四年一月、叢書「少年文學」の第一編として刊行。

【梗概】黃金丸といふ小犬があつた。父犬は金眸といふ虎と聽水といふ狐のために嚙み殺され、母犬も悲憤の中に世を去つたので、小犬ながら親の仇討を思ひ立ち、艱難辛苦の揚句、鷲郎といふ獵犬の助勢を得て、遂に本懷を遂げ、この二匹の犬は庄屋の家に飼はれて幸福に世を送つた。

【批評】江戸時代の傳奇物語の形態によるもので、文章も馬琴張りの文語體であり、當時の評壇で問題になつた程である。然し、この動物の世界に巧みに人生の姿を取入れ、自然と人情と道義の觀念を强調してゐる點は、童話の本質を握つてゐるものである。從來の童話は、主として口碑傳說の中から選ばれたに過ぎなかつたのを、この作によつて、創作による童話が初めて出現した。著者にとつて童話の處女作であるばかりでなく、兒童文壇に初めて出現した創作童話として意義ある作品である。〔山內〕

五箇の津餘情男（ごかのつよぜいをとこ）　浮世草子　五册　【作者】都の花風と署名あれど不明【刊行】元祿十五年板　【諸本】江戸時代文藝資料第二所收。

【梗概】〔卷一〕京の土手町の西筋大黑町・鉾田町・袋町・新町等の白人のこと及び若衆の生活を描き、〔卷二〕上京・中京・下京・三條・四條の東堤等の色里の話を書いてゐる。權七といふ米問屋の息子が、父親の用事で伏見より淀川船に乘込み、大阪天滿橋の船着場に上り、難波橋に宿をとつて、あんぺら枕に一睡の夢を結ぶ。堀江の或る兩替屋を騙つて金二百兩を懷に新町で樂しみを極めようと、吉田屋喜兵衞方に押出すと見て、夢は覺める。〔卷三〕江戸の色里、淺草の色茶屋と吉原揚屋の情景を描く。樽屋町大文字屋の息子次郎八が同じ町內の井筒屋重左衞門と同道にて、惠方詣りの途中、紙入れを拾つて吉原に乘込み、それが病みつきで、遊里通ひに現を拔かす。〔卷四〕堺阿波屋の左吉が春日神社參詣に出かけ、宿の一間で舊知の天王寺樂人森卷右京に逢ひ、その案內で木辻の遊里に出かける。翌日左吉は右京と別れて京に上る。宿の主人より巾着女の話を聞き、京の巾着女は堺の切屋と呼ぶものであることを知る。それより堺に歸り土地の色里乳森に通ひつめ、大阪新町の高尾を右京とはり合ひ、金に窮して質屋を騙らうとして露はれ、自殺する。〔卷五〕長崎の日雇十兵衞の子物市は大阪屋の店女かもんに馴染み、身請けして世帶を持つたが、かもんは難產で死ぬ。それより怏々として樂しまぬので、友人達が父親に賴まれて一夜丸山に誘ふ。ふと若草と云ふ太夫を見染めて、金策のため拔買ひをしようとして番船に咎められ、水中の泡と消える。

【解說】本書は、京都・大阪・江戸・奈良・長崎五ケ所の遊里に關する好色本の一で、當時の遊里生活を微細に描寫してゐる。併し小說といふよりは、風俗案內記と云ふべき性質を脫しきれないでゐる。餘情男とは風流若しくは廓通の男といふ意である。〔小泉〕

小革籠（こかはご）　教訓書　中本一册　【著者】横井也有【刊行】文化三年正月。尾張菱屋金兵衞等刊【諸本】也有全集（俳諧文庫）所收。

【解說】男女一身上の心得を、獨特の輕妙な筆致で說いたものである。本文中の記事によれば、明和二年の著である（石田元季氏說）といふが、久しく寫本の儘傳はつてゐたのを、北齋の門人牧墨仙が自ら畫を挿んで出版した。元來俳書ではないが、當時「鶉衣」（別項）の高評によつて、商略上からか、「うづら衣三篇」として刊行された。なほ石井垂穗がこの書の意を受けて書いた「無空夜話」といふ口語體道話の書もある。

【參考】校訂計釋鶉衣　石田元季

粉河寺緣起（こかはでらえんぎ）　繪卷　【解說】紀伊國粉河寺所藏一卷。もと上下の二卷であつたとも傳へられてゐるが明かでない。或は火災で上卷は失はれたとも云ふが、とにかく現存の一卷も燒痕歷々たるものがある。初めの方は詞を缺いてゐるが、大伴孔子古が粉河寺開創の由來を畫いたものらしく、後半は詞書〔鎭原〕

によると、河内國讃良郡の或る長者の一人娘が重き病にかゝつて、醫藥も祈禱もその效なく、一族悲嘆にくれてゐると、そこに一人の童子姿の行者が來て、有難い祈禱を行つたので、忽ち娘の病が本復した。童子は自分の住所を紀伊國那賀郡粉河と告げ、娘の着物を一枚貰つたのみで、飄然として立ち去つたので、長者は御禮のため一族を引きつれて粉河を訪ねると、そこには一つの千手觀音堂があるばかりで、童子の姿は見えず、ただ觀音の手に娘の着物が掛けてあり、初めて觀音の化身の加護とわかる。一族隨喜の涙と共に直ちに剃髮して永くこの觀音を供養することとした。これが即ち粉河寺の本尊である。その描寫は自由にして表現に富み、各場面それ〴〵活躍してをり、畫致に於て小信貴山とも云ひたい程、彼の緣起に近い描寫系統のものである。その筆者を鳥羽僧正などと傳へてゐるのもそのためであらう。併しその描寫は、精秀な「信貴山緣起」(別項)に比べて一籌を輸すべく、製作年代は遲くも鎌倉時代の初頭を下らぬものと思はれる。

粉河寺緣起（粉河寺藏）

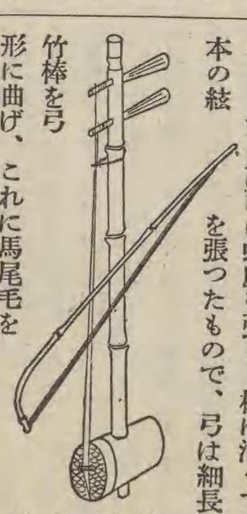
語感（ごかん）　言語學〔獨〕das Sprachgefühl　〔田中(一)〕

【解說】これは必ずしも學術上の術語ではない。例へば「私は三人の兄を持つてゐます」といふと、何となく外國語の直譯のやうな感じがするが、「私には兄が三人あります」といへば自然な日本語のやうに感ぜられる。單語一つ一つでは何等異なる所がないが、その連結の仕方が違ふ。而して一方はやゝ不自然で他は自然である。この感じの違ひは慣用から來る。慣用に馴れたものは自然の感じを伴ふ。通例語感といふ名稱で表はすものは、かゝる類の感じのことである。これはすべて言語に伴ふ感情的事實の一部として研究對象として大切なものである。　〔神保〕

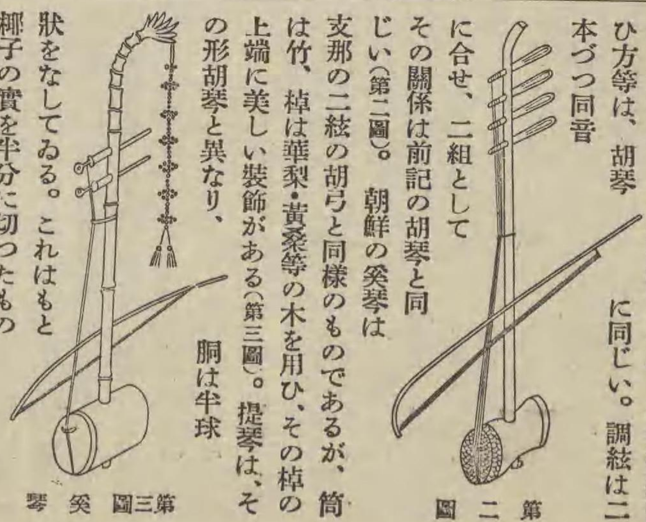
語幹（ごかん）　文法　【名稱】大槻博士はこれを語根と呼んだが、語根は他の意味に用ひるのが常となつた。【解說】語尾變化を有する語詞に於て、その語尾を除き去つた部分。例へば「取る」と云ふ動詞に於て tor-a tor-i tor-u tor-e の變化する部分 a i u e は語尾で、これを除いた tor- は語幹。また「黑し」といふ形容詞に於て變化する部分、「く」「し」「き」「け」を語尾とし、變化しない部分、即ち「くろ」を語幹とする類。或は國語に於ては、習慣上、音節文字たる假名を以て論じて、「とる」の如き動詞に於ては、「と」が語幹、「ら」「り」「る」「れ」が語尾といふ人もある。この說明法が普通であり、或は却つて tor- を語幹と稱することを誤りと論ずる人もあるが、語の分析は形態的研究の便宜上の取扱である。我が國語意識は、語形を單音まで分析して考へる習慣を發達させてゐなかつたことは事實であるが、今日に於ては、われ等は語の形態を單音組織まで進んで考へることも、一個の研究法たるを失はぬ。　〔小林〕

胡弓（こきゆう）　樂器　【名稱】西域から支那に入つた弓樂器であるからこの名がある。各國に於てその形を異にし、從つて又、その名を異にして居るものが多い。日本では胡弓と言ひ、朝鮮では奚琴、支那では胡弓・胡琴・提琴、臺灣では吊規仔(テオクイアー)(管仔絃)・提絃(殼仔絃)などといふ。

【構造及び奏法】支那の胡弓は太く短い竹の筒を横にし、その中央を貫いて長い竹の棹があり、筒の前面に蛇皮を張り、棹に沿うて二本の絃を張つたもので、弓は細長い竹棒を弓形に曲げ、これに馬尾毛を一房として張つたものであつて馬尾毛に松脂を塗り、これを以て絃を摩擦して音を發せしめる。第一圖は普通の胡弓である。絃の上端は棹の上部にある絲卷に卷き付けてあるが、その少しく下部に別に細い絲を以て絃を棹に縛り付けてある。この絲を押へ絲といふ。胡弓を奏するには筒を左膝の上に載せ、棹を眞直に立て、左手指で押へ、絲の下方の絃の部分を按じ、右手に弓を水平に持つてその毛を以て絃を摩るのである。この胡弓の大形で四絃を持つたものを大胡琴といふ。その構造拔ひ方等は、胡琴に同じい。調絃は二本づつ同音に合せ、二組としてその關係は前記の胡琴と同じい(第二圖)。朝鮮の奚琴は支那の二絃の胡弓と同樣のものであるが、筒は竹、棹は華梨・黃桑等の木を用ひ、その棹の上端に美しい裝飾がある(第三圖)。提琴は、その形胡琴と異なり、胴は半球狀をなしてゐる。これはもと椰子の實を半分に切つたものであつて、今も臺灣又は南支那では、椰子の實を用ひてゐるものも見受けられる。普通は木を以てつくり、その前面に蛇皮を張る。この胴を貫立て、こいて竹又は木の長い棹をれに四本の絃を張る。その絲卷は二本づつ左右に橫に擴げて挿してある。大胡琴に於ては四本の絲卷は相並んで、後方に重ねて挿してある。弓は胡琴と同じである。その調絃は二本づつ同音に合せ、低い方を合(ホウ)とし、高い方を上(ジヤン)とする。又提琴には押へ絲は無い。臺灣の殼仔絃はこれと同じい。又琉球の胡弓はこの提琴と同形であるが、絃は三本であつて、棹及び海老尾・轉軫の形は、我が三味線と同形になつてゐる(第五圖)。我が國の胡弓は我が三味線を小形に作つたもので、その絃を弓で摩る。弓の形は琉球の胡弓の弓に類似し、支那のものよりも遙かに美術的で馬尾毛が多い。



第一圖　胡弓



第二圖

第三圖　奚琴

第四圖　提琴

各部の名稱は、三味線と胡弓の祖たる藤植檢校は胡弓の許し物として表組五曲（榮獅子・唐子樂・百千鳥・常盤獅子・下り葉）、中組四曲（千歲鈴慕・夏の夜・神樂・長成殿）、奧組三曲（越天樂・八千代の調・鶴の巢籠）計十二曲を作つた。

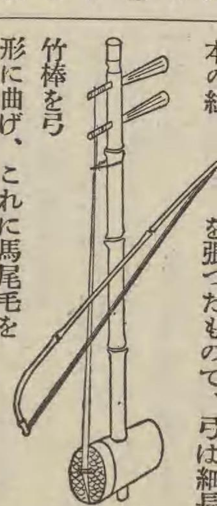
【沿革】起原は不明瞭であるが、絃樂器を弓で擦るものは、今から五千年前、セイロン島王ラヴナス(Rayanas)の發明するところであると稱せられ、印度に於ては、ラヴナストロン(Rayanastron)の名を以て行はれてゐた。これは、胴は全部木製であつたらしい。然るにあると稱せられる。當時は三絃であつたのを同じく八代將軍の世に、塙保己一が四絃の胡弓を案出し、將軍家の前にこれを演奏して御感に預り、これより關東に四絃の胡弓が流行するに至つた。　〔田邊〕

五經（ごきやう）　儒學　【名義】漢の班固の「白虎通德論」(卷九)に據れば、易・書・詩・禮・樂を稱するものであるが、秦火の後に「樂經」は亡んだので、易・書・詩・禮・春秋を以て五經とする(初學記)。而して五經の中の禮は、漢代に於ては「儀禮」を云ひ、後世に在つては「禮記」に元號を冠して「熹平石經」とも云ふ。魏の文帝の黃初五年(皇紀八八四)には、五經課試の法が定められ、春秋は穀梁を置かれた。唐に至つて太宗の貞觀中、孔穎達等に命じて「五經正義」を撰ばしめ、初め名づけて「義贊」と云つたが、後「正義」と改めた。次いで高宗の永徽四年(皇紀一三一三)長孫無忌の「五經正義」を上るの表があつて、「五經正義」を刊正し、明經考試にこれを用ひた。後代宗の大曆中、「五經文字」が纂成せられ、宋の仁宗の皇祐中、楊安國

所を紀伊國那賀郡粉河と告げ、娘の着物を一枚貰つたのみで、飄然として立ち去つたので、長者は御禮のため一族を引きつれて粉河を訪ねると、そこには一つの千手觀音堂があるばかりで、童子の姿は見えず、ただ觀音の手に娘の着物が掛けてあり、初めて觀音の化身の

（神保）

語幹（とかん） 文法 【名稱】大槻博士はこれを語根と呼んだが、語根は他の意味に用ひるのが常となつた。【解說】語尾變化を有する語詞に於て、その語尾を除き去つた部分。例へば「取る」と云ふ動詞に於て tor-a tor-i tor-u tor-e の變化する部分 a i u e は語尾で、これを除いた tor- は語幹。また「黑し」といふ形容詞に於て變化する部分、「く」「し」「き」「けれ」を語尾とし、變化しない部分、即ち「くろ」

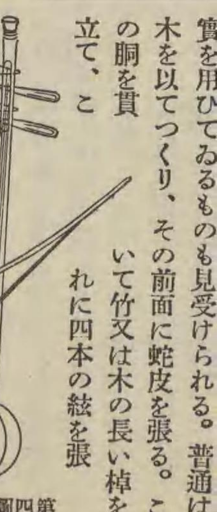


第一圖 胡弓

竹棒を弓形に曲げ、これに馬尾毛を一房として張つたものであつて馬尾毛に松脂を塗り、これを以て絃を摩擦して音を發せしめる。第一圖は普通の胡弓である。絃の上端は棹の上部にある絲卷に卷き付けてあるが、その少しく下部に別に細い絲を以て絃を棹に縛り付けてある。この絲を押へ絲といふ。胡

本の絃を張つたもの」で、弓は細長い

實を用ひてみるものも見受けられる。普通は木を以てつくり、その前面に蛇皮を張る。この胴を貫いて竹又は木の長い棹を立て、これに四本の絃を張る。その絲卷は二本づつ左右に横に擴げて挿してある。大胡琴に於ては四本の絲卷は相並んで、後方に重ねて挿してある。弓は胡琴と同じである。その調絃は二本づつ同音に合せ、低い方を合（ホウ）とし、高



第四圖 提琴

い方を上（ジヤン）とする。又提琴には押へ絲は無い。臺灣の殼仔絃はこれと同じい。又琉球の胡弓はこの提琴と同形であるが、絃は三本であつて、棹及び海老尾・轉軫の形は、我が三味線と同形になつてゐる（第五圖）。我が國の胡弓は我が三味線を小形に作つたもので、その絃を弓で摩る。弓の形は琉球の胡弓の弓に類似し、支那のもの毛が多い。

第五圖

よりも遙かに美術的で馬尾各部の名稱は、三味線と同じい。但し胴の下部に木中（ボンコ）と稱する短い棒が出てゐて、胴を床上に立てる働きをする（第六圖）。弓は黑檀又は紫檀で作る。絃は關西のものは三本、關東のものは四本を用ひる。圖に示したのは、關東の四絃のものである。三絃のものは古く、四絃のものは德川八代將軍の時、塙保己一が發明したと稱せられる。胡弓を彈ずるには、その中木直よりも

第六圖

を兩膝の間に挾み、棹を眞少しく左の方に傾く位に持ち、左手指を以て絃の勘所を押へ、右手に弓を水平に持つて奏すること支那の胡琴に似てゐる。調律法は三味線に同じく、普通は二上り調子を用ひる。但し四絃の胡弓では、第三絃と第四絃とを同音に合せるのである。我が國に於ては胡弓は、箏・三味線と共に合奏してこれを三曲と唱へるが、又特に胡弓の獨奏曲もあり、我が國胡弓の祖たる藤植檢校は胡弓の許し物として表組五曲（榮獅子・唐子樂・百千鳥・常盤獅子・下り葉）、中組四曲（千歲鈴慕・夏の夜・神樂・長成殿）、奧組三曲（越天樂・八千代の調（しらべ）・鶴の巢籠）計十二曲を作つた。

【沿革】起原は不明瞭であるが、絃樂器を弓で擦るものは、今から五千年前、セイロン島王ラヴナス（Ravanas）の發明するところであると稱せられ、印度に於ては、ラヴナストロン（Ravanastron）の名を以て行はれてゐた。これは、胴は全部木製であつたらしい。然るに胴に動物の皮を張つたものは、最も古いのは西亞細亞で、羊皮を張つた舟形の胴に棹を立て、これに二本乃至數本の絃を張つたものである。これがペルシアに入つて馬皮を張るやうになり、又印度に來て蛇皮を張るやうになつた。この蛇皮を張つた絃樂器と弓を用ひたラヴナストロンとが印度を中心とする地方に於て結合して胡弓となり、西域を通して支那に入つたと見るべきである。その支那に入つたのは晉の時らしく、もと胡中の奚部に於て用ひられたものが支那に入つたので奚琴といふ名を得た。なほ印度から印度支那に入り、南方から支那に入つたものが提琴となつたやうである。支那ではその後益々盛んに行はれて今日に至つてゐる。我が國の胡弓は德川幕府の初期に輸入されたものに則り、特に我が三味線を小型に作つてこれを胡弓に代用したものである。普通一般に信ぜられる所では、支那から輸入された胡琴に則つたものであるといふ。併し一說として葡萄牙のラベカ（バイオリンの前身）に則つたとも稱せられてゐる。初めて我が三味線を象（かたど）つて我が國の胡弓を創作した人は、德川四代將軍の時の藤植檢校であると稱せられる。當時は三絃であつたのを同じく八代將軍の世に、塙保己一が四絃の胡弓を案出し、將軍家の前にこれを演奏して御感に預り、これより關東に四絃の胡弓が流行するに至つた。

（田邊）

五經（ごきやう） 儒學 【名義】漢の班固の「白虎通德論」（卷九）に據れば、易書・詩・禮・樂を稱するものであるが、秦火の後に「樂經」は亡んだので、易・書・詩・禮・春秋を以て五經とする（初學記）。而して五經の中の禮は、漢代に於ては「儀禮」を云ひ、後世に在つては「禮記」を云ふ。由來漢初文帝の時、五經博士を置き（後漢書卷三十八翟酺傳參看）、こゝに始めて五經の名を生じたと云つてゐるが、「後漢書」の北宋本・南宋本、共に五經を一經に作り、宋の王應麟も亦、文帝の時五經の學官に列するもの惟〻詩のみ（困學紀聞卷八）と云つてゐるので、武帝の建元五年を以て五經博士の始とすべきである（漢書卷十九百官公卿表・同卷八十八儒林傳贊參看）。【傳來】漢の宣帝の甘露三年（皇紀六一〇）、諸儒に詔して五經の同異を石渠閣に講ぜしめ、後漢の章帝の建初四年（皇紀七三九）十一月、白虎觀に於て亦同じ擧が行はれ、班固をしてその事を撰集せしめられたのが、即ち「白虎通德論」（略して白虎通とも云ふ）である。又別に許愼は「五經異義」を作り、次いで鄭玄は「駁五經異義」を著して、條擧その說を破つた。更に靈帝の熹平四年（皇紀八三五）三月には、諸儒に詔して五經の文字を正し、これを石に刻して大學の門外に立てしめた。即ち五經の文字の異同訛謬脫落を校正し、石碑に鏤刻して、以て天下の學者にその眞正を知らしめ、又その古義を覺らしめんとしたもので、これを石經と云ひ、後のものと區別するために元號を冠して「熹平石經」とも云ふ。魏の文帝の黃初五年（皇紀八八四）には、五經課試の法が定められ、春秋は穀梁を置かれた。唐に至つて太宗の貞觀中、孔穎達等に命じて「五經正義」を撰ばしめ、初め名づけて「義贊」と云つたが、後「正義」と改めた。次いで高宗の永徽四年（皇紀一三一三）長孫無忌の「五經正義」を上るの表があつて、「五經正義」を刊正し、明經考試にこれを用ひた。後代宗の大曆中、「五經文字」が纂成せられ、宋の仁宗の皇祐中、楊安國に詔して「五經精義」を撰ばしめられ、明の成祖の永樂年中には「五經大全」が完成し、清に入つてはその注解の書は頗る多く、而して歷代皆その博士を置き（或は二經、或は三經・五經）、何れもこれを重んじた。我が國に於ては繼體天皇七年（皇紀一一七三）六月、百濟王が五經博士段楊爾を貢して後、又推古天皇十八年（皇紀一二七〇）三月、高麗王が僧曇徵・法定の二人を貢し、曇徵は五經に通じて居つた（日本書紀）。爾後平安朝を經て鎌倉時代に至る迄は、專ら漢唐の注疏のみが行はれて居つたが、南北朝に入つて岐陽・雲章等が朱注の易・詩を傳へ、次いで書・禮等が渡來し、大內義隆は五經の新注全部を朝鮮に求め（後奈良天皇天文七年、皇紀二一九八）、德川氏に及んで林羅山がこれを校點して刊行したものが「道春點」で、後更に山崎闇齋（闇齋點）、後藤芝山（後藤點）、佐藤一齋（一齋點）の校點本が相次いで世に行はれた。【附記】五經の名は同一であるが、その編次は時に隨つて同じくない。「禮記」經解篇には、詩・書・易・禮・春秋とあり、「漢書」藝文志は易・書・詩の次第を以てし、又、王儉の「七志」は孝經を以て五經の首とし、陸德明に至つてまた易を以て始としてゐる。【註釋書】五經正義

三百二十三卷 唐孔穎達等 ○五經大全一百十七卷 明胡廣等。

【參考】五經通義一卷(玉函山房輯佚書本) 漢劉向 ○駁五經異義一卷補遺一卷(食舊堂叢書本) 漢許愼撰・漢鄭玄駁・清王復編 ○五經異義疏證三卷 清陳壽祺 ○五經類編二十八卷 清周世璋 ○朱子五經語類 八十卷 清程川編 ○經學通論五卷 清皮錫瑞 〔宇野・本多〕

古京遺文 こきやうゐぶん 金石文集 二卷 【著者】狩谷棭齋【成立】文政元年の自序がある。【諸本】從來寫本で傳はつてゐたが、著者自筆本と思はれるものが、東京帝室博物館に所藏されてゐる。明治二十五年より翌年にかけて「隨筆集誌」(自第三號至第十號)に分載されて初めて刊行された(明治二十六年、纒めて單行された)。隨筆集誌本は、山崎知雄・黑川春村の補訂したもので、原本の面影を失つてゐる點も少くなかつたので、山田孝雄博士は博物館所藏本を底本とし、更にその原據たる原拓本の寫眞を附して大正元年刊行した。その後、日本古典全集第二期に收められた。これは山田博士編纂のものを複製したのに一二訂正を加へただけである。【解說】この書は我が國の古金石文を集めてその釋文を記し、且つ精細な考覈を加へたものである。「藥師佛造像記」「宇治橋斷碑」「船首王後墓版」「山名村碑」「妙心寺鐘」「藥師寺東塔擦銘」「威奈眞人大村墓志」「建多胡郡辨官符碑」「粟原寺鑪盤銘」「結知識碑」「佛足石記并歌碑」「聖武皇帝銅版詔書二通」「修多賀城碑」「涅槃經碑」「神護寺鐘銘」「道澄寺鐘銘」、すべて三十二種を收めてゐる。金石文の研究は既に棭齋以前に始まつてゐたが、この書は從に博搜洽載を期したものでなく、採錄するに際して、十分吟味を加へて居り、その考證の如きも、確かな研究方法及び態度の上に立てられたものであつて、我が國の金石文の研究に於て最も精彩を放つと共に、棭齋の著述中にあつても、樞要なものの一である。【備考】前記山田博士編纂の「古京遺文」に附載されてゐる「續古京遺文」(山田孝雄・香取秀眞編)「古金石逸文」(同上)は、前者は「古京遺文」に洩らされたもの、及びその成稿後、世に知られてゐる金石文十七種を集めたものであり(原拓本の寫眞も共に收めてある)、後者は金石の逸して文章のみ存するもの九首を輯めたもので、日本古典全集本にも複製して收められてゐる。

【參考】古京遺文の價値 山田孝雄(山田孝雄編古京遺文) 〔岩淵〕

後京極流 ごきやうごくりう 書道 【解說】後京極攝政藤原良經の書流。良經(別項)は關白兼實の子で、彼の法性寺流の創始者たる法性寺關白忠通の孫に當る。歌文に堪能であつたばかりでなく、書は祖父の流風を繼承して一派を成した程であつた。建仁三年十一月藤原俊成九十の賀の時、四季屏風の色紙を書いたとの傳があるが、その眞蹟としては九條公爵所藏の消息等があり、また古筆切としては興福寺切等數種がある。(書道參照) 〔伊木〕

古今夷曲集 こきんいきよくしふ 狂歌集 十卷四册 【編者】生白堂行風【刊行】寛文六年大阪安田十兵衞開版【解說】その名の如く古今の夷曲(狂歌)を蒐めた撰集で、春・夏・秋・冬・神祇・離別及羇旅・戀・雜上・雜下・釋敎の十卷に分ち、作者二百四十一人、歌數千五十餘首を載せてゐる。この書は編者が勅許を得て編纂し、刊行の後これを天覽に供したといふのが從來の私撰と異なつた點で、紀貫之等が撰んだ「古今和歌集」にも比すべき苦心の集である。ただその選擇法が歌の優れたものを選出したのではなくて、古來の文獻に載せたものを悉く採錄しようとしたのであるから、やや雜駁の嫌はあるが、ともかく引續いて發行した「後撰夷曲集」(別項)と共に、これを古今狂歌大全とするに憚らないものである。 〔野崎〕

古今榮雅抄 こきんえいがせう 註釋書 二十卷册數不同 【著者】飛鳥井雅親(榮雅)の子雅俊か。「類聚名物考」には京都妙滿寺日譽作といふ一說を擧げて否定してゐる。野村八良氏は三條西公條かと云つてゐる。【名義】榮雅の著と考へられたため。【別名】古今飛鳥井家傳來鈔(大阪府立圖書館本五册寫)、詁訓抄(神宮文庫本三册寫)【成立】明應七年か。但し現存本は永錄四年か。【諸本】延寶二年刊本があり(十六册)、寫本も多い。【解說】本書は飛鳥井家の註釋書たる事は疑なく、本書の奥に明應七年當家相傳の本を以て「古今集」の本文を校合した旨を記す。從三位は肩に飛鳥井榮雅と註があるが、榮雅は文明五年五十七歲にて出家し、且つ正二位であつたから、恐らくは誤りで、若し飛鳥井家から明應七年從三位であつたものを求めると、榮雅の子雅俊がある。次に本書の由來を記した跋文があつて、榮雅の講釋本を年來の知音速水親祐に傳授するとあり、最後に雅俊から親祐に傳授する意味の系圖があるから、この跋文も雅俊の書いたものらしく、雅俊は榮雅の講釋本に本書を添へて親祐に讓つたのであらう。然るに跋文の後半に、「愚比丘餘七十」とあつて永錄四年の日附があるが、雅俊は大永三年(一一八三)六十二歲にて周防國に薨じた(公卿補任)から、右の比丘は雅俊より三十年程後輩の別人である事が分る。さうすると、この跋文は二人の手によつて書かれた二つの文章である事になる。その前半は本書が火事で燒けたので記憶にあるものを書き集め、その次に「僻案抄」(別項)の說を書き加へ、一條禪閤の說は、その子良鎭大僧正に傳授される筈のところ、他界されたので、飛鳥井家の說と一致するものを書き加へたとある。現存本は「僻案抄」の外に、「顯註密勘」(別項)をも引用してをり、兼良の說は一禪として引用してゐるが、「古今集童蒙抄」(別項)とは一致しない。その他本書は淨辨の「古今集註」を引用してをり、親房の註も參考してゐると云はれてゐる。なほこの跋文の後半は愚比丘が全註した旨を記してゐる。現存本は全註であるがそれが永錄四年ではないかと考へられる。試に「奥義抄」「顯昭註」「顯註密勘」「僻案抄」「淨辨註」「童蒙抄」等の註する歌を計算すると、凡そ五百九十首(長歌を除く)で、假に「榮雅抄」が右六書を參考したとすると、「古今集」の約半數は、本書が始めて註した事になる。【價値】本書の價値は一は全註である點に存し、一は註の方法が綜合的である點に存する。即ち本書は語釋は勿論、一首全體の意味を說明し、歌の價値を論じ、類歌を揭げ、作者の傳を記し、「古今集」の組織についても說明してゐる。又本書は比較的早く出版されたので用ひらるゝ所が多く、季吟の抄はこれによつたものであり、又「古今淺見抄」(島田正篤著、五册、安政四年成)は、「餘材抄」は煩雜であるとて本書を用ひ、契沖も眞淵も、これを有力な參考書としてゐる。 〔西下〕

【參考】類聚名物考五〇國文學研究史 野村八良

古今集左註論 こきんしさちうろん 「古今和歌集打聽」を見よ。

古今集序表考 じよひやうかう 「古今和歌集打聽」を見よ。

古今集遠鏡 こきんしふとほかがみ 註釋書 六卷【著者】本居宣長【名義】遠鏡は遠眼鏡の意。遠き世の詞は如何に註釋を詳しくしても眞の味ひを味ふ事が出來ないが、一度今の世の詞に譯して見ると、始めてしつくりと翫味する事ができる。宛も遠眼鏡を覗くと遠方のものが手近くあり〳〵と見えるが如くであるとの義。【成立・刊行】寛政六年正月成る。もと横井千秋の需めにより、「古今和歌集打聽」を見よ。

古今集童蒙抄 こきんしふどうもうせう 註釋書 一卷【著者】一條兼良【名義】本書の序文に「童蒙の求によりてかき侍れば聞き及び思ひ得たる事は殘さず筆の跡に殘し侍るべし」とみた口譯法は、爾來屢々襲用せられ、「古今集ひなことば」「尾崎雅嘉」を初め、現代の註釋書は口譯を主にしないものも、必ず一首の意、大意、譯等の項を設けて、口譯を試みてゐる。【末書】古今集遠鏡補正二册 中村知至(天保十四年序文)。 〔西下〕

【參考】國文學研究史 野村八良

古今集童蒙抄 こきんしふどうもうせう 註釋書 一卷【著者】一條兼良【名義】本書の序文に「童蒙の求によりてかき侍れば聞き及び思ひ得たる事は殘さず筆の跡に殘し侍るべし」と

二條家は不斷、京極家・冷泉家は不立の兩說があると述べてゐる。然るにこれ等の說並びに「顯註密勘」は、顯昭の註に定家が密勘を加へたものであるとの解說は、そのまゝ殆ど同文で「古今祕註」(十二册寫)に見出す事ができ、その他兩書に共通な說が甚だ多い。恐らく兩書は密接な關係をもつであらうが、「古今祕註」は爲家抄を主として顯昭註を并び引いた有力な註釋書で、成立も相當古いと考へられるから、本書が「古今祕註」の說を襲用したのであらう。兼良には別に「古今集愚見抄」一帖があ

蟬ぶし　いろはぶし　むこ島ぶし
さんさぶし　柴賣ぶし　唐辛ぶし
山のうへぶし　有馬ぶし　同かはり
長松ぶし　木津ぶし　葛のうら葉ぶし
磯のみるめぶし　ところぶし　天下ほとゝぎすぶし
ずんぼろぶし　三河ぶし　敦盛ぶし
あひの山ぶし　うらやぶし　峰の松風ぶし

歌念佛や歌說經(各別項)の文句は、これによつて想察の緒を得る。又寶永元年刊の「落葉集」(別項)卷六に、この人の唱歌十八篇を載せてゐる。同じく目錄を示す。

を見よ。

古今集序表考　こきんしふじよひやうかう　「古今和歌集打聽」を見よ。

古今集遠鏡　こきんしふとほかがみ　註釋書　六卷

【著者】本居宣長【名義】遠鏡は遠眼鏡の意。遠き世の詞は如何に註釋を詳しくしても眞の味ひを味ふ事が出來ないが、一度今の世の詞に譯して見ると、始めてしつくりと翫味する事ができる。宛も遠眼鏡を覗くと遠方のものが手近くあり〳〵と見えるが如くであるとの義。【成立・刊行】寛政六年正月成る。もと横井千秋の需めによつて、述作したものであるが、千秋は私すべきものでないとし、植松有信に託して刊行した。【諸本】(一)舊刻本六册。寛政九年、文化十三年刊。(二)本居宣長全集第五所載本。(三)頭書古今和歌集遠鏡(山崎美成頭書、八册、天保十四年刊)。(四)同一册(大正六年刊)。(五)同一册(昭和二年刊、德本正俊校)。【解說】本書は眞名序及び長歌を除く外、「古今集」の全部を口譯したものである。「古今集」の註釋書は甚だ多く、殊に契沖・眞淵の研究は卓越してゐるが、口譯にも別の意義があると考へて先人の未だ試みなかつた方法を採つたのである。記述の方法は先づ譯語を片假名で記し、必要に應じて譯された原の詞を傍に書き添へ、譯文と原文とが構造を異にする場合は譯文に數字を附してその關係を示し、補說した所、省略した所を明示し、譯文の次に補遺を平假名で記し、「餘材抄」「打聽」(各別項)の是非を批判してゐる。古歌を口譯する事は甚だ困難であるが、彼はその態度並びに方法について縷々述べてゐる。解釋上參考にしたものは「餘材抄」と「打聽」で、巧に兩書を折衷してゐる。【影響】本書の始めて試みた口譯法は、爾來屢々襲用せられ、「古今集ひなことば」(尾崎雅嘉)を初め、現代の註釋書は口譯を主にしないものも、必ず一首の意、大意、譯等の項を設けて、口譯を試みてゐる。【末書】古今集遠鏡補正二册中村知至(天保十四年序文)。

【參考】國文學研究史　野村八良　〔西下〕

古今集童蒙抄　こきんしふどうもうせう　註釋書　一卷

【著者】一條兼良【名義】本書の序文に「童蒙の求によりてかき侍れば聞き及び思ひ得たる事は殘さず筆の跡に殘し侍るべし」とあるによる。【別名】一條禪閤抄【成立】文明八年【諸本】群書類從卷二八七所載。寫本も一二ある。類從本は卷一九の註に錯簡がある。【解說】本書は定家の「顯註密勘」「僻案抄」(各別項)に洩れた所を註し、特に假名序卷十九・二十の註に意を用ひたのである。その態度は飽くまで定家を宗とし、その子孫が邪僻を執し、謬說を傳へてゐるのを遺憾としたのである。註の內容は假名序の註、歌の註(凡そ九十首)、詞書の註(凡そ三十六)、作者の註(五)、部類の名目の註(六)に分たれる。部類の名目は卷十の物名、卷十九・二十の雜體・短歌・旋頭歌・俳諧歌・大歌所御歌を解說し、大歌所御歌は更にその細目について說明してゐる。註は簡要を努め、「顯註密勘」「僻案抄」を主として引用し、或說・或抄を擧げて駁し、時に自分の意見を述べてゐる。「古今集」の書誌的研究としては、(一)撰修の詔を奉じたのは延喜五年であらうが、奏覽までには年序を送つたであらう。(二)假名序中の古註は、公任の手になつたもの。(三)定家本のうち嘉祿本は、假名序に「あさか山」の歌があり、貞應本には無いなどと述べ、序中の「富士の山も煙たたず」については二條家は不斷、京極家・冷泉家は不立の兩說があると述べてゐる。然るにこれ等の說並びに「顯註密勘」は、顯昭の註に定家が密勘を加へたものであるとの解說は、そのまゝ殆ど同文で「古今祕註」(十二册寫)に見出す事ができ、その他兩書に共通な說が甚だ多い。恐らく兩書は密接な關係をもつであらうが、「古今祕註」は爲家抄を主として顯昭註を并び引いた有力な註釋書で、成立も相當古いと考へられるから、本書が「古今祕註」の說を襲用したのであらう。兼良には別に「古今集愚見抄」一帖があるとの記錄があり、本書には見えない兼良の「古今集」に關する說が、「榮雅抄」(別項)に引用されてゐる。兼良の子冬良にも「古今集」の註がある。

【參考】國文學研究史　野村八良　〔西下〕

古今傳授　こきんでんじゅ　「歌道傳授」を見よ。

古今節歌　こきんぶしのうた　歌謠【名義】俳優古今新左衞門の創めた曲節であるため。【沿革】古今新左衞門は關東地方の產だが、元祿年中上方に於て舞臺に立つた。主役で道化の技に長じ、經營の才があつて度々座元をも勤めた。殊に卑俗の謠ひ物に巧で、その流風は古今節と呼ばれた。曲節は固よりこの人の工夫で、歌詞にもその作があつたらしい。歿時享年共に明かでない。元祿・寶永を限りに廢れたものの如くである。【歌の集】元祿十二年刊行の「はやり歌古今集」(別項)を代表作とする。珍しい歌に富むので、その目錄を示す。

十二段左馬頭　野郎萬歲　大山寺歌說經
小歌淨瑠璃　苅萱歌念佛　本かはり歌念佛
神おろしやつし　苅萱歌說經　小町のくどき
小栗のくどき　山椒太夫のくどき　清十郎ぶし
せい〳〵ぶし　暦ぶし　やひこぶし
蟬ぶし　いろはぶし　むこ島ぶし
さんさぶし　柴賣ぶし　唐辛ぶし
山のうへぶし　有馬ぶし　同かはり
長松ぶし　木津ぶし　葛のうら葉ぶし
磯のみるめぶし　ところぶし　天下ほとゝぎすぶし
ずんぼろぶし　三河ぶし　敦盛ぶし
あひの山ぶし　うらやぶし　峰の松風ぶし

歌念佛や歌說經(各別項)の文句は、これによつて想察の緖を得る。又寶永元年刊の「落葉集」(別項)卷六に、この人の唱歌十八篇を載せてゐる。同じく目錄を示す。

小栗馬之段　朝比奈　隅田川說經
富士之嵐　みうれし　鼠の書寢
蓮華經　老ぼれ枕　牛の綱
ぐんない八丈　有馬の松　いろは
天の川　山時鳥　稻荷參り
浮世言葉　茶のみ時　さいの川原

左に淨瑠璃類にしば〳〵引用されたもの二三を採つて例にする。

清十郎ぶし

フシむかひ通るンは引。とゝんとどつこい。清十郎ぢやないか引　笠がよくハル似ンた引　とゝんとどつこい。いよ菅笠引　がアへ。笠が似たンとて引　とゝんとどつこい清十郎であらは引　お伊勢參りは。皆清十郎引ゑ引　木かげ立寄り笠傾けて引　逢はでいのとはさりとはつらや引　にくや面憎やあこがれ來たに清十郎。殺ンさは引　とゝんとどつこいお夏も引　殺するゑ。

いろはぶし

中子供〳〵よ紙筆入取らしよ引上　いろはに。ちりぬるをわか引　わが世たれぞ常ならむ引　うゐのおく山なないも〳〵〳〵けふこえて。順禮ぶしかかりあさき夢みしゑひもせず京。鉢叩　宵にや和讚。夜中に法華經曉起きては融通の念佛紙衣〳〵。阿部川紙衣ゑ引。

有馬ぶし

記」「宇治橋斷碑」「船首王後墓版」「山名村碑」「妙心寺鐘」「藥師寺東塔擦銘」「威奈眞人大村墓志」「建多胡郡辨官符碑」「粟原寺鑑盤銘」「結知識碑」「佛足石記并歌碑」「聖武皇帝銅版詔書二通」「修多賀城碑」「涅槃經碑」等、及び附錄として「興福寺銅燈臺銘」「神護寺鐘銘」「道澄寺鐘銘」、すべて三十二種を收めてゐる。金石文の研究は既に棲齋以前に始まつてゐたが、この書は能に博搜洽載を期したものでなく、採寺切等數種がある。(書道參照)　〔伊木〕

古今夷曲集　こきんいきよくしふ　狂歌集　十卷四册

【編者】生白堂行風【刊行】寛文六年大阪安田十兵衞開版【解說】その名の如く古今の夷曲(狂歌)を蒐めた撰集で、春・夏・秋・冬・神祇・離別及羇旅・戀・雜上・雜下・釋敎の十卷に分ち、作者二百四十一人、歌數千五十餘首を載せてゐる。この書は編者が勅許を得て編纂し、刊行の後これを天覽に供したといふ次に本書の由來を記した跋文があつて、榮雅の講釋本を年來の知音速水親祐に傳授するとあり、最後に雅俊から親祐に傳授する意味の系圖があるから、この跋文も雅俊の書いたものらしく、雅俊は榮雅の講釋本に本書を添へて親祐に讓つたのであらう。然るに跋文の後半に、「愚比丘餘七十」とあつて永錄四年の日附があるが、雅俊は大永三年(一二八三)六十二歲にて周防國に薨じた(公卿補任)から、右の事は信ずべきものである。本書は俳諧歌・狂歌・俗謠・俗語・俗文・俗事・俗物・俗人・俗言・俗行・俗心・俗情・俗風・俗俗・俗俗・俗俗

中松になりたや有。馬の松に引藤にまかアれて引寢とごヲ寢とござる引　まかれて藤に引　藤にまかアれて引　寢とごヲ寢とござる引　情ありまの花のゑん引。

木津ぶし

酒は酒屋によい茶は茶屋に女郎は木辻の。ヲ鳴川に。ないそなゝいそさ月にやもどるおそて六月中。ごろに引。丁が丁ならならびの丁なら。逢ひもしよずもの引見もしよずものを。せめて添はずと引。ヲ見もしよう。をものを。

【參考】日本歌謠集成卷六高野辰之○落葉集大木扇德〔高野〕

古今餘材抄（こきんよざいせう）　註釋書　十卷　册數不同【著者】契沖【名義】「萬葉代匠記」の餘材によつて成つたものとの意。【成立】著者は下河邊長流が「菅家萬葉集」「古今六帖」等で異同を註してゐた「古今集」の校本に據つて「代匠記」著述の傍ら得た見解を記しつけて、元祿の初め頃本書を撰した。その後漸次書き入れを加へ、元祿四年八月一校を了つたが、錯亂が多く自らも讀み難くなつたので、兄の如水に淨書を賴み、自ら校訂を加へて翌年八月二十五日完成したのである。隨つて本書の傳本には、元祿四年の年號のものと同五年の年號のものとの二種があるが、前者は河島氏藏の自筆稿本のみ現存する。【諸本】(一)契沖全集卷五所載本十卷。(二)註釋全書本。眞名序の註を缺く。(三)寫本には、契沖の兄如水の淨書本(十册、大阪府立圖書館藏)、契沖自筆稿本(闕本、八册、河島豐太郎氏藏)、契沖自筆淨書本(十册、德川侯爵家藏)、加藤枝直自筆本(闕本。五册卷十五迄、帝國圖書館藏)、荒木田經雅自筆本(十册、神宮文庫本)、清水濱臣手校本(闕本)、眞淵・宣長の說を書き加へ、宣長の跋文のある頭書古今餘材抄、二十册、神宮文庫藏)。その他如水本の轉寫本が多い。【解說】本書は「古今集」の兩序並びに歌の全部について、詳密な考證的な研究を加へたもので、古今集新註の鼻祖をなすものである。先づ「古今集」の本文に於ては、「菅家萬葉集」「古今六帖」の外「和漢朗詠集」、諸家集及び「顯註密勘」(各別項)の本文等によつて異同を考勘し、註に於ては在來の研究を綜合して批判を加へると共に、あらゆる古文獻を引用して實證的に論斷し、本文研究と註釋との兩方面から註釋を大成したのである。彼が參考した「古今集」註釋書は、顯昭の序註及び「顯註密勘」「榮雅抄」「兩度聞書」(各別項)の四書であるが、前二者は書名を明記し、概して重視してゐるに對し、後の二者は或註・或說・或抄として引用し、多くの場合否定を加へてゐる。彼は後の二者の傳襲的な註釋を排して、寧ろ定家以前の古註を信じたやうである。一條禪閤の說も引用されてゐるが「榮雅抄」から孫引したものであり、俊成の「古來風體抄」(別項)は必ず引用してゐるが、或は「兩度聞書」に據つて引用したかも知れない。彼が博引旁證に用ひた古文獻は和漢に亙つて數十書に及んでをり、多少は孫引もあらうが、大部分は彼自ら涉獵したのであらう。本書は「古今集」の註釋書として完成したものではなく、研究方面としても景樹・高尙の扱つた如き歌の批評に就いては餘り精細ではないが、全體として後の研究家の標準となつたのである。ただ本文の考勘に於て「古今集」の異本を系統的に用ひる事を考へないで、「古今集」以外の歌集に據つたために、却つて「古今集」としての本文を亂す因を作つたのである。【類書】續萬葉論二十卷、賀茂眞淵全集第一增訂本卷七所載。「餘材抄」をやゝ簡にしたものであつて賀茂眞淵が編んだものであるが、後の人が、頭に諸家の說を書き入れてゐる。「續萬葉論」の本文は歌を全部揭げず、初句・作者・詞書の一部のみを揭げ、複雜な引用文を省いてゐる。書入の說には宣長のが最も多く、士清のは少く、春滿・眞龍・敏・綱・經雅等もあり、大部分は名を擧げてゐない。

【參考】國文學研究史　野村八良○契沖傳久松潛一（契沖全集第九）〔西下〕

古今六義諸說（こきんりくぎしよせつ）　歌學書　一卷【著者】小澤蘆庵【成立】帝國圖書館に自筆本があるが、その終りに寛政六年八月書いたとある。【解說】「古今集」序の六義說は中世以降、歌書に引用され論議されたことは屢々であるが、この書は公任・清輔・顯昭・契沖等の說を基とし、自說を述べたものである。この書を書いたについて、「多年古今を以ていにしへを照し、又後世をてらして、この姿に似たるをよしととり、似ざるをあしとのぞきたるは貫之主が歌しらべる心にならはんとなり」といひ、續けて「中につきて序は歌の大本言の初を說ければ、くだりての世に家々の髓腦、高家名家の庭訓口傳とてもこの意をもれたることなき、その根本なればあまたたび是を同志の人にかたるとて云々」と云つてゐるのは、彼が「古今集」を尊んでゐたこと、又その序文を藝術論として敬重し、それに對する古來の諸說を集めて研究してゐたことを物語つてゐるのである。【價値】「古今集」序の六義說について言及したものは、古來尠くないが、それ等を集成し、一部の書として纏めあげたのは、彼の「古今集」崇拜の念からなされたことで、この書中に明かにその事を言明してゐるのは、學術的なものとして以外、彼の歌論の方向をも指示してゐるものとして注意すべきである。六體論についてはこの書の外に、中臣由伎麿に「むつのことわりのかうがへ」(天明二年)があり、源維光は師栗原氏の說の聞書「からうた六くさの解」(寛政十一年)を出し、同年、度會常夏は「六義口訣」一卷をつくり、少しおくれて高橋殘夢は「和歌六體考」を書いてゐる。かくの如く近世後期には六義說に對して單獨に取扱つたものもいくつか出たが、この書はその中に於て重要なものの一つである。〔藤川〕

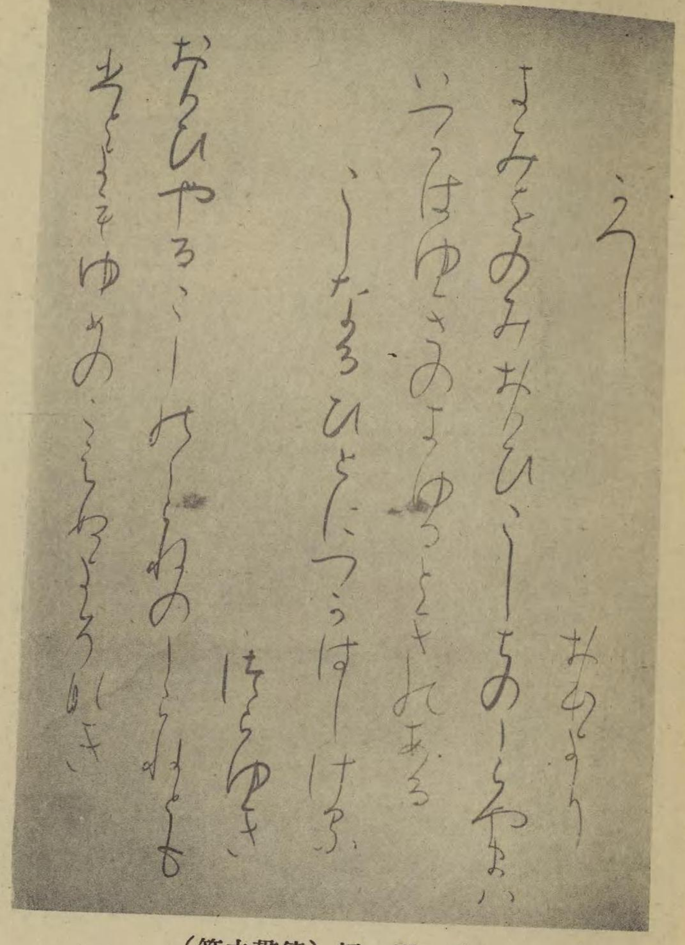
古今六帖（こきんろくでふ）「古今和歌六帖」を見よ。

古今和歌集（こきんわかしふ）　勅撰集　二十卷（一册又は二册）【撰者】友則・貫之・躬恒・忠岑【序】假名序、貫之撰。眞名序、淑望撰。【名稱】普通は漢音にて「コキン」とよむが、本來は、吳音にて「ココン」とよむべきである（安齋隨筆）。隆家は「ココン」とよんだ（爲家抄）。普通には略して「古今集」といふ。【別名】續萬葉集（眞名序）【名義】古は萬葉集以後を、今は撰集當時をさし、萬葉集以後當時に至る迄の歌を集めたものとの意。開卷の歌「年の內に春は來にけり」に、古今の二字が含まれてゐる（兩度聞書）。【成立】延喜五年、詔が下つて各自の歌を奉り、併せて萬葉集以後の歌を撰ばせ給うた。「貫之集」に、「延喜の御時やまと歌しれる人々（イをめして）いま昔の歌奉らしめ給て承香殿のひんがしなる所にてえらばしめ給ふ、始めの日（イ無）夜ふくるまでとかくいふ間に御前の櫻の木に時鳥のなくを四月の六日の夜なれば云々」（類從本）とある。而して假名序には四月十八日詔が下つたとあり、眞名序には「四月十五日臣貫之等謹序」とあり、前揭「貫之集」には四月六日撰を始めたとあつて、

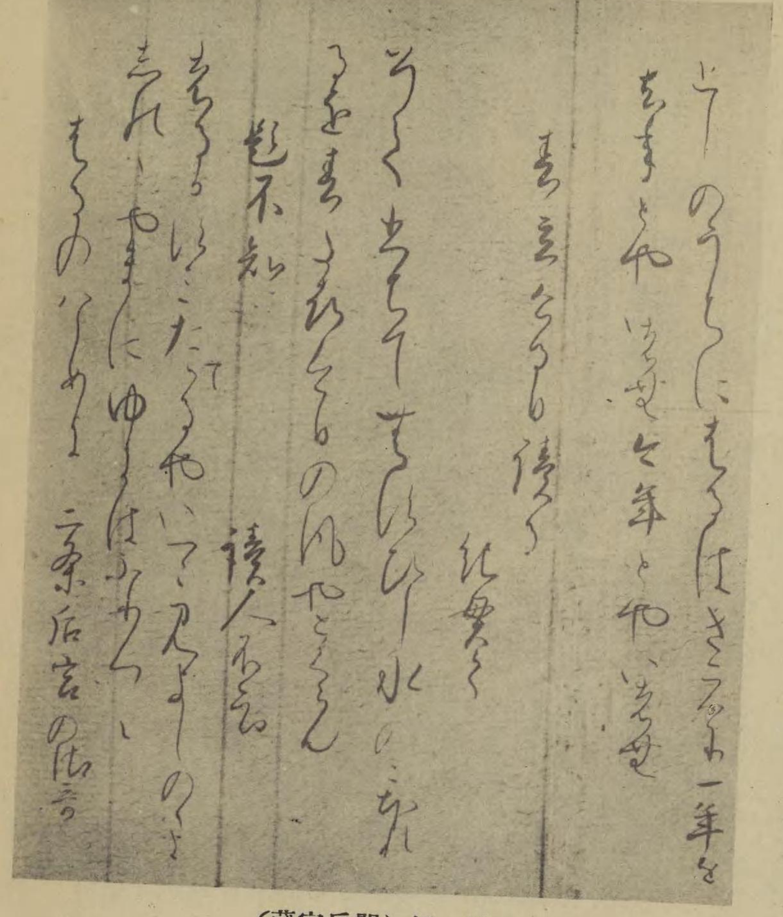
全集卷五所載本十卷。(二)註釋全書本。眞名序の註を缺く。(三)寫本には、契沖の兄如水の淨書本(十册、大阪府立圖書館藏)、契沖自筆稿本(闕本、八册、河島豐太郎氏藏)、契沖自筆淨書本(十册、德川侯爵家藏)、加藤枝直自筆本(闕本。五册卷十五迄、帝國圖書館藏)、荒木田經雅自筆本(十册、神宮文庫本)、清水濱臣手校本(闕本)、眞淵・宣長の說を書き加へ、宣長の跋文のある頭書古今餘材抄、二十册、神宮文庫藏)、その他如水く、研究方面としても景樹・高尙の扱つた如き歌の批評に就いては餘り精細ではないが、全體として後の研究家の標準となつたのである。ただ本文の考勘に於て「古今集」の異本を系統的に用ひる事を考へないで、「古今集」以外の歌集に據つたために、却つて「古今集」としての本文を亂す因を作つたのである。

【類書】續萬葉論二十卷、賀茂眞淵全集第一增訂本卷七所載。「餘材抄」をやゝ簡にしたものは、彼が「古今集」を尊んでゐたこと、又その序文を藝術論として敬重し、それに對する古來の諸說を集めて研究してゐたことを物語つてゐるのである。

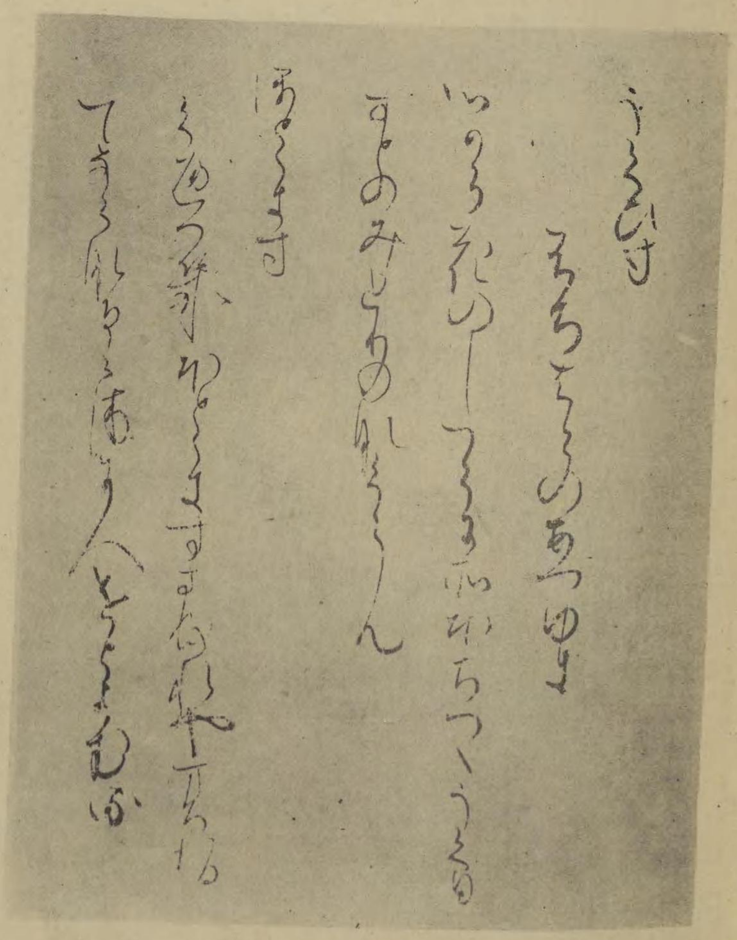
【價値】「古今集」序の六義說について言及したものは、古來尠くないが、それ等を集成し、一部の書として纏めあげたのは、彼の「古今集」崇拜の念からなされたことで、この書中に明かにその事を言明してゐるのは、學術的なものとして以外、彼の



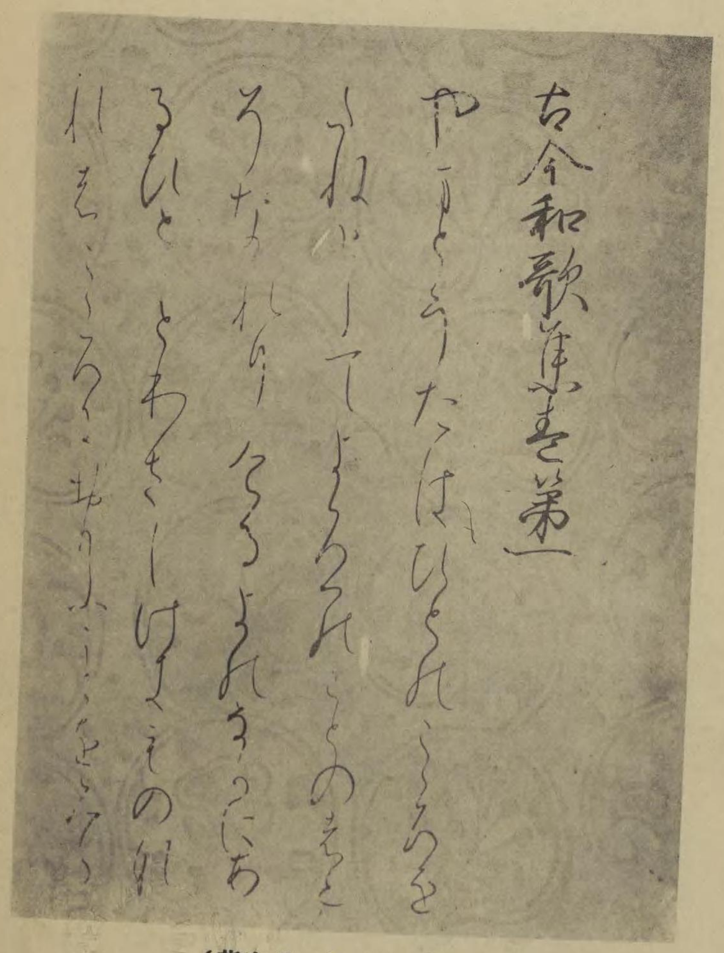
高野切（傳貫之筆）



筋切（關戸家藏）



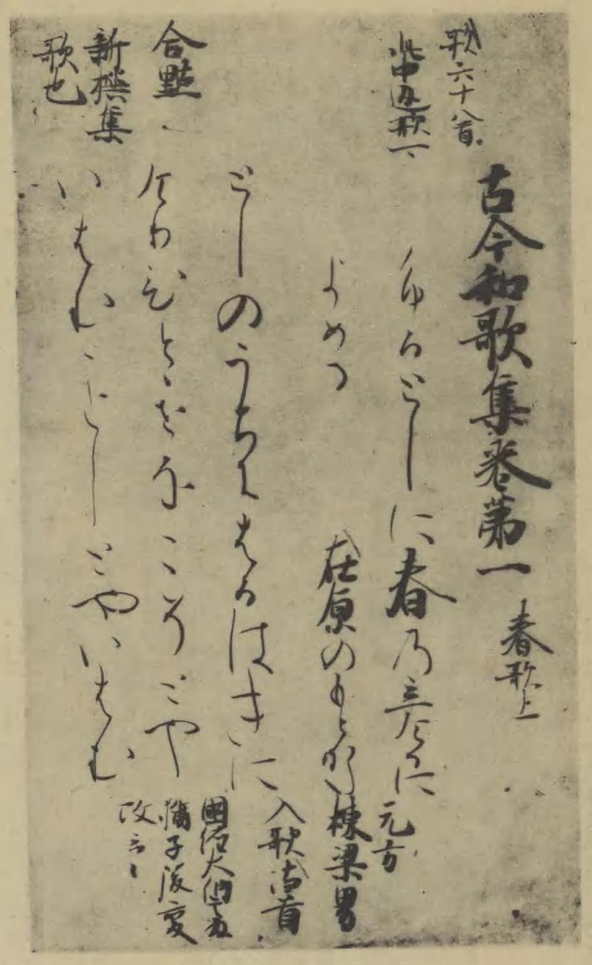
切彌阿本



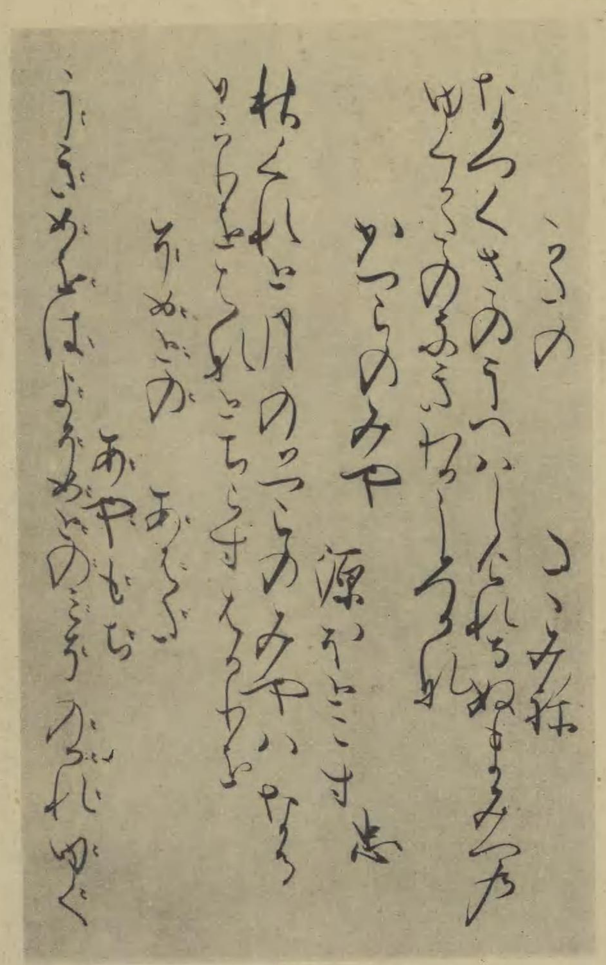
元永本（三井家藏）

給うた。「貫之集」に、「延喜の御時やまと歌しれる人々（イをめして）いま昔の歌奉らしめ給て承香殿のひんがしなる所にてえらばしめ給ふ、始めの日（イ無）夜ふくるまでとかくいふ間に御前の櫻の木に時鳥のなくを四月の六日の夜なれば云々」（類從本）とある。而して假名序には四月十八日詔が下つたとあり、眞名序には「四月十五日臣貫之等謹序」とあり、前掲「貫之集」には四月六日撰を始めたとあつて、

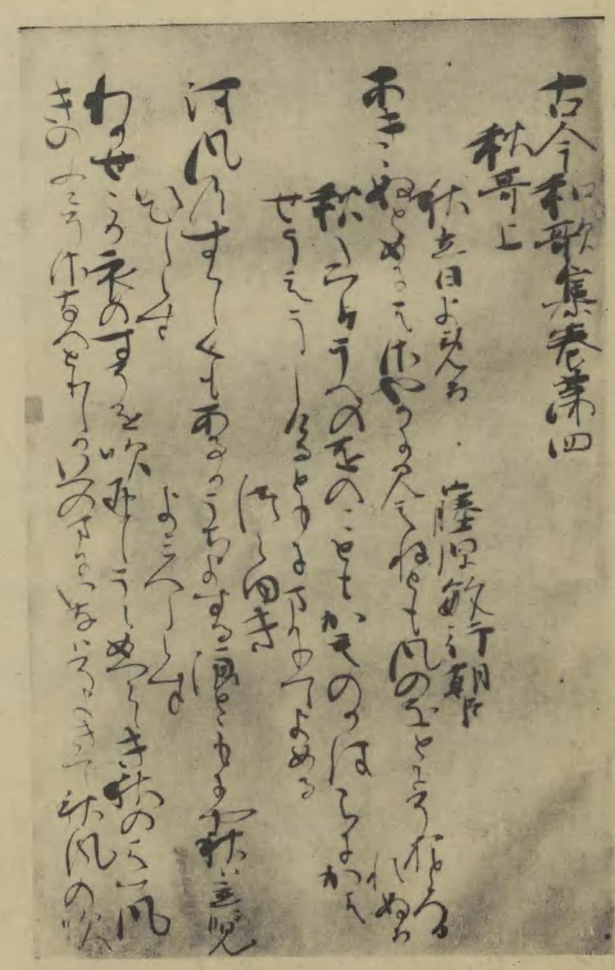
二　古今和歌集寫本



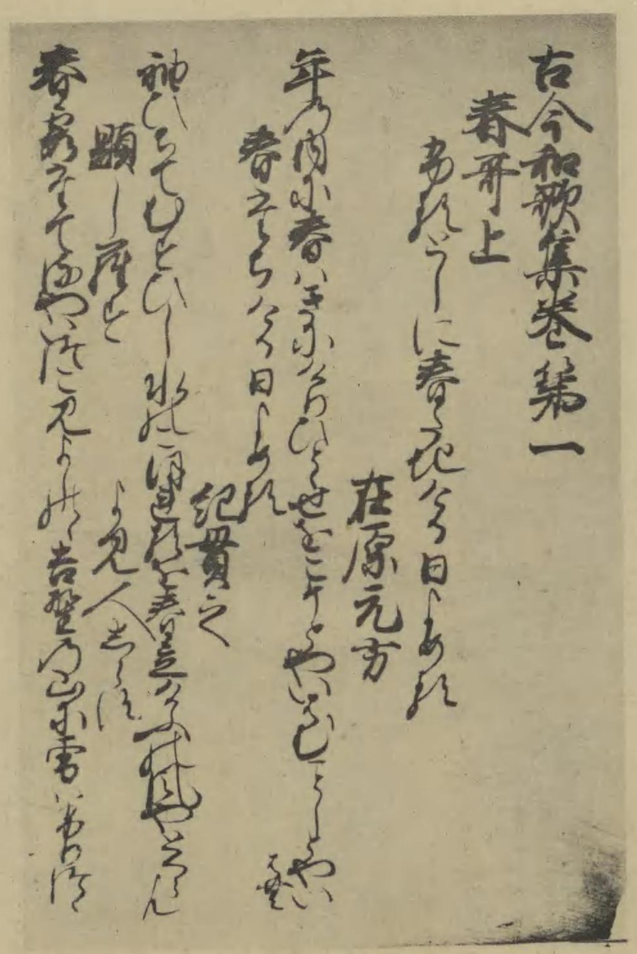
清　輔　本（前田侯爵家藏）



俊　成　本（榊原子爵家舊藏）



定　家　本（伊達伯爵家藏）



頓阿筆貞應本（宮內省圖書寮藏）

この接近した三日に別々の事柄が行はれたとあるので、その間の關係に就いて多くの假説が立てられる。然し眞名序の十五日は八と五とが草體で混同したもので、清輔本並に貞應本の古寫本には明かに十八とある。「貫之集」の六は十八の二字を一字に誤寫したものであらう（袋草紙）。然る時は、すべてが十八日に一致し、十八日に詔が下つて撰を始め、眞名序は十八日の氣持で書かれた事になる。奏覽は集中に延喜七年頃の歌があるから、それ以後であらう。始めは自撰で、[illegible]

家本の親本ともいふべく、眞名序は卷頭に墨滅歌は本文中にある。（四）定家本。（イ）貞應本。貞應二年の奥書があつて二條家の傳來本とされてゐる。江戸時代の刊本約三十種を初め明治以後の刊行物は、すべてこの系統に屬し、最もよく流布してゐるが、誤脫又は私意による改竄が多い。文和二年の頓阿自筆本によつた古今和歌集（藤村作編、一册、昭和三）は正しい貞應本に復したものである。（ロ）嘉祿本。嘉祿二年の奥書があり冷泉家の傳來本とされ

一〇人、女二六人）にて（古今集目錄）、六歌仙（別項）並に撰者が有名で撰者の歌は多い。その他敏行・伊勢（各別項）が特色がある。讀人不知の歌が四三一首（古今集目錄）あつて比較的古い時代のもの民謠的性質のあるもの等がある。歌の數は本により相違があるが、大略千百首前後である。撰集の方針としては「萬葉集」の歌は入れなかつたのであるが實際は二三ある。延喜五年以後の歌には、延喜七年九月十日の大井川行幸和歌が二首、同年六月八日七條后盥

となり、言葉の修飾が尊ばれた。懸詞・緣語などいふ言葉の上の洒落が起つて、永くその風を後代に殘すに至つた。本集の歌はかくして實生活から離れて遊戯的になつた。そしてまた理智的になつた。「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲けり咲かざる花の見ゆらむ」の如き、その一例として擧ぐる事が出來る。自然の美を直に美として歌はずに、靜かに理性を以て現はさうとしたのである。而して本集中最も數が多く、且つすぐれた作[illegible]

この接近した三日に別々の事柄が行はれたとあるので、その間の關係に就いて多くの假説が立てられる。然し眞名序の十五日は八と五とが草體で混同したもので、清輔本並に貞應本の古寫本には明かに十八とある。「貫之集」の六は十八の二字を一字に誤寫したものであらう(袋草紙)。然る時は、すべてが十八日に一致し、十八日に詔が下つて撰を始め、眞名序は十八日の氣持で書かれた事になる。奏覽は集中に延喜七年頃の歌があるから、それ以後であらう。始めは組織がなくて「續萬葉集」といひ、後に部類を施し、二十卷として「古今集」と稱したといふから、撰集には相當の日子を要し、奏上の日は奉詔の日ほど判然としてゐないであらう。【諸本】異本が多い。(一)元永本。二册寫、三井家藏、その一部を摸刻したもの(明治四三)、全部を活字に組み定家本との相違を明記した和裝本(尾上八郎校訂、二册、大正一一)、同樣な校註古本古今和歌集(尾上八郎校訂、一册、大正一五)等がある。原本は元永三年七月二十四日の日附があつて書寫年代とされてゐる。内容は定家本と異なり、歌數が多く語句の相違が甚だしい。眞名序はなく古註は本文として取扱はれてゐる。(二)清輔本。二册寫、昭和三年、育德財團から刊行された前田家本(寫眞活字兩樣)や嘉永六年刊の三代集本等がある。清輔は永治二年・仁平四年・保元二年等、度々書寫を繰返してゐるので、同じ清輔本にも少異があり、刊行された前田家本は保元二年本に屬する。この本は平安時代の異本數種から成つてをり、内容は定家本に近く眞名序と古註は清輔が書き加へた。(三)俊成本。二册寫、圖書寮藏、永曆二年俊成が崇德院御本と基俊本に依つて書寫したものの系統にて、定家本の親本ともいふべく、眞名序は卷頭に墨滅歌は本文中にある。(四)定家本。(イ)貞應本。貞應二年の奥書があつて二條家の傳來本とされてゐる。江戸時代の刊本約三十種を初め明治以後の刊行物は、すべてこの系統に屬し、最もよく流布してゐるが、誤脱又は私意による改竄が多い。文和二年の頓阿自筆本によつた古今和歌集(藤村作編、一册、昭和三)は正しい貞應本に復したものである。(ロ)嘉祿本。嘉祿二年の奥書があり冷泉家の傳來本とされてゐる。眞名序がなく、假名序の古註に「あさか山」の歌がある。尾上八郎氏所藏本によつた岩波文庫「古今集」(同氏校訂、一册、昭和二)がある。(ハ)嘉禎本。建保二年及び嘉禎三年書寫の奥書のある吉川家舊藏の一本がある。(イ)(ロ)(ハ)はその内容が殆ど同じいが、(イ)(ロ)の奥書は僞作らしい。(五)高野切・筋切・行成筆切・本阿彌切等(すべて刊行)は、皆異本の斷片である。

【内容】部類を春(上下)・夏・秋(上下)・冬・賀・離別・羇旅・物名・戀(一―五)・哀傷・雜(上下)・雜體・大歌所御歌に分ち、雜體に長歌・旋頭歌・俳諧歌を收めてゐるが、名稱は本に依つて相違がある。卷頭に假名序があり、大歌所御歌には神樂歌等の謠はれた歌を擧げてある。本には卷後に眞名序がある。兩序の成立關係に就いては諸説があるが、「古今集」に附加せられたのは眞名序が後である。清輔のいふ陽明門院本は序がないので、奏覽本は序がなかつたかとしてゐる。定家本には集末に墨滅歌がある。歌の形式は短歌・長歌・旋頭歌の三種があるが、短歌が大部分で長歌は僅に五首である。色彩の異なる歌に物名歌・俳諧歌・大歌所御歌がある。作者の數は百二十二人(内僧一〇人、女二六人)にて(古今集目錄)、六歌仙(別項)並に撰者が有名で撰者の歌は多い。その他敏行・伊勢(各別項)が特色がある。讀人不知の歌が四三一首(古今集目錄)あつて比較的古い時代のもの民謠的性質のあるもの等がある。歌の數は本により相違があるが、大略千百首前後である。撰集の方針としては「萬葉集」の歌は入れなかつたのであるが實際は二三ある。延喜五年以後の歌には、延喜七年九月十日の大井川行幸和歌が二首、同年六月八日七條后溫子の崩御を悼み奉る伊勢の長歌があつて、「奏覽」を延喜五年とする説では、後年貫之が書き加へたものとしてゐる。假名序は名文として假名文の手本とされ、立派な歌論とされ、又「萬葉集」撰修時代の考察に引用されてゐる。

【批評】剛健な素朴な荒削りな「萬葉集」の後を承けた本集は、優美となり纖麗となり平安貴族趣味に和らげられ磨かれて來た。もとより「古今集」は長い間の歌を含み、大體これを讀人不知時代の歌と六歌仙時代の歌と撰者時代の歌との三期に分つ事が出來る。讀人不知時代は萬葉的から古今的への推移の長い時代であつて未だ萬葉的な素樸性が多い。六歌仙時代の歌は業平・遍昭・小町等六歌仙と言はれる歌人の時代であつて、次第に技巧的にはなつて來たが、情熱の自然の表現としての技巧であつて、技巧的形式的にとらはれてゐない。撰者時代の歌は理智的になり、技巧にとらはれて來た觀がある。それは古今的歌風の中心となつてゐるやうにさへ見られる。さうしてこれ等の「古今集」全體を通じた著しい現象として情緒の反省化といふことが考へられ、それが情趣的傾向となり觀念的傾向を生み出してゐる。この傾向が表現としては種々の技巧となり、言葉の修飾が尊ばれた。懸詞・緣語などいふ言葉の上の洒落が起つて、永くその風を後代に殘すに至つた。本集の歌はかくして實生活から離れて遊戯的になつた。そしてまた理智的になつた。「春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲けり咲かざる花の見ゆらむ」の如き、その一例として擧ぐる事が出來る。自然の美を直に美として歌はずに、靜かに理性を以て現はさうとしたのである。而して本集中最も數が多く、且つすぐれた作の多いのは戀の部で、前後五卷に亙つてゐる。當時兩性間の關係がいかに重大視されたかが分る。しかもその多くは「歎く戀」「破れたる戀」を歌つて、その惱み、悲しみを抒べてゐる。「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬるものを」「忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけに物ぞかなしき」の如く悲觀的消極的の作が多く、本集の特色を示したものである。なほ洗練された言葉や言ひ廻しから來る流れるやうな調べの快さは、「古今集」の歌の重要な特質であらう。「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」などにもよく現はれてゐる。ただその調が雄大な點や靜寂な深みに乏しくて、優美纖弱にのみ止まつてゐる點は短所とすべきであらう。【史的地位】平安朝初期は漢詩文が流行し、弘仁・貞觀の頃には勅撰詩集を見るに至つたが、漸次純粹な國民的感情が釀成され、それを自由な假名で表現しようとする自覺的な機運が起つてきた。「古今集」以前にも和歌集は二三あり、和歌を朝廷に上ることもあつたが、それ等を綜合して國文學の形を明瞭に示したものは「古今集」であ

る。この點、和歌史の中に於ては勿論のこと、國文學史上に於ても甚だ樞要の地位を占むるものである。

【註釋書】〔歌學書の中に他の歌集の歌と共に註釋されたもの〕俊頼口傳二卷又は五卷藤原俊頼（俊頼髓腦とも俊祕抄とも）○奥義抄三卷藤原清輔（下釋の中に百十六首の註がある）○古來風體抄二卷藤原俊成○秀歌之體大略二卷藤原定家○和歌色葉集三卷上覺〔辭書風に他の歌集の歌と共に註釋されたもの〕袖中抄二十卷顯昭○色葉和難集五卷慈鎭（？）〔他の勅撰集の歌と共に註釋された獨立の註釋書〕僻案抄○八代抄（各別項）。〔古今集の註釋書として獨立したもの〕古今集灌頂部祕歌百十六首注一卷清輔（奥義抄の註を獨立させたもの）○古今和歌集註三卷敎長（原本は京都帝國大學藏、珍書同好會刊行。古典全集古今集の附錄）（敎長參照）○顯昭註古今集四卷顯昭（顯昭參照）○顯註密勘三卷（別項）定家○古今抄四卷（定家・家隆の說を併記してゐる。廣島高等師範學校藏）○古今集爲家抄八卷爲家（弘長三年宗尊親王に進覽したものにて、爲家の述作なる旨正安三年の奥書がある。大阪府立圖書館藏。なほ嘉祿本に書き入れたものもある。神宮文庫本十卷は內容が異る）○古今祕註十二卷（爲家抄・顯昭說を引用したもの。圖書寮藏、京大本は末卷缺）○古今和歌集註六卷（木文も註も清輔・定家の兩派を合せてゐる。毘沙門堂藏）○古今集註二卷親房（彰考館、竹柏園等所藏、序註は續群書類從四五二に所載）○古今和歌集註二卷惠梵（應永三十年成。內閣文庫藏）○古今和歌集註一卷淨辨（圖書寮藏）○古今集序注十卷了譽（五册、明暦四年成）○古今集童蒙抄（別項）○古今榮雅抄（別項）○古今抄延五記二十一卷堯惠○古今聞書一卷（圓雅から常縁に傳へたもの、六卷抄とも行乘聞書とも。內閣文庫藏）○古今集兩度聞書六卷（別項）宗祇（類書に古今集古聞・延五祕抄・十口抄・古今血脈抄・古今集正義等がある）○古今傳授抄六卷（肖柏の說を中心として諸註を集成したもの。京都府立圖書館所藏）○傳心鈔三卷實枝（元龜三年の聞書で、天正四年の奥書がある。圖書寮所藏）○古今智囊三卷實條（慶長二年中務親王に進覽したもの。阿波國文庫藏）○古今和歌集聞書三卷智仁親王（慶長五年の御聞書、兩度聞書の系統。圖書寮藏）○古今仰戀十卷廣澤長孝（兩度聞書の系統）○古今增抄十四卷萩原貞辰（寶暦三年成。古註を集成したもの）○古今餘材抄（別項）○古今通二十卷五井純禎（加藤景範刪補、契沖の說を用ふ）○古今和歌集打聽（別項）○古今和歌集遠鏡六卷（別項）宣長○古今和歌集ひなことは六卷尾崎雅嘉○古今和歌集兩序鄙言二卷同上○古今和歌集朗解八卷宮下正岑○古今和歌集新釋十三卷藤井高尙（明治四十四年刊、四册、卷六冬の部卷、十四戀四の部以下を缺く）○古今和歌集正義二十卷（別項）○古今和歌集評釋一册金子元臣○綜合古今和歌集新講上卷一册三浦圭三。〔特殊研究書〕古今誹諧歌解一卷各務支考（元祿十年成。天明二年刊）○先入抄一卷渡忠秋（大歌所御歌を註したもの。明治十四年刊）○古今和歌集目錄（別項）○古今集隱名作者次第一卷（萬治元年刊。續群書類從四五三所載）○古今集眞名字解四卷菊池春林（萬葉風に書き改めたもの。安永三年刊）（歌道傳授參照）。

【久松・西下】

【參考】〔一般的研究〕古今和歌集研究尾上八郎（日本文學講座）〔古寫本古筆切の研究〕歌と草假名尾上八郎○平安朝時代の草假名の研究尾上八郎〔傳本註釋書の研究〕古今集傳本の系統論西下經一（國語と國文學昭和四ノ一）○國文學研究史野村八良〔批評的研究〕和歌史の研究佐佐木信綱○文學論としての古今和歌集序荒木良雄（國語と國文學昭和三ノ四）〔書目〕類聚名物考山岡俊明○群書一覽尾崎雅嘉○大日本歌書綜覽福井久藏〔斷片的研究〕袋草紙○八雲御抄○拾芥抄○二中暦○井蛙抄〔その他〕大日本史○大日本史資料○廣文庫○群書索引○隨筆索引

吾吟我集（ごぎんわがしふ）　狂歌集　十卷二册

【著者】石田未得【刊行】寛文年間【諸本】寛文年間に出版したと云ふ原本は絶版となり、今世に傳はるものは、寶暦七年の飜刻（江戸伏見屋善兵衞藏版）である。なほその後、安永五年從東都求板、浪華柏原屋佐兵衞發行の一册と寛政八年初夏、浪華書坊河內屋八兵衞梓の一册とがある。【解說】未得の家集で「古今和歌集」をもぢつて題とし、なほその分類に倣ひ、春の歌七十八首、夏四十二、秋六十九、冬三十九、賀九、戀百四十五、世話五十三、羇旅四十八、雜百三十、回文十五首を載せ、卷首に「古今集」の序に擬した著者の狂文がある。その歌調は概して圓滑自在、滑稽百出、後世の狂歌にその範を示したものである。

〔野崎〕

古今和歌集打聽（こきんわかしふちぎき）　註釋書　二十卷册數不同【著者】賀茂眞淵講述、野村ともひ子筆記、上田秋成修訂。【名義】打聽は聞いたまゝを記したものとの意。聞書に同じい。【成立】野村長ひらの妻ともひ子は、幼時より毛利家に仕へ、奥方と共に眞淵の敎を受け、「古今集」の講義をも聽いて、これを筆記した。長ひらは妻を助けて筆記を刊行する計畫であつたが、目的を達せずして夫妻ともに歿した。長ひらの弟遜志はこれを遺憾とし、その友上田秋成に整理出版の事を囑した。筆記は大部分ともひ子が書いたものであるが、時に眞淵や宇萬伎が助力したのであつた。秋成は校訂にあたり眞淵の他の著書や宇萬伎から授けられた所のものを參酌し、ともひ子の筆記の次に自家の說を細書した。【諸本】（一）舊刻本五册・十册・二十一册（寛政元年刊）。（二）眞淵全集所收本（舊輯本第一、增訂本第七所收）。（三）校正古今和歌集講義二册（明治二十六年刊。打聽を改題したもの。石津經亮の後序がある）。【解說】本書は、假名序並に歌の全部について註したものであるが、口授であるから眞淵の「古今集」に關する他の著書とは形式が異なり、論證を省き、自他の說に區別を立てず述べてゐるが、要を得て初學者のために便利である。註は殆ど全部契沖の「餘材抄」（別項）を要約したものと云つてもよい。部分的には契沖說を極端に否定し、强ひて新說を出さうとしてゐる。併し眞淵の新說は思ひ付であつて、十中八九は牽强の說である。秋成の解說に依ると「顯昭註古今集」をも引用してゐるやうであるが、實は「顯註密勘」で、而も「餘材抄」から孫引したものらしい。「古今集」の本文については、契沖の集めてゐたやうな諸歌集の歌と考勘し、高野切を參照してゐるが、彼は自己の趣味から是非を論じ、假名序の如きも古註を除くと共に六義の例歌までも除き去らうとしてゐる。その結果、眞淵以後の「古今集」は、本文を隨意に改變してゐる傾向が見える。なほ本書は卷十八を高野切にて、假名序を紀氏筆本（今日の傳後鎭筆切）にて、異同を考勘してゐるが、これは秋成が試みたのである。本書は體裁の一貫してゐる點で「續萬葉論」より優るが、啓蒙的なものとしては、宣長の「古今集遠鏡」（別項）に及ばない。

【類書】（一）續萬葉論二十卷。（眞淵全集第一、增訂本第七所收）。「餘材抄」の說を要約して掲げ自說をも騈べ掲げ、古今傳授の說その他を問答體の形式で批判し、「顯註密勘」に於ける顯註と密勘との是非を論じたものである。自他の說を明かに區別し、「榮雅抄」「兩度聞書」も原本から引用してゐるが、記載の方法には一定の秩序がない。（二）古今集序表考一卷。同別考一卷。明和二年春成る。（眞淵全集第一、增訂本第七所收）。「續萬葉論」の序の部は契沖のかれ、雜以下は熊谷直好の聞書であつたが、自休の子長徑は戀以下を平假名に書き直したことなど記してゐる。【解說】本書の註は先づ正說を掲げ、然る後契沖・眞淵・宣長の說で少しでも過不足があれば明快に指摘してゐる。全註の形式ではあるが、註の無い歌もある。註の態度は歌の調子を重んじ、一氣に讀み下して得られる感動を深く考へ、作家の實際的な立場から觀念的な「古今集」の歌をなるべく「古今集」が、「古事記」「萬葉集」等の研究家によつて誤解されてゐる事を遺憾とし、歌を作る技倆又は心境に於て彼よりも劣つてゐる契沖以下の研究を慊らなく思つたであらう。

【末書】古今集正義總論補註一卷熊谷直好○古今集正義序註追考一卷同上○古今集正義總論補註論一卷八田知紀（以上續日本歌學全書第五編所載）。

【參考】國文學研究史野村八良

當の變化を受けてゐる事になる。而して清輔の調査と本書とが歌數に於て一致しないのは種々の事情があるが、一にはその用ひた「古今集」が系統を異にするためであり、同樣の理由で本書は「定家本古今集」にも正確には適合しないのである。本書にいふ「有他本無此本歌」は「元永本古今集」にはあるもの、「定家本古今集」の墨滅歌、「清輔本古今集」の書入歌等と考へられるものと、然らざるものとがある。

〔西下〕

增訂本第七所收)。「餘材抄」の説を要約して掲げ自説をも駢べ掲げ、古今傳授の説その他を問答體の形式で批判し、「顯註密勘」に於ける顯註と密勘との是非を論じたものである。自他の説を明かに區別し、「榮雅抄」「兩度聞書」も原本から引用してゐるが、記載の方法には一定の秩序がない。(二)古今集序表考一卷。同別考一卷。明和二年春成る。(眞淵全集第一、增訂本第七所收)。「續萬葉論」の序の部は契沖の説に眞淵の考を加へたものであるが、契沖の説のみを擧げたのが序表考、眞淵の考のみを記したのが別考で、序表考には「考別に有」と記してゐる。(三)三代集總説一卷。寶曆十二年成る。(眞淵全集第一、增訂本第七所收)。「古今集」の總説に於ては、古今傳授の系統并に内容を略説してゐるが、定家以前の系統には誤謬が多い。(四)古今集左註論一卷。寫、寛保二年九月金吾君(德川右衞門督樣)に捧げたもの、「ほのぼのと明石の浦」の歌の作者論并に「古今集註論」として假名序中の古註、讀人不知の歌の左に記した作者の註を三十九項に分つて論じてゐる。「古今集古註論」とした本もある。

【參考】國文學研究史 野村八良○國書解題 佐村八郎 〔西下〕

古今和歌集正義 こきんわかしせいぎ 註釋書 二十卷 【著者】香川景樹 【成立】天保三年(序文) 【諸本】(一)舊刻本九册。序正文・總論並びに序・春夏の部六册は天保六年刊、秋冬の部三册は嘉永二年刊。(二)完本四册。明治二十八年刊。終りに嘉永六年中川長徑の跋文があつて、賀以下大歌所御歌迄は草稿のまゝ中川自休に委託された。而して賀から物名迄は平假名で、戀から大歌所御歌迄は片假名で書かれ、雜以下は熊谷直好の聞書であつたが、自休の子長徑は戀以下を平假名に書き直したことなど記してゐる。【解説】本書の註は先づ正説を掲げ、然る後契沖・眞淵・宣長の説で少しでも過不足があれば明快に指摘してゐる。全註の形式ではあるが、註の無い歌もある。註の態度は歌の調子を重んじ、一氣に讀み下して得られる感動を深く考へ、作家の實際的な立場から觀念的な「古今集」の歌をなるべく實景的に考へ、そこに解釋の必然性を置いてゐる。例へば「袖ひぢて結びし水の氷れるを」は、よどみなく巡り行く月日を春立つ日に於てつら〳〵感じたのであるから、四季を具體的に詠んだものではない。「蛙なく井手の山吹」の「蛙なく」は冠辭ではないなどとしてゐる。彼は和歌の根本精神を深く感得してゐるので、自信をもつて解釋の原理を樹て得ると考へてゐるやうであるが(總論)、實際彼の「古今集」に對する見識は高く、「古今集」をその特質の上から考究した點では本書に優るものはない。併し餘りに精緻を求めたため、却つて牽强に陷つたものもある。例へば「一目見し君もやくると櫻花今日は待ちみて散らば散らなん」に於て、「待ち見て」は完了にて既に一日待つたと解釋し、「古今集」序正文に於て、ただ文章の統一性の上から勝手に本文を變更してゐる如きものがある。「古今集」は契沖以後大に研究されたが、その多くは「古事記」「萬葉集」等を通して古代精神を明かにする事に力を注いだのであるから、「古今集」の研究は餘技であつて、必ずしも中古精神を摑まうとする前提の下に「古今集」を註釋批評し、その特質を明かにしようとしたのではない。隨つて景樹が自家の歌風の上から最も大切な典據とする「古今集」が、「古事記」「萬葉集」等の研究家によつて誤解されてゐる事を遺憾とし、歌を作る技倆又は心境に於て彼よりも劣つてゐる契沖以下の研究を慊らなく思つたであらう。【末書】古今集正義總論補註一卷 熊谷直好○古今集正義序註追考一卷 同上○古今集正義總論補註論一卷 八田知紀(以上續日本歌學全書第五編所載)。

【參考】國文學研究史 野村八良

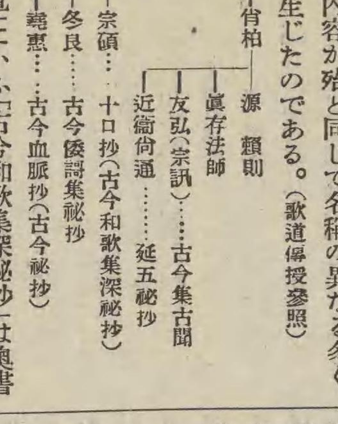
古今和歌集目錄 こきんわかしふもくろく 和歌 二卷 【著者】藤原仲實か(袋草紙・古今集註)。【諸本】群書類從卷二八五所收 【解説】本書は先づ「古今集」を各卷毎に歌數、他本の歌數、作者別の歌數、讀人不知の歌數を註し、次に全卷の歌を合せて千九十五首とし、次に「萬葉集」以下他の歌集・歌合等にも出てゐる歌數を記し、次に作者を合せて百二十二人とし、左註に見える作者十二人、詞書に見える作者一人を擧げ、これ等を身分に分つて各作者の歌數、所在を示し略傳を掲げ、次に讀人不知の歌四百三十一首、「有他本無此本歌」を總括してゐる。以上は分つて「古今集」の歌數の調査と作者略傳との二とする事ができる。而して前者は清輔も試みてゐる。即ち清輔は、「清輔本古今集」の書入に本書を引用し、歌數に於て自己の調査との相違を考へ、卷末にこれ等を總括してゐる。而して清輔の引用する所と、本書の現存本とは、大體に於て一致するが、文章に相違がある。殊に歌數は總數に於て引用文では千九十九首であるに對し、現存本は千九十五首であり、各作者の歌數に於ても相違がある。又顯昭が引用する所も現存本と少異がある。隨つて清輔・顯昭の引用する「古今集目錄」と本書とが同一であるとしても、相當の變化を受けてゐる事になる。而して清輔の調査と本書とが歌數に於て一致しないのは種々の事情があるが、一にはその用ひた「古今集」が系統を異にするためであり、同樣の理由で本書は「定家本古今集」にも正確には適合しないのである。本書にいふ「有他本無此本歌」は「元永本古今集」にはあるもの、「定家本古今集」の墨滅歌、「清輔本古今集」の書入歌等と考へられるものと、然らざるものとがある。なほ本書の作者略傳は「三十六歌仙傳」と一致するから何等かの關係があらう。この種の研究は「後撰集」「拾遺集」に佐國の目錄があり、「後拾遺集」に通俊の目錄があり(袋草紙)、後者は「中古三十六歌仙傳」に引用されてゐる。

【參考】國文學研究史 野村八良

古今和歌集兩度聞書 こきんわかしりやうどきき 〔西下〕 註釋書 六卷六册 【著者】宗祇 【名義】文明三年正月から四月までと六月から七月までと、二回に亙つて宗祇が東常緣から聞書したものとの意。【別名】古今和歌集抄 【成立】文明三年 【諸本】寛永十五年刊、萬治二年刊、六册。寫本も二三ある。【異本】古今集宗祇略抄二册。寫(大阪府圖書館藏)。文明十六年及び十八年の傳授にて「文六抄」ともいふ。内容は「兩度聞書」を簡約したもの。【類本】(一)古今和歌集古聞。肖柏より宗訊。六卷。寫(帝國圖書館・京都帝國大學等所藏)。(二)延五祕抄(古聞抄とも)。肖柏より近衞尙通。三册。寫。卷十六より卷十九迄の註を缺く。内閣文庫に二本を藏す。(三)十口抄(古今集聞書とも)。宗碩。二册又は四册。寫 圖書寮・東京帝國大學・大阪府圖書館等所藏)。(四)古今倭謌集祕抄。一條冬良。一卷。寫(神宮文庫藏)。(五)古今祕抄(古今集正義とも)。堯惠。五册。寫(東京

帝國大學藏)。(六)　古今血脈抄(古今和歌集聞書とも)。堯惠。八册。寫(彰考館藏)。

【解說】本書は古今傳授に伴ふ註釋書で、常緣から宗祇に「古今集」の祕義が傳授されると共に「古今集」全部の註釋書として傳へられたものであらう。二條家の「古今傳授」は、爲世・頓阿・經賢・堯尋・堯孝と傳はつて、常緣に及んだとされてゐるが(傳心集の血脈圖)、常緣は寬正三年圓雅から行乘の「六卷抄」を傳へられた(現存本古今聞書、六卷一册、寫、內閣文庫藏)から、本書はこの「六卷抄」が其礎となつてゐるであらう。宗祇は本書を左表の如く多くの弟子に傳授して、內容が殆ど同じで名稱の異なる多くの類書を生じたのである。(歌道傳授參照)



「群書一覽」にいふ「古今和歌集深祕抄」は奧書が「十口抄」と一致する。「血脈抄」と「古今祕抄」とは同じもので、延德四年十月二十六日堯惠の奧書があるが、內容は同日同人が藤原憲輔に傳へた「古今抄延五記」(二十一册、刊)とは異なる。この外「十吟抄」「宗長抄」「古今和歌集祕曲」(泰昭)「古今傳受聞書」同上)「永正記」(同上)「古今和歌集注口傳抄」(宗識)「一華抄」(切臨)「古今仰戀」(廣澤長孝)「逍遙院抄」「三光院抄」「傳心抄」(實澄)等は、この系統を追ふ註釋書である。これ等の註釋書の若干を合せ、系統のやゝ異なるもの及び古註を參酌して、或る程度の諸註集成をなしてゐるものに、「古今傳受抄」(六卷、京都府圖書館藏)、「敎端抄」(季吟、九册)等があり、契沖の「餘材抄」以下新註が出るやうになつても、古今傳授が行はれると共に、これ等の註釋書が用ひられたのである。なほ本書は序並びに歌の全註にて、註する歌を揭げるに一般には詞書並に作者名を省き、必要に應じて詞書・作者を示して註し、又作者の歌風を論じてゐる。說を擧げるに「當流には」とする事が多く、「予が聞書をかく直し云々」としたもの、肩に「御筆」と細書したものもあり、「御抄に委し」として說明を省いたものも多い。俊成・定家・顯昭の名も見えるが、恐らくは口傳であつて直接の引用ではなく、他書には見えない爲家の「明疑抄」なるものが引用されてゐる。【批評】註の態度は極めて主觀的で、一首の歌から作者の心を摑み、儒敎的な精神を抽出し、表現の上からも內面的なものを見出さうとしてゐる。例へば「春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬ限りはあらじとぞ思ふ」に於て「鶯を愛する心也」といひ、「霞たち木のめも春の雪ふれば花なき里も花ぞ散りける」に於て「君德のあまねきをそへてよめる也」といひ、「山高み人もすさめぬ櫻花いたくな侘びそわれ見はやさん」に於て「いたくな侘びそといへる如此の心は歌道の命也」と言つてゐる。一首の批評も「遠白き歌の樣也」「餘情ある歌」「心有る體」「たけ高き體」「幽玄の體」などの如く古い批評の方法を用ひてゐる。要するに本書は心をひそめて一首の歌の內面を深く掘り下げ、一首の歌から暗示される多くの精神を理解し、そこに調和を見出してゐるやうに考へられる。隨つて本書は契沖以下の科學的立場の學者には迎へられないが、景樹の如く「古今集」の精神を摑まうとした學者には共通する所がある。

〔西下〕

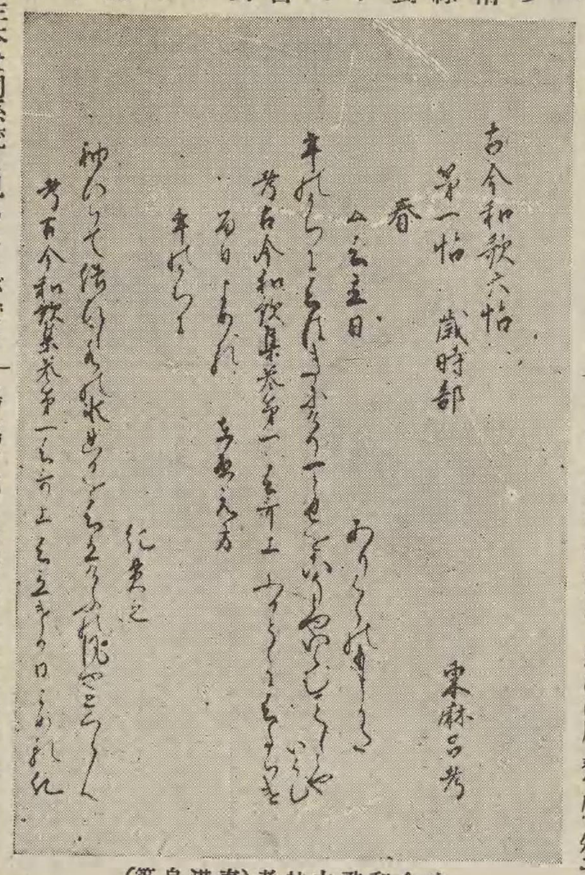
【參考】國文學研究史野村八良○類聚名物考○群書一覽○國書解題○大日本歌書綜覽

古今和歌六帖(こきんわかろくでふ)

類題和歌集六卷六册　【編者】不詳。古い說には貫之・貫之女・六條宮兼明親王の三說があるが、確たる證據はない。契沖は本集に引く「古今集」の歌が「古今集」と語句の相違を有する點で貫之女說を否定し、部類の方法から察して必ずや女性であつて男性でないといふことから、兼明親王說を否定してゐる。「古今和歌六帖標註」の著者山本明淸も貫之の歌に他人の歌、讀人不知の歌、甚しきは「萬葉集」の歌などのある點から貫之女說を否定し、部類の不完全な點から文人兼明親王說を否定し、假に同親王御撰に係る「六帖」なるものがあつても、こゝにいふ「六帖」ではないとしてゐる。眞淵は本集を「古今集」以前の成立と推定し、貫之女說を否定してゐる。【名稱】古くは單に「六帖」と稱し、略して「古今六帖」、別に「紀家六帖」ともいふ。【名義】古今は「古今集」に於ける場合の如くであるべく、六帖は卷數を示したものであらう。但し六は陰の代表數であり、三才の倍數であるので、意味の深い數として選び用ひたのであらう。契沖は「白氏六帖」に因んだものであらうと云つてゐる。【成立】後撰集後說と、古今集前說とがある。契沖は本集の歌で他の文獻に載せられてゐるものとの關係を調査して、成立年代を「拾遺集」以前、「後撰集」以後としてゐる。而して、「後撰集」は村上天皇の天曆五年であり、「拾遺撰集」は一條天皇の長德・長保頃の撰であるから、本集はその中間に於ける圓融天皇・花山天皇の頃の成立とし、或は花山天皇の寬和以後としてゐる。然るに眞淵は「萬葉集」より「古今集」に至る時代、即ち六歌仙の出現した時代に確かな歌集がないことを思ひ、「六帖」には、「古今集」よりも古調があると考へて、「六帖」を「古今集」以前の、右の時代の歌集であらうと推定した。なほ眞淵は「古今集」は本集を材料として用ひたことは「菅家萬葉集」の如く、「古今集」の歌と本集の歌とに於て語句の相違があるのは、「古今集」に入れる時改作したものであり、「古今集」以後の歌は後人が挿入したものであつて、第一・第五・第六の各帖が一卷としての分量より多いのはそのためであるとしてゐる。契沖・眞淵の說は、かなりの開きがあるが、本集を寬平頃の歌集とする眞淵說は、餘程無理な解釋であるが、契沖の考へるが如く、本集成立の動機には歌を作る上の便利のために古歌集から參考になる歌を拔き出し、題によつて分類して索引に便にしたものの必要があつたとする方が穩かである。即ち當時既に題詠に類する現象が起つてゐたと同時に、ものを分類する學問的な立場も起つてゐたと考へられるのである。又本集の大部分の歌が、「萬葉」「古今」「後撰」の三集の歌である點からして、本集の成立は「後撰集」撰修に際し、梨壺に於て「萬葉集」の訓釋を試み、「萬葉集」に對する興味が起つた頃以後であり、右の三集を「三代集」と稱して、未だ「三代集」に「拾遺集」を加へてゐなかつた時代と見る事ができる。又本集の歌は「源氏物語」に引歌として用ひられてをり、「繪入源氏物語」附錄の「引歌」によると、かゝる歌が凡そ二十三首あり、本集と「枕草子」との間にも關係があるらしく、「枕草子」が物を聯想的に記述してゐるのは、本集編纂の動機に於ける興味と同樣なものがあつたと察せられる。これ等によつて本集は文學極盛期には流布してゐたことがわかり、本集の成立を「拾遺集」以前とすることができ、同時にその以前としても、さほど古い以前ではなからうと察せられるから、契沖說が有力のやうに考へられる。【諸本】寬文九年刊本(大六册)には、前和歌所開闔源家長が嘉祿二年二月定家の本を借りて書寫し、定家本には解事がある由を聞いて他本を以て校合し家・人・佛事の八項、第三帖も地儀で、水の一項(細分)、第四帖は人事で、戀・祝・別の三項(別の內に旅・哀傷・雜體を含む)、第五帖も人事で雜思(戀の細分)・服飾・色・錦綾の四項、第六帖は草蟲木鳥の四項を收め、合計二十五項を更に細分して五百十六題とし、各題の下に相當する歌を揭げてゐる。この分類法は天地人に象どり、分類の實際には聯想によつてゐると

その他に於て、わが國の上代が佛意・漢意を以て解釋されてゐる誤謬を一掃せんがためには、まづ古語を明かにしなくてはならぬ。古語を明かにするには古歌によるの外はない。彼は彼が理想的國土として見出した我が古代を闡明し、日本文化の基礎を確立せんがために、歌道を唯一の根據とすると共に、その否ではあるが、それだけ興味もある點で、契沖が本集の著者を「才女」としてゐるのは卓見である。歌の總數は明淸の調査によれば四千四百七十一首、うち長歌九、旋頭歌十七。拾遺四十七首を加へると四千五百十八首、重出歌を除いて四千三百七十首、「袋草紙」にいふ四千六百九十六首とは、可なりの相違があるが、長歌・旋頭歌の數は一致する。ところで「萬葉

文學極盛期には流布してゐたことがわかり、本集の成立を「拾遺集」以前とすることができ、同時にその以前としても、さほど古い以前ではなからうと察せられるから、契沖説が有力のやうに考へられる。【諸本】寛文九年刊本（大六冊）には、前和歌所開闔源家長が嘉祿二年二月定家の本を借りて書寫し、定家本には僻事がある由を聞いて他本を以て校合した旨の奥書と、三年の後寛喜二年家長本によつて某が書寫した旨の奥書がある。内閣文庫藏本（五冊寫、昌平坂學問所舊藏）によると、右の家長奥書は一帖の奥にあつて、別に四帖の奥にも嘉祿三年三月家長の奥書があり撰者について「或説六條宮又貫之女子云云」と記してゐる。後者は山本明清が見た狩谷棭齋本にも見えてゐるから、以上三本は同系統と見ることができよう。明清の標註本は寛文刊本を底本とし、同系統ではあるが古寫本四本を以て校合し、その結果流布本に缺けてゐる十八首を補ひ、別に「夫木集」「河海抄」等に引用せられてゐる「六帖」の歌で現存本に見えないもの四十七首を拾遺として掲げてゐる。



古今和歌六帖考（春滿自筆）

【内容】第一帖は天象で、春・夏・秋・冬・天の五項、第二帖は地儀で、山・田・野・都・田舍・鳩・鶉、都には都鳥、家には雞、人には牛馬、水には水鳥・龜・魚・蛙等をも屬せしめてゐる。蟲鳥の項は別にあるが、棲息の場所から聯想されるものはその項下に掲げ、然らざるものを一括して蟲鳥の項下に掲げ、獸は別に項を立てないで、地儀について聯想されるもののみを、その項下に掲げたものであらう。本集はかく聯想によつて動物を棲息の狀態で取扱ひ、又別に動物の項を立ててゐるのは不統一家・人・佛事の八項、第三帖も地儀で、水の一項（細分）、第四帖は人事で、戀・祝・別の三項（別の内に旅・哀傷・雜體を含む）、第五帖も人事で雜思（戀の細分）・服飾・色・錦綾の四項、第六帖は草蟲木鳥の四項を收め、合計二十五項を更に細分して五百十六題とし、各題の下に相當する歌を掲げてゐる。この分類法は天地人に象どり、分類の實際には聯想によつてゐるところが多い。例へば、山には山に棲む鳥獸として山鳥・猿・鹿・虎・熊・むささび等をも屬せしめ、田には稲負鳥、野には雁・鷲・鷹・雉子・ではあるが、それだけ興味もある點で、契沖が本集の著者を「才女」としてゐるのは卓見である。歌の總數は明清の調査によれば四千四百七十一首、うち長歌九、旋頭歌十七。拾遺四十七首を加へると四千五百十八首、重出歌を除いて四千三百七十首、「袋草紙」にいふ四千六百九十六首とは、可なりの相違があるが、長歌・旋頭歌の數は一致する。このうち「萬葉集」の歌千百八首、「古今集」凡そ六百九十四首、「後撰集」三百五十五首、「拾遺集」百四十六首。作者の數は凡そ百九十三人とある。

【參考】新校古今和歌六帖　契沖（契沖全集六卷所收）○古今六帖のはじめにしるせる詞　賀茂眞淵（賀茂翁家集卷三）○古今和歌六帖標註　山本明清○袋草紙　藤原清輔○國文學研究史　野村八良○契沖傳　久松潛一　〔西下〕

國意考（こくいかう）

【成立・刊行】明和二年（六十九歳）頃脱稿。文化三年、淡海野公臺の「讀賀茂眞淵國意考」（天明改元五月撰）、及び橋本稲彦の「辨讀國意考」（文化三年九月記）を附し版行。賀茂眞淵全集第四卷所收。【内容】所謂佛意・漢意に對する國意を宣明しようとしたもので、著者のいふ國意とは、未だ佛・儒の影響を蒙らない純粹固有な日本上代の道であり、又、永遠に日本文化の基礎たるべきものであつた。かくて第一に、歌道を儒道と比較して、それが經世上にも有力である所以を述べ、第二・第三・第四に於ては、我が國の古代に於ける淳朴の風俗を稱揚して儒教の非を論じ、儒者達が日本文化史上に於ける儒教の功績として數へてゐるものを否定し、第五に於て再び歌道の經世上の價値を唱道してゐる。【價値】彼が所論の直接對象は、儒道對歌道の問題である。在來の神道その他に於て、わが國の上代が佛意・漢意を以て解釋されてゐる誤謬を一掃せんがためには、まづ古語を明かにしなくてはならぬ。古語を明かにするには古歌によるの外はない。彼は彼が理想的國土として見出した我が古代を闡明し、日本文化の基礎を確立せんがために、歌道を唯一の根據とすると共に、その否定の鋒先は何よりもまづ當時思想界の支配的位置に立つてゐた儒道に向けられねばならなかつた。かくして彼の闡明し得た國意は、人爲でない自然、理窟や名目でない事實、教訓でないまごころであり、その作用の特質は「生きて働く」圓滿緩漸にあつた。その天地自然を説くに當つては、なほ老子の無爲自然と混同するが如き思索の不十分を殘してゐたとはいへ、東麿の國學思想の發展として、古代闡明の第一歩を實現した功績は偉大であるといはねばならぬ。【影響】本書が出ると、間もなく淡海野公臺の「讀賀茂眞淵國意考」が出で、次いで眞淵門下なる僧海量の應答があり、文化三年には橋本稲彦の「辨讀國意考」が刊行され、更に天保四年には沼田順義の「國意考辨妄」（別項）が刊行されるといふやうに、漢學者との間に幾多の論爭を惹起してゐる。〔西尾〕

國意考辨妄（こくいかうべんまう）

國學書　【著者】沼田順義（三芳野檢校城長）【成立・刊行】さきに本居宣長の古道觀を論駁した著者が、更にその基く所は、賀茂眞淵の「國意考」（別項）にありとし、これを駁擊しようとしたもので、天保四年刊行。林煒その他の序四、後序一、何れも天保三年もしくは四年の作である。【内容】國意は皇國の意で、從つて聖天子の御心であり、神道でなければならぬ。その神道の中にゐて、佛・儒を誹るのは妄も甚だしいもの

で、儒教の如きは應神天皇の御心によつて移入奬勵せられたのであるから、既に神道であると云つてゐる。又眞淵は元來無學で、歌書・古言をしらべ、律令・格式・物語・歌道等には通じてゐるが、眞に國意を知らぬとなし、「國意考」から七箇條を抄し來つて、各條項について反駁を試みてゐる。【價値】東麿以來、眞淵・宣長等が神道を佛儒的影響から救はうとした精神を理解せず、ただ儒道辯護に努め、眞淵が立論の不用意を指摘してゐるのみで、國意闡明上には極めて貢獻の尠いものである。また級長戸風（別項）に於けると同じく、まだ「舊事紀」（別項）を典據としてゐて、この事は既に林焞の序にも非としてゐる。

【參考】級長戸風　沼田順義　○國意考　賀茂眞淵　○讀賀茂眞淵國意考　淡海野公臺　〔西尾〕

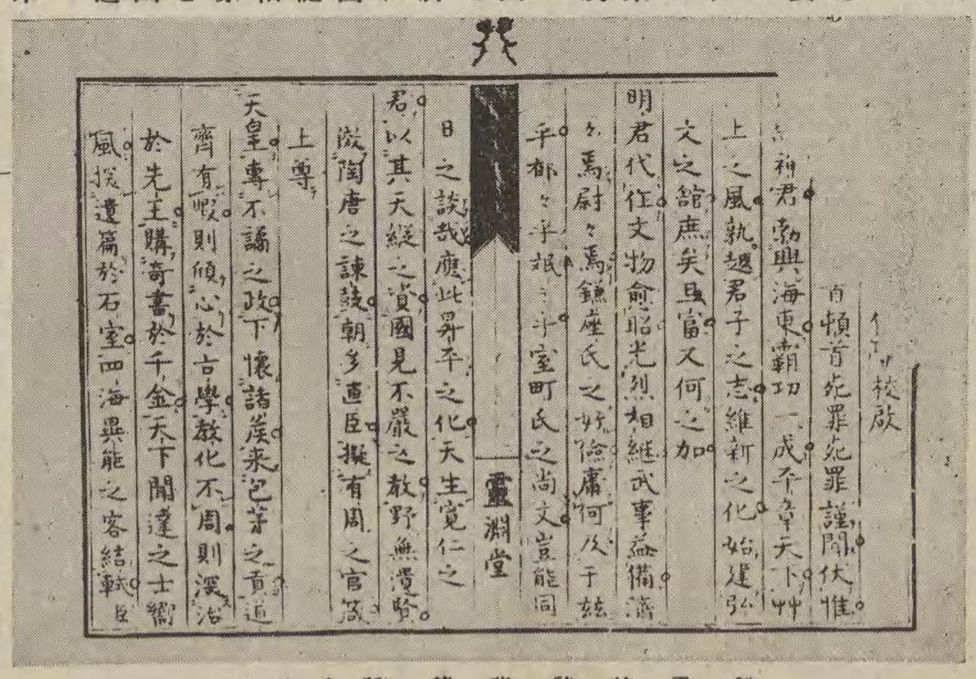
黑印狀（こくいんじやう）　「朱印狀」を見よ。

國學（こくがく）　學校　【名義】諸國の大學の意

【解說】大寶令の制によつて京都に大學（別項）が置かれると共に、諸國には國司の所管として各國學を置き、唐の州學に擬した。なほ太宰府には府學があつた。〔學生〕主として郡司の子弟を採用、不足の時は庶人からも採つた。何れも十三歲から十六歲まで。後には平城帝の諸王及び五位以上の者の子孫が十歲以上で入學したこともある（日本後紀卷十四）。在學期間は九箇年である。入學の初めには布一反と酒食を束修として、その師に納めることになつてゐた。在學中は、衣服・糧料を給せられたが、後には自費となつた事もある。入學後は庸及び雜役を免じ、書籍をも貸與された。學生數は、國の大小によつて別があり、大國は五十人、上國は四十人、中國は三十人、下國は二十人を限度とした。この外に府學及び典藥寮の學生をも加へて總計三千九百二十二人許りの定員であつた。〔職員及び學科〕博士一人の外に、國司・郡司のうち、經義を解する者をして兼任させた。職員令には「凡國博士、醫師、國別二各一人」と見えるが、後には明法博士をも別に置かれた（日本後紀卷十七）。更に「延喜式」の式部式の上には、「凡明法生、課試通二六條一者、任二國博士一」とある。延喜頃には國博士を明法から取つて裁判の便に供したやうである。この外、權ノ博士、非受業博士（書記の如きもの）があつた。學科は入學當初は素讀を專らとし、後にはその義を講じた。素讀にも講義にも試驗がある。素讀には千字を完全に讀み得るに至つて行ひ、千字中三字を紙で覆うて閱讀させ、若し不可能の者があれば笞を當てる。これを決罰といふ。以上の外、儀式などは大學に準じたものである。而してこの九箇年の修業を卒へ、試驗に及第したものは式部省に送られて、貢擧（官吏登用試驗）（別項）に應するのである。この受驗生を貢人と呼ぶ。【沿革】文武天皇の大寶元年に制定されて諸國に置かれた。後、養老七年十月按察使の置かれた以外の國は、皆博士を停めてゐるから國學も同時に停められたのであらう。「延喜式」以後、史書にそのことが見えず、その後の事情は全く不明であるが、朝政の衰微につれて國司も任國に下らなくなり、國府の頽廢と共に次第に亡んだのであらう。（大學・四部の博士・貢擧參照）

【參考】令義解卷三（學令）○令集解卷十五（學令）○延喜式（式部式）○類聚符宣抄卷九○文藝類纂卷五○日本制度通二　〔山崎〕

國學（こくがく）　【名稱】國學なる語が一科の學問の名稱として用ひられた最初は、荷田春滿の「創學校啓」（別項）であるとしなければぬ。なほ國學と殆ど同意義に、「和學」「古學」「日本文獻學」が用ひられた。【性質】國學はその成立に於て、尊王を中心とした愛國の情熱に發し、中世以降、我が國民思想を混濁に導いた佛儒思想を排擊して、上代の純粹なる日本文化を復活せんとする一つの運動であつた。而して國學者はかくの如き目的を遂行し、かくの如き精神を實現するために、古文獻について深くその根柢を究め、日本文化の根本原理たるものを自覺しようとする意向に立ち、その結果未だ曾て無かつた學的體系を成立せしめるに至つたものであつた。かくて國學の對象は日本文化、更に言へば古代日本文化であつて、これは彼等の意識に於ては、未だ外來文化に混濁されない以前の、我が民族の純粹固有な文化を意味するもので、隨つて永遠に我が國民思想の中軸となり、國民文化發展の根本原理たるべき必然性と絕對性とを有するものであつた。故に、國學の研究は、一面から見れば、過去の文化の認識であると共に、一面またそのまゝ現在及び將來を貫くべき文化精神の自覺でなければならなかつた。かくて彼等は國學を「道の學び」として完成し、その對象を古道と呼ぶに至つた。然らば古道の所在は何であるか。それは我が國の古典に記された古傳たる「神々の事跡」であり「神代の事實」であつた。又古道の本質は何であるか。それは先づ人爲によつて成る道理や教訓ではなく、「天地の自らなる心」である點で、儒・佛の教と根本的に區別される。然るに、その天地は神々によつて成立し、神々によつて發展させられるものであるから、これは又「神ながらの道」である。即ち古今に通じ、天地に亙る永久普遍の根本原理である。隨つてかくの如き眞理を古傳として有し、かくの如き神々の本國たる我が國は絕對的な國



創學校啓草稿（羽倉家藏）

土であるとされた。次に國學はかくの如き古道を如何にして發展せしめたか。國學の方法は、先づ我が國の文獻研究である。而して文獻研究に於て、中世の學風が師承中心であつたのを排して、文獻そのものを根據とし、傳授を斥けて文獻の原意を客觀的歸納的に再認しようとした。特に中世以降、文獻に對し、强ひて佛意・漢意等を以て解釋してゐた弊風を排擊して、如實にその原意再認に努めた。而してこの佛儒的解釋の排擊は、同時に「人間のさかしら」なる合理的解釋の拒否を意味し、情意的直覺を求めるものであるから、一面に於て、歌文を制作し古文學に親しんで、古代人の雅情を體得することが、古道自覺の階梯であるとされた(うひ山ぶみ)。かくて彼等は學的追求の途に立ちつゝ、而も知的・論理的確實性を求めて科學的な組織を大成する代りに、體驗的直覺的確實性を求めて、これを情意的・信仰的に統一した。國學が古代に對する史的認識であるよりも、價値的自覺として完成されたのは、固よりその根本要求の然らしめた所であるとはいへ、一面には又かくの如き方法的精神と深く相應ずるものであつて、決して單なる科學的幼稚さを意味するものではない。かくて國學は、これと殆ど時代を同じくして興つた獨逸文獻學と種々の點で共通な發達を示しながら、この特質のために、根本的に區別されなくてはならぬものがある。更に國學の形態について考へるに、その主要研究は註釋的研究の形態をとり、古道論も文學的・語學的考察も共にその中に混在してゐる。尤も宣長によつてやがて神學・有職學・史學及び歌學の四科が立てられ、後、更に考證學・語學等を分立させ、研究が專門化されるに從ひ、著しく科學的性質を加へ、時にこの國學本來の性質を稀薄ならしめる觀がないではなかつたが、最近文化哲學の勃興と共に、國學の本質は再び新しい發展の端緒を得つゝある。なほ國學の異稱についていへば、「和(倭)學」の稱は漢に對する大和(倭)を意味する點で、國學よりも妥當であるといふ思想(松屋筆記九十二)も存したけれど、これはやはり相對的名辭であつて、當時國學が國民にとつては絶對の學であるとされた意識が十分示されてない上に、この名辭の用例上、國學特有の方法論を含まない點で、一般に國學に代るべき名辭とはなり得なかつた。「古學」の稱は、又「古事學び」とも言つて、研究の對象が古事であり、古代文化であることを示すと同時に、又中世的師承傳授及び後代の註釋を排斥しようとする研究精神を意味する名辭であつた。故に「古學」なる名辭は長流・契沖・東麿・眞淵・宣長等の學問を意味すると共に、又漢學に於ける山鹿素行・伊藤仁齋等の學の稱であつて、方法的精神を主とする意味に於ては有力に用ひられた。最後に「日本文獻學」なる名稱は、明治に至つて上田萬年・芳賀矢一兩氏によつて獨逸の文獻學(Philologie)と、我が國學とが比較されて以來用ひられ來つたところであつて、これは一旦學的完成を得て、宗教的・社會的發展を遂げた國學を、更に科學的に組織することによつて、再びこれに學的生命を賦與しようとする改造の要求に出たものに外ならなかつた。

【沿革】〔一、前驅〕國學が我が古典の研究である點からいへば、その傳統は遠く平安初期の「日本紀」講義にまで遡ることが出來る。最初我が古典研究は儒家の手によつてなされたが、漸次獨立の傾向に進み、鎌倉室町時代、平安文化再現の熱望が起るにつれて益々發達の機運に向ひ、堂上家・武家等のこれに從ふもの多く、就中、一條兼良の「源氏物語」その他に關する諸研究の如きは、その代表的なもので、この系統は、近世の松永貞德・北村季吟等に及んでゐる。然るに近世初頭、學問上に現はれた自由精神は、先づ戸田茂睡(別項)をして歌學に於ける因襲打破の第一聲を揚げしめ、更に下河邊長流・契沖(各別項)等をして自由討究の學風を創始せしめ、文學を中心とした古典研究に新方向を與へ、國學の方法的基礎を確立するに至り、また國學の對象が古道である點からいへば、これは近世初期に現はれた復古思想、及び自國尊重思想を統一し發展させることによつて成立したものである。復古思想は、德川初世以來の文教の奬勵及び產業の發達等によつて成果した、文藝に於ける現實主義的自我解放思想と相對立して興つた理想主義的精神の一發現であつて、漢學に於ける山鹿素行・伊藤仁齋の古學派の如き、又荻生徂徠の古文辭學(護園派)の如き、何れも後代の註釋に慊らないで、古人の眞精神に接觸しようとする要求に出づる點に於て、復古國學の先驅をなすものであつた。又自國尊重の機運は先づ神道(別項)の興隆となり、儒者の廢佛運動となり、更に水戸の修史事業となり、新井白石の歷史研究となつて現はれた。卽ち神道に於ては、中世既に佛教的神道興隆に際して佛教・儒教・道教の思想を包攝し、神道を以て諸道の根本たらしめようとする伊勢神道及びその繼承とも見るべき吉田神道が起り、又近世には、伊勢神道から度會延佳が出て廢佛の態度を明かにし、吉田神道を承けた吉川惟足は、神人合一・天地同根・萬物一體の信仰に立つて吉川流神道を創め、山崎闇齋は朱子學から出て垂加神道を唱へるなど、佛教的神道を脫した新神道の興隆を示してゐる。その他、漢學者側には、藤原惺窩・林羅山等が廢佛の根據を我が國が神國たる所以に置いてゐる如き、これと同一の傾向を示すものであつた。かくてこれ等の神道家並びに漢學者等は、廢佛的態度に出た點に於て、又我が國の神國たることを强調した點に於て、自國尊重の機運を體現し、國學の先驅をなすものであるが、その自國尊重は、一般に廢佛の理由を成すに過ぎない觀があつて、その實質に於ては何れも儒教思想に立脚した神儒合一であつたために、やがて又國學者の排擊を受けなくてはならぬ關係にあつた。水戸學の如きも排佛の急先鋒となり、神佛分離を行つたが、その立場は同じく神儒合一にあつた。ただ水戸學の神儒合一は、その目的が皇室の尊嚴を中心とする國體の闡明にあり、我が國の社會を中世から解放して上代に復歸せしめるにあつたために、これと國學との間には、單なる儒學對國學の關係以上に深い契合があつたことは事實である。のみならず、その目的遂行のため、古書の蒐集編纂は固より、各方面の學者を集めて研究を進め、又思想的活動としても、當時既に藩內の或る地方では、やがて明治新政府によつて全國的に行はれた神佛分離を行つてゐる。國學は實にかくの如き傳統を負ひ、かくの如き時代思潮を背景として創始されたものであると同時に、かくしてこれ等の契機に眞の統一と發展とを與へたものであるといふことが出來る。(古文辭學・神道參照)

〔二、創始期〕國學の創始者は言ふ迄もなく荷

田春滿（別項）である。春滿は彼の學問に於てよりも、彼が生涯の結論ともいふべき「創學校啓」（別項）に於て國學の根本精神を道破し、その綱要を樹立し、やがて來るべき國學發展の基礎を築いた。彼によつて道破された國學の精神は、佛儒を排して古道復興を期するにあり、而してこれを實現する道は古文獻について、古語・古意を闡明するにあつた。彼はかくして、當時の漢學に於ける古學派・古文辭學派が、時代の上に擡頭し來つた理想主義的復古精神を體現しつゝも、なほその對象は周公・孔子であつて、畢竟他民族文化の摸倣追隨の域を脱することが出來なかつたのと異なつて、自己民族精神の自覺としての日本文化の闡明であることによつて、時の復古的機運を眞の根柢に導いた。これと同時に當時の漢學者及び神道家等の上に動き來つた自國尊重が、畢竟神儒合一に過ぎなかつたのを否定し、未だ佛儒的影響を蒙らない我が民族個性を闡明することによつて、自國尊重の機運を深化發展させようとした。――單なる神儒合一思想に對する排擊としては、國學の出現を俟たないで、既に佛教方面に於ては寂右の「神社考辨疑」「神社啓蒙辨疑」等があり、儒教に於ては、闇齋學派分裂及び徂徠の「蘐園隨筆」、春臺の「辨道書」の如きがあり、更に神道に於ては友部安崇の「和漢問答」の如きがあつたが、その何れも反動であり反抗的であつて、國學の如く進んで神道の內容を開拓し、その價値的根據を確立しようとするものではなかつた。

〔三、完成期〕國學は、かくして遠い傳統と廣い時代思潮とを背景とし、これ等を統一し深化することに依つて創始せられたが、眞淵・宣長に依るその完成は、靜かなる學的探求として遂げられた。而してその方法に於ては契沖の繼承であり、その根本精神と研究對象に於ては春滿によつて確立せられ、基礎づけられたものの發展に外ならなかつた。即ち眞淵は「萬葉集」を中心とした古典の註釋的研究をその基礎として、特色に富んだ歌論・語學論・古道論・異學論等を成果させ、更に古語による歌文の創作を試みた。隨つて國學史上に於ける彼の意義は、春滿によつて樹てられた目的に基く古語の闡明並びに復活にあつて、而もこれは彼の詩人的情熱による古代文化への憧憬を根基として行はれた故に、その門流に多くの歌人を輩出させ、又時代の上に尙古的機運を擡頭させ、以て春滿に依つて所期された國學發展の第一階梯を實現し、來るべき宣長の研究に深い根柢を與へたのであつた。隨つて宣長の大成は契沖等によつて成された古語曉得を出發點となし、眞淵の詩人的洞察力によつて得た直觀に學的體系を與へたものであると言ふことが出來る。宣長の主要研究は言ふ迄もなく「古事記傳」（別項）であつて、これは「古事記」に對する註釋の形態を採りつゝ、而もあらゆる彼の思想學說の母胎をなすものであつた。彼は「古事記」に對して信仰者の態度を以て臨み、これを神典として理解し闡明しようとした。隨つてその意向としては、哲學的並びに歷史的批評を排して、純客觀的に「古事記」編纂者の、又古傳傳誦者の意識をそのまゝ古代の事實とし、神々の意志として再認しようとした。併しながら、國學は春滿の創始以來、その根本に於て彼等の衷（うち）なる理想自覺の要求に出づるものであつたから、それは寧ろ情意的內容として識得せられ、そこに一種の哲學的發展が成果せざるを得なかつた。

かくして彼の古道說並びに文學論が成立したが、更に一面に於て、かくの如き神典の意義を闡明し、神々の啓示を如實に認識する過程は古語研究に外ならなかつたから、彼にとつては古道研究即古語研究であつた。かくて春滿以來の佛儒排斥は、こゝに有力な根據を獲得し、佛儒並びに佛儒習合の神道を排擊することによつて中世的文化を否定し、永遠に純粹日本文化を形成發展せしめるべき原理としての古道を闡明し、國學體系の完成を見るに至つた。かくの如き宣長の學は、その個性的深さの故に、又所說の徹底のために、一面多數の信奉者を生ぜしめたと共に、他の一面に少からざる反對者を作つたことは事實であつた。而して彼の國學がそれ等の信奉者によつて繼承發展せられたと共に、又その反對者によつて補正せられ、發展の契機を與へられた所が少くないことも亦、見逃し難い事實である。反對者の主なるものは、「末賀能比禮」（別項）の著者市川匡丸の如き儒者に多かつたが、また荒木田久老・村田春海・上田秋成等の如き國學者側にも存した。

〔四、社會的發展期〕宣長歿後の國學は、二派の分立を來してゐる。即ち家學繼承者たる大平・春庭・內遠及びその門下と、平田篤胤及びその門流とであつて、前者は文學・語學その他神典以外の文獻研究を主とし、古道に關しては一に宣長を祖述するに止まつたもので、伴信友がこの方面の代表者である。信友は所謂考證學者として知られ、宣長の文獻學的精神を體しつゝ特殊問題に及び、考證の精細を極める事によつて專門的に歷史方面への發展を示した。後者は神典研究を主とし、宣長の古道思想を繼承すると共にこれを神學的に發展させた事によつて、前者からは宣長學統の埒外に置かれたものであるが、國學に著しい社會的進展を與へ、維新の改革を齎すべき原動力たらしめた直接の功勞者はこれであつた。篤胤は信友と共に宣長歿後の門下であるが、宣長の古道學は「三大考」の著者服部中庸を經て自己に傳はつたとなし、忽ちにして多くの門下を得、他のあらゆる本居學派に對抗し、宣長の眞の後繼者を以て自任しつゝ、そこに新しい發展を示した。篤胤は初め宣長の祖述者であつたが、文化八年十二月に至つて、宣長の古事記絕對主義に反對し、記紀の外に祝詞・古語拾遺・出雲風土記・新撰姓氏錄（各別項）をも併用すべきを主張し、これ等古典の比較研究によつて古傳說の還元的統一を試み、その原型として「古史成文」（別項）を作り、これが註釋としての「古史傳」及び研究法論ともいふべき「古史徵」（各別項）を著はして、所謂「本書三部」を立て、更にその比較研究は漢籍・佛典その他にまで及び、支那・印度等の古傳を我が古傳說の轉訛とし、以て佛儒思想の批判及び佛儒習合神道排擊の武器としてゐる。かくて古道に關しては、古代精神を如實に再認し實現しようとした宣長の後を承けながら、更に彼自身の宗教的要求に基いて、著しく哲學的・神學的性質を加へ、佛教・儒教のみならず耶蘇教をも採り入れ、而もこれ等を神道の派生として說くに至つた。かくて學的方法に於ても、又その對象たる古道についても、そこに幾多の性質的變更を示し、宣長の國學に內在する契機の發展としてのみ理解し難きに至り、國學の正系を以て任ずる宣長門下の大部分からは異端視せられたが、時代の上には一大勢力となり、國學者の運動として近世史上に大な

る足跡を殘し、維新政府の要路に立つて、新時代文化の基礎建設に參畫するに至つた。

〔五、改造期〕かくの如き國學者の宗教的・道德的・政治的活動が漸次その影を潛め、また泰西學術の影響によつて歷史・法制・神話・宗教・美術・土俗等諸方面の學を獨立せしめ、主として國語・國文學方面の研究をその正系となし、文獻學的方面に於て新しい發展を示したのが獨立の一科をなし、伴信友の如き歸納的な考證學者をも出した事を述べて、大塚嘉樹以下富樫廣蔭まで三十六人を數へてゐる。最後に文部省御雇英人チャムバレン氏が日本語の法格取調をなした明治十九年迄を、第三章「國學衰移の時期」となし、この間、國民は政治問題に集中し、西洋文學が輸入せられて、國語・國

小澤政胤【名稱】慶長以來と角書がある。【刊行】明治三十三年十一月【內容】慶長以來明治に至る大凡そ三百有餘年間に於ける國學家、即ち神道・國史・地理・律令・格式・有職・故實・考證・國語・國文・和歌等に名あるもの、及び國學家ではなくとも、その著書が斯學に關係あるもの等五百四十家の傳記を蒐集し、これを

祕傳を重んじた中世的學風から解放されて、自由討究の風を生ずるに至つた次第を明かにし、又光圀を中心とした水戸學者の國史編纂と新井白石の業績を數へて、國學に前驅した諸潮流を眺め、本紀に於ては、荷田春滿以下國學の四大人を中心としたそれ〴〵の時代に於ける國學の發展と門下の業績とを取

る足跡を殘し、維新政府の要路に立つて、新時代文化の基礎建設に參畫するに至つた。

〔五、改造期〕かくの如き國學者の宗教的・道德的・政治的活動が漸次その影を潜め、また泰西學術の影響によつて歷史・法制・神話・宗教・美術・土俗等諸方面の學を獨立せしめ、主として國語・國文學方面の研究をその正系となし、文獻學的方面に於て新しい發展を示したのが明治年間に於けるこの學の大勢であつたが、更に近年に至つては、文獻學的研究の外に、新たに勃興し來つた文化學の影響によつて、國學本來の精神及び性質が復活發展しつゝ現在に及んでゐる。

【參考】國學三遷史 中野虎三〇國學史概說 芳賀矢一〇東閑遺稿 藤岡作太郎〇本居宣長 村岡典嗣〇日本文獻學 芳賀矢一〇近世史の發展と國學者の運動 竹岡勝也〇國學發達史 清原貞雄〇國學全史 野村八良〇國學の前途 小中村清矩（陽春廬雜考卷八）〇古典學の概念と其方法論 久松潛一（契沖全集第九卷第二編緒論）〇國學とは何ぞや 芳賀矢一（國學院雜誌一〇ノ二）〇國學內容の變遷を論ず 河野省三（同一九ノ二）〇眞淵の神道說について 箭永茂助（同、眞淵記念號）〇德川時代に於ける國學の變遷 芳賀矢一（筆にまかせて）〇復古國學の先驅 清原貞雄（歷史と地理一七ノ四）〇江戶つ子の手によりて變形せられた國學 尾上柴舟（わか竹三ノ二）〇近世史學上に於ける國學の貢獻 村岡典嗣（史林昭和三ノ一）〇宣長のもののあはれと神ながらの道 久松潛一（東亞の光一七ノ四）〇國學者の憧憬と自覺 西尾實（國語と國文學四二）〇國學の精神 久松潛一（日本文學聯講近世上）〔西尾〕

國學家略傳 こくがくかりやくでん 國學書 【編者】小澤政胤【名稱】慶長以來と角書がある。【刊行】明治三十三年十一月【內容】慶長以來明治に至る大凡そ三百有餘年間に於ける國學家、卽ち神道・國史・地理・律令・格式・有職・故實・考證・國語・國文・和歌等に名あるもの、及び國學家ではなくとも、その著書が斯學に關係あるもの等五百四十家の傳記を蒐集し、これを歿年順に編輯した書で、本文の外に氏名（いろは別）索引・國學傳統略譜二葉・國學家年表等を卷首に附載してゐる。【價値】「古學小傳」（別項）の後を承けて增補した點が少くない。併しその量に於て精しさに於て又その編纂法に於て、後に出た「國學者傳記集成」（別項）には及ばない。ただ國學家でなくとも、國學に關係ある著述を有する人々をも含んでゐる點が特色と言へば言へるであらう。〔西尾〕

國學三遷史 こくがくさんせんし 國學書 一冊 【著者】中野虎三。增訂逸見仲三郎。檢閱、井上賴圀【刊行】明治三十年九月【內容】序（井上賴圀）、例言の外、緒言及び三章から成り、緒言に於ては各時代文學の沿革を略說し、各章に入つては、先づその期間に於ける國學變遷の大體を概觀し、次にその期の主なる學者につき、その學統・傳記・著書等を擧げてゐる。第一章「國學勃興の時期」に於ては、水戶光圀から宣長歿年なる享和元年迄を說いて、この期の意義を「國史・國文等を解剖的に研究し、或は比較的に考證する學術が起つて、語學上の問題が提出考究された」點に認め、下河邊長流から宣長に至る國學者三十一人を列擧し、第二章「國學完成の時期」に於ては、橘守部の逝去した嘉永二年までを劃して、第一期に提出された問題が、更に精討深究された時期とし、在來歌學の一部に過ぎなかつた國語學が獨立の一科をなし、伴信友の如き歸納的な考證學者をも出した事を述べて、大塚嘉樹以下富樫廣蔭まで三十六人を數へてゐる。最後に文部省御雇英人チャムバレン氏が日本語の法格取調をなした明治十九年迄を、第三章「國學衰移の時期」となし、この間、國民は政治問題に集中し、西洋文學が輸入せられて、國語・國文學は衰微したことを述べ、本間游清から六人部是香に至る、三十八人の學者を擧げてゐる。【價値】國學者の業績を系統的に概觀し、時期を劃して國學變遷の經過を明かにしようとした所に本書成立の意圖があるが、その成績について見れば、國學概念の確立が十分でなく、これを漠然と文學として理解し、又その特性を主として語學研究に認めてゐるために、國學に於ける根本問題と枝葉問題との價値的關聯を明確に體系づけることが出來なかつた。かくて、單なる國語・國文法の研究の精細さを以て國學の完成と見るが如き弊に陷つてゐる。なほその歷史的考察も、各章の冒頭に揭げられた數頁の概觀に止まり、個々の學者については、ただ小傳を列記してゐるのみで、その業績を批判し、史的發展を明かにするまでには至つてゐない。〔西尾〕

國學史 こくがくし 國學書 一冊 【著者】藤岡作太郎【成立】明治三十四年から翌三十五年に亙つて、著者が東京帝國大學でした講義の草稿を土臺とし、森治藏・渡邊良法二氏の筆記によつて補つたもの。【刊行】明治四十二年六月「東閑遺稿」。【內容】篇を分つて序論・前紀・本紀の三とし、序論に於ては、國學が如何なる經過によつて成立したかを概觀し、前紀では、文藝復興の大勢から、儒道の勃興とそれに伴ふ神道の儒敎化を見、國文學が祕事祕傳を重んじた中世的學風から解放されて、自由討究の風を生ずるに至つた次第を明かにし、又光圀を中心とした水戶學者の國史編纂と新井白石の業績を數へて、國學に前驅した諸潮流を眺め、本紀に於ては、荷田春滿以下國學の四大人を中心としたそれ〴〵の時代に於ける國學の發展と門下の業績とを叙してゐる。中に荷田春滿については、漢意から離れた語釋の開拓によつて古道の眞面目を發揚しようとし、こゝに國學が樹立されたとなし、同代の漢學・國文學等にも言ひ及んでゐる。【批評】國學に關する明治年代の研究は、國學者の傳記を集め、著書の名を列ねて年代順に排列するに過ぎなかつたのに、「國學史概論」（別項）が始めて國學の史的發展を跡づけ、本書に至つて更にそれを精しくし、各學者の業績を批判し體系づけつゝ、それ〴〵の時代に於ける他の學問的業績と關聯せしめて理解しようとしてゐる所にその進步を示してゐる。又國學の概念についても、言語・文學に關する學的研究にその特質を認め、その發展を跡づけようとしてゐる所に、文獻學としての國學を明確に認識し得てゐる。ただその學的業績のみを重視したために、その業績を導いた根本精神に關する考察がやゝ稀薄になり、隨つて國學が近世文化の發展上に占むべき位置と意義とを十分に闡明することが出來なかつた憾みがないでもない。〔西尾〕

國學史概論 こくがくしがいろん 國學書 一冊 【著者】芳賀矢一【成立】明治三十三年八月國語傳習所夏期講習に於て、五日間に亙り講義したものの速記である。著者が獨逸留學の途に上らんとする際であつたために、萩野由之・岡倉由三郎兩氏が校正し、序文を書いてゐ

る。【刊行】「國語傳習所講義第二」として明治三十三年十一月刊行。【內容】序論・荷田春滿（東麿）・岡部（賀茂）眞淵・縣居の門人・本居宣長・鈴屋の門人・平田篤胤・結論の八章から成り、所謂國學の四大人を中心に、國學の傳統・本質・目的等を闡明しようとしたものである。【價値】近世の國學を「國語・國文を基礎として、日本國民の性質を研究する」學として理解し、國文學・國語學は勿論、歷史學・考證學・制度學・神道學等に基礎的統一點を與へる所に國學の意義を確認し、更に學としての方向に新たな進展を期しようとしたのは、國學に於ける枝葉的研究の精細を以て國學の完成であるかのやうに考へられがちであつた當時としては、眞にこの著者の卓見と言はねばならぬ。その所說は精細とは言ひ難いが、よく國學の全貌を本質に於て捉へ、更にその史的展開を跡づけた功績は少くない。なほ本書に一貫した著者の思想の特色は、國學を以て我が國將來發展の基礎たらしめようとする熱情にある。國學が過去に於て、時代を導き時代を開拓する原動力となつた進步的學問であつた如く、今後も益々國民文化の發展に根柢を與へるものとならなければならぬとするところに深い暗示がある。

【參考】日本文獻學　芳賀矢一　〔西尾〕

國學者傳記集成（こくがくしやでんきしふせい）　國學書　一册　【編者】大川茂雄・南茂樹。上田萬年・芳賀矢一校閱。【刊行】明治三十七年八月【組織・內容】慶長年間から明治三十六年末までに物故した國學者、卽ち神道家・國史家・有職故實家・歌文學家等、六百十家の傳記をそれぞれ記錄・著書・雜誌から蒐集し、歿年順に排列したもので、項を分つて、生歿・住所・姓名・系圖・學統・年譜・經歷・性行・逸話・雜載・著書としてゐるが、時には「總叙」の下に一括したものもある。本文の外に、序・緖言・姓名索引・學統表が卷初に、國學者年表・名號索引が卷末に附せられてゐる。【價値】菊版千七百頁の大册で、國學者の傳を列傳體に編纂したものの中では內容最も充實してゐる。殊に典據となつた書物・雜誌・記錄等の原文をそのまゝ引用してゐるので、研究資料として眞に便利であるのみならず、編者によつて補はれた事項も少くない。　〔西尾〕

國學和歌改良論（こくがくわかかいりやうろん）　評論書　【著者】小中村（池邊）義象・萩野由之　【刊行】明治二十年七月　【內容】卷頭に中村正直・磐之舍主人佐久良の題辭を揭げてある。本書は國學改良論と和歌改良論とに分れ、前者は義象、後者は由之が書いた。國學改良論には、維新以來百般の學術が日を逐うて進步したにも拘らず、獨り國學は振はず、その名聲地に墜ちたことを嘆じ、これを以て從來の古學者の罪なりとし、古典學をして文明日新の一學科たらしむべきことを主張してゐる。而して國學陋弊の原因を以て、尊內外卑の意を誤解したこと、傳統を重んじて反つて學祖の意を失つたこと、神典學を本としたこと、詠歌を以て國學者の本分と心得たことの諸點に歸し、その改良案として歷史學と言語學とを分つべきこと、學生の資格を豫定し敎授法を改正すべきこと、神道家詠歌黨に國學者の名を附すべからざること等を擧げてゐる。次の和歌改良論は、和歌の流弊、和歌の改良、俗謠等について論じ、就中、和歌の流弊については、修史亡びて勅撰集作りしこと、王政の衰へたのは和歌の流行が一の原因であること、國學の不振は學者が和歌に耽つた故であること等を擧げて論じ、和歌の改良については、歌詞・歌題・歌格・歌調・歌材・擬古歌は新體歌と別ち置くべきこと等の數項について、進步的な意見を述べてゐる。【價値】本書は當年の論壇に多くの反響を喚起し、翌二十一年には武津某の「國學和歌改良不可論」なる書も現はれてゐる。明治歌論史上重要なるものの一である。　〔相原〕

國學忘貝（こくがくわすれがひ）　隨筆　三卷四册　【著者】森長見（讃岐の國學者。天明頃の人）。【刊行】天明七年　【解說】日本國民として心得べき事どもを書き集めたものといふ意味の題號であらう。多く古史籍に據つて、國體・國法・風俗等を論じ、又史論・史談、古書の批評等にも及んでゐる。上卷に「國體ノ尊嚴」から「秀吉ノ朝鮮軍事」まで、同卷末に「指ヲ記トスル事」から「短慮ノ失」まで、中卷に「不葺ノ門」から「遊女」まで、下卷に「仙人ノ長壽」から「讃岐ノ田所氏」まで、各數十條を收め、初卷に引用書目二百三十四部を揭げてある。天明七年難波津の蘆邊にかくれすむあま人、天明三年讃岐國多度郡堀江森助左衞門長見の兩序、及び同四年同郡屛風浦三谷景信の跋がある。最後に「廣濱堂藏版」の印記を刻してあるが、これは森氏の家塾の事であらう。　〔和田〕

國語（こくご）　言語學・國語學　【解說】廣義では、世界の國々で行はれてゐる又は行はれたそれ〴〵違つた言語。狹義では日本語。その外に、或は標準語（別項）の義に、或は漢語又は漢字音の如き外來のものに對して本來の日本語の義に、或は學校に於て敎ふべき敎科目の一なる國語科の義に用ひる事があるが、學問上では前の兩義の一つに用ひるのが普通である。

【廣義の國語】英語の a language 獨逸語の eine Sprache 佛蘭西語の une langue にあたり、日本語・英語・支那語等の如き名で呼ばれるものをそれ〴〵一つの國語といふ。一國語の內部には多くの方言があるのを常とする。故に內的に云へば、一國語は方言の總和である。又一つの方言と隣の方言との堺には中間地帶があつて、恰も色のぼかしの如く、明かな切斷線がないが、一國語と他國語との間には相互言語不通なる溝を劃する。故に外的に云へば、一國語はかゝる言語不通の切斷線を以て圍まれたるものである。但し實際には、方言的の區別と認むべきか、國語的の區別と認むべきか、明かでない場合がある。我が日本の內地語と琉球語との如き、スペイン語とカタラン語との如き、デンマーク語とノルウェイ語との如きはその例である。又歷史的に見れば、今日は二つの異なる國語であつても、昔は同一國語の中の方言であつて、時代と共にその差違が甚だしくなつたものもある。ラテン語から發したロマンス派諸國語（イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル等）の如きはその例である。又變化の歷史は直接にわからないが、學者が比較研究した結果、もと同一の源から分れ出た國語なることを推斷し得るものもある。インドヨーロッパ語族、セミティク語族（各別項）の多くの國語はその例である。一つの國語を使ふ人々は、一つの言語團體（別項）を組織する。この團體は政治的の國家と必ずしも一致しない。　〔以上神保〕

【參考】Oertel : *Lectures on the Study of Language*. 1902. ‖ G. v. d. Gabelentz : *Die Sprachwissenschaft*. 1901.

【狹義の國語】卽ち日本語で、日本民族の言語である。日本の領土の內外に住する日本人は勿論、アイヌ人・朝鮮人・臺灣人の間にも徐々に擴まつて行つてゐる。鹿兒島縣大島から西南、沖繩縣に屬する諸島に至るまでの住民の言語は、日本語の中に入るべきか、又は日本語と對立する別の國語卽ち琉球語として取扱ふべきかについては議論があつて、古來の歷史を有し、時代による相違がある。要するに、日本語といふのは、これ等の種々の相異なる言語の總和であり總稱であると見るべきである。

【國語の沿革】今日まで殘つてゐる資料によつて國語の變遷を知り得るのは、主として奈良朝以後であつて、それ以前は、支那の史書のであり、またそれ〴〵自身の歷史を有し、

はイェ(je)で、ア行のエ(e)と區別があり、キエヲはウィ(wi)ウェ(we)ウォ(wo)、チツヂヅはtitudidu、ハヒフヘホは、原始的にはパピプペポであつたが、奈良朝にはファフィフフェフォ(FaFiFuFeFo)になつてゐたかと思はれる。またキケコ以下十二音に於ける二種の音の區別は、まだ確かにはわからないが、恐らくは子音られ、已然形にも「けれ」「しけれ」の外に「けしけ」の形があつて「しが無けば」「命惜しけど」の如く用ひられた。(五)係結の規則は大抵正しく行はれた。その規則は「ぞ」「なも」「や」「か」を承けては連體形で結び、「こそ」を承けては已然形で結ぶのであるが、「こそ」を形容詞で結ぶ場合には、常に連體形を用ひた(「お

【狹義の國語】卽ち日本語で、日本民族の言語である。日本の領土の內外に住する日本人は勿論、アイヌ人・朝鮮人・臺灣人の間にも徐々に擴まつて行つてゐる。鹿兒島縣大島から西南、沖繩縣に屬する諸島に至るまでの住民の言語は、日本語の中に入るべきか、又は日本語と對立する別の國語卽ち琉球語として取扱ふべきかについては議論があつて、古來の歷史から見れば、別の國語とする方が理由があるやうであるが、近來はこれを日本語と見る方が勢力がある。何れにしても、日本語と祖先を同じうするものである事は疑ない(琉球語參照)。【國語內での言語の相違】言語は時と共に變遷するものであるから、同一の言語でも時代による相違はあるが、同じ時代の日本語中にも相違がある。最も著しいのは土地による相違卽ち方言の相違であるが(方言參照)、同じ方言の中でも、階級による相違、職業による相違、年齡による相違(老人・靑年・兒童などの言語の相違)、男女の性別による相違などがある。この外に方言の相違から生ずる不便を除くために用ひられる標準語(別項)があるが、これは上述の言語と多少性質の相違がある。以上は口で話す言語、卽ち口語(別項)に於ける相違であるが、口語と、文字で書く時の言語、卽ち文語(別項)との間にも、また多少の相違があり、文語の中でも、口語體の文と文章語體の文とはかなりの相違があり、文章語體の文の中にも、また色々の諸體があつて、各々言語上に特徵をもつてゐる(文語參照)。以上の相違は、種々の言語を互に比較した時にあらはれるものであつて、その言語自身としては、それ〴〵自らの體系を有し、他の種の言語の助を假らずして言語としての用をなすものであり、またそれ〴〵自身の歷史を有し、時代による相違がある。要するに、日本語といふのは、これ等の種々の相異なる言語の總和であり總稱であると見るべきである。

【國語の沿革】今日まで殘つてゐる資料によつて國語の變遷を知り得るのは、主として奈良朝以後であつて、それ以前は、支那の史書に日本の地名・人名・官名等が見えるが、甚だ少數であり、我が國にも推古朝の頃から、いくらかの資料があり、奈良朝の資料にも奈良朝以前のものを傳へたものがあるので、いくらか奈良朝以前に溯る事が出來ても、なほ二百年位にとどまる。卽ち今日まで千三四百年の間に過ぎない。

〔奈良朝及び以前〕大和の言語が主として傳はつてゐるが、他の地方との方言的差異は、後世に於けるほど著しくなかつたと考へられる。但し東國方言だけは、かなりの違ひがあつたやうである。文語も口語と大した相違がなかつたらしい。(一)現今假名遣で區別するだけの音(淸音・濁音とも)の區別があつた。卽ちイエオとキエヲ、語中語尾のハヒフヘホとワキウエヲ、ジズとヂヅの區別が發音上に存した。その外、ア行のエとヤ行のエとの區別があつて、五十音のうちでは、ア行のイとヤ行のイ、ア行のウとワ行のウとの別がないだけで、すべて四十八音の區別があつた。その上に、キケコソトヌヒヘミメヨロの十二の音も(淸音・濁音とも)各々二つに分れて、發音を異にしたと考へられるが、奈良朝に於ては幾分か混雜を生じかけてゐた形跡がある。ことに當時の東國語にはこの區別はなかつたらしい(假名遣參照)。(二)發音は、多くは今日の標準的發音と大差がないやうであるが、ヤ行のエはイ^{ɪ}(je)で、ア行のエ(e)と區別があり、キエヲはウィ(wi)ウ^{ɪ}(we)ウ^{ɪ}(wo)、チツヂヅはti tu di du、ハヒフヘホは、原始的にはパピプペポであつたが、奈良朝にはファフィフフェフォ(Fa Fi Fu Fe Fo)になつてゐたかと思はれる。またキケコ以下十二音に於ける二種の音の區別は、まだ確かにはわからないが、恐らくは子音や音調の違ひでなく、母音の違ひに基づくもので、一はi e oなど單純な音であるに對して、他はその前に或る種の母音が加はつた二重母音か(隨つて一種拗音式の音節となる)、さもなければ、i e oなど以外の或る種の母音(例へば東北方言に見る如きiとuの中間の母音や、獨逸語のö ü のやうなもの)であつたらうかと思はれる。ガギグゲゴは皆ga gi gu ge goの音で、鼻音ではじまるŋa ŋi ŋu ŋe ŋoの音は無かつたのではあるまいかと考へられるがまだ確かでない。シセジゼはsi se zi zeでなく∫i ∫e ʒi ʒeであつたかも知れず或はサシスセソザジズゼゾがすべてsa ∫i ∫u ∫e ∫o ʒa ʒi ʒu ʒe ʒoであつたかも知れない(但し方言には、なほ他の音があつたかも知れない)。(三)動詞の活用は、四段、上一段、上二段、下二段、カ行變格、サ行變格、ナ行變格、ラ行變格の八種であつて、下一段がない。諸活用に於ける活用形は現代の文章語に於けると殆ど同一であるが、四段の已然形と命令形とは發音が違つてゐたらしく、又下二段、カ變、サ變の命令形には、「よ」のやうな助詞をつけないで用ひられる事が少くなかつた(「勤め。もろもろ」「持てこ」など)。(四)形容詞の活用は、ク活用シク活用の二種の區別があり、活用形は文章語のと同樣であるが、將然は「く」「しく」の外に「け」「しけ」の形があつて、「善けむ」「戀しけば」の如く用ひられ、已然形にも「けれ」「しけれ」の外に「け」「しけ」の形があつて「しが無けば」「命惜しけど」の如く用ひられた。(五)係結の規則は大抵正しく行はれた。その規則は「ぞ」「なも」「や」「か」を承けては連體形で結び、「こそ」を承けては已然形で結ぶのであるが、「こそ」を形容詞で結ぶ場合には、常に連體形を用ひた(「おのが妻こそ常めづらしき」の類)。(六)語彙に於ては、古く朝鮮人やアイヌ人と接觸したから、その語が日本語に混じたのであらうが、今明かに指摘し難い。漢文の輸入、支那との交通、佛敎の渡來によつて、漢語及び梵語が日本語に入り、口語として用ひられたものもあるが(法師、香、五位、波羅門、塔など)、さほど多くはなかつたであらう。

〔平安朝〕その終りの院政時代以後は、鎌倉時代と共に論ずべきであるからこれを除いた三百餘年間である。この時代は、京都の言語が發達し、文語としては京都語による假名文が新に起り、この語が正しいものと考へられるに至つた。さうして諸方言の差異はいくらか增して行つたものらしいが確かには分らぬ。又この時代には日本化した漢文が記錄・日記・手紙等の文として男子の間に常用せらるゝに至つた。(一)音聲に於ては、前時代に區別があつたキケコ以下十二音の別が、この時代の初には失はれて同音となり、ア行のエ(e)とヤ行のエ(je)との區別も引續いて失はれた。イエオとキエヲの別、語中語尾のハヒフヘホとワキ(イも)ウエ(エも)ヲ(オも)の別は、初期の中は保たれてゐたが、後次第に失はれて、この時代の末には、既に全く區別がなくなつてゐたやうである。(二)この時代に音便(別項)といはるゝ音變化(「たきまつ」が「たいまつ」に深い暗示がある。

【參考】日本文獻學 芳賀矢一 〔西尾〕

國學者傳記集成(こくがくしやでんきしふせい) 國學書 一册 【編者】大川茂雄・南茂樹。上田萬年・芳賀矢一校閱。【刊行】明治三十七年八月 【組織・內容】慶長年間から明治三十六年末までに物故した國學者、卽ち神道家・國史家・有職故實家・歌文學家等、六百十家の傳記をそれぞれ記錄・著書・雜誌から蒐集し、歿年順に排列したもので、項を分つて、生歿・住所・姓名・意を失つたこと、神典學を本としたこと、詠歌を以て國學者の本分と心得たことの諸點に歸し、その改良案として歷史學と言語學とを分つべきこと、學生の資格を豫定し敎授法を改正すべきこと、神道家詠歌黨に國學者の名を附すべからざること等を擧げてゐる。次の和歌改良論は、和歌の流弊、和歌の改良、俗謠等について論じ、就中、和歌の流弊については、修史亡びて勅撰集作りしこと、王政の衰へたのは和歌の流行が一の原因であること、

る。最後に「廣瀆堂藏版」の印記を刻してあるが、これは森氏の家塾の事であらう。 〔和田〕

國語(こくご) 言語學・國語學 【解說】廣義では、世界の國々で行はれてゐる又は行はれたそれ〴〵違つた言語。狹義では日本語。その外に、或は標準語(別項)の義に、或は漢語又は漢字音の如き外來のものに對して本來の日本語の義に、或は學校に於て敎ふべき敎科目の一なる國語科の義に用ひる事があるが、學問上では前の兩義の一つに用ひるのが普通でからないが、學者が比較研究した結果、もと同一の源から分れ出た國語なることを推斷し得るものもある。インドヨーロッパ語族、セミティク語族(各別項)の多くの國語はその例である。一つの國語を使ふ人々は、一つの言語團體(別項)を組織する。この團體は政治的の國家と必ずしも一致しない。 〔以上神保〕

【參考】Oertel : *Lectures on the Study of Language*. 1902. ‖ G. v. d. Gabelentz : *Die Sprachwissenschaft*. 1901.

つ」となり、「したぐつ」が「したうづ」となり、「よりて」が「よつて」となり、「さかりに」が「さかんに」となる類)が生じ、半以後には盛んに口語に用ひられた。これによつて、促音及び撥音(ン)が純粹の日本語にあらはるゝに至つた。(三)動詞の活用は、下一段活用が新に生じて九種となつた。(四)形容詞の將然形及び已然形は、前時代には一定しなかつたが、この時代には將然形は「く」「しく」、已然形は「けれ」「しけれ」と一定した。但し連用形の「く」「しく」を音便で「う」「しう」といふ事も少くなく、連體形の「き」「しき」も亦時として「い」「しい」といふ事があつた。(五)係結は、前代とほぼ同樣であるが、助詞「なも」が「なむ」と變化した外に、「こそ」の結としては、形容詞も動詞と同じく已然形を用ひることとなつた。(六)漢語が前時代に比して一層多く口語に用ひられるやうになつた。この時代の言語は、假名遣の上にも、文章語の上にも、後世に多大の影響を及ぼしたのであつて、この點で注目すべきである。

〔院政鎌倉室町時代〕 五百年に近い期間である。室町時代は別に一期を劃するのが至當かも知れないが、室町初期の言語の狀態がまだ不明であるため、これを併せておく。京都の言語が模範的のものになつてゐたが、足利氏が京都に幕府を立てるに及び、京都の言語自身に關東語の影響を受ける事が多かつたらしい。諸方言の相違は益々甚しくなつたもののやうに思はれる。殊に東國方言には多くの特異な點があつた。この時代に於ては、文語が口語から次第に離れて行き、室町時代に於ては、兩者の間に著しい相違が出來た。文語も、「平家物語」「太平記」に見るやうな新しい種類が出來た。この間の口語の變遷の主なものは、(一)チツヂヅがti tu di duからtʃi tsu dʒi dzuに變じた。しかしヂ・ヅとジ(ʒi)・ズ(zu)との區別はまだ明かであつた(室町末期には京都地方で、時々ヂとジ、ヅとズの混同する事があつた)。(二)相並ぶ二個の母音(これは漢語に多く、純粹の日本語でも、音便によつてかなり多く生じた)が一箇の長母音に變化した。アウ・カウ・サウ(アフ・カフ・サフも)の類の母音auは、もとはauと發音したが、この時代のうちにauから開音のオの長音となつた。(開音のオは、合音のオ、即ち普通のオよりも多く口を開いて發するオの音で、音聲文字ではɔで示して、合音のoと區別する)又オウ・コウ・ソウ(オフ・コフ・ソフも)のouは一個の合音のオ(o)の長音となり、エウ・ケウ・セウ(エフ・ケフ・セフも)のeuはヨ(jo・oは合音のオ)の長音となつて、既に院政時代からキョウ・ショウなどのouから變じたオー(合音のoの長音)と同音になつた。かくてオウ・コウ・ソウの類から變じたものとエウ・ケウ・セウの類から變じたものとは混同したが、これ等のものと、アウ・カウ・サウの類から出たものとの間には明かに發音上區別があつた。(三)動詞の活用は、終止形のかはりに連體形を用ひることが次第に多くなり、室町時代中期以後には、普通の場合には、終止形を用ひず、連體形をこれにかへて用ひるやうになり、從つて四段、一段以外の動詞の活用形式が變化するにいたつた(例へば上二段「起き、起き、起くる、起くる、起きれ、起きよ」)。又その結果、ラ行變格はその特色を失ひ、ラ行四段と全く同じ形式となつた。隨つて動詞の活用の種類はすべて八種となつた。又四段、ナ行・ラ行變格の連用形から、助詞「て」、助動詞「たり」(その變化した「た」)「つ」などにつづく時、音便形をとる事が多くなり、室町時代の口語では、それが普通の形となつた。(四)形容詞の活用は、やはり二種あるが、シク活用の終止形を、ク活用に準じてシシ(「いしし」の類)とした事もあつたが、動詞と同じく終止形のかはりに連體形を用ひる事が多くなり、連體形にも音便形「い」「しい」を用ひたため、室町時代の末には、終止連體形が、一般に「い」「しい」となつた。連用形も遂に音便形が一般化して、「う」「しう」となつたが(但し、東國では「く」「しく」が用ひられた)、將然形はもとの形を存し、「くは」「しくは」と用ひられて假定條件を示す事となつた。即ち、

ヨク　ヨウ　ヨイ　ヨイ　ヨケレ
樂シク　樂シウ　樂シイ　樂シイ　樂シケレ

かやうにして二種の活用は、その特徴を失ひ、ただ一種として取扱ひ得るに至つた。(五)係結は、連體形で結ぶものは、係りの助詞の用法の變化などあつた上に、一般に終止形のかはりに連體形を用ひるにいたつて、その存在の意味を失つた。「こそ」の係結だけは、まだ保たれたが、これも漸く亂れて來て、室町時代に於ては、必ずしも正しく行はれなくなつた。(六)漢語が、ます〳〵通俗化して口語に用ひられたが、これはこの時代に起つた平民佛教の影響が多からう。又平安朝末から鎌倉室町時代にかけて支那に往來した僧侶によつて、宋元明時代の支那語が輸入された(外來語參照)。又室町末期には西洋人が渡來し、貿易に從事し、且つ基督教をひろめたため、西洋語が輸入され口語にも用ひられたが、それは主に葡萄牙語であつた。しかし基督教の用語にはラテン語もあつた。

〔江戸時代〕 引つづき京都の言語が有力であつたが、織田・豐臣二氏が京都で政事を行つた結果、京都の言語も美濃・尾張の方言の影響を受けてかはつたと傳へられてゐる。江戸では初は諸方の人々の集合地で、一定の言語もなかつたが、後には特殊の江戸語が發達した。元祿時代の新文學は上方に起つて、京・大阪の言語を取り入れたが、文化・文政に至れば、江戸で江戸語を多く用ひた獨特の文學が起るやうになつた。方言はこの時代に於て、その差異を增さうとも減じたとは考へられない。なほ德川氏が諸侯を轉封させたため言語の島を作つた處もある。またこの時代の末には方言による文學もいくらか出來た。(一)前期まで區別があつたジヂズヅの發音上の區別がこの期に入ると無くなつた。またアウ・カウ・サウの類から出たオの長音とオウ・コウ・ソウの類及びエウ・ケウ・セウの類から出たオの長音との區別(オー音の開合の區別)もこの期に入つて間もなく失はれた。語の最初のハヒフヘホの音は、平安朝以來ファフィフフェフォの音であつたが、この時代に入ると、次第に現今の如きハヒフヘホ(ha hi Fu he ho)に變じた。(二)動詞の活用は、上下二段活用の動詞が、上下一段に變ずることは、前時代から時々あり、東國語では、室町時代には一般に行はれてゐたが、この時代に入つては、その傾向がつよくなり、遂にすべて上下一段活用となつた。これは多分東國語の影響によることとおもはれる。ナ行變格は、元祿時代までは、多くの場合にその特徴を失はなかつたが、一方終止形以下が、ヌヌネネと四段式に活用することも稀にあつた。然るに後には四段の形式が勢を得て、遂にナ行變格は四段活用と合致するにいたつた。かくて動詞の活用は四段、上一段、下一段、カ變、サ變の五種となつた(但し方言の中には他の活用の殘つてゐたものもあつたであらう)。(三)形容詞の活用には、大した變化はなかつたが、將然形の「く」「しく」は次第に用ひられなくなつた。(四)「こそ」の係結は全く滅びたのではないが、多くの場合には行はれなくなつた。(五)教育の進歩と共に漢語が通俗化した。又支那と通商し、後には支那語成や語法に至つては、その重要なる點に於ては江戸後半の言語と大した相違はない。さうして方言の或るものには、なほ二三の重要なる點で、今なほ室町時代以前の言語の特徴をそのまゝ殘してゐるものがある(九州方言に於て、二段活用やジヂズヅの發音上の區別の現存する如き、土佐方言に於てツヅをtu duと發音する如き、出雲・東北地方にヒヘをフィ・フェと發音する如き)。(文語の沿革については「文語」參照)

パ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo							
プ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po							
ン n, m, ŋ, N.											
促音 k. t. p. s. ʃ.											
キャ kja	キュ kju	キョ kjo									
シャ ʃa	シュ ʃu	ショ ʃo	シェ ʃe								
チャ tʃa	チュ tʃu	チョ tʃo	チェ tʃe								
ニャ nja	ニュ nju	ニョ njo									
ヒャ hja	ヒュ hju	ヒョ hjo									

原則は、多少變更せられるかも知れない。(三)現代語では、ガ行音にgで初まる音とŋで初まる音とがある所では、gは語の最初に、ŋは語の中又は終りに來るのが常である。これは古くからさうであつたかどうか分らないが、古く純粹の國語には、(イ)ラ行音は語の初に來ない。(ロ)濁音(gzdbで初まる音節)は語の初に來ないといふ定まりがあつた。(四)

て、遂にナ行變格は四段活用と合致するにいたつた。かくて動詞の活用は四段、上一段、下一段、カ變、サ變の五種となつた(但し方言の中には他の活用の殘つてゐたものもあつたであらう)。(三)形容詞の活用には、大した變化はなかつたが、將然形の「く」「しく」は次第に用ひられなくなつた。(四)「こそ」の係結は全く滅びたのではないが、多くの場合には行はれなくなつた。(五)教育の進歩と共に漢語が通俗化した。又支那と通商し、後には支那語學が行はれた結果、支那語がいくらか用ひられ、又和蘭との交通及び蘭學の流行のため、和蘭語も用ひられるにいたつた。

〔明治以後〕明治維新後は、東京に都が定められた結果、東京語が勢を得、全國各地の間の交通の便がひらけたのと學校教育が普及したために、その語が漸次に全國にひろまつてゐるのであつて、今なほ各地の方言は存するけれども、次第にその特徴を失はうとしてゐる。文語も、日露戰爭後、東京語に基づく口語文が次第に勢力を占め、他の種の文語を驅逐せんとしつゝある。明治以後には漢語がますゝ多く用ひられると共に、西洋文明輸入の結果、英・獨・佛・露等の西洋語の國語に輸入せられたものが多く、これも明治時代には、新たに譯語を作り、それがために新たな漢語が出來るやうな有樣であつたが、近年は原語のまゝに用ひる事が多くなつた。またその結果としてチェ・ツェ・ファ・フィ・ヴなど二三新たな音が輸入せられ、又西洋語風の言葉遣ひがいくらか用ひられるに至つた(受身の形を多く用ひるなど、その著しい例である)。それ故、現代の口語は、その外貌は前代の語と非常な相違があるやうに見えるけれども、その音聲上の構成や語法に至つては、その重要なる點に於ては江戸後半の言語と大した相違はない。さうして方言の或るものには、なほ二三の重要なる點で、今なほ室町時代以前の言語の特徴をそのまゝ殘してゐるものがある(九州方言に於て、二段活用やジヂズヅの發音上の區別の現存する如き、土佐方言に於てツヅをtu duと發音する如き、出雲・東北地方にヒヘをフィ・フェと發音する如き)。(文語の沿革については「文語」參照)

【國語の特徴】(一)國語を構成する單音はその種類が多くない。現代では母音はa i u e o、子音はk g ŋ s ʃ z ʒ t d n h F p b m j r w Nを標準的のものとする。歴史時代の最初に於ては、右の中ŋ ʃ(又はs)ʒ h p(又はF)Nは、普通には用ひられなかつたかとおもはれる。なほこの外に、あつたかも知れないが、あつても少數にとどまる。(二)音節の構成が單純で、隨つて音節の種類も少い。即ち現代語では、

ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko
サ sa	シ ʃi	ス su	セ se	ソ so
タ ta	チ tʃi	ツ tsu	テ te	ト to
ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no
ハ ha	ヒ hi	フ Fu	ヘ he	ホ ho
マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo
ヤ ja		ユ ju		ヨ jo
ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro
ワ wa				
ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go
カ ŋa	キ ŋi	グ ŋu	ゲ ŋe	ゴ ŋo
ザ za	ジ dʒi	ズ dzu	ゼ ze	ゾ zo
ダ da	デ de	ド do		
バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo
パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po
ン n, m, ŋ, N.				

促音 k. t. p. s. ʃ.

キャ kja	キュ kju	キョ kjo		
シャ ʃa	シュ ʃu	ショ ʃo	シェ ʃe	
チャ tʃa	チュ tʃu	チョ tʃo	チェ tʃe	
ニャ nja	ニュ nju	ニョ njo		
ヒャ hja	ヒュ hju	ヒョ hjo		
ミャ mja	ミュ mju	ミョ mjo		
リャ rja	リュ rju	リョ rjo		
ギャ gja	ギュ gju	ギョ gjo		
ヂャ ŋja	ヂュ ŋju	ヂョ ŋjo		
ジャ dʒa	ジュ dʒu	ジョ dʒo		
ビャ bja	ビュ bju	ビョ bjo		
ピャ pja	ピュ pju	ピョ pjo		
ツァ tsa	ツォ tso	ツェ tse		

以上百二十二種の外に、母音で終る音節は母音が長音となる事があるから、これを加へれば、右の倍數近くになる。然るに歴史時代の初には、右のうちチツはti tu、ヂヅはdi duであり、-jaの如き拗音の類は存在したかどうか疑はしく、ン音や促音も、あつたとしても、少くとも今日の如き音とは性質の違つたものと考へられ、長音節も後の發達と認められる。但し一方に、ェにはeの外にjeがあり、キケコその他十二の音に於ける二類の區別があつて後世にない音節もあつたが、併し全體としては音節の種類は餘程少く、その構成についても、(イ)一の母音、又は一の子音と一の母音から成立ち、(ロ)常に母音で終るといふ原則が行はれた。但し奈良朝以前のキ・ケ等の十二の音に於ける二類の發音の別によつて見られる、後世に存せぬ音節の發音如何によつて(一)の原則は、多少變更せられるかも知れない。(三)現代語では、ガ行音にgで初まる音とŋで初まる音とがある所では、gは語の最初に、ŋは語の中又は終りに來るのが常である。これは古くからさうであつたかどうか分らないが、古く純粹の國語には、(イ)ラ行音は語の初に來ない。(ロ)濁音(gzdbで初まる音節)は語の初に來ないといふ定まりがあつた。(四)單語は一音節のものもあるが、又多音節から成り立つものもある。(五)語のアクセントは音の高低即ち調子による。(六)單語には獨立して用ひ得べきもの即ち詞又は獨立詞と、常に詞に伴つて用ひられるもの即ち辭又は附屬辭(助詞・助動詞)とがあつて、語法上の種々の關係・資格等は、主として詞の後に辭を附して言ひ表はす。右の辭の類は、原則として同類の語(同じ品詞)には、どれにでも同じやうに附屬し、又幾つも重ねて用ひる事が出來る。(七)辭の外に接頭辭、接尾辭があつて、單語に附き、また語根、語幹に附いて一語を形成する。中にも接尾辭を用ひる場合が多い。(八)體言の類は語形が變化せず、性や數や格などの意味を伴はない。獨立して用ひる事もあり、助詞を加へて他との關係をあらはす事もある。(九)用言の類は活用があつて語形を變ずる。それは(イ)語尾の母音の變化と、(ロ)特別の語尾(ルレなど)の添加との二つの方法の一方又は双方によつて生ずる。この變化した形はそのまゝで、又は辭を附して、意味のきれつづきや、他の語に對する種々の關係を示す。西洋の諸國語の如く、主語の考を伴ふ事なく、主語の如何によつて語形の變ずる事がない。日本の形容詞は自らに叙述の意味を有し、大體に於て動詞と性質を同じうする。(一〇)西洋

語の形容詞の如く、專ら體言を修飾する語は本來ない。「この」「かの」「いはゆる」「或る」など少數はあるが、後になつて出來たものである。(一一)文中に於ける語の順序は、かなり自由であるが、普通左の原則が行はれてゐる。(イ)主語が先に述語が最後に來て文を終止する。(ロ)客語・補語は述語より前に、多くは主語の後に來る。(ハ)修飾語は被修飾語の前に來る。(一二)文の構造が長くして複雜である。日本語の一つの文が、漢文や西洋語で二つ以上の文にあたる場合が少くない。要するに言語の形態的分類によれば、膠着語(添着語)(別項)の性質を有するもので、而も主として接辭、附屬辭の類を語の後に附して、種々の語法上の關係や資格をあらはす種類の言語に屬する。

【國語の系統】日本語がいかなる他の國語と同系統に屬するかはまだ分らない。從來、印度・ペルシヤ・ギリシヤなどの言語(これ等は何れもインドヨーロッパ語族(別項)に屬する)と關係があるとするもの、支那語・ビルマ語と關係があるとするものなどあつたが、これ等はただ單語の形と意味とのやゝ類似したものを擧げて、これを同源とするのであつて、その方法に於て非科學的であつて信ずるに足らぬ。これ等の言語は、その構成に於て日本語と甚しい相違があつて、到底同系統のものと考へる事は出來ない。又マレイポリネシヤ語族(別項)と同系とするもの、又この語族と親近關係ありと或る一派の學者に主張せられるオーストロアジア語族(前印度・後印度・馬來半島及びその附近の島嶼の諸處に散在せる、カムボヂヤ語、モン語、カシ語、ニコバル語、リアン語、ワ語、ムンダ諸語、チヤム語など。安南語をこれに加へるものもある)と關係があるとするものがある。これ等の言語を用ひる民族は、地理的にも日本に近く(臺灣の蕃民も、これに屬する)、神話・傳說・民俗等に於て日本と關係ありと考へられる點もあり、その言語は音聲組織の比較的簡單である事、膠着語に屬する事、單語を重複して種々の意味を示す事など、日本語に類似したところもあるが、文法上の諸形式は接尾辭よりは寧ろ主として接頭辭及び內接辭(語の中間に挿入するもの)によつて示される事、語の順序に於ても日本語と重要な點で相違がある事など、言語の構成上に一致しないところが少くなく、單語の類似も少數である故、これを同系統のものとする事は出來ない。但し日本語の中には、この方面の要素がかなり入つてゐるかも知れない。西洋人の間には、古くから日本語をウラルアルタイ語族(別項)に屬するものとする說が勢力がある。この語族は、その行はるゝ地域も日本に近く(日本海の對岸にも行はれてゐる)、その民族は、體質に於ても日本人と近似して居り、言語上の特質も日本語と一致するところが多い。即ち音聲組織が簡單であつて、濁音は後に發達したものらしく、音節では二つ以上の子音を重ねないのを原則とし、多くの民族の言語では、單語の最初に濁音を用ひず、アルタイ派の諸語に於てはr音を語頭に用ひない。單語はそれ自身獨立して用ひる事が出來、文法上の諸形式は接辭又は助辭の類を語の後に附けてあらはすのが普通である。接辭や助辭は幾つも重ねて用ひる事が出來る。文中に於ける語の順序は、主語—客語—述語が普通で、修飾語は被修飾語に先だつ。これ等の諸點は大抵日本語と一致し又は類似する。かやうに言語の構成法に於ては、日本語はウラルアルタイ語族と、その原則を同じくするが、單語又は語根の一致又は類似したものは存外少い。それ故、日本語はこの語族に屬すると斷定する事は出來ない。ただ世界の諸語族中では、この語族が最も關係が近さうであるといふ事が出來るばかりである。〔朝鮮語との關係〕アストン(Aston)や金澤庄三郎博士によつて、朝鮮語との同系論が唱へられ、單語のみならず音聲や語法上の類似が指摘されたが、それも一部分の類似に止まり、音聲法則を立てるには至らない。兩國語の同系である事は、可能性はあるが、まだ證明せられたものとはいへない。(朝鮮語は、ウラルアルタイ語族と關係あるもののやうであるが、まだ確かでない)(朝鮮語參照)。〔琉球語との關係〕チャムバレンが、はじめて日本語と同系のものである事を論じたが、近來の研究によつて、この事が益々明瞭になつたので、これを日本語の方言として取扱ふものも少くない(琉球語參照)。(言語・言語學・國語學・國語史・方言・外來語參照)

【參考】〔一般に關するもの〕國語學概說 安藤正次○國語學概論小林好日○國語學概論龜田次郎○國語學通考安藤正次○國語學精說保科孝一○國語研究法藤岡勝二○國語のため上田萬年○國語の研究金澤庄三郎○國語及朝鮮語のため小倉進平〔國語の沿革に關するもの〕國語史概說吉澤義則○口語法別記大槻文彥○高等國語法安田喜代門○假名遣及假名字體沿革史料大矢透○疑問假名遣國語調査委員會(本居清造)○現行普通文法改定案調査報告之一國語調査委員會○古代國語の研究安藤正次○倭字正濫鈔契沖○字音假字用格本居宣長○假名遣奧山路右塚龍麿○古言衣延辨奧村榮實○奈良朝文法史山田孝雄○平安朝文法史山田孝雄○平家物語の語法國語調査委員會(山田孝雄)○室町時代の言語研究湯澤幸吉郎○Rodriguez: *Arte da lingoa de Iapam.*(ロヅリゲス、日本文典・西紀一六〇四—八年長崎版)○天草本平家物語の語法湯澤幸吉郎(雜誌「敎育」昭和三ノ一)○文祿元年天草版吉利支丹敎義の研究橋本進吉○國語史上の一劃期春日政治(日本文學講座)○近松の國語學的研究佐藤鶴吉(岩波講座日本文學)○國語國文の研究吉澤義則○國語說鈴同上○東方言語史叢考新村出○東亞語源志同上○國文法論纂松尾捨治郎○音聲の研究日本音聲學協會〔國語の系統に關するもの〕國語系統の問題新村出(東方言語史叢考)○日本人と南洋新村出(同上)○日本語の所屬に就いて堀岡留吉(藝文大正一四ノ一—一二)○日本言葉はアリアン言葉なり平井金三(新公論明治三七ノ九以下)○日本語アリアン語比較表平井金三(新公論明治三八ノ二以下)○我が國民國語の曙坪井久馬三○日本語の位置藤岡勝二(國學院雜誌一四ノ八・一〇・一一)○日本言語學松岡靜雄○日本文化史(古代)安藤正次○Matsumoto Nobuhiro: *Le japonaise et les langues austroasiatiques, étude de vocabulaire comparé.* Paris, 1928. ‖ J. Edkins: *Connection of Japanese with the adjacent continental languages.* (Transactions of the Asiatic Society of Japan. XV. 1886) ‖ P. Lowell: *A comparison of the Japanese and Burmese languages.* (同上. XIX. 1900) ‖ E. Boller: *Nachweis, dass das japanische zum uralaltaischen Stamm gehört.* Wien. 1857. ‖ P. F. Siebold: *Ueber die Abstammung der Japaner.* (*Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan.* Bd. I. S. 281—) ‖ J. Grunzel: *Entwurf einer vergleichenden Grammatik der altaischen Sprachen nebst einem vergleichenden Wörterbuch.* Leipzig 1895. ‖ H. Winkler: *Uralaltaische Völker und*

して厥ち國語有り」と云ふに本づく。【名義】支那古代の人君の左右には、左史・右史の兩史官があつて、人君の言行を記し、右史は事を記し、左氏は言を錄した(漢書藝文志)。この左史の言を錄したものは、各國皆これを語と名づけて、王公大夫等の必讀の書として居つたらしく、語とは即ち上述の如き歷代の史官の錄した王公大夫の言議の、後世の鑑戒とするに足るものを指し、各々その國の名を冠して

減して再刊した本を云ふ。清朝の嘉慶五年黃不烈の重刊本、我が文化元年(嘉慶九年)葛西因是飜刻本、及び同治八年重刊本(附攷異)等がある)を以て最善とするが、なほ秦鼎の「國語定本」、黃不烈の「國語札記」、汪遠孫の「國語明道本攷異」等を參考する必要がある。卷數は「漢書」藝文志に二十一卷に作り、天聖明道本、四庫全書所收本以下、現今傳はつてゐるものも

大部分は「左傳」と互に出入するのみならず、兩書共にその記事が晉の智伯の滅亡に終つてゐる等、司馬光・李燾等の、「國語」は「左傳」を作るための材料であるといふ說が、必ずしも附會の說でないのを見る。ただ「齊語」に載せられた春秋時代に於ける史上の大事件である齊の桓公・管仲の覇業に、「左傳」が一言もこれに及んでゐないことは古來疑問視されてゐる

ぬ。これ等の言語は、その構成に於て日本語と甚しい相違があつて、到底同系統のものと考へる事は出來ない。又マレイポリネシヤ語族（別項）と同系とするもの、又この語族と親近關係ありと或る一派の學者に主張せられるオーストロアジア語族（前印度・後印度・馬來半島及びその附近の島嶼の諸處に散在せる、カムボヂヤ語、モン語、カシ語、ニコバル語、リアン語、ワ語、ムンダ諸語、チヤム語など。安南語を

族の言語では、單語の最初に濁音を用ひず、アルタイ派の諸語に於てはr音を語頭に用ひない。單語はそれ自身獨立して用ひる事が出來、文法上の諸形式は接辭又は助辭の類を語の後に附けてあらはすのが普通である。接辭や助辭は幾つも重ねて用ひる事が出來る。文中に於ける語の順序は、主語—客語—述語が普通で、修飾語は被修飾語に先だつ。これ等の諸點は大抵日本語と一致し又は類似する。

Stamm gehört. Wien. 1857. ‖ P. F. Siebold : *Ueber die Abstammung der Japaner.* (*Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan.* Bd. I. S. 281—) ‖ J. Grunzel : *Entwurf einer vergleichenden Grammatik der altaischen Sprachen nebst einem vergleichenden Wörterbuch.* Leipzig 1895. ‖ H. Winkler : *Uralaltaische Völker und Sprachen.* Berlin. 1884. ‖ —— : *Japaner und altaier,* Berlin, 1894. ‖ —— : *Der uralaltaische Sprachstamm, das finnische und japanische* Berlin. 1908. ‖ W. G. Aston : *A comparative study of the Japanese and Korean languages* (*Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.* 1879) ‖ B. H. Chamberlain : *Essay in aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan language.* Yokohama. 1895. ‖ 日韓兩國語同系論 金澤庄三郎 ○日鮮同祖論 同上 ○國語及び朝鮮語の系統 小倉進平（國語及朝鮮語のため）○國語朝鮮語の語彙比較研究資料 同上（同）

〔以上橋本〕

國語（こくご） 史書古史類 二十一卷【作者】本書の作者は、左丘明といふ説、左傳の作者と同一人なりといふ説など行はれ、未だ確論はない。【別名】「春秋外傳」（左氏傳を春秋內傳と稱す）。外傳の名は後漢の頃に始まつたもののやうである。內傳・外傳の意は、韋昭の「其の文經を主とせざるが故に外傳と曰ふ」（本書序）と云つたのが最も穩當で、卽ち「左氏傳」を本傳とするに對する別傳の意である。又「盲史」とも云ふ。「史記」の太史公自序に「左丘明を失して厥ち國語有り」と云ふに本づく。【名義】支那古代の人君の左右には、左史・右史の兩史官があつて、人君の言行を記し、右史は事を記し、左氏は言を錄した（漢書藝文志）。この左史の言を錄したものは、各國皆これを語と名づけて、王公大夫等の必讀の書として居つたらしく、語とは卽ち上述の如き歷代の史官の錄した王公大夫の言議の、後世の鑑戒とするに足るものを指し、各々その國の名を冠して周語・魯語・晉語等と稱した。本書は列國の語を纂錄したものであるから、これを名付けて國語と云ふ。卽ち國語とは、諸國の語を錄した書の意で、諸國の事を錄した書の意ではない。【傳來】國語が始めて世に現れたのは何時の頃であるか明かでないが、賈誼の「新書」禮容篇・「漢書」儒林傳（賈誼傳）等に「國語」の文を引いてゐるのを見れば、遲くとも漢の文帝の頃であつたことは疑ない。その後武帝の時には、司馬遷がこれを採つて「史記」を著し、成帝の時には劉向がこれを分つて新國語五十四篇を編した。後漢の明帝の時、鄭衆が國語章句を作つた。これが國語注釋の濫觴であるが、その篇數は詳かでない。我が國に於ける傳來は「日本國現在書目錄」に「韋昭注國語」二十二卷を著錄してゐるのを見れば、醍醐朝以前に在ることは明かである。その後に於ける流傳は詳かでないが、江戸時代に至つては、これを左・國・史記・漢書と併稱して儒家必讀の書とせられ、從つて同時代に於てこれに注解を加へた者は、約そ三十家に及び、そのうち秦鼎の「國語定本」二十一卷が最も廣く行はれてゐる。【諸本】本書の原本としては、天聖明道本（韋昭注、北宋仁宗の天聖七年に葛惟肖の刊行したものを、更に明道二年に刊誤增減して再刊した本を云ふ。清朝の嘉慶五年黃不烈の重刊本、我が文化元年（嘉慶九年）葛西因是飜刻本、及び同治八年重刊本（附攷異）等がある）を以て最善とするが、なほ秦鼎の「國語定本」、黃不烈の「國語札記」、汪遠孫の「國語明道本攷異」等を參考する必要がある。卷數は「漢書」藝文志に二十一卷に作り、天聖明道本、四庫全書所收本以下、現今傳はつてゐるものも亦二十一卷で、「漢書」と一致してゐる。【組織・內容】本書は組織の上から見れば、明かに歷史の一種であつて、「漢書」藝文志がこれを經部に列して、春秋の後に置いたのは妥當でない。唐の劉知幾は國語家の目を立てて六家の一とし、「四庫提要」はこれを史類に編入してゐる。本書に錄してゐるのは周室（卷一—三）を初めとして、魯（四—五）、齊（六）、晉（七—一五）、鄭（一六）、楚（一七—一八）、吳（一九）、越（二〇—二一）の八國で、上は周の穆王の三十五年（皇紀前三〇七）の犬戎征伐の事に起り、下は貞定王の十六年（皇紀二〇八）の三晉が智伯を亡したことに訖り、その間五百十五年の長きに亙つてゐる。本書の記事は甚しく不整齊であつて、周語だけは他の列國の時代よりも遙かに遠く溯つて穆王以來の事を記し、又晉語の如きは九卷百十八章の多きに及ぶに對して、鄭語の如きは僅かに一卷一章に過ぎない等、繁簡も亦一樣でない。而して本書の叙述法は、大體に於て年月の次第によつて排列してゐるが、必ずしもこれに從はないものがあつて、體例も亦統一されてゐない。【左傳との關係】今本書と「左傳」とを比較するに、傳玄・趙匡等の言つた如く、事實の一致するものもあり、一致しないものもあり、その文體も亦互に繁簡詳略があるが、その記事の大部分は「左傳」と互に出入するのみならず、兩書共にその記事が晉の智伯の滅亡に終つてゐる等、司馬光・李燾等の、「國語」は「左傳」を作るための材料であるといふ說が、必ずしも附會の說でないのを見る。ただ「齊語」に載せられた春秋時代に於ける史上の大事件である齊の桓公・管仲の覇業に、「左傳」が一言もこれに及んでゐないことは古來疑問視されてゐる點である。又「魯語」の叔孫穆子の皇皇者華の六德を說いた文と、「左傳」の五善を獲たといふ文と異り、「左傳」には哀公十七年に楚が陳を滅し、同二十二年に越が吳を滅した事を記してゐるのに、「國語」には吳の滅亡の後に、なほ陳蔡の君が玉を執つて越に朝した事を記す等、兩書の記事の間に矛盾する所が少くないが、かくの如き事は、古書に於ては往々免れ難い所であつて、一書の內に於てすらも前後矛盾する例が少くないので、二三の矛盾はあるとしても、兩書共に同じく左丘明の手に成つたものとする漢人の說は、最も穩當なものであらう。（春秋左氏傳參照）【價値】本書の現存するものは、勿論完本ではなく、「公羊傳疏」「禮記疏」「史記正義」「同索隱」「水經注」「文選注」等の諸書に散見する逸文も多く、且つ「齊語」「越語」下卷等の如く、明かに後人の補綴竄入したと思はれる部分も少くないが、大體に於て上代の古質な文の面目を傳へて、先秦文學の作品として珍重すべきものであるのみならず、史書としては「左傳」と竝んで春秋時代の史實を探究する上に於て極めて重要である。

【註釋書】國語注二十一卷 吳韋昭 ○國語補音三卷 宋宋庠 ○國語三君注輯存四卷 清汪遠孫 ○國語發正二十一卷 同上 ○國語明道本攷異四卷 同上

孝一〇國語研究法 藤岡勝二 ○國語のため上田萬年 ○國語の研究 金澤庄三郎 ○國語及朝鮮語のため小倉進平 〔國語の沿革に關するもの〕 國語史概說 吉澤義則 ○口語法別記 大槻文彥 ○高等國語法 安田喜代門 ○假名遣及假名字體沿革史料 大矢透 ○疑問假名遣 國語調査委員會（本居清造）○現行普通文法改定案調査報告之一 國語調査委員會 ○古代國語の研究 安藤正次 ○倭字正濫鈔 契沖 ○字音假字用格 本居宣長 ○假

tiques, étude de vocabulaire comparé. Paris. 1928. ‖ J. Edkins : *Connection of Japanese with the adjacent continental languages.* (Transactions of the Asiatic Society of Japan. XV. 1886) ‖ P. Lowell : *A comparison of the Japanese and Burmese languages.* (同上. XIX. 1900) ‖ E. Boller : *Nachweis, dass das japanische zum uralaltaischen*

○國語明道本札記一卷 清黃丕烈 ○國語韋昭注疏十六卷 清洪亮吉 ○國語正義二十一卷 清董增齡 ○國語略說八卷 關修齡 ○國語增注二十一卷 冢田虎 ○國語定本二十一卷 秦鼎 ○國語考八卷 龜井昱

〔宇野・本多〕

國語學（こくごがく）

【解說】我が國語即ち日本語を研究の對象とする科學。日本語に熟達し、これを誤りなく理解し、自由に使用し得るに至る事を目的とする實際上の學習とは違ひ、日本語のあらゆる現象に就いて、徹底した組織立つた知識を得る事を目的とするものである。言語一般に亙る法則を研究するのを一般言語學とし、それ〴〵の國語について研究するのを箇別言語學（又は各國語學）とすれば、國語學は箇別言語學の一である。又一民族の產んだ各種の文化、即ち文學、言語、神話、傳說、法制等を綜合的に研究する國學（又は文獻學、古典學）の如き學が成立するものとすれば、國語學は、日本の國學の一分科と見做す事も出來る。

【國語學の諸問題】すべて言語は時と共に變遷し、時代々々に面目を異にする。或る一定の時に於て見れば、言語は一定の狀態を保つてゐるが、時の流れに沿うて見れば、流動し轉變して、初めの狀態から次の狀態へと移つて行く。それ故、國語の研究は、或る一時代の言語の狀態を明かにするものと、各時代を通じて史的展開を明かにするものとの二つにわかれる。前者は靜態の研究で、記述的研究（或は言語誌的研究）ともいふべく、後者は動態の研究で、史的研究（言語史的研究）といふべきである。

〔記述的研究〕に於ては、或る一時代一時代の言語の狀態を明かにするのであるが、同じ時代の國語の中にも、色々違つた言語を含んでゐるのであつて（國語參照）、決して一樣でない故、これ等の各種の言語を區別して、それ〴〵その狀態を研究しなければならない。又同じ言語でも、時代による變化がある故、時代を區別して、それ〴〵の時代に於ける狀態を研究すべきである。次に國語中の或る一種の言語の或る時代に於ける狀態を明かにするために、言語を要素に分解して、その言語が如何なる要素から如何に構成せられてゐるかを考へる時、種々の問題が生ずる。まづ第一に音聲に關しては、その言語を構成する基礎となる單音は何々であるか。その單音がどんなにして音節を構成するか。その音節はいかに結合して言語の意義を表はすか、その際、音節と音節との間のアクセントの關係は如何等の問題がある。これ等が音聲論又は音韻論の問題である。次に言語を意味に從つて分解して行く時は、意味上の一つの小さな單位を盛つた、言語の單位として、單語を得るのであつて、言語はすべて單語から構成せられたものと見られるのである。單語に關しては、或る一つの言語に、どれだけの單語があるか、その一つ一つの單語は、いかなる形と意味とを有するかの問題、即ちその言語の語彙如何の問題がある。又單語は更に各々意味を有するいくつかの部分（語根、語幹、接頭辭、接尾辭など）から構成せられてゐるものがあり、又意味の變化に應じて語形の變ずるもの、即ち活用を有するものもある。どの單語がいかなる構造を有し、又いかに活用するかは單語毎に違つてゐる故、單語毎に研究すべき問題であるが、その外に、多くの單語に通ずる法式又は型としての構成法又は活用形式が問題となる。これが單語論（又は單語法）の問題である。又單語は唯一つだけ用ひられる場合もあるが、多くは二つ以上結合して連語を成し、聯合した纏まつた意味を示すのであるが、その單語が結合して連語を作る上に如何なる定まりがあるかが問題となる。これが即ち連語論（又は文章法）の問題である。以上の如く、言語を、これを構成せる要素に分解して考察する時、音聲・單語及び連語に關して種々の問題が起るのであるが、そのうち、或る一の言語が、いかなる單音及び單語から構成せられるかは、一つ一つについて知るの外無く、概括して論ずる事が出來ない。これに反して、單音から音節その他を構成する方法、單語の構成法や活用形式、及び單語から連語を作る方法などは、幾多の場合に通ずる定まり、即ち規則法式又は通則として存するものであつて、これ等は語法（又は文法）に屬するものである。一々の單語に關するものは語彙に屬するものと見る事が出來る（一々の單音に關するものは、便宜上語彙に併せ、又は音聲上の構成を說く所で併せ說くのが普通である）。さすれば、言語構成の上から見た種々の問題は、語法に關するものと語彙に關するものとの二つに纏める事が出來る。この語法と語彙との二つは、どんな言語にも必ず存するものであつて、同じ國語の中でも、或る一種の言語と他の言語との間、もしくは或る一時代の言語と他の時代の言語との間に、少しでも差異があるとすれば、語法又は語彙の何處かに相違があるのであるから、國語中の種々の言語及び各時代の言語に於ては、それ〴〵違つた語法及び語彙があるべきである。以上は文語にも口語にも共通せる問題であるが、文語に於ては、その外になほ文字に關する問題が加はるのである。この方面に於ては、言語の單音・音節・單語・連語等が、いかにして文字に表はされるかが問題となる。さうしてこれにも一々の單音・音節・單語等が、どんな文字でうつされるかといふ箇々別々の事實に關する問題と、數多の場合に通じての寫音又は寫語の方法上の規則法式に關する問題とがある（假名遣上の規則、送假名法、分別書法などは後者の例である）。さうしてこれ等も、言語の種類及び時代の相違に應じて相違がある筈であるから、それ〴〵の時代のそれ〴〵の言語に於て、如何なる狀態にあるかが問題となるのである。

〔史的研究〕各時代を通じて史的展開を明かにするもので、國語全體、又は國語中の一種の言語、又は語法或は語彙に屬する或る事項が、いかにして生じ、いかに發達し、又はいかに衰微し、絕滅したかを迹づけるのであつて、その推移の跡を究め、且つこれを起した事情や原因をも探求しようとするのが目的である。かやうな態度を以て、國語音聲上の事實に臨めば音聲史の研究となり、語法上の事象に臨めば語法史又は歷史的文法の研究となり、箇々の單語に臨めば語源の研究となる。又國語中の諸種の言語については、各地の方言史・標準語史・婦人語史・書簡文史その他の研究がある筈である。さうして國語全體については、國語史の研究となるのであるが、國語が如何にして生じたかの問題は、即ち國語系統の問題であつて、これについては、日本語の祖語は如何、日本語と同じ祖語から分れ出た國語が他に存するか等の問題がある。これがためには研究を日本語以外の國語にも及ぼさなければならない。また國語又は國語內の或る一種の言語は、他の國語又は他の種の言語の影響を受けて變化する事が多い故、かやうな他の國語又は言語との交涉についての研究も必要である。國語史の中、かやうな對外關係の歷史を國語外史とし、これに對して國語內だけでの變遷を論ずるのを國語內史として區別する事がある。以上の外、國語整理問題・文法改善問題・國字問題・假字遣問題などの所謂國語問題がある。これに關する知識は、多少不完全不確實である事を免れないが、或る一時代の言語に關する資料を出來るだけ集めて、互に比較して觀察し、その結果よりして當時の實際の狀態を推定してこれを叙述する。すべて言語は、これを要素に分解して、いかに構成せられてゐるかを觀察する時、あらゆる言語上の事象は、語法に關するものと語彙に關するものとの二つにわけることが出來るのであるが、現代のして、これを補つて說明しなければならないのである。かやうにして、現存の資料では不明な時代の狀態を歷史的研究法によつて明かにし得ることもあるのである。（二）比較研究法。同じ系統に屬する他の言語と比較して、共通の祖語の狀態を明かにし、これより各々の言語に分れ、歷史的研究法で知り得る最古の時代の狀態に至るまでの史的展開をきはめる方法である。かくすれば、國語內の歷史で獻。時代時代の國語の狀態を明かにするには最も大切な資料である。資料としての價値は樣々であるが、概して製作年時、著者又は筆者書寫又は刊行年代などの明かなものが價値が多い。今歷代口語の狀態を明かにすべき資料として最も重要なものを擧げる。〔奈良朝及びその以前〕最も古くは「後漢書」「魏志」以下の支那の史籍に存する日本（即ち倭）の人名・地名等があり、我が國でも推古朝以來の金石文

ぼさなければならない。また國語又は國語内の或る一種の言語は、他の國語又は他の種の言語の影響を受けて變化する事が多い故、かやうな他の國語又は言語との交渉についての研究も必要である。國語史の中、かやうな對外關係の歴史を國語外史とし、これに對して國語内だけでの變遷を論ずるのを國語内史として區別する事がある。以上の外、國語整理問題・文法改善問題・國字問題・假字遣問題などの所謂國語問題があるが、これは、現在行はるゝ國語又は文字を整理し又は改善して、世に行はうとするものであつて、現在及び未來の社會を改善しようとする運動の一のあらはれであるから、社會問題として取扱ふべく、純粋の國語の科學たる國語學とは趣を異にするものである。無論これが解決には國語學の知識を要するが、その上に更に社會政策等に關する知識を必要とする。

【研究法】〔記述的研究を目的とする場合〕現代の國語の場合と過去の國語の場合と多少趣を異にする。現代の國語は、現に何處かで使用せられてゐるのであつて、研究者自ら直接に經驗してゐるか、さなくとも、使用者について學び聞き質す事が出來、又或る程度までは實驗する事も出來るのである。それ故、現代語については、直接に委しくこれを觀察し、性質や用法の異同に從つて分類し、その結果を秩序正しく記載する(無論、違つた言語では同じ事項でも互に違ふ點があるから混同してはならない)。然るに過去の言語は、文字に形を殘してゐるだけであつて、これをいかに發音し、いかに理解したかは、直接に經驗する事が出來ず、現代語から類推して知るの外ないのであり、又資料の不足缺如のために、これに關する知識は、多少不完全不確實である事を免れないが、或る一時代の言語に關する資料を出來るだけ集めて、互に比較して觀察し、その結果よりして當時の實際の狀態を推定してこれを叙述する。すべて言語は、これを要素に分解して、いかに構成せられてゐるかを觀察する時、あらゆる言語上の事象は、語法に關するものと語彙に關するものとの二つにわけることが出來るのであるが、現代の國語でも過去の國語でも、或る一時代に於ける語法と語彙とのあらゆる問題を研究した上は、これを文典と辭書とにまとめ得べきもので、この二つによつて、或る時代に於ける或る言語の狀態が記載し盡されるべき筈である。

〔史的研究を目的とする場合〕これには三つの方法がある。(一)歴史的研究法。一國語又は國語内での一種の言語を出來るだけ古い時代まで溯つて、その國語又は言語の推移の跡を明かにし、出來れば、その原因をもきはめようとする方法である。これには、出來るだけ古い時代から現代まで縱に引續いて研究すべきであつて、これに用ひる資料は各時代に於ける言語の狀態を研究する時に用ひたものと違はないが、時代時代の狀態を明かにするのが目的でなく、一の狀態から次の狀態にうつる過程を明かにし、いかなるものがその原因になり契機になつたかを明かにしようとするものである。それには、統計的研究を必要とする事もある。さうしてかやうな變化は、多くは徐々に引續いて起るものであるが、その變化の各段階を示す各時代の資料が、悉く存するといふことは、實際上不可能で、その間に缺陷があるべきであるから、一般言語學の理論によつて、前後の時代の狀態から推定して、これを補つて說明しなければならないのである。かやうにして、現存の資料では不明な時代の狀態を歴史的研究法によつて明かにし得ることもあるのである。(二)比較研究法。同じ系統に屬する他の言語と比較して、共通の祖語の狀態を明かにし、これより各々の言語に分れ、歴史的研究法で知り得る最古の時代の狀態に至るまでの史的展開をきはめる方法である。かくすれば、國語内の歴史では溯る事が出來ない古い時代に溯つて、國語の起原を明かにし、先史時代に於ける國語發達の經路を推測する事が可能になる。又國語内の種々の方言を比較して、歴史時代、或はそれ以前の國語の狀態を明かにし得る場合もある。さうして國語と同系統の言語が見出され、その祖語の狀態が明かになるのも亦、比較研究の成功によるのである。(三)一般的研究法。系統上の關係の有無にかゝはらず、他の國語又は言語の歴史に類例をもとめて、國語又は國語中の或る言語の發達の經路を推定する方法である。これはまた言語に變化の起つた原因を考へる場合にも用ひられる。

【國語研究資料】(一)現在行はれてゐるあらゆる種類の日本語。即ち、各地の方言、標準語その他各種の口語及び各種の文語は、現代國語の狀態を明かにする時に研究の對象となると共に、過去の國語の狀態を知り、史的研究を行ふ場合の基礎となる。なほ特殊なものとしては、現に傳はつてゐる謠物、語物(平曲・謠曲・淨瑠璃など)、能狂言の詞、歌舞伎の科白、佛敎の聲明や讀經法などがあつて、中に過去の言語の面影を傳へてゐるものが少くない。(二)日本語で書いた内外の文獻、及び日本語に關して記した内外の語學書その他の文獻。時代時代の國語の狀態を明かにするには最も大切な資料である。資料としての價値は樣々であるが、概して製作年時、著者又は筆者書寫又は刊行年代などの明かなものが價値が多い。今歴代口語の狀態を明かにすべき資料として最も重要なものを擧げる。〔奈良朝及びその以前〕最も古くは「後漢書」「魏志」以下の支那の史籍に存する日本(即ち倭)の人名・地名等があり、我が國でも推古朝以來の金石文があるがその量は甚だ少い。纒つたものとしては、「古事記」「日本書紀」の中の歌謠があり、更に「萬葉集」がある。「續日本紀」の中の宣命、「歌經標式」「琴歌譜」なども亦これを補ふ資料とすべきである。〔平安朝〕漢文に、假名で訓や音を附したものは初期以來のものがある。全文を假名で書いたものとしては、三代集以下の勅撰集や、種々の私撰集や家集の類、「竹取」「伊勢」「うつぼ」「源氏」「狭衣」「落窪」などの物語類、「土佐」「蜻蛉」「紫式部」「和泉式部」等の日記類や「枕草子」など。語學關係のものとしては、當時作られた、あめつち・いろは歌・五十音圖等。〔院政時代鎌倉時代〕「今昔物語」「打聞集」「天仁百座法談」を初め、「古事談」「寶物集」「宇治拾遺物語」、無住の「沙石集」「雜談集」の如き說話集・說敎集の類、法然・日蓮・親鸞等の消息類、「平家物語」等の戰記物語類が有力である。「鶴林玉露」の如き支那の書に日本語の錄せられたものもある。語學關係のものには、悉曇學者の著書、中にも明覺の「悉曇要決」「梵字形音義」、心蓮の「悉曇口傳」、著者未詳の「八囀聲抄」等。〔室町時代〕謠曲中の人物の對話の語などは、室町初期の口語に近いものであらうが、當時の作が、その儘傳はつたものとして確實なものは極めて稀である。中

期以後には、漢籍佛書の講義筆記である所謂抄物の類がある(周易抄・史記抄・蒙求抄・三體詩抄・百丈清規抄・臨濟錄抄その他)。末期には西洋人が羅馬字綴の日本語で書いた基督教義書や日本語讀本がある。その中でも「伊曾保物語」と「口譯平家物語」とが著しい。又西洋人の作つた日本語學書では、ロドリゲス(Rodriguez)の「日本語典」(Arte da lingoa de Iapam)、耶蘇會士等編「日本辭典」(Vocabulario da lingoa de Iapam)が最も優れてゐる。又この時代には、朝鮮で出來た「海東諸國記」中に、日本の地名・人名がある。支那で出來た日本語學書なる「日本寄語」「華夷譯語」の日本の部、「日本風土記」に、日本語に當時の支那語で音譯を附したものがある。なほ平曲や謠曲の譜本や語り方謠ひ方を記したもの(禪竹集・謠開合假名遣・音曲玉淵集・平家正節・平家指南抄等)も亦有力な參考資料になる。〔江戸時代〕初期から引續いて出た笑話の書、「醒睡笑」「きのふは今日の物語」「戲言養氣集」以下のもの、元祿前後からの歌舞伎の脚本、元祿以後の淨瑠璃、ことに世話淨瑠璃、浮世草子、好色本の類、文化・文政以後の洒落本、黃表紙の類、ついで起つた滑稽本の類、川柳には口語がまざつてゐる。文學書以外では、佛教の說教書の類、心學書、神道講釋書等には、口語のものが少くない。この時代に出來た語學書の中で、假名遣や音韻や、てにをはに關するものの中には、當時の發音や語法を知るべき資料となるものがある。又外國人の作つた日本語學書の中には、朝鮮の康遇聖の「捷解新語」、同じく洪舜明の「倭語類解」、西洋人では、コリヤード(D. Collado)、キュルチュウス(D. Curtius)、ホフマン(J. Hoffmann)、アストン(W. G. Aston)、チャムバレン(B. H. Chamberlain)などの日本文典の類が參考になる。(三)他の國語中に輸入せられた日本語。古くアイヌ語に輸入されたものがあつて、過去の日本語の狀態を知り得るものがある。その他は、スペイン、ポルトガル語の中に二三の語をとどむるに過ぎない。(四)日本語と系統を同じくする他の言語。これは日本語と同じ祖先から分れ出たものであるから、そのうちに、極めて古い時代の日本語の狀態を殘してゐる所があるからである。今日のところでは、大概確實に同系の言語と言ひ得るのは琉球語だけであつて、これは、近來日本の方言と見るのが普通になつた。

【國語研究略史】國語の研究が、それ自らの目的を有する獨立した學問として認められるに至つたのは明治以後の事であるが、國語に關する研究は、既に古く始まつたのであつて、その初は言語に關する意識又は自覺といふ程のものであつたのである。

〔第一期の國語研究〕元祿の頃、契沖の出るまでを第一期とする。

〔鎌倉時代まで〕〔上世の言語意識〕上世に於ても、言を忌み、咒詛ト占に言語を用ひ、殊に言靈の信仰があつて、言語に靈妙な力を具したと考へ、又同音の語を言ひかけに用ひ、音の類似した語で、地名・人名の由來を說明するなど、世人一般に言語に對して或る意識を有してゐた事は確かであるが、或は宗教的傳說的であり、或は常識的興味的であつて、思想としては甚だ幼稚なものである。國語の科學的知識の萌芽は、一は外國の文字言語に接し、一は古典を考究するにつれて自ら萌したのである。〔漢字漢文の渡來〕應神天皇の時、漢字漢文が傳はつて、支那の言語文字を學び、後、佛教が傳はり、更に隋唐と交通するに及んで、益々その學が盛んになり、詩文を作るもの多く、隨つて漢字の韻(別項)や四聲(別項)を知り、反切(別項)の方法をも學んだであらう。又一方漢字を以て日本語を寫し、殊にこれを萬葉假名として日本語の音を示す方法も廣く行はれた。かやうにして奈良朝に至つては、日本語のアクセントの違ひを四聲の名目を用ひて註するものも出來(古事記)、日本語の音聲を音節に分解して、萬葉假名で書く事も常となり、又宣命の如く、漢文には相當するもののない日本語の語尾や、助詞・助動詞の類を小書する習慣も生じて、日本語の音聲や、語法上の特異の點について多少の自覺を生ずるやうになつたものと思はれる。〔あめつちと伊呂波歌〕平安朝初期に於ては、萬葉假名が益々多く用ひられるにつれて、遂にこれを簡略にした平假名・片假名を生ずるに至つたが、同音の假名で、文字の異なるものがなほ多かつたのを、異音のもののみを集めて一の詞とした「あめつち」(別項)がその頃作られて、初めて假名を習ふ手本に用ひられた。これは平安朝の半以後には廢れて、伊呂波歌(別項)がこれに代つたが、かやうなものは、日本語に於けるあらゆる違つた音節を列擧したものとして、日本語の音聲組織についての自覺を與へたものと考へられる。これに似て一層重要なのは五十音圖であるが、その出來たについては、悉曇學と關係があるやうである。〔悉曇學と五十音圖〕平安朝の初、密教の傳來に伴つて、悉曇(別項)の學が興り、爾後、悉曇學者が輩出して多くの著書も續々現はれた。當時の悉曇學は、支那から傳へたものである故、發音の說明にも漢字の發音を基礎としたために、漢語學の知識は悉曇學者にも必要であつて、悉曇學者はいつも同時に漢語學者の知識を具へてゐた。この漢語學と悉曇學との結合から五十音圖が生れ出たのである。五十音圖は、多分日本化した漢字音の反切のために起つたものと考へられ(五十音圖參照)、その源をなしたのは、漢學者か悉曇學者かわからないが、悉曇學者の手で完成したものらしく、その後も、音聲の說明や、反切の場合に用ひられて、梵語學及び漢語學には缺くべからざるものとなつたが、これは一方日本語のあらゆる違つた音節を含む音圖と見られ、また音相通表とも見られて、日本語の音聲や音相通その他音變化の說明に用ひられ、爾後の國語研究に多大の影響を及ぼした。〔悉曇學者の國語研究〕悉曇學者で梵語や漢語の音變化や音脫落その他の現象を說明するに當つて、日本語の事例を擧げたものがある。明覺(院政時代の人)の「悉曇要訣」に於けるものが最も著しいが、なほ梵語の名詞變化なる八轉聲を日本の動詞の語尾變化と對照したものもある(八轉聲抄)。これ等は、日本語を主としたのではないけれども、日本語について新しい觀察をなしたものとして注目すべきである。さうしてこれ等の學者は、梵語・漢語・日本語、共に同一の原則が行はれると信じてゐたのであり、遂にはその根本原理は五十音圖の中にあるとする思想さへ起つたのである(了尊の「悉曇輪略圖抄」(弘安十年成)などに見ゆ)。〔字書の製作〕漢文漢字を學ぶために必要な辭書は、初めは支那のを用ひ、日本で作つたものも漢文で音義を註したが、平安朝に於ては、處々和訓を加へたものも出來(昌住の新撰字鏡など)、又物名集をめて和訓を註したものも出來たが(源順の和名類聚抄)、後には、一層日本化して漢文の註を略し、和訓のみをつけたものが出來(類聚名義抄)、遂に平安朝末には、訓から漢字をひくものがあらはれた(色葉字類抄)。この最後のものは、伊呂波順に國語の語彙を排列したものとも見られるが、固よりこれは漢字漢文のためのものである。〔古典研究〕日本の古典研究は、朝廷に於ける「日本紀」の講究に始まり、その中の日本語の釋義などもあつたが、漢文の法式を日本語に適用したもので、平安朝末には、同語でも場合によつてアクセントの變化する事まで觀察してゐる(袖中抄卷三)。又この時代には歌を詠むために、國語の語彙をあつめたものも出來た(能因の「歌枕」、清輔の「和歌初學抄」、上覺の「和歌色葉集」、順德院の「八雲御抄」など)。〔定家假名遣〕鎌倉時代に入つて始めて假名遣の問題が起つた。その最初は藤原定家らしいが、定家は假名文の古寫本を多く見て、近來假名遣の頓に亂れたについては、國文學書の註釋に於ては、釋義を主として語源にまでは及ばないのが常であつたが、「日本紀」を中心とする神道家に於ては、神名などの釋義に語源說に入り、五十音圖に基く諸原則を適用し、或は濫用し、附會に陷ることさへあつた(聖冏の神代紀註、忌部正通の「神代口訣」、一條兼良の「日本紀纂疏」、清原宣賢の「日本紀神代抄」など)。〔假名遣研究〕假名遣は、吉野時代に、長慶院の定家假名遣の根據に對する根本的な疑ひが提出された事がかなり委しく論ぜらるゝにいたつた。さうして、連歌の附合の上から、單語に名・詞(ことば)・てにをはといふやうな種類があるものと考へてゐたらしい事も注意すべきである。

〔江戸初期〕江戸時代に入つて元祿の頃までは、大體前代を承けて、やゝこれを委しくしたのである。假名遣に於ては、この時代に於ける音聲の變化と共に新に開合ジヂズヅの如き條項が加はつた外に、「類字假名遣」の如き